

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

— 伊那市西春近 —

昭和47年度

日本道路公団夕士屋吉社
長野

信州大学附属図書館



3470342241

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

— 伊那市西春近 —

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会

序

昭和47年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、伊那市西春近地区（18遺跡の発掘調査が、4月25日から12月14日にかけて実施された。

この伊那市西春近地区は、大田切川から小黒川の間位置し、木曾山脈山麓の扇状地から天竜川氾濫原に面する段丘先端まで続く扇状台地が南北に広がり、その間、数流の河川によって浸食され、それぞれ独立した扇状台地が連座している。これら個々の扇状台地が、それぞれ濃厚な遺跡地帯として古くから考古学上注目される地域のひとつである。殊に、中央自動車道の通過する所は、扇状地の頂部に近く、遺物分布の多い所で今回の発掘調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、縄文時代早期の遺物が多量出土した細ヶ谷B・百駄刈遺跡、縄文時代中期の集落構成を確認した北丘B遺跡、縄文時代後期の数少ない住居址の確認と、立石を伴う配石遺構の発見を見た百駄刈遺跡、弥生時代後期の円形プランの住居址を発見した和手・富士山下遺跡、奈良・平安時代の集落立地に話題を投げかけ、後期古墳の立地と構築法の究明に資料提供した富士塚・名廻東古墳・中世の竪穴状遺構の発見を見た城平遺跡等、各期各様の遺構確認によって、学界に新知見をもたらすものも多く、調査の成果は、極めて多大であった。

報告書の刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋支社、同伊那工事事務所、余寒まだ去りやらない4月から、新雪に震える12月にかけて、長期間この調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査にご協力いただいた、長野県伊那中央道事務所、伊那市当局ならびに、西春近公民館・中央道用地被買収者組合等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和48年3月20日

長野県教育委員会教育長 小松孝志

例 言

1. 本書は、昭和47年度に日本道路公団と、長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、伊那市西春近18遺跡の調査報告書である。
2. 本書は、契約期間中（昭和48年3月20日）にまとめることが要求されており、したがって調査結果について充分検討、研究する時間がとれないため、調査によって検出された遺構、遺物などをより多く図示することに重点をおいて、宮沢が編集した。
3. 遺構関係の図類は深沢が整図した。
4. 土器類の実測は唐木がし、一部市沢英利氏の応援を得た。整図は宮沢が担当した。
5. 土器拓本は辰野・田畑・丸山・佐藤・荻沼が担当した。
6. 土器の復元は福沢が担当した。
7. 石器実測は根津・唐木・整図は根津・深沢・唐木が担当した。
8. 金属器類の実測・整図は唐木が担当した。
9. 写真撮影は今村・宮沢が担当し、一部木下平八郎氏の応援を得た。
10. 執筆は調査員が分担しそれぞれの文末に文責を記した。
11. 遺物・実測図類は、伊那市下春日町4928伊那調査団作業場に保管してある。

目 次

○序

例言

I 調査状況

1 調査にいたるまで

1) 中央道関係の経過

2) 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約

3) 発掘調査開始までの準備 15

2 調査の実施と経過 16

1) 調査期間と経過 16

2) 発掘調査協力者 17

3) 現地指導・現地視察者 19

3 発掘調査の方法 20

II 伊那市西春近地区の概況 21

1 伊那市西春近地区の環境 21

2 伊那市西春近地区の遺跡 22

III 調査遺跡 26

1 和手遺跡 26

1) 位置 26

2) 遺構と遺物 26

ア. 弥生後期の遺構と遺物 26

ア) 4号住居址 26

イ) 8号住居址 27

イ. 奈良時代の遺構と遺物 27

ア) 2号住居址 27

イ) 3号住居址 28

ウ) 5号住居址 28

エ) 6号住居址 28

オ) 7号住居址 28

カ) 9号住居址 28

ウ. 中世の遺構と遺物 29

ア) 1号住居址 29

イ) 10号住居址 29

エ. その他 29

ア) 1号竪穴 29

イ) その他の遺物	29
3) まとめ	29
2 富士山下遺跡	31
1) 位置	31
2) 遺構と遺物	31
ア. 縄文中期の遺構と遺物	31
ア) 土壌	31
イ) 石組	31
イ. 弥生後期の住居址と遺物	32
ウ. 奈良時代の住居址と遺物	32
エ. マウンド(1~4)	32
ア) 土壌(1・2・4)	32・33
3) まとめ	33
3 富士塚遺跡	34
1) 位置	34
2) 遺構と遺物	34
ア. 土壌	34
イ. 古墳	35
ア) 古墳の築造	35
イ) 内部構造	36
ウ) 遺物出土状況	36
エ) 遺物	36
3) まとめ	37
4 菖蒲沢遺跡	39
1)	39
2) 遺構と遺物	39
ア. 奈良時代の遺構と遺物	39
ア) 1号住居址	39
イ) 2号住居址	39
ウ) 3号住居址	40
エ) 4号住居址	40
オ) 5号住居址	40
カ) 6号住居址	41
キ) 7号住居址	41
ク) 8号住居址	41
ケ) 9号住居址	42

コ) 10号住居址	42
サ) 11号住居址	42
イ. その他の遺構	43
ア) 土壌 (1~4)	43
イ) ロームマウンド (1・2)	43
ウ) 配石	43
3) まとめ	44
5 南丘A遺跡	45
1) 位置	45
2) 遺構と遺物	45
ア. 縄文中期の住居址と遺物	45
イ. 平安時代の遺構と遺物	46
ア) 1号住居址	46
イ) 2号住居址	46
ウ) 1号竪穴	47
エ) 墓塚	47
オ) V字溝	47
3) まとめ	48
6 南丘B遺跡	49
1) 位置	49
2) 遺構と遺物	49
3) まとめ	49
7 北丘B遺跡	50
1) 位置	50
2) 遺構と遺物	50
ア. 縄文中期の遺構と遺物	50
ア) 1号住居址	50
イ) 2号住居址と1号竪穴	51
ウ) 3号住居址と2号竪穴	51
エ) 4号住居址と5号竪穴	52
オ) 5号住居址	52
カ) 6号住居址	52
キ) 7号住居址と3号竪穴	53
ク) 8号住居址	53
ケ) 9号住居址と4号竪穴・9号土壌	53
イ. 土壌群と土壌	54

ア) 1号土壌群	54
イ) 2号土壌群	54
ウ) 土壌 (1~11)	55
エ) その他の遺物	56
3) まとめ	56
8 名廻南遺跡	58
1) 位置	58
2) 遺構と遺物	58
ア. 平安時代の住居址と遺物	58
ア) 1号住居址	58
イ. その他の遺物	58
3) まとめ	59
9 名廻東古墳	60
1) 位置と過去の調査	60
2) 古墳築造状況	61
3) 内部構造	61
ア. 出土状況	62
4) 遺物	62
ア. 出土状況	62
イ. 遺物	63
5) まとめ	64
10 名廻遺跡	66
1) 位置	66
2) 遺構と遺物	66
ア. 平安時代の遺構と遺物	66
ア) 1号住居址	66
イ) 溝状遺構	67
3) まとめ	67
11 白沢原遺跡	68
1) 位置	68
2) 遺物	68
3) まとめ	68
12 山寺垣外遺跡	69
1) 位置	69
2) 遺構と遺物	69
ア. 土壌	69

イ. 溝址	69
3) まとめ	69
13 細ヶ谷B遺跡	71
1) 位置	71
2) 遺構と遺物	71
ア. 土壌(1~19)	71
イ. 集石	73
ウ. 溝状址	73
エ. ピット群	74
オ. その他の遺物	74
3) まとめ	75
14 百駄刈遺跡	76
1) 位置	76
2) 遺構と遺物	76
ア. 縄文早期の土壌と遺物	77
ア) 8号土壌	77
イ) 9号土壌	77
ウ) 10号土壌	77
エ) 13号土壌	77
オ) 15号土壌	77
イ. 縄文後期の住居址と遺物	77
ア) 1号住居址	77
イ) 2号住居址	78
ウ) 3号住居址	78
エ) 4号住居址と14号土壌	79
オ) 6号炉址	79
ウ. 縄文後期の配石址と遺物	79
ア) 立石を伴う配石址	79
イ) 石囲の配石址	80
エ. 縄文後期の土壌と遺物	80
ア) 土壌群(1~7)	80
イ) 土壌(11・12)	81
オ. 平安時代の住居址と遺物	81
カ. その他の遺構と遺物	82
ア) 特殊遺構	82
イ) ピット群	82

ウ) 遺物	82
3) まとめ	85
15 大境遺跡	87
1) 位置	87
2) 遺構と遺物	87
ア. 平安時代の遺構と遺物	87
ア) 1号住居址	87
イ) 2号住居址	87
ウ) 竪穴址	88
エ) 配石址	88
オ) 1号土壌	88
3) まとめ	88
16 山の根遺跡	90
1) 位置	90
2) 遺構と遺物	90
ア. 縄文中期の住居址と遺物	90
ア) 1号住居址	90
イ) 6号住居址	90
イ. 弥生後期の住居址と遺物	91
ア) 2号住居址	91
ウ. 平安時代の遺構と遺物	91
ア) 3号住居址	91
イ) 4号住居址	91
ウ) 5号住居址	92
エ) 7号住居址	92
オ) 2号竪穴	93
エ. その他の遺構と遺物	92
ア) 1号竪穴とピット群	93
イ) 土壌(1・2)	93
ウ) ピット列	93
エ) 遺物	94
3) まとめ	94
17 城平遺跡	96
1) 位置	96
2) 遺構と遺物	96
ア. 縄文時代の遺構と遺物	96

ア) 9号住居址	96
イ) その他の遺物	97
イ. 平安時代の遺構と遺物	97
ア) 1号住居址	97
イ) 2号住居址	97
ウ) 3号住居址	98
エ) 4号住居址	98
オ) 5号住居址	98
カ) 6号住居址	98
キ) 7号住居址	99
ク) 8号住居址	99
ケ) 墓壇(1～5)	99・100
コ) その他の遺物	100
ウ. 中世の遺構と遺物	100
ア) 1号地下倉	100
イ) 2号地下倉	100
ウ) 3号地下倉	101
エ) 1号窖址	101
オ) 2号窖址	101
エ. その他の遺構と遺物	102
ア) ピット群	102
イ) 土壇(1～9)	102
3) まとめ	103
18 城平上遺跡	104
1) 位置	104
2) 遺物	104
3) まとめ	104
あとがき	105

挿 図 目 次

第1図	伊那市西春近地区遺跡分布図	106
第2図	和手遺跡地形図	107
第3図	富士山下・富士塚・南丘A・南丘B遺跡地形図	108
第4図	菖蒲沢遺跡地形図	109
第5図	北丘B・名廻南・名廻東古墳・名廻遺跡地形図	110
第6図	白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B遺跡地形図	111
第7図	百駄刈遺跡地形図	112
第8図	山の根遺跡地形図	112
第9図	城平遺跡地形図	113
第10図	大境・城平上遺跡地形図	113
第11図	和手遺跡遺構配置図・4・8号住居址	114
第12図	和手遺跡2・6号住居址	115
第13図	和手遺跡3・5号住居址・1号竪穴	116
第14図	和手遺跡1・7・9・10号住居址	117
第15図	富士山下遺跡遺構配置図・1・2号住居址	118
第16図	富士山下遺跡1～4号土壇・1～4号マウンド	119
第17図	富士山下遺跡石組遺構・富士塚遺跡1号土壇・遺構配置図	120
第18図	富士塚古墳石室・遺物分布図・地層図	121
第19図	菖蒲沢・細ヶ谷B遺跡遺構配置図	122
第20図	菖蒲沢遺跡1・3号住居址	123
第21図	菖蒲沢遺跡2・4号住居址	123
第22図	菖蒲沢遺跡5・6号住居址	124
第23図	菖蒲沢遺跡7号住居址	125
第24図	菖蒲沢遺跡9・10号住居址	126
第25図	菖蒲沢遺跡8・11号住居址	127
第26図	菖蒲沢遺跡1～4号土壇・1・2号マウンド・1号集石址	128
第27図	南丘A遺跡遺構配置図・2・3号住居址	129
第28図	南丘A遺跡1号住居址・1号竪穴・1号墓壇・溝址断面図	130
第29図	北丘B・山の根遺跡遺構配置図	131
第30図	北丘B遺跡1・2号住居址・1号竪穴	132
第31図	北丘B遺跡3号住居址・2号竪穴	133

第32図	北丘B遺跡4・5号住居址・5号竪穴	134
第33図	北丘B遺跡6・7号住居址・3号竪穴	139
第34図	北丘B遺跡8号住居址	136
第35図	北丘B遺跡9号住居址・9号土壌・4号竪穴	137
第36図	北丘B遺跡1・2号土壌群	138
第37図	北丘B遺跡1～8・10～12号土壌	139
第38図	名廻南遺跡1号住居址	140
第39図	名廻東古墳地形図	141
第40図	名廻東古墳周渥・地層図	142
第41図	名廻東古墳石室・裏詰	143
第42図	名廻東古墳遺物分布図	144
第43図	名廻遺跡1号住居址・溝状遺構	145
第44図	白沢原遺跡Aトレンチ地層図・山寺垣外遺跡1号土壌・1号溝址	146
第45図	細ケ谷B遺跡1～7号土壌	147
第46図	細ケ谷B遺跡8～13号土壌	148
第47図	細ケ谷B遺跡14～19号土壌・1号溝址	149
第48図	細ケ谷B遺跡ピット群・集石址	150
第49図	百駄刈遺跡遺構配置図・1・6号住居址	151
第50図	百駄刈遺跡2～4号住居址・特殊遺構	152
第51図	百駄刈遺跡5号住居址	153
第52図	百駄刈遺跡土壌群	154
第53図	百駄刈遺跡ピット群・8～9号土壌	155
第54図	百駄刈遺跡11～15号土壌・1号配石址(立石を伴う)地層図	156
第55図	百駄刈遺跡1号配石址(立石を伴う)	158
第56図	百駄刈遺跡1号配石址(立石を伴う)	159
第57図	百田刈遺跡2号配石址(石囲遺構)	157
第58図	大境遺跡遺構配置図・1号住居址	160
第59図	大境遺跡2号住居址	161
第60図	大境遺跡1号竪穴・配石址	161
第61図	山の根遺跡1・6号住居址・ピット列	162
第62図	山の根遺跡2・3号住居址	163
第63図	山の根遺跡4・5号住居址	164
第64図	山の根遺跡7号住居址	165
第65図	山の根遺跡1・2号土壌・1・2号竪穴・ピット群	165
第66図	城平遺跡遺構配置図・9号住居址	166
第67図	城平遺跡1・2号住居址	167

第 68 図	城平遺跡 3・4 号住居址	168
第 69 図	城平遺跡 5 号住居址	169
第 70 図	城平遺跡 6・7 号住居址	170
第 71 図	城平遺跡 8 号住居址	171
第 72 図	城平遺跡 1 号地下倉集石・2 号地下倉・1～5 号墓壇	172
第 73 図	城平遺跡中世遺構	173
第 74 図	城平遺跡ピット群・1・2・4 号土壇	174
第 75 図	城平遺跡 3・5～9 号土壇	174
第 76 図	和手遺跡 2・3 号住居址出土土器	175
第 77 図	和手遺跡 3・5・6 号住居址出土土器	176
第 78 図	和手遺跡 1・7・9・10 号住居址出土土器	177
第 79 図	和手遺跡 4・8 号住居址出土土器	178
第 80 図	富士山下遺跡 1・2 号住居址出土土器	179
第 81 図	富士山下遺跡 1 号住居址・城平遺跡 5 号住居址・2 号地下倉出土土器	180
第 82 図	富士山下遺跡その他出土土器	181
第 83 図	富士塚古墳出土土器	182
第 84 図	菖蒲沢遺跡 1・2・6 号住居址出土土器	183
第 85 図	菖蒲沢遺跡 4・7・9 号住居址出土土器	184
第 86 図	菖蒲沢遺跡 5 号住居址・その他出土土器	185
第 87 図	菖蒲沢遺跡 8～10 号住居址出土土器	186
第 88 図	菖蒲沢遺跡 3・11 号住居址出土土器	187
第 89 図	菖蒲沢遺跡その他出土土器	188
第 90 図	その 1 菖蒲沢・富士山下出土石器 その 2 菖蒲沢遺跡出土石器	189
第 91 図	南丘 A 遺跡 1 号住居址出土土器	190
第 92 図	南丘 A 遺跡 1 号住居址・1 号墓壇出土土器	191
第 93 図	南丘 A 遺跡 1・2 号住居址・その他出土土器	192
第 94 図	南丘 A 遺跡 2 号住居址・その他出土土器	193
第 95 図	南丘 A 遺跡 3 号住居址出土土器	194
第 96 図	南丘 A 遺跡溝址・その他・南丘 B 遺跡その他出土土器	195
第 97 図	富士山下・南丘 A・南丘 B 遺跡出土石器	196
第 98 図	北丘 B 遺跡 1 号住居址出土土器	197
第 99 図	北丘 B 遺跡 2・3 号住居址出土土器	198
第 100 図	北丘 B 遺跡 3 号住居址出土土器	199
第 101 図	北丘 B 遺跡 4 号住居址出土土器	200
第 102 図	北丘 B 遺跡 5・6 号住居址出土土器	201
第 103 図	北丘 B 遺跡 6 号住居址出土土器	202

第104図	北丘 B遺跡 7号住居址出土土器	203
第105図	北丘 B遺跡 8号住居址出土土器	204
第106図	北丘 B遺跡 9号住居址・1・4・5号土壙・3～5号竪穴出土土器	205
第107図	北丘 B遺跡 1・2号土壙群出土土器	206
第108図	北丘 B遺跡 1号土壙群出土土器	207
第109図	北丘 B遺跡 1・2号土壙群出土土器	208
第110図	北丘 B遺跡 2号土壙群・その他出土土器	209
第111図	北丘 B遺跡 3号竪穴出土土器	210
第112図	北丘 B遺跡 3・4号竪穴・2号土壙群・その他出土土器	211
第113図	北丘 B遺跡 2号土壙群出土土器	212
第114図	北丘 B遺跡 2号土壙群出土土器	213
第115図	北丘 B遺跡その他出土土器	214
第116図	北丘 B遺跡 1～3号住居址・2号土壙群出土石器	215
第117図	北丘 B遺跡 3～7号住居址出土石器	216
第118図	北丘 B遺跡 7～9号住居址・1号土壙群・4号土壙出土石器	217
第119図	北丘 B遺跡 4・12号土壙・その他出土石器	218
第120図	名廻南遺跡 1号住居址・その他・山の根遺跡その他出土土器	219
第121図	名廻東古墳出土土器	220
第122図	名廻東古墳出土土器	221
第123図	名廻遺跡 1号住居址・溝状遺構・その他出土土器	222
第124図	白沢原遺跡その他・名廻遺跡その他出土土器	223
第125図	山寺垣外遺跡溝址・1号土壙・その他出土土器	224
第126図	細ケ谷 B遺跡 2・4・6～9・15号土壙・ピット群出土土器	225
第127図	細ケ谷 B遺跡その他出土土器	226
第128図	細ケ谷 B遺跡その他出土土器	227
第129図	細ケ谷 B・山の根遺跡その他出土土器	228
第130図	名廻南・名廻・白沢原・山寺垣外・細ケ谷 B遺跡出土石器	229
第131図	百駄刈遺跡 2号住居址出土土器	230
第132図	百駄刈遺跡 1・2号住居址出土土器	231
第133図	百駄刈遺跡 2号住居址出土土器	232
第134図	百駄刈遺跡 2号住居址出土土器	233
第135図	百駄刈遺跡 2号住居址出土土器	234
第136図	百駄刈遺跡 1・2号住居址出土石器	235
第137図	細ケ谷 B遺跡その他・百駄刈遺跡 1号住居址出土石器	236
第138図	百駄刈遺跡 2～4号住居址出土石器	237
第139図	百駄刈遺跡 3号住居址出土土器	238

第140図	百駄刈遺跡3・4号住居址出土土器	239
第141図	百駄刈遺跡4号住居址出土土器	240
第142図	百駄刈遺跡4号住居跡出土土器	241
第143図	百駄刈遺跡4・5号住居址出土土器	242
第144図	百駄刈遺跡5号住居址出土土器	243
第145図	百駄刈遺跡5号住居址出土土器	244
第146図	百駄刈遺跡4・5号住居址・2号配石址(石囲遺構)・ピット群出土土器	245
第147図	百駄刈遺跡ピット群・土壙群・8・11・14・15号土壙出土土器	246
第148図	百駄刈遺跡ピット群出土土器	247
第149図	百駄刈遺跡1号配石址(立石を伴う)出土土器	248
第150図	百駄刈遺跡1号配石址・その他出土土器	249
第151図	百駄刈遺跡1・2号配石址出土土器	250
第152図	百駄刈遺跡1号配石址・5・14土壙・その他出土土器	251
第153図	百駄刈遺跡2号配石址(石囲遺構)出土土器	252
第154図	百駄刈遺跡2号配石址(石囲遺構)出土土器	253
第155図	百駄刈遺跡特殊遺構出土土器	254
第156図	百駄刈遺跡その他出土土器	255
第157図	百駄刈遺跡その他出土土器	256
第158図	百駄刈遺跡その他出土土器	257
第159図	百駄刈遺跡その他出土土器	258
第160図	百駄刈遺跡その他出土土器	259
第161図	百駄刈遺跡その他出土土器	260
第162図	百駄刈遺跡その他出土土器	261
第163図	百駄刈遺跡その他出土土器	262
第164図	百駄刈遺跡その他出土土器	263
第165図	百駄刈遺跡その他出土土器	264
第166図	百駄刈遺跡その他出土土器	265
第167図	百駄刈遺跡その他出土土器	266
第168図	百駄刈遺跡その他出土土器	267
第169図	百駄刈遺跡その他出土土器	268
第170図	百駄刈遺跡その他出土土器	269
第171図	百駄刈遺跡その他出土土器	270
第172図	百駄刈遺跡その他出土土器	271
第173図	百駄刈遺跡その他出土土器	272
第174図	百駄刈遺跡その他出土土器	273
第175図	百駄刈遺跡その他出土土器	274

第176図	百駄刈遺跡その他出土土器	275
第177図	百駄刈遺跡その他出土土器	276
第178図	百駄刈遺跡その他出土土器	277
第179図	百駄刈遺跡その他出土土器	278
第180図	百駄刈遺跡その他出土石器	279
第181図	百駄刈遺跡その他出土石器	280
第182図	百駄刈遺跡その他出土石器	281
第183図	百駄刈遺跡その他出土石器	282
第184図	百駄刈遺跡その他出土石器	283
第185図	大境遺跡1・2号住居址出土土器	284
第186図	大境遺跡配石址・1号竪穴・1号土壙・その他出土土器	285
第187図	大境遺跡配石址・1号土壙・その他出土土器	286
第188図	山の根遺跡1・6号住居址出土土器	287
第189図	山の根遺跡2・5号住居址出土土器	288
第190図	山の根遺跡3号住居址出土土器	289
第191図	山の根遺跡4号住居址出土土器	290
第192図	山の根遺跡4号住居址出土土器	291
第193図	山の根遺跡4・5号住居址出土土器	292
第194図	山の根遺跡4・5号住居址出土土器	293
第195図	山の根遺跡5号住居址出土土器	294
第196図	山の根遺跡5号住居址・2号竪穴出土土器	295
第197図	山の根遺跡6号住居址出土土器	296
第198図	山の根遺跡6号住居址出土土器	297
第199図	山の根遺跡6号住居址出土土器	298
第200図	山の根遺跡7号住居址・その他出土土器	299
第201図	山の根遺跡1・2号土壙・その他出土土器	300
第202図	山の根遺跡ピット群・その他出土土器	301
第203図	和手・大境・山の根遺跡出土石器	302
第204図	城平遺跡1～3号住居址出土土器	303
第205図	城平遺跡2・3・5号住居址出土土器	304
第206図	城平遺跡5～7号住居址出土土器	305
第207図	城平遺跡6～8号住居址・2号窖址・4号墓壙・7号土壙出土土器	306
第208図	城平遺跡8号住居址出土土器	307
第209図	城平遺跡1～3号地下倉・1・2号窖址出土土器	308
第210図	城平遺跡その他出土土器	309
第211図	城平遺跡その他出土土器	310

第212図	城平遺跡 9号住居址・城平上・山寺垣外遺跡その他出土土器	311
第213図	城平遺跡 9号住居址・1・2号地下倉・2号竈址・その他出土石器	312
第214図	各遺跡出土石器	313
第215図	各遺跡出土石器	314
第216図	富士塚古墳出土金属器・ガラス小玉	315
第217図	名廻東古墳出土金属器	316
第218図	名廻東古墳出土金属器	317
第219図	名廻東古墳出土金属器	318
第220図	名廻東古墳出土金属器・石製品	319
第221図	各遺跡出土金属器	320
第222図	各遺跡出土金属器	321
第223図	各遺跡出土金属器・土錘	322
第224図	各遺跡出土古銭	323

図 版 目 次

第1図	和手遺跡(1)	325
第2図	和手遺跡(2)	326
第3図	和手遺跡(3)	327
第4図	和手遺跡(4)	328
第5図	和手遺跡の遺物(1)	329
第6図	和手・細ヶ谷遺跡の遺物(2)	330
第7図	富士山下遺跡(1)	331
第8図	富士山下遺跡(2)	332
第9図	富士塚遺跡	333
第10図	富士塚古墳(1)	334
第11図	富士塚古墳(2)	335
第12図	富士塚古墳の遺物(1)	336
第13図	富士塚古墳の遺物(2)	337
第14図	菖蒲沢遺跡(1)	338
第15図	菖蒲沢遺跡(2)	339
第16図	菖蒲沢遺跡の住居址群とカマド	340
第17図	菖蒲遺跡の遺物	341
第18図	南丘A遺跡(1)	342
第19図	南丘A遺跡(2)	343
第20図	南丘A遺跡の遺物	344
第21図	北丘B遺跡と遺構群	345
第22図	北丘B遺跡の住居址	346
第23図	北丘B遺跡の竪穴	347
第24図	北丘B遺跡1号土壌群	348
第25図	北丘B遺跡2号土壌群	349
第26図	北丘B遺跡の土器(1)	350
第27図	北丘B遺跡の土器(2)	351
第28図	名廻南遺跡	352
第29図	名廻東古墳付近航空写真	353
第30図	名廻東古墳(1)	354
第31図	名廻東古墳(2)	355

第32図	名廻東古墳（3）	356
第33図	名廻東古墳の遺物（1）	357
第34図	名廻東古墳の遺物（2）	358
第35図	名廻東古墳の遺物（3）	359
第36図	名廻・白沢原遺跡	360
第37図	山寺垣外遺跡	361
第38図	細ヶ谷B遺跡	362
第39図	百駄刈遺跡（1）	363
第40図	百駄刈遺跡（2）	364
第41図	百駄刈遺跡（3）	365
第42図	百駄刈遺跡の遺物（1）	366
第43図	百駄刈遺跡の遺物（2）	367
第44図	大境遺跡	368
第45図	山の根遺跡（1）	369
第46図	山の根遺跡（2）	370
第47図	山の根遺跡の遺物（1）	371
第48図	山の根遺跡の遺物（2）	372
第49図	城平遺跡（1）	373
第50図	城平遺跡（2）	374
第51図	城平遺跡（3）	375
第52図	城平遺跡（4）	376
第53図	城平遺跡（5）	377
第54図	城平遺跡の遺物（1）	378
第55図	城平遺跡の遺物（2）	379
第56図	発掘点描	380
第57図	調査参加の皆さん	381

1 調査状況

1 調査にいたるまで

1) 中央道関係の経過

ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線を西の宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼ぶ。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定され、その後道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那谷に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓を通過して山梨県に至るやく122kmとなっている。

昭和41年、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・巾杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実には遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ヶ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊された例のあったことである。

イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪3地区で開きその対策を打合せる。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区112遺跡、諏訪地区90遺跡計349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡（含斜坑広場）、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という）の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の4県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一律でないため、十分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、A・路線計画からはずすもの、B・路線計画の中に入れるが保護するもの、C・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するものの3区分されている。それに基づいて、中央自動車道用地内遺跡についても、A・B・Cの3区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局190遺跡すべてCとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」できめられている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団において業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年3月に、飯田市上飯田地区の2遺跡（さつみ・古屋垣外）の発掘調査が行なわれた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年4月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課（後に文化課に独立）では、担当指導主事を2名増員し、4名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、6月と7月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、7月には「長野県中央道遺跡調査会」を再結成した。

昭和45年度は、8月に下伊那郡阿智村地内7遺跡（調査費179万円）、9月に飯田地内その1地区10遺跡（調査費1590万円）の発掘調査委託契約を相次いで結び、9月2日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の歛入式を挙行している。翌9月3日から2班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その1地区6遺跡（調査費500万円）の発掘調査委託契約を結び、昭和46年3月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、4月に、上伊那郡飯島町内その1地区（調査費1224万円）、8月に下伊那郡高森町内その1地区（調査費3120万円）、9月に下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1杉の木平遺跡（調査費730万円）

の発掘調査委託契約が結ばれ、発掘調査が進められている。なお上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その2久根平遺跡（調査費123万円）の発掘調査委託契約が、9月に結ばれ、特設調査団が組織され調査を完了している。

昭和47年度は、買収契約も進展し、上下伊那郡下の各工区において工事発注が続出する年とあって、県教育委員会文化課においては、担当指導主事を3名増員し、4班編成の調査団を組織し、飯田・下伊那地区に2班、伊那・上伊那地区に2班ずつ常駐させて発掘調査に当たっている。4月に飯田市内その2地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その3地区8遺跡（調査費677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）の発掘調査委託契約が成立し、広範囲にわたる発掘調査が開始されている。さらに、下伊那郡高森町内その2地区5遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ヶ根市内8遺跡（調査費563.5万円）の発掘調査委託契約が7月に成立している。8月には、上伊那郡南箕輪村内その1地区5遺跡（調査費1051.5万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。さらに飯田市山本地籍石子原遺跡において多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器として、その重要性が認められて第2次調査の再協議が成立し、飯田市内その3（調査費410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。10月には上伊那郡南箕輪村内その2地区4遺跡（調査費514.4万円）と、上伊那郡の天竜川橋梁工事と辰野町平出陸橋工事に伴う辰野町内その1地区3遺跡（調査費497.2万円）の発掘調査委託契約が成立している。本年度調査された遺跡は、数にして81、面積にして132180㎡と広大であるばかりでなく、遺構・遺物の発見も膨大にして、発掘調査の成果も多大である。45年発掘調査開始以来3年目を終ろうとしている今日、出土遺物の累積も予期以上に多く、関係市町村当事者や、考古学者等からその資料の保存・活用の方途についての要望が提出されている。中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査も、昭和48年度の上伊那地区北半と、諏訪地区の調査や、やがて予想される長野線の発掘調査を含めて、新しい局面を迎えているように思える。

ウ 中央道関係の経過一覧

この経過一覧は、前項のものと同重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央道建設法案とそれに基づく機関、県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部収録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。なお、発掘調査委託契約地区名について、昭和47年度から呼称が変わっているか、ここでは従来例にならっている。

- 32・4・16 国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年7月31日）
- 32・7・25 中央自動車道予定路線を定める法律制定
- 39・6・16 国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正
- 41・7・25 五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る。
- 〃・8・12 長野県中央自動車道対策協議会開催
- 〃・8・12 恵那山トンネル立入測量開始
- 〃・9・22 中央自動車道長野県建設協力会開催
- 〃・9・30 下伊那郡阿智村の一部、飯田市、鼎町（14km）ルート発表

- 41・11・16 長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道課および飯田中央道事務所設置
- 〃・12・15 中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
- 42・2・14 中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
- 〃・2・21 〃 〃 （上伊那地区）
- 〃・2・22 〃 〃 （諏訪地区）
- 〃・3・23 恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
- 〃・3・28 下伊那郡上郷町・飯田市座光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
- 〃・3・31 恵那山トンネル補助トンネル工事着工
- 〃・4・15 文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ開催
- 〃・5・4 伊那中央道事務所設置
- 〃・5・30 中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
- 〃・6・13 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回 長野県庁）
- 〃・8・1 下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 147
～12 （団長 大沢和夫）
- 〃・11・1 上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
- 〃・11・10 上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 112
～26 （団長 林 茂樹）
- 〃・11・27 諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 90
～12・15 （団長 藤森栄一）
- 〃・12・16 下伊那郡阿智村殿島・智里地区（5.65km）ルート発表
- 43・2・27 公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
- 〃・3・5・公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
- 〃・7・23 下伊那郡阿智村智里殿島地区、県内のトップをきって用地買取契約成立
- 〃・10・12 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回 松本市）
- 44・3・18 〃 〃 （第3回 岐阜市）
- 〃・7・15 公団名古屋支社と協議（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
- 〃・8・12 上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
- 〃・10・3 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委回答 12・11）
- 〃・10・8 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
- 〃・10・20 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議
- 〃・10・31 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
- 〃・11・11 恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
- 〃・12・11 公団名古屋支社と協議（45年の発掘調査について）
- 45・1・29 諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
- 〃・2・2 公団名古屋支社と協議（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
- 45・2・23 岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- 〃・2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- 〃・3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- 〃・3・5 飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（団長 大沢和夫）
- 〃・3・31 飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行
- 〃・4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- 〃・4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- 〃・5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- 〃・5・14 中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）
- 〃・6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- 〃・6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- 〃・6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・鼎町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- 〃・6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- 〃・6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- 〃・6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- 〃・7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- 〃・7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- 〃・8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- 〃・9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- 〃・9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査鉄入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- 〃・9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）
- 〃・9・3 岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- 〃・9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- 〃・9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- 〃・9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- 〃・9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- 〃・10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高原原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- 〃・10・28 公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察
- 〃・10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察
- 〃・11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター)

- 45・11・17 公団名古屋支社との協議 (昭和46年度発掘調査地区の選定について)
- 〃 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催(下伊那郡阿智村智里東小学校)
- 〃 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催(上伊那郡宮田村福祉センター)
- 〃 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部(12.4km)ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了
- 46・1・12 伊沢県教育長、下伊那郡鼎町山岸遺跡視察
- 〃 2・1 公団名古屋支社と協議 (昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察)
- 〃 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議(昭和46年度発掘調査地区決定)
- 〃 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)
- 〃 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催(一般公開)
- 〃 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃 4・1 飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立(委託金額 1224万円)
- 〃 4・12 飯島町地内その1地区(七久保)発掘調査団結団式挙行(飯島町役場)
- 〃 4・13 飯島町地内その1、7遺跡(铸物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始(終了46・7・3)
- 〃 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催(伊那市上伊那郷土館)
- 〃 5・24 恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催(公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那郡地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会)
- 〃 6・7 下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査(~8)
- 〃 6・16 公団本社・同名古屋支社と協議(下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について)
- 〃 7・1 公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場(杉の木平遺跡)埋蔵文化財について意見聴取
- 〃 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催(飯島町役場七久保支所)
- 〃 7・20 公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議(恵那山トンネル斜坑土捨場問題について)
- 〃 8・1 下伊那郡高森町地内その1(10遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額 3120万円)
- 〃 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会(高森町役場)
- 〃 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡(弓矢・無縁堂・神堂垣外・鐘鑄原A・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原I)発掘調査開始(9・14中断、10・23再開、終了47・1・14)
- 〃 8・18 恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

- 46・8・30 公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- 〃・8・31 公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- 〃・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鑄原遺跡視察
- 〃・9・10 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）
- 〃・9・13 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- 〃・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鑄原遺跡視察
- 〃・9・16 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- 〃・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額 123万円）
- 〃・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- 〃・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑠璃寺前遺跡視察
- 〃・11・19 長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鼎町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- 〃・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、宮田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- 〃・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- 〃・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・20 下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・25 下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）
- 〃・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- 〃・3・27 園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- 〃・4・1 飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 2367.5万円）
- 〃・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 677.1万円）
- 〃・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 3361.6万円）
- 〃・4・3 飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- 〃・4・10 飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結団式挙行（飯田合同庁舎）
- 〃・4・10 飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- 〃・4・24 上伊那地区発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂II・うどん坂I・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- 〃・4・25 伊那市西春近地区・18遺跡（和手・富士山下・富士塚・蒲蒲沢・南丘A・南丘B・名廻南・名廻東古墳・名廻・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

- 城平上)の発掘調査開始。(終了47・12・14)
- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- 47・6・20 公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第2次調査について協議(県庁教育次長室)
- 47・6・22 公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第2次調査について現地協議。
- 47・7・3 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額2,002万円)
- 47・7・6 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,864.3万円)
- 47・7・6 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額563.5万円)
- 47・7・7 駒ヶ根市内8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地)の発掘調査開始。(終了47・9・1)
- 47・7・12 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立。(委託金額410万円)
- 47・7・14 下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。(松川町福祉センター)
- 47・7・24 下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘鑄原A)の発掘調査開始。(終了47・11・9)
- 47・7・24 下伊那郡松川町内12遺跡(里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ)の発掘調査開始。(終了47・11・11)
- 47・8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議。
- 47・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査団結団式。(飯田教育事務所)
- 47・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始。(終了47・9・30)
- 47・8・21 上伊那郡南箕輪村内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,051.5万円)
- 47・9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。(南箕輪村公民館)
- 47・9・4 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区9遺跡(南原・三本木原・曾利目・在家・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始。(終了47・12・9)
- 47・10・9 上伊那郡南箕輪村内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額514.4万円)
- 47・10・9 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額497.2万円)
- 47・10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会。(辰野町公民館)
- 47・10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反田・越道・平出山の神)の発掘調査開始。(終了47・11・30)
- 47・11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- 47・12・4 公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。(公団伊那工事事務所)
- 47・12・5 公団名古屋支社と伊那市内その2地区(4遺跡)・箕輪町内(3遺跡)・辰野町内その2地区(14遺跡)・諏訪郡富士見町内(7遺跡)について現地協議。
- 47・12・15 上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。(上伊那地方事務所大会議室・
～・16 一般公開)
- 47・12・16 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査報告会開催。(辰野町公民館)

- 48・3・16 上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催。(飯島町公民館)
- 〃・3・18 飯田市内その2・その3地区発掘調査報告会開催。(下伊那教育参考館)
- 〃・〃・〃 下伊那郡高森町内その2地区発掘調査報告会開催。()
- 〃・〃・〃 下伊那郡松川町内発掘調査報告会開催。()
- 〃・3・19 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催。(南箕輪村公民館)
- 〃・3・24 駒ヶ根市内発掘調査報告会開催。(駒ヶ根市役所大会議室)
- 〃・3・26 伊那市西春近地区発掘調査報告会開催。(伊那市福祉センター)

2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があつて、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

ア 発掘調査委託契約書

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 1 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査(伊那市西春近) |
| 2 委託期間 | 昭和47年4月1日から
昭和48年3月20日まで |
| 3 委託金額 | ¥33,616,000円也 |
| 4 委託金支払場所 | 日本道路公団名古屋支社 |

日本道路公団(以下「甲」という。)は、長野県教育委員会(以下「乙」という。)に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受理した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかけ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

昭和47年4月1日

委 託 者 名古屋市中区栄4丁目1番1号（中日ビル11～12階）
日本道路公団名古屋支社
支社長 平野和男

受 託 者 長野県教育委員会
教育長 小松孝志

イ 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和47年度役員・西春近地区調査団組織はつぎのとおりである。

(ア) 長野県中央道遺跡調査会規約

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は長野県中央道遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名

事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者 (2) 関係学会の役員
(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者 (4) 関係市町村教育委員会の教育長
(5) 関係行政機関の職員

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること。 (2) 発掘調査の受託に関すること。
(3) 規約の改正に関すること。 (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

- 2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。
- 3 顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

- 2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員任期)

第10条 役員任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

- 2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。
- 3 幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

- 2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

- 2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

- 2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和47年11月現在)

顧問	一志 茂樹	(県文化財専門委員)			
会長	小松 孝志	(県教育長)			
理事	金井喜久一郎	(県文化財専門委員)	米山 一政	(県文化財専門委員)	
	藤沢 宗平	()	藤森 栄一	(長野県考古学会会長)	
	原 嘉藤	(長野県考古学会委員)	宮嶋 進	(下伊那教育会会長)	
	木下 衛	(上伊那教育会会長)	福田 幹人	(諏訪教育会会長)	
	小泉兵次郎	(県教育次長)	飯島 丁巳	(県文化課長)	
	佐藤 唯重	(飯田教育事務所長)	徳永 正人	(伊那教育事務所長)	
	小林 彰	(阿智村教育長)	新井 良男	(鼎町教育長)	
	矢亀 勝俊	(飯田市教育長)	中塚 伝次	(高森町教育長)	
	北原 保喜	(松川町教育長)	斎藤 三夫	(飯島町教育長)	
	北沢 照司	(駒ヶ根市教育長)	細田 峩徳	(宮田村教育長)	
	松沢 一美	(伊那市教育長)	安積 正一	(南箕輪村教育長)	
	熊谷 大一	(辰野町教育長)	羽生 保吉	(下伊那地区教委協議会会長)	
	坂井 喜夫	(上伊那地区教委協議会会長)	木川 千年	(諏訪地区教委協議会会長)	
	林 茂樹	(上伊那郡中川東小学校教頭)			
監事	岡沢 幸朝	(県文化課課長補佐)	田中 富雄	(飯田市社会教育課長)	
幹事	金井 汲次	(県文化課文化財係長)	前沢富実保	(県文化課文化係長)	
	西沢 清	() 専門主事	浅川 欽一	() 専門主事	
	矢島 太郎	() 専門主事	佐藤 文武	(飯田教育事務所総務課長)	
	佐藤 陸	(飯田教育事務所主幹)	下平 久雄	() 主事	
	松島 勇	(伊那教育事務所総務課長)	小林 正次	(伊那教育事務所主幹)	
	鈴木 長次	() 主事	今村 善興	(県文化課指導主事)	
	桐原 健	(県文化課指導主事)	神村 透	()	
	宮沢 恒之	()	丸山 徹一郎	()	
	岡田 正彦	()	堀内規矩雄	() 主事	

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団 西春近班

理事	北原 保喜	(松川町教育長)	斎藤 三夫	(飯島町教育長)
	北沢 照司	(駒ヶ根市教育長)	細田 崑徳	(宮田村教育長)
	松沢 一美	(伊那市教育長)	安積 正一	(南箕輪村教育長)
	熊谷 大一	(辰野町教育長)	羽生 保吉	(下伊那郡地区教委協議会会長)
	坂井 喜夫	(上伊那地区教委協議会会長)	木川 千年	(諏訪地区教委協議会会長)
	林 茂樹	(上伊那郡中川東小学校教頭)		
監事	岡沢 幸朝	(県文化課課長補佐)	田中 富雄	(飯田市社会教育課長)
幹事	金井 汲次	(県文化課文化財係長)	前沢富実保	(県文化課文化係長)
	西沢 清	(〃 専門主事)	浅川 欽一	(〃 専門主事)
	矢島 太郎	(〃 専門主事)	佐藤 文武	(飯田教育事務所総務課長)
	佐藤 陸	(飯田教育事務所主幹)	下平 久雄	(〃 主事)
	松島 勇	(伊那教育事務所総務課長)	小林 正次	(伊那教育事務所主幹)
	鈴木 長次	(〃 主事)	今村 善興	(県文化課指導主事)
	桐原 健	(県文化課指導主事)	神村 透	(〃)
	宮沢 恒之	(〃)	丸山敞一郎	(〃)
	岡田 正彦	(〃)	堀内規矩雄	(県文化課主事)

(今村)

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団 (伊那市西春近地区)

調査団長	大 沢 和 夫			
調査主任	宮 沢 恒 之	今 村 善 興	(総括)	
調査員	辰 野 傳 衛	根 津 清 志		
	福 沢 幸 一	深 沢 健 一		
	小 池 政 美	唐 木 孝 雄		
調査補助員	佐 藤 隆 昭	荻 沼 勇 市	田 畑 辰 雄	丸 山 弥 生

工) 発掘調査遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	遺 跡 の 状 況	全体面積	用地内面積	調査面積
和 手	畑	諏訪形部落西方山麓のカイツケ沢両岸の扇状地形面上にあり、縄文土器・土師器を採集している。	2,200㎡	2,200㎡	440㎡
富士山下	畑	諏訪形部落西方・藤山の山麓にあり、縄文中期の土器・石器・須恵・灰稲陶器を採集している。	11,000	5,000	1,000
富士塚	畑	富士山下遺跡内、北側の一面にある残丘上に位置する浅間信仰基壇である。	652	652	652
高 蒲 沢	畑	諏訪形部落西方の山麓、藤沢川以南の広い扇状地が遺跡で、縄文から平安の遺物が出土している。	66,000	17,000	3400
南 丘 A	畑	猪の沢川に面した木裏原の南側一帯で、縄文・弥生・古墳時代の遺物と、住居址が確認されている。	75,000	4,000	800
南 丘 B	畑	木裏原扇状地の中央に位置し、縄文中期・古墳時代の遺物と、住居址が確認されている。	5,500	1,250	250
北 丘 B	畑	犬田切川南岸に細長く延びる台地上にあり、縄文中期・後期の遺物と住居址が確認されている。	3,850	1,500	300
名 廻 南	畑水田	犬田切川左岸の小規模な段丘上にあり、縄文中期土器片が出ている。	6,300	2,400	480

遺跡名	現況	遺 跡 の 状 況	全体面積	用地内面積	調査面積
名廻東古墳	山林	犬田切川左岸に細長く続く丘陵上にあり、44年羨道部の調査が行われた。石室が残っている。	100㎡	100㎡	100㎡
名 廻	畑	白沢原扇状地の南端、名廻東古墳とは犬田切上井の川で切られている。縄文・平安の遺物が出ている。	57.500	5.500	1.100
白 沢 原	畑	白沢原扇状地の扇淵部にある。縄文中期の土器・石器が出ている。	22.100	5.000	1.000
山 寺 垣 外	畑水田	小戸沢川南岸にあり、過去の開田の際縄文中期の土器が発見された。	7.950	3.200	640
細ケ谷B	畑	西春近一の細長い扇状地の扇中部にあり、傾斜が強いので覆りが厚い。縄文中期の遺物が出ている。	3.600	2.500	500
百 駄 刈	畑山林	山王の尾根の東、ヒデリ沢とヨドガ沢に挟まれた三角形の舌状台地上にある。灰釉陶器が出ている。	7.000	4.000	800
大 境	畑山林	戸沢川左岸の宮の原部落上の扇頂部にあり、縄文中期遺物と灰釉陶器が出ている。	19.500	4.000	800
山 の 根	畑	城部落の西方山麓の扇状地にあり、 諏訪神社の南側一帯にあたる。縄文・平安の遺物が出ている。	37.400	10.000	2.000
城 平	畑	山本部落と、白山神社との間に広がる平坦地にあり、縄文中期の遺物・土師・須恵・灰釉が出ている。	12.000	9.000	1.800
城 平 上	畑水田	山本部落西上の小台地上にあり、西春近北端にあたる。縄文中期の遺物・土師・須恵・灰釉が出ている。	6.500	100	20

3) 発掘調査開始までの準備

伊那市西春近地区の発掘調査は、本年度が初めてであったが、加えて調査団の本拠整備が必要であり、そのための準備が多かった。他では発掘調査行程の作製、調査会事務所との連絡、伊那市教委との打合せ資材の調達運搬、調査団結団式が主なものである。

- 3月28日、 伊那教育事務所との打合せ、（調査行程・調査前の準備・予算執行などについて）
- 3月30日 伊那市教育委員会との打合せ、（調査行程・調査方法・作業員募集について）
- 4月10日 作業員の募集が始まる。
- 4月17日 調査員宿泊所と、作業場が決定したので、飯田から資材を運搬し、現地調達の資材も到着し、調査開始が待たれるまでになった。
- 4月24日 調査団結団式が上伊那地方事務所会議室で行われた。式次第と参列者は次のとおりである。

(式次第) 開会あいさつ 金井幹事
調査員委嘱 徳永調査会伊那事務所長
調査員紹介 今村調査主任
調査会長あいさつ 徳永調査会伊那事務所長
来賓祝詞 公団伊那工事事務所長
調査団長あいさつ 大沢団長
閉 会

(参列者) 日本道路公団伊那工事事務所長代理
伊那市教育長・飯島町教育長・伊那市教育委員長
金井文化財係長・桐原指導主事
徳永伊那教育事務所長・松島同総務課長・小林同主幹
松沢指導主事・笠原指導主事・鈴木教育事務所主事・北沢調査会事務員

調査団全員

昼食のあと、発掘現場の諏訪形澗蒲沢遺跡へ資材運搬をする。作業員の方10名程来てもらい、テント張り、資材整備して明日からの調査にそなえる。

4月25日 午前8時30分、調査員、作業員澗蒲沢に集合して顔合わせをする。伊那市教育委員会 有賀館長さんのあいさつの後、今村調査主任によって調査員の紹介、作業日程、発掘調査法などについて説明をする。テントその他整備をすすめながら、グリッド設定、午後から発掘調査が進められた。初日38名の作業員であったが、後120名近くにもなった。

2 調査の実施と経過

1) 調査期間と経過

伊那市西春近地区の発掘調査は、4月25日澗蒲沢遺跡からはじまり、富士山下・富士塚・北丘B・南丘A・南丘B・名廻南・名廻・名廻東古墳・山寺垣外・白沢原・細ヶ谷B・百駄刈・大境・山の根・城平・城平上と進み、住宅移転の都合で後まわしになっていた和手遺跡を最後に12月6日終了した。なおその後12月14日まで数人の作業員の方の協力をお願いして、遺構の複雑であった城平遺跡の補充調査・測量を行ない、これをもって発掘調査は完了した。この間実働作業日158日の長きにわたり、2基の古墳61軒の住居址をはじめ各種の遺構も多く、そこから検出された遺物も膨大な量に及び、整理作業は多忙をきわめた。発掘調査は、グリッド設定・グリッド掘り、遺構の発見があれば拡張、遺構の検出・清掃・写真撮影・遺構実測・補足調査の順をおって行なわれた。各遺跡の調査期間は次のとおりである。

(1) 澗蒲沢遺跡	4月25日～6月6日	実働作業日数29日
(2) 富士山下	◇ 6月3日～6月22日	◇ 15日
(3) 富士塚	◇ 6月5日～7月3日	◇ 20日
(4) 北丘B	◇ 6月13日～7月4日	◇ 16日
(5) 南丘A	◇ 6月22日～7月4日	◇ 8日
(6) 南丘B	◇ 6月29日～6月30日	◇ 2日
(7) 名廻南遺跡	7月3日～7月17日	◇ 7日
(8) 名廻	◇ 7月4日～7月17日	◇ 6日
(9) 名廻東古墳	7月5日～8月17日	◇ 27日
(10) 山寺垣外遺跡	7月17日～7月27日	◇ 10日
(11) 白沢原	◇ 7月24日～7月27日	◇ 4日
(12) 細ヶ谷B	◇ 7月24日～8月28日	◇ 25日

(13)	百駄刈 遺跡	8月23日～10月16日	実働作業日数39日
(14)	大 境	9月28日～10月18日	16日
(15)	山の根	10月 9日～11月 1日	17日
(16)	城 平	10月24日～11月20日	25日
(17)	城平上	12月 7日～12月14日 11月11日	1日
(18)	和 手	11月16日～12月 6日	18日

伊那市西春近地区発掘調査経過

遺跡名	4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月		10 月		11 月		12 月		1月～3月		
	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	20日		
菅 蒲 沢	24		6		(29日間)																
富士山下	3		22		(15日間)																
富士塚	5		3		(20日間)																
北 丘 B	発 掘 掘 発 掘 準 調 査 備 団 結 団 式	24		13		4		(16日間)													
南 丘 A		22		4		(8日間)															
南 丘 B		29		30		(2日間)															
名 廻 南		3		17		(7日間)															
名 廻		4		17		(6日間)															
名廻東古墳		5		17		(27日間)															
山寺垣外		17		27		(10日間)															
白 沢 原		24		27		(4日間)															
細ヶ谷B		24		28		(25日間)															
百 駄 刈		23		16		(39日間)															
大 境	28		18		(16日間)																
山 の 根	9		1		(17日間)																
城 平	24		20		7		14 (25日間)														
城 平 上	11		(1日間)																		
和 手	16		6		(18日間)																

遺物整理
図面作製
原稿執筆

2) 発掘調査協力者

昭和47年4月から12月までの発掘作業、昭和48年1月から2月にかけての整理作業に協力いただいた作

業員は、地元西春近地区の方々を中心に伊那市全域からの方々で、その数は延9600人以上にのぼり、調査進行の原動力であった。発掘調査協力者はつぎのとおりである。

伊那市西春近

有賀 国雄 赤羽 留吉 赤羽志げ子 赤羽 幸寿 赤羽 治子 有賀 美咲 有賀 文子 有賀 秀子
赤羽 利文 伊藤 和子 伊藤 一子 伊藤みさを 伊藤きよ子 池上 久一 浦野 光子 浦野 節子
浦野 正子 大前のり子 折笠ヤエ子 梶野 和子 唐木けさみ 唐木 次雄 唐木 律子 唐沢香保子
唐沢喜久重 加納 里美 春日 幸子 北原 一喜 北原 今雄 北原 清子 北原 幸子 北原みなと
北原 幸子 黒河内和明 久保田民子 小松美恵子 小出ゆり子 後藤もとえ 酒井 達雄 酒井とし子
酒井 泰子 酒井とし子 酒井 正雄 酒井 綾子 酒井よしえ 酒井 和子 清水 由男 清水やす子
城倉すみ子 城倉 米子 城倉 勝子 城倉 房子 城倉みさき 城倉もよ子 城倉 直子 城倉ふさ子
辰野みさ子 田中いわ子 田中広一 辰野 隆夫 辰野千代美 辰野美佐子 坪木 辰雄 坪木 正志
坪木 一雄 坪木 節夫 戸荊 直子 中村健一郎 中村みさを 中山りは子 中村 誠 西村 清子
橋爪 幸子 原 貞子 橋爪ちえ子 平沢 平治 平沢としか 平沢 文子 平沢 和義 平沢 玲子
平沢 公夫 平沢 喜雄 平沢 恵子 平沢 長治 平松 道子 平沢 貞秋 平沢えみ子 平沢 才子
平沢美代子 平沢やよい 平沢 典子 平沢とも子 北条美和子 堀内みさを 宮下 甚平 溝上 千里
溝上美弥子 溝上 良一 溝上きわ子 溝上 住子 溝上 照子 三沢 温子 宮下 担司 溝上きち江
宮沢たけ子 溝上恵美子 三沢ひろ子 三沢かつえ 宮沢 久江 六波羅歌子 故小松輝雄

伊那市東春近

阿部 操子 伊藤 元恵 伊藤 正子 幾川やす子 伊藤 薫 伊藤 好 市原三恵子 伊東 勝子
伊藤いち子 稲村 良助 伊藤久良子 伊藤 一路 伊藤 豊子 伊東イサ子 伊藤ゆきみ 伊藤 純次
伊藤つた子 伊藤 芳広 浦野 和子 内田かつ子 大島文枝 織井千代美 川口 義房 北原 由郎
北原 陸美 北原 春美 北原ふき子 菊島 要一 菊島 君子 菊島 正偉 北原 辰子 小林 巖
久保村うめ子 酒井卯治 酒井久美子 酒井 紀子 酒井 兼義 酒井 房子 高見あや子 田中 勝彦
那須 大二 野溝 一美 橋爪とし子 福沢 由美 八木志づ子 八木 徳男 米山 通夫

伊那市手良

有賀 順子 名和 正子 矢沢八重子 矢沢 涼子

伊那市ミスズ

武田 久雄 伊東 強

伊那市富県

伊藤 秀夫 筒井 留十

伊那市西箕輪

林 直人

伊那市伊那

飯島 知徳 牧田 政国 中村 明子 久保村クニエ 久保村久美子 木舗さえ子 唐沢幸一
丸山かつ子 大野田三千代 唐沢とみ子 橋爪日出子 溝口千代子 杉下 愛子 中村 保男 村田 広子
鉄 実 竹谷 益考

3) 現地指導・現地視察者

調査期間中はつぎの方々から現地において指導をいただいた。

5月17日県文化課桐原指導主事、5月23日伊那教育事務所松島総務課長、6月2日長野県中央道遺跡調査会藤森理事6月5日長野県中央道遺跡調査会林理事6月14日県文化課飯島課長、伊那教育事務所松島総務課長、6月23日県文化課桐原指導主事、7月11日～12日県文化課八田課長補佐、7月26日伊那教育事務所徳永所長、同松島総務課長、8月3日県文化課金井係長、同堀内主事、8月8日長野県中央道遺跡調査会林理事、9月19日下伊那郡豊丘中学校松島信幸教諭、9月29日県文化課桐原指導主事、10月25日日本道路公団名古屋支社総務課文化財担当佐治氏、伊那教育事務所松島総務課長、11月1日県立筑摩高校樋口昇一教諭、11月10日下伊那郡豊丘中学校松島信幸教諭16日県文化課堀内主事12月13日伊那教育事務所徳永所長同松島総務課長また他に、日本道路公団・県教委事務局・伊那市当局・各種機関団体・学校関係・近隣市町村民の方々等多数の視察・見学を受けている。その主な方々はつぎのとおりである。

日本道路公団	名古屋支社総務課文化財担当佐治氏・伊那工事事務所松浦庶務課長
県教委事務局	文化課飯島課長・同八田課長補佐・同金井係長・同桐原指導主事、同堀内主事伊那教育事務所徳永所長・同松島総務課長・長野県中央道遺跡調査会藤森理事・同林理事長野県中央道遺跡調査会調査団飯田地区主任神村指導主事県出納課課長補佐・上伊那地方事務所長・上伊那農業改良普及所笠原氏外2名
伊那市当局	三沢市長・教育委員会坂井委員長・同各委員・松沢教育長・浦野社会教育課長・同保坂課長補佐・社会教育委員会・西春近公民館有賀館長・同池上主事・市公民館長会・文化財審議委員
各種機関団体	岡山県教育庁西原主事他3名・岐阜県中央道調査団関係者3名・飯島町教育委員会斉藤教育長・同保科係長・下伊那郡松川町教育委員会松下主事・駒ヶ根市立博物館福沢・吉村両氏・諏訪市宮坂光昭氏 公民館主催現地説明会参加者70名以上・伊那市富県西原視察団約50名 西春近被買収者組合平沢副組合長
学校関係	上伊那教育会歴史同好会・上伊那教育会中部支部同学会約30名・春富中学校小池校長 伊那女子高校職員・生徒・春富中学校星野教諭外歴史クラブ員・西春近南小学校職員・児童・西春近北小学校5・6年職員・児童 県立筑摩高校樋口昇一教諭・下伊那郡豊丘村豊丘中学校松島信幸教諭
報道関係	朝日新聞記者・朝日グラフカメラマン・伊那市記者クラブ・NHK取材班長橋・浦和・中村・中野他諸氏・信濃毎日新聞・毎日新聞・南信日日新聞・伊那毎日新聞・読売新聞各記者

3. 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊されるため、工事着工前に記録保存を目的とした緊急発掘である。このため、この調査は、用地内にどのような時期の遺跡が、どんな遺構と遺物を残しているかをさぐり、それを報告書としてまとめることが目的となる。

そのため、発掘調査は中央道用地内に限定される。すでに分布調査によって、その遺跡の広がり、時期は一応確認されている。その遺跡の中において、中央道がどのような部分をとるかによって4区分した0—全面かかるもの。A—遺跡の頂部がかかるもの。B—遺跡の中央部を横切るもの。C—遺跡の先端部にかかるものの4区分がそれぞれである。用地内の遺跡は全面にグリットを設定するものを原則として、小さな遺跡、やむを得ない遺跡は適当にトレンチを入れた。グリットの設定は、2m間隔の基準方眼を設定し中央道の長軸方向に01～99の2桁の数字を用い、それに直交する方向にA～Yの25字のアルファベットを用いた。その数え方は、名古屋方面から東京方面に向って立つたとき、左から右へ01～99とし、ただし、道路のセンターライン（20mおきにセンター杭をウツ）を50とする。だからセンターを基準に左右98mの巾がとれる。アルファベットは、巾中心杭のうちの遺跡内で最も名古屋よりを基準にして東京方面へABCとする。A～Yの25字で50mをおさえ、その範囲を地区としておさえ、それをA・B・C……と表示する。これによって、25地区1250mがとれる。だからそれぞれのグリット地点は「WAB BH55」というように表示する。これは和手遺跡のB地区H55地点ということになる。このようにグリットを設定してから、適宜にグリットをほり、遺構が確認されたらそのまわりを広げていくという方針をとった。調査中の記録としては、「調査日誌」「調査記録」「住居址調査カード」「古墳調査カード」を使用した。

なお、こまかな調査方法については、「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子にまとめてそれをもとにして調査を進めている。

また、調査中、調査員の努力によって「調査速報」を日刊で発行し、作業員の方々に発掘調査・調査結果について理解してもらった。

Ⅱ 伊那市西春近地区の概況

1. 西春近地区の環境

伊那市は、源泉となる諏訪湖から南下する天竜川に、南アルプスの沢水を集めた三峰川の合するところ
にあり、伊那盆地北部の地域的中心地帯でもある。

天竜川を中心に、東の南アルプス、西の中央アルプスにはさまれて南北に細長く続く、伊那盆地は、中央
線と飯田線の分岐点辰野から、美しい溪谷で知られる天竜峡までのほぼ80kmにわたる袋状の谷盆地で東西
のアルプスを中心とする山岳部の隆起と、盆底沈降の力関係による衝上断層・天竜川とその支流による浸
食作用などによった造盆地形は複雑でまた美しい変化をも見せている。中でも特徴的なものは、山岳部の
急峻な山肌から、盆底めがけて供給される土石によった扇状地形と、扇状地形を衝上断層が切り、または
天竜川や、大きな支流の差別浸食から形成された河岸段丘のいく段にも重ねられた景観であろう。

伊那盆地北半は、行政区画で上伊那郡であるが、地形的にみれば辰野を頂点として、小黒川までの天竜川
以西に広がる扇状地形と、三峰川に影響される合流地点一帯、天竜川以東の段丘地形を結ぶ三角形の上
伊那北部と、太田切川・中田切川・与田切川などの深く、荒々しい解析谷が、川東に平坦な地形をほとん
ど造らせないまでに、天竜川流路を山裾まで押しつけている駒ヶ根や飯島の南部地域。東西山麓の発達に
よって、盆底のせばまる中部地域とに区分することができる。

伊那市は、北部地域が最も範囲を広げ、三角形の底辺にあたる一帯。つまり天竜川と三峰川による段丘
と比較的若い氾濫原を中心に、手良地区、美郷地区・富県地区・東春近地区が、また小沢川、小黒川の広
げた扇状地形面を中心にする西箕輪地区と、中心部の伊那地区があり、地形的な区分では中部地域とする
谷巾のせばまった天竜川西岸扇状地形面を占拠する西春近地区からなっている。広域・東西21.5km、南北
17.5km周囲 115km、面積208.75kmを計る伊那市は、人口 50000余・かつての三州街道伊那郡宿を中核とし
て発展した伊那町と、周辺の村々を合して、昭和29年（後40年に西春近村も含めるようになる）市制をし
いた上伊那地方の中心的役割を持った田園都市である。

伊那市西春近地区は、伊那市西郊の農産物供給地帯である。幕藩時代の小出村・沢渡村・表木村・赤木
村・諏訪形村・下牧村6カ村が明治8年合併して西春近村となり、昭和40年伊那市へ編入して現在に至っ
ている。中央アルプス西駒ヶ岳の前峰1749mの権現山の山麓から、天竜川にむかって流れ出る沢川の押し出
しや、上述の山肌の供給する土石流によった山麓部から東に緩傾斜する扇状地形面と、治水によった旧天
竜川氾濫原面が、生産場面となっている農業地帯である。山麓部から天竜川を見下ろす扇状地端部までは
養蚕が盛んで、また天竜川旧氾濫原は米どころであるが、地区北端・旧伊那町との境界であった小黒川・
地区中央を縦貫する犬田切川、南部を流れる藤沢川の灌漑によったいくつかの用水路開発の結果・現在で
は上段扇状地帯の水稲耕作も盛んになった。一方下段天竜川旧氾濫原を国道 153号バイパスが通過してか
らは、伊那市街道地区の延長として企業進出も急で、かつての純農村西春近のおもかげをなくしつつある。

中央道開通後の地域の変貌は予測しがたいが、バイパス通過後以上の発展が約束されよう。

山麓部から天竜川に臨む扇状地の端部までと、下段の天竜川沿いの平坦面とではかなり気象状況にちがいがいる。扇状地の方が標高の高いこともあるが、加えて、下段の平坦面は天竜川の影響が大きく、12月調査時、地区南端にあり、地形全体が隣村宮田村方面へ傾斜する和手遺跡で大雪に出逢ったが、その時の下段平坦面にほとんど雪積を認めなかった。上段扇状地をほう風はかなり強いのに、下段平坦面は風を感じないこともある。西春近地区上段は下段にくらべて風雪強く、下段はおだやかな気象現象を示す土地柄といえる。

中央道用地内18遺跡は、南からいえば、犬田切川扇状地の北端に接する和手遺跡から山麓から山麓に近い扇状地形面の扇測部を占拠するものがほとんどで、太田切川の扇状地形面に立地する木裏原から白沢原・戸沢川やその支流によった細ケ谷など、発達した大きな扇状地形面上のいくつかの遺跡が、扇央部を占拠している。遺跡立地が上述の扇状地形面上であるため、山麓部からの土石流ないしは、転石の多い砂礫質成層上に形成された遺跡が多く富士山下・南丘A・北丘B・名廻・城平遺跡で検出された遺構以外は大部分が複雑な成層中から発見されている。また中には白沢原遺跡のように、きわめて新しい近世の土石流を厚くかぶる遺跡もあり、新しい土石流成層より2～3m下に縄文時代の遺物包含層を持つ所もあった。遺構の観察をしやすくするローム層中へ切り込む所が少なく、特に小戸沢川以北の細ケ谷B遺跡以北は片状ホルンヘルス帯のにかかる成層中に遺物が包含される例が多く、その場合、ホルンヘルス礫塊や、砂粒状に破碎されたものと、少量のロームの混じったもの、その他の土の混じったものなどかなり複雑な土質となっているさまが観察された。(宮沢)

2. 西春近地区の遺跡 (図1)

西春近地区で現在確認されている遺跡は80ヶ所を数える。全体とすれば天竜川にむかって東に傾斜する扇状地面、段丘面上に分布するが、精密で総合的な分布調査が今後なされれば、特に藤沢川以南の下村・下牧部落や、柳沢部落などで遺跡数増加の可能性がある。

伊那谷全体がそうであるように、山岳部が終って盆地地形に移る山麓線、つまり多くの場合扇頂から扇測部にかかるあたりに帯状に連続して遺跡が分布し、扇央部が薄く、扇端部に濃くなる現象がここでも認められる。ただし現に扇状地形を解析しながら天竜川に沿う支流の岸辺付近は一般的に分布の密度は高い。中央道用地を中心にすれば、全遺跡数の10%弱が中央道用地西方にあるが、他はすべて東下方に立地している。全体地形上の区分でいえば、現在のところ下段の天竜川旧流路の平坦面には1ヶ所も遺跡は確認されていない。

各遺跡については挿図1と、後掲の遺跡一覧表によられたいが、80遺跡中の3ヶ所は遺跡分布図へ点が落せないで省略してある。小黒川上流の天狗上・天狗下遺跡と宮の原部落上の百駄刈遺跡から林道を500mほど昇った山腹で、百駄刈発掘中に作業員の武田久雄さんが灰釉塊を見つけた山王遺跡がそれである。

80遺跡中の内訳は、旧石器を出すもの2、縄文早期9、縄文前期7、縄文中期62、縄文後期13、縄文晩期6、弥生後期12、土師器を出すもの41、須恵器を出すもの34、灰釉陶器を出すもの26、中世土器または陶

磁器を出すもの11遺跡となる。今回の中央道用地内調査の遺跡を除けば、いわゆる発掘調査は過去ほとんどなされることがないという状況のもとではしかといえぬが、一覧表で見られるように、発掘調査の行われた所では複数時期にわたる遺物または遺構が発見されている。この知見に従えば、西春近地区上段の扇状地と段丘面上に展開した遺跡は、古墳とかまたは、たとえば下牧経塚のよりに特殊なものを除いて複数回にわたる祖先達の生活の場となったであろうことが予測される。

ここで西春近地区にある主な遺跡についてふれてみれば、北の山本部落では部落南方の山本遺跡がある。縄文中・後期の遺物・弥生式土器が発見されているし、特殊なものでは部落の東、上村の北条遺跡で上伊那全域でも発見例のすくない須恵質の硯が出土している。天竜川の氾濫原を臨む上島段丘面上の上島下遺跡では、土器発明前の古い時期の石器や、縄文前期の遺物が、またその上段の、山本部落へ通ずる道を登り切った段丘端の上島遺跡は、縄文、奈良、平安時代の複合遺跡であるが、縄文前期の遺物の多いことで知られている所である。上島遺跡の南方、東方部落の東端、東方A遺跡では、西方高台にある本城の関係か、中世青磁片が発見されているし、村岡の唐木弥七さん宅付近からは、中国渡来の宋銭が甕に入ったままで見つかっている。城部落では小出あら城遺跡付近の舌状台地が遺跡になっており、縄文後期の石剣五頭石斧などが出土し、下島の小戸沢川に面した薬師堂遺跡は、縄文・弥生時代から中世に及び遺物が、また天竜川にむかって一段下がった唐木部落には、縄文前期から平安時代にまでいたる唐木原遺跡と、犬田切川左岸に点在する5つの古墳中、最も低所に当たる土盛円墳の唐木古墳がある。

猪の沢川に面した沢渡までくると、縄文中期の好資料にめぐまれた南原遺跡が、猪の沢川以南の柳沢部落では、過去の開田の際縄文中期の住居址がみつかった。西春近地区は藤沢川以南になると地形は全体的に南東に緩るく傾斜するようになり、天竜川旧氾濫原を限る西方の段丘崖も、下小出や沢渡あたりまでのように、高く急でなくなる。地形の緩るやかになる表木原は、縄文時代から平安時代の遺物を出す所である。諏訪形地籍は西春近地区では遺跡分布が濃密な所として知られている。平安時代の住居址や豊富な遺物を出して注目された鳥井田遺跡や、複合遺跡として知られる安岡城遺跡がある。特に安岡城遺跡では、西春近地区では数すくない弥生後期・中島式土器その他貴重な資料を出土させた住居址が発見されており一方中世城郭址としての遺構や、それに関連する中世陶器・内耳鍋・宋銭・ふいごの口・茶臼などが発見され資料性の高い遺跡といえる。

西春近南端の下牧部落には、平安時代末から鎌倉時代初期に比定される量質をほこる遺物を出し、下牧経塚で有名な東塚・西塚がある。東塚では鳥と植物の図柄からなるために、たとえば「松喰鶴鏡」とか、「菊花飛雀鏡」などといわれる和鏡7面、刀子12本、鑄銅製経筒1本が、また西塚からは、和鏡4面、刀子11本、経筒1本がそれぞれ発見されている。

西春近地区の遺跡を概観すれば、西山の山麓付近、標高700m前後の扇測部を中心として帯状に連続する一帯と、扇状地形面の東側、天竜川旧流などの差別浸食によった、ちょうど扇状地形面の端部から東にかけて展開する段丘面の端部にかけて広がる遺跡群とに大きく分けることができる。つまり西春近地区の遺跡の分布は、天竜川に平行して山つけと、天竜川旧床を見下ろす段丘面上に並んでいることになる。一方天竜川に注ぐ支流沿いにも遺跡はあるが、数はすくない。また支流によって縦長に切られた地形を、1つのブロックとして眺めると、猪の沢川と藤沢川に挟まれる柳沢から下小出の区画には極端に遺跡数が減少してくる。調査不十分の結果と思われる。

(宮沢)

西春近地区遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生			奈良平安			備考	
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		中世
1	天狗上	天狗					○								○		
2	天狗下	〃					○										
3	城平上	山本 838					○					○	○	○	○	中央道	(8675)
4	城平	〃 793外					○	○	○			○	○	○	○青	中央道	(8677)
5	常輪寺址	〃															
6	宮林	城 728					○										(8673)
7	山の根	〃 441			○	○	○	○	○			○	○	○	○	中央道	(8676)
8	山本	山本					○	○				○					(2273)
9	常輪寺下	城					○					○	○				
10	上村	上村					○					○					(2269)
11	北条	山本												○			硯
12	上島下	上島	○			○	○										
13	上島	〃				○	○						○	○	○		(2278)
14	東方B	東方					○										
15	東方A	〃							○							青	
16	村岡北	村岡					○										宋銭
17	村岡南	〃					○										(2276)
18	大境	宮ノ原 478-2			○		○	○	○			○	○	○	○青	中央道	(8674)
19	中原	宮ノ原 509外							○								(8663)
20	百駄刈	〃			○	○	○	○	○				○	○	○	中央道	
21	西垣外	小出三区					○										(2275)
22	細ヶ谷A	細ヶ谷					○										(2272)
23	細ヶ谷B	〃 3359			○	○	○	○	○				○	○		中央道	
24	小出城	城							○						○		(2270)
25	宮の原	宮ノ原					○										(2288)
26	浜射場	〃					○										
27	中村	中村					○										(2285)
28	中村東	〃											○				
29	山寺垣外	白沢3410					○								○青	中央道	(8662)
30	白沢原	〃 4000-1-2					○						○	○	○		〃 (2274, 8660)
31	名廻	〃 3968外			○		○						○	○	○		〃 (8672)
32	名廻西古墳	〃 3920															横穴式石室
33	名廻東古墳	〃 4107											○	○			中央道〃
34	名廻南	〃 3895			○	○	○						○		○		中央道
35	児塚	白沢					○						○				
36	鎮護塚西古墳	〃															17×2m 円墳(2282) 横穴式石室
37	鎮護塚東古墳	〃											○	○			18.4×2m 円墳 横穴式石室
38	カンバ垣外	南小出					○						○	○	○		
39	丸山	〃					○										
40	南原	〃					○						○	○	○		(2271)
41	薬師堂	下島					○						○	○	○	○青	(2279)

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生			奈良平安			中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
42	唐木原	唐木				○	○						○	○	○		
43	唐木古墳	〃											○	○			7×2m 古墳 横穴式石室(2295)
44	北丘B	木裏原 10746外		○		○	○										中央道 (8671)
45	北丘A	〃 10746外				○							○				(8659)
46	北丘C	〃 10746外				○											
47	南丘B	〃 10746外				○							○				中央道・石製模造品 (8666)
48	南丘A	〃 4105	○			○							○	○	○	○	〃 (8667)
49	南丘C	〃 10746				○											
50	眼田原	沢渡4996				○											
51	山の神	〃				○							○				
52	上の塚	〃											○	○			8×10m 古墳?
53	沢渡南原	〃				○											
54	下小出平	下小出				○							○				
55	天伯原	〃				○							○	○	○		(2286)
56	南村	柳沢4401				○											住居址 (8668)
57	東田	〃				○									○		(2283)
58	天伯	下小出				○	○										(2281)
59	下小出原	柳沢				○							○	○	○		(2284)
60	井の久保	井の久保				○	○										
61	表木原	表木				○							○	○	○		(2289)
62	山ノ下	諏訪形7225外				○											
63	菖蒲沢	〃 7806外	○	○		○	○	○					○	○	○		中央道 (2293, 8669)
64	富士山下	〃 7876外				○							○	○	○		〃 (8670)
65	富士塚	〃 7813外											○	○			横穴式石室(8661)
66	広垣外1	〃				○							○	○			
67	広垣外2	〃											○	○	○		
68	鳥井田	〃 7157				○							○	○	○		
69	高遠道	諏訪形				○							○	○	○		
70	西春近南小学校 付近	〃											○				
71	安岡城	諏訪形				○							○	○	○	○	茶臼 宋銭 (2291)
72	城の腰	〃				○							○	○	○		
73	横吹	〃				○							○	○	○		(2292)
74	和手	荒井7891外				○							○	○	○	○	中央道
75	上手南	〃											○		○		
86	宮入口	〃				○							○	○			(2290)
77	寺村	原				○							○	○			
78	下牧	下牧		○		○											(2294)
79	下牧経塚	〃															経塚、鏡筒、刀子 黄環、西塚
80	山王	宮ノ原													○		

Ⅲ 調査遺跡

1. 和手遺跡

1) 位置 (図2, 写1)

遺跡は、伊那市西春近7891—7893番地にある(図2・写1)。西春近地区南端のカイツケ沢の押し出した扇状地形面が、西から南東にむかって延びているが、その扇中央部から扇端部にかけて和手遺跡が展開している。このあたりは地形全体が宮田村側へ傾斜しており、傾斜面一帯は桑園を中心とする畑地である。西春近山麓帯状遺跡群中の最南端に位置する本遺跡は、標高 680—685m を数える。

遺跡の南には、上手南遺跡・東には諏訪神社東に宮入口遺跡・その東方、部落中ほどの段丘南端が、中世の安岡城址で縄文中期・弥生後期・土師・須恵・灰釉・中世陶器・宋銭など多種の遺物が知られている。

過去の分布調査では、本遺跡で縄文中期土器・土師器・須恵器が出土する複合遺跡であると記録されていた。

今回の調査は、中央道が遺跡の中央を通過するため行われたものであるが、分布調査でおさえられていた範囲より北側に遺物が多いため、調査地区を広めにとった。45100をAA基点とし、CY32—65までグリッドを設定した。場所によっては地層々序も異なるが、遺構の集中したC区では、耕土・黒色土・黒褐土・黄褐色土の順の層序を示している。(辰野)

2) 遺構と遺物

ア 弥生後期の遺構と遺物

ア) 4号住居址(図11・79, 写2・5)

遺構 調査地の北縁台地上に位置する。近接の遺構は西に5号住居址、北に1号竪穴がある。プランは東西450cm南北400cmの隅丸方型で褐色土層の中へ掘込んである竪穴住居址である。壁は垂直に近いもので西と北は高く東と南が低い。西壁の一部に大きな石がはまり流れの跡を認める。床面は僅かであるが西より東へ傾斜していて固く叩いてあるが凹凸がある。又西側は流石の為荒れている。柱穴はほぼ等間隔で明確である。炉は中央より北寄の処に位置する。下部の欠損せるものを使用した埋甕炉で、内部よりは少量の炭化物と灰が出土した。其の附近床面は赤く焼けて固い。

遺物

埋甕炉に使用したものは弥生後期中島式のもので焼けてもろい(図79の2)。覆土ならびに床面上よりは、カメ(図79の1)、ツボ等いずれも破片であるがかなりの数が出土した。(根津)

イ) 8号住居址(図11・79, 写2・5・8)

遺構 遺跡北部の台地上にあって、4号住居址の南に位置している。砂質黄褐色土を基盤とし、東西400cm、南北380cmの経をもつ円形竪穴住居址である。壁は垂直に近い傾きをもって掘りこまれ、北西部は45cmと高いが、基盤の傾斜により南東部では12cmしかない。床面は、南側の一部に叩き状の堅い面も認められるが壁より中心に向かって、わずかに低くなっている。柱穴は5個で、壁に沿って等間隔に並んでおりいずれも15~20cmの深さである。住居中央よりやや北に寄った位置に埋燬炉があって、径20cmほどの底部を欠存した甕と・さらにそれを二重に包むように大きい甕と二個体分が使用されている。炉の内部には小さな土器片と木炭片が検出され、床面にも炉を中心にして炭化物が散在している。

遺物 炉甕(図79の6)のほか甕(図79の7~14)壺の破片が出土しておりいずれも弥生時代後期座光寺原式であるが、石器は出土していない。

イ. 奈良時代の遺構と遺物

ア) 2号住居址(図12・76, 写3・5)

遺構 西から東に強く傾斜する台地の南縁近くにあり、2~9号住居址の群の中では最も東の低い位置に占地している。西壁は3号住居址の貼床の下に検出された。410×490cmの隅丸方形竪穴住居址で主軸方向は東南東をさす。壁は褐色砂質土をやや斜めに掘りこんであり、壁は西30cmと高く東に低くなって東壁はなくなっている。西壁中央に石組カマドがあるが、石は3個しか残っておらずしかも動かされた形跡がうかがわれる。床面の状態は、砂質土のためやわらかく、不安定である。4支柱穴が対角線上にある他、住居址中央に直経30cm深さ25cmのピットが、カマドの南にも直経30cm深さ20cmのピットがある。

遺物 土器のみで石器はない。土器は土師器と須恵器である。土師器ではカメ(図76の1~5)が多く坏は小片が数点出土したのみである。須恵器は杯の小片である。

イ) 3号住居址(図13・76・77・203・221, 写3・4・5)

遺構 遺跡北部の台地上、2号住居址の西に隣接して、一部を切り合っている。北西より傾斜する砂質黄褐色土を基盤とする480×480cmの隅丸方形竪穴住居址である。壁はほぼ重直に掘りこまれており、西壁は30cm、北壁15cm、南壁14cmの高さをもつが、東壁は認められない。床面は平らで、東側の一部は2号住居址を埋めてつくられており、部分的に堅い面もみられたが、おおむね柔らかく、さらさらしている。柱穴は西側に2個と南東隅に1個の3個しか検出されなかった。西壁中央に接するあたりには石組粘土カマドがあるが、保存が悪く、崩れて粘土と焼土の混じりが床面に散在している。床面よりわずかに低い所には、70cmほどの範囲に、20cmほどの厚さで火床と思われる焼けが認められる。またその南にも別の火床と思われる焼けがみられ、壁の外へわずかにはみ出した状態であった。

遺物 カマド内より十字の墨書が入った土師内墨坏(図77の2・3)のほか、国分期土師甕(図76の6)壺、内墨坏(図77の1)と、須恵器の壺、坏(図76の4~6)、瓶小片が、また床面上カマド北側より敲打器1(図203の2)が出土した。鉄器は床面より釘・かすがいと思われる鉄片、紡錘車の軸と思われるもの(図221の1)の各1点が出土している。

(深沢)

ウ) 5号住居址 (図13・77, 写1・3)

遺構 台地住居址群の中央で、西に6・7・9号と奈良期の住居址が連り、東に4号弥生期住居址が存在し、南は8号弥生期住居址を1m下に見る斜面に、370×360cmの方形竪穴住居址で砂質褐色土に掘り込んでいる。壁は西で43cm、東で15cmで南北共傾斜で東に低い。壁面はほぼ垂直に掘りこんでいる。床面は貼床とは見えぬが、硬い粘質土層のためしっかりしている。西壁中央に近い床面に40cm四方で、深さ5cmの凹地があり、焼土と炭化物が黒土に混入して、落込んでいたが暖房用炉跡であろうか。柱穴は東北と東南の隅に二本検出したのみで、西側は発見出来なかった。カマドは東壁中央に石組粘土で比較的しっかりして残存している。3個の石を立てて支脚石として用いてそれを粘土で固めさせたが、天井石は床面に崩れている。

遺物 土器のみで石器・鉄器はない。土器は土師器と須恵器があり、須恵器破片は床面より、土師器甕(図77の7)はカマド内より、また土師甕・壺(図77の8)、坏の破片はカマド周辺より出土している。

エ) 6号住居址 (図12・77, 写1・3・5)

遺構 台地斜面の住居址群の上部で、西は7号住・東に低く5号住に接する。400×370cmの方形竪穴住居址で、西壁40cm、東壁14cmと自然傾斜の強い場所となっている。壁面は砂質褐色土層のため、良好だが、多少膨張状となっている。柱穴は一本確認できたのみで、床面の西側と東南の隅が大きな落込みになっているので柱穴はこの部方にあったものと思われるが、検出出来なかった。その外の床面は良好である。

カマドは東壁ほぼ中央にあり石組粘土カマドであるが、かなりくずれている。

遺物 床面には須恵器片が多く、土師器片は少なかった。カマド内に粘土に貼りつけたのか落込んだものか不明の状態です。須恵器片、土師器片が同量位出土した。土師器は壺(図77の9)、甕(10)、須恵器は高坏(図77の13)、坏(11)、蓋(14)、甕(15)である。(辰野)

オ) 7号住居址 (図14, 写1・3・4)

遺構 遺跡西端のCT36~39で、砂質黄褐色土を掘り込んで発見された350×310cmの隅丸方形プランの竪穴式住居址である。西から南東に傾斜する地形面に構築されているため壁は西高東低となる。砂質の土を掘り込んでいるため、床面はあまりよくない。北東隅に1本の柱穴が確認されただけであるが、南東隅に5個の自然石(うち1は砥石)が中を空ける形で置かれてあった。柱礎であろう。東壁中央に石組カマドがしつらえてある。

遺物 床面・覆土ともに発見されているが少量である。土師甕(図78の1)、土師壺(図78の2)、須恵埴(図78の3)、土師坏(図78の4・5)がある。柱礎囲みの中の砥石(図203の3)がある。

カ) 9号住居址 (図14・78, 写5)

遺構 遺跡西端のCW37~40で、砂質黄褐色土を掘り込んで発見された390×340cmの隅丸方形プランを示す竪穴式住居址である。7号住の北隣にあり、ほとんど同じ地形の上に構築されている。床面は比較的良好である。柱穴は北東と北西に1本づつある。西壁中央に石組粘土カマドが構築されている。

遺物 床面、覆土ともに発見されているが少量である。土師には図78に示した甕（6・7）、杯（8～10）、須恵杯（11）である。 (福沢)

ウ. 中世の遺構とその遺物

ア) 1号住居址 (図14・78・203, 写4)

遺構 台地の南縁に発見され、褐色土を掘り込んだ南北 370cm、東西 290cm程の隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。壁状態は地盤が西から東へ傾斜している為に、西は高く、東は10mにも満たなく、砂質褐色土の為にザラザラしており、常にくずれやすい。床面は褐色土の叩きで、多少の凹凸を認める。東壁、西壁近くに、多量の焼土と炭化物のブロックを検出している、これは一種の灰捨場のたものである。柱穴は不規則で、床面と住居址をとりまくようにして点在している。

遺物 土器、陶器、石器が出土し、その量は少かった。土器は床面出土の内耳土器片のみである。陶器は床面より古瀬戸 (図78の14) が出土している。両者とも細片であるために器形は判別できない。

石器 (図 203の1) は覆土より磨石がでている。

その他、金属器として鉄片がある。遺物からして、中世の住居址と思われる。

イ) 10号住居址 (図14・78, 写4)

遺構 1号住居址の北側に接近して発見され、南北 260cm、東西 310cm程の隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。壁は1号住居址と同様に西が高く、東が低く、常に崩壊しやすくなっている。床面は褐色土の叩きであり (但し、1号住居址よりも良好) 多少の凹凸を認める。西壁の近くに半円形の落込みが認められ、中より多量の炭化物と焼土を検出し、炭化物の中には櫃の実らしきものも発見された。

遺物 覆土より出土した内耳土器の破片 (図78の15・16) のみである。 (小池)

エ その他

ア) 1号竪穴 (図13)

遺構 東に傾斜する台地上にあり、調査区の北端に住居址とはやや離れて存在する。黒土層は薄く20cmほどで褐色土に至る。プランは250×250cmの隅丸方形で、褐色土を掘りこんでいる。壁は垂直に立ち、北に高く南に低い。床は軟らかく小さな凹凸がある。東側で耕作による攪乱がみられる。

遺物、土器のみで全て弥生時代後期の甕、壺片である。

3) まとめ

カイツケ沢の押し出しによって形成された扇状地上に営まれた和手遺跡では、弥生後期の住居址2軒と竪穴1基、奈良時代の住居址6軒・中世住居址2軒が発見された。

弥生後期の住居址4号は方形プランを示したが、8号住居址は円形竪穴プランを示す特異なものであった。ここから北に続く山麓線を600mほど行った富士山下遺跡でも円形プランの住居址が1軒見つかっているが、伊那谷ではこれを含めて3例になる。

奈良時代の住居址は6軒が群集して見つかっている。カイツケ沢に面して南に傾斜する、日当りのよい所に占地している。用地外西方に集落は広がるものと考えられる。

中世住居址は、カイツケ沢右岸になり、弥生・奈良住居址群の反対側にある。2軒が並んで発見されている。

同一遺跡における住居地区の占拠の仕方が、時代によって異ってくるのは興味深いことである。生活態の変化を物語るものだろうか。

4・8号住居址の遺物は、後期座光寺原式と中島式両方の要素を、文様構成の中へ含んでいる。甕埋土器でみれば、中島式通有の斜行短線文がめぐるか、3段で段数が多く、また波状文の段数も多い。8号住小形甕には口唇に刻目を加えている。伊那谷南部地方とはいささか異なる要素を含んでいるわけである。

(辰野)

2. 富士山下遺跡

1) 位置 (図3, 写7)

富士山下遺跡は、伊那市西春近7816の2-3番地に所在する。(図3写7)。諏訪形部落西方の藤山の東麓に出張る東向きの台地上に位置している。山際に接しているため傾斜も比較的強い。標高690~695mを数える。

藤山東麓に展開する斜面には、地形的には本遺跡に含まれるが、特殊な遺構ということで独立させた富士塚遺跡が北に、またその北側には藤沢川南岸まで延びる菖蒲沢遺跡が続いている。山麓の斜面を南へ行くと和手遺跡がある。

過去の分布調査では、縄文中期の土器・石器・須恵器・灰釉陶器が出ており、縄文中期から平安時代にかかる複合遺跡が包蔵されているだろうと結んでいる。

中央道が遺跡の中央を通過するため、今回の調査にたったが、分布調査でおさえられた範囲外でも遺物が採集されたので、広めに調査区を設けることにし、45570mをAA基点としてCO39-59までグリッドを設定した。遺跡の南・北側では地層々序に相異があるが、南側では・耕土・暗褐色土・ロームの順に堆積しており、縄文中期の石組遺構・土壇各1・弥生後期の住居址1・奈良時代の住居址1・土壇・ロームマウンドが発見された。

2) 遺構と遺物

ア 縄文中期の遺構と遺物

ア) 3号土壇 (図16・写7)

遺構 1号住居址に隣接してその北側に発見されたローム層を掘りこむ南北150cm、東西120cmの楕円形プランを呈する土壇である。壁は、北と西で垂直であるが南は緩やかに傾斜している。床よりやや浮いて径10cm程の花崗岩が置かれており、この周囲から遺物が出土している。遺物の出土状態から見て、一種の土器捨場であろう。

遺物 縄文中期加曾利E式土器の深鉢破片が出土した遺物の全てである。

(小池)

イ) 石組 (図17)

遺構 東に傾斜する台地の北縁で先端近くにあつて、2号住居址の東6mほどの位置にある。ローム上に炉と思われる焼土をとともう石組があり、これを中心とする径2.50mほどの円周上の南側に径15cm位の石が点々と並んでいる。石組を炉として住居址と考えたいが、壁および柱穴が見つからなかったこと、床

面は柔らかく不安定であること、土器の出土量が少ないことなど確認を欠いている。

遺物 石器と土器がある。石器は全て黒曜石の剝片でその出土量は多い。土器は縄文中期加曾利E式土器の小破片若干である。 (辰野)

イ. 弥生後期の住居址と遺物

ア) 2号住居址 (図15・80の17・97の1・2, 写8)

遺構 山際の東に傾斜する台地基部で、暗褐色土から切り込む円形プランの竪穴住居址である。径 4.2 m を計るもので、壁は西高東低になり、東で 9 cm ある。床面はタタキがきいて良好である。柱穴は 3 本が確認された。床面北西寄りに胴部だけを残す甕を埋め込んで炉がしつらえてあり、付近には焼土と灰炭が散乱していた。

遺物 床面・覆土ともに出土しているが、量はすくない。床面では炉ガメ (図80の17・写8の38・39) と、断面四角で長細い硬砂岩を使い、4面に凹みを入れた凹石 (図97の1) がある。 (根津)

ウ 奈良時代の住居址と遺物

ア) 1号住居址 (図15・80・81・90・214, 写8)

遺構 北東にかなり急に傾斜する台地の南縁頂部に発見され、ローム層を掘りこんだ 430×430cm の方形竪穴住居址である。壁は西に高く東ではなくなる。北東の隅には壁の代わりに用いたと思われる花崗岩が散在している。床面は褐色土の貼床であるが、部分的に剝落しており、カマド付近で最も堅く他は比較的軟らかい。柱穴は西側に 2 本検出できたのみである。カマドは東壁ほぼ中央にあり、石組粘土カマドである。粘土は南側は良く残っているが北はくずれており、カマド内側から補強に用いられたと思われる土器片が混入している。袖石は残存するが天井石はなく、煙道は不明である。

遺物 土器では土師器と須恵器がある。土師器は甕 (図80の1～6、図81の3) 内黒環 (図80の7～10) 須恵器は坏 (図80の11～14) 甕 (図80の15) 壺 (図80の16) がある。石器では石皿 (図90の17) がカマド横から出土している。 (小池)

エ 土壌とマウンド

ア) 1号土壌 (図16, 写7)

遺構 遺跡北東端で発見された、80×120cm、深さ60cm長方形の土壌である。壁は垂直に近く、底は平担。ロームの混じた黒褐色の覆土がある。遺物はない。

イ) 2号土壌 (図16・写7)

遺構 遺跡ほぼ中央の、奈良時代住居址の東側AG・AH55・56グリッドにかかって発見された。径 1 m、深さ40cmの円形プランを示している。壁面2段になっている。遺物はない。

ウ) 4号土壇 (図16)

遺構 遺跡南側の、弥生後期住居址の西側で発見された140×70cm、深さ56cmを計る長方形プランを示す土壇である。壁は垂直に近く、底は平に作られている。遺物はない。

エ) 1号マウンド (図16、写7)

遺構 遺跡の北東・1号土壇の南側にあり、170×90cm三角形・150cm径円形の2つのマウンドを連続させるもので、高さ20cmほどある。部分的に異なるが、ローム・ローム混り褐色土・褐色土・ローム混り黒色土・黒色土の地層々序を示している。三角形をなす北側のマウンドは西側は1.20m径・深さ35cmほどの土壇をつけている。遺物はない。

オ) 2号マウンド (図16)

遺構 遺跡北東端、1号土壇の西で発見された。2m方形・2×3mのマウンドを連続させて方形のものは1mの深さ30cmほどの壇をつけている。方形の方では、ローム・黒褐色土・黒色土・ロームの順に重ねられている。遺物はない。

カ) 3号マウンド (図16)

遺構 遺跡北端2号マウンドの西で発見された。200×125cm、高さ30cmのマウンドで、北側を270cm深さ140cmの壇状にくぼめてある。マウンドはロームの上へ褐色土、その上へロームを重ねるものである。遺物はない。

キ) 4号マウンド (図116)

遺構 遺跡の中央奈良時代住居址の北隣で発見された140×80cm楕円形のマウンドで、北側に130×60cm・深さ20cmほどの壇をもっている。遺物はない。(福沢)

3) まとめ

藤山の東麓に広がる台地の上に遺されていた富士山下遺跡では、上述のように住居址2軒、土壇4・マウンド4基が確認された。この遺跡で注目すべきことに、弥生後期の住居址の問題である。それは弥生後期中島式期に属する円形プランを示す竪穴の形態についてである。円形プランを示す竪穴住居址は今の所下伊那で1例、中央道本年度調査の和手遺跡8号住居址がそうであり、都合伊那谷で3例を数えるだけである。一般に上伊那地方での弥生集落の調査例が少ないこともあるが、弥生時代の住居址発見数は僅かである。従って発見例の少ないものの中で円形プランのものをとり出しているの考察は問題を残すが、伊那谷を全体として見た時に貴重な資料である事に誤りはない。集落の中の特別な家であったかも知れない。時期不詳のマウンドがあるが、マウンドの北側に壇を付属させるものが多い。それらの置かれた地形にもよるが、マウンドの裾に壇を持つと言うべきか、壇がマウンドを付属させていると考えるべきか今後の課題である。

(小池)

3. 富士塚遺跡

1) 位置 (図3, 写9)

富士塚遺跡は、伊那市西春近7813の2・3番地に所在する。(図3・写9)西春近地区最南の諏訪形部落のある一帯は、西山の山麓が東にむかって裾をのぼし広大な扇状地形になっており、この扇状地形面は西山からの幾条かの沢水に浸食されて、縦長のいくつかの台地々形に分けられる。藤沢川を北限として、菫蒲沢・富士山下・和手地籍などが北から南へと続いているわけである。

富士塚遺跡はこの縦長に並んだいくつかの台地のほぼ中央を占める位置にあり、西山裾近くの藤山の小尾根根部にあり、先端を遺跡の北側・菫蒲沢地籍との堺界をなす小川によって断ち切られたために、東からみれば小高くもり上った残丘状の地形景観を見せている。つまり西は藤山の裾に接し、東にむかって展開する扇状地形面を見下ろす丘が富士塚遺跡の地形となる。標高 690—695m を数えている。

ここは先きにもふれたように、丘麓を切って流れる小沢の北は、藤沢川南岸までの広い範囲に菫蒲沢遺跡が続き、また丘南の凹地を堺に富士山下遺跡が広がっている。したがって自然地形面からの観察でいえば富士山下遺跡の中へ含められてもよいわけであるが、浅間信仰にまつわる祭祀遺跡であるという分布調査所見にもとづいて、富士塚遺跡として独立させたと聞いている。

このあたり一帯の山麓近い所は、桑園・畑地となっているが、第二次大戦中に開拓された所で、それ以前は山林・原野であった。

今回調査では、富士山下遺跡との関連もあるため、実際は富士山下遺跡内に入る 45660m を基点A AとするグリッドをB Y 38—60まで設定した。残丘状に張り出す山麓部と凹地という微地形上の起伏が激しいため、地層々序もまた複雑であったが、山際では山麓からの転石礫を多く含む灰褐色土が30cmほどあり、その下に20cmほどの黒色土、その下に20cmほどの褐色土があり、ロームに続く。一方丘端では褐色土の下が軟質ロームになり、数10cmで硬質の中期ロームに移行する層序となっている。

発掘は、分布調査所見にもとづき、丘端を中心にして浅間信仰にかかわる遺構・遺物の検出に期待がもたれたのだが、丘頂では時期不詳の土壌1基がみつかるにとどまった。山際で横穴式石室1基を新しく発見することができた。

報告は富士塚遺跡で一括する必要があるため、土壌と古墳に小項目で分けることにした。(唐木)

2) 遺構と遺物

ア 1号土壌 (図17)

遺跡の北部に位置する、通称富士塚と呼ばれている小高いローム丘のほぼ頂上に発見されたプランは

150×155cm、深さ70cmの円形すり鉢状を呈し、壁は緩やかに傾斜して、底部は狭い。覆土中にはこぶし大の礫が3個と、小さい木炭片が点々と混入していたが、遺物は認められない。また、富士塚信仰に結びつくようなものも認めることはできなかった。

イ 富士塚古墳

ア) 古墳の築造 (図18、写10・11)

富士塚古墳は、150×540cmの長方形プランを呈す横穴式石室をもち、N15°Wにその長軸をおく。西側の山麓裾が平坦になる所、小高く東に突出する丘の基部が、東南東に向かって緩やかに傾斜するあたりにある。戦時中の開拓で地表は平らにされて桑畑となっており、今回の調査まで古墳であることが知られていなかったところで、墳丘の状態などは確認することができない。また天井石、側壁の3分の2、羨道の大部分は失なわれている。

石室付近の地層を知るため、奥壁から長軸と平行に1本と、それに直交するように両側壁から1本ずつ計3本のトレンチを掘った。東壁側のトレンチでは側壁の裏に詰められた黒褐色土の下に、古墳構築前に地表面をなしていたと思われる、厚さ20cmの黒色土層が認められた。黒色土の下は20cmの褐色土で、さらにその下はロームとなっており、ローム面は長軸に沿って約5°の傾斜をもっている。東壁から約3m離れたローム中に褐色土の落ち込みがみられるが、落ち込みは連続しておらず、またその褐色土も、掘込みの基盤をなすものとの続きであることからして、周濠とは認められない。以上、層位から推測すると、わずかな傾斜地を利用して長方形に掘り込み、石室を構築した後、土を盛り、墳丘を作ったものと考えられる。なお側壁は原地表面より15cm高い位置まで残されているので、天井石の置かれた位置はさらに高くなるはずである。

掘り込みは玄室中央部で深さ70cm、約50°の傾きをもって掘られ、底部の巾は200cmある。奥壁側はほぼ垂直に近い急傾斜で掘られ、その深さは原地表から計ることはできないが、ローム面より70cmをみた。また奥壁は床面よりさらに30cm深く掘り込んで据えられている。羨道部ではローム面よりやや低いレベルでたたき状の床を認めるが、耕作により掘り込みの様子は定かでない。

石室構築に用いられた石は、主として花崗岩の自然石で、大きいものは一辺が70cmを越えるものから、20cm程度のものであって、大きさは一定しない。奥壁には最も大きく偏平な石が用いられ、側壁は一段目に、奥壁から閉塞部に向かって、大きいものから順に据えられ、2段目からは大小さまざまな石が不規則に積まれている。閉塞部近くの側壁一段目の石は抜き取られて両側とも一個ずつ欠いているが、ここにもかなり大きい石が立てられた状態で置かれていたのでないかと想像される。

石室近くの畑には花崗岩の自然石で築かれた石垣があるが、これは天井石や側壁の一部をなしていたものが開拓の際抜き取られ、石垣に利用されたと考えられる。大きいものは径100cmを越えるものもみられた。

トレンチにおいて、裏積石は認められず、黒褐色土が詰め込まれているだけであった。また葺石に利用されたような礫も、付近からは検出されなかった。(深沢)

イ) 内部構造 (図18・写10・11)

長軸方向N15°Wを示す長方形プランの横穴式石室で、残存する石室平面の計測値は、奥壁から羨道部西側に1段だけ残る壁石までが5.40m、そのうち玄室部は3.60m。奥壁での棺床巾は1.40m、閉塞部で1.20mを計る。羨道部は西側の壁体が部分的に残るところから測ると閉塞石まで1.50mある。高さ90cm

壁体は、奥に70×110cmを最大とする3枚の扁平・野面の花崗岩を立て、両側1段は羨道部方向へむかって小さくなる根石を並べて基礎とし、2段以上は扁平な大ききても70cmほど、それ以下の野面石を小口積みにしていくが、開拓の際の削りとりや、耕作時の移動によって4・5段までしか残されていない。

いずれにせよ比較的扁平・小形な自然石をそのまま使用しているところに特色がある。

棺床面は、大は50cm、小は5cmにも満たないさまじまな、しかし一面を平にする礫の敷きつめになっており、かなり几帳面な作りといえる。棺床は2コの閉塞石によって途切れて羨道部へ続くようになる。

閉塞石の両側には、側壁体部の根石が抜きとられた痕跡がある。ロームへ落ち込む黒褐色土がそれを物語っていた。

開拓、耕作による破壊が、天井石、側壁、羨道部に及ぶため、内部構造全体を復元的に把握することが不可能であったが、残存部でいえば以上のような構造を示しており、ちなみに設計企画が高麗尺を基本としていたとするならば、巾4尺、長さ10尺の玄室プランであったことになる。

ウ) 遺物出土状況 (図18・写10の44～46・11の48・49)

遺物は図18の出土分布にみられるような状況のもとで検出されている。奥壁近く、敷石の床に密着して尖根鎌が11本、(写11の48・49)平根鎌が2本。鎌束の反対側で須恵瓶、壺。土師高坏が並べられており玄室中央よりや、閉塞石寄りにガラス玉47コと、金鏢3コが集中して発見されている。玄室内では以上の集中する遺物は、棺床面ないしはそれよりもわずか高いレベルで出土し、他は高いレベルで散在していた。羨道部から須恵(写10の44・45)と刀子が出土しているが、刀子(図216の3)と須恵(図83の6、写13の59右)が、当古墳発見の契機となったものである。

当初は、富士塚(浅間信仰の基壇)としての祭祀遺構発見に意が集中していたため、たまたま羨道部と後になって確認された石積の一部が現われたのであるが、その付近から須恵器坏が出土した。坏形をしてはいるが、よく観察するとその底部は通常のこの時期の坏とは異なる造りになっており、胴部にみられる一条の沈線は高坏に多い例でもある。とすれば、本来は高坏として挽き出されたものであるが、何らかの意図にもとづき、脚部をつけずに底部成形がなされた特殊な器種とみるべきである。しかも須恵器であってみれば、近世隆盛をみた浅間信仰とは結びつかない。ほどなく付近から刀子が1本検出されるに至り、特殊な須恵器と刀子・石積遺構を総合すれば古墳ではないかとの結論を得たのである。いずれにせよ、写10の44・45でみられるように、閉塞石の元に置かれている須恵器は、奉斎の状態をそのままに示しているものとして興味深い。

エ) 遺物 (図83・216・写11～13)

遺物には、金属器類の刀子・鏝・鎌・轡・金鏢・ガラス小玉。土師器・須恵器の土器類とがある。

刀子（図216の2～4）。それぞれが完全でないのではっきりしないが、2・4が玄室内で検出されたもので、刃区の鋸ぎがなめらかになされ、全体からすれば角棟の重ねが厚い、平造のものである。ともに莖元付近に着柄時の木質を少量付着させている。4は羨道部で検出されたものであるが、先幅を細め、フクラ枯の鋒を持つや、大形の刀子である。

鑑（図216の1）。整理段階に至って、中空洞の鑑であることが判明した。錆化が激しく、発掘時には鉄塊であった。

鎌（図216の5～17、写12の53・54）。尖根式と平根式がある。尖根鎌は5～12に鋒部があり、これからすれば鑿箭式である。13～15については不明。平根鎌には、両丸造腸袂柳葉式の16。両丸圭頭式の17がある。

轡（図216の18、写11の50）。轡金具の一部、馬の口中にはいり中央でくみ合わせる2本からなる銜が素環状の鏡板にとりつけられた形状で発見されている。引手は錆腐消滅したのか、当初から欠損していたのかさだかでない。銜12.5cm、素環鏡板は4cm径を計る。

金銀（図216の20～22、写12の51）。3点あるが腐食が著しく、はっきりしない面もあるが、銅芯薄金板でつつんだもののように観察される。欠損部からみれば中空のようにも見えるが、銅芯がさきに腐食したものである。

ガラス小玉（図216の23～69、写12の52）。総数47点になる。便宜的に小玉と呼ぶが、2～4mm径、いくつかの形状がある。216の37・39・64などはあるいは管玉の範疇に入るかもしれない。紺・青色が多く、緑・黄色が続き、朱色に近いものもある。

土師器（図83の1、写13の60）。玄室奥壁の元で横転して発見された高杯である。比較的浅い杯部内面は黒色磨きこみがなされている。脚部が高く細い。

須恵器（図83の2～6、写13の55～60）。2～4は、奥壁の元へ土師高杯とともに並べられていたもの。5・6は羨道部で発見されている。2・3は写13の55～57でみられるように、自然釉の厚く流れ落ちる美しい瓶である。胴部は別々に挽き出された半球形椀状のものを中央で接合して後に口辺以下と合す成形法が観察できる。2の底辺には焼成前につけられた窯印と思われる刻印がある。写真でもわかるように窯底に置かれた際の支え粘土が付着したまゝになっている。4は直口壺。できればは良い。5は罎、6は先きにもふれた特殊な、おそらくは祭祀的な意図を持つ杯型須恵器である。(唐木)

3) まとめ

富士塚遺跡では、遺物を伴わないために時期不詳の土壌1基と、封土・石室の天井・側壁と羨道部をかき取られた横穴式石室を調査することができた。手がかりのない土壌は、関係項にとどめ、ここでは古墳の調査所見を述べ、まとめにかえたい。

新発見のものであるから遺跡名を冠する必要がある。そこで本跡を富士塚古墳と呼ぶことにする。

富士塚古墳は、西春近南端、諏訪形部落西方の藤山々麓に接して張り出す残丘の上にある。今回の中央道用地内調査の折りに新しく発見された横穴式石室を持つ古墳である。封土・石室の一部は欠き取られており、その全貌はつかめなかったが、得られた所見のいくつかは以下のようなものである。

1つは、比較的傾斜の強い山麓部に築かれた古墳封土は、当然置かれた周囲の地形・気象条件などにも関係するであろうが、意外と崩れやすいのではないかということである。残されていた石室長軸5.40m、短軸1.40mの平面形を示すものであってみれば、そう大きなものではないにしろ、すくなくとも短軸の長さ以上の高さを持つ石室空間が予想される。だとすれば、天井石を覆う封土は現地表より1m以上なくてはならぬことになる。開拓・耕作による表土の移動だけでなく、すでに開発以前に崩れていたと考えるのが妥当であろう。古墳伝承もないところからみれば、それもかなり古い時期に進行したものとされる。

2つは、石室構築に特徴があったことである。側壁最下段の石積は大きな材を使い、それ以外上段は、比較的小形で、角のある扁平な野石を小口積みに、また一方床面を全体的に平坦になるよう吟味して上面のそろった石を敷きつめるなど、かなり几帳面な構築がなされていた点である。

3つは、遺物の出土状況についてである。奥壁に接して遺体を仰臥伸展で安置したとすれば、頭部右側に根が出るように、つまり頭の向きに直交するように10本の尖根鐵束があり、左側に土師・須恵器類が並べてあったことと、玄室中央よりや、手前に金銀・ガラス小玉が集中していたことである。ともに床面に密着するか、わずかにレベルを高める程度であるから、後の移動は考えられない。とすると、攻撃用武器を身近に引きつけた武人と、金銀と数10コのガラス玉で身を飾った貴人が葬られた石室を持つ墳墓であったことになる。

4つは、構築・使用の時期にかかわる問題である。石室構造は、3.60×1.40mを計る平面形を示す石敷床の玄室と、閉塞石をはさんで1.50×1.40m以上の平面プランを持つ羨道部がある。比較的小形の材を積み上げる小じんまりした横穴式石室の形態はすでに末期古墳の相を示すものである。一方検出された刀子や飾身具なども末期古墳の副葬品にふさわしいし、土器類を目安にすれば、7世紀も後半に帰属する古墳として理解することができる。

被葬者をとりまく地縁を想像するに、1つには石室に使用した材は、角のある山石であった。ここで、利用できそうな転石の集った川を予測するとすれば、北の藤沢川が約1km余で最も近い。しかし藤沢川の河原石は使われていない。被葬者をとりまく地縁の北限は藤沢川までは延びていなかったとするのは飛躍であろうか。古墳北側には中央道用地内調査で11軒の8世紀代住居址を出した広大な菖蒲沢遺跡があり南接する富士山下遺跡・和手遺跡でもほぼ同時期の住居址を発掘している。他に諏訪形地籍に限っても、土師・須恵・灰釉など、当古墳構築の時期から平安時代にかけての遺跡は、古墳を頂点とするようにしてその下方に8ヶ所を数えることができる。被葬者をとりまくいろんな問題はさらに検討されるべきである。

(宮沢)

4. 菖蒲沢遺跡

1) 位置 (図4・写14の61)

遺跡は伊那市西春近地区、原7723・7806・7791～98番地一帯にある。藤山山麓に発達した扇状地にあたり、遺跡は西春近諏訪形部落西方、標高700m台地一帯約3度の傾斜を有して展開する広大な遺跡で、北側には東流する藤沢川があり、南方一帯は富士山下遺跡が隣接している。山麓との境には今だ鹿垣が現存している。中央道は遺跡の西縁を南北に横切っている。この附近一帯は桑畑が多いが東面には雑畑も散見する。分布調査では台地一帯に縄文中期を主体とした土器・石斧・土師・須恵・灰釉など夥しい出土品を見る。

層位は場所によって変化があり、耕土があり、黒土・褐色土と3層から6層位まで重なったところもある。相当古い時代に何回もの押し出しの跡を示す。グリッドは45760mを基点としてAA-MH38～63にかけて発掘をした。

(根津)

2) 遺構と遺物

ア 奈良時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図20・84・90・写14・16)

遺構 台地の南縁東端に単独に発見され、褐色土を掘り込んだ南北390cm、東西450cm程の隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。壁の状態は南に緩傾斜する地形の為に、北壁がやや高く、南壁は低く、東壁はわずかな立ち上がりしか認められない。床面は粘土まじりの褐色土の貼り床で、中央に直径60cm、深さ40cm程の焼土と木炭まじりの黒土のつまった大穴がある。これは大きさや位置からして一種の灰捨場であろう。柱穴は各コーナーに4本の支柱穴と北壁と南壁のほぼ中央から外に向かって斜めに穿たれる支柱穴2本が存在している。カマドは東壁中央に接する石組粘土カマドで、土師・須恵器片が補強の為に貼り付けられたかたちで粘土中に含まれ、煙道の一部が東壁外側へ貫通している。

遺物 須恵器の壺・坏(図84の6・7)、土師器の甕(図84の1～4)、内面黒色の坏(図84の5)がでている。石器は砥石(図90の1)がある。金属器は鉄鏃の茎が3点出土している。

(小池)

イ) 2号住居址 (図21・84 写14)

遺構 ゆるやかな東向斜面の中腹にあり、6号住居址の南15mに位置する褐色土を掘りこんだ不整隅丸方形の竪穴住居址である。規模はおよそ350×330cm、主軸方向は東南東をさす。壁は東壁の一部が耕作によって攪乱されている以外はよく残っており、ほぼ垂直にほられている。カマドは西壁中央にあり、石組カマドである。その大きさは170×70cmで、残存状態はあまりよくない。柱穴は対角線上に計4本あ

たものと思うが、南西隅では検出できず3本が確認できただけである。床面の状態は粘土混り褐色土をたいたてつくられており、壁ぎわを除いては非常にかたい。

遺物 土器のみで石器は出土していない。土器はいずれも小破片ばかりで、土師器甕（図84の8・9）
坏・須恵器坏（図84の10）がある。大部分カマド周辺からの出土品である。（唐木）

ウ) 3号住居址（図20・88・90・写14）

遺構 台地のほぼ中央部で、6号住居址の東側に発見され、褐色土を掘り込み、南北310cm・東西350cm程の隅丸方形プランを呈す竪穴住居址である。壁状態は西と北は存在しているが、南と東は無い。おそらく耕作の際に破壊されてしまったのであろう。床面は貼り床で、西は堅く、東は軟弱である。西に寄った所に拳大程の円礫や角礫が散在していた。この石は焼けて赤く変色しており、おそらくカマドの残骸であると思われる。

遺物 土器としては土師器の甕（図88の1～5）・須恵器の坏（図88の6・7）、石器としては打石斧（図90）が出土している。（小池）

エ) 4号住居址（図21・85・90 写15～17）

遺構 山麓の緩傾斜地に存在する遺跡中央寄りの住居址群の東南縁で、用地の東端で現在桑畑の中に、表土より約60cm掘り下げた褐色土層に掘り込まれた460×430cmの方形竪穴住居址である。壁は垂直に近い掘り込みで、西壁は30cm、東壁は10cmで南北に等傾斜して東に低くなっている。南壁は不明確で不規則である。床面の状態は中央に部分的に二ヶ所程貼り床と認められる硬い面があるが、全体としてはデコボコである。柱穴は4個発見されたが西南の主柱穴は西壁に密着している。南壁の東端に壁を切り込んで主柱穴よりやや大きいピット35×30cmがあるが、貯蔵穴かと思われる。カマドは西壁中央に壁に切り込んでおり、石組粘土カマドである。石組の右側は支脚石が正確に三ヶ並び、左側は2個で少しずれている。カマド内の粘土に張りつけた状態で土師器片が出土した。カマド周辺には須恵器の厚手の破片が集中して出土した。カマド内の焼土の厚さは4cm位である。

遺構 土師器の甕（図85の1～3）はカマド内に集中し、床面からは坏の部分のみ。須恵器は甕（図85の4・5）・壺（6・11）・坏（7～10）がある。その他鉄滓片2点・縄文時代の石斧（図90の3～6）が出土した。（辰野）

オ) 5号住居址（図22・86 写15）

遺構 調査地の中央用地西端に位置する一群の一つである。プランは東西710cm・南北570cmで、褐色土層内に掘り込まれた隅丸方形である。壁はほぼ垂直で全周しているが、北と西が高く東は低い。床面は平均6cmの貼り床で多少の凹凸があり、ところどころ剥脱があるが概ね良好である。中央に170×70cmの楕円形の凹があり付近は赤く焼けてかたい。凹の内部より少量の灰と炭化物が検出された。柱穴は4本等間隔で、その規模はかなり大きく深い。カマドは西壁の中央に接し数個の石で組み粘土で固めてある。煙道は一段と高く壁外へ出ている。袖部上半の粘土上に須恵器片と土師器片が多量に補強のため貼り付けてある。袖石の前部は灰溜りがあり、内部は赤く焼けて炭化物と灰を多量に検出した。

遺物 覆土及び床面上より土師器の坏2ヶ体分破損して出土した。またカマドに貼り付いて須恵器甕・土師器甕の約2ヶ体分出土したが、いずれももろくなっていた。86図の1・16は土師器甕・2～11は須恵器坏、12～14は須恵器蓋及びそのつまみ、15は壺・17・18は甕である。(根津)

カ) 6号住居址 (図22・84)

遺構 遺跡のほぼ中央、2号住居址の北に位置し、耕作土下の砂質褐色土を基盤とした竪穴住居址であるが、現在の溝で切られ、南側の3分の1程は欠損している。プランは隅丸方形で、東西に445×380cmだけが残されている。壁は北側だけが完全で、南壁および東西壁の一部は失われており、その高さは西壁24cm、東壁8cmとなっている。柱穴は北側に2個しか確認されない。床面は一部に堅い面も認められるが、概して柔らかくさらさらしている。また北東側柱穴の内側に径50cmほどの浅い凹がある。カマドは西壁に接して北から2mほどのところにあり、石組粘土カマドである。25cm大くらいの石が2個あってまわりを粘土と土器片で固められていたが、原形は留めていない。二つの石の間には焼土と木炭の残存がみられた。

遺物 量は少なく、国分期土師甕(図84の11)・坏(12・13)の破片だけである。(深沢)

キ) 7号住居址 (図23・85・221、写15～17)

遺構 調査地中央の一群の一つである。近接せる遺構は北に10号住居址・東に8号住居址がある。プランは東西395×南北390cmの褐色土層を掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址で、壁は垂直で、西が高く東は低い。また東壁の一部は耕作により攪乱されている。床面は平均6cmの貼り床で中央にほんの一部残存するほかはあまり良くない。中央より東寄り床面に径50cm大の焼土が固くなってあり、その付近より炭化物が少量検出された。柱穴は4個あり、うち2個は北壁外に掘ってある。また西南隅の柱穴内より10cm大の石が4個検出された。カマドは西壁中央に接してつくられた石組粘土カマドである。前部には補強のため土師器の甕の破片約1個体分が貼り付けてあった。袖石の前は灰溜りがあり一面赤く焼けている。内部より少量の炭化物を検出した。

遺物 カマドに貼り付けられた土師器の甕・坏・碗はいずれも破片である。図85の12及び写17・図79は土師器甕・図85の13・14は土師器坏で、14は内面黒色で刻字がみられる。図221の3は鉄製円板様のものである。(根津)

ク) 8号住居址 (図25・87・90 写15～17)

遺構 遺跡中央寄り住居址群の東端で、用地ぎりぎりに検出された。東西450×415cmの隅丸方形竪穴住居址で、黒褐色土層に掘り込んである。西は7号住居址に隣接し、9号住居址、10号住居址と続き、南に4号住居址に近い。壁は西17cm、東9cmで垂直に削り、壁面は良好である。床面は貼り床らしき部分もあるがさだかでない。中央部分は硬い面もあるが、壁ぎわに軟弱な部分があり良好でない。柱穴は3個ほど等間隔で発見され、東南の柱穴が少しづれて発見されたカマドは西壁中央に密着して、石組粘土で造られ、天井石が床面に崩れ落ち、支脚石が二コ立っているが、外の石は粘土に埋没した状態である。カマドの中に、土師器の壺が大きな破片となって重なっていた。更にカマド周辺に土師器片が散乱し、カマド焚口附近に3

cm位厚く焼土が広がっていた。壁外の東北45cmに径85cm、深さ40cmのピットがあり、関連施設であろう。

遺物 土師器の壺(図87の1・写17・78)、甕各1点の外は出土量が少なかった。また打製石斧(図90の7~10)も出土した。(辰野)

ケ) 9号住居址 (図24・85・87・90、写16)

遺構 住居址群の北西端に位置し、黒色土を基盤とする570×485cmの隅丸方形竪穴住居址で、その東には10号住居址が隣接し、一部切り合っている。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、高さは西側26cm、東側11cmと緩やかに傾斜しているが、東の一部は切り合いのため壁は不明。床面はロームのはり床であるが、剥がれたところもあって、いくらか凸凹している。またカマドの灰と思われるものが床面中央にまで散乱しており、一部には焼土も検出した。柱穴は対角線上に4個あって、南西側の1個には土師器片が少量入っている。カマドは東壁の中央、10号住居址の床上に構築された石組粘土カマドで、比較的大きな石が使用され、焼土の範囲も広い。石組補強のため、粘土とロームで固められており、さらに厚手の土師・須恵片がはりつけてあった。

遺物 国分期土師甕(図87の2~8)と須恵器(図85の15・16)及び打製石斧(図90の11)が出土した。(深沢)

コ) 10号住居址 (図24・87・221、写16・17)

遺構 台地中央東縁一群の一つで、7号住居址の北に位置し、西側の一部は9号住居址と切り合っている。東西360×南北475cmで、褐色土層を掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址である。壁は垂直に近い。北と西は残るが、東・南は不明である。床面は西より東へわずかに傾斜し、平均6cmの貼り床であるが、一部剥脱のところがありあまり良くない。柱穴は3個で不等間隔である。東壁中央部に211×147cm・高さ26cmの焼土塊があり、一部壁外へ出ている。この付近は一面赤く焼けて固くなっている。相当の火力を使用した如く見受けられる。この焼土塊北側の床面より大10cm~小4cmの鉄滓が出土した。

遺物 鉄滓が覆土中より出土し、南側床面より欠損せる刀子、中央床面上より鉄鎌(図221の4、写17・18)を検出した。また焼土塊西側覆土より須恵器杯(図87の9)・蓋(10・11)・甕(12)、土師器はいずれも破片で少量出土したのみである。(根津)

サ) 11号住居址 (図25・88・90・221、写15・17)

遺構 10住居址を中心とする住居址群がある浅いゆるやかな谷から北に登る緩傾斜面の中腹にあり、北ではロームを掘り込み南では黒褐色土中に床を貼った隅丸方形竪穴住居址である。その規模は350cm×330cmで、主軸方向西である。カマドは東壁中央やや南寄りにあり、粘土カマドではあるがその表面に扁平な小礫をはりつけている。焼土はかなり広く分布している。柱穴は確実に認められなかったけれども、住居址壁外3ヶ所にあるピットがそれではないかと考えられる。しかしこの遺跡では壁外に柱穴をもった住居址の例がないこと、もう1ヶ所に4本目の柱穴が見つからないこと、深さが浅いことを考えればそうではないかもしれない。床面上には、カマドの南に焼土と土器片が混じってつまっていた直径50cm・深さ45cmのピットが、カマド前には焼土と灰がつまっていた直径60×90cm・深さ10cmの大穴がある。

遺物 土器・石器と鉄器がある。土器は土師器甕（図88の8～13）である。いずれも口縁部近くの破片である。石器は南壁際に河原石16コが集めてあり、特に使用痕の認められたのは砥石（図90の13）1点だけであった。そのすぐとなりから刀子（図221の5・写17・82）が1点出土した。（唐木）

イ その他の遺構

ア) 土壇（図26・90、写15）

1号土壇 遺跡南端の1号住居址北側のAK59グリットで発見された。110×65cm・深さ65cmの長方形をなす。南西に接して60×45cmのピットがある。図90の15の定角式磨製石斧がみつかった。

2号土壇 遺跡北端、藤沢川に面する北斜面MB・MC37-38で発見された。140×85cm・深さ50cmで楕円形をなす。遺物はない。

3号土壇 遺跡北端、2号土壇の南側LV・LW39-40で発見された。165×110cmの楕円形をなしている。遺物はない。

4号土壇 遺跡北端、2号土壇の北ME37-38で発見された。175×120cmでほぼ楕円形で、地山に含まれる円礫が壁面などに顔を出している。遺物はない。（福沢）

イ) ロームマウンド

ロームマウンド1（図26） 調査地の中央、小台地の南先端に位置する。地形は西から東へかなり傾斜を示す。近接の遺構は南下に1号住居址がある。遺構は東西240×南北160cm・高さ110cmで、東側は巾30cm・深さ20cmの溝が一部ある。形状は楕円形で固い。頂部は黒土が混っていて表面は凹凸が多い。東側の一部は褐色土とロームの混合で10cm大のロームブロックがところどころにある。底部はロームでしかりしている。南側基盤上に厚さ30cmの黒土が帯状に北に向い斜に基盤下20cm、長さ120cm進入している。マウンド東面をカットしてみたら黒色帯状の下部は軟く、その中から縄文中期の土器片が少量出土した。この土器は小破で磨耗が著しく文様はよくわからない。帯状の下より頂部までは約130cmで、頂壁は中心より南寄りである。溝中より加曾利E式土器破片が少量出土した。これらも磨耗が著しい。遺構付近からは縄文中期の土器片・打石斧の欠損せるものが出土した。

ロームマウンド2（図26） 調査地の中央東縁に位置する。地形は西より東へ傾斜している。地層は耕土、褐色土、黒土、褐色土、ロームとなり、明らかに流の痕跡を認める。近接の遺構はない。マウンドの頂壁は地表下93cmで、東西270×南北190cm・高さ52cmの楕円形のものである。傾斜は4周ほぼ同じで、上部は平である。西側の一部は黒土が混って軟く不安定である。北側は巾40cm・深さ30cmの溝が半周している。東には巾30cm・深さ30cmの溝が北より南に走っているが、この溝は遺構と関係ないもので、南はグリット外へと延びている。この溝と北側の溝は切り合っている。小さい砂礫が溝内に残存して流れの跡を認める。砂礫に混って縄文中期加曾利E式の土器片が磨耗して少量出土した。（根津）

ウ) 集石（図26）

遺構 5号住居址の北側に発見され、ローム層面にそって握り拳大から人頭大程の花崗岩を南北120cm

東西 150cmの範囲に長方形で、かつ平坦に敷つめてある。遺物はない。

(小池)

3) まとめ

用地内面積17000 m²に達する広い菖蒲沢遺跡は藤沢川が押し出す扇状地形面上に展開する北側の台地と、中央の凹地と、南側の富士塚遺跡を見上げる格恰で南東に緩く傾く斜面とからなっている。地形面からみれば、3つに分けることができる。遺構は南から調査をすすめた関係から、南端で奈良時代の住居址1、時期不詳の土壇1、マウンド2。中央の凹地を中心に奈良時代の住居址10軒、集石1。北の藤沢川に面する台地斜面で時期不詳の土壇3基が発見された。

遺構関係で注目したいものに、集落構造の問題がある。大型の5号住居址をめぐるように9軒の住居址が馬蹄形状に構築されている。2・3・6号住が南側に、4・7・8・9・10号住が東側に、11号住が北側に配置される。偶然かもわからないが、中央5号住を中心にするものと、すこし離れる南側や、北側の住居址とでは、遺構と遺物の出土量が多少ちがう。中心から離れる方がすくなく、また住居址の規模も小さい。また10号住居址の場合は、床面東側に厚い焼土層を土壇状にくぼめた中に含む円形の火床があり、その上部へは砂質の粘土が比較的広い範囲にわたって置かれており、通常のカマドとは異なる様相を示している。少量ではあるが鉄滓も出ている。このような状況下で全体をみると、5号住を中心とする住居址のかたまりは、構成する10軒の家々がそれぞれに関連し合っているように思われるのであって、つまり、特別に大きい家を中心に、大きな火を燃すために必要な壙状の火床を持つ家、中心から離れ規模の小さな家々が馬蹄形に配置されていたことになる。単位集落の構造を考える資料として貴重であろう。

北側の藤沢川に面する斜面でナイフ型石器と刃器が1点ずつ発見されている。(図 214の1・2、写17の83) ナイフは基部に丸味をつける茂呂型・黒曜石製のものである。これら旧石器を含む中心は用地西側に中心があるように思われる。

(根津)

5. 南丘A遺跡

1) 位置 (図3、写29)

遺跡は伊那市西春近4105番地一帯にある(図3、写29)。権現山の山麓から出る犬田切川と、城見や城から流れ出す猪ノ沢川をつくった大きく広がる木裏原扇状地は、北半分を北丘といい、南半分を南丘と呼んでいる。南丘A遺跡はこの木裏原扇状地の南半分の中の、さらに南の半分に当たり、南側は猪ノ沢川が扇状地形を浸しながら東流して地形を区切り、北側は木裏原全体の背になる台地が西から東に長く伸びるがその台地の頂部に近い南傾面まで、また西は山麓部まで、東は傾斜の続く扇中央部にまで遺跡は広く長く展開しており、標高は720~740mの間にある。

過去の調査所見では、開拓時などの折り、縄文住居址、土師、弥生炉ガメ、須恵器などの発見からして縄文から土師、須恵器までを出す重要な複合遺跡であるとの記録がある。

今回の調査は、遺跡中央の北側背稜部が猪ノ沢川に面して傾斜する所から、その傾斜が終って平坦になるあたりにかけて、47880mを基点AAとするグリッドをCY・37~60まで設定した。場所によっては多少の相異はあるが、30~50cmにわたる黒色土と黒褐色土の下がローム層となる地層々序を示しており、縄文時代の遺物は多くが黒褐色土中に包含され、平安時代の遺物は黒色土中に含まれることが多かった。

2) 遺構と遺物

調査の結果は、以前の分布調査でおさえられていた地域北端で平安時代の墓塚1基と、分布調査では遺跡範囲に入らない北側の台地頂部に近い斜面で縄文中期住居址1軒、台地の南斜面が平坦部に移る所で、平安時代の住居址2軒と、用地を西から東にむかって横切る深いV字状溝が1本検出されている。縄文中期住居址は逆位の埋嚢を持つものであり、平安時代の住居址は灰釉陶器の量多く、またV字状溝は他の遺跡で類例すくないものであり、それぞれに特色ある相を示すものとして興味深い。

なお、縄文中期の遺跡は用地西方に、平安時代の遺物は用地東方にそれぞれ延びているようである。(宮沢)

ア 縄文時代中期の住居址と遺物

ア) 3号住居址 (図27・95、写19)

台地のほぼ中央部に発見され、褐色土を掘り込み、南北500cm、東西490cm程の円型プランを呈する竪穴住居址である。壁状態は南東に傾斜する地形の為に、北から西は高く、南は低く、東は存在していない。床面はローム層の叩きになっており、炉周辺は良好で、若干凹凸を認める。炉は中央よりやや北寄りに位置し、角柱状や円味の花崗岩で組み、さらに内部に埋嚢を有する方形石囲埋嚢炉である。炉内特に嚢の周

辺には多量の炭化物や焼土を検出し、その量の厚さは10cm程に達せんとしている。炉縁石は内側が焼けて赤く変色し、亀裂の貫入が認められた。南西の位置に土器が逆位に埋られ、底部は床面より5cm程浮いていた。

遺物 土器・石器が出土しており、出土量は多かった。土器(図95)は覆土と床面とに区別されるがどちらも加曾利E式である。埋嚢は逆位のものが完形(図95の1)で、典型的なキャリパー形を呈し、口径28.2cm・底径8.0cm・器高36.4cmの大きさである。他方は鉢形土器(図95の2)である。石器は図97の6の打石斧・7～11の横刃・12～16の石錘が出土している。(小池)

イ 平安時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図28・91～93・221、写19・20)

遺構 調査地中央部にあって北より南へかなりの傾斜を示す地点に位置する。東西540cm×南北480cmのプランで、ローム層内に掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址である。西側の中央部が丸く張り出して段付状である。壁は垂直に近く、西と北が高く東と南が低い。東南の一部が耕作により攪乱されている。北部壁外中央のところに接近して円形の貯蔵穴と思われる土壌がある。床面は凹凸が多くあまり良くない。一部に貼り床を認めるが、中央より東側に5個の大穴があり、形状は鉢状で、径100cm内外・平均の深さ30cmである。柱穴は4個等間隔にある。カマドは東壁中央に接して構築されていて13個の自然石を以って組んであり、多量の粘土をもって固めてある。石組粘土カマドである。煙道は一段と高く作ってあり焼土化している。袖石の一部は取りはずしてあるが、天井石の保存はよく焚口の前は凹んで灰溜りがあり、一面赤く焼けている。灰溜の中よりは少量の炭化物と灰が検出された。

遺物 床面に近い覆土より灰釉の皿(図91の4・13・14)・坏(図92の16)・須恵器の甕(図92の11・12)・土師器の坏(図92の2～5・7～9)等出土したが、いずれも破片で、少量である。カマド付近の床面より刃子(図221の6・8)が出土した。少し欠損している。ほかに灰釉の壺の頸部、胴下半部や、灰釉椀(図91の5～12・図9213～15・図93の1～5、写20の92・93)・須恵器坏(図92の6・10、写20の93)などが出土している。なお図91の4は段皿であり、図92の2～5は土師内黒坏である。また図221の11は釘状のものである。

イ) 2号住居址 (図27・93・94・97)

遺構 調査地の中央、北より南・西より東と両面傾斜する地点にあり、1号住居址の東側に位置する。東西500cm×南北480cmのプランを示し、ローム層へ掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址である。張り出しは西側中央に認められる。壁はほぼ垂直で良好である。西南が高く東が低い。北は耕作により多少荒れている。床面は一部に貼り床が残存するが、凹凸が多く良くない。中央の東寄り南北140cm・東西90cm・深さ30cmの楕円形の大穴があり、内部より少量の土器片が出土した。柱穴は隅に等間隔に4個あり、各々の柱穴内外に自然石が数多く、意識的に放置してある。床面上東南の壁に接して42×38cm・高さ14cmの表面平で滑らかな石が調理台の如く据えられてある。西北の隅近くに並らんで5個の小ピットがあり、内部より少量の土器片が出土した。カマドは東壁の中央部に接し、煙道は明確に外部へ出ている。かなり大きな

自然石を20個以上組み、粘土とロームを多量に使用して固めてある。石組粘土カマドである。原形はよく保存されている。袖部の先端に凹みがあり、灰溜りとして残存し、約100×60cmの楕円形に焼土化している。

遺物 覆土・床面上10～20cmより須恵器の甕・土師器の皿・土師内黒杯(図94の8～12)・灰釉の皿・椀・杯(図93の6～11)が出土している。カマド付近から鉄片が出土している。他に図94の1～7の土師甕口縁部・底部、そして図97の5の砥石が出土している。

ウ) 1号竪穴 (図28)

遺構 調査地の中央、1号住居址の北側に接触して位置する。東西210×南北190cm・深90cmの円形タライ状の竪穴である。底部は平で150cmあり、壁は北・西・南は垂直に近く良好であるが、東は緩傾斜である。床面は平で一部固く叩いてあるところが残存し、壁にそって巾10cm、深さ10cmの周溝が掘ってある。此の竪穴は1号住居址の付属の如く考えられる。

遺物 覆土の上部は多少の攪乱が認められ、そこより縄文中期加曾利E式土器片が少量出土し、床面より土師器片3点出土した。

エ) 1号墓壇 (図28・92、写18)

遺構 調査地の南、用地西縁の道路添に位置する。隅丸方形に近いもので、プランは南北230×東西90cm・深さ20cmをはかり、ローム層内に掘り込んだ竪穴の墓壇である。壁は北面のみ60度の傾斜をもつが、他は垂直に近いもので、北は固く叩いてある。床は軟弱である。北の壁に接して50×40cm・深さ10cmの鉢状の落ち込みがあり、内部より灰彩の杯・椀の破片が少量出土した。南壁に接している不整形のピットは樹木の根の跡であろう。

遺物 遺構北寄り覆土内より完形良質の灰釉中型の水瓶(図92の17・写18の88)と不、皿・椀等の破片が少量出土した。
(根津)

オ) V字状溝址 (図28・96・97・写18・19)

遺構 遺跡北側の台地背陵部からの南斜面が平坦部に移行するあたり、グリッドでいえば西はBT39から、東は用地いっぱいにあたるV字状断面を持つ溝址である。西高東低の地形面上であるから、遺構もそれに従って西が高く、東が低くなるかたちで溝が連続することになる。巾145～160cm、深さ50～75cmほどにロームを掘り込んでいる。覆土は上から耕作土、黒色腐植土、ロームと黒色土の混じた黒褐色土と場所よって溝底に砂利層を認めることができる。このことからすれば、水路であった可能性が大きい。

1・2号住居址の南側にあたり、また1号墓壇の北側に位置することになる本V字状溝は、住居址区を中心にすればその外側に置かれたことになるし、1号墓壇の発見からすれば住居地区と墓域などの区画溝とも考えられる。

遺物 遺物には土師器・灰釉陶器片少量がある。多くは耕作土の下の黒色腐植土から発見されているがわずかに最下層の砂利層からも検出されている。1・2号住居址および、1号墓壇出土の遺物と同一の時期相を示すものであった。(図96の1～6・97の17)
(宮沢)

3) まとめ

南丘A遺跡では、過去の分布調査で落された範囲より北、木裏原扇状地の扇中央部に近い台地背陵にかかる南斜面を中心に遺構が集中して発見された。ここでは平安時代の住居地区外側に深い溝をうかった集落構造の一部が見つかった。用地が遺跡全体にかからないので、発掘しなかった所については予測できないが、住居地区とそれ以外のたとえば墓域とか、生産地区とかいうような住みわけがなされていたようにも考えられる。溝外側の1号墓壙は、大型の長方形をなすもので、この期の典型的なものといえよう。

また1・2号住居址の床面は、ローム層を掘り込む竪穴式ではあるが、大小の凹凸がはげしく、通常の床面を平低に切り込んで、必要な柱穴をうがつ構築法とは多少異なるもののように観察された。凹凸はわんぐりとした土壙状のくぼみを中心にするものであり、上屋部建直しの際の柱穴とは考えられないものであった。灰釉陶器碗・皿などの個体数も多く、その面からも資料性の高いものといえよう。

縄文中期3号住居址南端の床面で逆位に立てられた埋甕が発見されている。西春近地区では唯一の埋甕例で、キャリパー状胴長の深鉢型土器で、穿孔した底部が床面につき出る形状で埋め込まれていた。飯島地区例などとともにそのもつところの、形態分類や機能の分析が要請されている縄文中期住居址に伴う埋甕の問題に資料提供をする一例となろう。

(宮沢)

6. 南丘B遺跡

1) 位置 (図3・写29)

遺跡は、伊那市西春近木裏原10746の138番地他にある。南丘A遺跡と北丘B遺跡の中間にあり、ともに北の犬田切川、南の猪の沢川によった広い扇状地形面上に位置している。(図3、写29)西から東に傾斜する起伏のすくない扇状部を占めている。

木裏原全体の地形は、北の北丘B遺跡あたりがや・高く、南の南丘A遺跡のあたりがだんだん低くなる。つまりその中間の本遺跡は、扇状地の背稜部から北側に偏する所に位置していることになる。

比較的新しい開拓地帯で、計画的な100～180m区画の四角な耕地整理がなされ、ゴパンの自状に農道が走り、大きく区画された畑地は、ライ麦、ジャガイモ、モロコシなどが耕作され、また長く大きな鶏舎が何棟も建ち並ぶ規模の大きな農耕地で、機械化された耕作方法をとる所が多く、特に長芋掘りのトレンチャーなどは地下1m以上までを掘り進む機械であり、遺構があっても破壊されてしまう。標高は720～740mある

過去の調査所見では、木裏原南丘地籍のほぼ中央全域に広がる遺跡で、縄文中期の遺物が多く、南丘A遺跡よりも特に土師器片の出土量が多くなり、住居性高い遺跡として分布調査の結果が記録されている。

今回の調査は、48180mをAA基点とし、38-59にグリッドを設定したが、遺構は発見されず、また遺物も数点検出するにとどまった。

2) 遺物 (図96・97)

発見された遺物はすくない。土器(図96の20・21)は縄文中期の土器片があり、石器(図97の26)には小形の凹石がある。

3) まとめ

中央道用地内では遺構に当らず、また遺物もほとんど発見されなかった。分布調査の時点での所見は、用地外西方地域であるらしい。一面の畑地耕作に上述の機械化がなされていても、遺物の検出はできるはずである。遺物も数点であったことなど勘案すれば、遺跡の中心は地形の観察も含めて、西方に延びているものと考えられる。

(宮沢)

7. 北丘B遺跡

1) 位置 (図5、写21の97・29)

本遺跡は伊那市東春近木裏原 10746・143～149番地一帯にある。北は犬田切川、南は眼田井川と呼ばれ、江戸時代に開作された水路によって、それぞれくぎられた扇状地上に位置し、現在は水田ならびに畑に利用され、竜西(天竜川の西側を意味している)穀倉地帯の一端を担っている。同地は犬田切川は比高20m・南の小沢からは4m高くなっている。

中央道は扇状地中央部を横切り、その部分は畑となっており、以前の分布調査では縄文中期・縄文後期土器・打製石斧・黒曜石等が数多く出土している。

グリットは48324mをAAとしてDTまで、36～59に設定した。なおここには農道が東西に走っていた為にその部分は未調査である。

C～D地区にかけて遺構・遺物が集中しており、A～B地区では遺物は少なく、遺構は住居址1軒、堅穴1基・土壇3基・土壇群1を検出したにすぎなかった。

遺跡地は微地形に富む。A地区は平坦で、ローム層まで40cmとなっている。B地区は南から北へ緩傾斜であって、耕土・褐色土・ローム層の順に堆積し、ローム層まで60cmある。C地区は地層が最も深く、ローム層面までは1m程ある。C地区後半分からD地区にかけて、北から南に急傾斜し、傾斜面に沿って花崗岩の流石が道のように群がっていた。遺物は大部分が褐色土層中に含まれ、遺構はローム層より掘り込まれていた。

2) 遺構と遺物

ア 縄文中期の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図30・98・116)

遺構 台地北縁にある遺構群最南端に位置し、ローム層を掘り込み、南北420×東西450cm程の円形プランを呈する堅穴住居址である。壁は全周し、高さは20～40cm程を示している。床面はローム層の叩きであるが、炉周辺は良好で、他は軟弱である。柱穴はほぼ等間隔に4隅に配列され、直径40cm程・深さ30～40cm程度あり、垂直に穿たれている。炉は中央よりやや北寄りに位置し、炉縁石は北・東・西に円味のある花崗岩を、南に角柱状の蛇紋岩を組み合わせで構築した方形石囲炉で、組み方自体は割合に貧弱である。炉内には焼土や炭化物がほとんど検出されずあまり長時間利用されなかったのであろう。

遺物 土器、石器の出土量は多く、土器(図98の1～25)は中期のものである。石器は打石斧(図116の1・2)・磨石斧(3～5)・横刃(6)・石錘(7～10)がある。南壁近くの床面に打石斧が3本重

なって置かれていた。

(小池)

イ) 2号住居址と竪穴 (図30・99・116、写25)

遺構 調査地丘上北縁に位置する一群の一つである。近接する住居址は北に7号住居址、東に5号住居址がある。プランは東西510×南北400cmの楕円形の竪穴住居址である。壁は西北が高く東南が低い。西壁に流石と思われる大石が残存している。壁外南に接続して1号竪穴をもつ。床面は多少の凹凸あるも固く叩いて良好である。柱穴は4個にて等間隔で明確である。炉は中央より少し西寄りですらな5個の石を直立させた東へ開く□の字状の石囲い炉である。内部は赤く焼けていて炭化物が少量検出された。

遺物 北側の壁に接して床面上10cmより完形に近い石皿(図116の18・19、写25の117)と凹石(図116の15~17)が重なった状態で出土した。炉の付近床面より磨石・打製石斧・石皿の欠損せるもの等が出土した。他に図116の1~10にみられるように横刃・14の敲打器なども出土している。中期の住居址としては遺物が少ないが、図99の1~10にみられる土器も出土しておる。

2号竪穴 (図31、写23の104)

遺構 北縁2号住居址の南に位置する。プランは東西220×南北230cmの円形タライ状のもので、ローム層へ掘り込んである。壁は西が17cm・東が14cmで垂直に近い。床は軟弱であり良くない。中央北寄のところに80×40cm大の自然石と南壁に接して20×10cmの自然石が据ってあり、この付近は一面赤く焼けている。この遺構は2号住居址との関連が強く、貯蔵穴として性格が強い。

遺物 床面近くより縄文中期の土器片が少量出土した。

(根津)

ウ) 3号住居址と竪穴 (図31・99・100・116・117、写22・25)

遺構 住居址は、遺跡北側の台地のほぼ中央、CS42~45で発見された。褐色土から掘り込んだ5.6×5.4mのほぼ円形に近いプランを示す竪穴住居である。西から東に緩く傾斜する台地上に構築されているため、壁の立ち上りも西高東低になっている。床面はタタキのきいた良好な状態であり、西から東にかけて周溝がめぐっている。柱穴は4本あり、そのうちの南西にあるものの穴底には拳大の石が数点入っていた。中央東よりには110×80cm長方形の浅い石囲い炉があり、炉底には平扁な石と土器片が敷き並べてある。(写22の100・25の118)。炉の西にはたぶん住居廃絶後と思われる花崗岩の集石があり、炉付近とともにその周辺に遺物が多かった。

遺物、床面、覆土ともに発見されている。覆土の石器には図117の1・2の磨石斧、同図3・4の横刃があり、床面からは図99の11~17・図100の土器が出ている。石器には図117の5・6の石錘がある。土器は縄文中期加曾利E式土器である。

竪穴は、住居址北隣で発見されたもので、D×42~43にかかっている。3×4mの扁方形をなし、中央は人頭大から拳大の自然石が30箇所ほど置かれている。東側には2×1mの摺鉢状のピットがあり、ピット縁北側には30cm径ほどに焼土塊があり、その脇に口縁と底部を欠く中期加曾利E式期の深鉢が立てられていた。

遺物からみれば住居址・竪穴は同時期のものであり、互がセットになる遺構例といえよう。(福沢)

エ) 4号住居址と竪穴 (図32・101・117、写26の120)

遺構 台地の南先端で、猪ノ山林道に沿った斜面の大きな転石の間のローム層に掘りこまれた、東西420×南北330cmの不整円型竪穴住居址で、壁の所々にロームに喰い込む自然石がある。西壁は25cm、北壁が20cm・南壁が15cm・東壁が10cmで東南に低くなっている。床面にも拳大の礫が東半に多い。特に入口と思われる、東南の壁近くは敷つめた様に礫層がある。柱穴は4個等間隔に発見され、入口に近く、径30cm・10cmの深さのピットは支柱穴と思われる。中央稍々西寄りに、埋甕炉あり、径30cm・深さ10cmの底のない甕がロームに掘り入れ、平面の自然石を底部として、据えられてある。若干の炭化物が検出された。炉の左隣に1コ体がまとまって出た。

遺物 埋甕のほか、縄文中期の深鉢が炉付近と南壁近くとから各1個体分が出土し(図101、写26の120)勝坂式である。なお16は有孔鏝付土器である。石器は図117の7の打石斧と石錘1点のみである。

5号竪穴 (図32・106)

遺構 4号住居址の東に隣接し、用地東縁ぎりぎりに、南傾斜するローム層に掘り込まれたもので、径南北220×東西200cm・深さ50cmの円形に近いプランを示す。壁は人頭大から拳大の礫がロームに喰い込んでゴツゴツしている。底面は舟底状をなしている。

遺物 縄文中期の土器片4点(図106の3)と黒曜石片1点のみである。

(辰野)

オ) 5号住居址 (図32 102 の1～8 117 の8～18、写22)

遺構 調査地北側用地内東寄りに位置する。近接の住居址は北西に7号住居址と西南には2号住居址がある。この遺構のプランは東西480×南北440cmの円形で、ローム層を掘り込んでつくられている。壁は垂直に近く、西が高く東が低い。流出により以前からあるものと思われる90×60cmの大石が東の壁に残存している。床面は炉の付近は固く叩いてあり良好であるが、西側は全面積の4分の1程度礫土の流入により、荒れて凹凸が出来ている。柱穴は4個でほぼ等間隔であるが、西側のものの内部に10cm大の石が数個入っている。炉は中央より北東寄りで方形石囲炉である。8個の石が並べられるが、そのうち1個は青色の河原石で、表面が磨かれてあり美しい。(写22の101)

遺物 北側の床面より硬砂岩製の打石斧2・緑泥岩製磨石斧1(図117の8～11)、また炉の付近より硬砂岩製の石錘1(16)、南の壁に接し硬砂岩製打石斧2・緑泥岩製敲打乳棒状磨石斧1・硬砂岩製凹石(17・18)・硬砂岩製横刃2(16)等出土した。他に磨石斧(図117の14・15)も出土した。土器類は縄文中期の土器(図102の1～8)の破片が少量覆土・床面より出土した。

カ) 6号住居址 (図33・102・103・117)

遺構 調査地北縁の一群の一つである。近接せる遺構は北側に2号住居址・1号竪穴、南側に3号住居址をみる。プランは径360cmの円形で、ローム内へ掘り込んでいる。壁は垂直で西が高く東が低い。東南の一部は耕作により攪乱されている。床はわずかに西より東へ傾斜して凹凸が多い。柱穴は4個あり、概ね等間隔である。炉は中央より東北寄りで、方形石囲であるが、北と東の一部が抜き取られている。内部は赤く焼けて少量の土器片・炭化物を検出した。

遺物 炉の南側床面より緑泥岩製磨石斧2(図117の19～21)・硬砂岩製の石錘1(図117の22)・石匙

1 が出土した。土器類は縄文中期の器形不明の土器片が少量床面上より出土した。(図102 の 9～20・103) がそれにあたる。

(根津)

キ) 7号住居址と竪穴 (図33・104・117 の23～29 118 の1～7、写27)

遺構 台地北縁にある一群の最北に位置し、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。北壁は耕作で、東壁は7号土壌による破壊の為に確実なプランや規模は把握できない。床面はローム層の叩きで、炉周辺は良好であるが、南東の隅一帯は7号土壌に破壊されている。また床面上には多量の焼土や木炭が検出され、特に炭化物の中に柱に使用されたと思われるような大きな柱状の炭化物が発見された。この事実は火災のあったことを物語っている。炉は角礫や円礫からなる方形石囲炉であって、石材は花崗岩や変成岩で占められており、なかには赤く焼けたものも存在していた。

遺物 土器には深鉢・浅鉢などがあり、図104 の17は有孔鏝付土器である。石器は打石斧(図117 の23・24)・横刃形石器(24～26)・石錘(29)・磨石斧(図118 の1～3・5～7)・凹石(4)が出土している。

3号竪穴 (図33・106 の5～27・112、写23・27)

遺構 台地北縁にある一群の最北にある7号住居址の西に隣接して発見され、ローム層を掘り込み、南北350×東南300 cm程の楕円形プランを呈する竪穴である。壁は全周しており、東・北は高く40数cmを計り、南・西は30cm前後である。状態は砂礫を含んでいるため軟弱である。床面は叩きらしきものは全く認められずに幾分凹凸している。東南の隅には大小さまざまな石が密集し、石質は変成岩と花崗岩が半々を占めている。これらの石は付近の状況から察して流石と判断できる。

遺物 土器には図106 の15～27、図112 の1～4がある。図106 の26には木葉玉痕がみられる。なお図112 の1～4は深鉢(写27の126～128)である。遺物出土レベルは床面より若干高く同レベルから多量の炭化物が検出された。

ク) 8号住居址 (図34・105・118、写22の102)

遺構 台地北縁にある一群の最西に位置し、ローム層を掘り込み、南北500×東西550 cmの円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は本遺跡の住居址では最も高く30～60cm程あり、状態は西壁に花崗岩の流石が密着している。床面は砂礫を含むローム層の叩きで、西半分は良好、他は軟弱である。さらに10cm巾位の周溝が北半分を回っている。柱穴は5本ほぼ等間隔に配置され、直径と深さはほぼ同じで、40～60 cmである。炉は中心より北側に位置し、方形石囲炉であったと思われるが、石がはずされ方形の落ち込みがみられる。現在は西側の石が存在しているのみである。炉底には小さな変成岩と花崗岩を敷きつめて湿気を防ぐように工夫をこらしてあった。

遺物 土器と石器の出土量は少なく、土器(図105)は加曾利E式土器であり、床面の土器の中には伏せた状態で出土したものもある。石器(図118 の8・9)は横刃形石器のみである。

ケ) 9号住居址と竪穴 (図35・106 の1～7・118 の10～12)

遺構 遺跡南端で発見され、ローム層を掘り込み、南北500×東西450 cm程の円形プランを呈する竪穴

住居址である。壁は全周しているが、北から西に高く、南から東へ低い。東は9号土壇構築の際に切られ低くなったのではないか。床面はローム層の叩きになっており、炉周辺は堅く、中央から東にかけてわずかに傾斜している。柱穴は4ヶ所検出されたそれぞれに小さな補助穴を有し、穴の中を幾分なりとも叩いてある。東側の南寄りに断面袋状のピットが検出された。形状からしておそらく貯蔵穴であろう。炉はほぼ中央部にあり、構築当時は方形石囲炉が存在していたと思われるが、何時かに抜き取られ現在は西側の1つが存在していたにすぎない。抜き取られた部分はわずかな方形の落ち込みになっており、石が存在していたことを明瞭にしている。

遺物 土器・石器がありその出土量は少ない。土器（図106の1～7）はいずれも破片で勝坂式土器に比定される。

4号竪穴（図35・106・112・写23の106～108）

遺構 9号住居址東側にあり、ロームを掘りこむ南北4m・東西4.5mの楕円形プランを呈する竪穴である。壁は南と西に残っている。床面はロームの叩きで、平坦につくられている。床面には比較的深く、袋状断面を持つ壙がつくられていて、壙内または壙縁に遺物を集中させていた。

遺物 土器と石器があり、写23の106～108でみられるように壙縁で図112の51が、また壙内に硬砂岩の剥片が入れてあったり、黒曜石塊が入れている。南壁に近い所では緑泥岩の大形石器（図112の5）が出ている。

9号住居址と5号竪穴は並べた格恰で検出され、竪穴の方は通常の住居址程度の床面積を有しながら、柱穴・炉などを施設していない。居住のための遺構でないことは確かであろう。しかも壙をうがち、その中へ、確実に石器原料と思われる剥片、塊を入れていることからすれば、この場合9号住居址に付属する作業場的な施設とみるのが適当であると考えられる。住居施設と作業場施設の組合わされた生活単位遺構ともいったらよいと思う。

（小池）

イ 土壇群と土壇

ア) 1号土壇群（図36・107～109・118、写24・26）

遺構 遺跡北側台地が、東にむかって傾斜を強める所、したがってこの台地全体からみると台地の東端に位置して発見されている。基盤ロームの中には西方からの花崗岩の転石が含まれているが、この大小の転石のかたわらを少し掘りくぼめたり、石を数箇集めたり、または土壇をうがって、その中へ土器・石器を置き 中には置いた土器の上へ石をのせた状態が広がって一郭をなしている。（写24の109～112）。

遺物 1号土群で発見された遺物には、土器と石器がある。ほとんどが深鉢で、平行沈線と圧凹を連続させる粘土紐を組み合わせる1群（図107の2・108の4、写26の119）と、爪形押しきを隆帯に加えるものなどが文様の中心になっている。（図107～109）中には沈線と隆帯で文様構成をするものもある。いずれにせよ、勝坂式の土器群である。石器には図118の13～16・18の打石斧、19の石皿がある。（福沢）

イ) 2号土壇群（図36・107・109・110・112～114・116、写25の113～116・26・27）

遺構 遺跡北縁台地を見上げる様な地形の中央で、猪ノ山林道の南側に沿った、用地西半に東西16m、南北12mの範囲に展開する。大きなのは 180×70cm・深さ50cm・小さいのは30×25cmで深さ35cmと云う多様な土壇群である。表面より西端で70cm、東端で50cm掘り下げたもので摺鉢状、舟底状、皿状、円形、小さなものは柱穴を思わすものもあった。群の南西のNo.33土壇は、140×110cmで35cmの掘りこみであるが、西壁は特に盛り上って底部へは60cmの壁をなして、その盛土に土器片が集中しており、更に壁をなす腐植質粘土に土器片が多量に混入した状態で出土し、その下層より焼土が15cmの層をなし、炭化物も多量に混入している。

35ケの土壇中全然遺物のなかったものは7ケ所、他の土壇は石器、土器の何れかを含有していた。配列は不規則であるが、群中央西寄りに多く、東にはピット状のものが多く遺物も少ない。西縁に近いNo.17からは紅ガラと見られる径1cm位の朱のかたまりが出ている。

遺物 石器と土器が多数出土した。縄文中期勝坂式土器深鉢（図107の7・写27の124）・浅鉢・土器片多数（図110の1～10・113・114）、石器は石皿・凹石・磨石・石斧・石錘・黒曜石など。その他紅ガラ・平出皿A式類似（図107の8・113の2）・深鉢（図112の6）及び底部（図109の12～14）等が出土している。

（辰野）

ウ) 土壇

土壇1（図37の106）2号住居址と7号住居址との中間に位置し、他の土壇と同じく第3層ロームを基盤として掘り込まれている。プランは150×190cm、深さ50cmの楕円形で、北壁は垂直に近い。底部は堅く叩いてあり、4個の自然石が重なっている。壇内からは遺物は検出されていないが、壇周辺より縄文中期の土器片（図106の8）が多量に出土している。

土壇2（図37）2号住居址の北にあって、100×140cm、深さ20cmの楕円形である。壁は急傾斜しており、底部は平らで少し堅く、叩いたようにみられる。遺物はないが周辺より縄文中期土器片が多量に出土している。

土壇3（図37）2号土壇と並んで位置している。径100cm、深さ30cmの円形すり鉢状で底部は狭い。遺物はないが周辺より多量の縄文中期土器片が出土している。

土壇4（図37 106 118 119）遺跡のほぼ中央、東よりに5号土壇と並んで位置している。110×50cm深さ40cmの楕円形で、壁は垂直に近く、底部は平らである。40～10cm大の自然石が壇上縁部の南側に7個東側に2個あり、この石の配列状態からみると、この遺構は墓壇に近いものであろうと考えられる。覆土中に縄文中期の土器片（図106の9・10）が少量認められ、10は勝坂式である。石器は磨製石斧（図118の17）、磨石（図119の1）・凹石（2・3）が出土している。

土壇5（図37の106）4号土壇の北に隣接し、100×125cm、深さ25cmの浅い楕円形土壇である。西壁は垂直に近く、また北壁10cmほどの段になって傾斜している。底部・東西の隅には径30cm・深さ10cmほどのくぼみがある。遺物は縄文中期勝坂式土器（図106の11～14）が出土している。

土壇6（図37）2号住居址と5号住居址との中間に位置しており、170×120cm、深さ40cmの楕円形すり鉢状を呈している。壁には凹凸があり、底部はいくらか叩き認められる。遺物はない。

土壇7（図37）7号住居址の東隣に接して、150×300cmの南北に長い楕円形。深さは50cmで東西壁

は急傾斜をもって掘りこまれている。底部は狭く、砂礫を含んでいる。覆土中より石鏃1点が出土している。

土壙8(図37) 遺跡の南、傾斜のなだらかなところに位置している。100×140cm、深さ60cmの楕円形すり鉢状で、北壁は急傾斜しているが、南壁は緩やかである。また壁には全面凹凸があつて崩れやすい状態である。底部はロームの叩きになっている。置物は検出されていない。

土壙9(図37) 9号住居址の東に隣して位置する。142×130cm、深さ45cmの円形で、壁の傾斜は比較的急で、多少の凹凸がある。底部は平らで叩いてある。遺物はない。

土壙10(図37) 8号土壙の南に位置している。142×257cmの南北に長い楕円形で深さは100cmと深い。西壁は垂直で、南北東壁は西壁中央部に向かって緩やかに傾斜している。また壁には凹凸があつて崩れやすい状態である。底部は小石を混じえた砂礫を含んでいる。遺物は認められない。

土壙11(図37) 遺跡のほぼ中央に独立して存在する、105×105cm、深さ40cmの円筒形状の土壙である。壁と底部は砂礫を含んでおり、また底部には花崗岩の流石が密着している。覆土中より少量の炭化物と石錘2点を検出している。

土壙12(図37の119) 3号住居址の北、2号堅穴の東に隣して位置し、115×120cm、深さ40cmの円形たらい状で北壁は段になっている。底部には20cm大の石1個と小礫3個がある。遺物は磨石(図119の4)のみである。(深沢)

エ) その他 (図110・112・115・119、写21・29)

遺構外出土の遺物は量的にはかなり多いがいずれも小破片の土器あるいは欠損した打石斧などであり、見るべきものは少ない。ただし住居址群の占地している丘で中央道用地内西端付近から縄文時代早期末の土器片(図110の11~17)が数点出土している。穀粒押型文土器の口縁部(11)と太いめの撚糸文土器(12~17)がそれで、撚糸文土器はいずれも繊維を含んでいる。おそらくこれら早期の遺跡は中央道用地外西方の標高の高い位置に中心をもつものと考えられる。

石器は全て縄文時代中期の土器に伴って出土したもので、ここでは完形のものだけを図に示した(図119の5~15)。打製石斧(5~8)・磨製石斧(9)、横刃形石器(10)・磨石(11・17)・凹石(12)・石錘(13~15)、花崗岩製の石臼(16)、用途不明の大型石器(18)がある。(唐木)

3) まとめ

犬田切川と猪の沢川にはさまれた広い扇状地木裏原の北端・犬田切川南岸に西から東にのびる台地の東端付近の地形断面は、北側が高く、中央が凹み、南側は中央よりやや高めになっている。北丘B遺跡はこの北側の台地頂部から凹地にかかる斜面にかけて遺構が集中し、凹地、南側の平坦面にも遺構を広げていた。縄文中期2期にわたり、住居址9・堅穴5、土壙群2、土壙12の遺構と、相当量の遺物を得た。この遺跡で重要なことは、住居址とそれに付属すると思われる遺構が確認されていることと、土壙群を含めた集落構造に関する示唆である。2号住に南接する1号堅穴、3号住北隣の2号堅穴、7号住西隣の3号住9号住東の4号堅穴、4号住東隣の5号堅穴。いずれも出土遺物の相は住居址と堅穴は時期を同じにして

いる。これはすくなくともそれに近接する住居址とは同じ時期であり、しかも住居の近くに構築する必要のあったものということになれば、関連を持ち合う遺構ということになる。この場合竪穴の基本態は、掘り下げた竪穴で、3号のように土器を持つものと、4号竪穴のように竪穴面積が、ほとんど住居址面積と同じくらいの広さになり、床面に深い壙を掘り下げ石器材料を入れているような、つまり住まいではもちろんないが、作業場状の様相を窺わせるものとなる。4号竪穴は9号住居址の東側にあるが、9号住との間には土壙が1つある。そうしてみると9号住居址は東に貯蔵穴状の土壙と、更^はにその東に工房址4号竪穴を付属させたものとして把えることができる。1住居址単位としての性格が窺える、関連し合う遺構が確認されたと考えているわけである。

もう一つの問題は、9軒2時期のうちの古い時期、つまり勝坂式の時期における集落構造に関してである。台地の頂部から南側の斜面には、2・4・5・6号住居址が弧状に並ぶ。この東側、地形面でいえば東の台地先端に土壙群が、また南側の凹地に1・2号土壙群を配置している形になっている。傾斜緩やかで日当りのよい台地頂部と南斜面は住居地区とし、台地先端と南の凹地は特殊な、共同のための区画とする住みわけの原則が、勝坂式期の北丘B遺跡にあったのではなかろうか。いずれにしても、中期の集落問題については興味のある資料を提供するものである。

遺物も豊富であった。従来、平出3類Aという呼び方で位置づけられていた、竹管状施文具で施された平行沈線文によった加飾を持つ深鉢型土器の一群が、本遺跡からも何点かでてくる。4号住居址の埋壙・1・2号土壙群の器丈のある 底部の小さな深鉢(図 107の2、写26の119)がその例であるが、中期初頭という位置づけは北丘B遺跡に関しては、他の伴出土器からいって適当ではないといえる。

2号住居址の北壁に接して石皿の上へ磨石が乗せられて出土した。この状態は石皿と磨石が組合わさっていたことを物語るといえよう。

(小池)

8 名廻南遺跡

1) 位置 (図5, 写28・29)

遺跡は伊那市西春近白沢地籍にあり、白沢部落の南西のはずれにあたる。

中央アルプス山中に端を発し天竜川に注ぎこむ西春近でも有数の急流犬田切川は、白沢部落の南で右岸には急峻な斜面を、左岸には2段の小段丘を形成している。この小段丘の1段目と2段目の幅70mほどの平坦地が遺跡であり、2段目の段丘上の舌状台地には県道に羨道部をけずりとられた名廻東古墳がぼつかり口をあけている。

遺跡と河床との標高差はおよそ5mである。現在は畑が作られているがかつては増水した犬田切川の濁流に洗われることもしばしばあったとみえて大きな花崗岩があちこちに点在し、また土壌は砂質分を多く含んでいる。

調査開始前の踏査では何らの遺物も表採できなかった。

調査は48,600mをAAとしBHまで、41から56までグリッド設定して行なつた。(唐木)

2) 遺構と遺物

ア 平安時代の住居址と遺物

ア) 1号住居址 (図38・120・130、写28)

遺構 遺跡台地南縁の先端、犬田切川の流れを眼下にする北岸の河原石の中に褐色土層を掘りこんだ、南北525×470cmの方形竪穴住居址である。壁は、西40cm、東5cmで東に低い。南壁は特に石が多く、石囲いの如くで、北壁は中央に10cm位壁に切り込んで、人工的に並べたと認められる石が2・3ありその床面部に多量の焼土が堆積しているが一時期にカマドとして使用し、後現在地に移動したものと思われる。床面は、貼床とは認められないが、砂質ロームで硬く、小波のデコボコである。西南の柱穴の壁との間にも焼土の堆積が認められた。東南のカマドに近く、長さ110cm・巾45cmの瓢単形の大石が床面に20cm程突出している。柱穴は4個が等間隔に、10cmの掘り込みである。床面の中央に、径50cm・深さ20cmの凹地があるが、焼土も炭化物もなく遺物もない。カマドは東南の隅に、石組粘土で築かれる。カマド左側支脚石は、立石のまゝ3個並んで粘土に支えられている。右側石と天井石は崩れて附近に散乱している。

遺物 床面より灰釉椀(図120の1・2)・皿(3)・段皿(4・5)が出土した。覆土より打石斧(図130の1・2)・横刃形石器(3)も出土している。(辰野)

イ その他の遺物

遺構外出土の遺物は全て土器であり、その量は少なかった。遺跡の北側フラットなところから縄文晩期土器（図 120の 6～8）・晩期条痕文土器（9）・縄文前期終末諸磯C式（10）土器が出土した。（小池）

3) まとめ

調査前の踏査の際表採遺物が皆無であったことや、遺跡とされている平坦地が犬田切川の氾濫などで荒れていたため遺構の検出は期待されなかった。しかし平安時代末期の住居址1軒と縄文時代各期の、特に前期および晩期の土器片粗当量が発見され、遺跡立地の多様性を改めて痛感させられた。

発見された住居址は遺跡南端の第1段丘縁に位置している。この住居址からは灰釉の椀2皿1段皿2の5点セットが出土しており当時の生活を復元する上で良好な資料となるであろう。

縄文時代の土器片は遺跡北側の第2段丘下から出土しているが、遺構は検出されなかった。

こうした調査結果からみて、用地外東方のなだらかな斜面にもかなりの遺構が埋まっている可能性が強くむしろ遺跡の中心はそちらにあるものと考えられる。

（唐木）

9 名廻東古墳

1) 位置と環境 (図1・5、写29・30)

名廻東古墳は、伊那市西春近白沢4107番地に所在する。(図1・5・写29・30) 権現山の鬘を縫いながら流れ出る犬田切川は、自らの造形による木裏原や白沢原扇状地を解析して、川沿に小な段丘地形や、細長い台地を形成しながら天竜川へ注ぐ、西春近地区中央を縦貫する川である。上流地域から土石を押し出す暴れ川でもあり、唐木や沢渡地区が天竜川へ突出する地形を示すのも、この犬田切川の暴れぶりを物語るものであろう。写29にみられるように、川巾いっぱい河底を見せ、花崗岩帯を東に流れ走るさまは、まさに犬田切川の名にふさわしい。

犬田切川が山麓部を抜け出て、広い扇状地形面を解析し始める所の左岸には、川の流に平行するように白沢原南端に舌状の細長い丘が、西から東に延びているが、この丘頂と犬田切川へ面して傾斜する所に4基の古墳が点在している。西方山麓から名廻西古墳、約100m東に名廻東古墳、250m東に鎮護塚西古墳その東の鎮護塚東古墳がそれである。なお犬田切川の下流、唐木原東端に唐木古墳があり、都合5基の古墳が構築されていることになる。名廻西古墳は丘端を利用して構築された小さな円墳であり、市道犬田切林道、灌漑用水路犬田切上井ノ沢修復の際発見されたというが、封土ほとんどなく、また石室も崩れ、規模・形状・遺物などは不明である。名廻東古墳の東方250m、犬田切川に面する松林中にある鎮護塚西古墳は、直径17m、高さ2mの円墳で、天井石のはずされた横穴式石室がある。鎮護塚西古墳の東側に大正年間に掘られた鎮護塚東古墳がある。径18.40m、高さ2.4mの円墳で、横穴式石室が天井石を除かれた姿で露呈している。直刀・剣・勾玉・土師器・須恵器が出土し、西春近公民館などに保管されている。

さて今回調査の名廻東古墳は、犬田切川上流沿いの4基の古墳中であって、最も目立ち易い所に立地している。白沢原が犬田切川に南傾しながら北かや迫る所を、犬田切林道が通じているが、この道の犬田切川側の一段低い段丘面に名廻南遺跡があり、その対岸には縄文中期の集落址を露呈させた北丘B遺跡がある。林道が通過する所は、白沢原の南端犬田切川の解析によった段丘崖状の斜面にあるが、この斜面は川沿いに西から東に延びる舌状台地の南側の斜面に連続する。つまりこの斜面を登り切った丘頂に墳丘が構築されているのである。丘頂に立つと南方に、林道とその下に名廻南遺跡が犬田切川沿いの小段丘面に、また犬田切川越しに木裏原北端を鋭く断崖状に切りとつた暴れ川の岸があり、断崖の上に北丘B遺跡の北端をみることができる。北は白沢原の花崗岩礫を混じえた白く傾斜の強い扇状地南面が広がり、手前に名廻遺跡・北に続いて白沢原遺跡が見える。古墳のある丘は、50mほどで切れてしまうので、東方の景観が美しい。天竜川と三峰川の合流点からずっとその沿岸と、三峰川沿いの段丘地帯の奥に高遠、その上に連なる南アルプスの峰々を望むことができるのである。

この丘の西・名廻西古墳の墳麓を洗って、犬田切上井ノ沢が掘られたために、名廻遺跡とは川をはさんで対する形になっているが、もともとの地形ではないし墳丘のある丘の北は古い山道が丘を縦に切っ

るため丘は原形を保たず細長くなっている。昭和44年犬田切林道拡幅工事がなされ、その折り墳丘南裾が切り取られ、石室羨道部の調査がなされ、須恵器片が採集されている。北側を古い山道が、また南側は林道によって断ち切れ、羨道の一部を林道の切り通しに顔を出していたのであるが、中央道用地内にすっぽり入ってしまうため、今回の調査になった。標高は720mを計る。

なお昭和44年調査結果は、「長野県埋蔵文化財発掘調査要覧、その2、昭和41年度—昭和46年度」長野教育委員会（1973・3）に略記されている。

2) 墳丘・石室の築造 (図40・41、写30・31)

名廻東古墳は、北と南側を林道によって切られた細長い舌状台地頂部端に築造された、横穴式石室を内蔵する円墳である。

前項でもふれたように、大きくみれば犬田切川の解析により、南側を犬田切川にむけて低めた小丘陵頂部に、さらに詳細にわたれば、白沢原南端の犬田切上井の川の掘削によって北側を削りとられたために、独立丘状に見える丘頂に、径11.4m、高さ2mを残して、特に南側からは林道拡幅の際露呈した羨道部の石積があり、木裏原北端から望めば、写30の135・136にみられるような、典型的な円墳景観を眼下におさめることができる。

円墳の置かれた丘陵の地層々序は、図40・41・写31などでみられるように、2枚のローム層の上に黒色腐植土・かつての雑木林の落葉をふみ込んだ表土の順に堆積している。図40の地層図41の断面図でみるように、墳丘構築時には、ローム層の上に4～1の黒色土が堆積していた。この黒色土と、下のローム層を切り込む巾3.70m、長さ8m（実際は羨道部が消滅しているのもうすこし長くなる）、深さ1～1.50mの溝を掘り、まず壁体最下段に大きな加工しないままの野面石を並べ、黒色土混りロームでおさえる。これまです基礎工事となり、この上へ石室内部からみれば、野面石の小口面が出るように壁体を築き上げていく。同時に壙壁と石積の間隙へは礫塊の裏づめと、ローム混り黒色土を築きこんでいく。この壁体構築は石室上部にいたるとだんだんせびめられ、持送りぎみになっていて、石室上面へ横架する天井石を支えやすくしている。調査時の天井石は7枚を確認したが、崩れていて完全な姿を把握するにはいたらなかった。石室構築の後にはきわめて薄い土盛が行われた。図40の断面図2がそれで、かつてはもっと厚かつたのかもわからないが、調査時に観察された範囲では、厚い所で50cmにすぎなかった。（もともとが独立丘状に残された丘陵頂にあるため、風化や土のけずられ方は激しかったと考えた方がよい。）墳丘をおおふ葺石はない。この石室を中心とする墳丘をめぐる周塹は1.20～2.40m巾、深さ40～60cmであった。

3) 内部構造 (図41・写31・32)

長方形プラン、石室長軸方向はN6°Wで、残されていた石室全長7.10m、そのうち閉塞部の根石と思われるものを基にして玄室は5.60mを計る。巾は奥壁で1.40m、閉塞部で1.35m、高さ奥壁で1.70mを計ることができる。

側壁は奥壁に近いあたりで5段までを数えるが、規則正しいのは基礎の最下段のみで、それより上段は

不規則な野積みになつている。奥壁は1.20×1.30mの扁平大形の石を立て、さらに三段上へ重ねている。使われている材はいずれも花崗岩で、おそらくは南を流れる犬田切川の転石であろうと思われる。

棺床は、まずローム、黒色土と堆積していた丘頂に壙をうかつわけであるが、その際黒色土から計れば1m下の中期ロームの上面まで掘り下げて、上述の壁体部基礎工事をし、その時に根石をかためるためにロームを多く、黒色土をすくなめに混じた土を使つて掘り下げたローム面を覆い、さらに褐色粘質ローム（たぶんこれは、この丘でみられる2枚のローム中、下部の部分的にパミスを含むケ所があるが、この下部の、つまりローム編年でいえば中期ローム）を敷いて整えてある。またこの褐色粘質ロームの上には部分的に小円礫混りの褐色土が薄く堆積するが、天石部の裏づめなどの崩落土砂であろう。

羨道部については、昭和44年度調査の正報告がないのではっきりしないが、林道切通しで露呈されていた部分がすでに羨道部の終る所、つまり閉塞部であったらうという予測がたつ。

長軸1.10mほどの扁平な石が置かれており、44年度調査の写真記録みると羨道内に閉塞用の河原石が充満していたらしい。したがつてこの棺床南端に、石室長軸に対し直角に置かれている扁平細長の石を閉塞部とすれば、この石室形態は、玄室と羨道を区別はするが、平面形では区別のない長方形の簡単なものであったとことになる。

ちなみに古墳時代を通じ、大室令尺以前に多用されたという高麗尺を、石室法量に当ててみれば、巾4尺長さ16尺、高さ5尺をほぼ計ることになる。

(宮沢)

4) 遺物

ア 出土状況 (図42、写33)

天井石や側壁をつくる石の上部が崩落して石室内に入り込んでいたため、調査は崩れそうな石を取りはずし、埋れた褐色土を上から少しずつ除去していくことから始まった。閉塞部付近はすでに44年度調査が行われているので遺物はない。

遺体の存在を実証するものに骨片と歯の出土がある。歯は玄室中央部やや奥壁寄り、西壁から25cmの位置に、骨片はさらに奥壁寄り、西壁から15cmの位置で棺床に検出された。ところが別の骨片一点は奥壁近く、東壁から45cmの位置に棺床から35cmの高さを持つて出土しているのは何を意味するのであろうか。他に歯1点がふるいの中で、棺床に近い覆土中から検出されているが、残念ながらその位置を確認することはできない。

副葬品の水平分布をみると、棺床に分布するものと、棺床から離れて覆土中に分布するものとの二群に分けることができる。覆土中に分布するものの多くは土器片で、土師の高杯・盃と須恵の壺、盃、甕、提瓶などである。玄室中央部から閉塞部近くまでに分布し、棺床にあるものから、145cmの高さを持つものまでさまざま、甕は床上22cmにほぼ完型に近い状態で出土している。これらの器類のほとんどは44年調査で得られたものと同一個体をなしており、いずれも石室の外に置かれていたものが、天井石崩落の際、破砕されて同時に埋もれたものであろうと考えられる。また床上100cmの高さに位置する紡錘車も同じように外から入り込んだものであろう。

その他の副葬品はすべて床面上に10cmほどの厚さをもつて位置しており、垂直分布が安定していることから、いずれも遺体埋葬のとき置かれたものとする。その水平分布は、玄室中央部から奥壁側では東壁寄りに多く、閉塞部の側では西壁側に多く偏って分布している。鉄製品がほとんどで、鉄鏃がその大半と占め、ほぼ全面に置かれているが、方向性は認められない。大刀は中央奥壁寄、東壁から30cmの位置に壁と平行に、柄を奥壁に向けて置かれている。またその奥壁側には刀が、大刀と一直線をなすように、柄の部分と接し、鋒を奥にむけておりまたその刀よりやや奥壁寄りにも東壁から30cm離れて別の刀があり、鋒は奥壁の方向を向く。他の刀1点は中央部西壁から20cmの位置に、やはり壁と平行に置かれ、鋒は羨道の方向を向いている。刀子は中央部奥壁寄り、東壁から40cmの位置に1点と、他は中央部とやや閉塞部寄りに壁から30～50cmの距離をおいて発見されている。

金環は5点の出土をみたが、そのうちの4点は大きさ、保存状態からみて2個の対になつたもの2組だと思われる。その一組は中央から奥壁寄り、西壁から30cmと45cmに120cmの距離を隔てて出土し、別の一組は中央部付近に130cmの距離をおいて、西壁から20cmと東壁から55cmの位置にある。また他の金環1点は前4点とは離れ、閉塞部にあつて、東西壁の中間、閉塞石から110cmに位置していた。

金属器の他には石製模造品類があり、大小2種の白玉14点と、扁平大形のもの2点。模造品のひとつは奥壁から180cm、東壁から70cmの位置に、他の1点は閉塞石から140cm、東壁から30cmの位置にあつて、二つの距離は260cmを隔てている。双方とも鉄製品の群在する中心部から離れたところにあつて、その周辺には遺物は少ない。また玉類は大刀の置かれた付近一面に集中して検出された。(深沢)

イ 遺物 (図 121・122・217～220、写33～35、)

金属器 大刀、刀(図 217、写34)、大刀は造込、平造。全長96cm・刃長79cm・茎長17cm・元幅4.8cm 先幅3cm・元重ね0.8cm、先重ね0.7cm反りなしの平造大刀である。なおこの大刀は倒卵形の鐔を付属させていた。(図 217の1)、刀には造込、平造・両区・角棟・フクラ枯のみられる図 217の2・4と、刃区片区で、棟が内側に反り、全体形からすれば鉾形状になる平造刀の図 217の6がある。2・4は、3・5のような鉏をつけている。3は一端が反り出すようにもみられ、あるいは鐔と錆付してこの形状を残したのか、鞘口金具かもわからない。

刀子(図 217、写34) 片区の方が多い。11・12は刃部が内反している。使用によるためか、もともとの形なのか不明である。なお12は区が逆に切つてある。鋒の形状などからみると刀子でないかわからない。

鉄鏃(図 218—220、写34・35) 鏃には尖根、平根鏃とがある。量的には尖根鏃が多く、平根鏃は16点を数えるに過ぎぬが、この時期からすれば多い方であろう。平根鏃には図 219の1—16があるが、有茎の逆刺のある両丸造腸袂柳葉式の1・2。両丸造柳葉式の3—9。両丸造圭頭式の10・11。両丸造三角形式の12・13と、14・15・16の有孔無茎式の5つの形態がある。14は着柄木質が残っている。(写34の157) 尖根鏃には鋒部形状からみて、図 218の1—4、図 219の24が片刃箭式・218の5—29、219の22・23、220の7・8・10などでみられる、尖根鏃の大部分は鑿箭式のものである。鋒部が残されていても、錆付があつたりするのではっきりしないものである。なお 218の30・219の23・24は鏃として造られはしたの

だが、最終的には意図的に曲げたり、捻を加えられており、別な用途・機能を付加されていたらしいふしがある。

金銀 5点が発見されている。銅芯金鍍のもので、図 220の16～20・写33の150、でみられるように、図の16・17、写33の中2つは鍍金が美しい。図16・17と、18・19はそれぞれ対をなすものであろう

石製品 紡錘車が1点ある。図 220の36、写33の 149がてれで、滑石製、同心円状有段で厚みのあるもの。線刻などの加飾はない。糸巻棒をさすための貫通孔が下半分で太くなっている。

石製模造品に玉類と、斧型のものがある。(図 220の21-35、写33の 151、 152)
玉類は白玉2種があり、図 220の21-33の大形のもの、34、35の小形品があり、大形品は一見粘土とも思われるきわめて軟質の黄褐色砂岩を使い、ほのかであるのでしかとは判断しがたいが、赤色塗料で着色してある。小形品は滑石製で通有の模造白玉である。斧型のは図 220の37・38・写33の 152であるが扁平両刃を磨き出すものであり、模造品とすれば大形品に属す。

土器 土師器と須恵器がある。(図 121・122、写33の 147・148)
須恵には図 122のような大きな壺、図 121の4・5のような壺型のもの、図 121の3・写33の 147の甕、図 121の6の提瓶がある。土師には図 121の1、写33の 148の埴、図 121の2の坏がある。

自然遺品に白歯があった。(図 220の39、写33の 153) 遺存状態は良好であった。

3) まとめ

名廻東古墳は、犬田切川北岸に細長く延びる小丘陵端近くに構築された横穴式石室を内蔵する円墳であり、犬田切川上流左岸に点在する4基の古墳群中の1つであった。44年林道拡幅工事の際に発見された古墳で、道路の切通しになる墳丘南裾と羨道部が工事のために破壊された。しかし主体部でもある玄室はそのまま残されており、今回の調査に至ったわけである。

詳細にわたっては関連項を起しふれてきたが、本項とすればまとめの意味を含めて所見のいくつかをかかげておきたい。

1つは、残されていた墳丘規模や、林道工事によって露呈、消滅した石室の一部などから判断して、その石室・遺物などの残存状況はあまり期待できないのではないかという予想を、はるかに越す良好な状態で関係者一同を驚かせたことである。N-6°-Wに長軸を置き、5.60m×1.40mの棺床平面形で、1.70mの高さを持つ玄室と、消滅していて測り難いが確実に1.50m以上の羨道部を持つ横穴式石室は、上伊那地方での発掘例とすれば最大の規模を誇るものであると同時に、欠損部はあるが、羨道・玄室をそなえた横穴式石室の好例として記録し得た点は貴重であった。

2つは、中央道用地にすっぽりはいつてしまう関係上、できる限りの細部にわたる調査が要求されていた。そこでは全面的調査方法が講じられねばならないのはもちろんであるが、特に石室構築の状況を細部にわたって観察することを重点の1つにした。石室の長短軸に合わせて畦畔帯を残し、他は石室石積を残して封土を剥ぎ、石室・墳丘構築法を復元的に観察する方法をとった。この結果、丘陵成層の基盤になっている2枚目の、中期ローム層上面までを石室内棺床巾の3倍弱巾に拡を掘り下げ、壁体下部の基礎工事

ともいうべき最下段の石積は特に入念に、ロームを多めに黒色土を混じた土を築きこむ方法を取り、また石室が長大であることも計算に入れたのか、壁・天井の裏づめも礫塊を多量に使用し、その礫塊を黒色土を多めにロームを混じた土で築きこむという構築法のとられていたことがわかった。石室下部へはロームを多めに、また上部では黒色土を多めにした築きこみ土の区別には、どんな意味があったのか、ともかく区別しているところが興味深い。一方石室法量は、5.60m×1.40mが棺床平面形であったから35cm尺をとれば、16尺×4尺となり、高麗尺であれいづれにしても石室空間の構成に基本的設計意図がうかがわれる。

3つは、金属器を中心とする豊富な出土遺物についてである。44年羨道部調査の折りには、須恵・土師器の存在が知られていただけであるが、今回調査中に記録された遺物分布図へのドット数は、全部で160を越した。しかし後の整理段階で1つに接合されたり、同一個体のものであることなどによってこの数は訂正されたが、全長96cmの大刀から、2mm径の白玉にいたる大小の遺物は関係者一同を喜ばせるに充分の量であり、計測班はうれしい悲鳴の上げ通しであった。この遺物群全体をみると一部には比較的古い要素を残すもの、たとえば、刃区・フクラの強い鋒を持つ大刀、石製模造品などがそれであるが、大部分を占める鎌や他の刃子・金鏢・土器類などの相は後期古墳・それも7世紀代に通有な副葬品類といえる。ただ伊那谷の後期古墳に多い馬具類が見当たらないのが不思議である。

以上いくつかを総括すれば、すでに群集墳構築の時期に属するが、石室は長大、大きな鏡石を奥壁に備え、墳丘裾に小規模ながら周濶を残す構築であり、加えて豊富な副葬品を残すことなど勘案すれば、型式的には最終末までは降らない7世紀代の古墳として理解される。

この被葬者の丘をとりまく関連遺跡は明瞭ではないが、西から北に続く名廻・東方に広がる兎塚・南小出南原・犬田切川を越して西・南方を占拠する北丘・南丘の各遺跡などはその地縁として位置づいていたものと考えられる。

(宮沢)

10 名廻遺跡

1) 位置 (図5, 写36)

名廻遺跡は、伊那市西春近 3968 番地に所在する。(図5,写36)北から抬げられてきた白沢原扇状地の南端は、犬田切川によって、また後には犬田切上井の沢の削堀によって断ち切られる。この扇状地の現地表面は、江戸時代の押し出しによるといわれるきわめて新しいものである。西山麓を流れ落ちた白い花崗岩礫を多量に含む土石で、遠くから見ると、まこと、白沢原にふさわしい。この新しい土石流の覆りのすくない南端は、東に緩く傾きながら、犬田切川左岸に細長く延びる丘陵裾に合わさり、やがて南傾しなから犬田切川岸に至っている。白沢原の南端が、犬田切川左岸の小丘陵に合する手前に名廻遺跡は位置しているのである。標高は 725—735m を数えている西春近山麓部帯状遺跡群の一つである。

名廻遺跡の南には、小丘陵頂部に名廻東古墳以下 4 基の横穴式石室を持つ円墳が群集し、犬田切川に面した小段丘上には名廻南遺跡が、また北の小さな沢を越して白沢原遺跡がそれぞれ占地している遺跡分布濃密な所で、過去の分布調査でも資料性高い遺跡として評価されていた。

今回調査は、中央道センターライン・48750をAA基点としてCE35—59までのグリッドを設定した。地層はおよそ、ローム・黒褐色土・黒色土・耕土の順に堆積しており、ロームを切り込んだ平安時代の住居址1軒・溝状遺構1がみつまっている。

2) 遺構と遺物

ア 平安時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図43・写36)

遺構 遺跡南西端・西側巾杭ぎりぎりの所で発見されている。4.9×4.7 mの隅丸方形プランの竪穴住居址である。西から東に傾く地形面上に構築されたため、壁高は西が高く東に低くなっている。床面良好で、床面北・南縁に周溝があり、中央南よりに90×105cmのピットがある。東・西壁中央の床面が焼けており、西壁に接する方が焼けが強い。東側にも一時はあったのだが、何らかの事情により西壁側へ移動したと思われる。柱穴は四隅に各1本と、東・西のカマド両脇に2本ずつ掘られている。

遺物 遺物には土師甕(123図1—5)・坏(同図6)・須恵壺(同図7)・灰釉椀(同図8・9)がある。図上復元不能なものまで合わせると、土器類の量は非常に多く、その個体数をまとめてみると、床面で土師甕10・坏5・須恵壺1・灰釉椀7・瓶1・覆土では土師甕3・灰釉椀3を数えることができる。(福沢)

イ) 溝状遺構 (図43、写36)

遺構 遺跡北端、北隣りの白沢原遺跡と境をなす沢近くで発見されている。最大巾 180cm、平均 120cm 一番深い所で30cm、平均15cmほどの深さを持つ溝状の遺構で、長さ15m までが確認された。全体とすれば西から東に緩く傾く地形面であり、15mの溝状遺構は南西から北東に向って傾斜している。中央部が2ヶ所巾広になり、そこを中心に掌大からやや大きめの、比較的風化の進んだ花崗岩塊が10ヶほど並んでいる。ローム層を切込んだ溝状底は、アバタ状にくぼむ所があり、全体的には黒色腐植土が堆積するが、くぼみの中はこの黒色土と砂質の土が混じるか、または砂質の土のみがたまっている。溝底の広い所はロームがかたくしまり、黒色土には木炭の混入が認められる。

遺物 溝状底まで堆積する黒色土下部か、溝状底に接して土師器片が数10点検出されている。いずれも磨滅した角を持つ小片で、甕・杯型の破片が多く、個体数では10点近くになるらしい。灰釉陶片も含まれており、南の1号住居址構築と時期を同じくするものであろう。(宮沢)

3) まとめ

名廻遺跡は、名廻古墳群に近く、また過去の分布調査からの所見ではかなり期待されていたが、結果的には平安時代の住居址1軒と、溝状に細長く続く遺構が1条発見されるにとどまった。中央道用地外西方に遺跡の中心があるためと思われる。

住居址でカマドが移動されたと思われるのは、本址の外に名廻南遺跡1号住居址で窺うことができた。どんな事情によるものか即断はできないが、予測されるケースとすれば、同一竪穴住居が時期をずらして使用されたか、忌諱的な意図によるか、ないしは風向など機動的な問題によるかなどであろう。出土遺物の様相からすれば、時期をずらして使用したとは思われない。2つめか3つめのケースにあてはまるように考えられるもので、名廻南の場合は南東隅に構築しなおしているのは、もともとが北壁中央にあったのだが、ちょうど名廻東古墳にむくことからくる忌諱的な意図によるもののように思われる。類例の増加を待ち検討すべき問題であろう。

名廻遺跡は、現在犬田切上井の川が堀削されたために、名廻東古墳の立地する丘陵とは切り離された格好になっているが、この人工井の掘られる前は地形的には地続きであった。今回調査の折り、古墳の墳丘東側で縄文時代の遺物が発見された。原地形を想定し、この遺物は名廻遺跡の中へ包括してふれておきたい。図124の12-19がそれである。12-17は同一筒体の繊維を含む粗大楕円押型文である。口唇に長い刻目を入れてあり、19は繊維を含まない楕円押型文である。(福沢)

11 白沢原遺跡

1) 位置 (図6、写36の167)

遺跡は伊那市西春近白沢4000の1～2にあり、名廻遺跡とは小川を境に接してその北に位置する。地名の示す様にこの地は花崗岩礫とそれの白い風化土砂の堆積する、傾斜の強い扇状地面に立地している。礫混りの土砂の堆積は2～3mにもおよび、地元では江戸時代前期ごろの押し出しによるものと伝えられている。その下によく遺物を包含する黒土層があり、ロームに至る。

調査はそうしたこの遺跡の特殊な性格のため、初めグリッド法によったが途中からトレンチ法に変更せざるをえなかった。トレンチは幅2mで計4本を、A～Cトレンチは斜面の傾斜に平行に、Dトレンチは傾斜に直角に設定した。

2) 遺物 (図44・124・130)

土器・石器とも出土量は少ない。

土器は主としてAトレンチ黒土層より出土したもので、縄文時代中期の土器片である(図124の1～11)。他に押し出しの砂礫中より数点の土師器・須恵器・灰釉陶器・中世陶器片がある。石器は縄文時代中期土器片に伴なって出土した打製石斧(図130の6)と磨石(7)がある。磨石はもっと時代がさかのぼり早期ものかもしれない。

3) まとめ

中央道用地内には何らの遺構も発見されなかった。遺物包含層である黒土層はAトレンチでは40cmほどであったが南へしだいにうすくなりBトレンチで20cm、Cトレンチでは全くなくなってしまふ。Dトレンチではまた60cmほど堆積している。このこと及び遺物の出土状況から見て、遺跡の中心は用地外山ぎわの斜面あるいは東方に広がるゆるい斜面にもあるものと考えられる。(唐木)

12. 山寺垣外遺跡

1) 位置 (図6、写37の168)

本遺跡は伊那市西春近白沢3410番地一帯にある。南は白沢洞と北は小戸沢川の氾濫により形成された山麓扇状地の扇測部に位置し、範囲は扇頂部は権現前山、扇端部は白沢部落に及んでいる。付近一帯は両河川、あるいは湧水を利用して水田耕作を行なっている。

グリットは49260をAAとしてCGまで、39～56に設定した。なおここには開田の為に破壊されたと思われる場所が認められた事より、その部分は未調査である。

遺構はB地区で溝状遺構、C地区西端では土壌が検出されただけである。遺跡地は西から東へ傾斜しているために、西は浅く、東は深くローム層まで2m程はかる。

層位は上から順に、耕作土(第1層)、水田の地場(第2層)・褐色土(第3層)・ホルンヘルスを含んだ黄褐色土(第4層)・ローム層(第5層)と成っており、ローム層を追求してみると、複雑多岐な起伏が認められ、ルート中央部は陥没状態を呈している模様である。

2) 遺構と遺物

ア) 1号土壇 (図44・125・130、写37の169)

遺構 台地の中央道用地西端に発見され、ローム層を掘り込み、南北105×東西95cmの円形プランを呈する土壇である。壁は西から東へ傾斜している扇状地の為に、西は高く東は低くなっている。床面には人頭大程の花崗岩が2個密着して発見され、そのうち1つは焼けていた。

遺物 2つの石に密着して加曾利E式土器(図125の3)がつぶれた状態で出土した。(小池)

イ) 1号溝址 (図44・125、写37の170)

遺構 遺跡中央で、二つの河川の扇状地の、左右側の合した凹地を概ね西より東に流れる溝で、延長8m、幅員150cm深さ40cmである。水田造成地層のため、耕土より120cmの地点で、溝の底部には拳大の小石が硬く貼りつけられて、その間隙に鉄分の酸化物が固りになっている。水田造成のため地形は変化し、地層は攪乱されていて、不明の点が多い。特に東端の部分は不明確である。

遺物 溝の中から出土した土器は、指頭大のもので、摩滅しているものが多く、覆土より縄文中期の石器・土器が出土し、また網代底部(図125の2)も出土した。(辰野)

3) まとめ

山寺垣外遺跡は明治時代の開田の際に破壊されたとみえて、結果的には土壌1基と溝状遺構1基を検出したのみである。土壌は縄文時代中期後葉（加曾利E期）のものである。また溝状遺構は、底に多くの鉄分の沈澱がみられ、長時間水が流れていたものと思われる。溝中より縄文時代の土器片がわずかにみられるだけで、時代決定の遺物は確認できなかった。

その他の遺物をみると1片だけではあるが、縄文時代前期の木島式土器が出土している。また縄文時代中期初頭土器片（図125の4～13、17～32）同晩期土器片（1、15、16、33、34）も出土している。更に時代はくだと、中世の青磁片（図212の10、11）銅板をまきつけ、刀子の柄としたと思われる金属製品（図221の14、写37の171）や鉄片（図221の12、13）が発見されているが、これはかつて用地外西方200m山麓に寄ったところにあつたといわれる深妙寺跡に関係すると思われる。（小池）

13. 細ケ谷B遺跡

1) 位置 (図6、写38の172)

伊那市西春近小出3359番地にある。権現山の東山麓、ふところ深くより東へ細長く発達した扇状地の扇中央部に位置して、南側は小戸沢川、北側は戸沢川支流のヒデリ沢にはさまれた、緩やかに傾斜する台地上にある。扇状地中央を林道が走り、遺跡の上部には細ケ谷部落を有する。また台地は開墾されて、水田ならびに桑畑となっている。

中央道は遺跡を南北に横ぎっており、標高735～740mで、川との比高は約10mほどである。分布調査では台地の北部を遺跡に指定してあるが、発掘前の調査では台地のほぼ全面にわたって地表より遺物を集取したので、発掘の範囲を拡げた。センター49480mをAAとしてAE～FRまで、36～60にグリットを設定した。遺構は土壌19個、ピット群・溝、配石址の検出をみたが、多くはE～F地区、台地北部のヒデリ沢を見下ろす、いくらか北に傾斜した地域にまとまってみられた。

地層は、西山麓より供給されたホルンヘルス礫を多量に含んだ土砂の、たびかさなる押出しにより複雑である。遺構の集中したF地区では、上から耕作土、黒色土、茶褐色土、黄褐色土、さらにホルンヘルス礫を多量に含む青黄褐色土の順となっている。遺構は第3層および第4層から検出され、また第4層表面からは押型文土器片を多量に出土している。

2) 遺構と遺物

ア) 土壌

土壌1 (図45、写38の76) 遺跡の南端、山寺垣外遺跡に近いところにあつて、第3層含礫粘質土を基盤としている。プランは180×410cmで南北に長い三角形をしており、深さは50cmである。西壁は南北に直線的で垂直からやや内側へ入り込むように掘られている。東壁は丸味をもって、中央部で突出しており、西壁に向かって緩やかに傾斜している。また壙内南寄りにも小さなピットを伴う。覆土より少量の炭化物を検出し時期不詳の石製円板一点が出土している。

土壌2 (図45、126) 遺跡の南西部に位置し、その南には配石址を隣している。第2層茶褐色土を基盤とし、110×125cmの円形、深さは35cmである。壁は傾斜をもって掘りこまれ、底部は平らである。覆土よりわずかながわ土器片 (図126の1) の小さなものを検出した。

土壌3 (図45) 遺跡のほぼ中央に位置し、第2層砂礫土を基盤としている。プランはI号土壌と似ており、305×190で北西側が直線的で長く、南東に突出した三角形を呈している。深さは50cmで、西から北東の壁はほとんど垂直であり、東から南の壁はなだらかに傾斜している。南東の突出部に小ピットを持ち、底部はいくらか凹凸がある。遺物はない。

土壙4 (図45. 126) 遺跡の北部に比較的まとまって発見された16個の土壙群の一つで、南東端に位置している。第3層茶褐色土を基盤とし、330×190cmと東西に長く、北へふくらんだ半円形で、壙の南側は高さ20cmほどのマウンド状になっている。深さは105cmで南壁は垂直・北と東壁は傾きをもっている。底部は西より緩やかに傾斜しており、礫混りである。覆土より多量の炭化物を検出し、また縄文中期土器片(踊場式、大歳山式)・(図126の2～5)と打石斧1点を得た。またマウンド状周辺からも中期土器片が多量に出土している。

土壙5 (図45) 土壙群の南西端に位置し、北に6号土壙、南に溝を隣している。第3層茶褐色土を基盤とし、プランは100×260で南北に長く、西にふくらんだ半円形で、東には高さ30cmほどのマウンドを伴う。深さは40cmで、東壁は垂直に近い急傾斜で、20～25cm大の石が組み込まれている。底部は細長く狭い。遺物は縄文晩期土器片が1片出土している。

土壙6 (図45・126) 5号土壙の北東部に隣接して位置し第3層茶褐色土を基盤としている。高さ40cm、径100cmほどのマウンドを東西からはさむように、二つの三日月形の落込みからなり、東側が大きく80×145cm、深さ40cmで、西側は25×165cm、深さ15cmとなっている。マウンドを造る側の壁はいずれも垂直に近く、反対側は緩やかに傾斜している。遺物は縄文早期(7)(格子目押型文)、中期(8・9)晩期(6)の土器片を各1点ずつ検出した。

土壙7 (図45) 土壙群のほぼ中央にあつて、第3層茶褐色土を基盤としている。200×215の円形深さ60cmで、壁は傾斜をもち、南側では幅40cmほどの段になっている。底部は自然地形に沿って西から東へわずかに傾いて、石がくい込んでいいる。覆土より少量の炭化物を検出し、周辺から多数の押型文土器片が出土している。

土壙8 (図46. 126) 土壙群の北部で、地形がいくらか北に傾斜してところに位置している。傾斜に沿って南北に細長い土塊があり、それによって東西二つの落込みに分けられ、東側はさらに南北に分かれている。西側土壙は100×320cmで土塊を造る壁は垂直。西南壁は緩やかに傾斜し、北の端で25cmと最も深くなっている。東側土壙は南が75×100cm、北が110×155cmの楕円形プランで、深さはどちらも25cm。土壙を造る壁の傾きは急である。遺物は縄文早期土器片(押型文山形2、格子目2、撚糸文1)(図126の11～14)が出土している。

土壙9 (図46・126) 土壙群の西部に位置し、その北にはピット群を隣している。第3層茶褐色土を基盤とし、190×170cmの楕円形で、円形のもの重なったようにみうけられ、大小4つの底部があつて深さはいずれも20cmである。遺物は覆土および土壙周辺より縄文早期押型文(16～19)および縄文後期土器片が少量出土している。

土壙10 (図46写38) 5・6号土壙と9号土壙との中間に位置する。第3層褐色土を基盤とし、360×135cmの東西に長く北にふくらむ三日月形を呈している。南壁は垂直ないしはいくらか入り込んでおり、東西・北壁は中央に向かって傾斜している。深さは90cmで、底部は平らである。覆土には人頭大からそれより大きい石が多数埋っており、少量の炭化物も検出したが、遺物はない。

土壙11 (図46) 土壙群のほぼ中央、7号土壙の西に位置し、第3層茶褐色土を基盤としている。168×185cmの円形で、壁は傾斜をもち、さらにらして崩れやすい。深さは95cmと深く、底部は平らである。遺物は認められない。

土壙 12 (図46) 7号土壙の北東に隣し、第4層黄褐色土を基盤とし、第5層青黄褐色土にかけて掘りこんでいる。南北に200cmと長いひょうたん形で、二つの底部をもち北側の壙が大きくて東西は129cmある。壁はすり鉢状に傾斜し、深さは北が45cm、南は20cm四浅い。遺物は認められなかった。

土壙13 (図46) 8号土壙の東に位置し、第3層礫混りの茶褐色土を基盤としている。40cm大方形の変成岩を隅にして、中心に数個の礫と青色粘質土を組み入れたように境をなした肺状の二つの落込みで一体をなしている。規模は西側が大きく80×170cmで深さ25cm、東側は80×150cm、20cmの深さで双方とも舟底状を呈している。縄文早期土器片(押型文格子目1)・黒曜石片1と珪石3個が出土している。

土壙14 (図47) 13号土壙の北にあって第3層、礫を混じえた茶褐色土を基盤としとしている。プランは215×160cmの楕円形すり鉢状。東壁には20cmと30cm位の二個の石があって急傾斜で、南北西壁は緩やかである。遺物は認められない。

土壙15 (図47、126、写38の177) 12号土壙の西に位置し、第4層黄褐色土を基盤としている。165×175cm、深さ50cmの円形すり鉢状で、覆土にはこぶし大の礫がかなり埋まっており、少量の炭化物も検出した。格子目押型文土器(図126(17))。撚糸文土器片1と黒曜石片2点の出土をみた。

土壙16 (図46) 8号土壙の西に17号土壙と並んで位置する。プランは165×175cm、深さ50cmの円形たらい状で、南から東の壁は緩やかに傾斜している。底部は平らで、遺物は認められない。

土壙17 (図47) 16号土壙の東に隣して位置し、第3層茶褐色土を基盤としている。170×175cm、深さ50cmの円形すり鉢状で底部は狭い。壁は凹凸が激しく不安定である。遺物は認められない。

土壙18 (図47) 16・17土壙の南西にあって、第3層茶褐色土を基盤としている。プランは106×245の南北に長い楕円形で、壁はほぼ垂直となり、西側ではいくらか入り込んでいる。深さは50cmで底部は平らである。押型文土器片格子目1・楕円1と無文土器片3点を出土した。

土壙19 (図47、写38の174) 13号土壙の南にあって、第4層黄褐色土層を基盤としている。70×130cmと南北に細長い舟底状を呈し、深さは45cmで、壁には多少の凹凸がある。覆土にはこぶし大からそれ以上の礫が多量に含まれており、押型文土器片格子目1と石器片2が出土している。(深沢)

イ) 1号集石址 (図48)

台地の中央用地西限に位置し、褐色土層面に南北160cm・東西160cm程の規模を有し、円形状に拳大から人頭大のホルンヘルスの角礫や円礫を配列してある。配石は外周がやけ、内側へ向かって若干傾斜がみであり、下部は黒土がつまり、土壙状になっている。黒土に混って拳大程の礫の炭化物を検出したが、遺物は出土しなかった。(小池)

ウ) 1号溝状遺構 (図47)

遺跡中央の細ヶ谷林道より東北に傾斜する斜面に、西南より東北に向つて流れる延長720cm、中央径で110cm、両端径で80cmの中ふとりの溝が、表土より50cmのローム層を抉っている。左側は50cm右側25cmとなつて斜斜する。西南上部に径50cm位の石が2個並んでいて、その間から溝は発生している。東北の尻の部分に、径120cmのマウンド状の円形ローム土塊があり、その周囲に、深さ35cmの周溝となつて終つている。遺物は縄文後期土器片2ケのみ。(辰野)

エ) ピット群 (図48・126)

調査地の北側台地上西縁に位置する。地形は西より東へかなりの傾斜を示す地点で過去数回の押し出しにより、黒土・褐色土・黒土と層位は重なっている。その中へ流石が多く混っている。近接の遺構は南に9号土壌がある。遺構の範囲は約東西が10m・南北8mで、その中に不整形なピットが14個ある。大きなものは200×100cmで、底部は摺鉢状が多い。小さいものは30cm大で、複雑に組み合っている。褐色土層内へ黒土から掘り込んでいる。壁は不安定なものが多い。底部は平均的にあまりよくない。付近のグリッドよりは縄文後期の土器片・黒曜石片が出土している。遺構内より出土遺物は少なく、縄文後期の壺の口縁部の破片が2点出土した。(図126の21~40) (根津)

オ) その他の遺物 (図127~130・137・214・215)

遺構外出土遺物には、縄文早期から晩期にいたるものがあつたが、特に目を引くものに押型文・捺糸文・織維土器などの縄文早期の土器群であり、地区でいえばE・F地区にわたるが、土壌の集中するF地区が量的に多かった。このあたりは、細ヶ谷扇状地の扇央部北端に位置し、隣の百駄刈遺跡側へむかつて北面する傾斜地になっている。地層々序は場所によっては多少の差異があるが、耕土・黒色土・茶褐色土・黄褐色土・ホルンヘルズ礫を含む青黄褐色土という層序を示し、縄文早期の遺物は茶褐色土と黄褐色土を中心にし、黄褐色土上面に集中する包含状況を示していた。早期の土器は便宜的に縄文、押型文、捺糸文、条痕文系の4つのグループに分けておきたい。

縄文土器 (図128の20-24) は5点ある。20・22は同個体のもの、灰褐色・石英粒・雲母を混じた胎土、微量の繊維を含むものである。図断面が適正でないが、口辺が大きく外反する深鉢型の形状であつたことがわかる。21・23・24ともに少量の繊維を含有し、石英・長石粒が含まれる。この類は、ピット群出土遺物中にも混じっている。(図126)

押型文土器、(図127・128の1・2) 全体で100点弱になる。量的内訳は、格子目・山形・楕円・市松文の順になる。格子目文のものは大小の方形・菱形・更に格子目区画が太いもの、細いものなどに文様を細別することができる。(127の1-42) 色調は茶褐色ないしは暗褐色で、キラキラ輝く石英微粒を多量に含む胎土に特徴がある。厚さ5~10mmほどにわたるが、8mm前後のものが最も多い。带状施文状にみえる拓本もあるが、破片を個体分に還元する作業ができなかったこともあり施文法の分析は不十分である。山形文のものは、山と谷の急なもの、緩やかなもの、巾の広狭・横位・縦位または山と谷とが切れていて綾杉状になるもの、一種の変形で山形が平行せず、全体とすると菱形になるもの、下段の谷の上へ上段の山がくるものなどかなりバラエティに富む。一方施文法も統一的でなく、施文原体の回転方向が一定なものとは一定でないものがある。色調灰褐色のものは石英粒多く、数はすくないが、127の53は茶褐色で雲母片を多く含む傾向がある。5~1.2mmほどの厚さであるが8mm前時のものが多い。器形の典型は15号土壌出土の(図126の17) 深鉢であろう。

楕円文には陰陽の両方がある。陰の逆楕円文(127の44など)はむしろ格子目文の中で分類すべきかも知れない。陽のいわゆる楕円文は穀粒状のものと、(127の70-72、128の1) 粗大なものがある。穀粒状のものは胎土に石英粒を多く含み、粗大なものは繊維を含んでいる。

市松文の拓本はかかげてないが、126の19とほとんど同じで、長方形か方形に限られ、点数もすくない。

撚糸文土器（図 128の3—19）。量的にはすくなく、個体数も2・3であるらしい。3—6は細い撚糸で、10—12はや、太い撚糸を、13—19は極太のものを押圧している。3—6は灰褐色、長石粒を胎土に含む。他は茶褐色、かたい焼成で繊維を含んでいる。なお10は口唇部に棒状施文具を押しつけた刻目を入れている。

条痕文系の土器（図 128の25—44）。便宜的に条痕文のはっきりしないものがあるが一括した。総じて灰褐色、多量の繊維を含む一群である。表裏に条痕をもつか、一方にもち、刺突・沈線・細い隆帯をめぐらす。また口唇を残すものは刻目や押しきなどで加飾するものが多い。28は波状をなす口縁の突端へ、いわゆる茸状の把手をつけるものである。いずれも早期末葉の茅山式、鶉ヶ島台式系の土器である。

早期の土器以外では、中期初頭の竹管文を中心とするもの（図 129の1—7）、縄文と押し爪型を含むものなどと、晩期末の土器（図 129の9—15）がある。

石器も各種のものがあるが、早期土器類に伴うと思われる特色あるものにふれておきたい。図 130の20・21は硬砂岩製のものであるが、河原石の先端を使う礫器。図 137の11—17は硬砂岩またはホルンヘルスを用いた特殊磨製石器である。図 214の3・4・6—9は剝片石器の一群。4は細ヶ谷台地最下層のホルンヘルス礫を含む青黄褐色土上面から発見されている。図 215の7・10・21・24の石鏃が検出されているが、脚を対称的に長短に作り出す古い型式を示すものがある。（宮沢）

3) まとめ

調査の結果住居址は発見されなかったが、19基の土壌とその他の遺構を検出すると共に、多数の押し型文土器片と繊維土器、撚糸文土器片の出土を見、この地域の縄文時代早期における貴重な資料を得ることとなった。しかし、遺構の性格を断定する決め手となるものは残念ながら残されていない。

遺跡の南方に検出された三つの土壌と配石址は遺物がなく、時期不詳であるが、北部に集中した16基の土壌のうち、縄文早期のもの6、中期1、後期3、晩期1が遺物より判明した。早期土壌の15、19号は第4層を基盤としており、他に遺物のなかった12号だけが4層を基盤としているが、これも同時期のものではないかと推測される。その他の遺物はすべて第3層を基盤としている。

第4層表面には、礫に混じって多数の押し型文土器片が出土し、後期土壌の覆土にも入り込んでいるほどであった。しかし、比較的個体としてまとまっているのは15号土壌より出土した山型文の深鉢だけで、多くは小片である。これらが上からの流れだとすると、中央道用地の西側台地には縄文時代早期の生活を知る遺構が、かなり残されているものと思われる。（深沢）

14 百駄刈遺跡

1) 位置 (図7, 写39)

百駄刈遺跡は、伊那市西春近宮の原地籍に所在する。(図7、写39) 権現山から流出する戸沢川は、西春近地区を縦割りにする3河川のうちの一つである。山壁を離れるとその口元から扇状地形を東へ展開させながら、しばらくは宮の原部落を流れるが、やがて左岸は村岡部落、右岸は中村部落に分ける程、谷を深く削るようになる。このあたりまでくると西方から延びていた扇状地形面はもう端部になるが、それにかわり天竜川による段丘面が連続するようになる。段丘を出はずれて下島部落までくると、地形は一変じて天竜川旧氾濫原を天竜川にむかつて流れ込むことになる。

百駄刈遺跡は、戸沢川本流が山を抜け出す所の右岸にあたり、標高725—735mを数える。戸沢川本流が山を抜け出して230mほど東へ行ったあたりで、南から流れ込む支流を合するため、この合流点を基にして地形をみると、ちょうど逆三角形の頂点に合流点がある。本流と支流が山を抜け出す手前は、ヨドガ沢ヒデリ沢で、その中間に西から延びる権現山の東麓を山王の尾根と呼んでいる。つまり百駄刈遺跡は、西に山王の尾根を負い、南側をヒデリ沢・北側をヨドガ沢で切られる形で舌状に東へ延びる台地の上に位置するわけである。

過去の分布調査では灰釉陶器片が採集されている、百駄刈の東・舌状台地の先端は中原遺跡と呼ばれる縄文後期の遺跡として知られていた所でもある。ヒデリ沢を越すと細ヶ谷遺跡群が南に広がり、ヨドガ沢を越すと大境・宮の原遺跡があり、西春近地区における山麓帯状遺跡群の中でも特に濃密な分布を示す区域といえる。

山王の尾根が急傾斜で落ちているため、この舌状台地へ供給する土石も多く、何回にもわたって流下させたらしく、地層々序は複雑であった。遺跡南側と中央部、北側の高まりのある所と大きく分けるとわかりやすいが、中央部のものだけをみると、耕土、黄褐色土、黒色土、含礫灰青色土となり、後背地が片状ホルンヘルス帯になっている関係上、ホルンヘルス礫の転石が多く、また各層とも大なり小なりこの礫もじくは細粒が混じており、地層判別がむずかしい。

今回の調査では、49820mをAAとしてCE、36—59までグリッドを設定した。(宮沢)

2) 遺構と遺物

百駄刈遺跡では、縄文早期の土壌、後期の住居址・配石址・ピット群・特殊遺構・土壌・平安時代の住居址などの遺構と、それらに伴う遺物が確認された。遺構では、縄文後期の立石を伴う配石址と、それととりまき分布する住居址・土壌など、同一時期における集落構造の一端を窺い得る好例を、またそれに伴う多量の遺物と、縄文早期の土器類は資料性の高いものである。

ア 縄文早期の土壇と遺物

ア) 8号土壇 (図53・147)

6号住居址北側の傾斜面に位置する。南北135・東西115cm・深さ40cmで、褐色土層からローム層内へ掘り込んだもので楕円形である。壁は北側が40度の傾斜をもつが、他は垂直に近い。西壁の一部は樹木のため攪乱されてよくない。また流石が中間にはまり込んでいた。底部は平で固く叩いてあり、明瞭にて良好である。遺物は縄文早期の押形楕円文の土器片が少量と縄文後期(図147の22・23)の土器片がわずかに出土したのみであった。(根津)

イ) 9号土壇 (図53)

遺構 北側の土台が南へ傾斜をはじめめる所、10号土壇と隣合わせになる。2m径の楕円形、浅いプランを示す土壇で、壇内覆土中に木炭粒を含んでいる。

遺物 付近からは押型文、繊維土器がでている。

ウ) 10号土壇 (図53)

遺構 9号土壇の南側に並んで発見されている。径1.2m・深さ1mほどの底の深い土壇である。

遺物 付近からは押型文その他の早期土器が出ている。

エ) 13号土壇 (図54)

遺構・北側の台地の・西巾杭近く・15号土壇と隣合せている。1×0.8m・深さ20cmほどの規模を持つ。基盤になっているホルンヘルズ礫を含む褐色土を掘り込むもので、壇内には黒褐色の覆土がたまっている。

遺物 押型文土器片がでている。早期の土壇である。

オ) 15号土壇 (図54)

遺構 13号土壇と隣合わせに、遺跡北端で発見された。径80cm、深さ35cmほどの規模を持っている。褐色土を掘って作ってある。

遺物 黒褐色覆土中に押型文土器が含まれていた。

(宮沢)

イ 縄文後期の住居址と遺物

ア) 1号住居址 (図49・131・132・136・137、写39・40・42)

遺構 台地の南縁・遺跡の最南にあり、2号住居址とは2mはなれてその東に位置する。特殊遺構の南にあたる。小礫を含む黒色砂質土を掘りこんだ円形竪穴住居址で、その規模は5.10×4.80m。壁は西で20cmを計り東は次第に低くなり東壁ではほとんど高さが無い。南壁でははっきりした立ちあがりをもたない。住居中央に60×70cmの石組炉があり、中の焼土中より骨片が出土している。何の骨かわかっていない。床は全体に焼けて、その上に炭化材が堆積しており、この住居が火災にあったことを想像させる。炭化材は各柱穴を結ぶ方向に分布し中には板状のものもある。東側では耕作による攪乱のためか炭化物は

ほとんどない。柱穴は対角線に4本と東側に1本の計5本がありうち西側の2本には柱と思われる炭化材が縦に10cmほど埋まっていた。住居東側壁際には偏平な大石を3枚敷きつめてあり、そのすぐ南に径70cmの浅いピットを掘っている。この方向に入口があったものと考えられる。

遺物 土器・石器と骨片がある。土器は縄文時代後期のもので、小型土器2個体(図131の15・16・写42の198・200)を除いて全て破片である。精製・粗製があり、鉢形土器(1・2・12・13・20・21)・注口土器(14)が多い。石器は覆土・床面から石錘と石鏃(図215の36)が出土しているほか、円盤状石器(図136の17)が1点と、打製石斧(図137の19・20)・磨製石斧(25)・凹石(図136の12~16)・横刃形石器(図136の1・137の21~24)もかなりの数が出土している。骨片は炉中からと住居南半分のうちから発見されているが、何の骨であるか不明である。(唐木)

イ) 2号住居址 (図50・132・133・134・135・136・138・215, 写39・43)

遺構 遺跡の南端、戸沢川の支流に面した台地であって1号住居址の西に位置し、北西に3号住居址、北東に特殊遺構を隣している。ホルンヘルス礫を混じえた灰黄色土と、その下の黒色土とを基盤とした径500cmの円形竪穴住居址である。壁はほぼ垂直に掘りこまれているが、北側では押し出しのためか、崩れたように傾斜している。また南東部には除去できなかったのであろう大きい石が壁にくっついている。壁高は西壁で35cmあるが、基盤傾斜のため、東壁は認められない。柱穴は4個で等間隔に並び、北と西の壁際には3個のピットがある。住居中央にはホルンヘルスで構築された直方形の石組炉があって、少量の焼土と炭化物、骨片と黒曜石片を検出した。また炉の底部には一面に土器片が敷きつめられている。床面は柔らかくて判然としないが、ほぼ方形で平らな7個の石が炉を囲むように北から西へL字型に、床と等レベルに並べてある。

遺物 土器では縄文時代後期の深鉢(図132・122)・注口(図133の7~9)・小形土器(写42の199)・石器は打製石斧(図18の18~22)・磨製石斧・横刃(136の23~26・138の11・12)・石鏃(図215の27)・凹石(図138の27~29)・磨石(図138の30)と多量の石錘(図138の3~26)を、また北側にある斜めに掘られた深さ30cmほどのピット底部からは土偶の破片(図133の17・写43の204)が出土している。(深沢)

ウ) 3号住居址 (図50・138~140)

遺構 遺跡南側、後期住居址集中地区内の1軒である。A148-50グリッドで、A地区での層序第3層礫混り褐色層へ切り込むものであるが、西側山麓部からの土石流のために、西壁の一部が確認されただけで全体プランは不詳。柱穴4本とや、西に扁して石囲炉の一部及び焼土が検出されている。炉内と思われる焼土中に少量の骨粉が出ている。床面、壁面ともに明確でないが、石囲炉を中に、4本柱穴のあることなどから、住居址であることは確かである。

遺物 少量の土器と石器が出土している。図140の1-5が土器。石器には磨石斧(図138の31・32)打石斧(図138の35)、横刃器(図138の33・34)、石錘(図138の36・37)、凹石(図138の38)などがある。縄文後期中葉の遺物である。(福沢)

エ) 4号住居址と14号土壌 (図50・54・138・140～143・146・147・152・写40の183)

遺構 調査地中央東縁に位置し、小台地傾斜面で、黒土層は深い。住居址のプランは東西390cm×南北415cmで、黒土層内へ掘り込んだ竪穴式住居である。壁は垂直で軟らかく、西壁の一部は不明である。床面の状態は、黒土のためか、軟弱で不良である。また流土のためにあれていることも一因であろう。それに西より東にかけて、わずかに傾斜があり、中央はやや低い。柱穴は4ヶ、不等間隔にならんでおり、そのうちのひとつは北壁に、他の3ヶより深く掘り込んである。炉はプラン中央よりやや北寄りに位置し、粗悪な当地のホルンフェルスを使用した石囲い炉であるが、その一部は抜きとられている。炉縁石の内部は焼けてもろく、剝脱がみられる。炭化物が少量検出された。

4号住居址の東側に14号土壌がある。プランは径85cmの円形で、黒土層内を50cmの深さで掘り込んでいる。壁は垂直で安定しており、底部は褐色土層へ達して、かたくたたいてある。この土壌は4号住居址と近接し、その関連性は強い。

ほかに近接する遺構は、南傾斜面上に石囲遺構があり、南に配石址が点在する。

遺物 住居址より硬砂岩、緑泥岩製の大小29ヶの石錘(図142の8～36)が出土し、北壁付近より破損した凹石(図142の4～7)、緑泥岩質磨製石斧(図138の39～41)が出土し、ほかに横刃形石器(図142の1)、磨石(図142の2・3図146の1)が出土している。土器は台付土器(図141の4)注口土器(15)や深鉢が出土し、土偶の足の部分も出土した。

土壌からは石棒片(図152の11)のほか深鉢(図147の25・26)注口土器が少量出土した。住居址と同じ、縄文時代後期のものである。(根津)

オ) 6号住居址 (図49)

遺構 調査地北寄りの傾斜地に位置する。黒土層は浅く樹木の根に依り付近は荒れている。近接せる遺構は南に石囲い遺構あり、西に土壌群が点在する。プランは不明であり、床面と思われる部分が一部固く叩いてあり、柱穴は検出することはできず、炉は現地の粗悪な石を使用した石囲い炉であるが、その規模は小さく、炉縁石の一部は抜き取られている。内部よりは炭化物を少量検出した。推定プランは400cm内外の円形で、壁は低く、黒土層へ掘り込んだものと思われる。

遺物 縄文後期の土器片がかなりの数量と黒曜石片少量出土した。(根津)

ウ 縄文後期の配石と遺物

ア) 配石址 (図54～56・149～152、写41)

遺構 遺跡南縁の一号住居址の東に密集する土壌の北で、用地東端ぎりぎりに、南北10m、東西7mの範囲に表土より100cmの黒褐色土層に自然流入の礫群の中に石棒配石が発見された。表土より60cm位までは石、礫は全然なかったが、100cmに達して自然礫層となる。

この配石をとりまく集石はほとんどホルンフェルスで、一人でか、えられない大きなものから、人頭大、拳大

のものまでであるが、大きなものは比較的少ない。礫群の中央東寄りに最初、緑泥岩の脛節形の磨製石棒が東北に40°位傾いて発見された。傍に自然石の大きなのがあり、流入時におしたおされた形である。この石棒を中心に、西北に230cmより自然石のふたつに折れた石棒が発見され、東南に自然石のもの、東北に二本並んで自然石が発見された。4号石棒に密着して安山岩磨製石棒の頭部が入出したが、続いて1号石棒の東より出土した安山岩の磨製石棒が折れて出土したが3m離れた頭部と同一筒体であった。西北の端から有頭小石棒が出土した。上部に発見された2号石棒は南のヒダリ沢の氾濫の折に流入した土砂によって若干押されたものか、集石上に浮いていた。他の石棒は一様に東北に倒れてゐたが褐色土層に密着している。この配石の方向は、磨製石棒二本を中心に東面している。この配石は縄文後期の祭祝場で何年もの間にだんだんに建立され、集落の人々の信仰の中心であったと考へられる。

遺物 この配石址より出土した石棒は、有頭小石棒(図152の4)・自然石石棒(図150の2・4～6)成形した石棒(図150の1・3)あわせて7本になる。ほかに打石斧(図151の6・7)・横刃形石器(9)・磨石斧(8・10・11)・石錘(12～20)・磨石(21～25・図152の2・3・5・6)、凹石(図152の1)・磨製敲打器(7)・黒曜石石塊が出土しており、土器は注口土器(図149の24～26)・深鉢が出土している。(辰野)

イ) 石囲遺構 (図57・146・151・154・写41)

遺構 調査地のほぼ中央で西寄りに位置する。地形は西南へかなりの傾斜をもち、遺構は褐色土層内において検出された。規模は東西400cm、南北420cmの方形の範囲に自然石60ヶを配した遺構である。更にもその外部東側に不規則な集石がみられるが、この遺構と関連するものと思われる。また石囲の南壁といえる個所の中央部には配石がなく、出入口とも考えられる。

配石に使用された自然石の石質は、現地のどこにもあるホルンフェルスが7割を占め、花崗岩、硬砂岩は2割程度である。中には明らかに他地区より搬入されたと思われる表面平らな花崗岩が、東北隅に据えられてある。東壁付近には緑泥岩製の欠損した石棒が検出された。

遺物 出土した石棒(図151の1・2～4)のほか、打石斧(図146の24)横刃形石器(25)石錘(26～28)凹石(図146の30、151の5)がある。土器は主として縄文時代後期のものである。(図146・147)。(根津)

エ 縄文後期の土壌と遺物

ア) 土壌群 (図52・141・写41)

遺跡の南東端で、用地内いっばいのところに位置し、東西3.5m、南北11mの範囲に集中して発見された、7つの土壌のグループである。南より2・1・6・4・3・5・7号の順に配列され、土壌群の西には1～3号住居址と特殊遺構を、北には配石址を隣している。西からの緩やかな傾斜地で、層位は上より耕作土、黒色土Ⅰ、褐色土、黒色土Ⅱ、黄灰色土であるが、土壌群の南と北の部分では、第4層黒色土Ⅱを欠いている。7つの土壌のうち、1・6号は第3層の褐色土を基盤とし、他は第5層の灰黄色土を基盤としている。灰黄色土中には、西より流れ込んだホルンフェルスの礫が多量に入り込んでおり、土壌はこの

礫を取り除いて掘られている。壙内から遺物の検出をみないものもあるが、多くは縄文後期土器片が少量ながら出土し、また壙周辺にも散在していた。この土壙群は、隣接する住居址群などと共に構築された、縄文後期百駄刈集落遺構のひとつであろうと思われる。

土壙1 93×117cm、深さ30cmの円形たらい状で、壁は多少焼けているが、しっかりしている。ナラカクヌギのものと思われる比較的保存のより木炭が多量に出土し、その上にはホルヘンスの礫が重なっていたが、焼けてはいない。底部は若干のたたきになっている。遺物は縄文後期土器片が一片。

土壙2 215×205cm、深さ35cmの円形で、土壙群中最大であるが、流れ込みと思われる多くの礫の入込みにより、プランは不確定なものとなっている。礫の間には角の丸くなった多量の縄文後期土器片を石棒などを含む4点の石器片を検出した。

土壙3 100×105cm、深さ20cmの円形すり鉢状で、北壁は急傾斜である。ホルンヘルス礫塊を部分的に除去して掘りこむ壙で、壙縁などには除去しきれなかったのか、ホルンヘルス角礫が残されている。黒色覆土中に縄文後期土器片少量を認めた。

土壙4 96×100cm、深さ30cmの円形すり鉢状で、底部は狭い。壙周辺には、大は数10cmからの礫がみられる。縄文後期土器片を少量検出した。

土壙5 70×60cm、深さ20cmの丸味をおびた方形で、壁は緩かに傾斜している。底部には30cm大のホルンヘルスが密着し、壙周辺にも大小20個余りの礫が集中している。縄文後期土器片を少量みた。

土壙6 115×100cm、深さ20cmの楕円形すり鉢状である。壁にはホルンヘルス礫が入り込んでおり、壙周辺にもコブシ大から人頭大の礫がある。遺物はない。

土壙7 土壙群の最北に位置し、60×107cm、深さ15cmの楕円形で、舟底状を呈している。底部の南側には、さらに径20cm、深さ20cmほどのピットを伴う。遺物はない。

土壙群付近にも遺物がみられ、やはり縄文時代後期の土器片（図147の8～21）である。（深沢）

11号土壙（図54・147） 石囲遺構下層に位置するもので、プランは東西90cm、南北85cmの円形で、深80cmローム内で掘り込んだものである。壁は東が垂直であるが、他は多少の傾斜をもつ。底部はほぼ平で固い。覆土の中より20cm大の石が壁に付いて2個検出され、床面よりは縄文後期の土器片（図147の24）少量と黒曜石の破片が少量出土した。

12号土壙（図54） 石囲遺構の下層に位置する。11号土壙の南側に検出されたもので、プランは大小2個の円形のもの組合わさり、中心の長さは南北145cm・東西100cmで、ローム層内へ70cm掘り込んだものである。壁は北が40度の傾斜をもち、その他は垂直に近い。底部は固く叩いてあり、多少の段をなす。覆土より30cm大の石と硬砂岩の打製石斧の欠損せるものが出土し、底部より縄文後期の土器片が少量出土した。

オ 平安時代の住居址と遺物

ア) 5号住居址（図51・143～145・221・写40・43）

遺構 調査地のほぼ中央西側に位置する。地形は西より東へかなりの傾斜を示し、押し出しのある地点

で褐色土が転石とともに黒土の上をおおっている。近接せる遺構は南側に、ピット群・東側は配石址が点在する。プランは東西 462×南北 465cmの隅丸方形をなし、黒土層へ掘り込んでいる。壁は垂直に近く、西が高く東は底い。流れにより北と西の壁中はかなり大石が残在しており壁は不安定である。床面は黒土であるが、一部のみ固く叩いてある。もっとも流土のために大半は荒れている。柱穴は4個がほぼ等間隔である。なかには不安定のものもある。カマドは東壁中央やや南寄りに石組粘土製カマドである。多量の粘土を使かってあり保在は良好である。壁外煙道は完全に残存し、一面赤く焼けて固くなっている。内部は焼土と炭化物混っており、少量の土器片が検出した。北壁下にそって10cm巾の周溝が一部に残っている。西壁下に焼土がみられる。

遺物 覆土中より土器が多量に出土した。土師器甕(図 143の25~28)・坏(図 144の1~4)・須恵器甕(15・16)・灰釉埴(18・19・図 145の1~8・14)・皿(.9~13)がみられる。カマド付近には、坏や埴がみられる。また北壁より鉄製紡錘車(図 221の16・写40の188・43の205)・鉄滓・カマド北側床面より欠損した刃子(図 221の1・15)・鉄針(17・写43の206)・鉄釘(18)が出土している。
(根津)

カ その他の遺構と遺物

ア) 特殊遺構 (図50・155・写39)

1号、2号住居址の北、土壙群の西に位置している。西から東へ傾斜する第4層、ホルンヘルス礫を混じえた灰黄色土を基盤として、西側の一部が弧状に掘りこまれている。その高さは30cmで、弧状の壁を延長すると径600cmほどの円形プランが想像される。掘りこみの内部には、多量のホルンヘルス小礫が入っており、柔らかくて床面らしいものやその他の構築物は認められないが、ほぼ等しいレベルにおいて10カ所に獣のものと思われる骨片が検出され、さらに縄文時代後期の深鉢(図155の1・2)・注口(4)の破片と磨製石斧、凹石が出土している。
(深沢)

イ) ピット群 (図53・146~148)

遺構 3号住居址の北西隣の東向斜面にあり、大きな転石の間、青褐色土層を掘り込んだピットの集まりである。コ の字型の溝状遺構を中心に、その周辺に不規則に8個並んでおりその性格は不明である。

遺物 土器・石器がある。土器は鉢形土器・台付土器の破片(図148の1~5・8・9)で全て縄文時代後期のものである。石器は打製石斧(図146の10~13)・石錘(18~21)が多く、ほかに凹石(22)・横刃形石器(15)・磨石(23)が出土している。なおピットから遺物の出土はない。全てその周辺からのものである。
(唐木)

ウ) その他の遺物 (図150・152・156—184・214・215・221・写42・43)

百駄刈遺跡の遺構外出土遺物は多量である。検出された遺構々築期のものはもちろんであるが、それ以外の、遺構は確認できなかったが遺物だけが発見されたというものもある。

遺物は縄文時代全期にわたり、平安・中世にまでわたってくるが、量的に多い縄文早期、後期を中心に

大概を記しておきたい。

縄文早期の土器（図 171—179）。早期の土器は、押型文、捺糸文・縄文・沈線文などの文様を持ち繊維を含むものと含まないものとに分けられる。便宜的な分け方であり、十分な検討がなされていないので詳細にわたる分析は将来に待ちたい。

縄文土器の一群（図 176の25—41・177の1—42・175の24・28—30）

押型文に次ぐ量を示すもので、単節で、回転方向がほぼ一定の斜縄文が多く、1部に無節の縄文がある。図 176の25—41・177の1—13までは繊維を含まず、暗褐色か黒褐色の色調・胎土に石英粒を多く混入させている。図 177の14—42は繊維を含むものである。器厚は5—11mmを測ることができる。

押型文土器の一群（図 171の12—42。172—175の1—13）

格子目文。（図 171の14—42・172・173の1—9）。格子目の形状はバラエティに富んでいる。方形、菱形がほとんどであるが、押しつぶされた形、丸味をおびるもの、更にまた大小等細別もできる。厚さは7mmくらいのもが多く、中には10mmを越すものもある。暗褐色・黒褐色のものも多く、胎土へは石英粒を多く含んでいる。押型文中、本類が一番多い。

山形文。（図 173の10—63・174の1）。山と谷との広狭・高低・山なみの緩急・山と谷とが切れてしまい、綾杉状になるもの、羽状になるものなど各種があるが、大きくは10—31までの角ばる山を持つものと、丸い山になり、波状を示す32—63に分別することができる。前者は黒褐色かこげ茶色の色調、かたくしまった焼成、胎土に石英粒・雲母片などを多く混入し、厚手であるのに対し、後者は褐色ないしは灰褐色のものも多く、薄手・繊維を混入するものもある。口唇へ刺突文をつけたりするのも後者に限られるようである。

楕円文。（図 174の2—52・175の1—6）。陽・陰両方があるが、陰・図 174の2—24はここではなく、格子目ないしは市松文の中へ編入すべきかも知れない。陽の方は小粒で丸味の強いもの、細長くなって、先端の尖るもの、大粒なものなどがあり、灰褐色・茶褐色などの色調・石英粒・雲母片を含む胎土で焼きも一般に良い。繊維は混入されていない。無地帯を残して带状施文法をとる例の観察できる一群もある。

市松文。（図 175の7—13）。方形、長方形のものに限られている。黒褐色を呈し、厚手のものが多い。胎土は他の押型文同様に石英粒を含むが、不透明な長石粒が他より多めに混入するものがある。押型文の中で占める率は低い。

捺糸文土器。（図 175の14—23・25—27・31—46。176の1—24）。図 175の14—16と41は網手の捺糸文原体の糸の太細・捺りの強弱、回転方向の定・不定・捺糸地文の上へ沈線をめぐらすものなどいろいろな施文上の差異と胎土・繊維の有無などからの細分も可能である。早期の土器の中では、格子目・山形・楕円について多い。

沈線文の土器。（図 178の15—18）。櫛状器具による沈線で飾られた一群であり、薄手・堅緻に焼き上げられたところに特色がある。

その他の土器。（図 178の21—29・179の1—18）。便宜的にいろいろを一括した。粗大な爪型刺突文を持つ一群、凸帯をつけ指頭ないしは棒状器具で押圧していく一群、貝殻縁で連続刺突文をつけるもの、浅い条痕で器面調整をした後に爪形を押すもの、粗雑な条痕文だけのものなどがある。178の29・179の

1-3・6・7などはかなり量多く繊維を混入するが、他はあまり多くは含んでいない。178の23は薄手繊維を混じらない土器である。

擦痕程度で無文繊維土器を178の1-13に携げた。14は特異な土器で罎目文のようである。明るい褐色焼はよくない。時期不詳。

縄文早期の土器は以上のようなものであるが、押型文土器の中には立野式を中心にして一部種沢式・細久保式などの南信地方を中心とする型式の要素が混じっている。押型文以外の土器の中には粕畑、上の山、天神山式など東海方面からの影響あるもの、一部茅山、子母口式など関東系のものも混在しており、早期後半の様相をみることができる。

早期土器に伴う石器としては礫器(図180の3・4・7-12)と、特殊磨製石器(図180の1・2・56, 図181の16-18)がある。礫器は細長の河原石の先端に使用痕を認めることのできるものを一括し特殊磨製石器は、中期などに多い磨石のように全面を研磨しない。ともに硬砂岩かホルンヘルズ礫を材としている。他に剝片石器(図214の11・12・16)、石鏃(図215)もあるが、特に石鏃の中には他時期のものが多いように思われる。

図179の19以下は縄文前期前半の土器と思われるものを一括した。図156の1-9は中期の土器群。同図10-24は晩期の条痕文系のもを一括しそれぞれ図示するにとどめる。

縄文後期の土器。(図157-170・171の1-11) (

百駄刈遺跡の遺構出土土器の量はかなりにのぼる。器形を復元図化できるものはわずかであり、できるだけ拓本を多く、また後期特有の把手、注口などはより多くを図化することに努めた。

図157-160へは底部と、底面網代圧痕を集めた。土器の器種ごとにはなっているが、おおざっぱには、深鉢・鉢・注口型の順になるかと思う。網代圧痕の分類・検討ができなかったが、46年度飯島地区でなされた分類に1部照応してある。以下各器種について略記する。

深鉢型土器。(図164-168)

深鉢型土器には、施文・研磨などにより飾られたものと、無文粗製の両方がある。いずれも図上復元可能なものがほとんどないために、その全体形を窺い得ないが、文様とその構成などを中心におおよそのことがわかる。まず器壁を飾る装飾文様は、平縁またはすでに装飾的な意味しかもたなくなった把手ないしは突起をつけるために、大きく波状になる口縁付近に集中しており、従って胴の下辺から底部にかけては無文のままになる。この口縁付近から胴上辺あたりに集中する文様帯も、一部(図166の1-6など)をのぞけば、横位にめぐらされるものが多い。横位に展開される文様は沈線・刻目・圧凹・細い隆帯に刻目または刺突を加えたもの、磨消縄文などが単一にまたは組合せで施される。装飾構図は沈線または隆帯がイニシアティブを握っているが、直線的に横方向へのびるものと、弧線による平行線状構図をとるものが多く、沈線で区画された外側の縄文を消す磨消縄文手法が発達しているのが特徴といえる。しかし一部には、沈線が縦、斜方向にのび、全体とすれば三角形や菱形となる構図もあり、縄文が完全に磨消されないままになっているものもある。磨消文技法からいえば、完成されていないものといえる。一方磨消縄文を区画するためのものとは異なる沈線が綾形状に引かれるものがある。いずれも時期的な施文法の相連として理解される。文様加飾は口縁内側にも及ぶ場合もあるが量はすくない。

器形を図162の102などで窺えば、頸部をすこし締めるものと、直線的に朝顔花状のカーブで底部に至

るものがある。口縁は平、波状があり、口唇部が内側へ折れるものもある。一般に頸部をすこし締めるものは、朝顔状にのびるものより器壁が厚い。

深鉢型土器で飾りのない粗製土器の一群がある。(図 164・165)、口唇に刻目を入れるか、口縁内側へ太い沈線を入れる程度で、暗灰色などの色調、厚手で粗雑な成形である。

鉢型土器。(図 169の1-22・170の1-13)

中には浅鉢の形態をとるものもあるが、便宜的にここで一括した。沈線または隆帯が構図の中心になるが、横方向で全体的には平行線状にまとめられる曲線・弧線を描く沈線で磨消縄文を作り出すもの、所々へS定状の沈線文を埋めるもの、また口縁内側へは隆帯もしくは太い沈線を入れ、刻目、圧凹を加えるものがあり、この種では口唇を鋸歯状にするものが多い。図 170の1・2などは口縁が大きな波状をなすらしい。

壺型土器。(図 170の14-24・171の7-9・11)。壺・注口の別が判然としない。沈線と縄文で構成する磨消縄文と、刺突する隆帯をめぐらすもの、細い沈線だけのものなどの文様がある。

注口土器 (図 162の3-12)。はっきりしている注口部だけを一括した。4は注口基部の装飾が窺える唯一の例である。

把手 (図 161の1-3・162の14-16・163の1-13)。この時期を特徴づける機能的にはすでに退化した、突起状装飾も含めて一括した。環状で孔の貫通するもの、扁平、渦巻状になるものなどが多い。口縁へ縦位につけられたものがあるが、多くは口唇に装飾の一部として佇立していたものであろう。

小型土器 (図 162の17-20)。坏状、筒状などのミニチュア土器である。文様はない。1号住居址から2点発見されている。

土製品 (図 161の4-10) 4は断面円形を示す棒状の土製品である。渦巻文をめぐらしている。5は中空で外壁に沈線を施す。6は土製円板。7は小形の容器か、8-10は土偶の部分である。8は仮面型土偶の顔面。9は脚部。10は腰部片である。4・5は土偶か把手の一部かも知れない。

百駄刈遺跡出土の、縄文後期土器は以上のようなようであるが、先にもふれたように検討が不十分で整理されないままに図類などが組まれている。土器の分類作業がさし当り今後の課題となる。

文様構成と図上復元による器形の観察からすれば、縄文後期中葉を中心とする土器群といえよう。前半の堀之内式の新しいあたりから、次の加曾利B式の古い時期を中心にし、一部加曾利B式の新しい時期のものも含まれている。

平安時代の住居址も1軒みつかっている関係で、図 161の11-14に示した土師甕・灰釉皿・中世陶器皿が遺構外から出土している。

(宮沢)

3) まとめ

戸沢川とその支流、ヨドガ沢とヒデリ沢に狭まれ、山王の尾根を負う日だまり地形の舌状台地に遺された百駄刈遺跡調査の結果、資料性の高い遺構と遺物を得ることができた。

縄文早期の土壙と、押型文・捺糸文・縄文土器など、早期にかかわる課題解決への好資料を提供したといえる。山麓線上に点在する早期遺跡の中でも、遺物量の多いことからいえば西春近地区随一であり、早

期土器の型式編年作業のために資するもの大といえる。特に注目しておきたいことは、押型文土器を中心にしてみれば、立野式をもとにして、樋沢式・細久保式などが混在していることや、遠来の天神山式など縄文早期後半から末葉にかかる土器様相のあり方が単一でない点である。相互の交換現象という結果だけでなく、更に検討を要する問題を提示していると思う。

縄文早期にとどまらず、縄文後期にかかわる問題提供も大である。

1つは、集落構造の問題があり、中央を窪める地形面へ、計画性の窺える遺構配置が予測される点にある。用地内だけでいえば、中央東端へ立石を伴う配石、その北西側へ石囲配石を置き、この2種の配石址を中心に住居址が南側に3軒、北側に2軒とりまく形状で発見されている。他に南側住居址と土壌群の間に、具体的にいえば、南側住居址群の東端に位置する1号住の北隣に、骨片を数ヶ所へ散乱させる特殊遺構を置いている。中央部を占める2種の配石址が、集落構成の中心になる格恰になるわけである。用地内に限られた調査結果であるために、集落全域にわたらないうらみはあるが、単位集落の構造は、お祭広場配石を中にして、まわりをとりまく形に住居地区を持つようである。

2つは、遺構個々にかかわる問題である。

立石を伴う配石址は、関係項でもふれられてあるように、西側の山王の尾根から供給されたホルンヘルズ礫を部分的にとり除き、そこへ6本の円筒状の石棒を佇立させる形態をとるものであった。6本は、安山岩で磨かれた1本を中心にしてその外側へ弧状に4本、更に外側へ1本というように、中央の安山岩製のものを中にして同心円状に立てられていた。縄文中期頃から多くなる石棒の性格が、後期を通じて同じようなものであるとするならば、集落内の限られた住居址から発見されることの高かた中期頃の石棒のあり方から、後期に至ってある特定の場所を選定し集約されるようになるのだろうか。石囲配石址の場合は、比較的角のある扁平な石を方形に並べるもので、石棒の破片が囲みに使った石の脇に立てるものもあった。いずれにせよ、配石と石棒という組み合わせが、集落の中でどのように位置づいていたのが問題になる。また特殊遺構と呼んだものの性格もまっきりしないが、住居址に接するところから考えれば、散乱する骨片が鍵を握るもののように思われる。

3つは、検出遺物の問題である。伊那谷の後期資料はすくない。ましてや遺構に伴うものは更に限られてくる。十分な検討と分析が本資料によってなされねばならない。後期前半から中葉にかかわる土器型式について資すると思う。

遺構とその他から多量の石錘・凹石が出土している。遺構では4号住の石錘が特異であった。従来の知見に従えば、漁労用具ということであるが、遺跡の両側を洗う川は規模小さく、石錘の使用法の問題もあるが、漁労具を是非使わないと魚が得られないとは思われない。この場合、たくさんな網代圧痕底を出しているが、漁労具としての用途もさることながら、むしろ編物具として考えられないだろうか。

凹石は長細い河原石を多用している。石器の形態は機能的な制約を受けるはずであり、長細いことを充分考慮していく必要がある。

5号住は、鉄製紡錘車を出土した平安時代の住居址で、この台地では一軒しかみつからない。東下地続きの中原遺跡に関連するか、さもなくば北隣りの大境遺跡で検出された同時期の遺構と関連するものかもわからない。

(宮沢)

15、大境遺跡

1) 位置 (図10・写44)

戸沢川が現権山の麓から抜け出る所、その左岸は山麓に接して傾斜の強い扇頂部が北から南に傾いている。一方戸沢川の押し出しが南から北に向って張り出しているため、中央を窪める格恰になっている。この南北から押し出す形の凹地は、西側に山を背負い、東にむかって開く形状の日だまり地形をなしている。標高 730m を数え、宮の原部落を東に徙える山裾に大境遺跡は位置している。

戸沢川を越すと百駄刈遺跡、その東の中原遺跡が、またその南側の台地は細ヶ谷B遺跡が連続している。つまり、西春近地区山麓带状遺跡群中の1つに当たっているのである。

過去の分布調査では、遺物はすくないが、山裾に接する高位の遺跡として注目されていた。

中央道が遺跡の上端を通過するため、今回の調査になったもので、50020m をAAとし、CT38—62までのグリッドを設定した。遺跡南側は杉林の跡で手がつけられなかったが、凹地から南に傾く北からの斜面にかけては桑園であった。凹地で平安時代の住居址、集石址・土壘を、また全体的には遺跡北側になる南に傾く斜面で住居址、竪穴をそれぞれ1基ずつ発見した。(福沢)

2) 遺構と遺物

ア、平安時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址 (図58・185)

遺構 遺跡北寄りの、南にむかって傾斜する斜面で、BC42—44で発見された5×4.1m 方形の竪穴式住居址である。西山麓から押し出す土石流のため、地層が判然としないが、3層目の小礫混りの黄褐色砂質土を掘り込んで構築してある。砂質土の中であるため、壁、床面とも不良。柱穴も北東で1本確認されただけである。南西隅に石組粘土カマドが作られている。

遺物 床面、覆土ともにみつかっているが少量である。カマド付近に土師甕(図185の1)と須恵、灰釉片があった。

イ) 2号住居址 (図59・185・215・221・222, 写44)

遺構 遺跡南西端、AF45—48で発見された5.7×4.6m 長方形の竪穴住居址である。地形全体が南から北にむかって低くなるため、北、東側の壁はない。床面は良好で南東の一部は貼り床になっている。北

を除いて周溝がめぐっており、床面中央に90×80cm、深さ17cmの摺鉢状のピットがある。主柱穴は4本確認された。東中央に石組粘土カマドがあるが、袖石を残してつぶれた形状をなしていた。

遺物 床面・覆土から出土しているが、量がすこぶる多い。土師甕に図185の2～5があり、灰釉埴に同図6-10が、灰釉皿に同図11-14・写44の212がある。また床面北側で須恵紡錘車（図221の22、写44の211）、刃子（図221の21）、斧状石製品（図215の38）が出ている。この住居址出土の土器個体数をみると、床面で土師甕3・埴7・須恵壺1・灰釉椀8・灰釉皿6。覆土では土師甕1・埴3・須恵甕2・灰釉埴11・瓶1という数になる。（福沢）

ウ) 1号竪穴（図60・186・写44の123）

遺構 台地の北縁のやや平坦な位置に発見され、褐色土層を掘り込み、南北265×東西205cm程の長方形プランを呈する竪穴である。壁の状態は北から西が高くて70cm程もあり、断面はほぼ垂直で崩壊しないように、わずかな叩きになっていた。床面は叩きで、密着して微量の焼土や木炭を検出した。柱穴は竪穴の外、北と南に密集して存在し、直径10cm～20cm程、深さは浅いので7cm、深いので40cm程である。

遺物 土師器の甕・須恵器の壺・灰釉陶器の杯（図186の10）が数点出土し、灰釉陶器の皿（図186の11）が出土している。

エ) 1号集石址（図60・186・187）

遺構 台地の中央部凹の一角、2号住居址に近接して発見され、褐色土層面に南北160cm、東西160cmの範囲にわたって、方形に敷きつめられている。石の大きさは大50cm・小10～20cm程で、石質はホルンヘルスであった。

遺物 配石レベルより浮いて出土し、種類は土師器の甕・須恵器の壺・水瓶の口縁部（図186の1）と頸部（2）・灰釉陶器埴（3～6）・皿（7・8）・段皿（9）・須恵器水瓶破片（図187の1～6）など数多く出土している。（小池）

オ) 1号土壇（図186・187、写44）

遺跡中央の台地の南斜面に、表土より60cm掘り下げた、褐色砂質土層に検出されたもので、東西1.40m南北1.1mで深45cmの土壇である。覆土中に多量に木炭が含まれ、又焼土も堆積していた。床面は少々硬く平面で、中央に土師器の埴（図186の12、写44の214）が完形の状態で伏って出土し、須恵器甕の破片（図187の7・8）も出土している。（辰野）

3) まとめ

大境遺跡では、平安時代の住居址2軒、竪穴1基、集石址1基、土壇1基を確認することができた。

それぞれに特色を持つが、1号住の南西隅につくられた石組カマドは類例のすくないものであった。西春近中央道用地内では、名廻南1号住が南東隅につくってあり、合わせて2例を数えるにすぎない。

2号住の灰釉埴を中心とする土器類個体数の多いのには驚く。灰釉陶器を出す住居址では、南丘A1号

住が多いが、本2号住には及ばない。灰釉陶器の問題を考える際のよい資料になろう。須恵質紡錘車も西春近では初めての例であった。

遺構外で遺跡中央部の凹地で、縄文早期の押型文土器片が出ている。図187に示したものがそうであるが、南隣の百駄刈遺跡出土のものと同じ組成であり、同時期のものといえる。 (福沢)

16. 山の根遺跡

1) 位置 (図8、写45の215)

当遺跡は伊那市西春近城部落 441番地一帯にある。北は白山沢、南は大洞にはさまれ、権現山より発達した東傾斜のなぎの沢の扇状地南端、諏訪神社、常輪寺の南一帯に、東西、南北とも 200m の範囲に広がっている。現在はA～B地区の東半分は水田、他は畑地に利用されている。分布調査によれば、縄文中期土器片、石斧、土師器、灰釉が出土したことを記述している。

グリッドは 50640m をAAとして、AA～DVまで、41～61を設定した。なお、東半分の水田は、ブルドーザーによる開田のため、未調査である。

微地形はA～B地区は平坦であり、C地区は南に傾斜している。遺構はC地区に集中しており、南向地形から判断しても当然である。

層位は何回もの押し出しがあったとみみて、褐色土層がサンドウィッチ状に混入している。遺物は全般に褐色土層に包含されておる。

2) 遺構と遺物

ア 縄文中期の住居址と遺物

ア) 1号住居址 (図61・188、写45・47)

遺構 台地の中央部で用地の東端に位置し、黄褐色砂質土を掘り込み、東西 425×南北 420cmの円形プランを呈する竪穴住居址である。床面は凹凸があり、東へ傾斜している。黄褐色土のために叩いてもあまりその効果が見られない土層のために、叩きらしいものは、わずかに認めるにとどまった。炉は中央よりやや北西寄りにあり、方形石囲炉であったと思われるが、数ヶ所にわたって、炉縁石が抜き取られた痕跡がうかがわれる。炉内は長円形状で、断面は舟底状を呈しており、東寄りには湿気を防ぐために、渦巻文様の加曽利E式土器片を一重に貼り付けてある。

遺物 深鉢(図188の1～4・6・7・1～3、写47の224～226・224・225)は炉出土。台付(図188の5)などが出土している。

イ) 6号住居址 (図61・188・197～199、写45・47)

遺構 用地内の中央部附近に位置し、黄褐色砂質土を掘り込み、東西5.00m、南北5.50mの円形プランを呈する竪穴住居址である。壁は低く、高いところでも20cmに満たない。床面は黄褐色土のわずかな叩きで、水平状を呈し、全般に不良である。炉はほぼ中央にあり、ホルンヘルスの角礫や円礫を6個並べた方

形石囲炉である。炉縁石の中には、焼けて赤く変色し、ひび割れが認められた。炉縁石は一ヶ所だけ存在しておらず、おそらく灰取りのためにわざと石を並べなかったのであろう。

遺物 深鉢（図 197の1～3、写47の227・228）が出土し、また土器片（図 198・199）が多数出土しており、いずれも加曾利E式に属している。（小池）

イ 弥生後期の住居址と遺物

ア) 2号住居址（図62・189・写46・49）

遺構 調査地北縁台地上に位置する一群の1つである。黒土層は薄く、遺構は浅い。近接せる遺構は北に4号住居址、北西に3号住居址がある。東西395×南北500cmの胴張長方形にて褐色土層内に掘り込んだ竪穴住居址である。この遺構は廃絶後に投げ込まれたらしい集石が北西側（図62の波線）にある。壁は低く北と西がわずかに高く東から南は一部不明のところがある。柱穴は5個不等間隔にある。床面は荒れていてよくない。北より南にわずかに傾斜している。炉は中央よりやや北寄りに位置する。2重の埋甕炉である。外側のものは胴以下は欠損し、内側のものは底部がない。弥生後期中島式のもので、赤く変色してもろい。2つの炉付近一帯は床面が焼け固くなっている。炉の内部よりは、土器片少量が検出された。遺構外南の位置に柱穴と思わせるピットが1つ検出された。

遺物 炉に使用された弥生後期の甕（図189の3、写47の229）と床面から出土した甕（1・2・4）壺（5・6）などが主なものである。（根津）

ウ 平安時代の遺構と遺物

ア) 3号住居址（図62・190、写48）

遺構 調査台地の中央西縁に位置するもので、近接せる遺構は東に4号住居址、南に2号住居址がある。プランは東西442×南北423cm、褐色土層内へ掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址である。黒土は少なく、地表面より浅い。壁は垂直に近く、褐色土層のためにもろく良くない。西が高く東と南は低い。床面は50cm位の貼り床で一部剝脱があるが良好である。わずかに西より東へ傾斜している。柱穴は6個で、南北の壁にそって3本づつ等間隔にある。柱穴は他のものに比して小さい。カマドは東壁の中央に少量の石と多量の粘土でつくった粘土カマドで100×89cmであり規模は大きい。カマド前部は大きな灰溜りがあり、凹状になっている。内部より多量の灰と炭化物が検出され、付近一面に赤く焼けて床面は固い。カマドの北側に80×60cm・深さ35cmの貯蔵穴と思われるものがあり、内部よりは少量の土器片が検出されている。

遺物 カマド付近と西壁の下から土師器坏（図190の10—14、写48の231）が出土し、灰釉椀（図190の16・17）・皿（18・19）が出土、床面中央から土師器甕・灰釉等の破片が少量出土している。（根津）

イ) 4号住居址（図63・189・191～194・222、写46・48）

遺構 A地区ほぼ中央、台地の東縁のK46—48で発見された隅丸方形の竪穴式住居址である。褐色土を掘り込み、440×390cmプランを示し、比較的高い壁で残存状況は良好であった。南東隅の一部は貼床に

なっており、中央・南東の床面が焼けている。南から北西にかかる周溝が、また4本の柱穴と他に2つのピットがある。カマドは東壁中央に接して石組粘土でしつらえてあり、割合いに整った住居址の1つといえる。

遺物 覆土、床面ともに発見されており、量もかなり多い。カマド内とその付近に集中していた。(写48) 土師甕(図192の2・193の1・2) 坏(図189の11-14・16、191の1-9、192の3-13、193の3、写48の232-234)がある。土師坏の中には191の1-3でみられるように、黒色土器の内外面へ十字を、また逆に伏せて書いたと思われる「木」と読める刻字土器がある。須恵では図193の4-6の坏と図192の15の瓶があり、北壁近くでは鋤先(図222の2、写48の235)が発見されている。(福沢)

ウ) 5号住居址 (図63・189・193~196・222、写48)

遺構 遺跡の南端、西から東へ傾斜した台地上にあって、その南には沢が流れている。448×345cmの隅丸方形竪穴住居址で、第3層褐色砂質土を基盤としている。壁はほぼ垂直に掘りこまれ、その高さは西で14cm東で20cmある。床面は叩きで、全体に堅くしまり、平らである。北東よりの壁際には40cmほどの範囲で焼土と木炭片が散在しており、土器片もあった。4個の柱穴は4隅に規制的に並び、北西側柱穴の内側にはさらに小さいピットがあって、その上部には焼土が、内からは数個の土器片が検出された。西壁中央に接するところには石組粘土カマドがあって、青灰色を帯びた粘土を主体とし、比較的角のある小石を多量に使用したらしいが、崩されて床面に散乱している。また床面上には灰と炭化物の混ったものがカマドから中央に向かって広く堆積している。土器片も補強のため用いてあり、火床から壁の外に向かって煙道と思われる焼けも認められた。

遺物 カマド周辺に集中し、国分期土師壺(図196の1~3)、甕(図189の7~10、図193の7・8、図195の1~5、図196の4)、灰釉碗(図189の15・図195の7・8、図196の11)、土師器坏(図193の9・10、図194の9~11、図196の6~10、須恵器坏(図193の11・12)、須恵器瓶口(図195の6) 銅製碗(図222図の3、写48の237)と思われるものの口縁部が出土している。(深沢)

エ) 7号住居址 (図64・200)

遺構 遺跡台地上の住居址群を見上げるような位置で、一群と蛇石林道を境にして、林道南添いの住宅跡地の庭先に黒褐色土層に掘り込まれた345×340cmの方形竪穴住居址である。壁高は西34cm・東20cmで東に低く、垂直に切れて良好である。床面は貼り床で一部剥落しているが大体良好である、カマドは東壁中央に10cm位切り込んで、石組粘土のカマドであるが、支脚石もほとんど崩れ、天井石も床面に落ちて、粘土だけは若干盛り上がっているが、規模ははっきりしない。焚口部付近の床面に50cm四方に焼土が散乱している。

遺物 西壁に接して土師器甕・カマド周辺より土師器甕(図200の1~3)・坏(4・5)が検出された。(辰野)

エ その他遺構と遺物

ア) 1号竪穴とピット群 (図65・202・203・写46・48)

遺跡台地の西縁で、用地ぎりぎりに褐色土層に掘り込んだ、230×150cmの楕円形遺構である。中央で二段となり、西半は深さ30cm・東半は47cm程あり、西は舟底状で、東は摺鉢状である。覆土半分位は明らかに攪乱された形跡があり、黒褐色土混合のもので、多量の焼土を含み、その下層よりクルミ炭化物(写48の239)・灰釉片が出土し、東半は攪乱された様子はなかったが、最深部より砥石(図203の6)縄文早期末土器片が出土している。ピット群は1号竪穴と切り合うように接触して、22個のピットをもって構成する。延長8.0m・巾2mの規模で南北に走っている。ピットの規模は22個中20個は径20~30cmで、深さ20~40cmである。配列は2・3・はみ出すが、ほとんどは1mの巾の中に入り、間隔は不規則であり、ジグザグか、又は2列とも見える状態で8mにおよんでいる。周辺に焼土が散乱し、2・3のピットからは多量の焼土が検出された。

遺物 周辺から内耳鍋(図202の2)・灰釉片・天目(1)・黒曜石片・縄文後期片が出土した。この地層が攪乱された形跡があるので明確にできないが、平安・中世の施設遺構であろう。(辰野)

イ) 1号土壌 (図65・201)

遺構 台地の中央部で南傾斜の頂に位置し、砂質黄褐色土を掘り込み、南北160cm・東西172cmの円形プランを呈する土壌である。壁の状態は砂混りのためにぼろぼろして不安定である。断面は段を有するフラスコ状を呈し、下段の壁は上段よりも浅い。覆土内より微量の木炭を検出している。

遺物 土器(図201の31・32)が数点出土したのみである。

ウ) 2号土壌 (図65・201・203、写47)

遺構 台地の中央部用地の西端に位置し、砂質黄褐色土を掘り込み、南北180cm・東西145cm程の円形プランを有する土壌である。壁はくずれやすく、断面袋状を呈している。床面は拳大から人頭大程のホルンヘルスを数個含み、凹凸が著しい。覆土下層より微量の焼土と木炭を検出した。

遺物 覆土土層より諸磯C式土器(図201の28)がある。打石斧(5)も出土している。

エ) ピット列

C地区の南端部、北から南へ傾斜していく黄褐色土層面に存在している。南北850cm・東西280cmの範囲中に、径20~50cm・深さ平均15~30のピットが16個点在していた。配列状態は列をなすものが大部分であるが、間隔は不規則である。遺物はない。(小池)

オ) 2号竪穴 (図65・196)

遺構 遺跡の南端・5号住居址の東に位置し、第3層の赤味を帯びた砂質褐色土を基盤とする145×180cmの隅丸方形竪穴である。壁はわずかな傾斜をもって掘りこまれ、南北西壁の高さはほぼ20cmで等しいが東壁は、水田をつくる土手に接しており定かではない。床面は平らであるが、柔らかく、壁の内外ともに構築跡はない。

遺物 国分期土師器の小片10数点(図196の13)および須恵器坏(12)・甕(14)が出土した。(深沢)

エ その他の遺物 (図 120・129・200～203・222～242)

遺構外出土の遺物特に土器は縄文時代各時期のもの、弥生時代後期のもの、平安時代のものがあり、その出土量は多かった。

遺跡北東部の、台地の傾斜が東にやや急になるところから縄文時代早期末から前期初頭にかけての爪形文土器、太めの撚糸文土器・縄文土器・条痕文土器が出土している(図 129の21～38、201の1～27・29 30・202の4～13)。

弥生時代後期中島式土器(図 120の11～17)は、同時期の住居址2号住居の周辺から出土している。この期の遺構は用地外にまだあるものと思われる。

平安時代の遺物(図 200の8～10)は、土師器の鉢と思われるもの(8)、須恵器坏(9)、灰釉壺(10)を図に示したが、他に土師器甕・坏片が出土している。

ピット群に関連すると考えられるものとして、内耳土器(図 202の3)、鉄釘(図 222の5～7)がある。これらはピット群周辺からの出土であるが、ややはなれた所から刀子(202図(4))が出土している。

土錘(図 223の10)は単独出土であり遺構との関係は不明である。

石器については打石斧(図 203の7～10)が中心で、特記すべきものに環状石斧(図 203の11)がある。敲き磨製技法によって成形されている。(唐木)

3) まとめ

山の根遺跡は古くから知られた所で、今回調査でもかなりの成果を得ることができた。縄文前期の土壙1、中期の住居址2、土壙1、弥生後期の住居址1、平安時代の住居址4、竪穴1、時期不詳のピット群と竪穴1・ピット列1などの遺構と、それに伴う遺物相当量である。

縄文前期土壙は、今回の中央道用地内18遺跡ではっきりしていたのは本例だけである。朝顔花状に開いた前期末の深鉢であり、口縁に2つの補修孔がある。1・6号住居址は、切り込む土質が軟弱なため、遺構そのものが完全な姿では露呈されなかった。1号住の土器敷・摺鉢状の炉は今回調査では唯一のものであった。遺物が豊富に発見されたことは特記すべきであろう。

弥生後期の住居址が1軒見つかった。床面に集石ある例は、下伊那地方でいくつか発見されている。住居の廃絶後まもない頃であるらしい。検討の要がある。

平安時代の遺構関係では、4号住の遺物が多様にわたり、注目される。鋤先・刻字土器・窯印らしい刻印、それと全体の遺物量は相当な量にのぼる。また5号住では銅鏡口縁が出土した。いずれも資料性高いものといえる。ピット列・ピット群の時期は中世であるらしいが確かでない。なお1号竪穴からは炭化したクルミが発見されている。

遺構外出土遺物の中では、遺跡北端に集中して縄文早期末の土器片が、比較的少量に出土している。その中でも量的に多いものに、表裏に条痕を持つ繊維土器がある。口縁付近内外面に粗大な爪形文を施すもので、早期末粕畑式に比定されよう。縄文関係では他に晩期土器片が少量ある。口縁に平行する太めの沈線をめぐらすもの、具殻条痕を施すものなどが主なものであった。

中世の内耳鍋片が何点かあるが確実に中世遺構とはいえないにしろ、1号竖穴とそれをとり囲むピット群、ピット列は中世遺構の可能性がある。遺跡北には二代立川和四郎作といわれる諏訪神社があり、その東続きに曹洞禅寺常輪寺がある。山の根遺跡とこれら神社仏閣をも含める一帯は、中世城郭があったと伝えられる山の東麓に当っており、北隣の城平遺跡で発見されたいくつかの中世遺構とともに、社寺ないしは城郭に関連する中世遺跡であったのかもわからない。

(小池)

17 城平遺跡

1) 位置 (図9、写51)

遺跡は、伊那市西春近 802～813番地に所在する。(図9、写51) 権現山の東に延びる尾根の先端は、中世城址という伝えがあるが、その尾根の東麓一帯を城平と呼んでいる。遺跡はこの山麓一帯に広がる平坦地にある。山本部落の西方に当っており、北は城平上遺跡のある小台地が西から東に続いており、その小台地の北は、傾斜しながら小黒川に接する段丘地形になっている。従って城平遺跡はこの小台地を北にして、西方山麓にある山白神社の下から、南は白山沢まで続いていることになる。白山沢よりは、この川の押し出しによる小台地が西から東に延びるため小高くなっている。西春近地区山麓帯状遺跡群の北端に位置し、標高 720～725m を数えている。

付近には、上述城平上遺跡が北に、白山沢を越して南に宮林遺跡が、また東方部落の下には北条遺跡がある。過去の分布調査では、縄文中期土器・石器・土師器・須恵器・灰釉陶器が出ており、中央道用地が遺跡をすっぽり包むため、今回の調査になった。51000をAA基点としてPJまでと、後になり南側台地にも遺物のあることがわかったために、AA基点から逆にY区を設け38—62までにグリッドを設定した。北側と南側では地層々序が異なるが、遺構の集中した北側C・D区では、耕土・黒色土・黒褐色土・ロームの順に層位が確認された。

今回の調査では、南側の小台地では縄文晩期の土器片が、中央凹地では平安時代の住居址3軒、墓塚1基・時期不詳の土塚1基と、縄文中期末か後期初期の住居址1軒が、また北側の城平上遺跡方面から南に向かって緩らかな傾斜する斜面では、平安時代の時居址5軒と墓塚4基・中世の地下倉3基、井戸状の窖址が2基・300箇近いピット群と、時期不詳の土塚8基が検出された。(宮沢)

2) 遺構と遺物

ア 縄文時代の遺構と遺物

ア) 9号住居址 (図66・212・213、写50)

遺構 遺跡の中央、北向傾斜と南向傾斜の接点にあたる平坦地にあり、当遺跡唯一の縄文時代の遺構である。表土下80cmほどの黒土層中に構築された4.65×4.50mの楕円形竪穴住居址で、壁はほとんど垂直に掘られている。床は西から東にわずかに傾斜しており、全体に軟らかい。柱穴は4本検出された。炉は石囲炉で住居址中央にあり、中から赤く焼けた河原石が出土しそのうち1つは磨石である。東壁近くには、上部を欠損した埋甕が、石棒片を中にさしこんだ状態で出土している(写50の244)。遺物および遺構の状態から見て縄文時代の中期末～後期初頭の住居址と思われる。

遺物 縄文時代中期末～後期初頭の甕（図 212の 1～3）が主な出土土器であるが石器では、石棒片（図 213の 1）磨石が出土している。石棒は緑泥岩である。（根津）

イ) その他の遺物（図 210・211・212の 3）

縄文時代の遺跡は、中期末ないしは後期初頭から晩期末にいたる土器片が出土している。図 211の 1・2 は、7号住居址北から発見されたものであるが、中期末とも後期初頭ともとれる一群である。これは9号住居址の時期とも関連するものであるが、9号住の構築は全く後期的で、つまり黒土中へ切り込まれた竪穴住居で、深鉢胴下部を床へ埋め、その中へ石棒を佇立させることなどは、中期住居址にあまりみられない構築方法である。従って住居址の構築などはきわめて後期的であることからして、後期初頭としておさえた方が妥当のように思われる。南側では後期晩期の土器が集中して検出された。図 210の 1～9までは後期中葉までの、また同図10～33・図 211の 3～27は晩期の土器片である。晩期の土器についてふれるならば、図 210の12～14などで代表される精製土器の一群と、他の条痕系の粗製土器に分けることができる。晩期末葉の大洞A～A'式に比定されよう。今回調査の西春近地区とすれば、晩期資料中の最たるものであった。（宮沢）

イ 平安時代の遺構と遺物

ア) 1号住居址（図67・204）

遺構 遺跡北側の中世遺構集中地区にかかる手前で発見された。調査前に畑の肥え土をブルドーザーで削った所であったため、全体プランは把握できなかった。花崗岩の袖石と、火床の一部を残すカマドが西壁に接してつくられていたことと、カマド東にピットが1つ、カマド付近でロームのタタキ床面の極く一部分が確認されただけである。

遺物 カマド火床内とその付近で土師甕（図 204の 1～4）と、須恵坏（図 204の 5・6）がみつまっている。他に灰釉碗片がある。平安時代の住居址である。（福沢）

イ) 2号住居址（図67・204・224の 6・写51の 251・53の 265・55の 208）

遺構 遺跡北端にある住居址群の最も東側、用地東端にあり、ローム層を掘りこんだ南北3.84m、東西4.70mの隅丸長方形竪穴住居址である。壁は西・南で約20cmを、東で約10cmを計るが、北壁は1号地下倉址に切られており残存しない。床面はロームの叩きであり、わずかに凹凸があるがほぼ良好である。カマドは東壁やや南寄りに、壁に接して造られた石組粘土カマドで、補強のために土師器片を貼りつけている。しかし残存状態が悪く、その詳しい形態や煙道は不明である。カマド手前に90×150cmのピットがあり焼土と木炭が充満していた。

遺物 土器と古銭がある。土器は土師器の甕（図 205の12）坏（3）と須恵器の坏（図 204の7）である。古銭は祥符元宝（図 224の 6）である。（小池）

ウ) 3号住居址 (図68・204・205、写53)

遺構 遺跡北端にあり、4号住居址の東1mに位置している。ローム層を掘りこんだ4.65×4.19mの隅丸方形竪穴住居址である。壁は垂直に掘られ、西に高く東ではほとんどなくなる。床は叩き床で良く残っている。柱穴は4本が対角線上にある。カマドは西壁中央に造られ、石組粘土カマドでほとんどくずれてしまっている。煙道の出口と思われる地点に焼土があったが、落ち込みは確認できなかった。焼土は床面はかなり広く分布している。また本址南側にあるピット群の一部と思われるピットがいくつか床面に見られる。北壁および南壁沿いに浅い周溝が設けられている。

遺物 土師器では甕(図204の8・9、図205の4～7) 坏(図205の8)、須恵器では甕片(図204の10・11) 坏(図204の12・13、図205の8) これが出土遺物の全てであり、床面出土のものばかりである。

(根津)

エ) 4号住居址 (図68・222・写53の266)

遺構 遺跡の北端、3号住居址の西に位置し、ロームを基盤としている。3.43×3.20mの隅丸方形竪穴住居址で、壁はほぼ垂直に掘りこまれ、高さは西が29cm、東が8cmと傾斜している。床面は耕作による攪乱がひどいが、叩き床で固く、一部は二重に残存して、その上下の差は8～10cmくらいである。柱穴は北側に二つしか確認されなかった。西壁に沿う全面と南北壁の一部にはV字状の周溝が検出され巾810cm深さ10cm程度である。東壁中央部には石組粘土カマドが接している。灰青色を帯びた多量の粘土と1個の石があったが攪乱のため原形は留めていない。

遺物 カマド周辺と西壁付近の覆土から、国分期土師甕・坏の破片が、また床面より刀子の先端(図222の8)が出土している。

(深沢)

オ) 5号住居址 (図69・205・206、写50の245)

遺構 東傾斜の台地の緩やかな南傾斜の斜面上に位置し、ローム層を掘りこんだ4.35×4.30mの隅丸方形竪穴住居址である。壁は西に高く55cm、東は16cmと低い。床面中央部は堅く叩かれているが壁近くは軟らかい。カマドは西壁に接して設けられた石組粘土カマドで、残存状態はやや良好である。なおカマド周辺に数個の石が散乱していたが、カマドに用いられていたものと思われる。

遺物 カマド周辺より出土した土師器甕(図205の9、図206の1～9) 壺(図206の10・11)、坏(図205の10) および須恵器壺(図205の11) 坏(図205の12) 甕片(図206の12) がある。(小池)

カ) 6号住居址 (図70・206・207・222、写50の247)

遺構 遺跡ほぼ中央の凹地の北、BU46-49で発見された隅丸方形の竪穴式住居址である。主軸方向は東にあり、520×550cmの平面形を示し、西壁中央に接して石組粘土カマドを構築している。本来は4本柱穴であったらしいが、北西隅は床面が落ち込むために明確でなく、それを除いて3本が確認された。床面一部貼床になっており、全体的には良好な床といえる。中央にピットがうがたれており、北壁沿いに周溝が掘られていた。

遺物 床面カマド付近に集中して土師カメ(207の1-4)、坏(206の13)、須恵坏・フタ(206の16・19)が、また北壁沿いの周溝の中へ落ち込むかたちで刀子(222の9)と砥石が検出されている。遺物からすれば平安時代のものである。

福沢)

キ) 7号住居址 (図70・206・207・222、写50の240・54の270)

遺構 住居址群の占地する南向傾斜と遺跡南端からの北向傾斜が交わる平らな所にあり、住居址群では最南にあたる。黒褐色土からロームまで掘りこんだ4.85×4.53mの隅丸方形竪穴住居址で主軸方向は南東を示す。壁はわずかに傾斜して掘られ、西で45cm東で20cmと東に低くなっている。西壁中央に石組カマドをもつが、ほとんどカマドの形は残っておらず焼土と動いていると思われる石があるだけである。床はロームをかたくたたいてあり、柱穴は攪乱のある北東隅を除いて3本をもつ。南壁際に貯蔵穴と思われる径80cm深さ20cmのピットがあり、住居中央にも径80cm深さ10cmの浅いピットがある。いずれも出土遺物はない。南壁沿いのみ周溝をもっている。平安時代の住居址である。

遺物 土器と金属器がある。土器は土師器甕(図207の5～9・206の21・22)・須恵器坏(図206の15・17・18)・壺(図206の14・写50の247)・甕片(図205の10・11)・蓋(図206の20)であり、金属器は刀子と思われる鉄器(図222の11)である。土器はいずれも床面あるいは床面に近い覆土からの出土で、特にカマド周辺から出土したものが多く、須恵器甕は南東隅の出土である。金属器は床面から出土している。
(唐木)

7) 8号住居址 (図71・207・208、写50の248・54の269)

遺構 遺跡中央の西寄で、用地西縁の墓塚に接し、東南に9号住居址に近い。褐色ローム層に掘りこまれた390×355cmの方形竪穴住居址で、壁は西35cm、東10cmで東に低く、西北の一部の壁が攪乱されているが、他は良好である。柱穴は3個確認されたが東南の隅は85×65cmの大穴で、深35cmあり確認出来ない。

壁の裾に巾10cm深15cmの周溝があるが東壁には一部しかみられない。床面に西南の隅に柱穴と並んで径52cm、深5cmのくぼみがあるが正体不明である。他の床面は大体硬くたたいてあり良好。カマドは東壁中央に平板石を立て、支脚石に使った長方形石組粘土カマドで、天井石は少し押しつぶされた状態であった。煙道は黒土でつまっている。カマド内の粘土に土師器片が詰められていたが、石組補強のものであろう。

遺物 土師器壺・甕(図208の1～3・写54の269)・坏(図207の8)・須恵器甕・坏(図208の4)が出土した。
(辰野)

ケ) 墓塚 (図72・207・223、写51)

墓塚として一括したものは、後述4号墓塚をもとにしてある。従って1部は平安時代以外の時期にかかわるものもあるが、項を同じくして理解しやすくするためにここで扱うことにする。

1号墓塚 (図72・223)

遺跡北側の、2号住居址南隣で発見されている。ロームを掘り込み、東西210cm、南北110cmに長軸1.70mのT字形プランを示すものである。塚外には数箇のピットを持ち、床隅には焼土と木炭が堆積していた。遺物は認められなかった。

2号墓塚 (図72・写51)

2号住居址東隣で発見されている。190×150cm、深さ30cmほどの方形をなす塚で、床中央に1穴を掘る。東側床面と、北側壁外に焼土がある。内耳土器片と、刀子(図223の1、写51の251・252)が出土

している。中世の墓塚であろう。

3号墓塚 (図72)

北側の遺構集中地区のほぼ中央で5号墓塚と並んで発見されている。3号住居址の南隣になり、2.00×1.30m、深さ10~20cm、長方形で、東壁側に一穴を持つ。覆土の黒色土中に鉄釘が含まれていた。

4号墓塚 (図72、207の14)

8号住居址に南接して、180×95cm深さ20cmの長方形の塚である。北側の墳縁に須恵器坏が置いてあった。

5号墓塚 (図72・223)

3号墓塚の北に並べ構築されていたもので、3号同様に平安住居址3号の南隣にある。130×115cm、深さ20cmの長方形をなしている。

コ) その他の遺物

図212の4は遺構外で出土している。5号住居址の北で、ロームがや・小高くなる状態で堆積するその上の黒色土中に含まれていた。遺構であろうと予測したが、確認できなかった。須恵器瓶である。他に図223、224の金属器類がある。(宮沢)

ウ 中世の遺構と遺物

ア) 1号地下倉址 (図72・73・209・213・222・224、写51の251~254・52の257・260・53の265)

遺構 用地東端近くにあつて、南で2号住居址を西で2号窖址を切っている。平面プラン210×220cm深さ150cmの方形竪穴遺構で、ロームを掘りこんで構築されている。壁は垂直ないしはオーバーハンギギみに鋸状の道具でていねいに掘られている。床は全体に堅く、四隅とその間に計8個あったと思われる浅いピットのうち2号窖址と重ならない部分で6個確認できた。柱穴であろうかと考える。東壁沿いには周溝が掘られている。床面上およそ50cmに廃絶後投げ込まれたと思われる人頭大の自然石の集石があり、遺物はほとんどがこの集石の上面あるいはその間から出土している。埋没状態は集石のある面までは自然埋没と思われるが、集石以上は黒色土の単層で人為的な埋没と考えられる。

遺物 土器・金属器・古銭がある。土器は天目と内耳土器(図209の1~3・5)の破片である。金属器としては刀子(図222の12)が1点・不明2点出土している。古銭は合計6枚出土しているがその内訳は元豊通宝1・政和通宝1・皇宋通宝2・不明2である。その他黄瀬戸オロシ皿(図209の4)・中世陶器(6)、砥石(図213の3)が出土している。(唐木)

イ) 2号地下倉址 (図72・73・209・213・224・写51の255・256・25の257・258・53の265・267)

遺構 調査地の北で用地内東縁に位置する。地形は西より東へかなりの傾斜を示し、北より南へわずかな傾きがある地点で黒土層は浅い。近接する遺構は南で3号地下倉址と切り合い、西に1号窖址と3号住居址がある。プランは東西190cm・南北255cm、深さローム内100cm掘り込んだ竪穴で、東へ多少のびていると思われるが、用地外のため調査は出来ない。北と西側は浅い掘込と段付状に切り合っている。壁は

垂直であるが、東傾は用地外で不明である。床面は平で堅い。床面には20～30cm大の自然石を礎石のごとく、17個方形に並べ中央は並列になっている。この石の上には径10cm大・長さ 220cmの木材の炭化したものが数列並べてあった。

また長さ 190cm大のものを東西に井桁状に三段積重ねてある。中間には3cm程の板が炭化して陥入している。中間には焼土と灰が所々赤く残存している。炭化物は木目からみて檜の木が多い。遺物は炭化物の中間と床面近くに多く出土した。

遺物 陶器としては、陶器壺(図 209の11)、黄瀬戸皿(図 209の8・9)・天目壺(図 209の10)が出土している。その他内耳土器・青磁も出土している。

古銭は計3枚出土しており、内訳は永楽通宝・治平元宝・嘉祐通宝である。その他鉄製品、火打金具、石臼(図 213の4)も出土している。

ウ) 3号地下倉址 (図72・73・209・222・224、写52の 257・258・53の 265・267・54の 272)

遺構 調査地の北で、東縁に位置する。近接する遺構は西側に1号窖址・北は2号地下倉址が接続している。プランは東西 255cm、南北 190cmで長方形の竪穴で、ローム層内 145cm掘り込んである。壁は垂直で明確であるが、遺構が東へ延びるため用地外となり調査はできない。床面は平担で叩いてあり堅く良好である。遺構の上部は西側と南側は浅い。掘込と切り合って段付状となっている。柱穴は浅い掘込の南側の壁にそって2個・西側に1個検出する。覆土は表土より45cm黒土下にローム混りの褐色土層があり、赤く焼けたローム塊の10cm大のものが混っている。この状態は遺構の南東にある。

遺物 古銭では元祐通宝2枚・紹聖元宝・皇宋通宝・熙寧元宝・聖宋元宝・元豊通宝各1枚(図 224)黄瀬戸壺(図 209の12・写54の 272)・刀子(図 222の3～5)・ピンセット状の鉄製品(16)・釘(17)・火打金具(19)・内耳土器の破片など、床面近くの覆土で遺構の北寄りに多く出土した。

エ) 1号窖址 (図73・209・222、写52の 257～260・53の 265)

遺構 調査地北寄り用地内東側に位置する。地形は西より東へ傾斜している。近接の遺構は北西に3号住居址があり、東には1号・2号地下倉址・南に2号窖址がある。プランは東西 200cm・南北 230cmのほぼ円形で、ローム層内へ、深さ 223cm掘り込んだ竪穴である。上部は上開きで南側は段付状で、中間より袋状になっている。壁は固く良好である。95cm下の西壁は厚さ20cmの礫層である。床面は平であるが、軟らかい。柱穴は上部の段付状のところに南北に各7と、西側に遺構を囲み等間隔に4個ある。東側は浅い掘込と接している。覆土は黒土と褐色土の混合で中間よりは20～30cm大の石が多量に投げ込んである。2号窖址と壁の差は袋状の下部で30cmある。ある時期に流れの跡を示し、小さい礫と砂が残在している。

遺物 覆土の上層部は褐色混りの黒土であるが、この中よりは縄文中期の土器片が少量と、欠損した打石斧が出土した。底部近く褐色礫混りの層位より、内耳土器(図 209の13～15)が出土しており、固焼で色調は灰褐色をしており、厚手のもので耳部は小さいものと大きいものの2種類である。また釘(図 222の20)も出土している。

(根津)

オ) 2号窖址 (図73・207・209・213・222、写51の 252・253・52の 260・262～264・53の 265)

遺構 1号窖址の50cmの南に位置し、ロームをほり込んだ断面フラスコ状を呈する竪穴遺構で東を1号地下倉に切られている。平面プラン直径200cmの円形、深さ240cm、最大径220cm、最小径118cmを計り、1号窖址に類似する。ただ底近くに人頭大の自然石が多数投げ込まれており、中に石臼片や陶器片などの遺物が混じっていた点で異なっている。柱穴は南・北に2対計4本ある。

ただ深さ200cmに厚さ20cmの砂利層があるが、調査時には湧水がみられなかった。貯蔵穴と考えるのが妥当であると思える。

遺物 土器・石器・金属器がある。土器は天目・黄瀬戸・内耳土器（図209の16・17・19）と備前焼と思われる皿（18）で、石器は砥石（図213の7・14）と石臼（図213の5・6）、金属器は用途不明の小鉄片（図222の21・22）が出土している。（唐木）

エ その他の遺構と遺物

ア) ピット群（図74・222、写53の265～267）

遺跡北側の平安住居址と中世遺構の集中する区域に300箇にわたるピットが検出された。円形をなすものが大部分であるが、中には方形であったり、穴底に礫を入れるものもある。建造物の柱穴とも考えられるが、法則性に乏しく、断定し難いが、このピット群のいくつかは、建造物の柱穴として認めてよいものもある。ピット内から鉄釘も出ている。中世遺構群に関連するものであろう。

イ) 土壌（図74・75・207の15、写50）

土壌の基が確認されたが、時期不詳である。

1号土壌（図74、写50の249）

遺跡北端で発見されている。230×120cm、深さ30～60cmを数える楕円形の土壌である。遺物なく時期は不詳。

2号土壌（図74）

遺跡北寄で発見されたマウンドを持つ土壌である。200×270cm・深さ65cmの土壌であるが、時期不詳。

3号土壌（図75）

遺構の集中する遺跡北側で発見されている。260×120cm・深さ40cmの長大な土壌である。時期不詳。

4号土壌（図74・写50の250）

B区で発見されている。160mの径のほぼ円形プランを示す土壌である。遺物なく、時期不詳である。

5号土壌（図75）

遺跡の北西端で発見され、1・2号土壌に近い。170×150cm・深さ15cmを計る。時期不詳である。

6号土壌（図75）

遺構の集中する遺跡北側で発見されている。130×150cm、深さ20cmであるが、全部が掘り出されなかった。床面にピットを持つことからすれば、墓壇形態ともとれる。時期不詳。

7号土壌（図75）

遺跡北より、ピット群中にあり130×80cm、深さ40cmを計る。遺物は含まれず、時期不詳。

8号土壇 (図75)

3号土壇の東に位置し、140×55cm、深さ50cmを計る。西壁は袋状にえぐられる特異な形状である。遺物は含まれず、時期不詳。

9号土壇 (図75)

3・8号土壇の南隣にある。130×100cm、深さ25cmを計る。瓢形の形状をなしている。時期不詳。

3) まとめ

城平遺跡では、縄文中期ないしは後期の住居址1軒と、晩期の土器片・平安時代の住居址8軒。中世地下倉3基、同窖址2基、墓壇4基とピット群、時期不詳の土壇9基を確認し、またそれに伴う遺物を得た。縄文、平安の遺構ないしはそれに伴う遺物については省略し、特に中世関係の遺構などについてふれておきたい。

遺跡北側の東市杭付近を中心にして、中世遺構が検出されている。方形竪穴の形態をとるが、1m以上の深さを持つものを地下倉址としてとらえ、井戸状で、円形プラン、2m以上に至るものを窖址と呼んで区別した。いずれにせよ、地下貯蔵庫の形態を持つものと考えた。地下倉は壁垂直、床面に柱礎と考えられる石かまたは柱穴をうがっている。用地内ではあるが、東側は民家の石垣があつて全部を調査することができなくて心残りであつた。また窖址は円形プランの外側に柱穴を持っており、断面袋状をなし、底は平担につくつてある。2号窖址では、窖底で石臼片、天目陶器片が発見されている。柱穴は遺構外側をとりかこむ形に並んであり、上屋架構の跡とみたい。

300になんなんとするピット群は、そのいくつかは、柱穴であろう。出土遺物は内耳鍋、黄瀬戸系の陶器中国渡来銭などがある。古銭は開元通宝から永樂通宝まで13種17枚と、不明2枚が出土している。もし古銭で時代を考えるとすれば、その下限は永樂通宝の15世紀初頭ということになる。渡来、流通などの事情を勘案すれば、15～16世紀、戦国時代ということになる。

(宮沢)

18 城平遺跡

1) 位置 (図10)

伊那市西春近山本 838番地にある。西春近地区最北の遺跡で、権現山から北東へ延びる尾根の末端山麓に位置して、標高 725m ほどの、東に向かって傾斜する台地上にあり、その北側は水田となって、小黑川の南岸へとひろがっている。遺跡の大部分は過去の圃場整備の際に破壊され、桑畑のところだけが残された。

中央道は遺跡の東端をわずかにかすめており、小面積の三角地形が調査の対象となった。グリッドは、センター杭 51240m を AA とし、AA～AU までの 41～45 に 42 個を設定し、その 5 個を掘った。地層は、耕作土の下に黒色土があり、地表から 50cm の深さでロームとなっているが、用地の外ではロームの露出した部分も認められた。

2) 遺物

調査の結果、遺構は発見されず、わずかばかりの土器片を得たのみである。土器片は縄文時代中期(図 212・5～7)、土師、須恵器の小片数点で、いずれもローム上の黒色土中より出土している。

3) まとめ

分布調査では、中央道用地の西側に、かなりの量の土師、灰釉片を表採している。また、今回の調査で用地内においても、わずかではあるが土器片を認めることができた。したがって、遺跡の中心は、用地西側の桑畑にあつて、縄文時代中期および平安時代の遺構のあることが考えられ、これらは中央道による破壊を免れたことになる。

(深沢)

あしがき

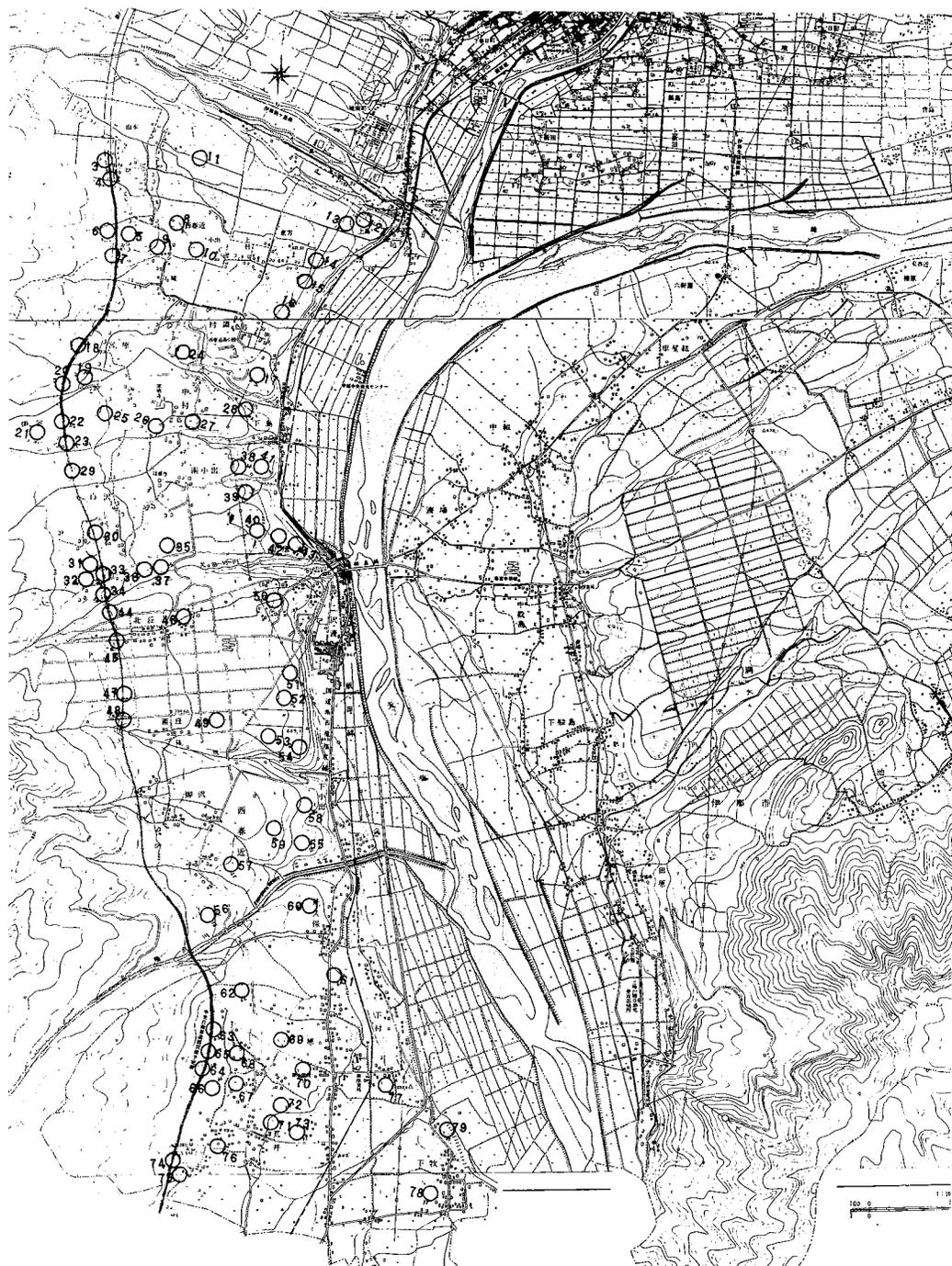
伊那市西春近地区18遺跡の発掘調査は、4月25日から始まり、12月14日に現場作業を終了した。時には20人に充たない日もあったが、盛時には120人の大部隊の調査団にふくれ上る時もあった。幸いにして、雨天が比較的すくなく、現場作業には好都合であった。参加延べ人数は9000人を越し、いろんな立場から、多くの方々の援助を得・ここに立派な報告書としてまとめることができたのは、望外のよろこびであり、また関係機関、関係者のご支授と調査団全員の努力の結果であり、団長として厚く感謝したい。

調査結果については、前年度までの調査同様に、多大の成果を得ている。

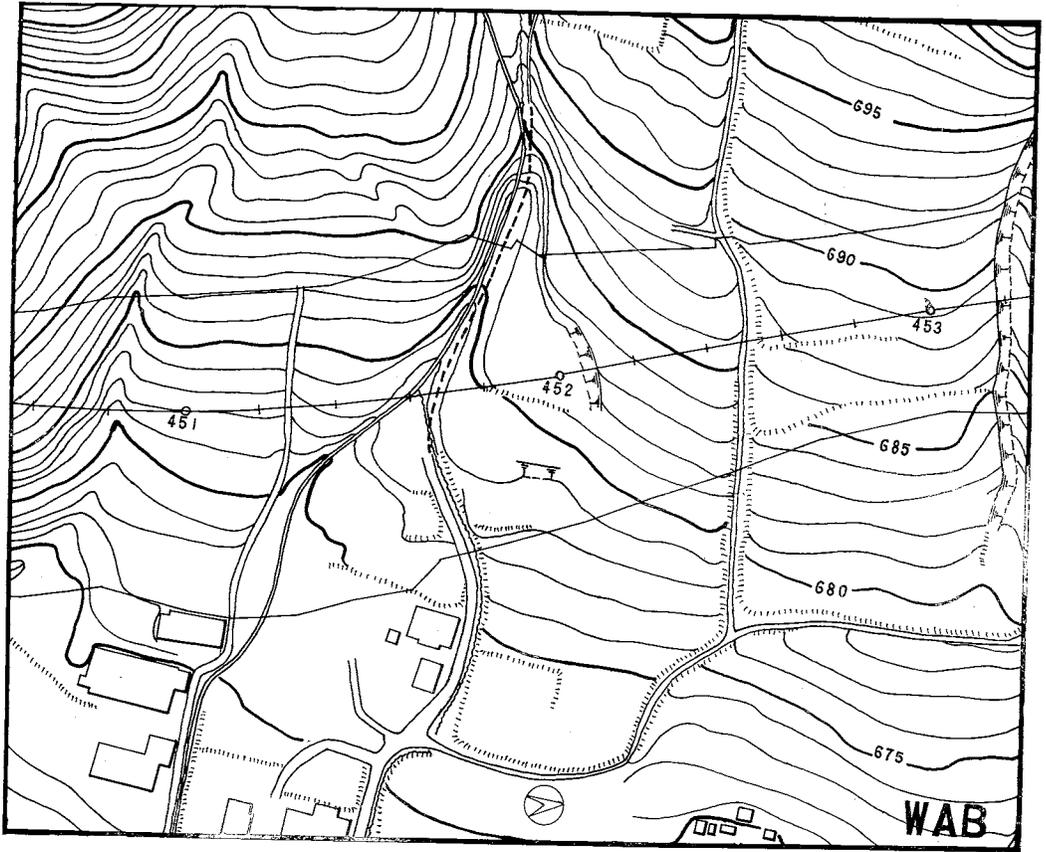
西春近地区18遺跡は、それぞれの遺跡の持つ歴史的意味を物語ってくれた。旧石器を出した遺跡が1、縄文時代では早期の遺構または遺物を出した、細ヶ谷B、百駄刈遺跡・前期では名廻南、山の根遺跡、中期の集落を出した北丘B・山の根遺跡、後期の百駄刈遺跡、弥生時代では、類例のすくない円形竪穴住居址を出した和手・富士山下遺跡・富士塚・名廻東古墳の石室と遺物、奈良時代の住居址群を出した和手・菖蒲沢遺跡・平安時代では南丘A・山の根・城平遺跡、中世の特異な遺構を出した城平遺跡など、それぞれに資料性高いものとして評価したい。

出土遺物・関係図面などは、伊那市下春日町有賀一郎方・中央道遺跡調査会伊那作業場に保管されている。

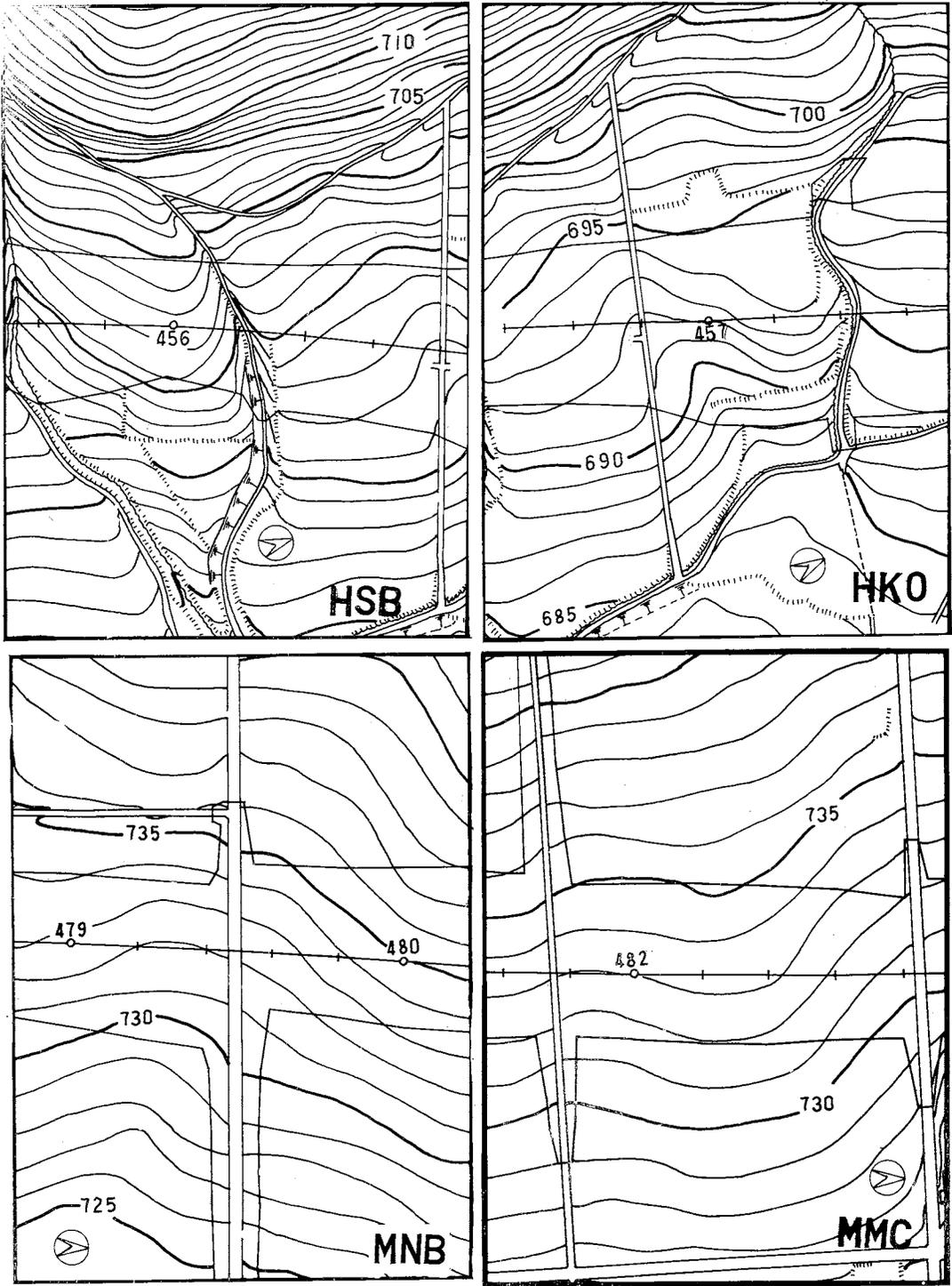
(大沢)



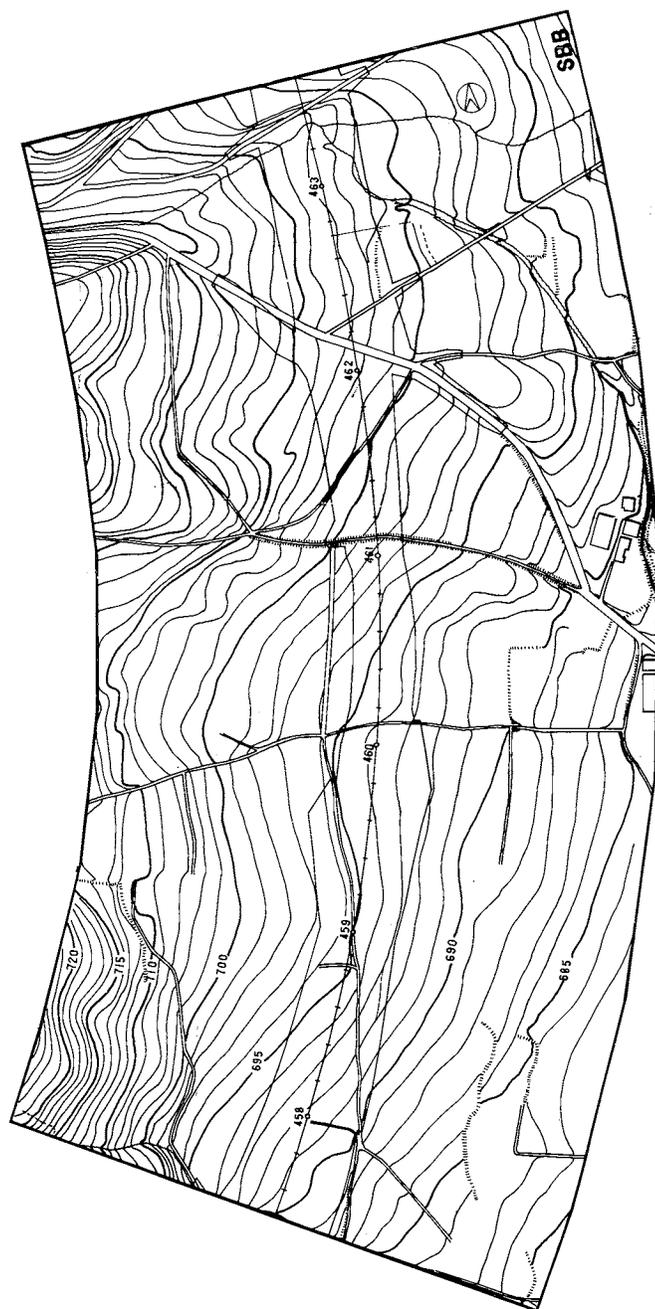
第1图 伊那市西春近地区遗迹分布图



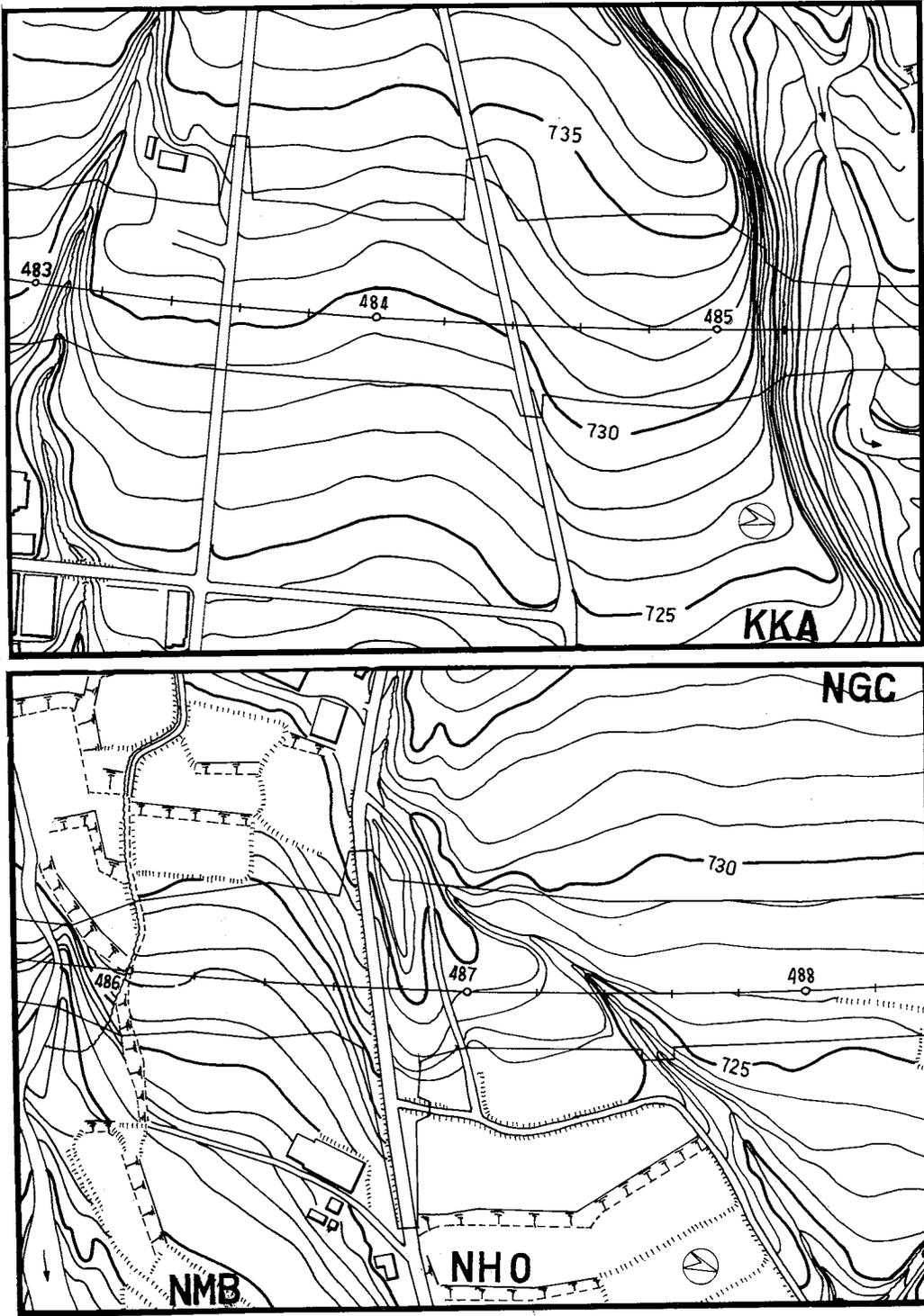
第2图 西春近地区中央道内各遗迹地形图



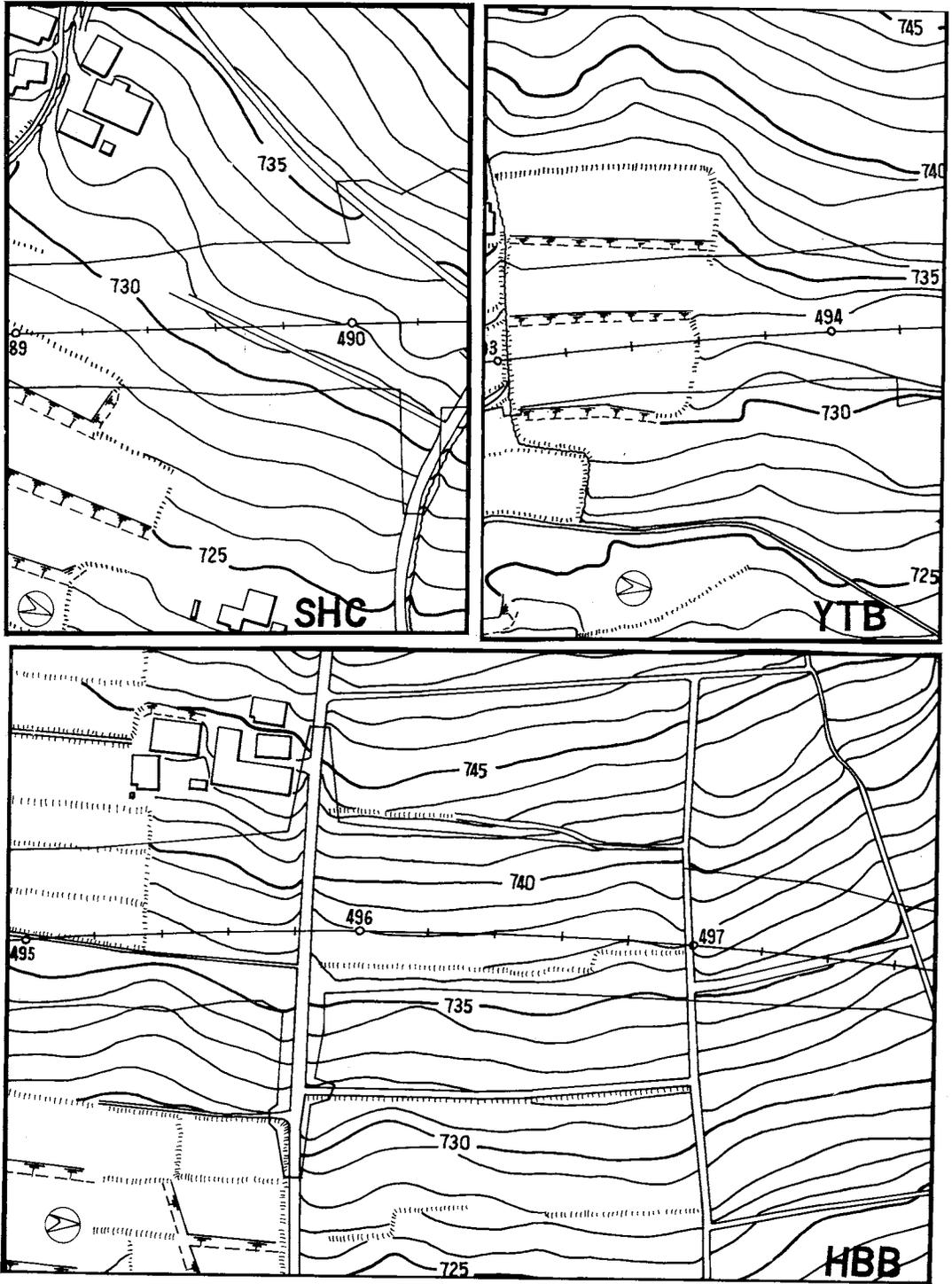
第3图 西春近地区中央道内各遺跡地形図



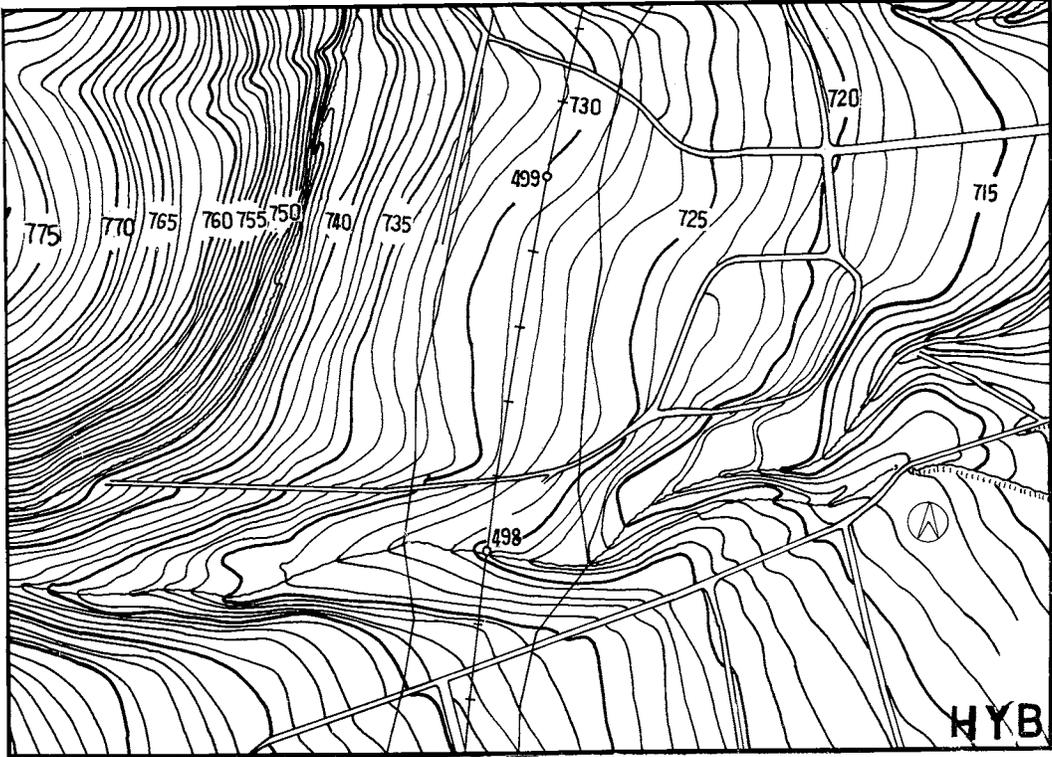
第4图 菅蒲沢遺跡地形图



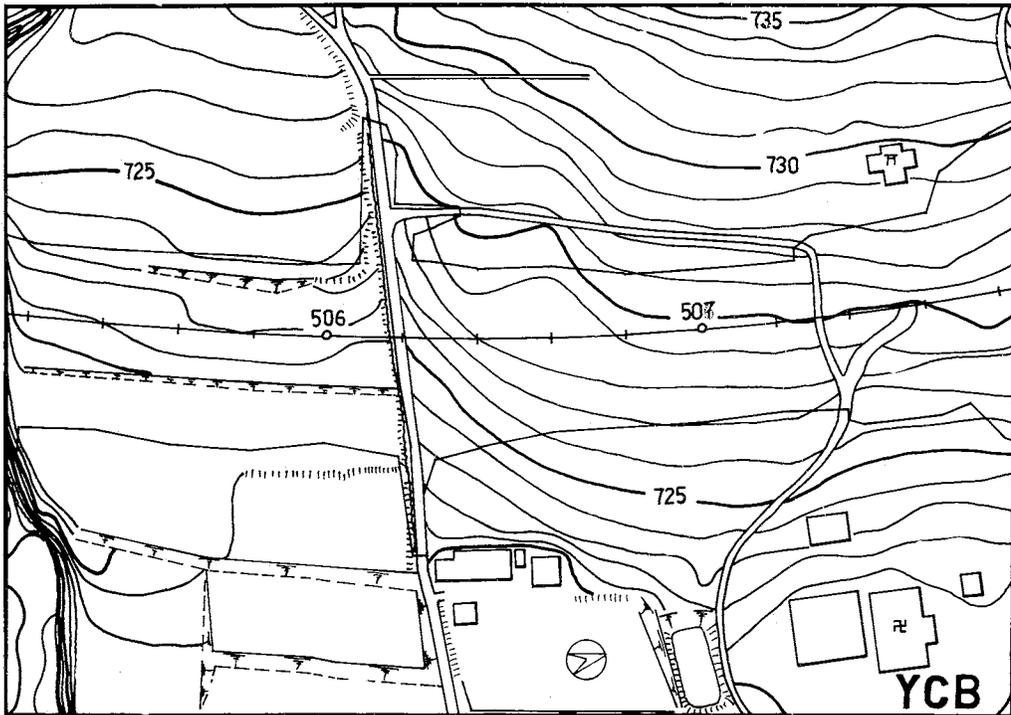
第5图 西春近地区中央道内各遗迹地形图



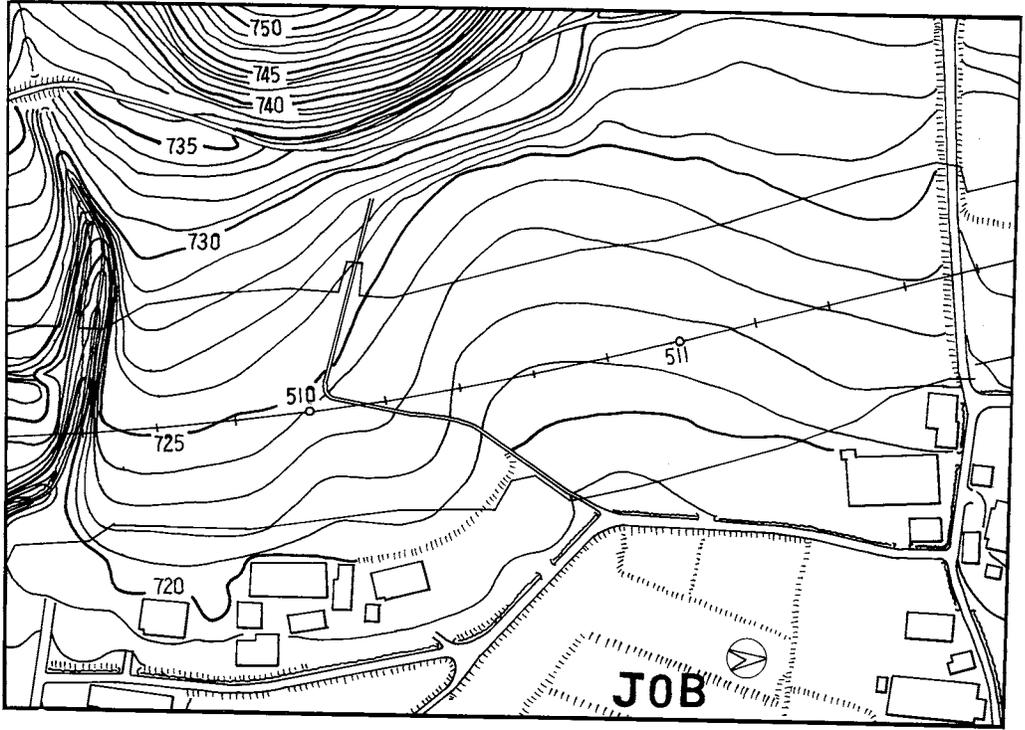
第6图 西春近地区中央道内各遺跡地形图



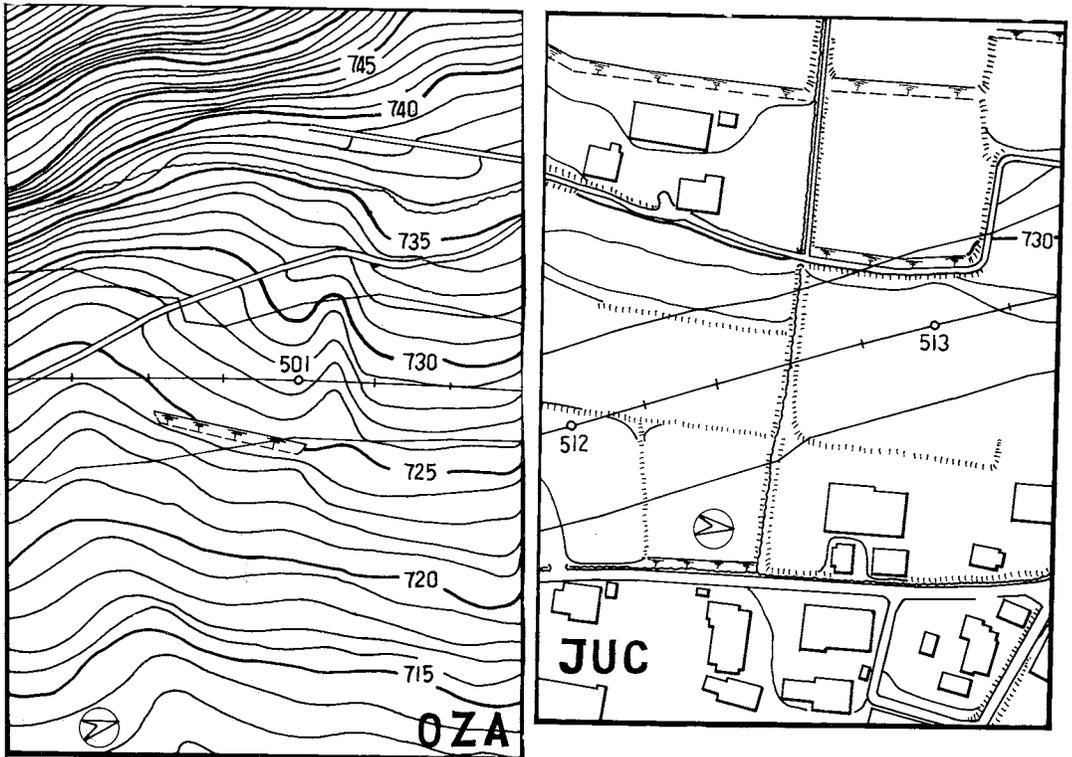
第7图 西春近地区中央道内各遗迹地形图



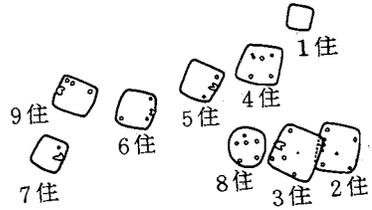
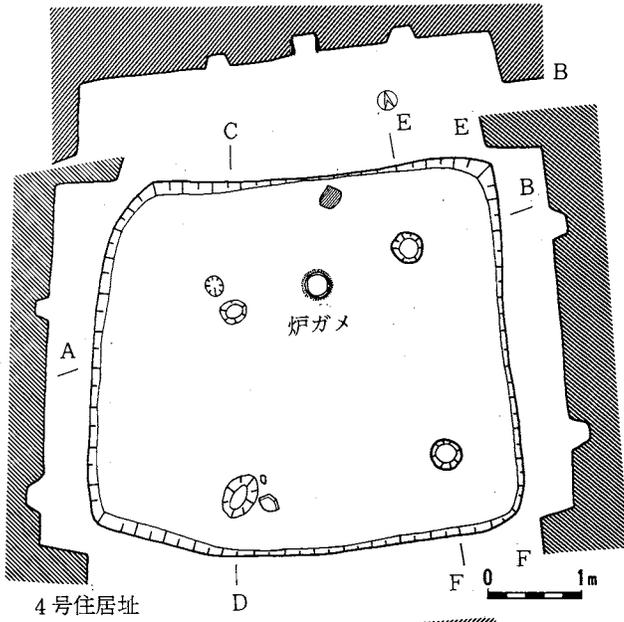
第8图 西春近地区中央道内各遗迹地形图



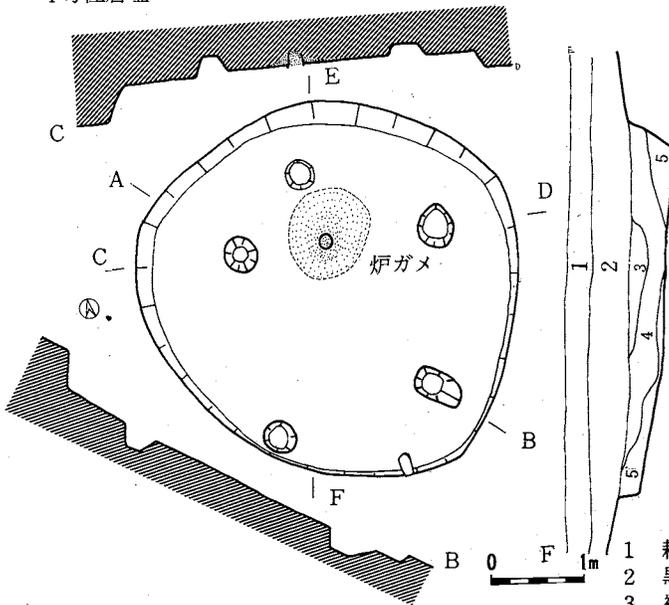
第9图 西春近地区中央道内各遺跡地形图



第10图 西春近地区中央道内各遺跡地形图

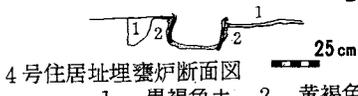


452+00



451+40

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 砂利
- 4 ローム混
- 5 黄褐色土



遺構配置図

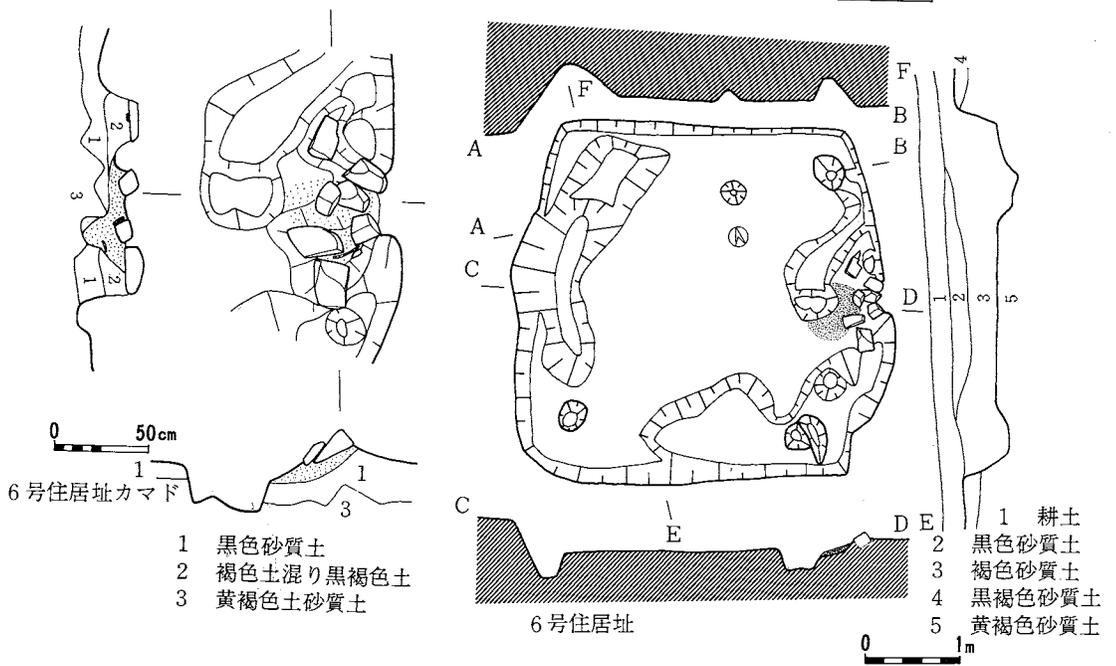
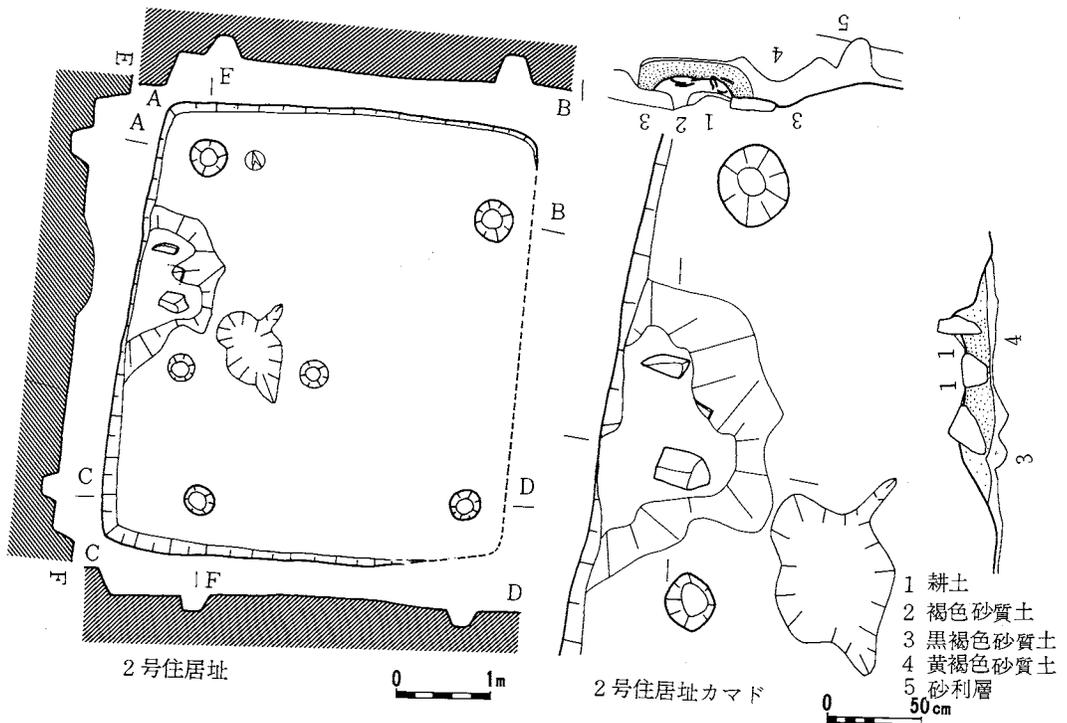


4号住居址埋壺炉断面図

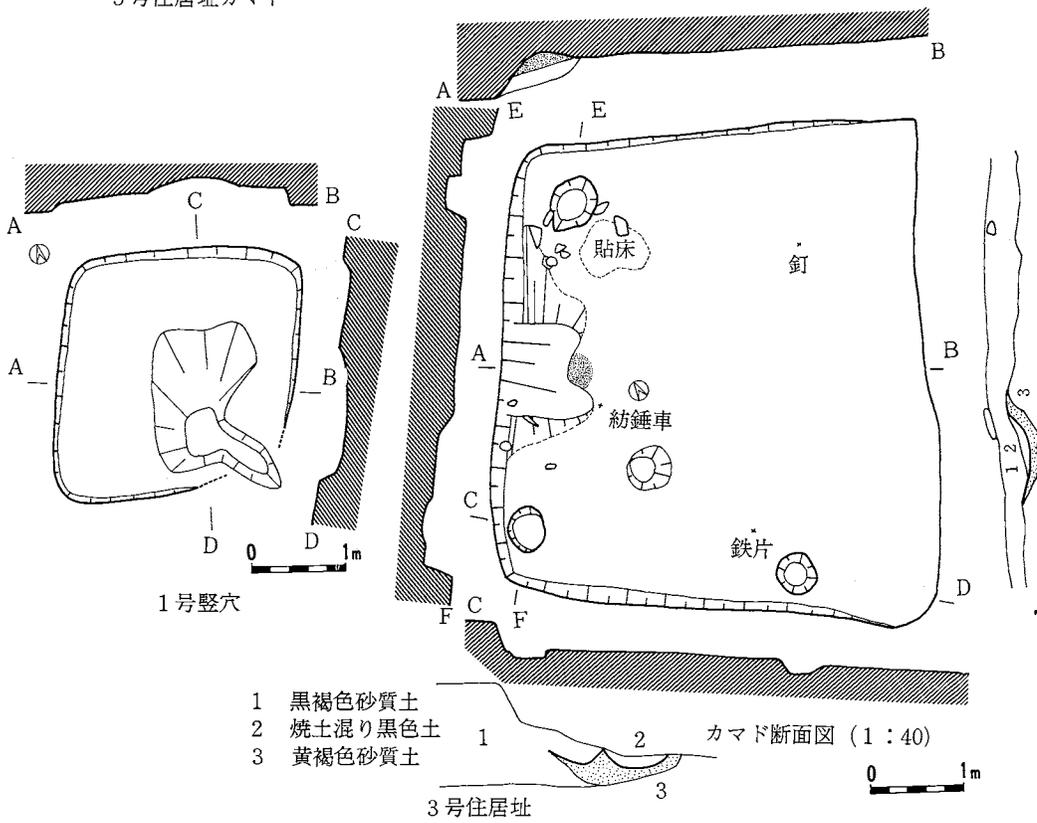
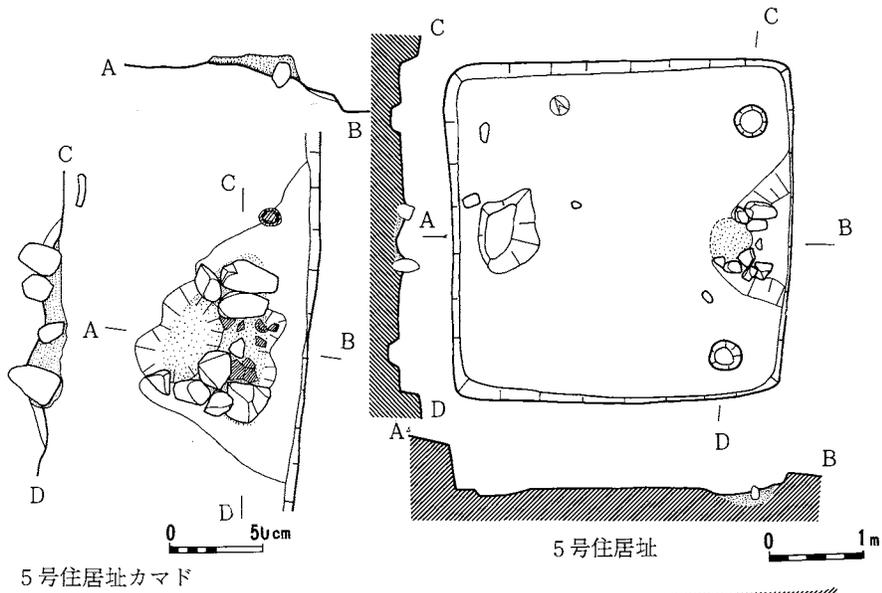
1. 黒褐色土 2. 黄褐色土

8号住居址埋壺炉断面図

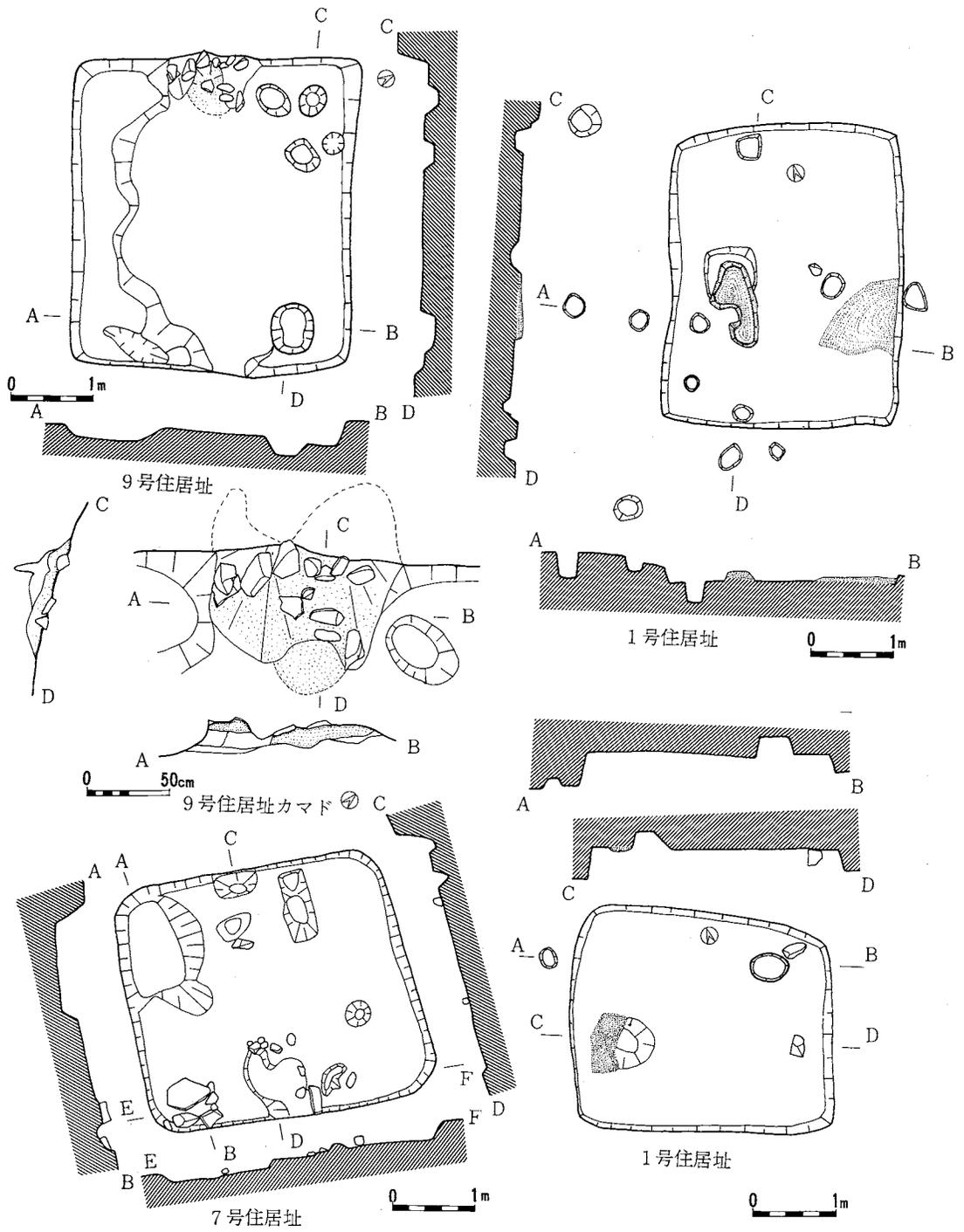
第11図 和手遺跡遺構配置図 (1: 800) 4・8号住居址 (1: 80)



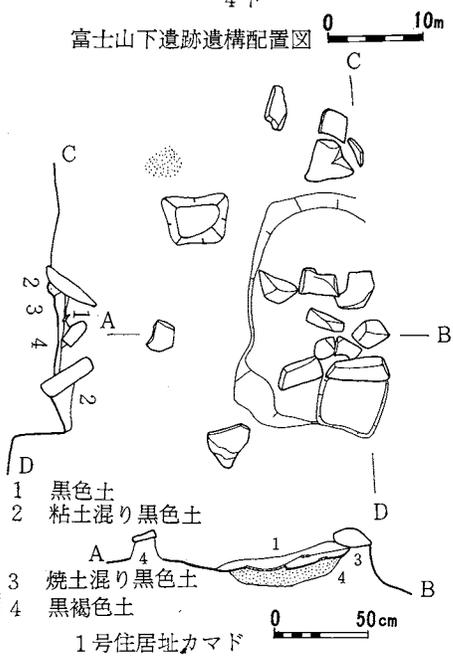
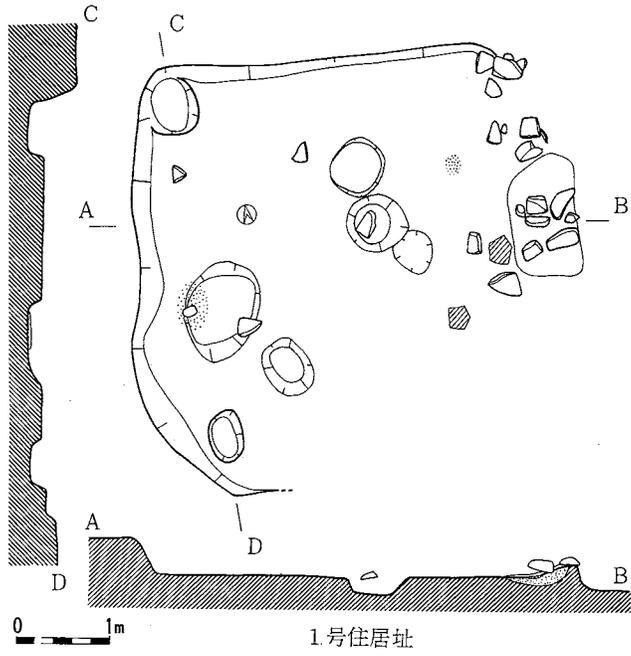
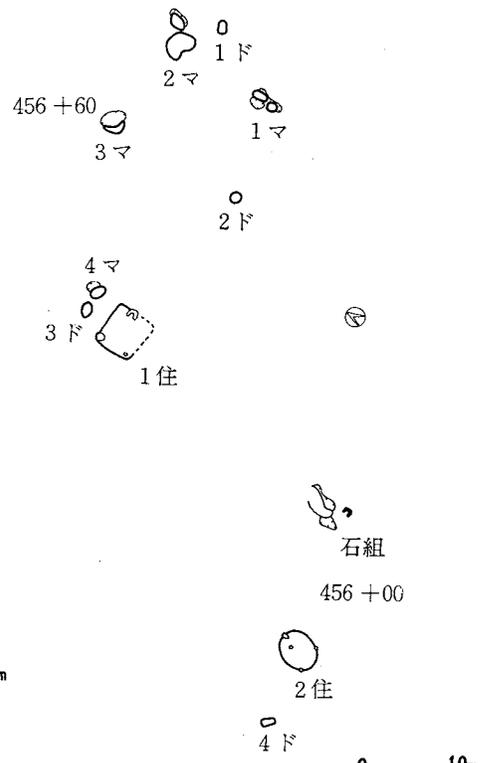
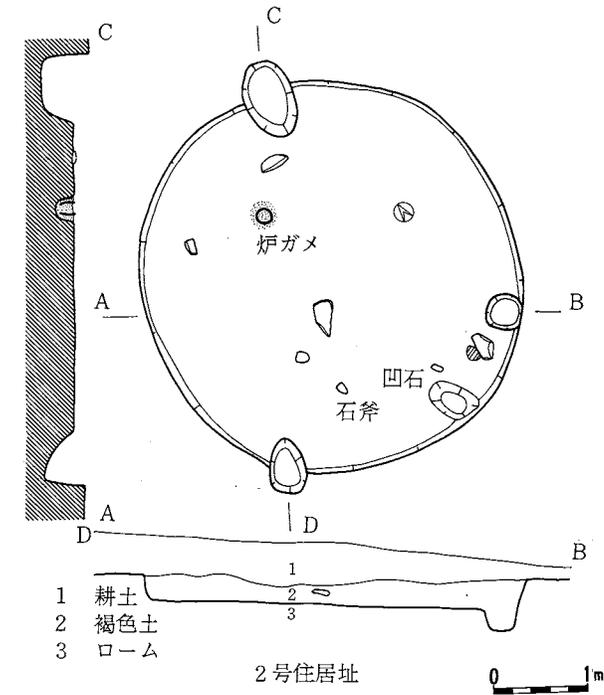
第12図 和手遺跡2・6号住居址 (1:80)



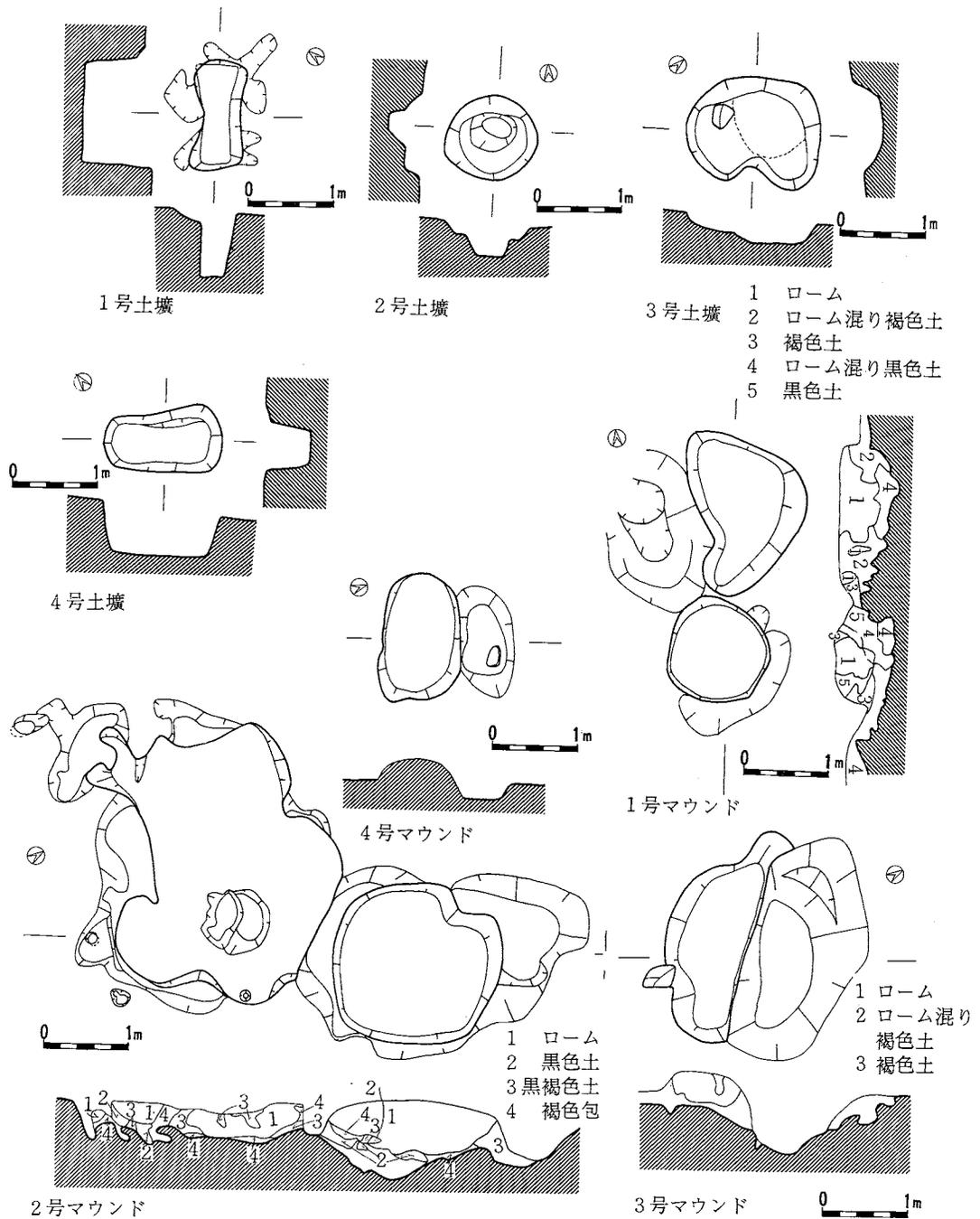
第13図 和手遺跡3・5号住居址・1号竪穴 (1:80)



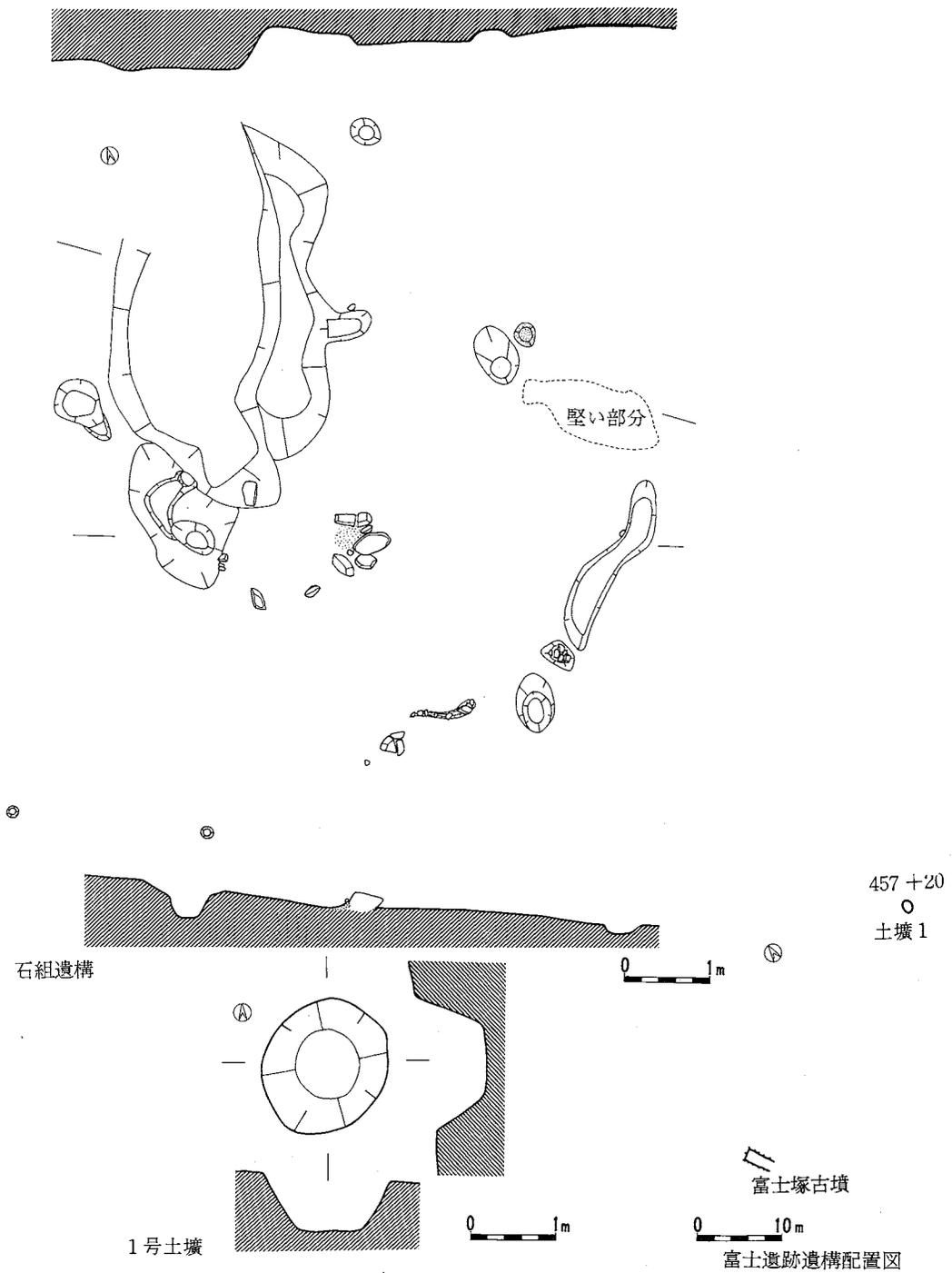
第14図 和手遺跡1・7・9・10号住居址 (1:80)



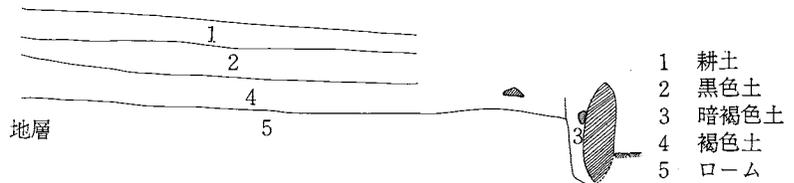
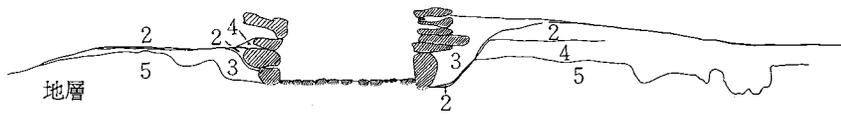
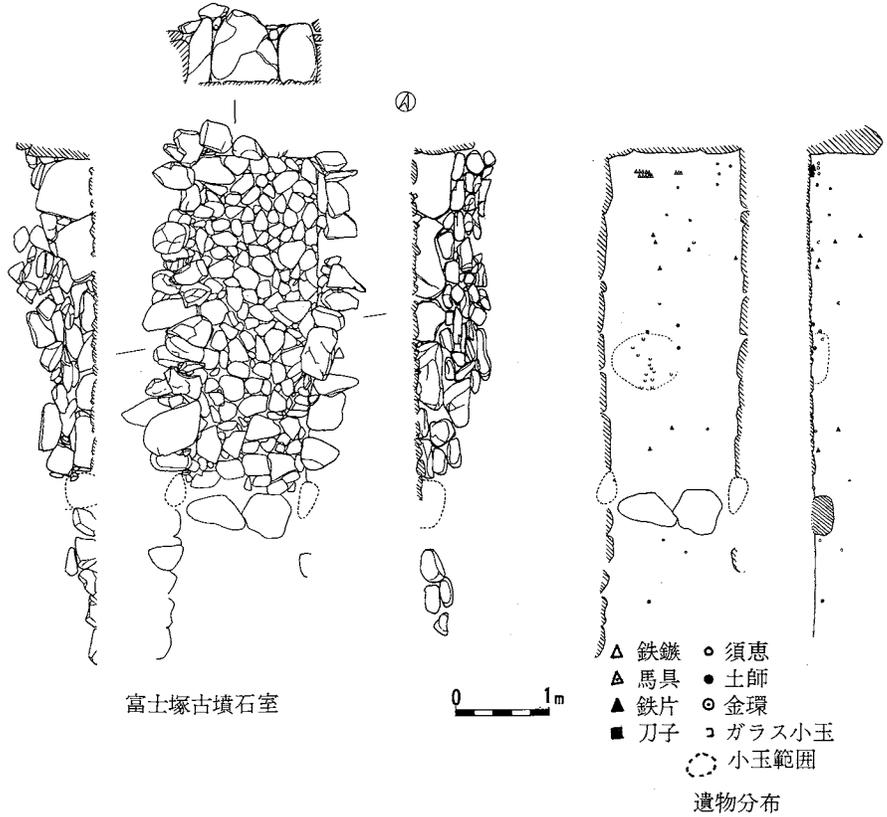
第15図 富士山下遺跡遺構配置図 (1 : 800) 1・2号住居址 (1 : 80)



第16図 富士山下遺跡1～4号土壙・1～4号マウンド(1:80)

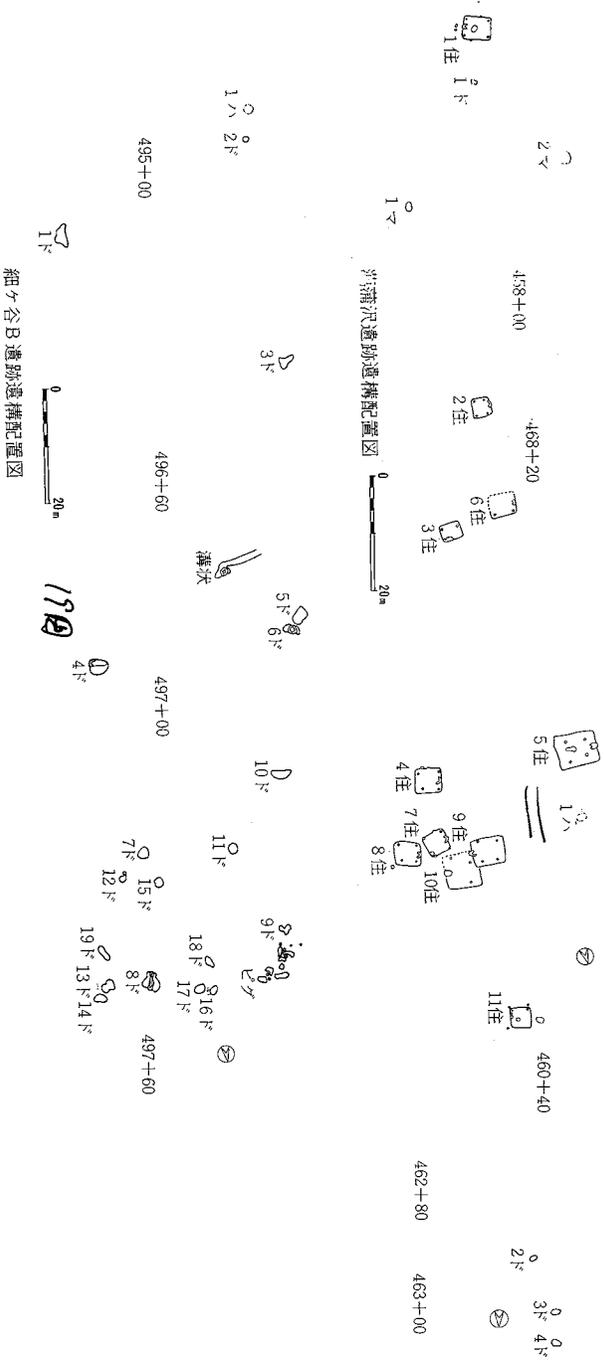


第17図 富士山下遺跡石組遺構・富士塚遺跡1号土坑
(1:80) 遺構配置図 (1:800)



第18図 富士塚古墳石室・遺物分布図・地層図 (1:80)

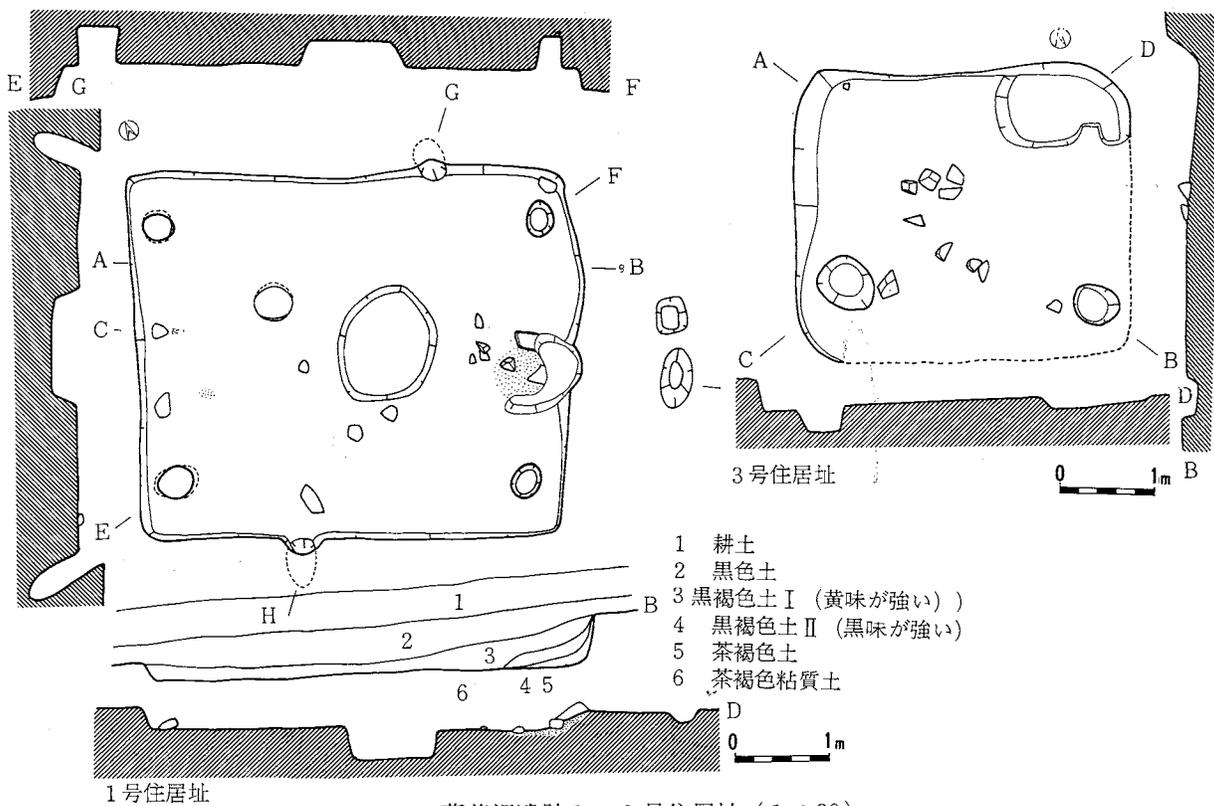
0 1m



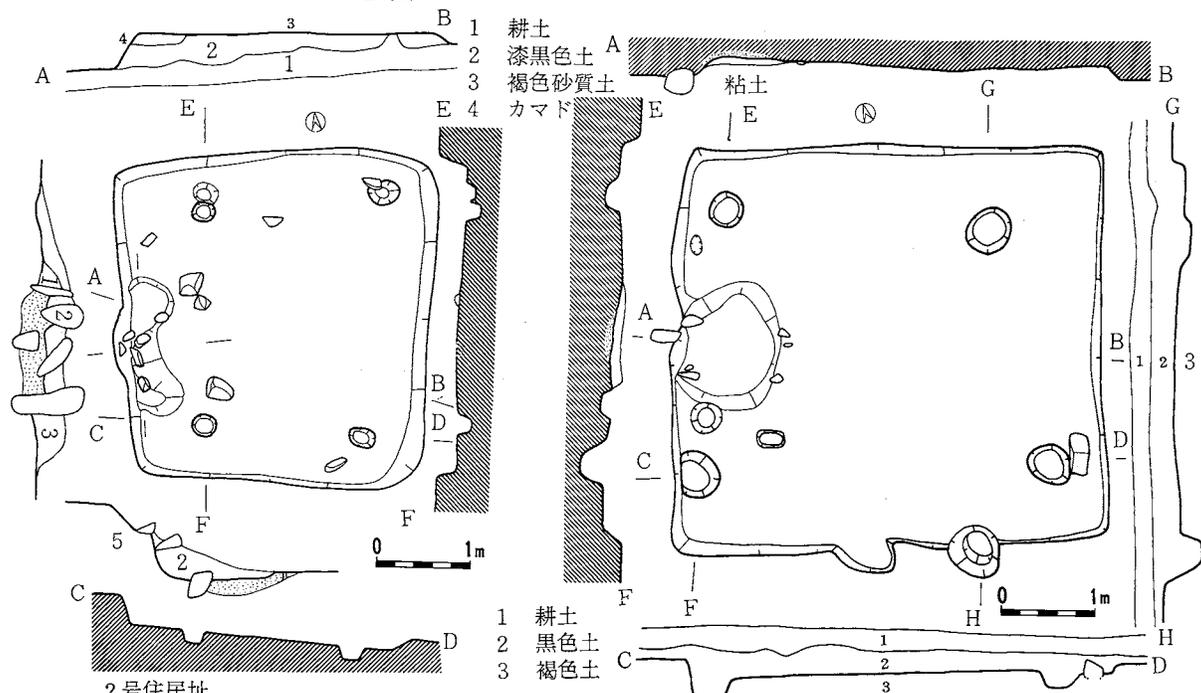
菴蒲沢遺跡遺構配置図

細ヶ谷B遺跡遺構配置図

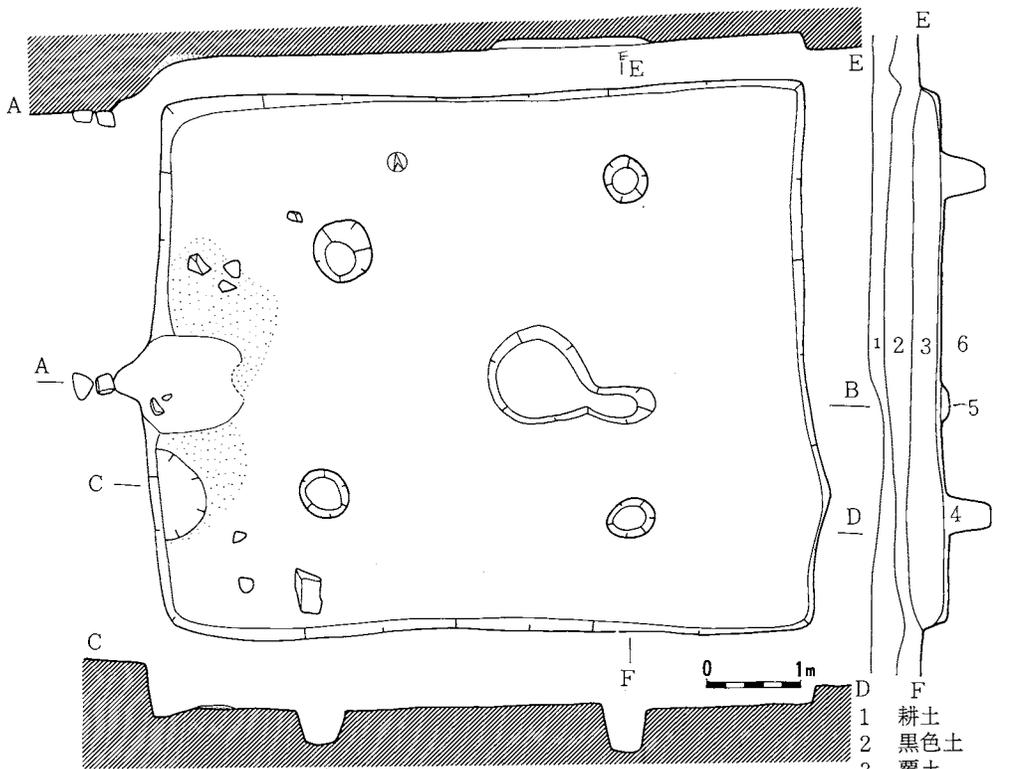
第19図 菴蒲沢、細ヶ谷B遺跡遺構配置図 (1:1200)



第20図 菖蒲沢遺跡1・3号住居址 (1:80)

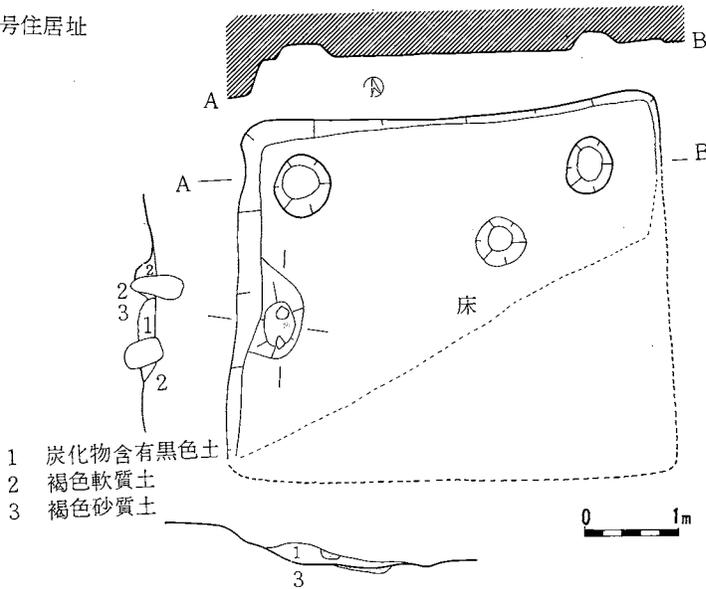


第21図 菖蒲沢遺跡2・4号住居址 (1:80)



5号住居址

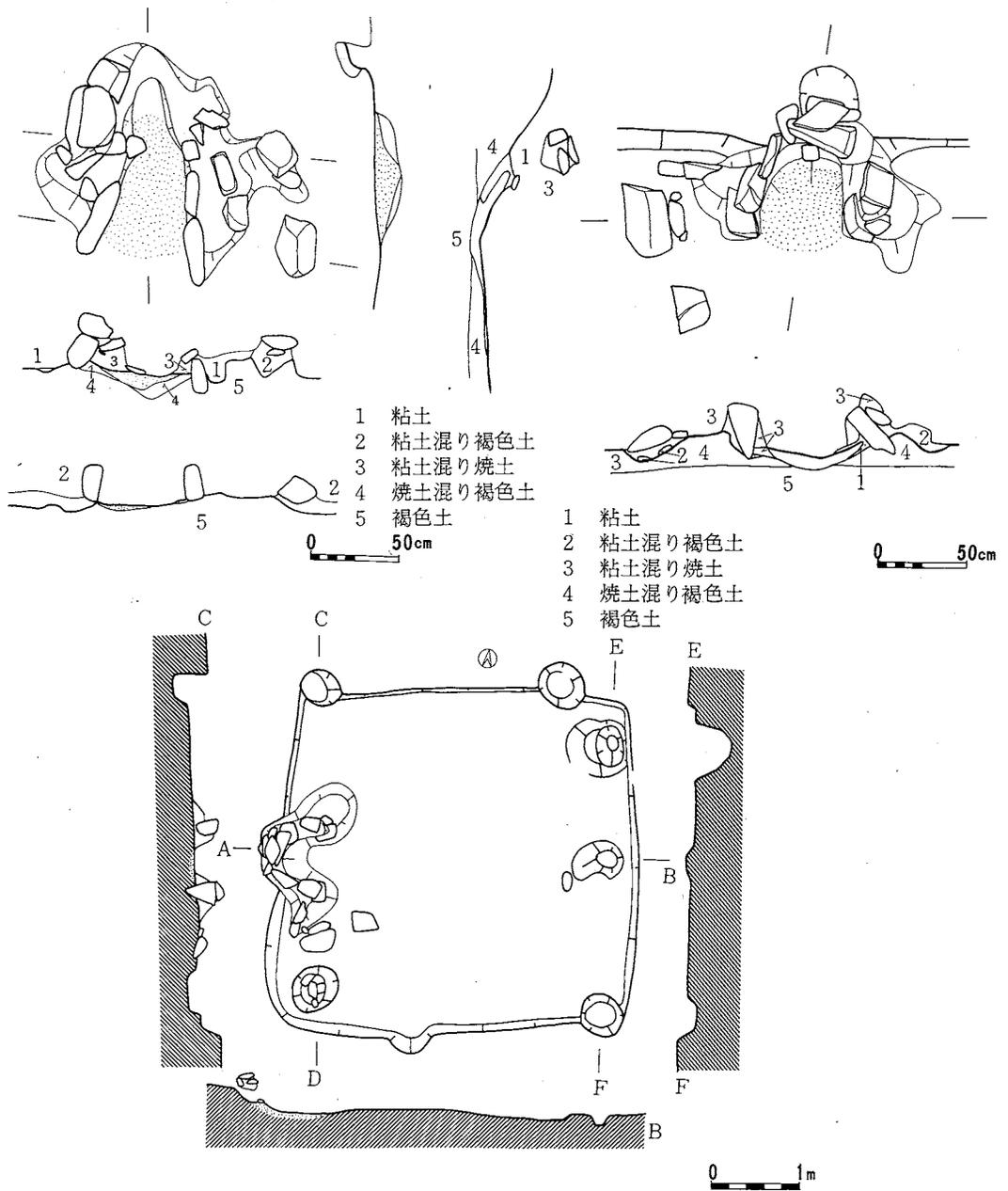
- 1 耕土
- 2 黒色土
- 3 覆土
- 4 床土
- 5 焼土炭化物混り黒色土
- 6 褐色土



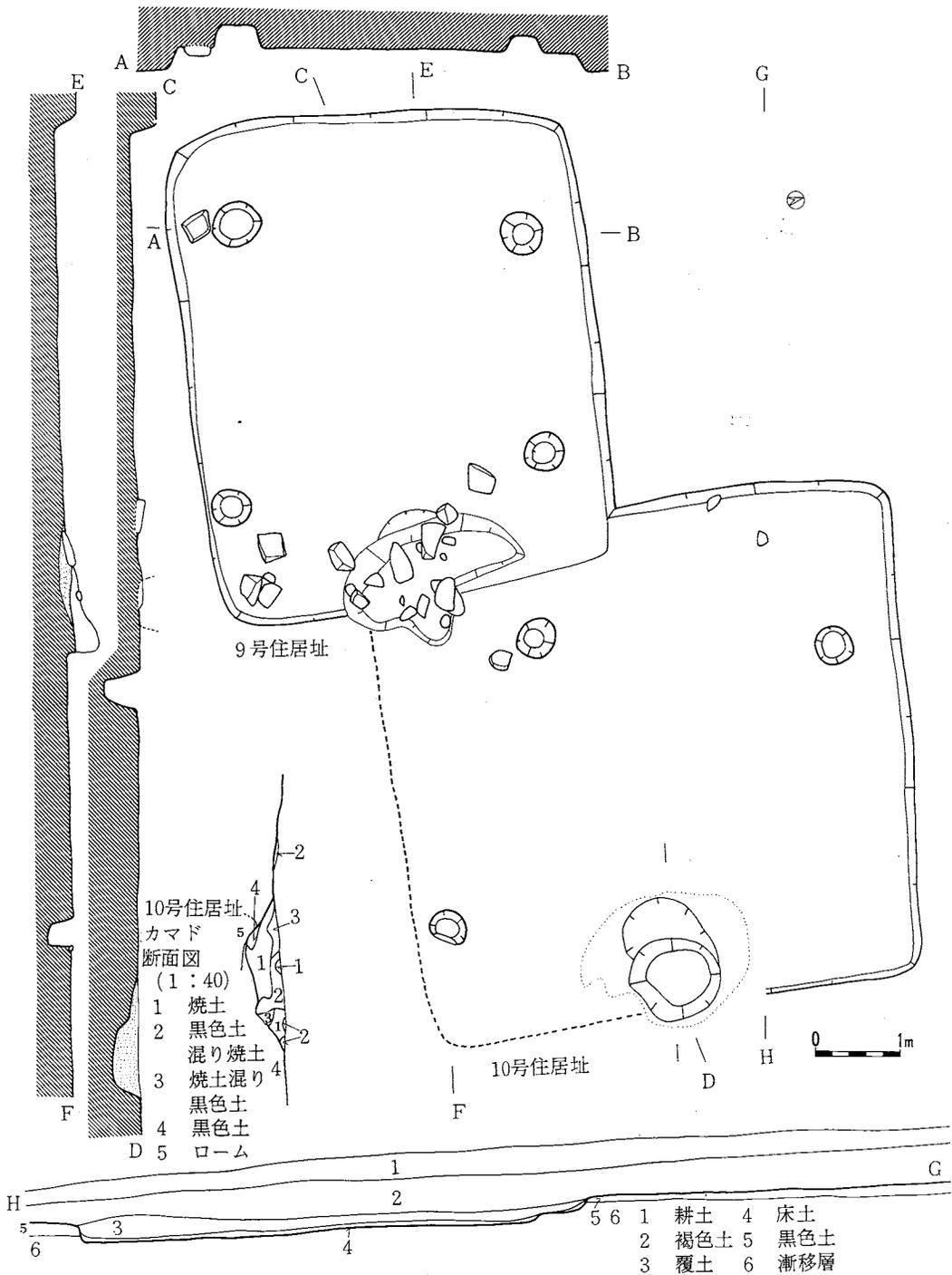
6号住居址

- 1 炭化物含有黒色土
- 2 褐色軟質土
- 3 褐色砂質土

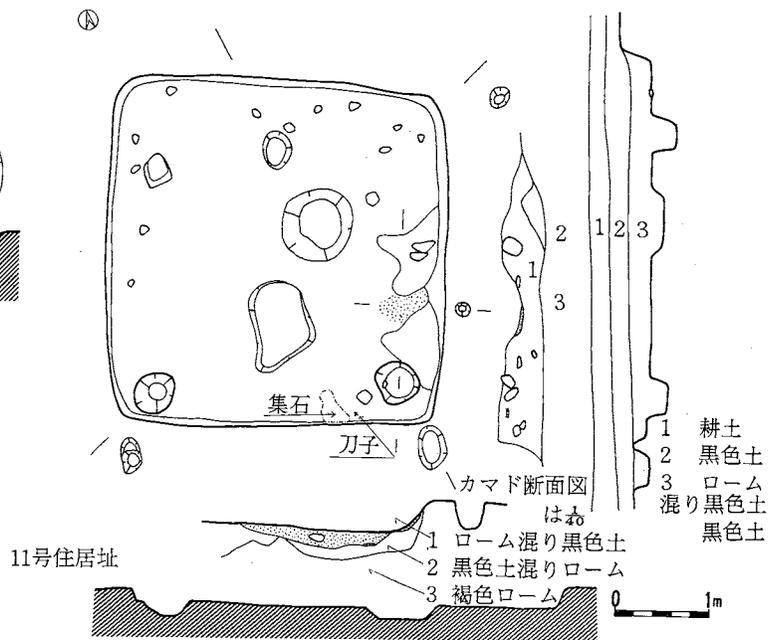
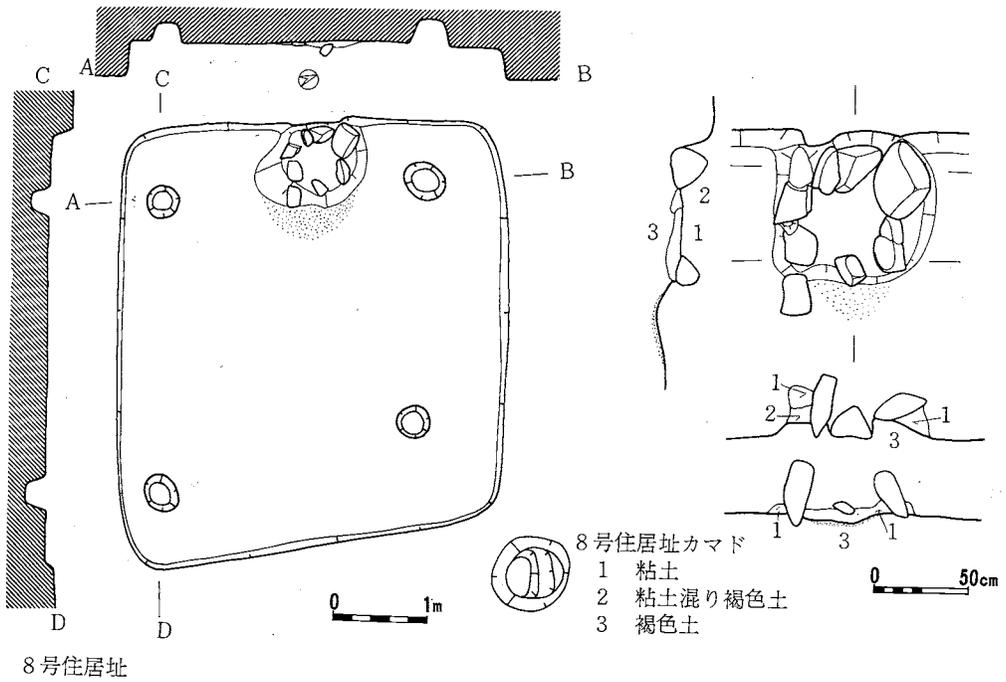
第22図 菖蒲沢遺跡5・6号住居址(1:80)



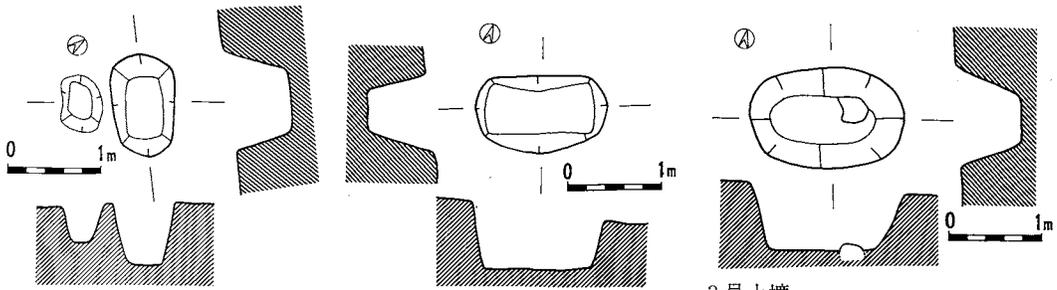
第23図 葛蒲沢遺跡7号住居址(1:80)



第24図 菖蒲沢遺跡9・10号住居址 (1:80)



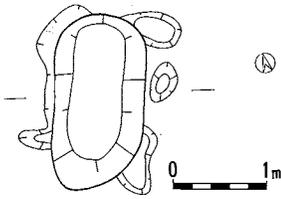
第25図 菖蒲沢遺跡8・11号住居址 (1:80)



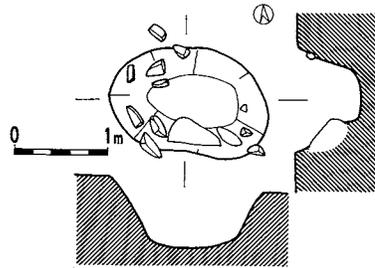
1号土壙

2号土壙

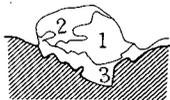
3号土壙



1号マウンド

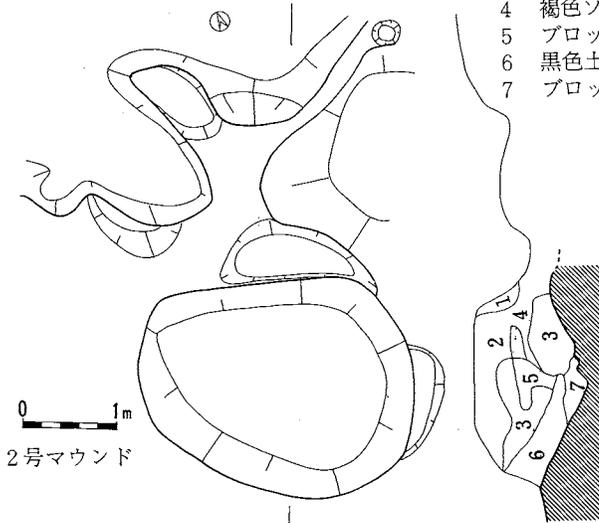


4号土壙

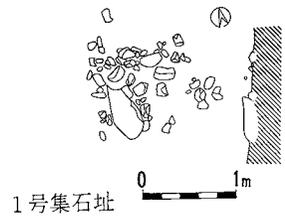


- 1 黒色土
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土混り
黒色土

- 1 ハードローム
- 2 ソフトローム
- 3 ブロック状ハードローム入のソフトローム
- 4 褐色ソフトローム
- 5 ブロック状ハードローム混入の褐色ソフトローム
- 6 黒色土
- 7 ブロック状ハードローム混入黒色土

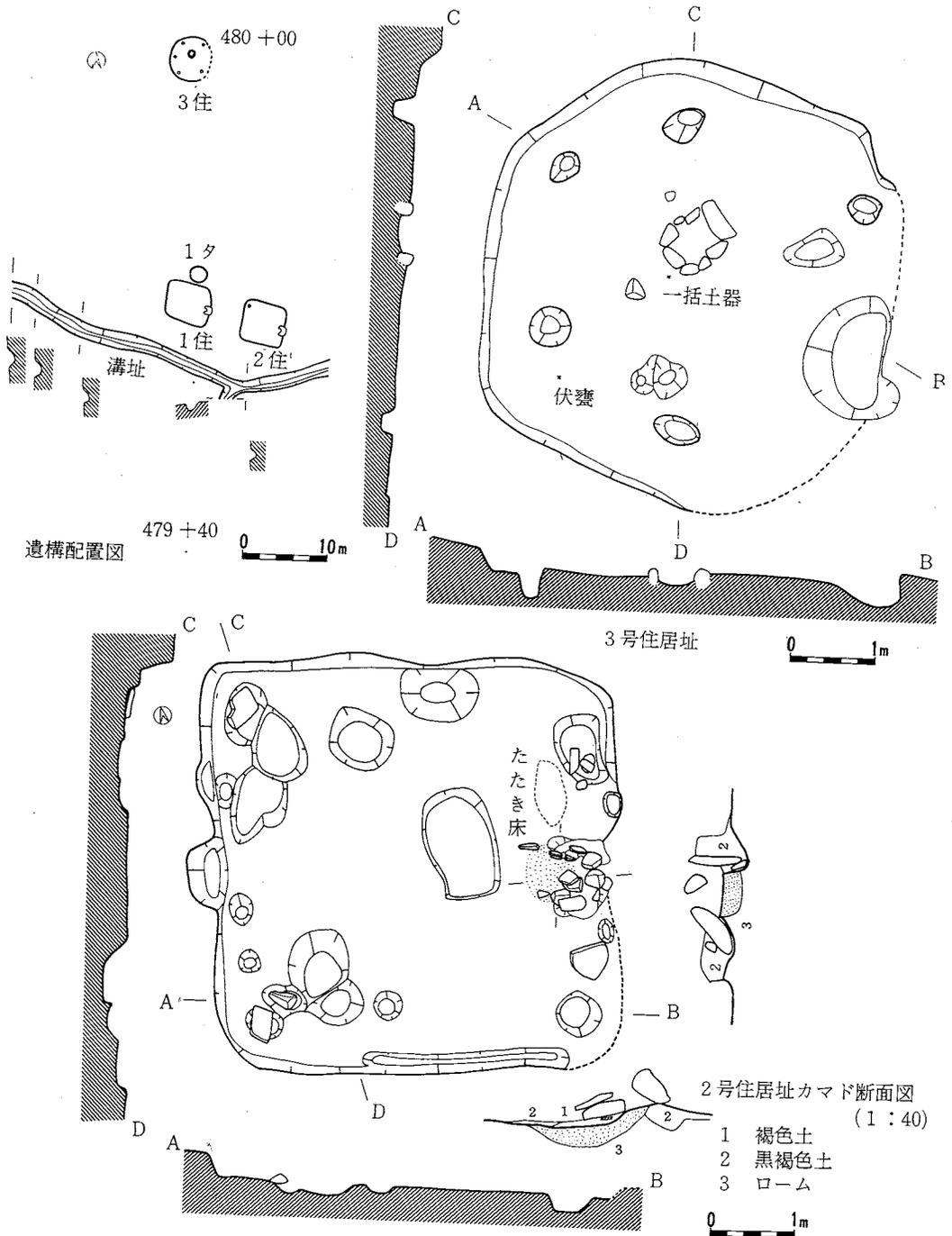


2号マウンド

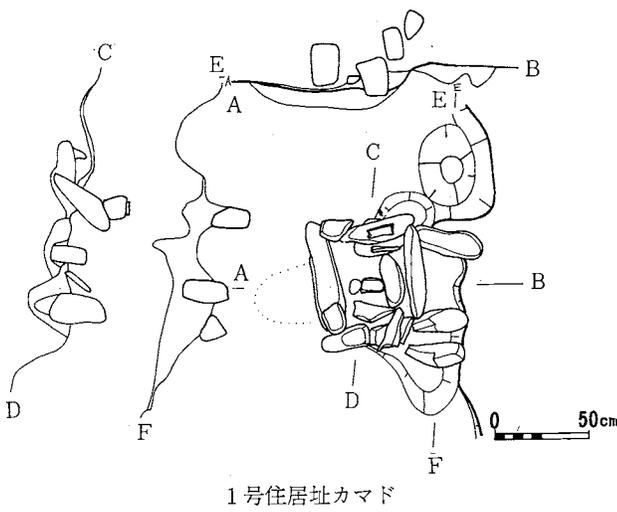
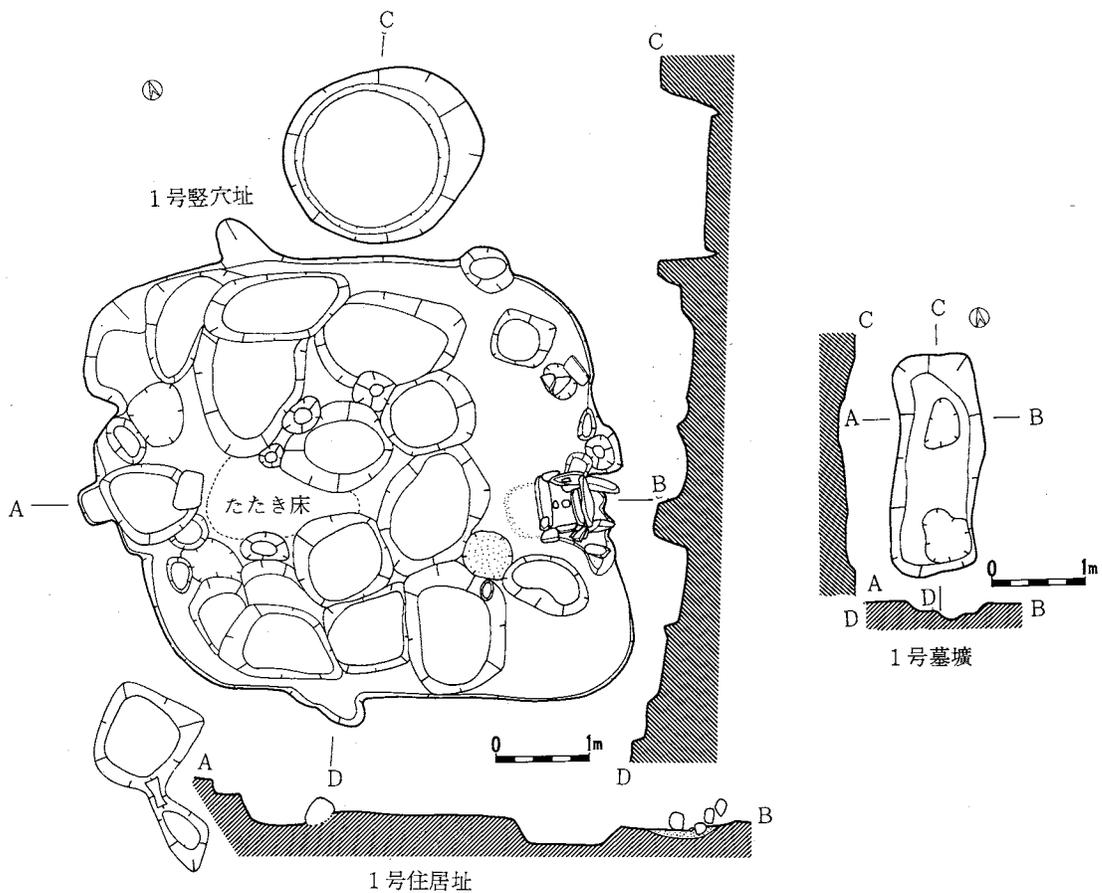


1号集石址

第26図 菖蒲沢遺跡1～4号土壙 1・2号マウンド・1号集石址 (1:80)

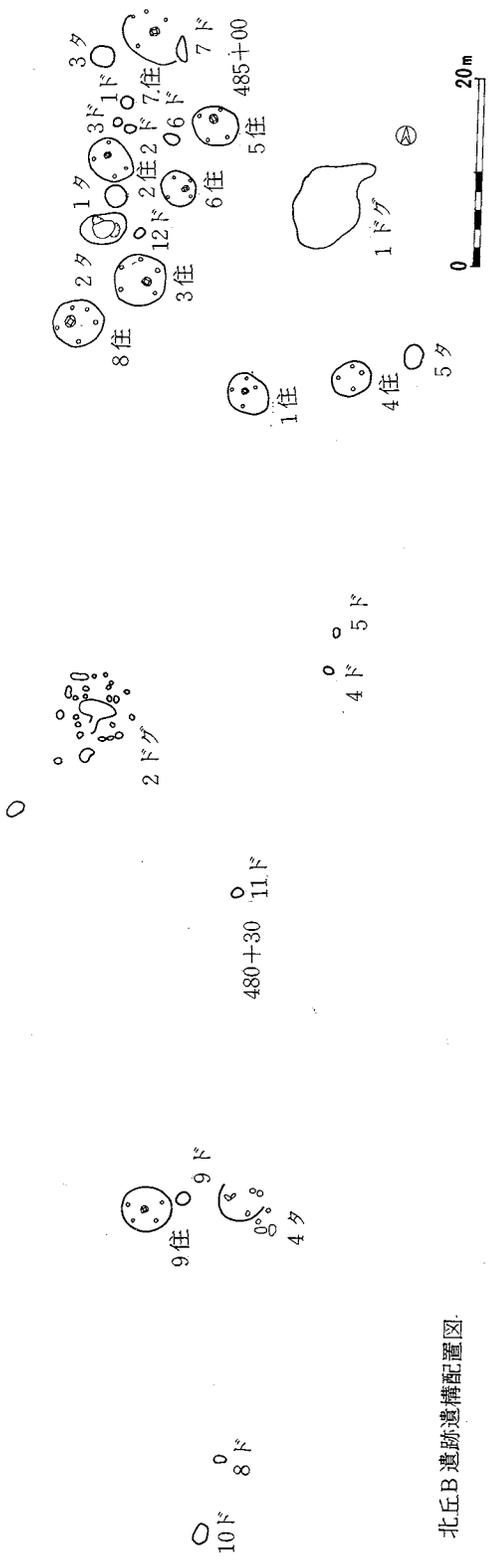


第27図 南丘A 遺跡遺構配置図 (1:800)・2・3号住居址 (1:80)

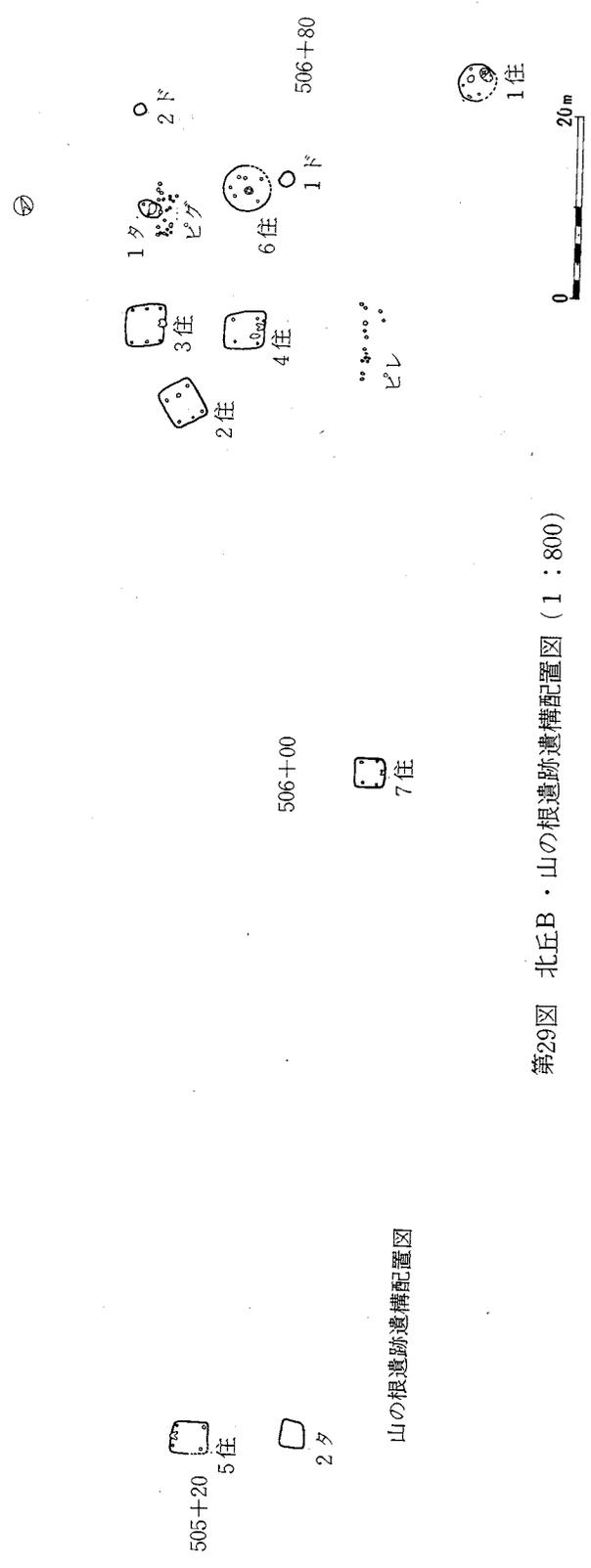


- 溝址断面図
- 1 耕土
 - 2 黒色土
 - 3 堅い黒色土
 - 4 砂混り黒色土
 - 5 ローム混り黒色土
 - 6 黒色土混りローム
 - 7 褐色土
 - 8 ローム

第28図 南丘A 遺跡 1号住居址・1号竖穴・1号墓塚・溝址断面図 (1:80)

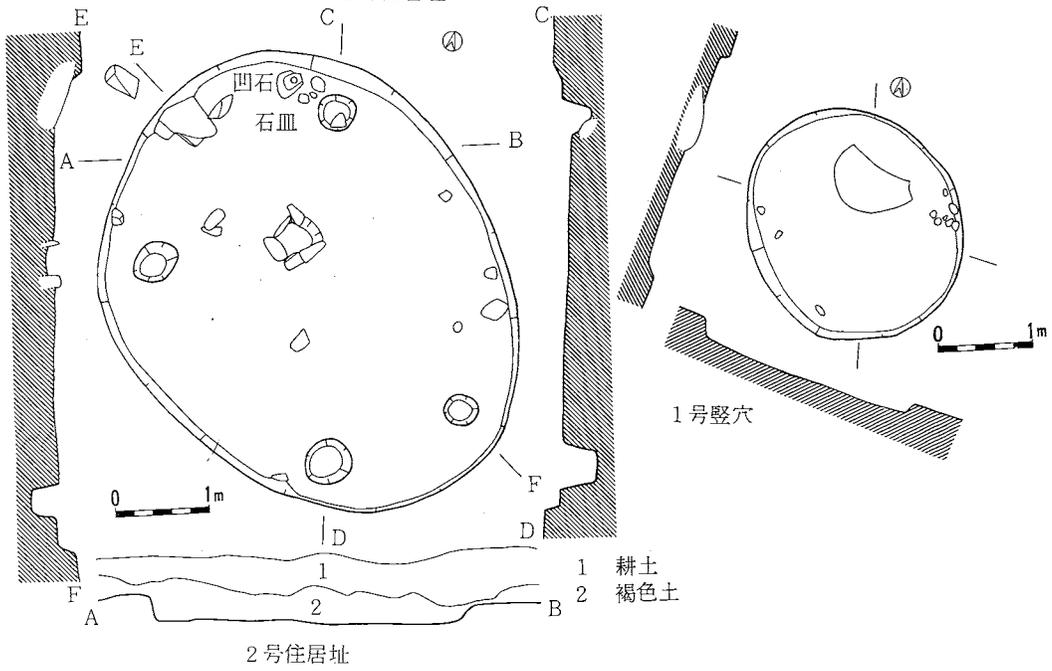
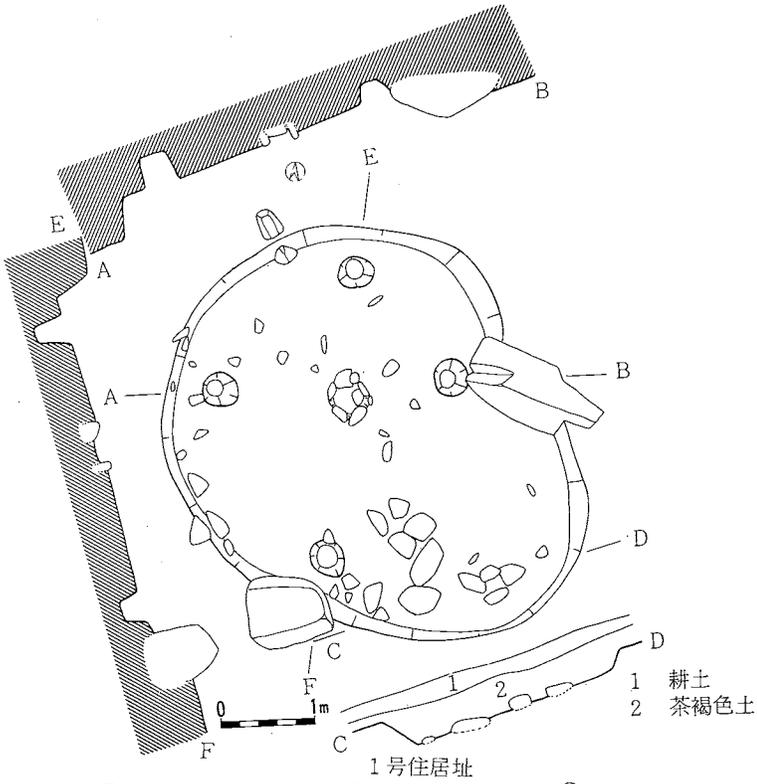


北丘B 遺跡遺構配置図

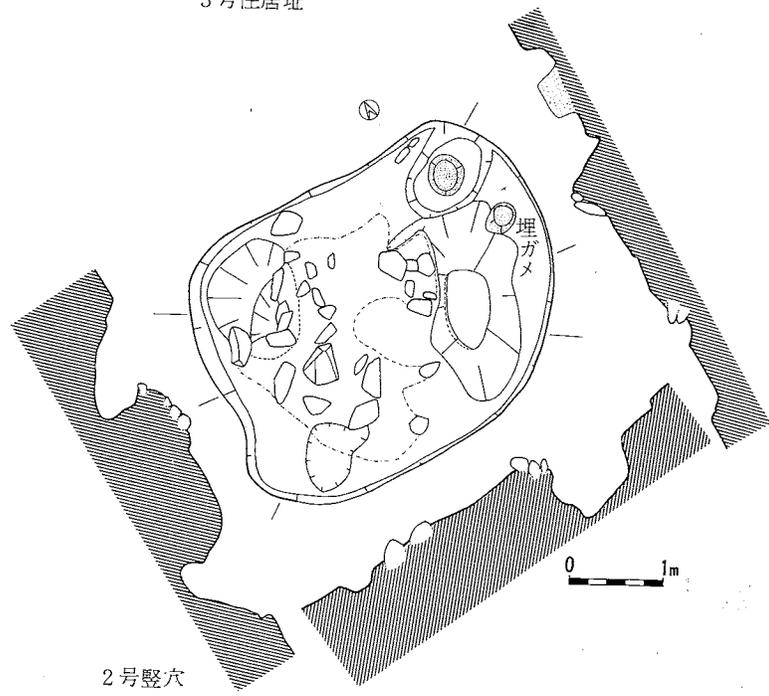
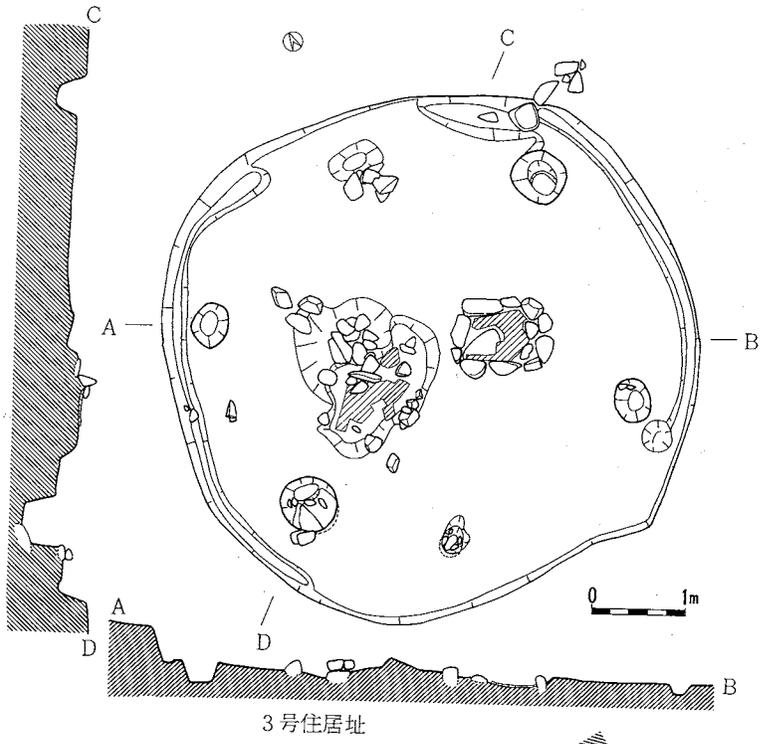


山の根遺跡遺構配置図

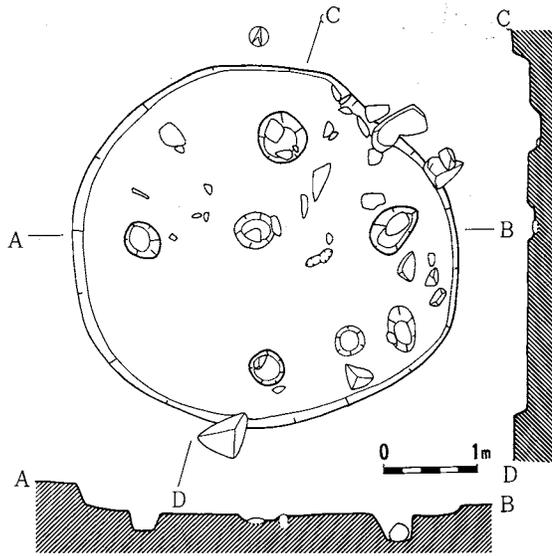
第29図 北丘B・山の根遺跡遺構配置図 (1:800)



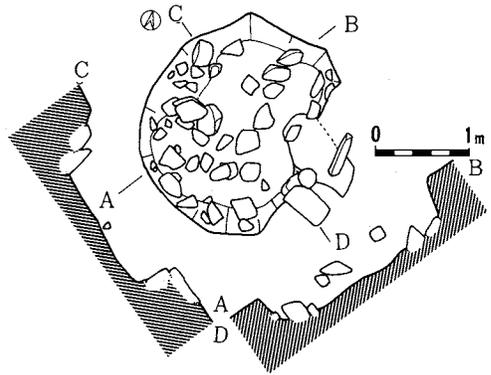
第30图 北丘B 遗迹1・2号住居址・1号竖穴 (1:80)



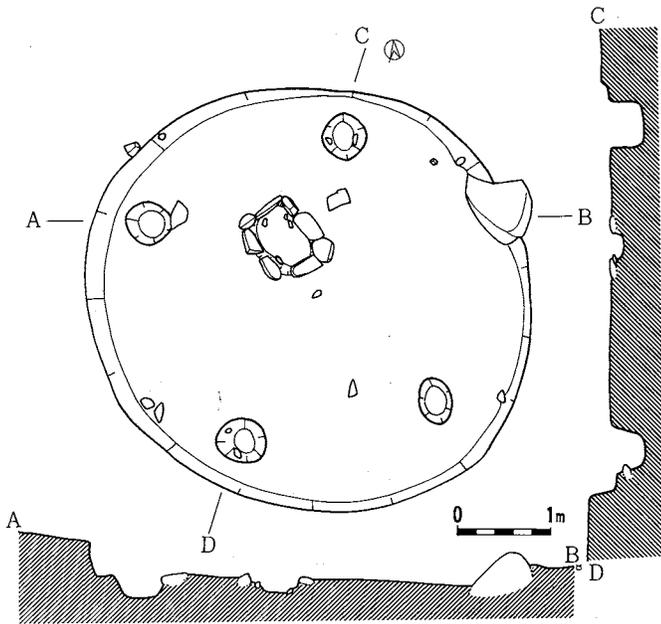
第31図 北丘B 遺跡 3号住居址・2号竪穴 (1:80)



4号住居址

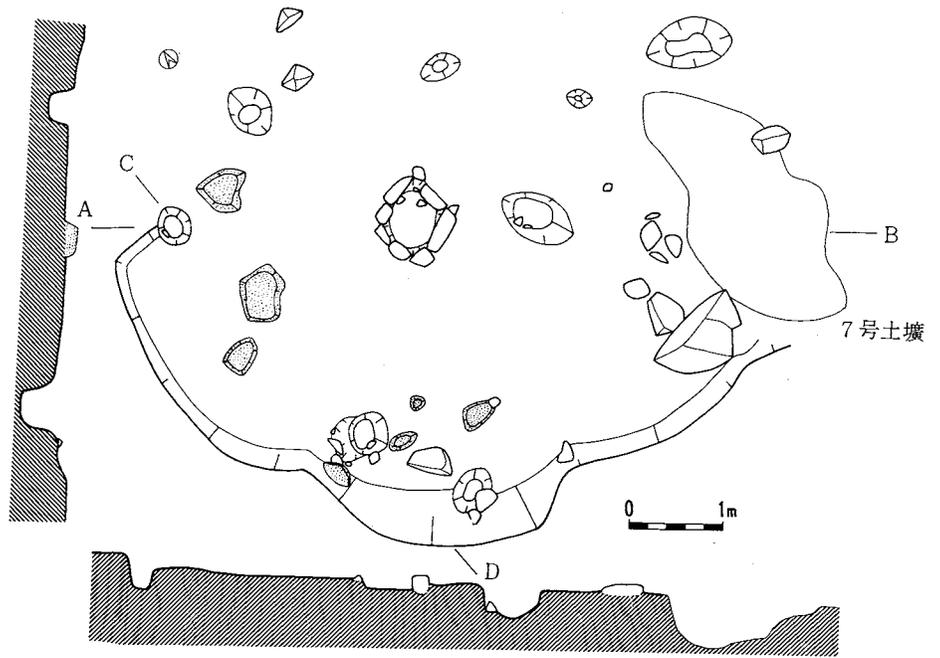


5号竖穴

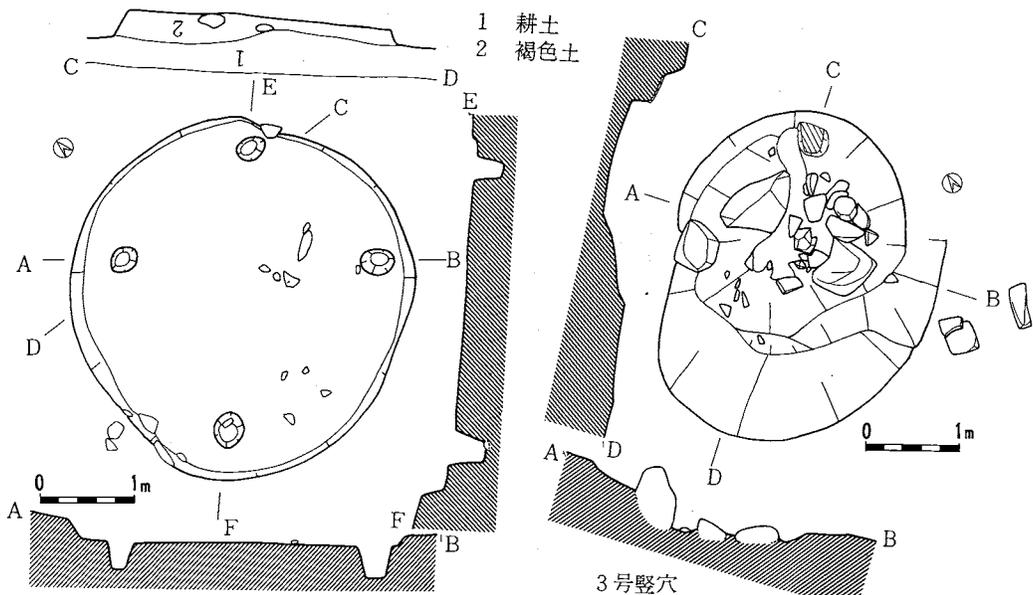


5号住居址

第32图 北丘B遺跡4・5号住居址・5号竖穴 (1:80)



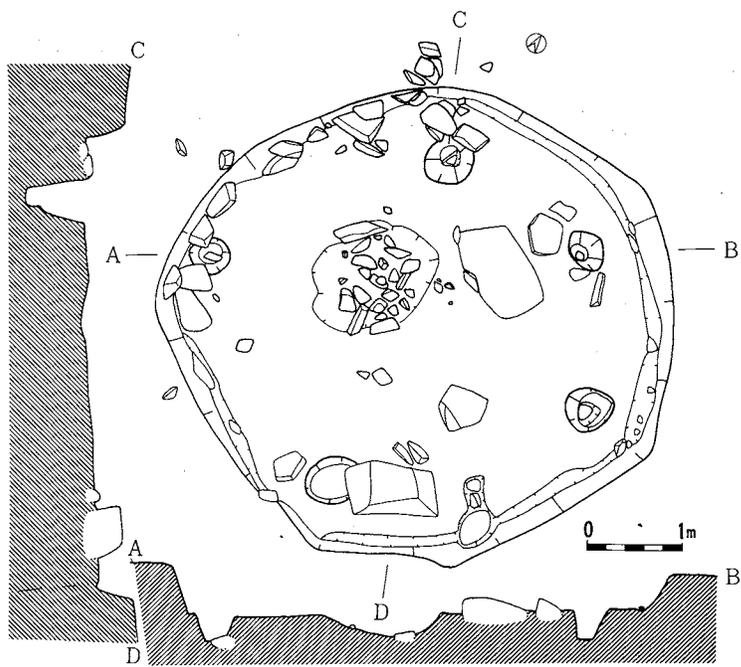
7号住居址



6号住居址

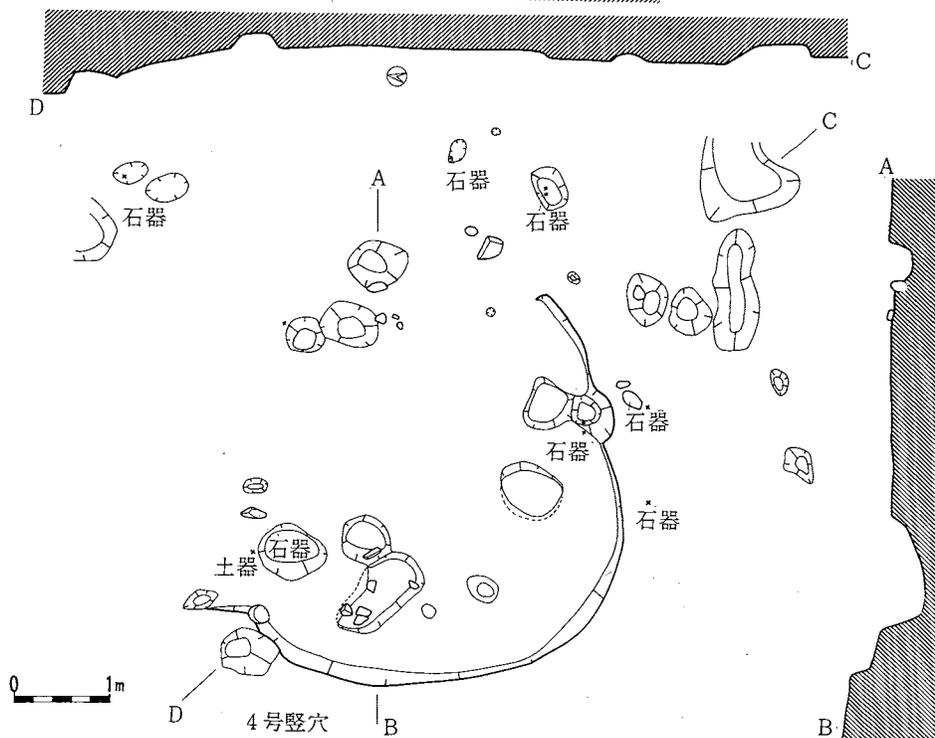
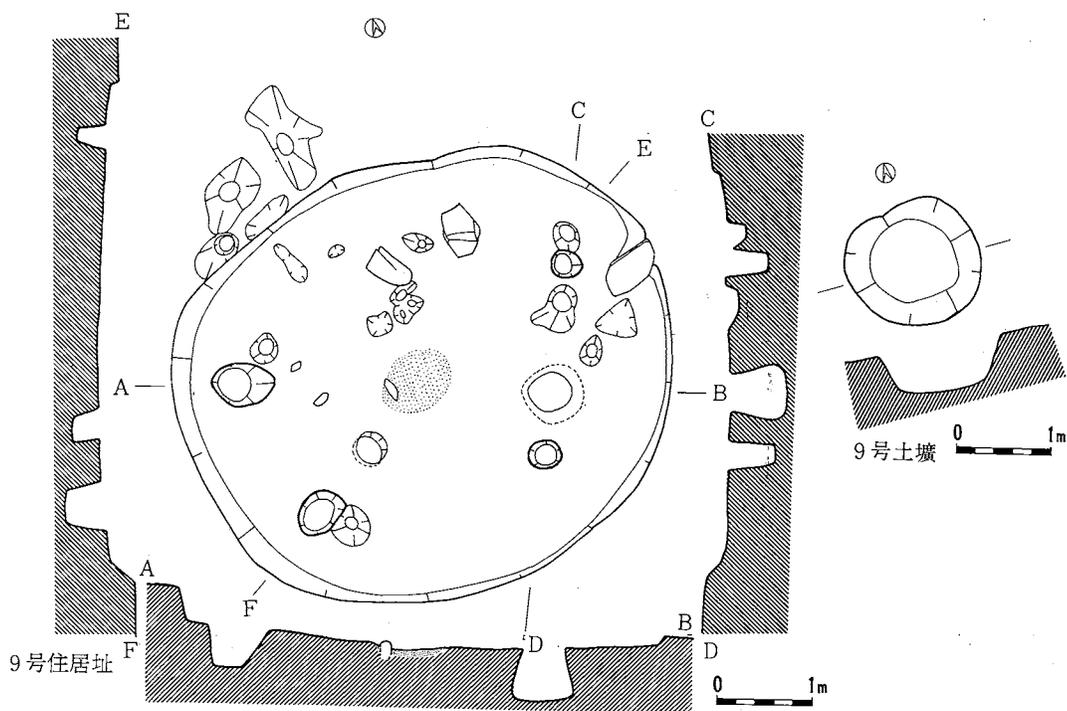
3号竖穴

第33图 北丘B遺跡6・7号住居址・3号竖穴(1:80)



8号住居址

第34图 北丘B遺跡8号住居址(1:80)



第35图 北丘B遺跡9号住居址・9号土壙・4号竖穴(1:80)

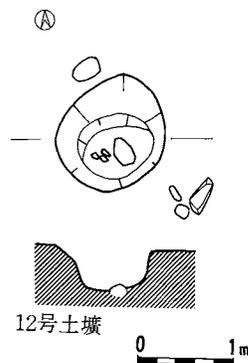
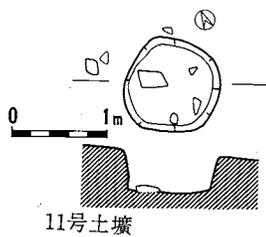
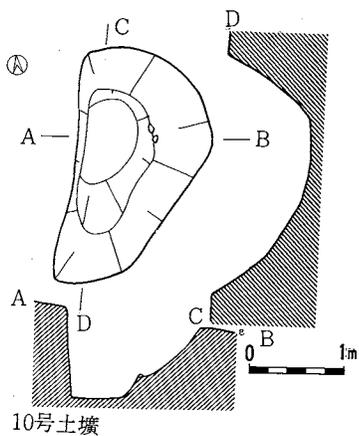
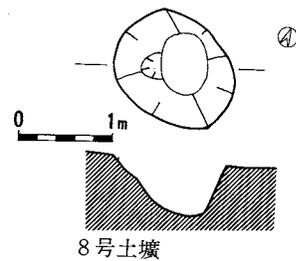
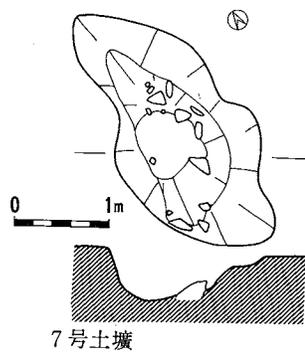
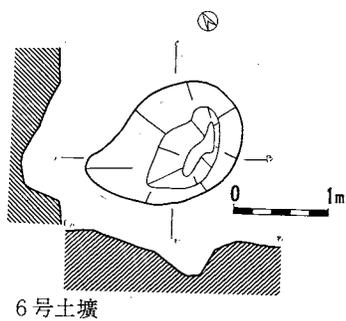
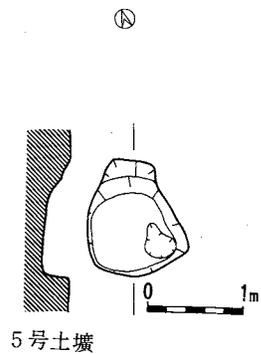
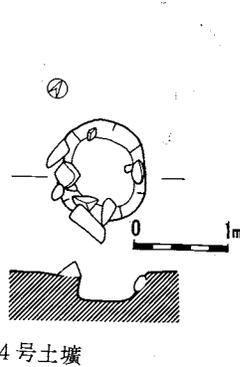
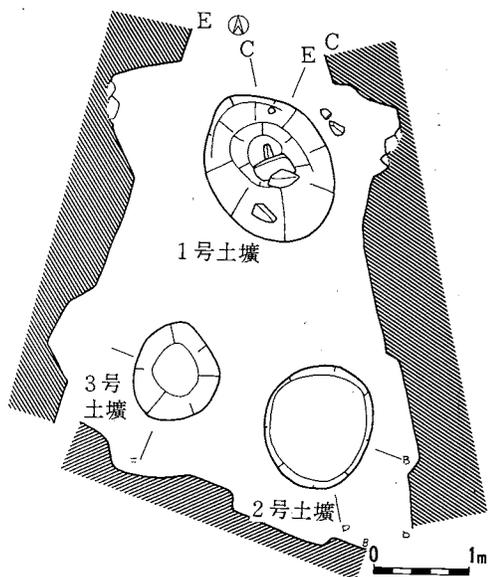


1号土壙群

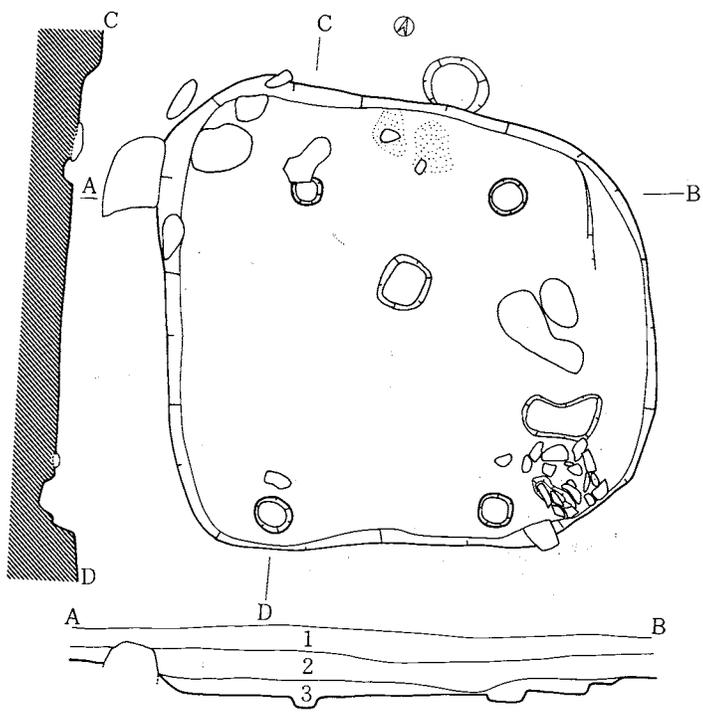


2号土壙群

第36图 北丘B遺跡1・2号土壙群 (1:80)

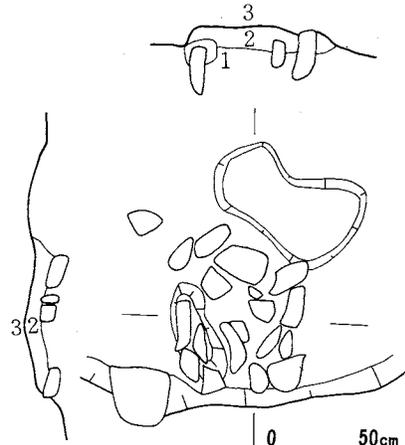


第37图 北丘B 遺跡1~8・10~12号土壙 (1:80)



1号住居址

- 1 耕土
- 2 黒色土
- 3 褐色土

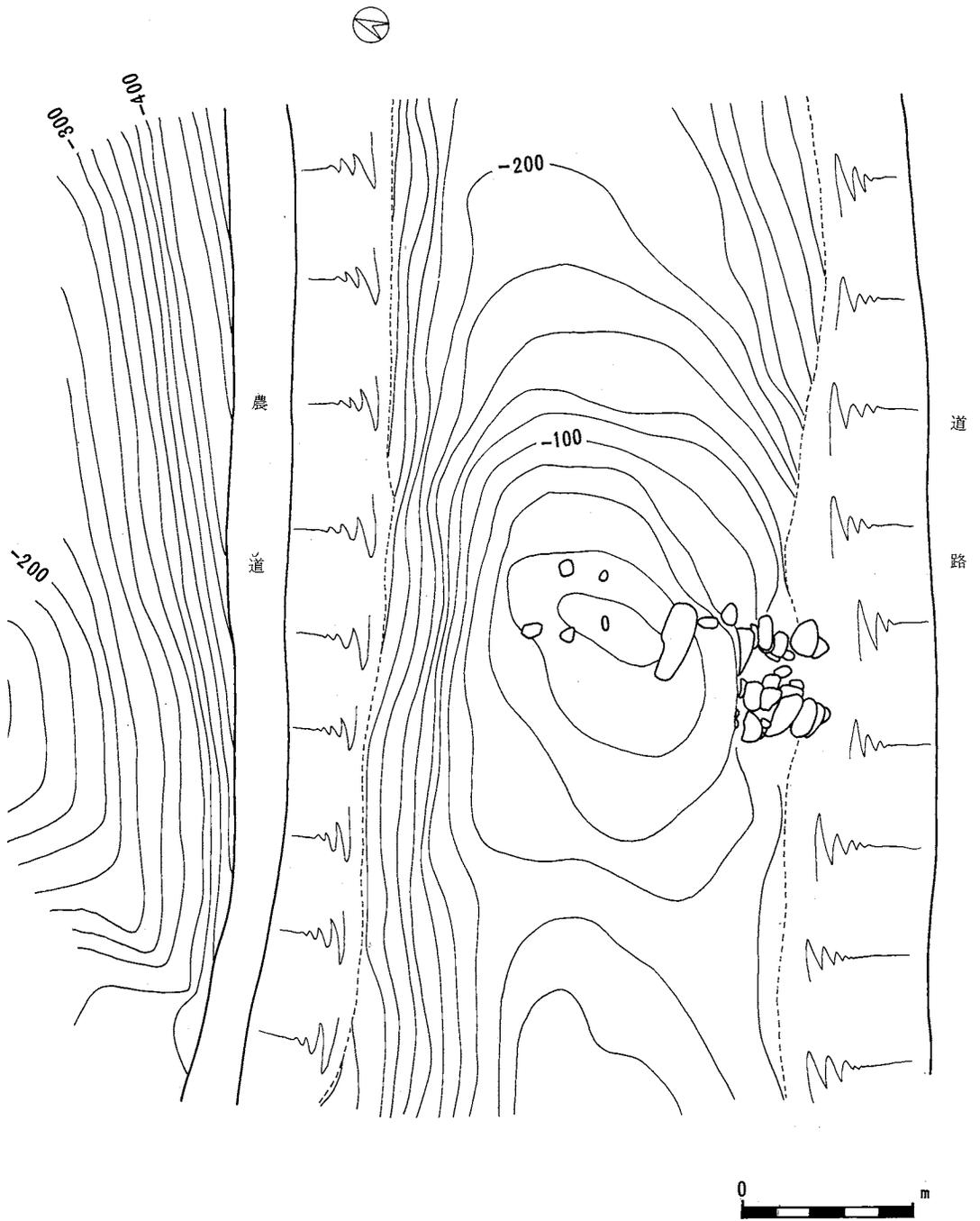


1号住居址カマド

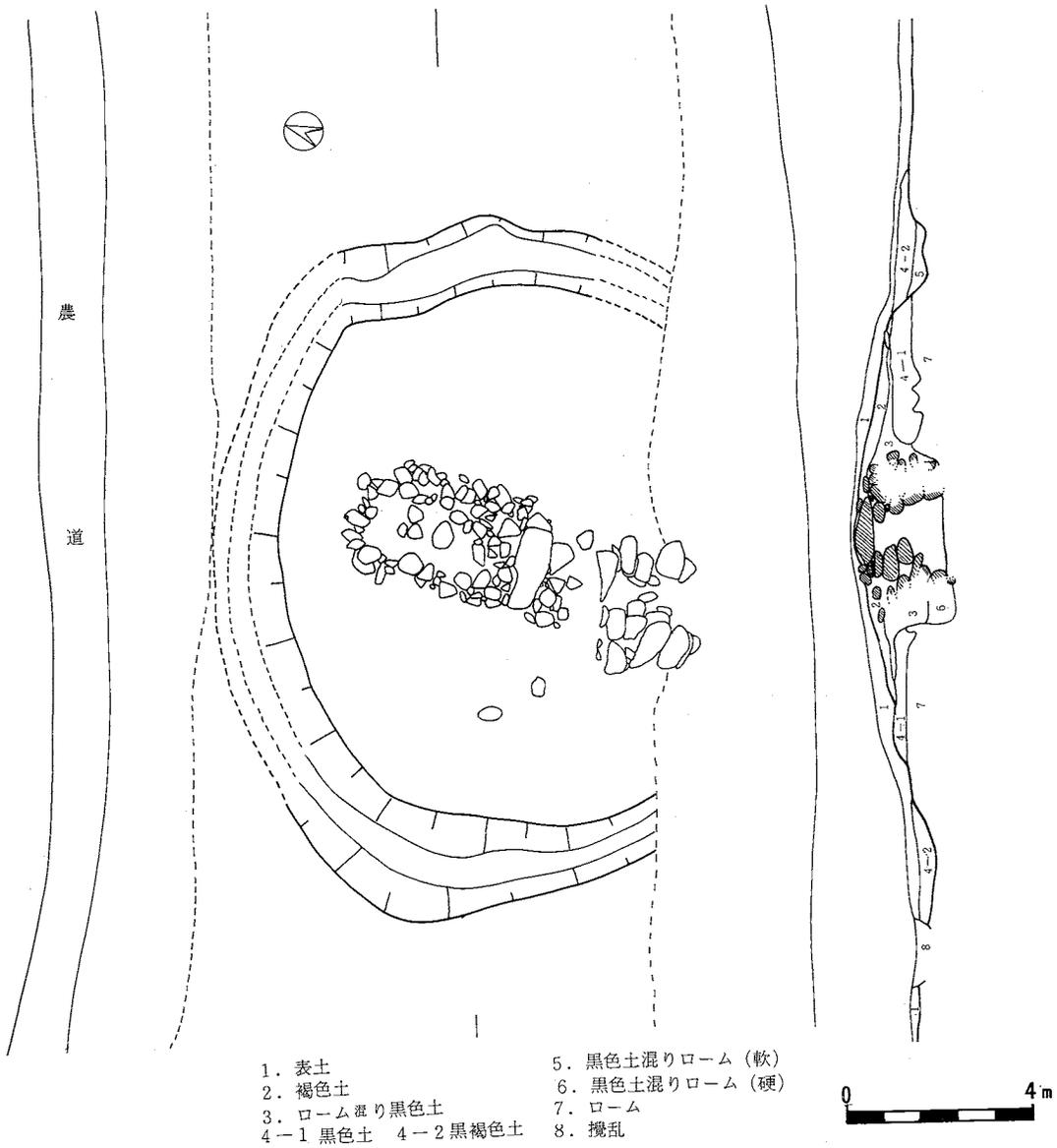
- 1 焼土混り粘質土
- 2 焼土混り黒色土
- 3 褐色砂質土



第38図 名廻南遺跡1号住居址 (1:80)



第39图 名廻東古墳地形図 (1:160)



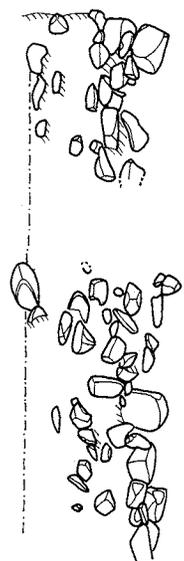
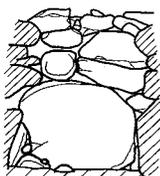
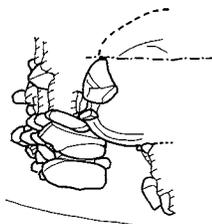
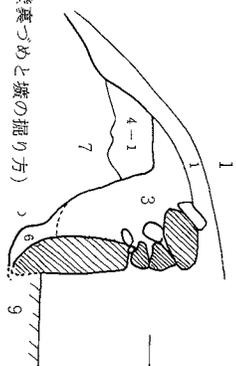
第40図 名廻東古墳周濠・地層図 (1:160)

(東壁墓つめ)

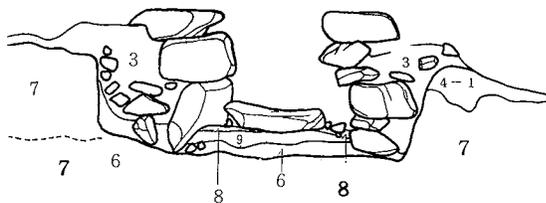
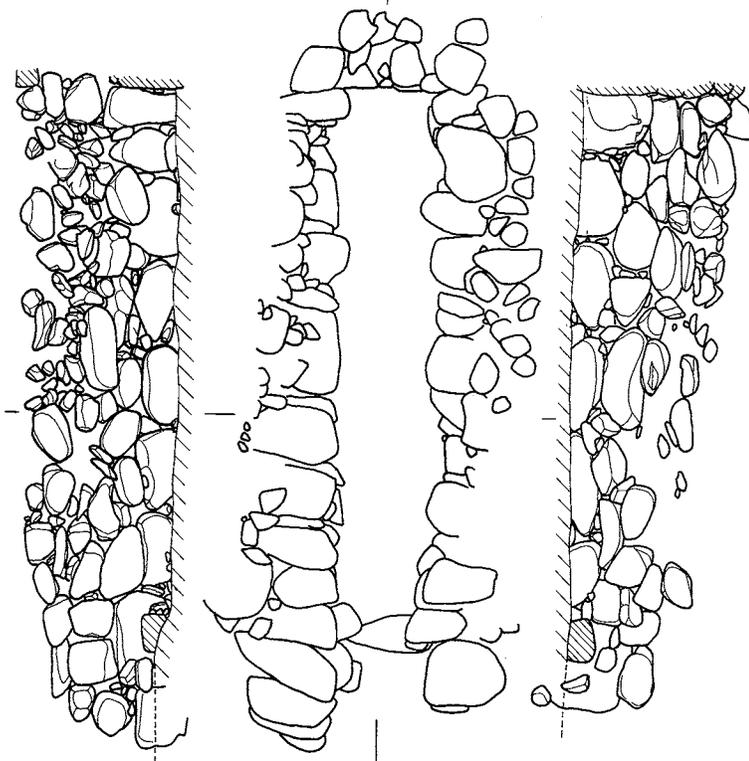


(奥壁墓)

(奥壁墓つめと壁の掘り方)



(西壁墓つめ)

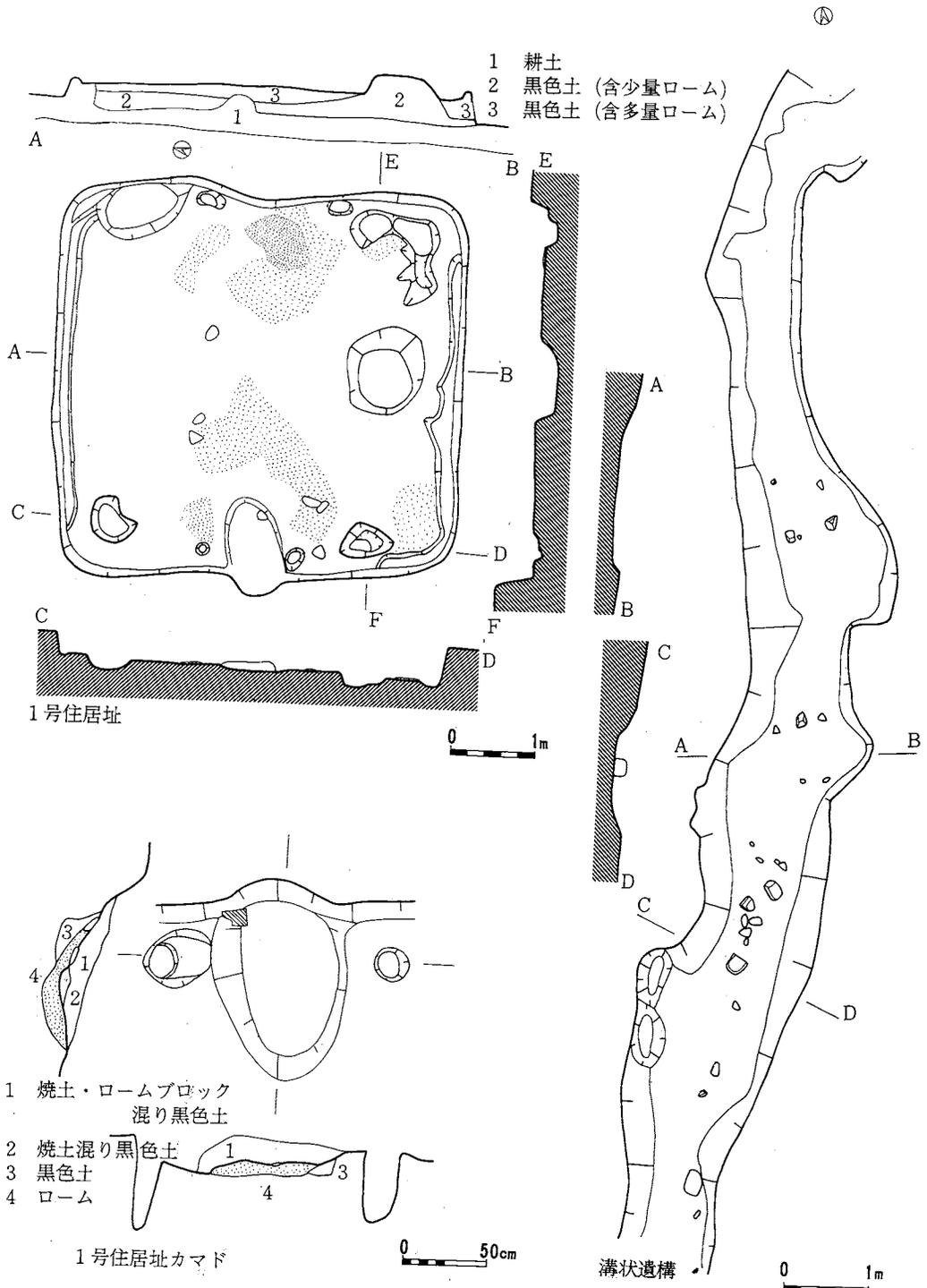


- 1 表土
- 3 ローム混り黒色土
- 4-1 黒色土
- 6 黒色土混りローム
- 7 ローム
- 8 円礫混り褐色土
- 9 褐色粘質土(粘質ローム)

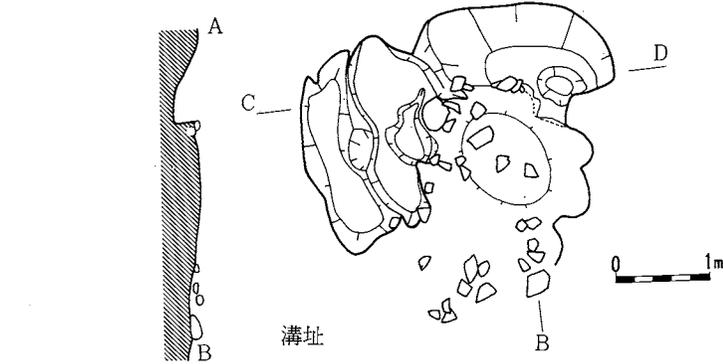
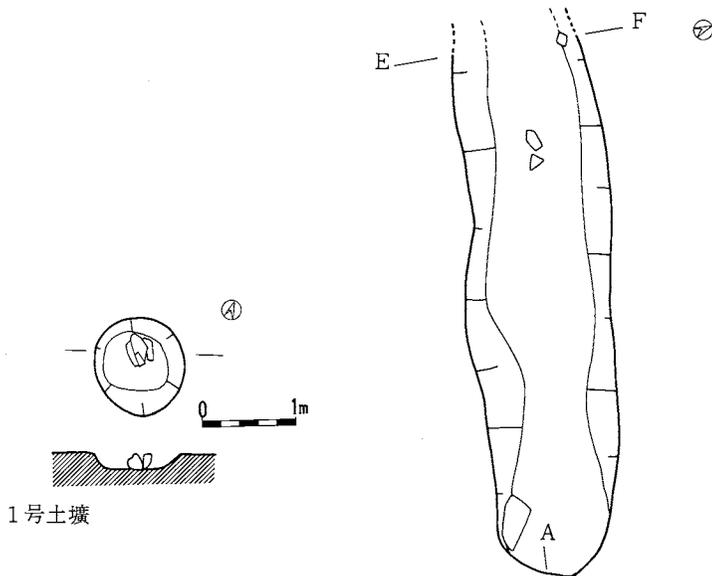
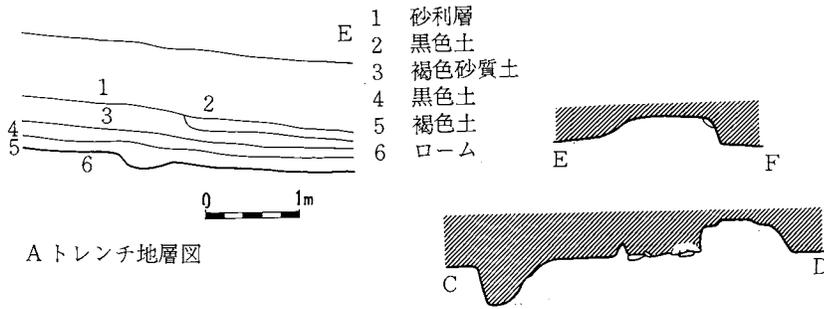
第41図 名廻東古噴石室・裏詰実測図(1:80)



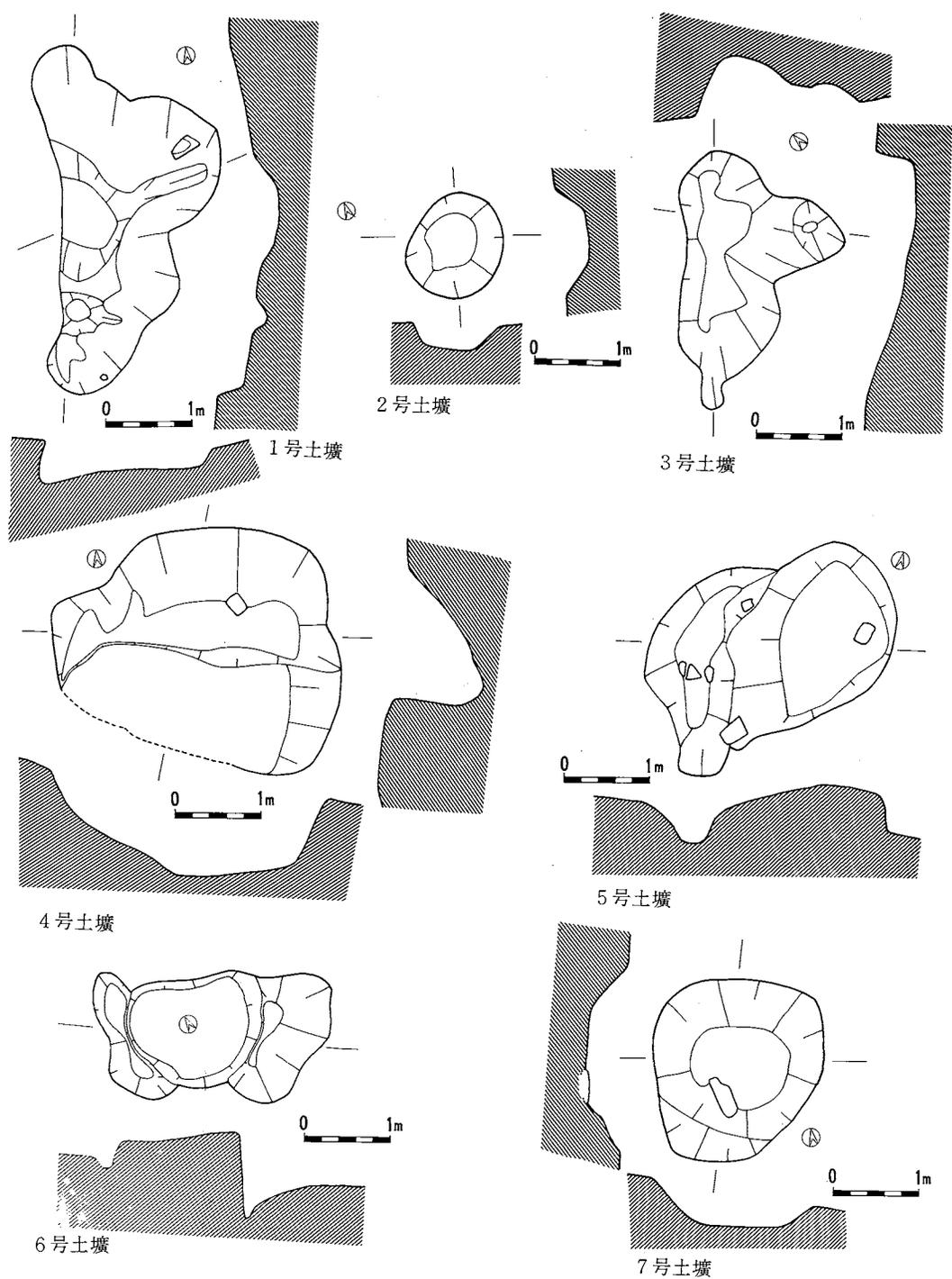
第42図 名廻東古墳遺物分布図(1:80)



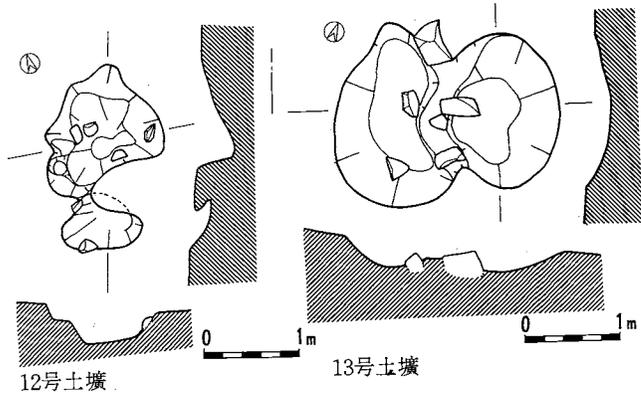
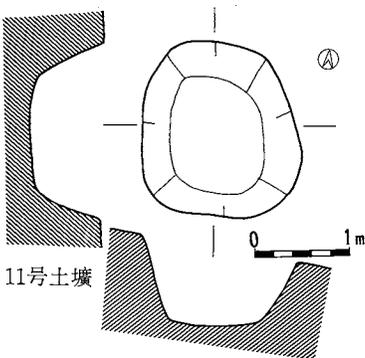
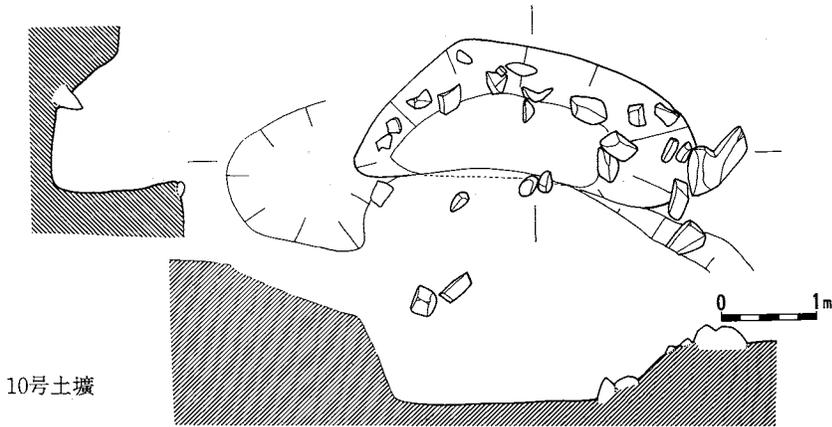
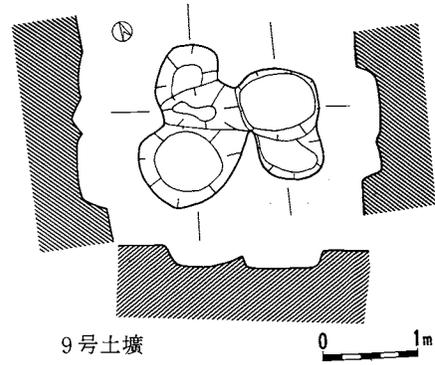
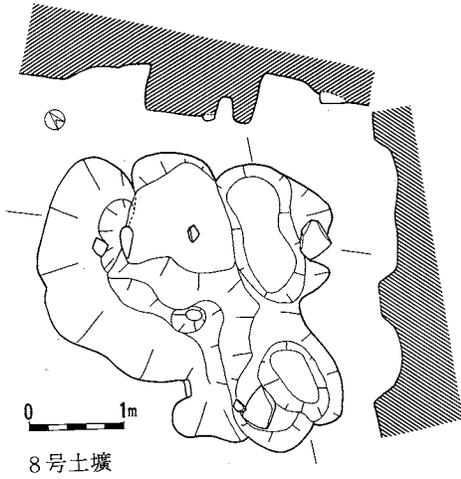
第43図 名廻遺跡1号住居址・溝状遺構 (1:80)



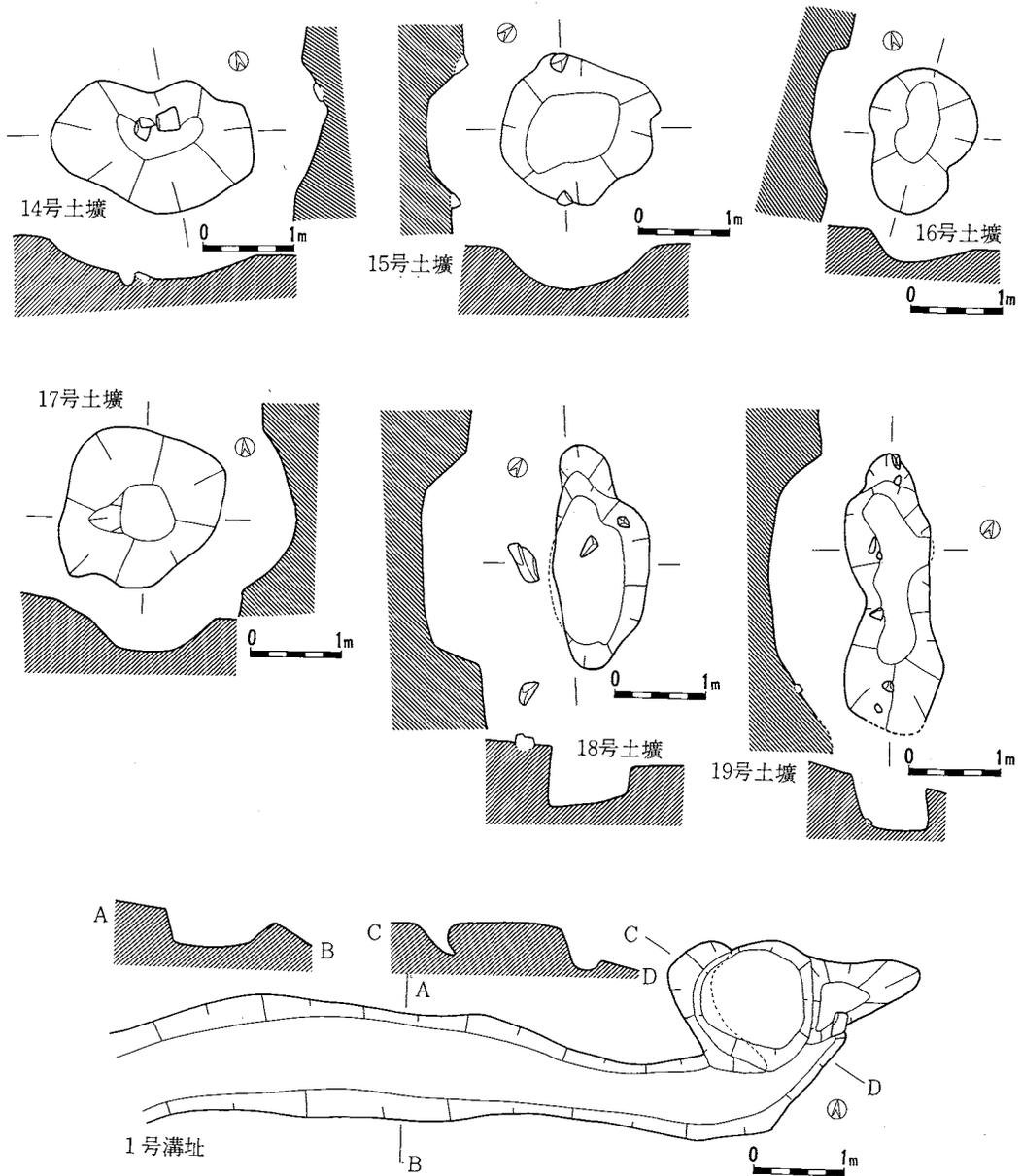
第44図 白沢原遺跡A トレンチ地層図・山寺垣外遺跡
1号土壇・1号溝址 (1:80)



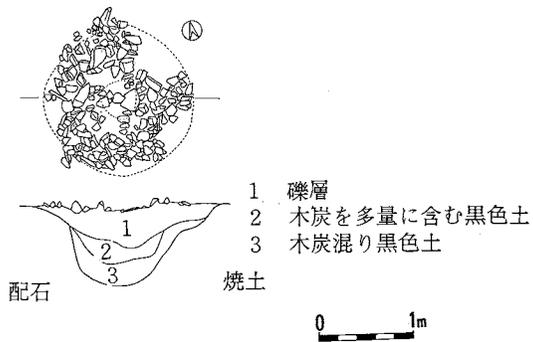
第45図 細ヶ谷B遺跡1～7号土壙 (1:80)



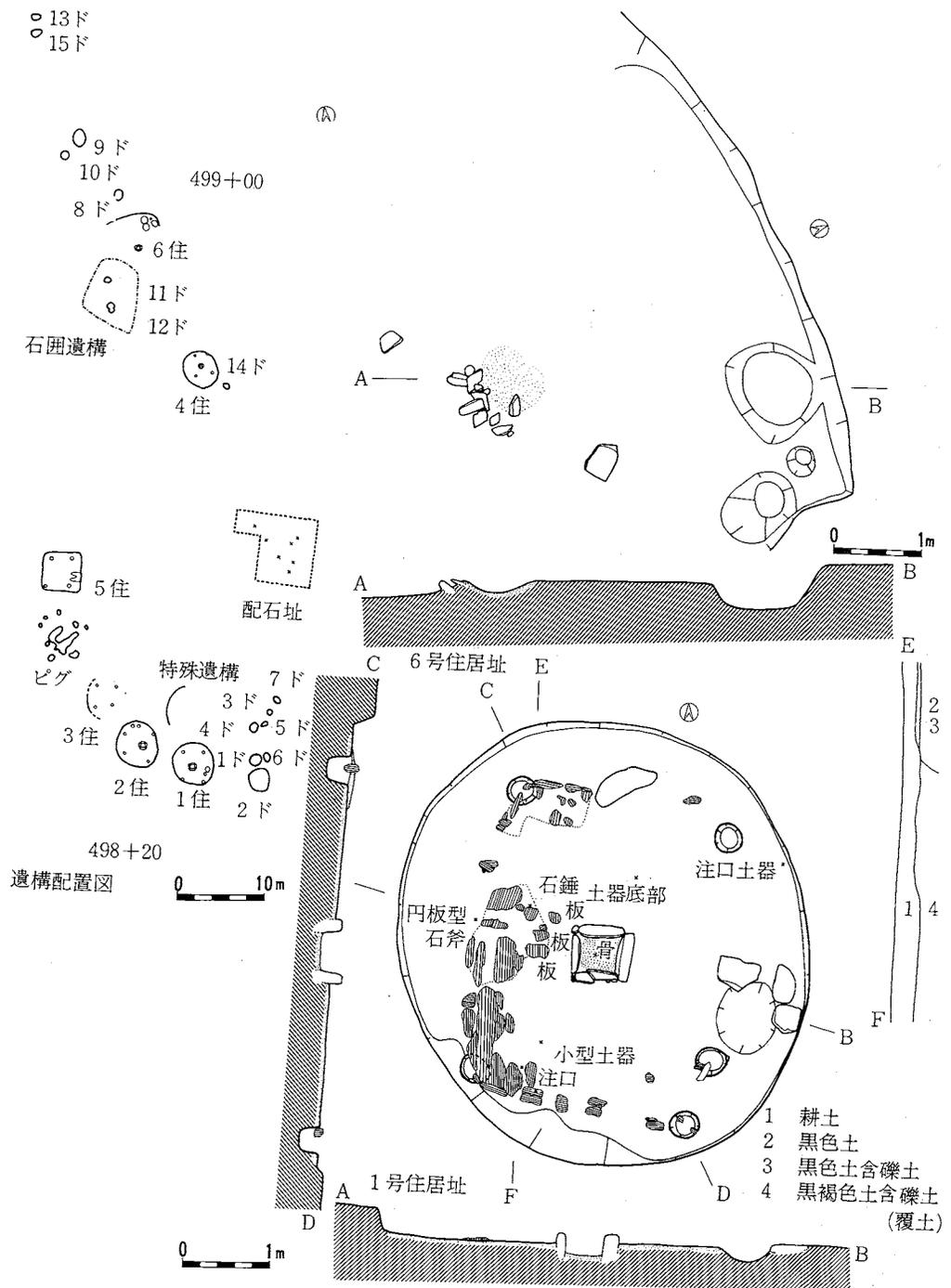
第46図 細ヶ谷B 遺跡 8～13号土壇 (1 : 80)



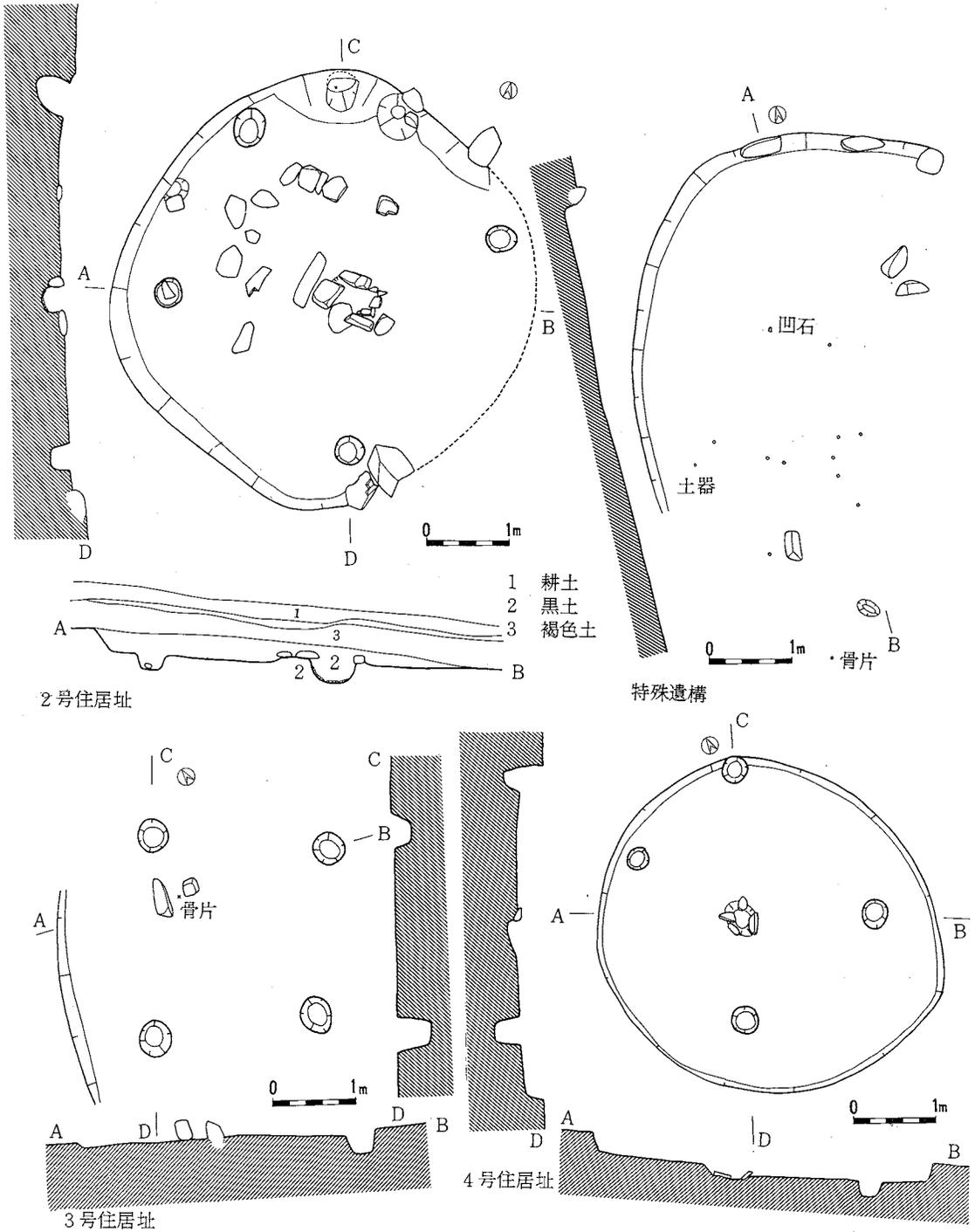
第47図 細ヶ谷B遺跡14~19号土壇・1号溝址 (1 : 80)



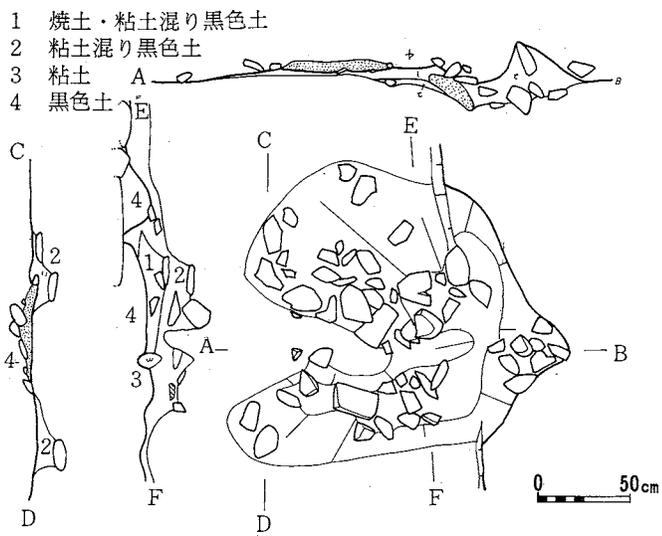
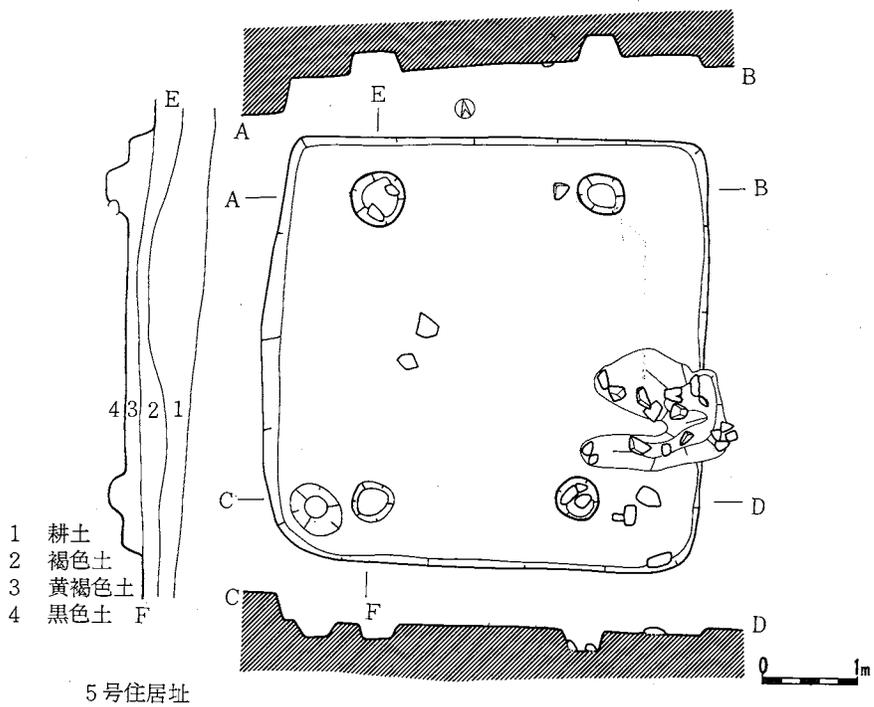
第48図 細ヶ谷B遺跡ピット群・集石址 (1:80)



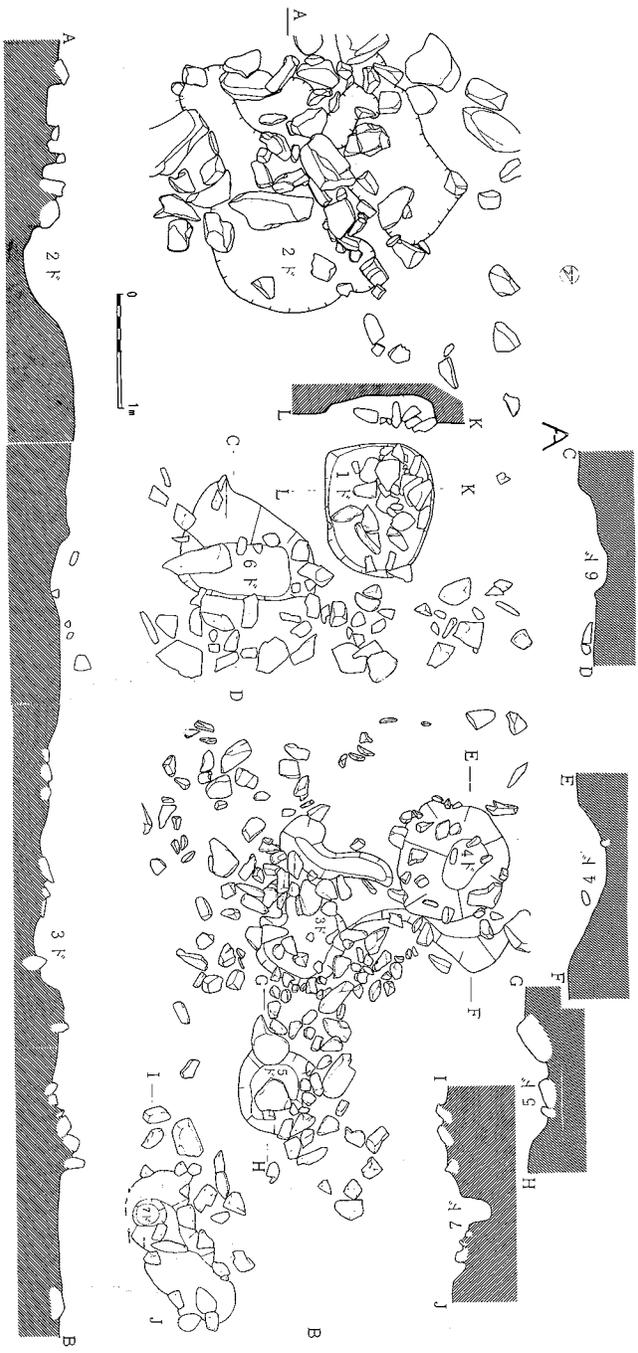
第49図 百駄刈遺跡遺構配置図 (1:800)・1・6号住居址 (1:80)



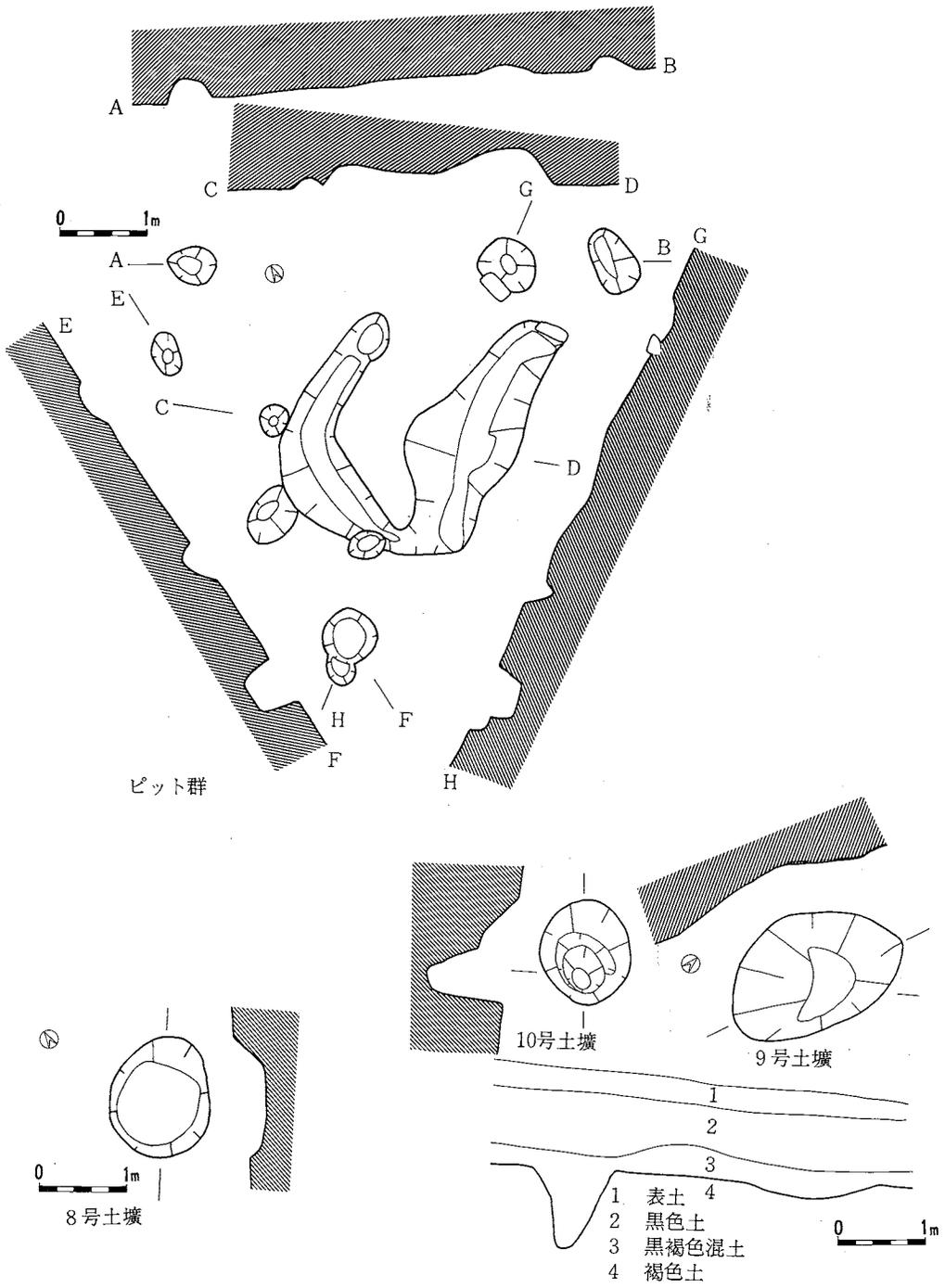
第50図 百駄刈遺跡2~4号住居址・特殊遺構(1:80)



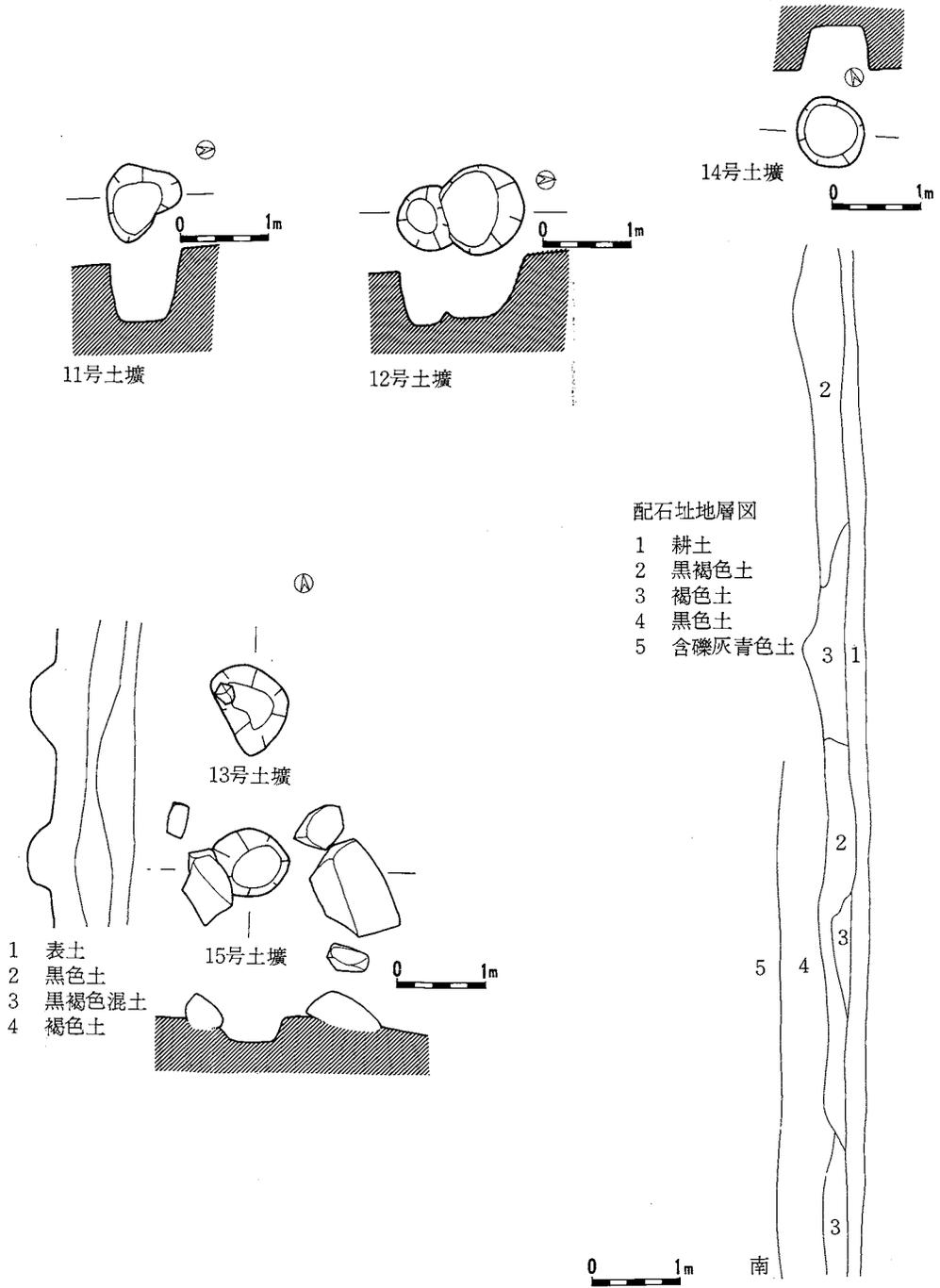
第51図 百駄刈遺跡 5号住居址 (1 : 80)



第52图 百脉沟遗址土城群 (1:60)



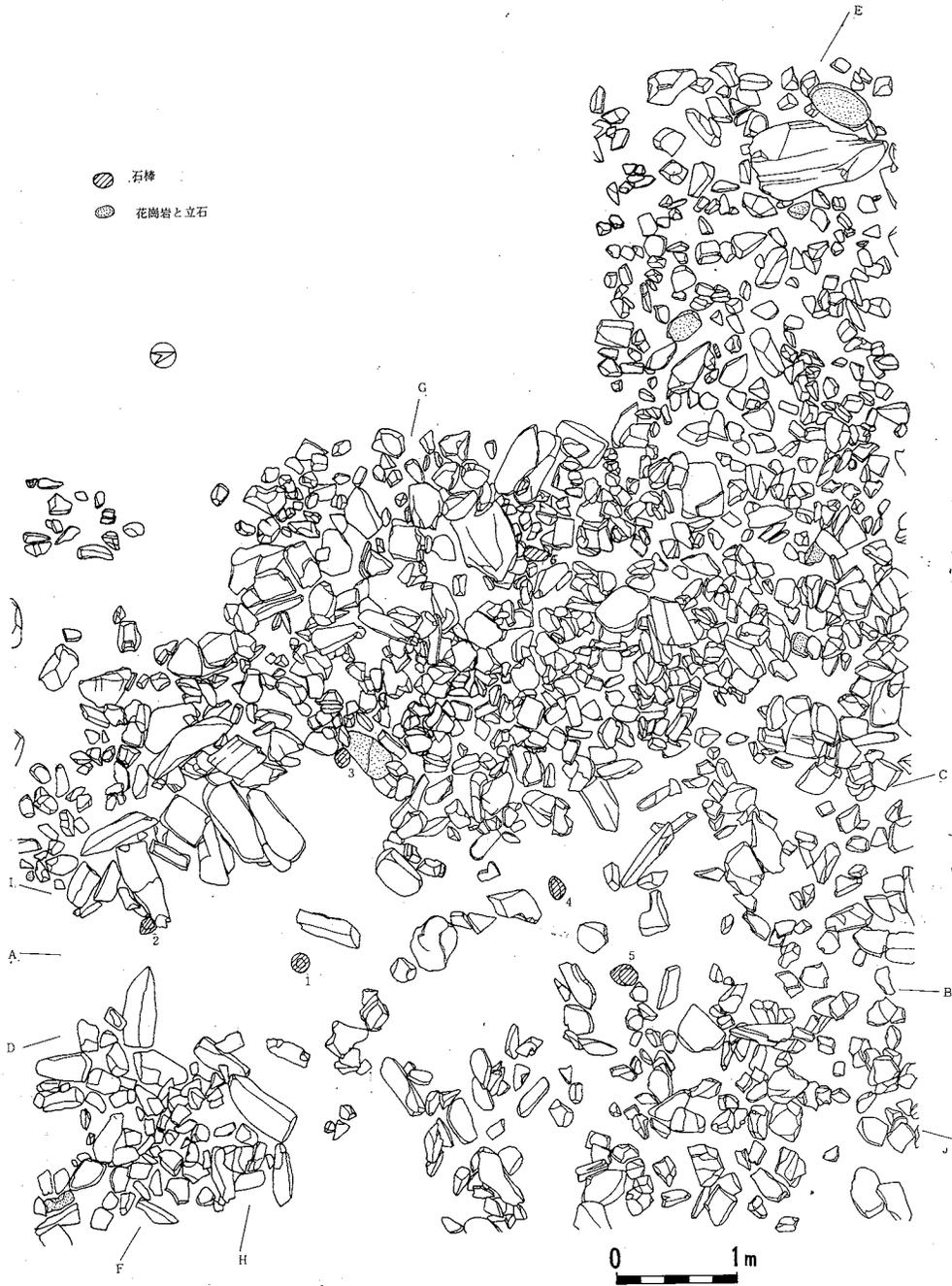
第53図 百駄刈遺跡ピット群・8～9号土壙 (1 : 80)



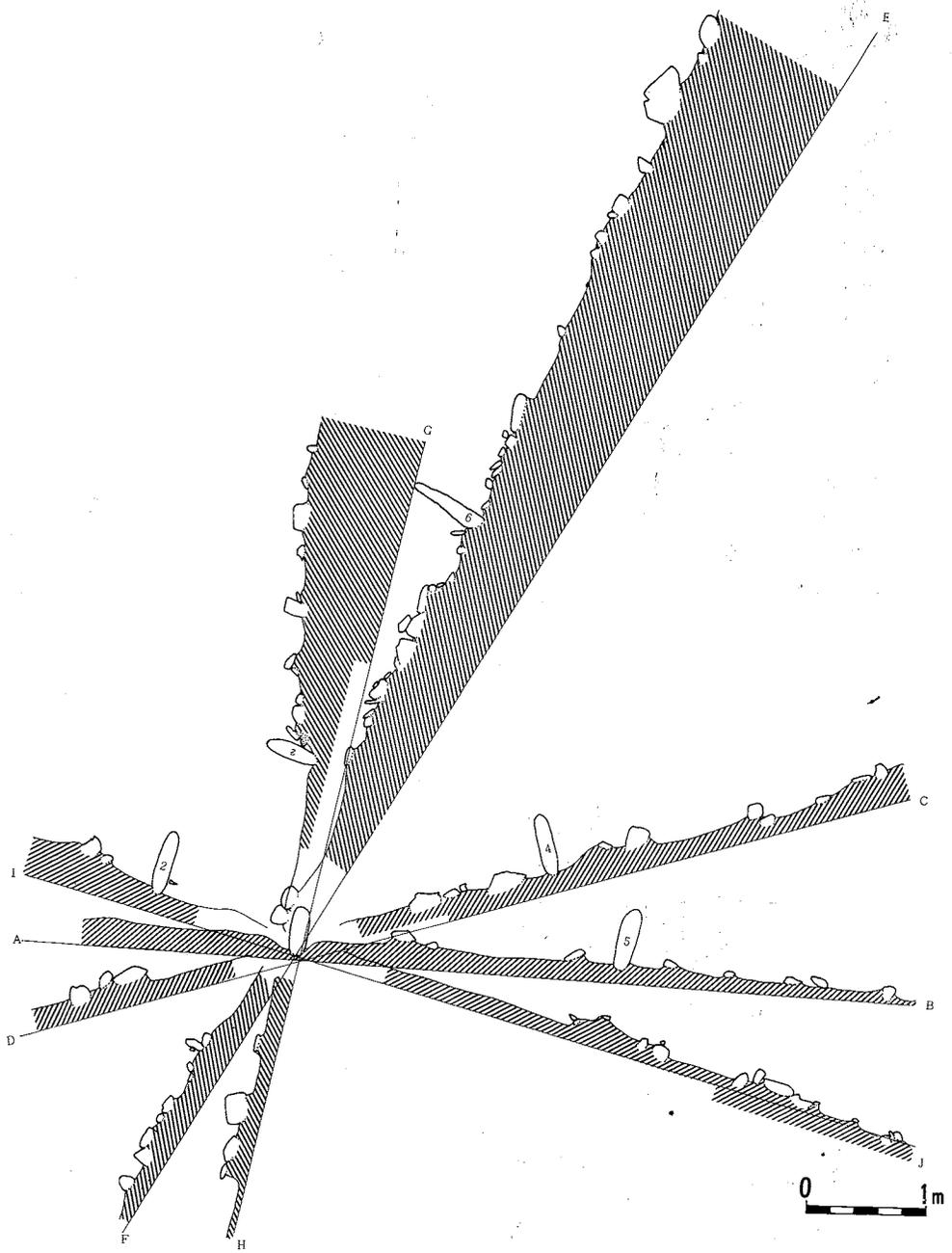
第54図 百駄刈遺跡11~15号土壙・1号配石址（立石を伴う）地層図（1：80）



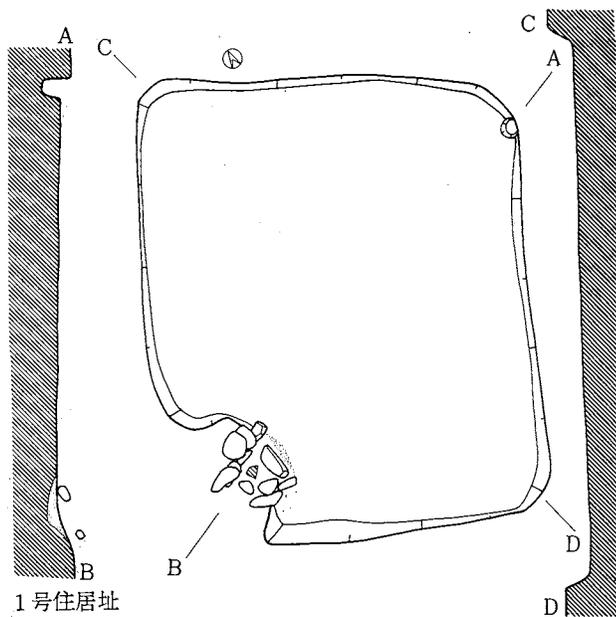
第57図 百馱刈遺跡石圍遺構 (1 : 60)



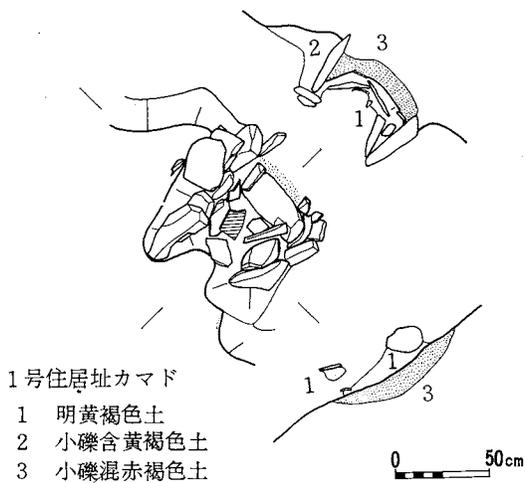
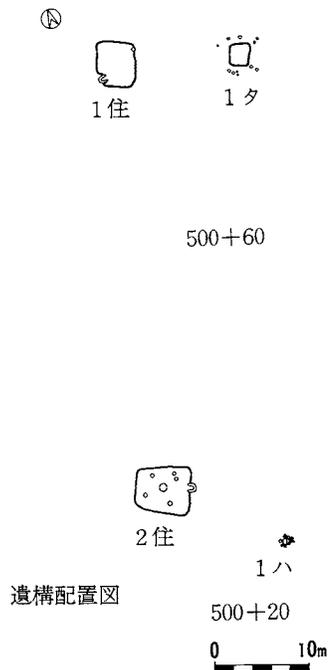
第55図 百駄刈遺跡1号配石址(1:60)



第56图 百馱刈遺跡1号配石址断面图(1:60)

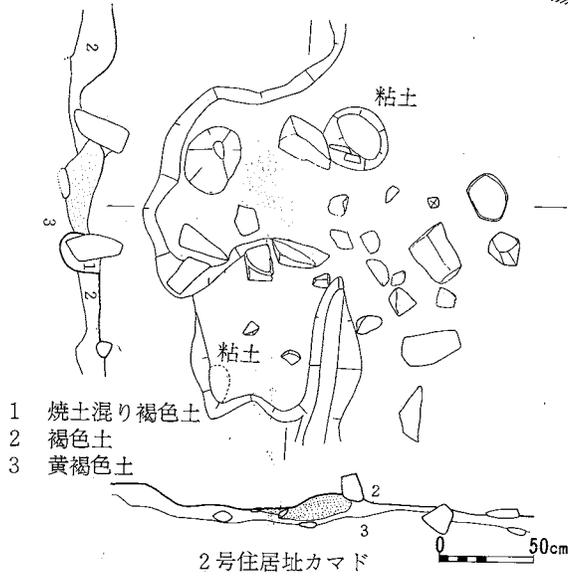
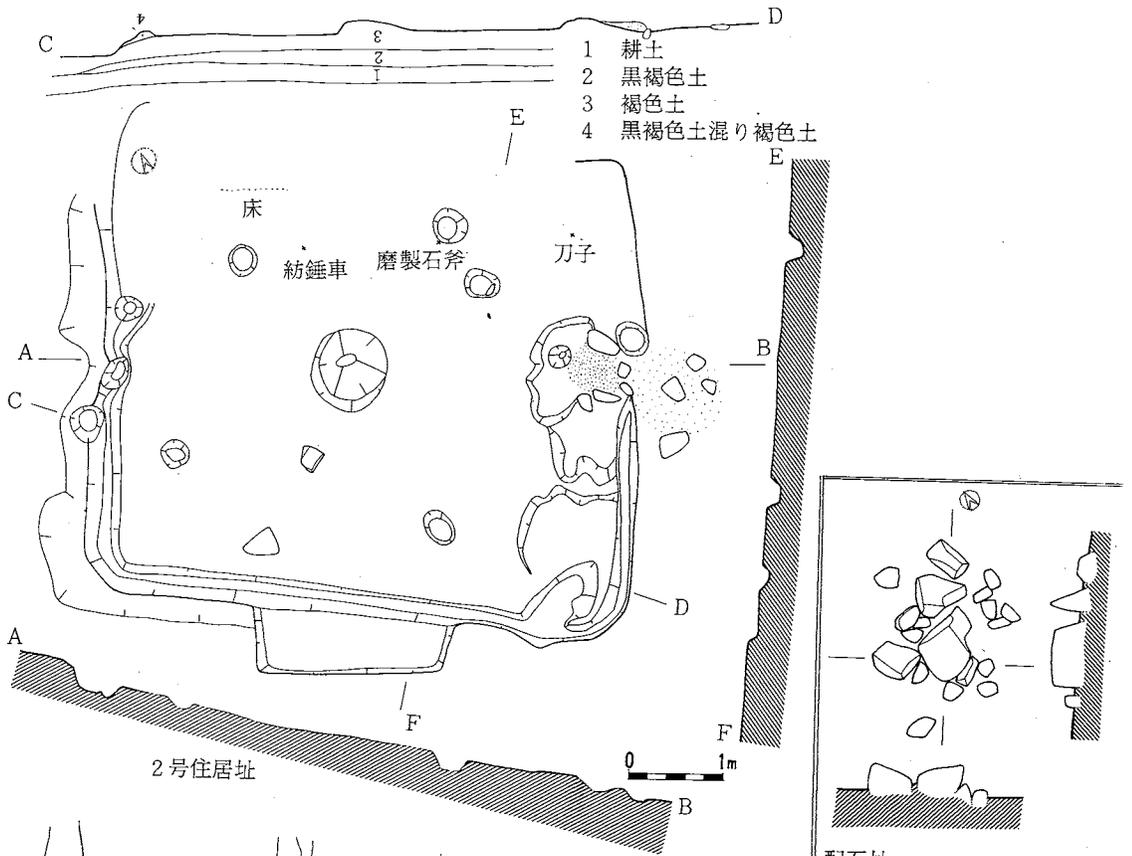


0 1m

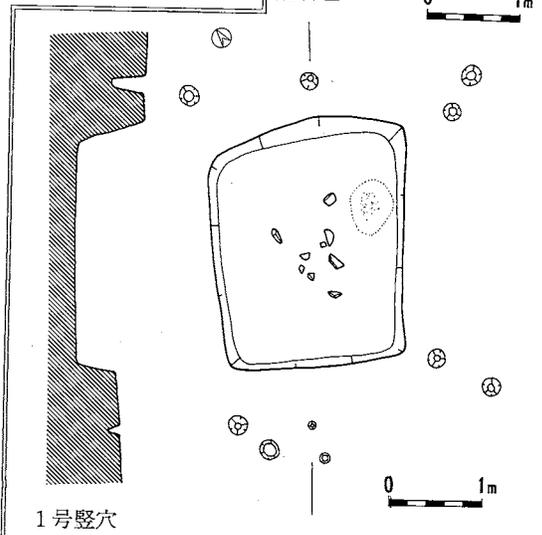


- 1号住居址カマド
- 1 明黄褐色土
 - 2 小礫含黄褐色土
 - 3 小礫混赤褐色土

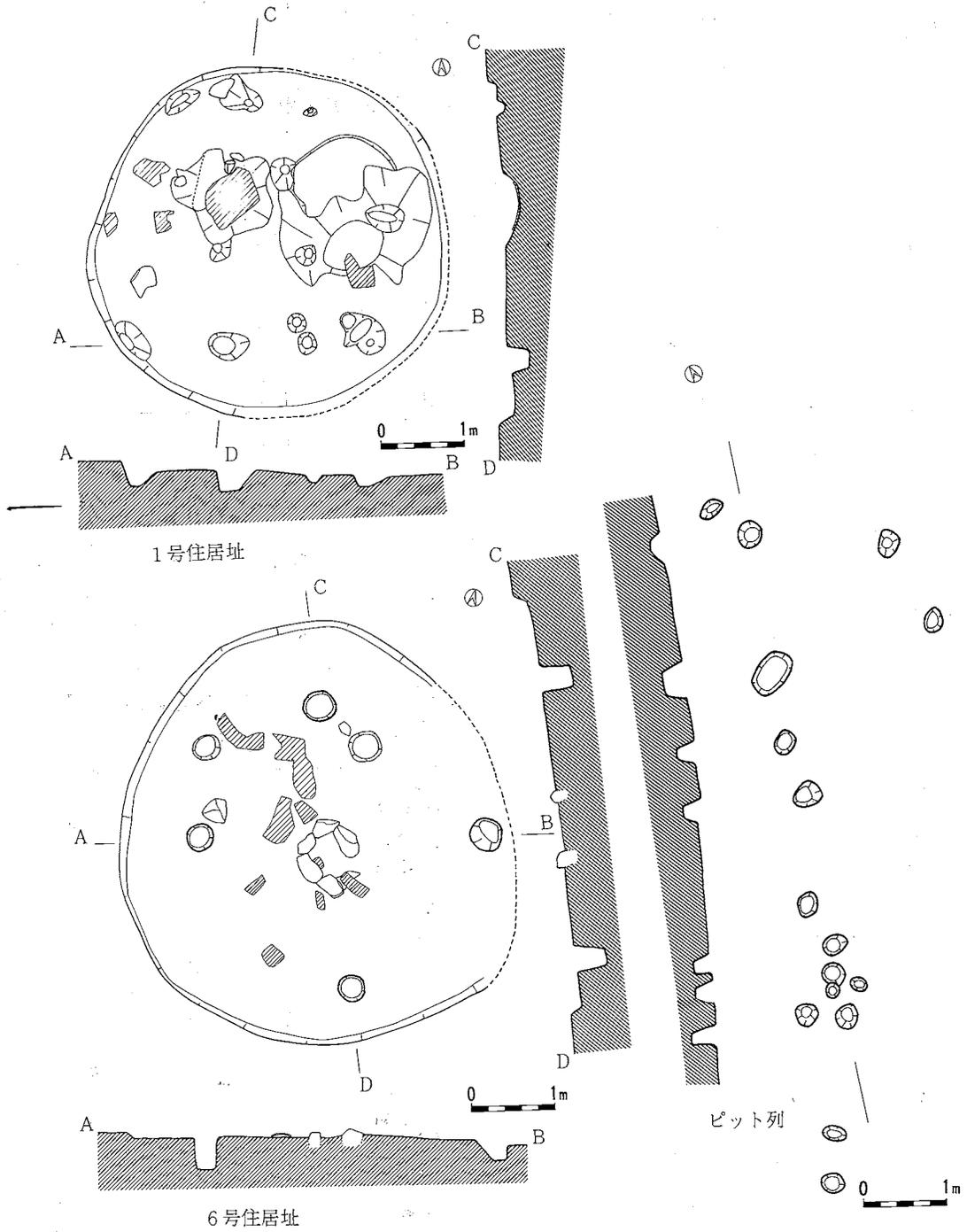
第58図 大境遺跡遺構配置図 (1:800)・1号住居址 (1:80)



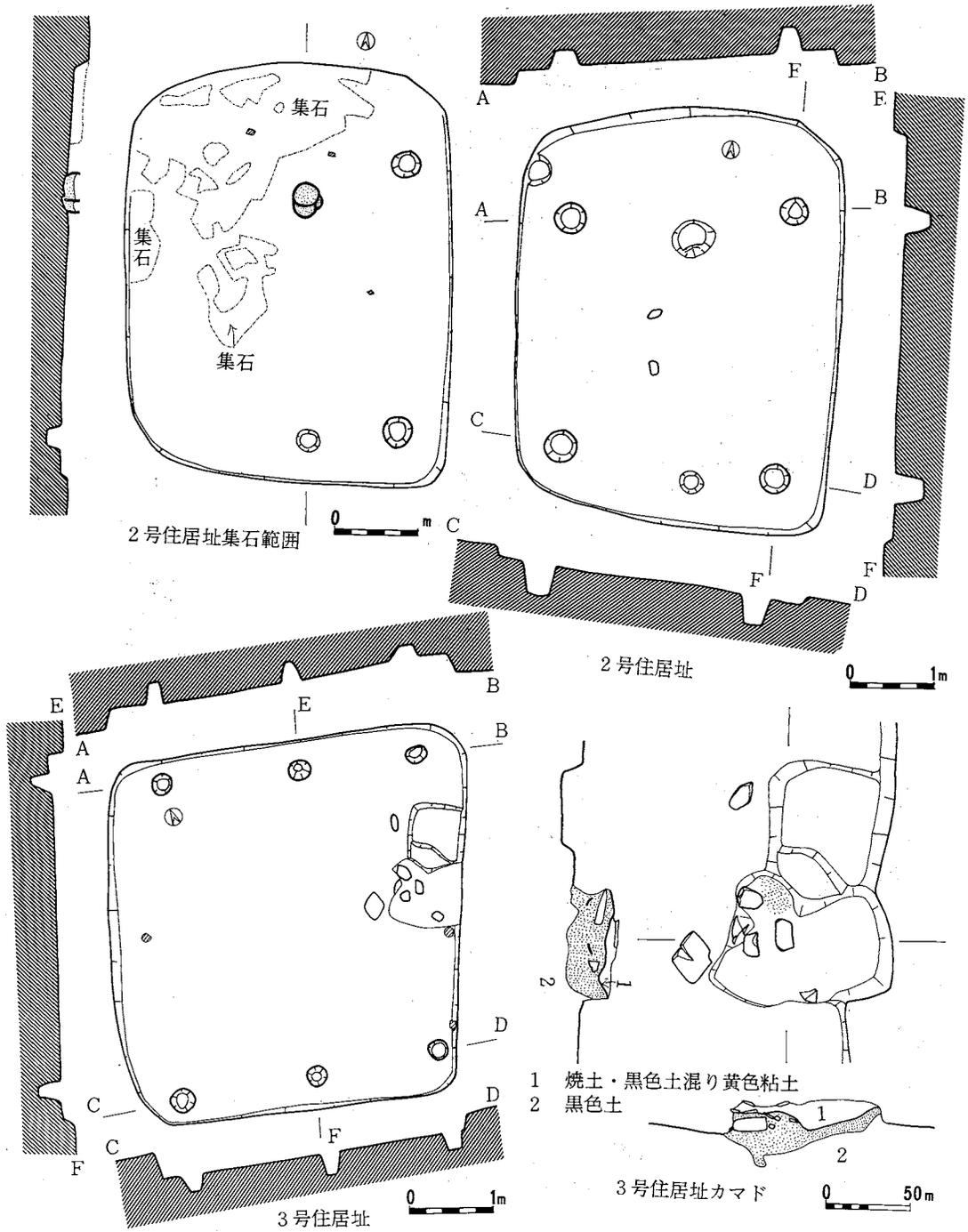
第59図 大境遺跡 2号住居址 (1 : 80)



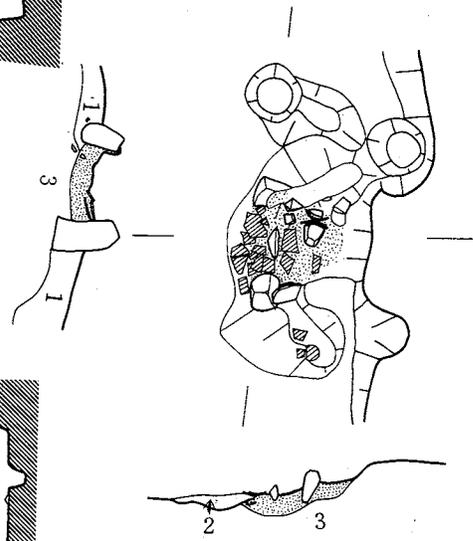
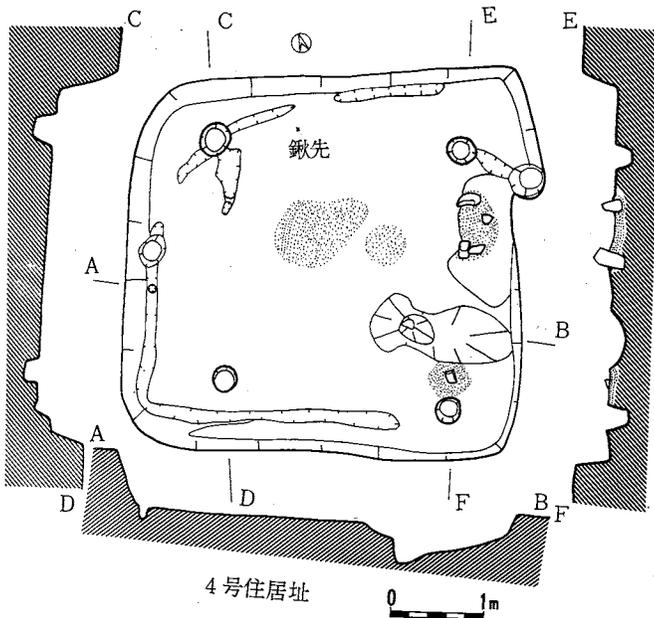
第60図 大境遺跡 1号竖穴・配石址 (1 : 80)



第61図 山の根遺跡1・6号住居址・ピット列(1:80)

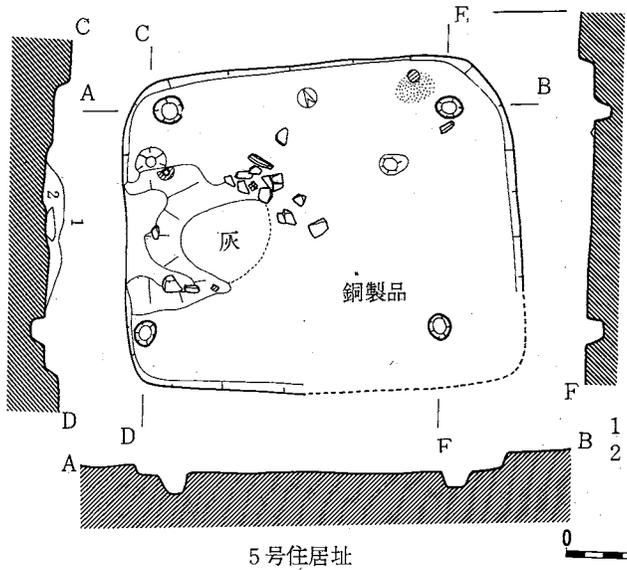


第62図 山の根遺跡2・3号住居址 (1:80)



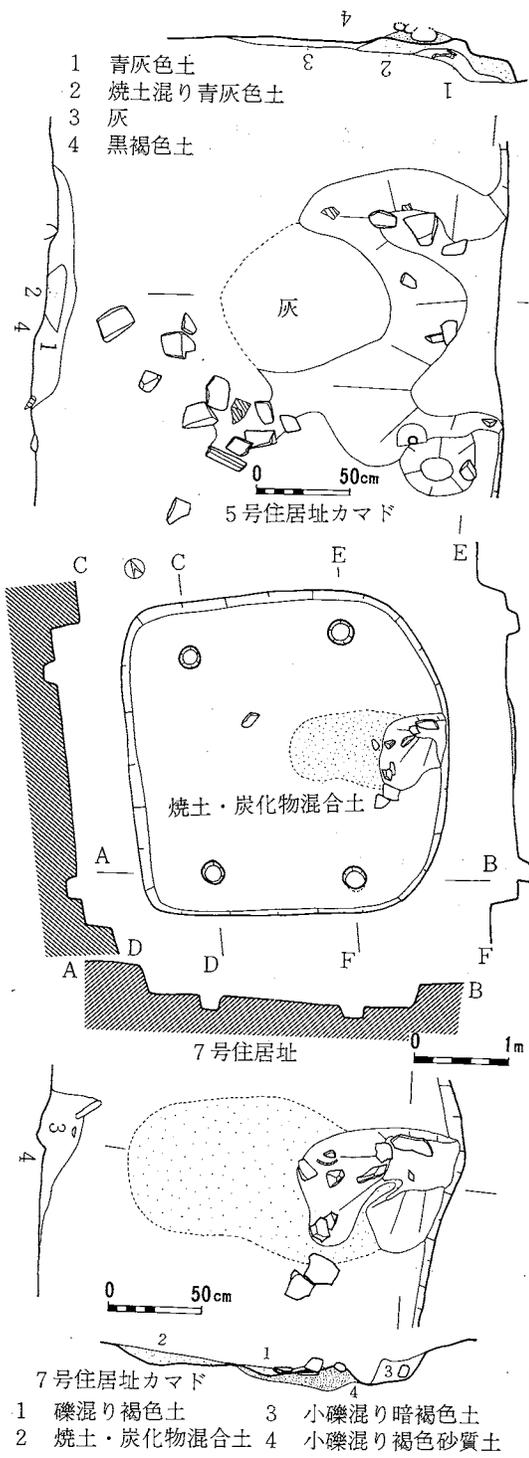
- 1 焼土混り黒色土
- 2 炭化物含灰層
- 3 褐色土

4号住居址カマド

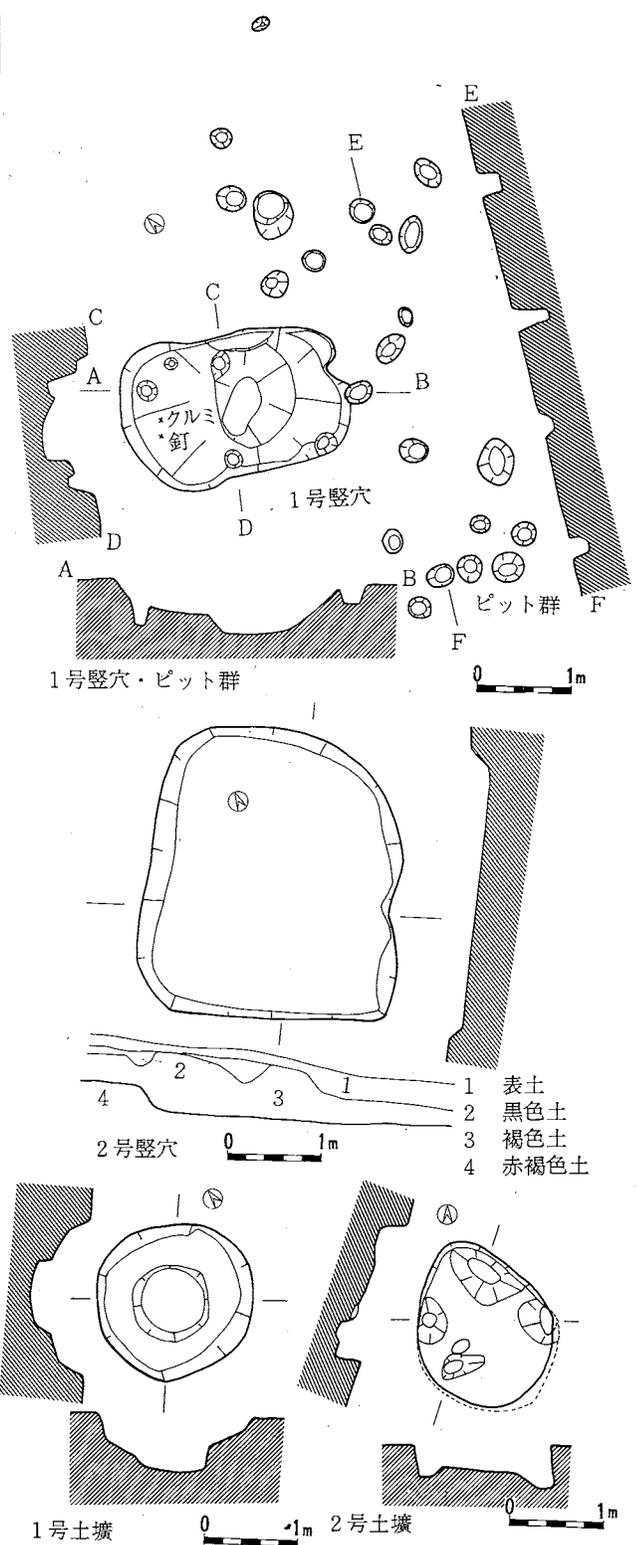


- 1 焼土混り青灰色土
- 2 青灰色土

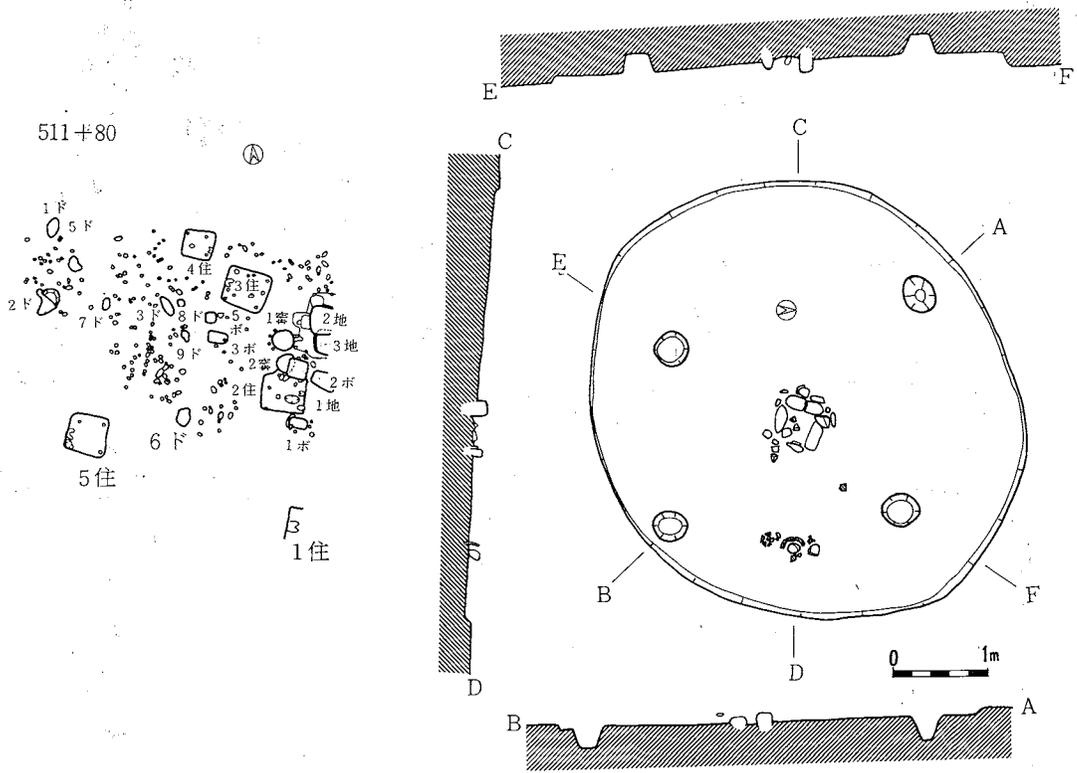
第63図 山の根遺跡4・5号住居址 (1:80)



第64図 山の根遺跡 7号住居址 (1:80)

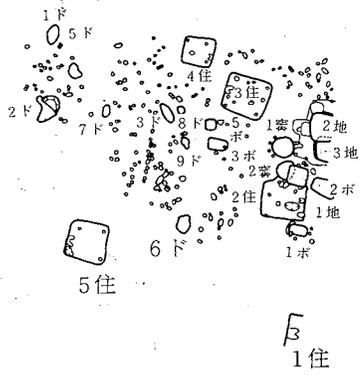


第65図 山の根遺跡 1・2号土壙・1・2号竖穴・ピット群 (1:80)

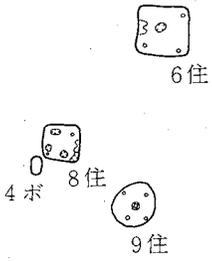


9号住居址

511+80



511+00

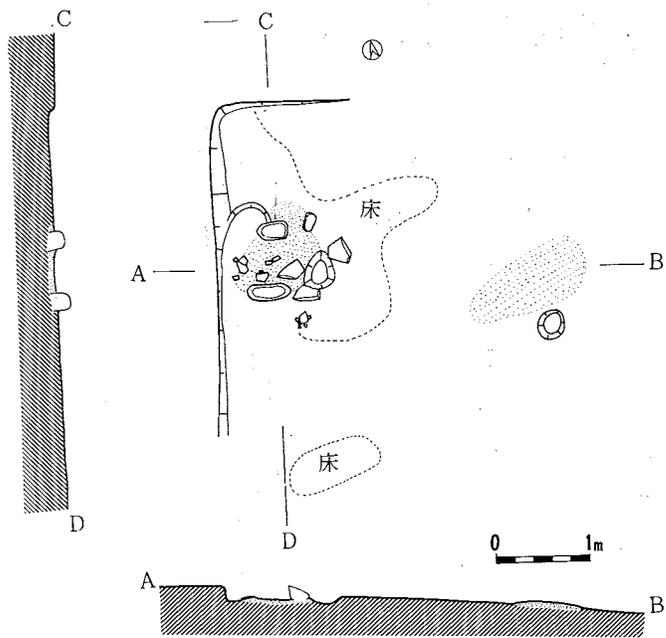


510+60

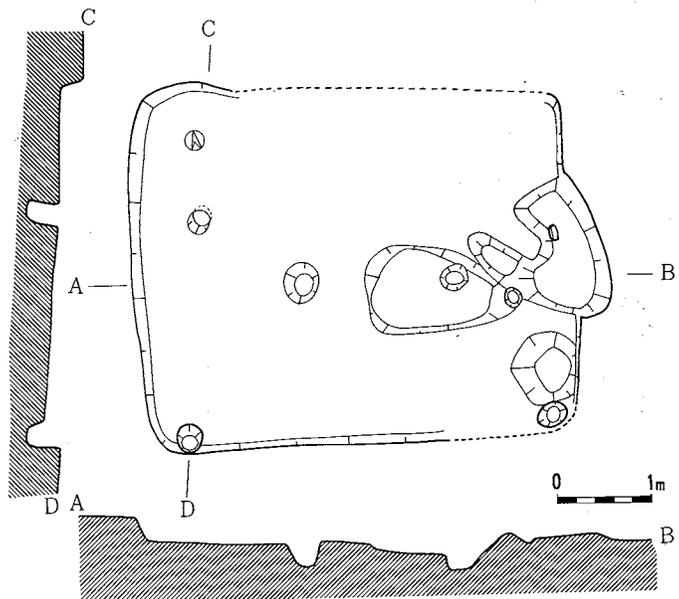


遺構配置図

第66図 城平遺跡遺構配置図 (1:800)・9号住居址 (1:80)

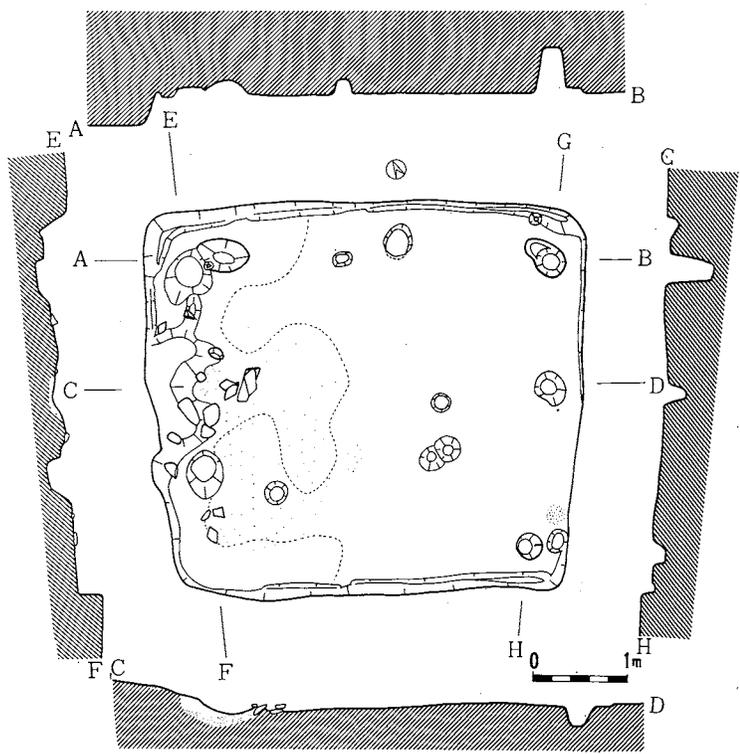


1号住居址



2号住居址

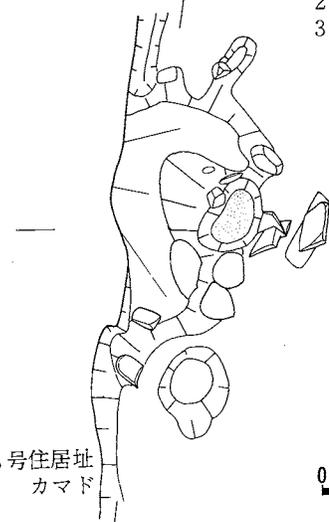
第67图 城平遺跡1・2号住居址(1:80)



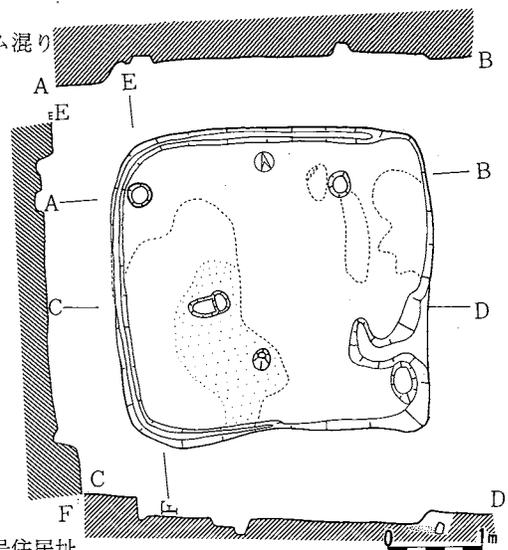
3号住居址



- 1 焼土・炭化物・ローム混り
- 2 焼土・炭化物混り
- 3 黒土・ローム混り

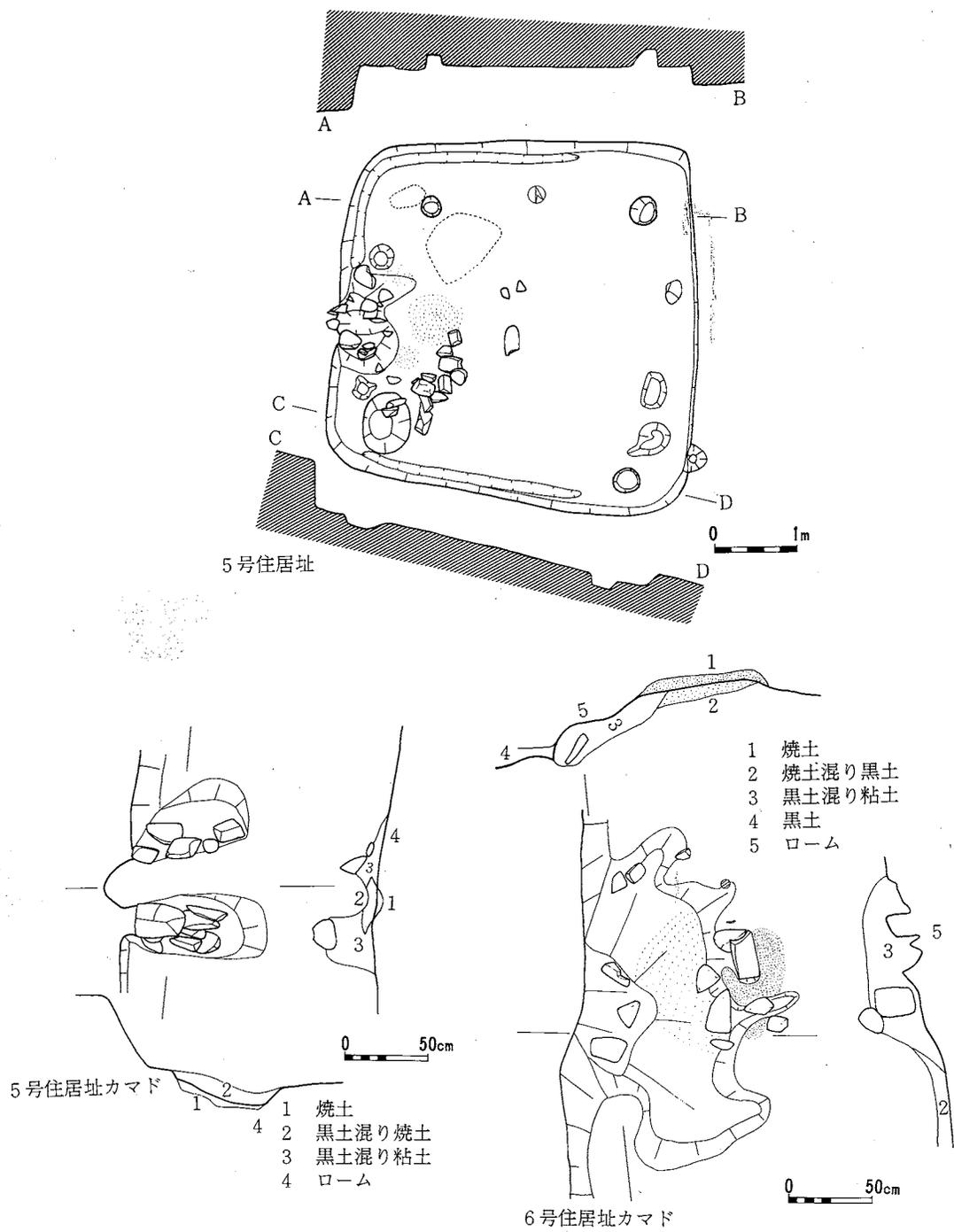


3号住居址
カマド

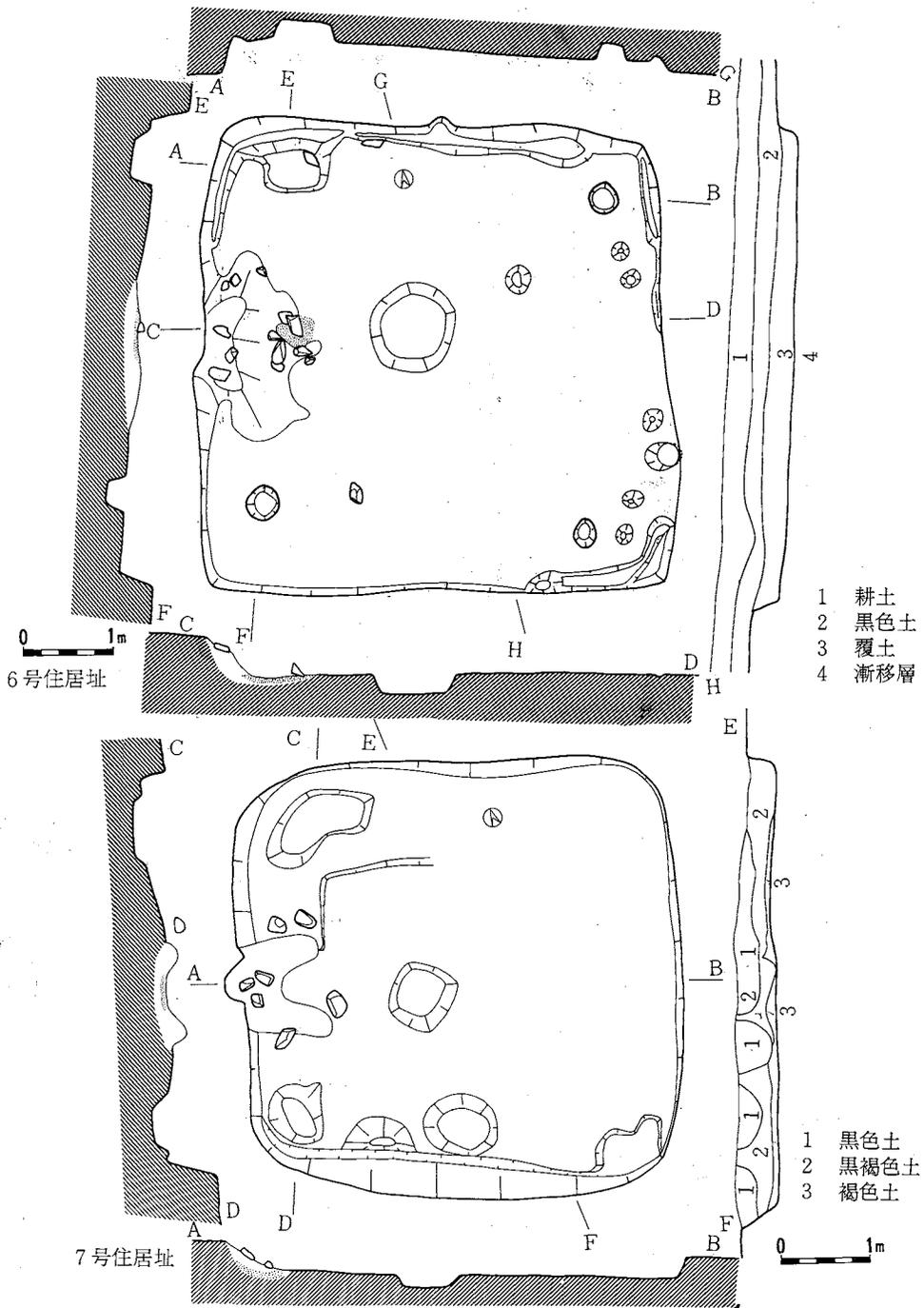


4号住居址

第68図 城平遺跡3・4号住居址 (1:80)

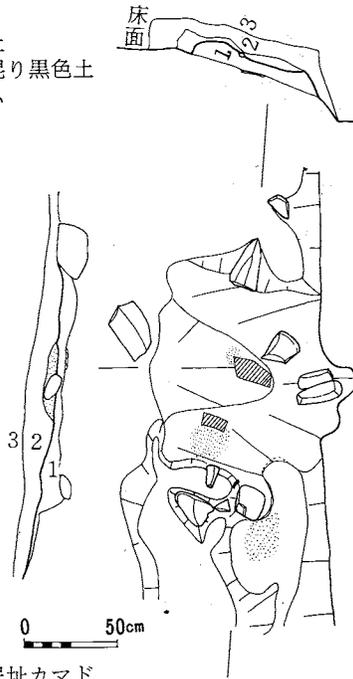


第69図 城平遺跡 5号住居址 (1:80)



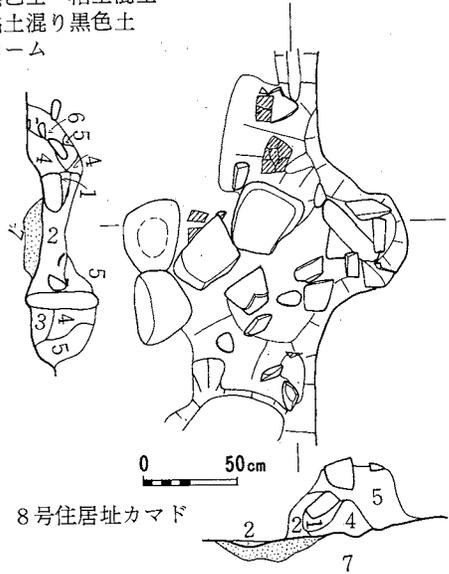
第70図 城平遺跡6・7号住居址(1:80)

- 1 黒色土
- 2 粘土混り黒色土
- 3 ローム



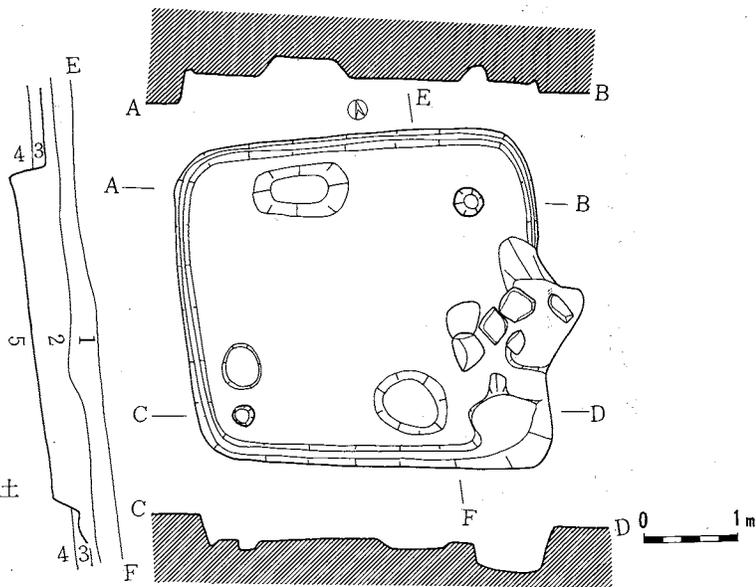
7号住居址カマド

- 1 焼土
- 2 焼土・粘土混土
- 3 焼土・粘土・灰青色粘土混土
- 4 黒色土混り粘土
- 5 黒色土・粘土混土
- 6 粘土混り黒色土
- 7 ローム



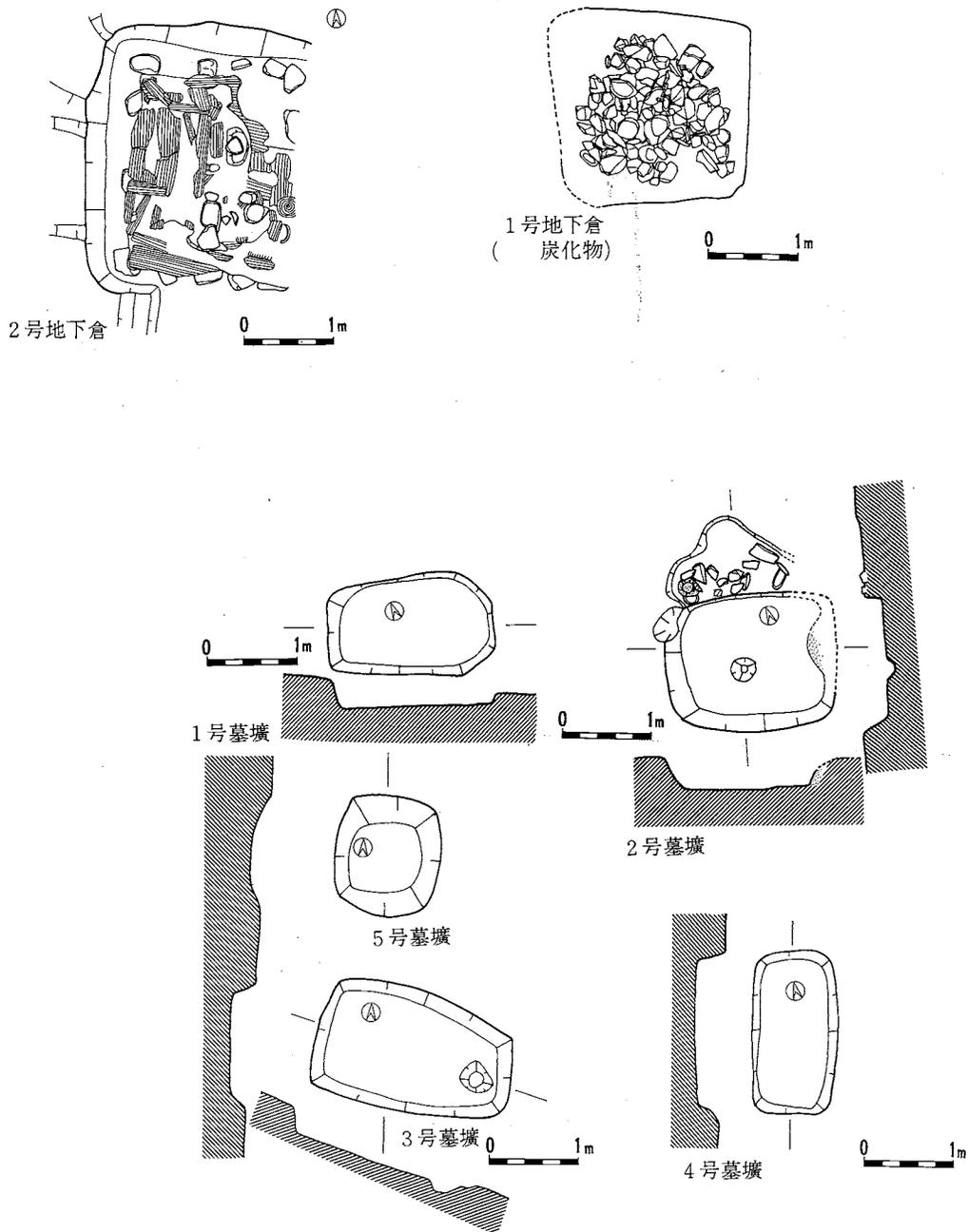
8号住居址カマド

- 1 耕土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 4 漸移層
- 5 ローム

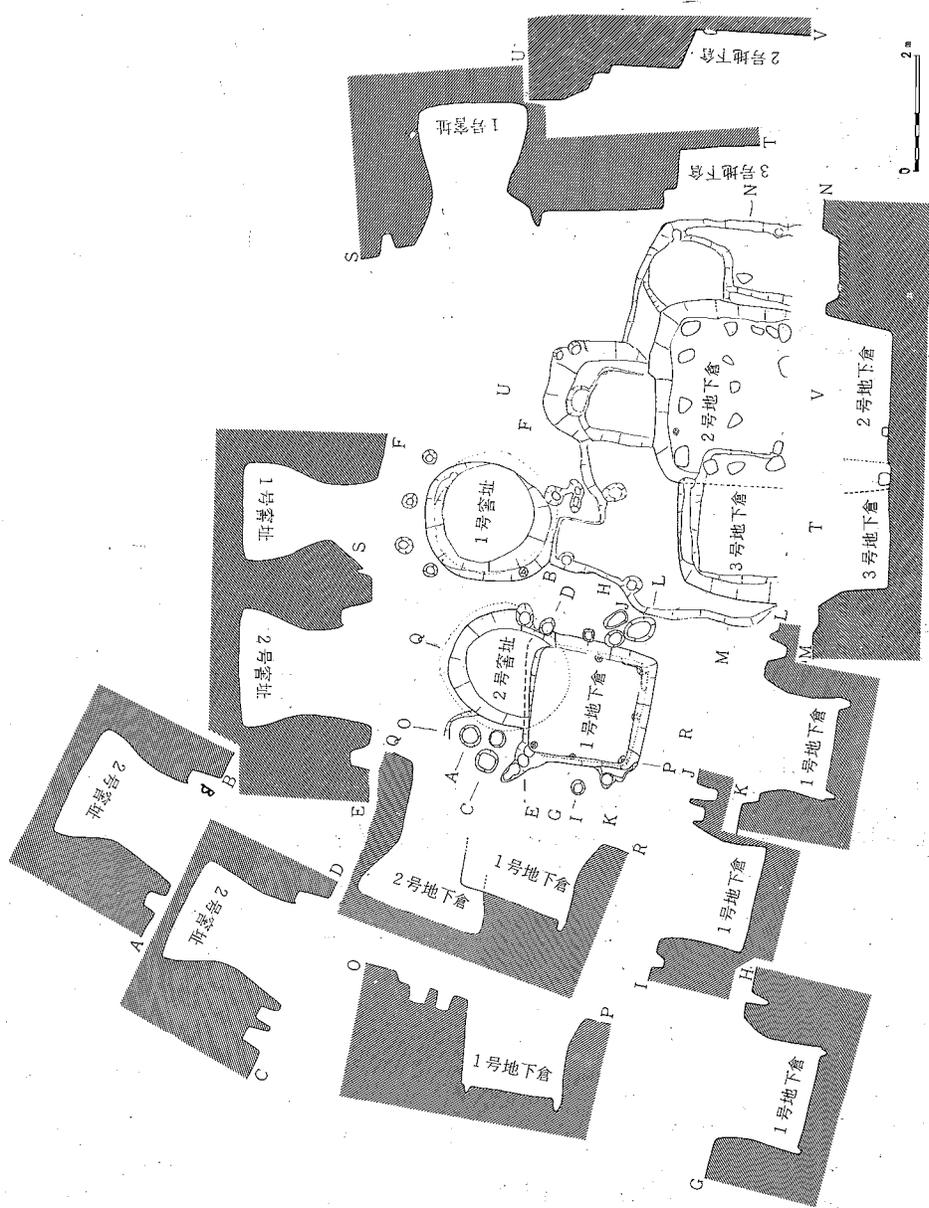


8号住居址

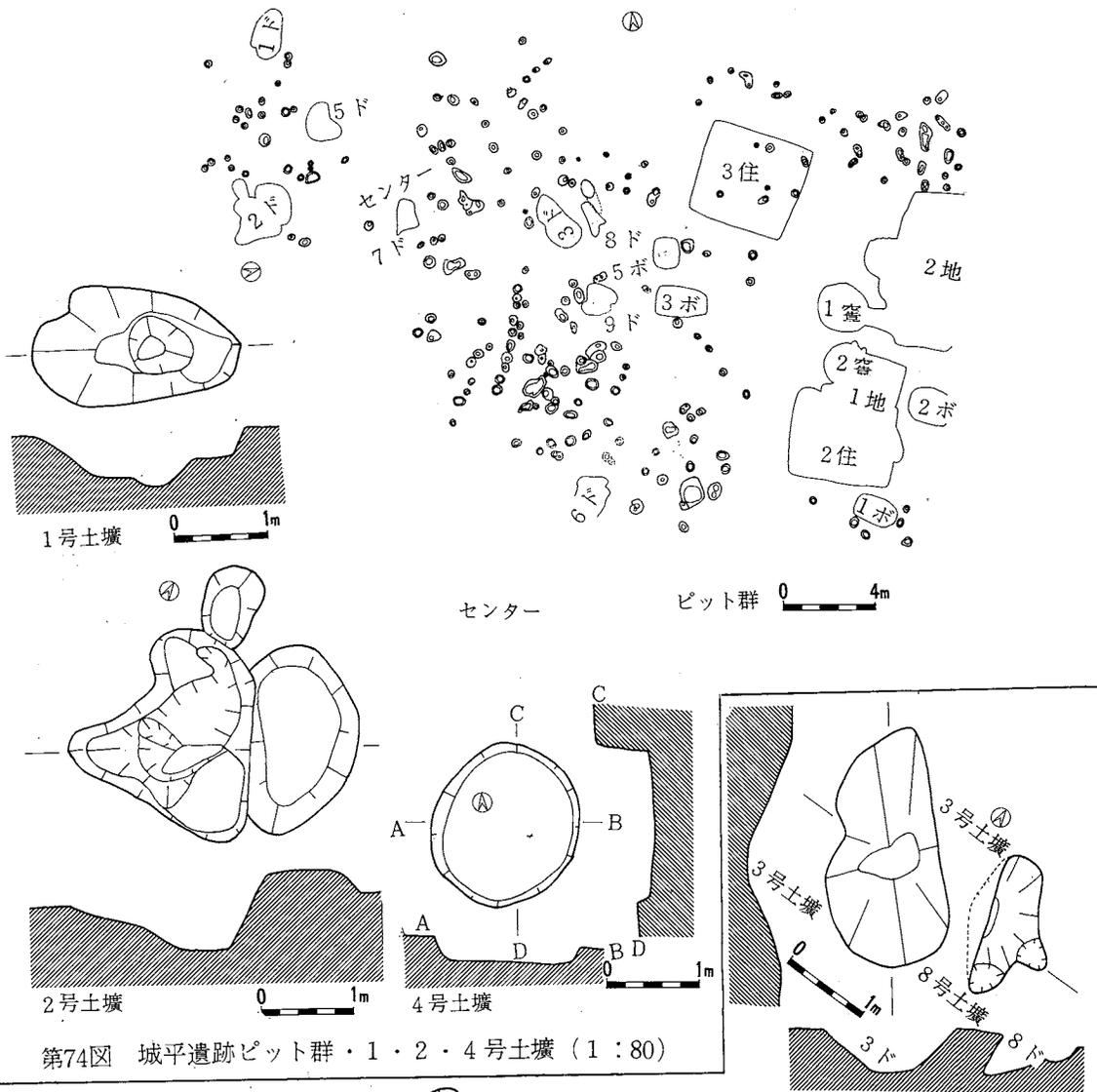
第71図 城平遺跡8号住居址 (1:80)



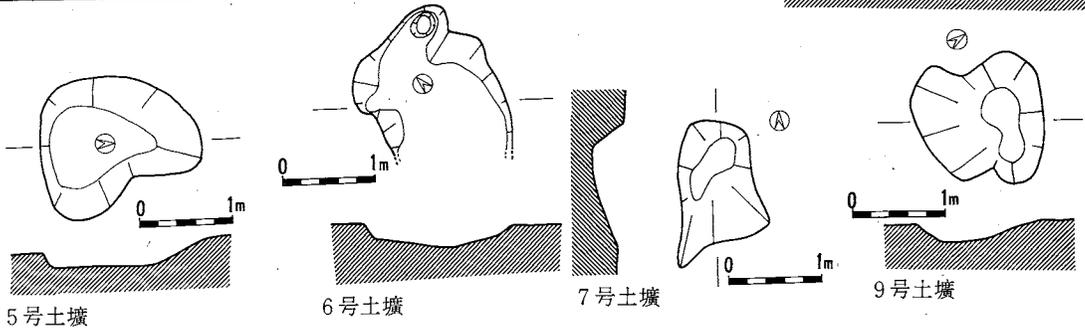
第72図 城平遺跡1号地下倉集石・2号地下倉・1～5号墓塚 (1:80)



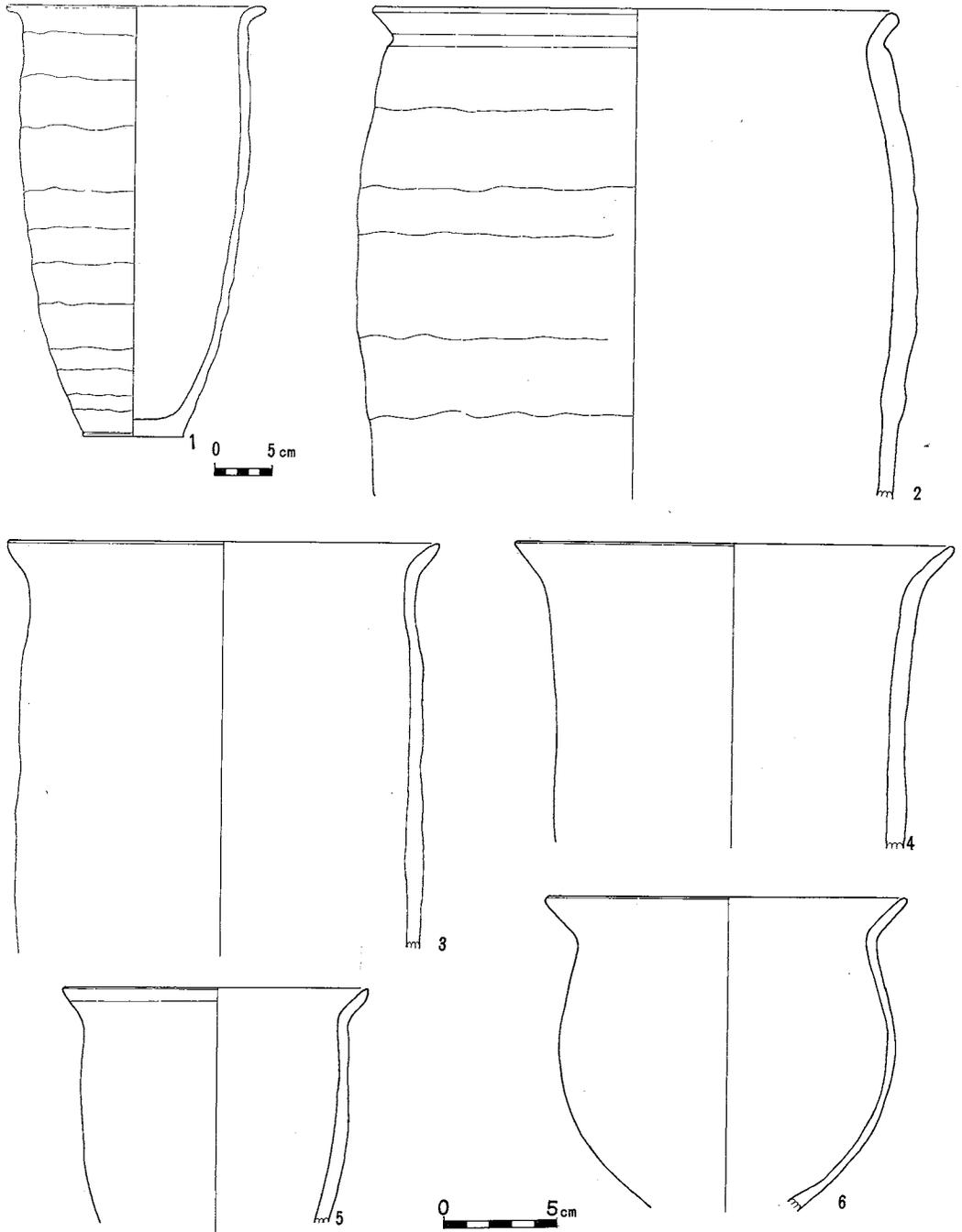
第73图 城平遺跡 中世遺構 (1:120)



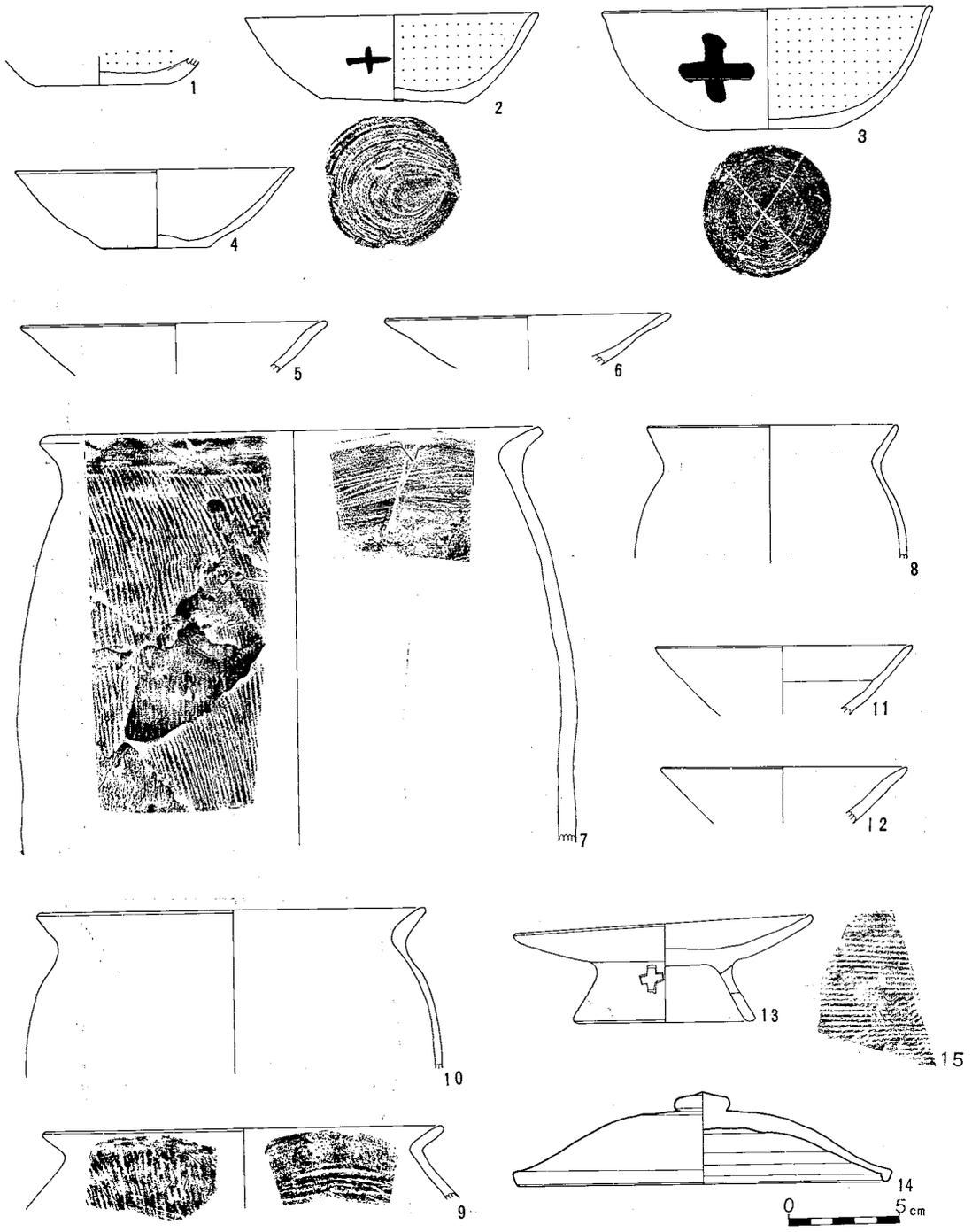
第74図 城平遺跡ピット群・1・2・4号土壙 (1:80)



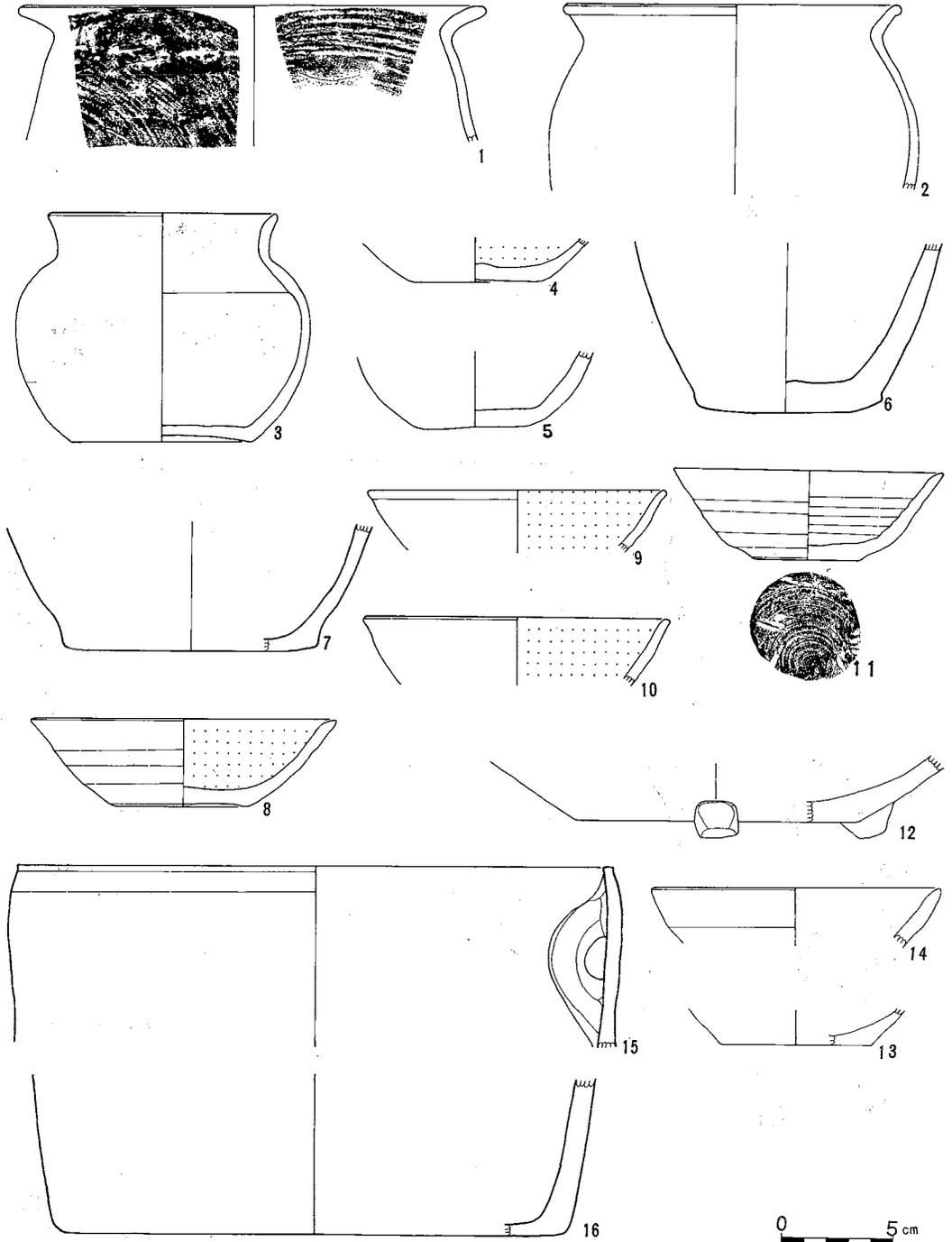
第75図 城平遺跡3・5～9号土壙 (1:80)



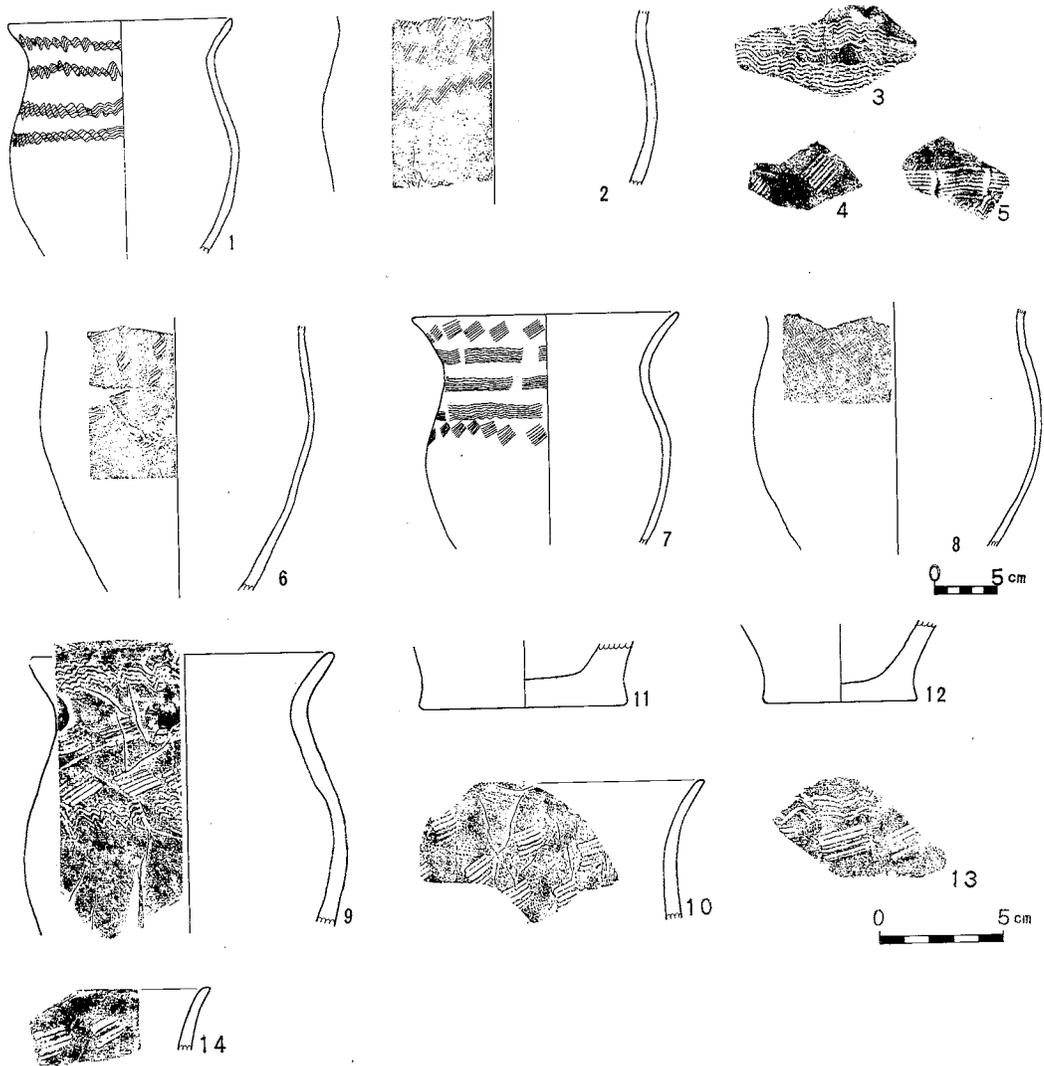
第76図 和手遺跡出土土器 (1 : 3, 1-1 : 6) (1~5, 2号住居址, 6 3号住居址)



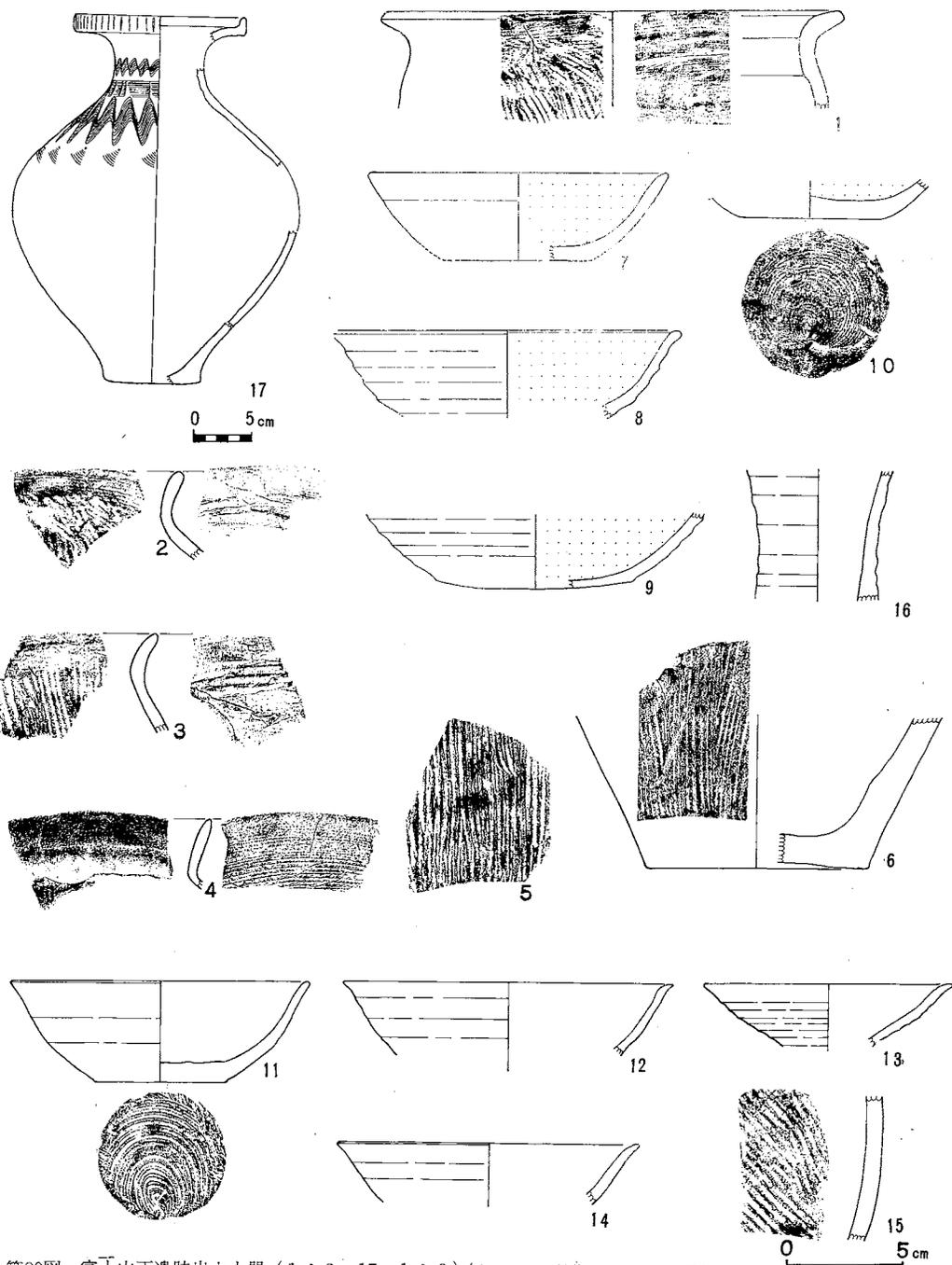
第77图 手和遗迹出土土器 (1:3) (1~6 3号住居址, 7·8 5号住居址, 9~15 6号住居址)



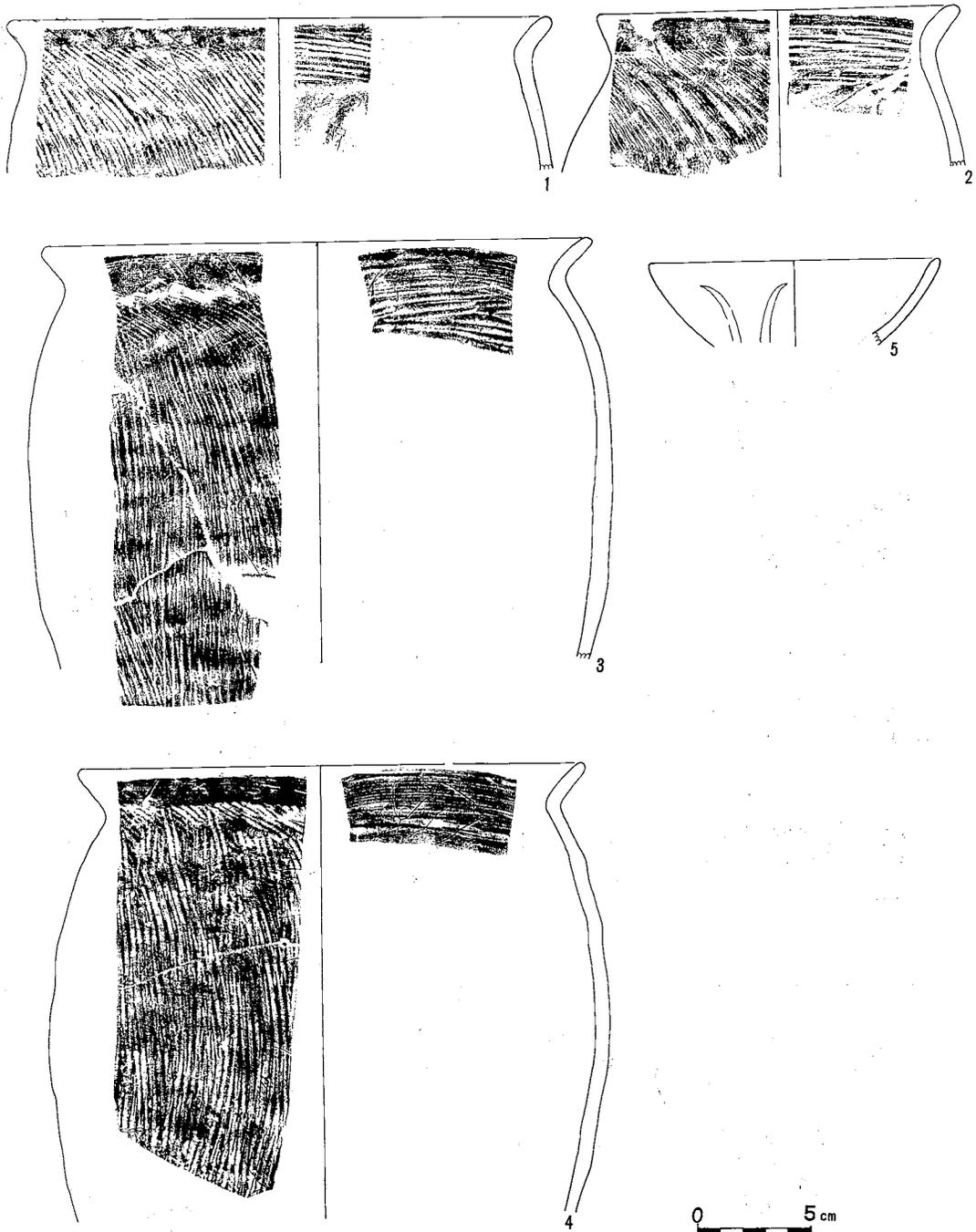
第78图 和手遺跡出土土器 (1:3) (1~5 7号住居址, 6~11 9号住居址, 12~14 1号住居址, 15·16 10号住居址)



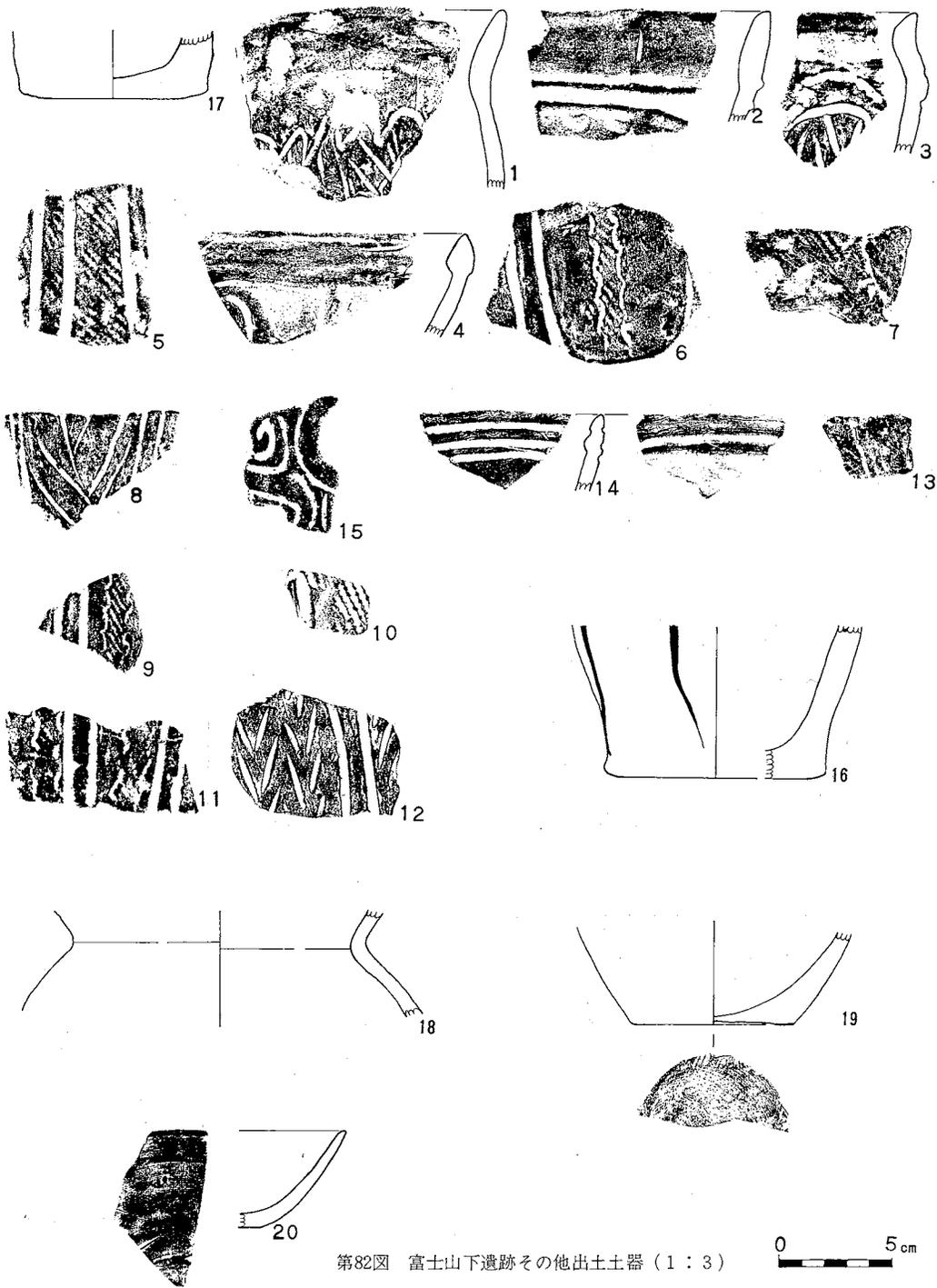
第79図 和手遺跡出土土器 (1:3, 1・2・6~8 1:6)(1~5, 4号住居址, 6~14 8号住居址)



第80图 富王山下遺跡出土土器 (1 : 3 · 17 1 : 6) (1~16 1号住居址, 17 2号住居址)

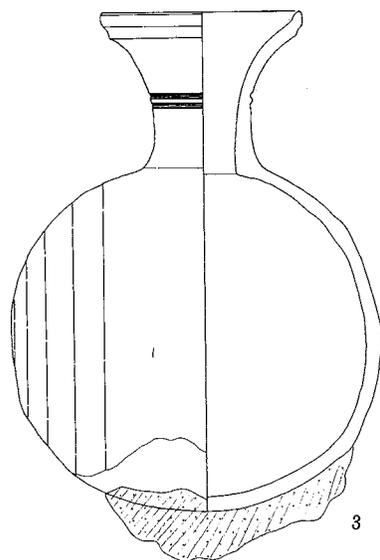
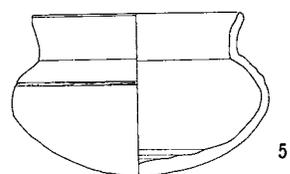
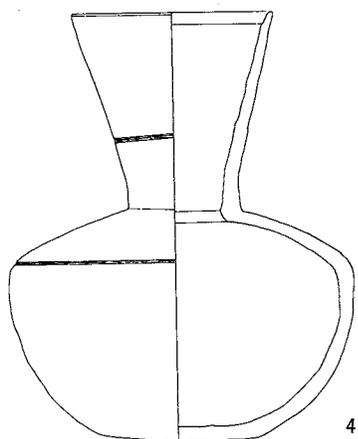
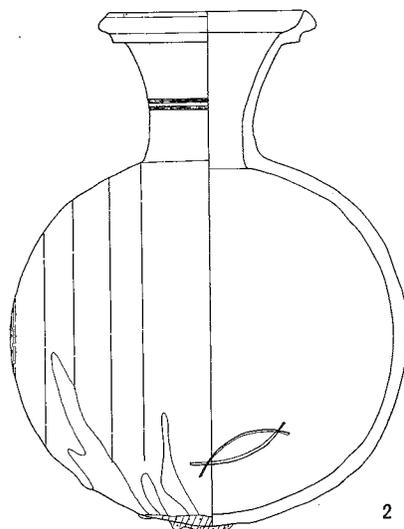
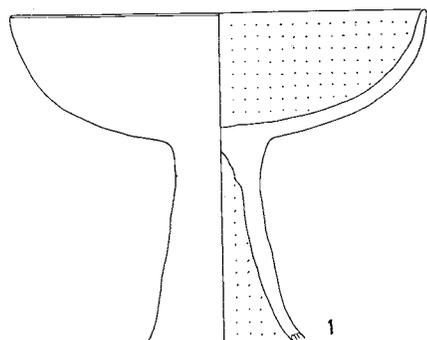


第81图 城平遺跡(1·2·5) 富士山下遺跡(3·4) 出土土器(1:3) (1·2 5号住居址, 3·4 1号住居址, 5. 2号地下倉)

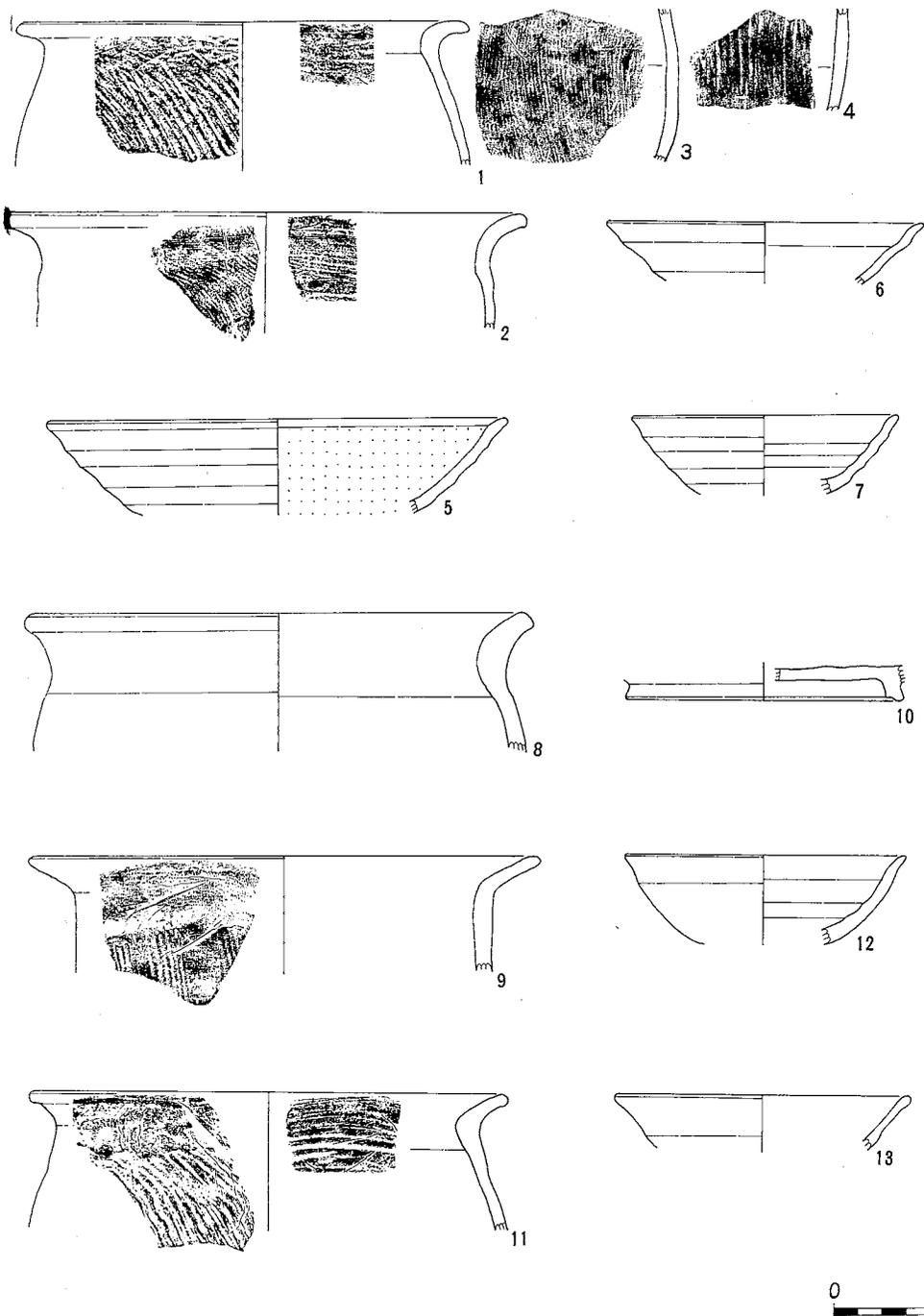


第82図 富士山下遺跡その他出土土器 (1:3)

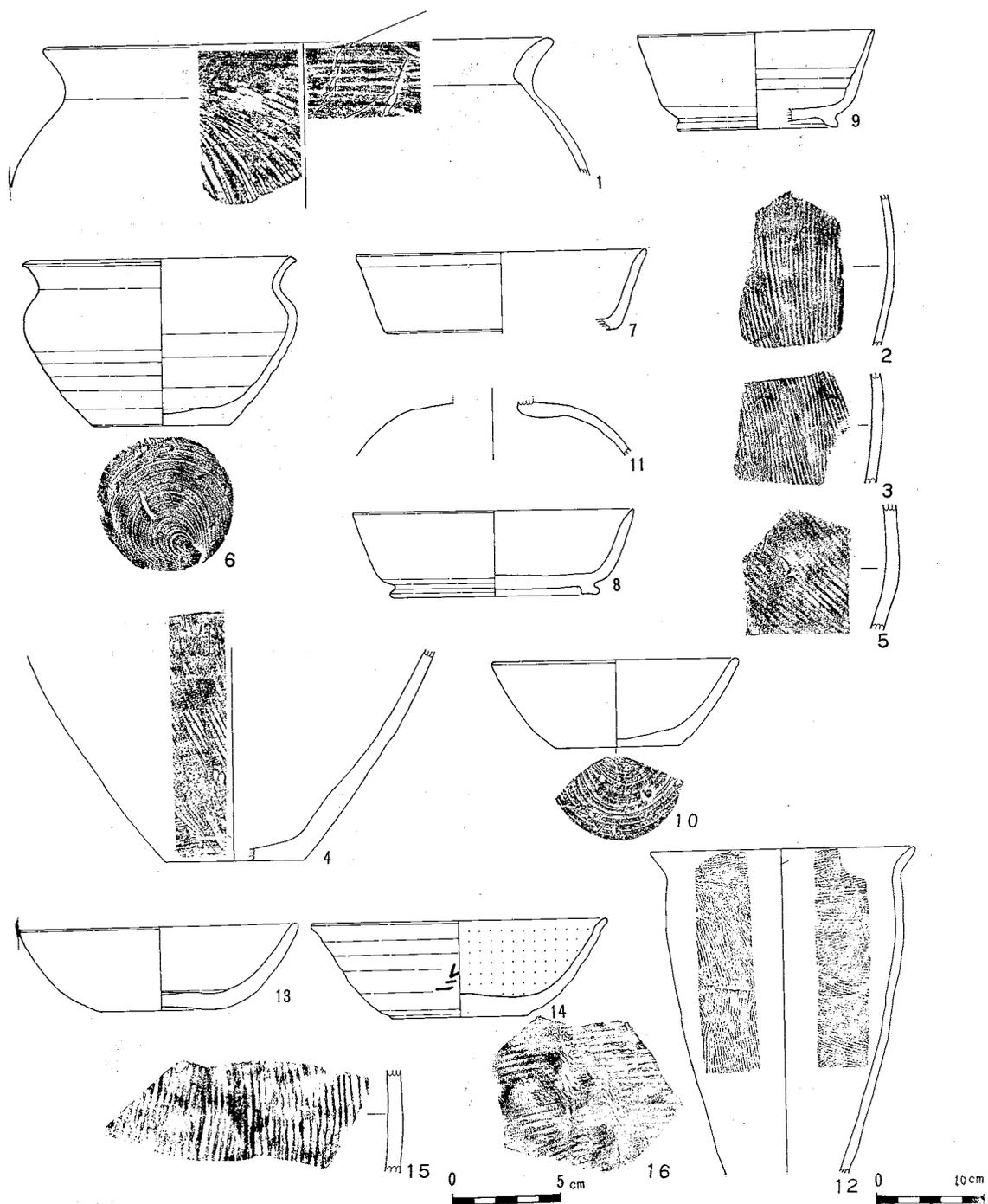
0 5 cm



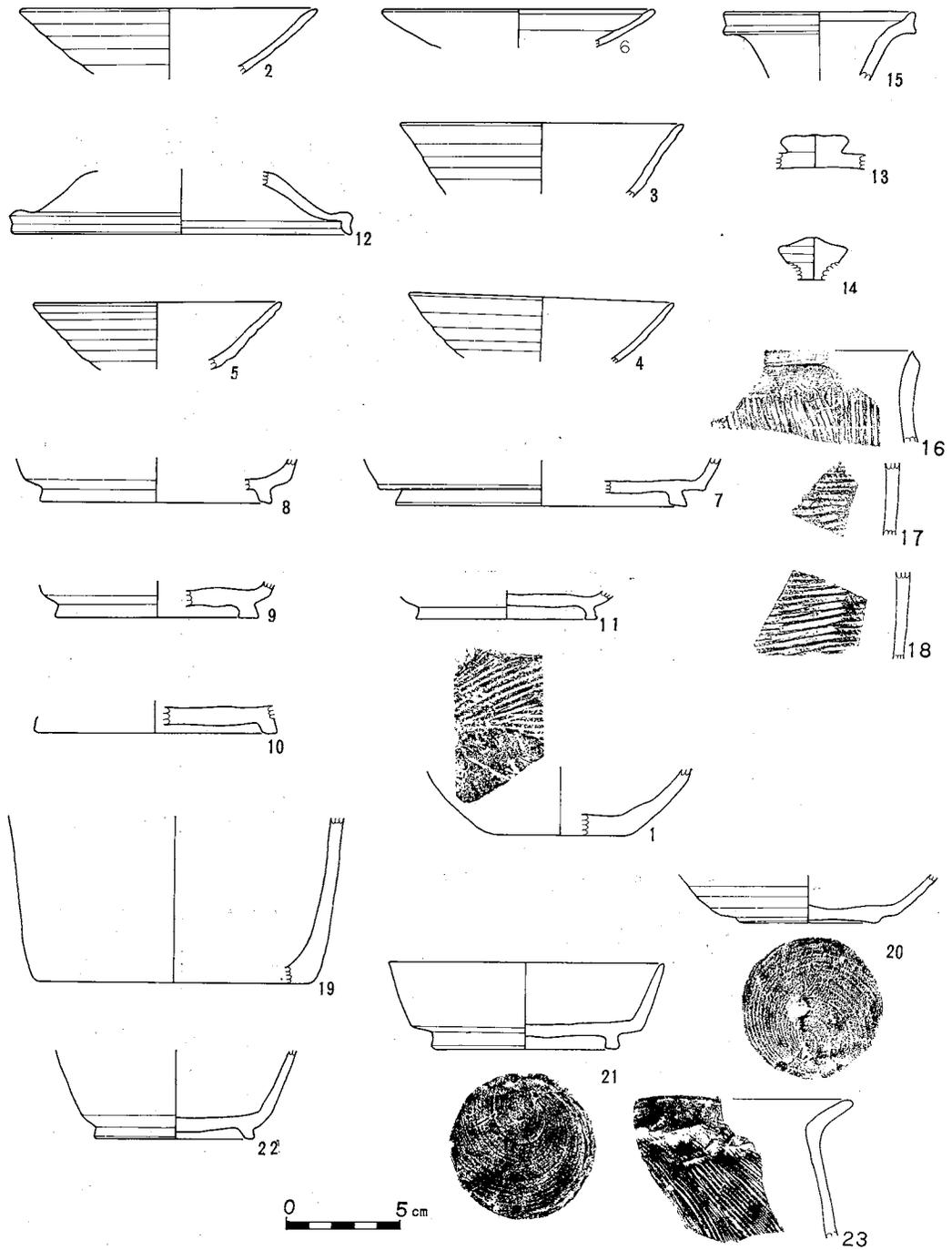
第83图 富士塚古墳出土土器 (1:3)



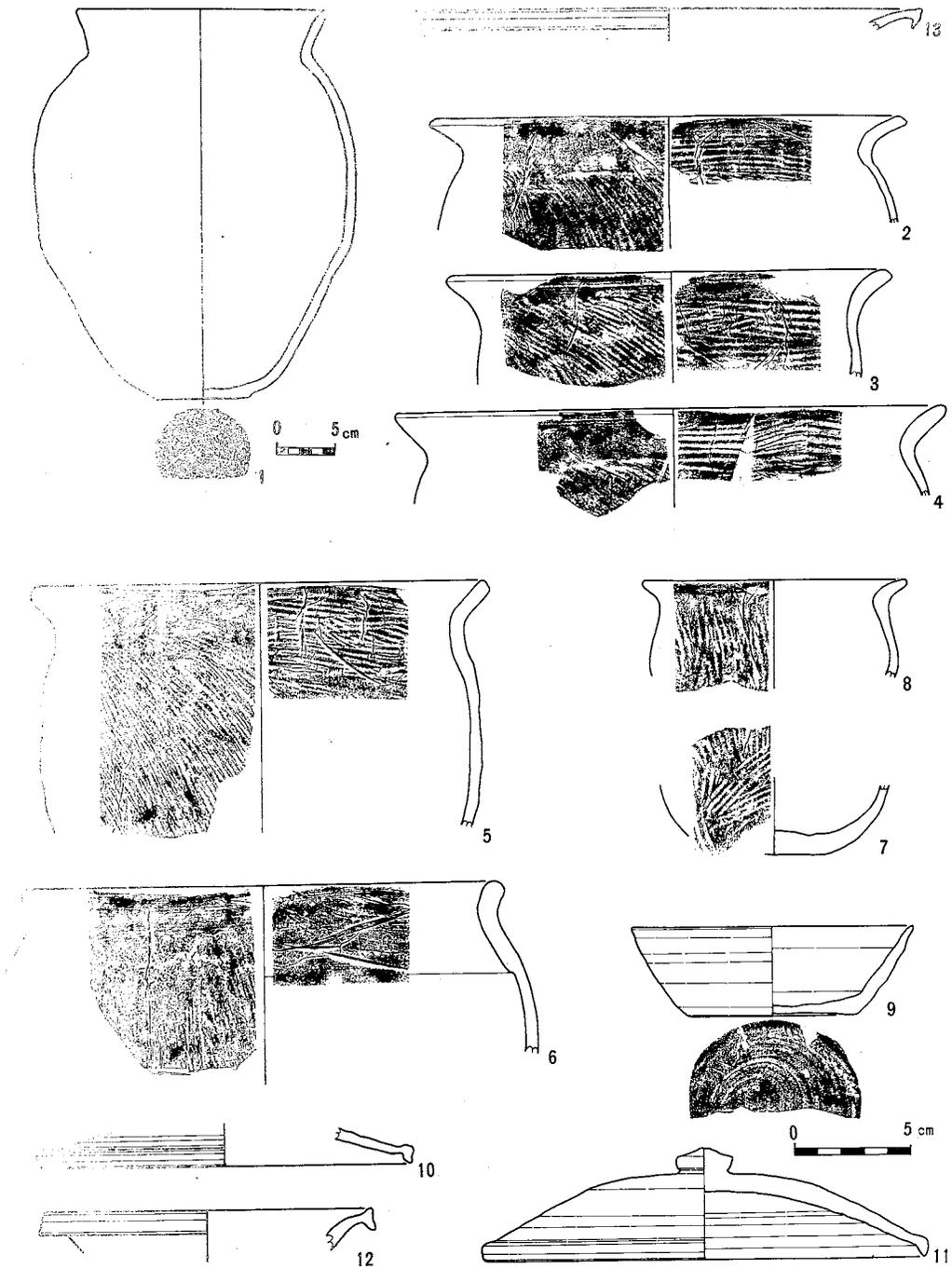
第84図 葛蒲沢遺跡出土土器 (1 : 3) (1~7 1号住居址, 8~10 2号住居址, 11~13 6号住居址)



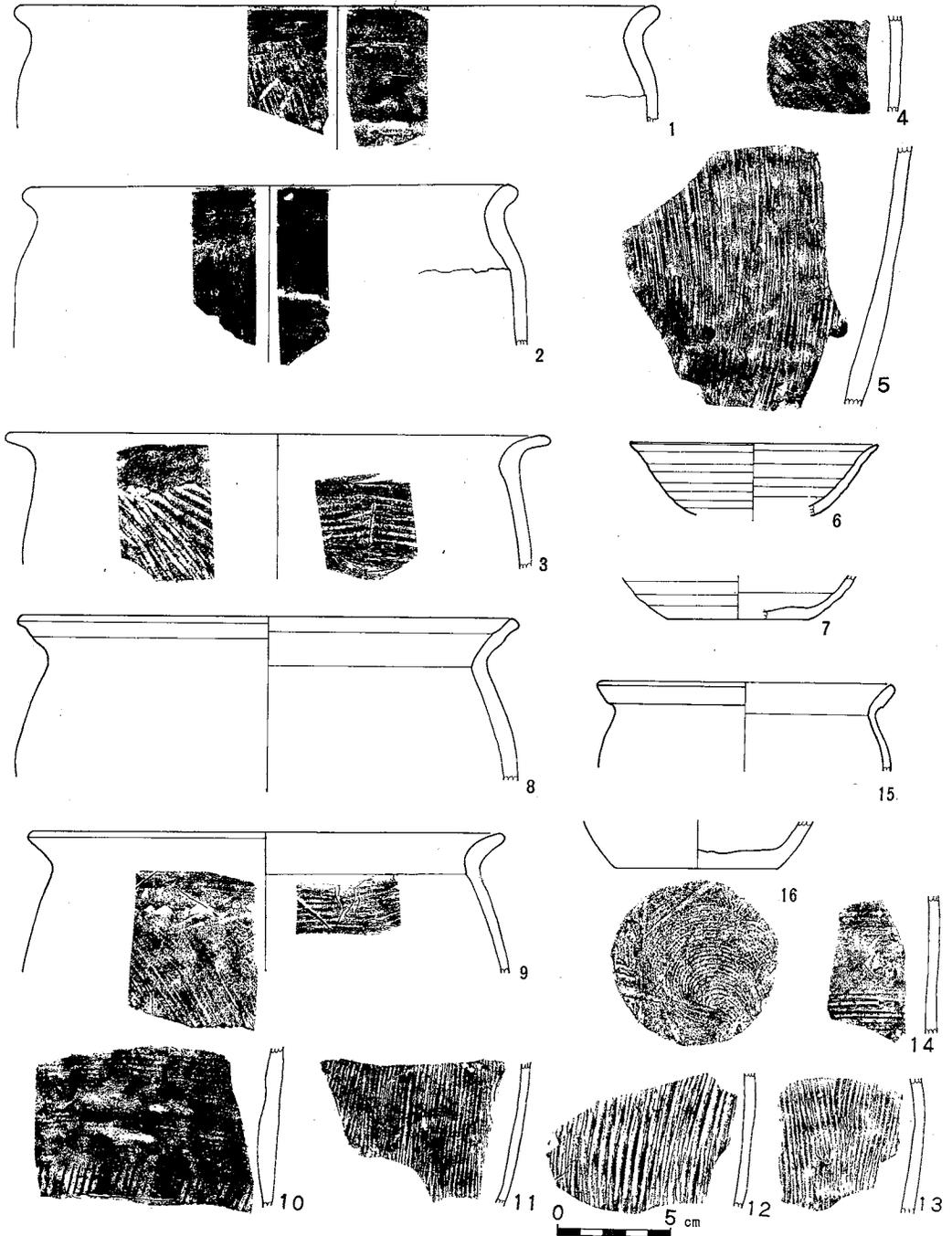
第85图 葛蒲沢遺跡出土土器 (1:3, 12 1:6) (1~11 4号住居址, 12~14 7号住居址, 15·16 9号住居址)



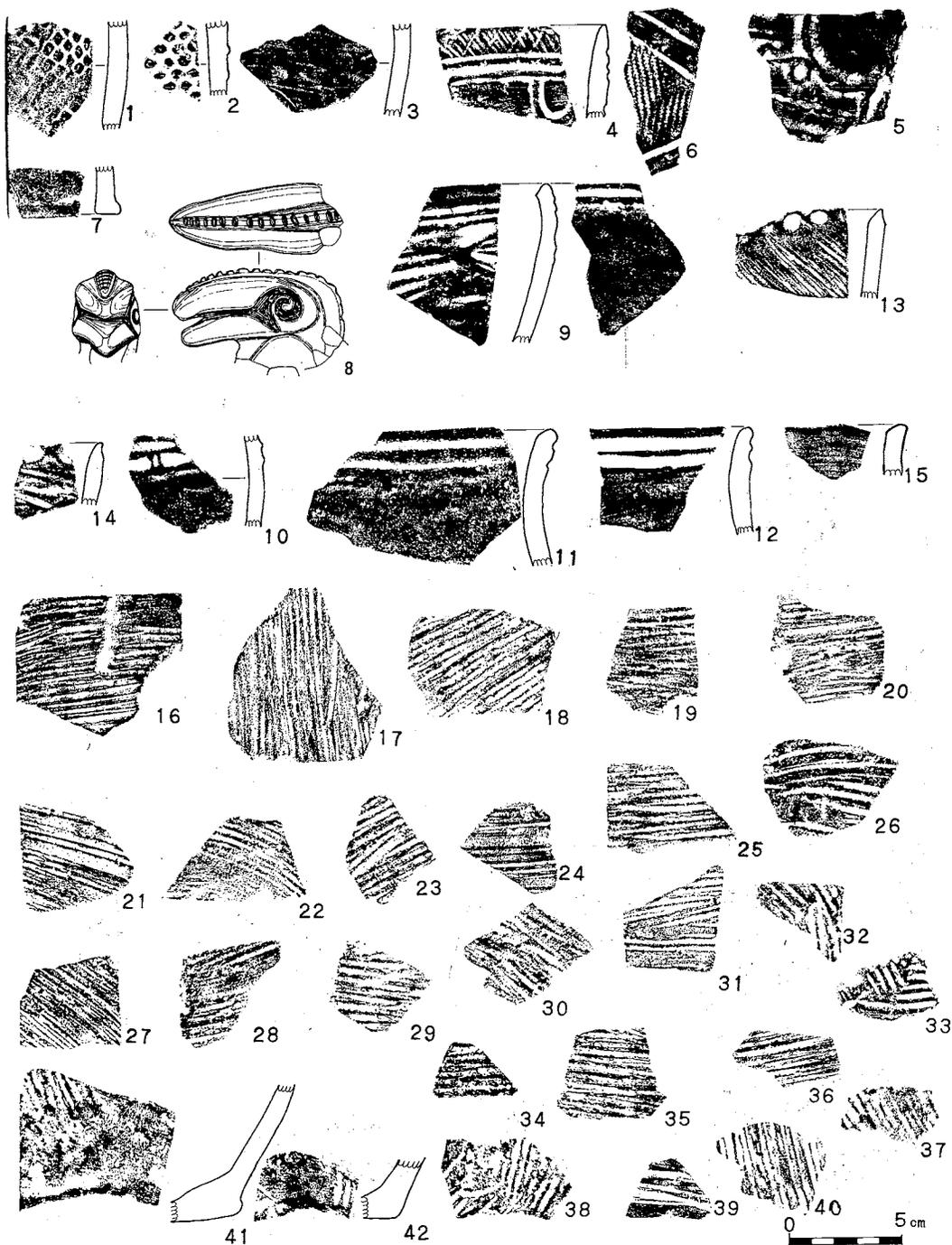
第86図 葛蒲沢遺跡出土土器 (1 : 3) (1~18 5号住居址, 19~23 その他)



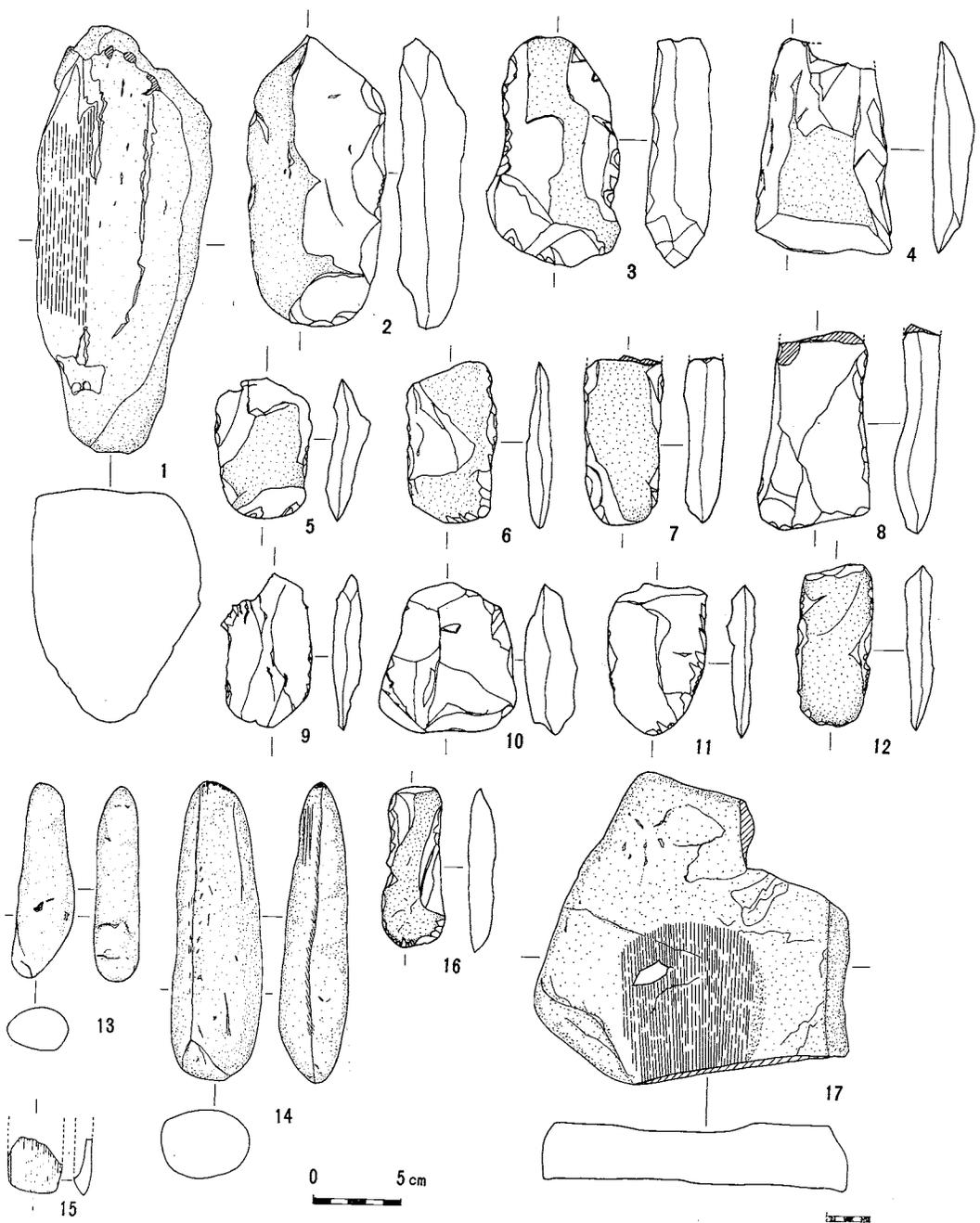
第87図 高蒲沢遺跡出土土器 (1:3, 1 1:6) (1~7 3号住居址, 8~13 11号住居址)



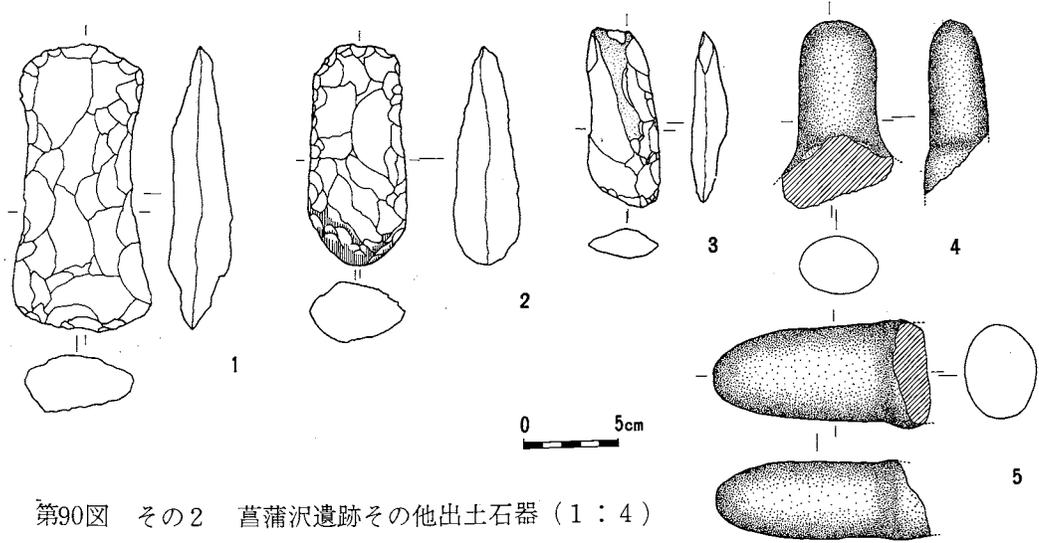
第88图 葛蒲沢遺跡出土土器 (1:3) (1 8号住居址, 2~8·9号住居址, 9~13 10号住居址)



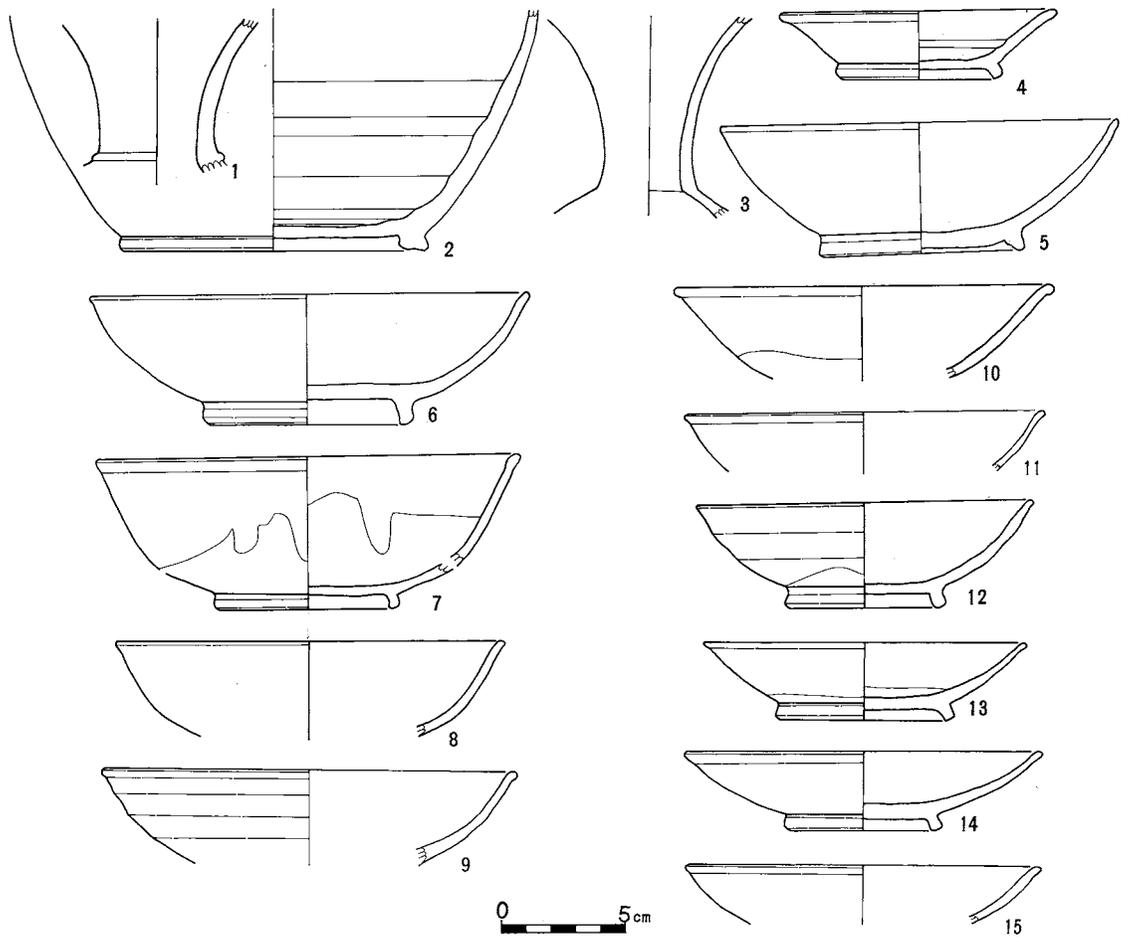
第89図 葛蒲沢遺跡その他出土土器 (1 : 3)



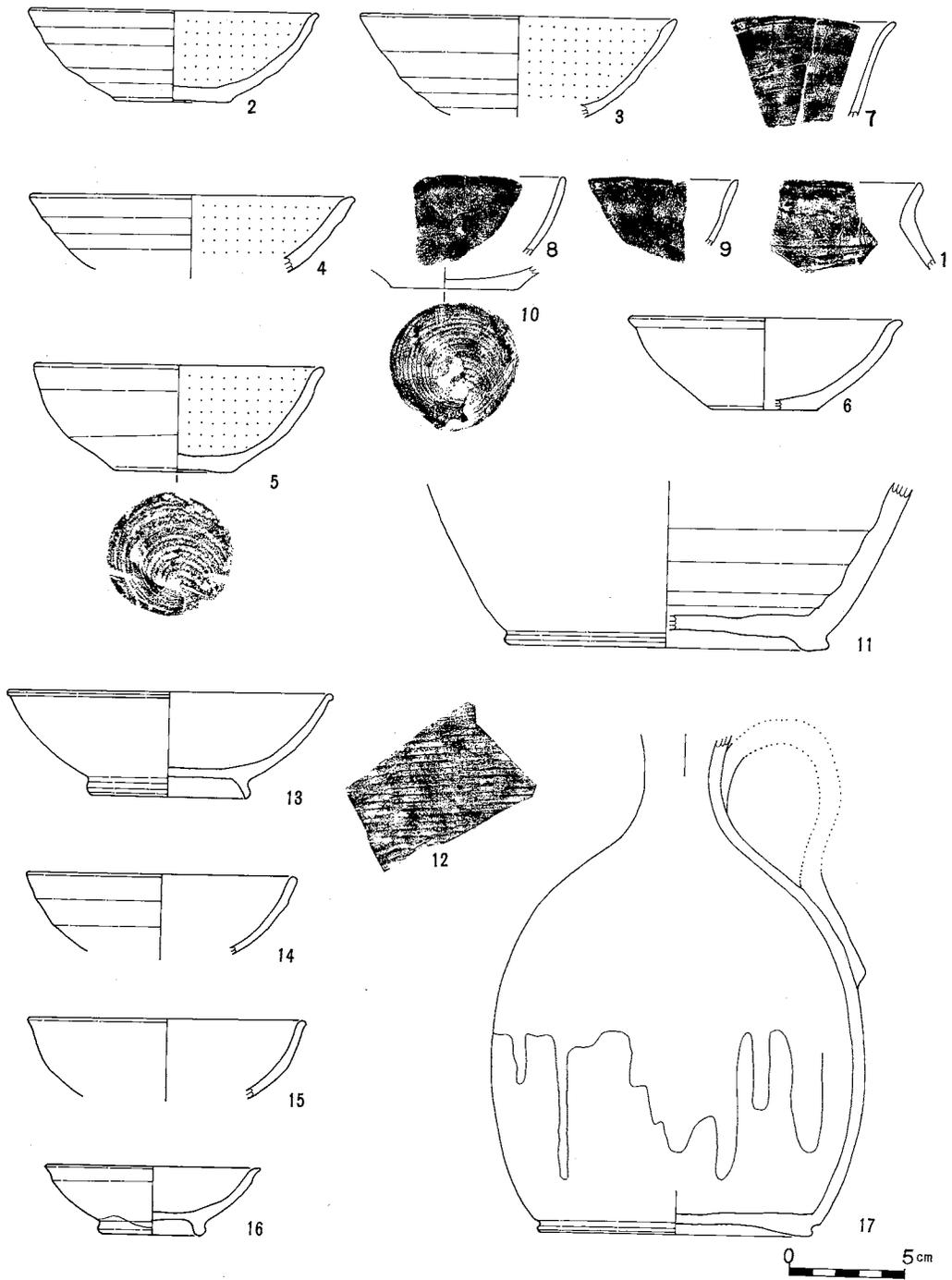
第90図 葛蒲沢遺跡その1 (1~16)・富士山下遺跡(17)(1:4 17-1:8)
 (1、1号住居址 2、3号住居址 3~6、4号住居址 7~10、8号住居址 11、9号住居址
 12~14、11号住居址 15、1号土壌 16、その他 17、1号住居址)



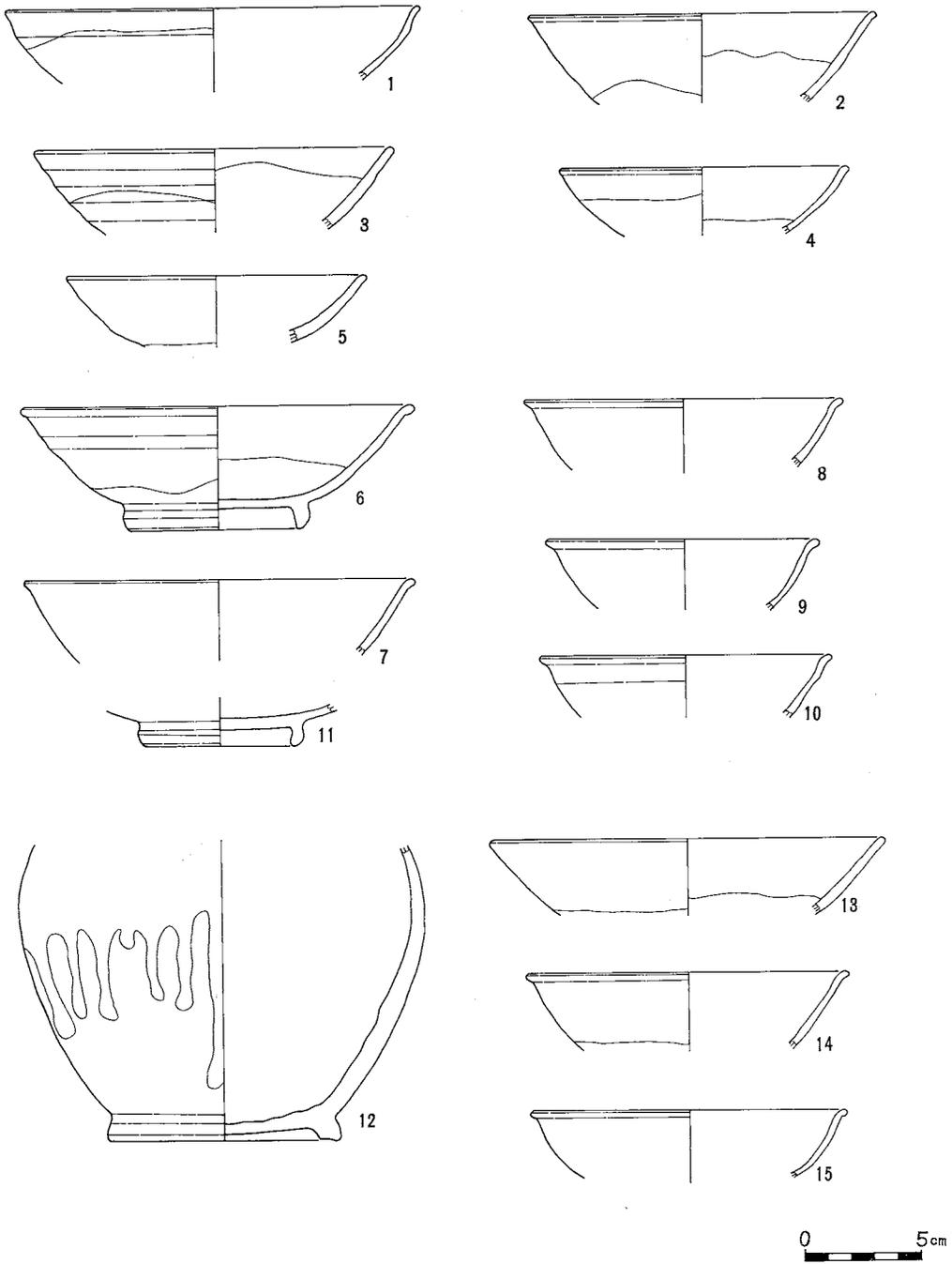
第90図 その2 菖蒲沢遺跡その他出土石器（1：4）



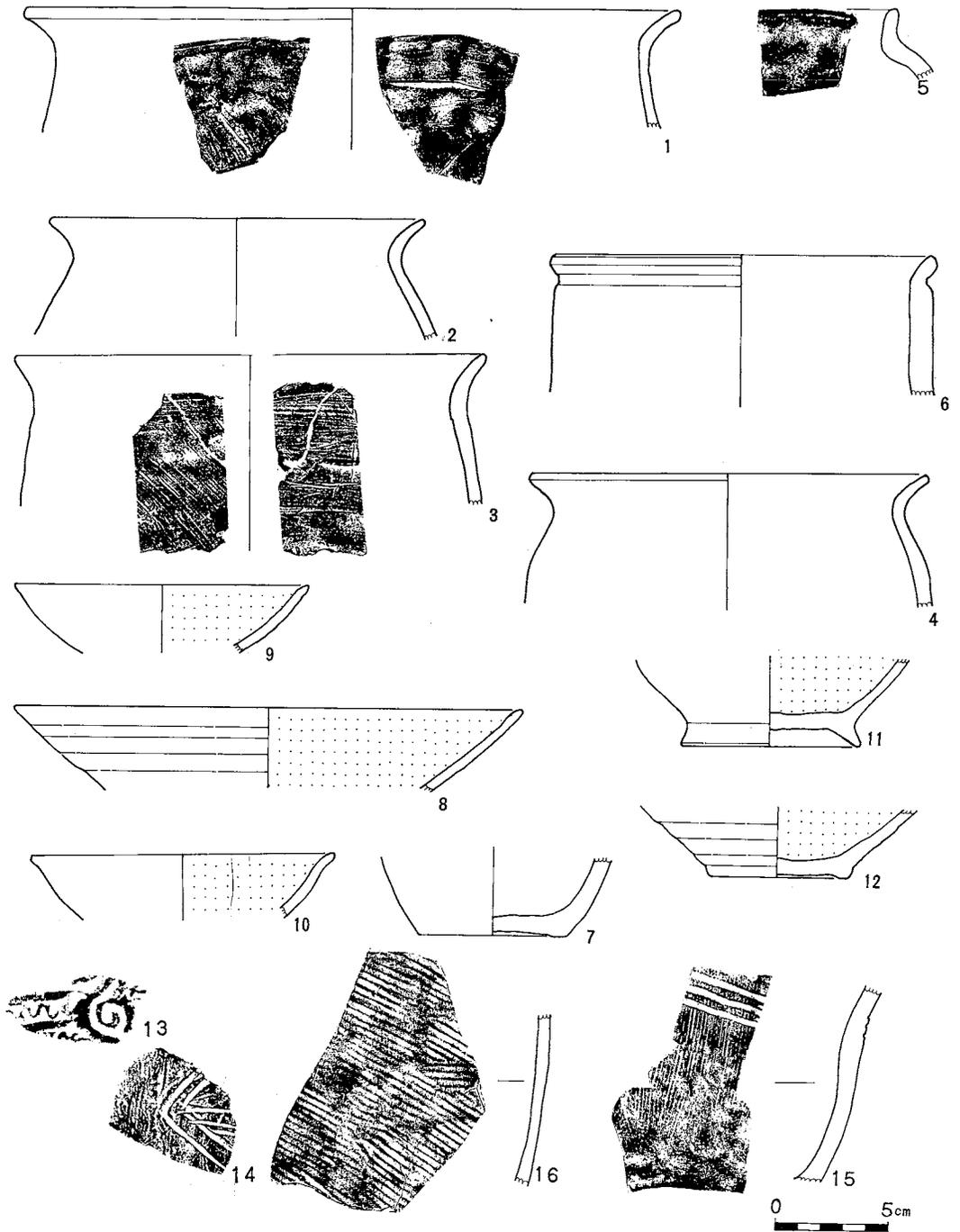
第91図 南丘A 遺跡1号住居址出土土器（1：3）



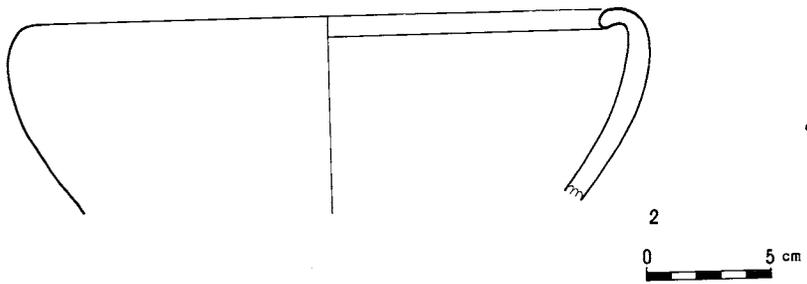
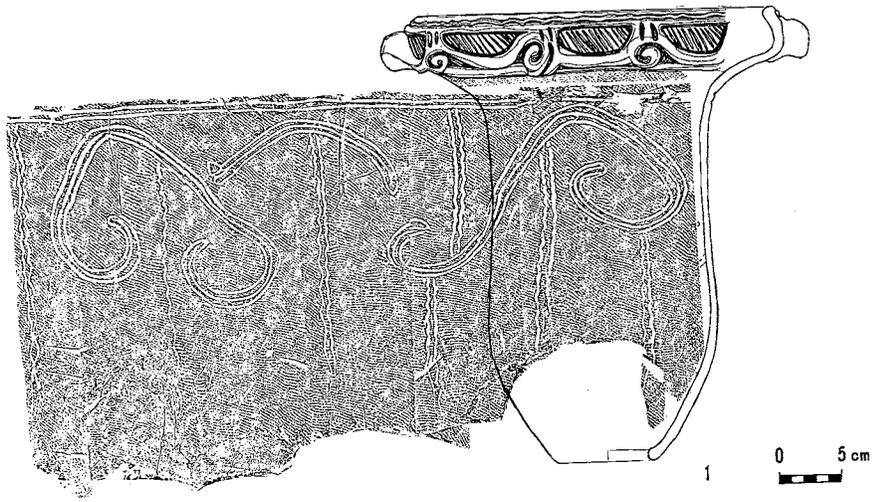
第92图 南丘A遺跡出土土器 (1:3) (1~16 1号住居址, 17 1号墓城)



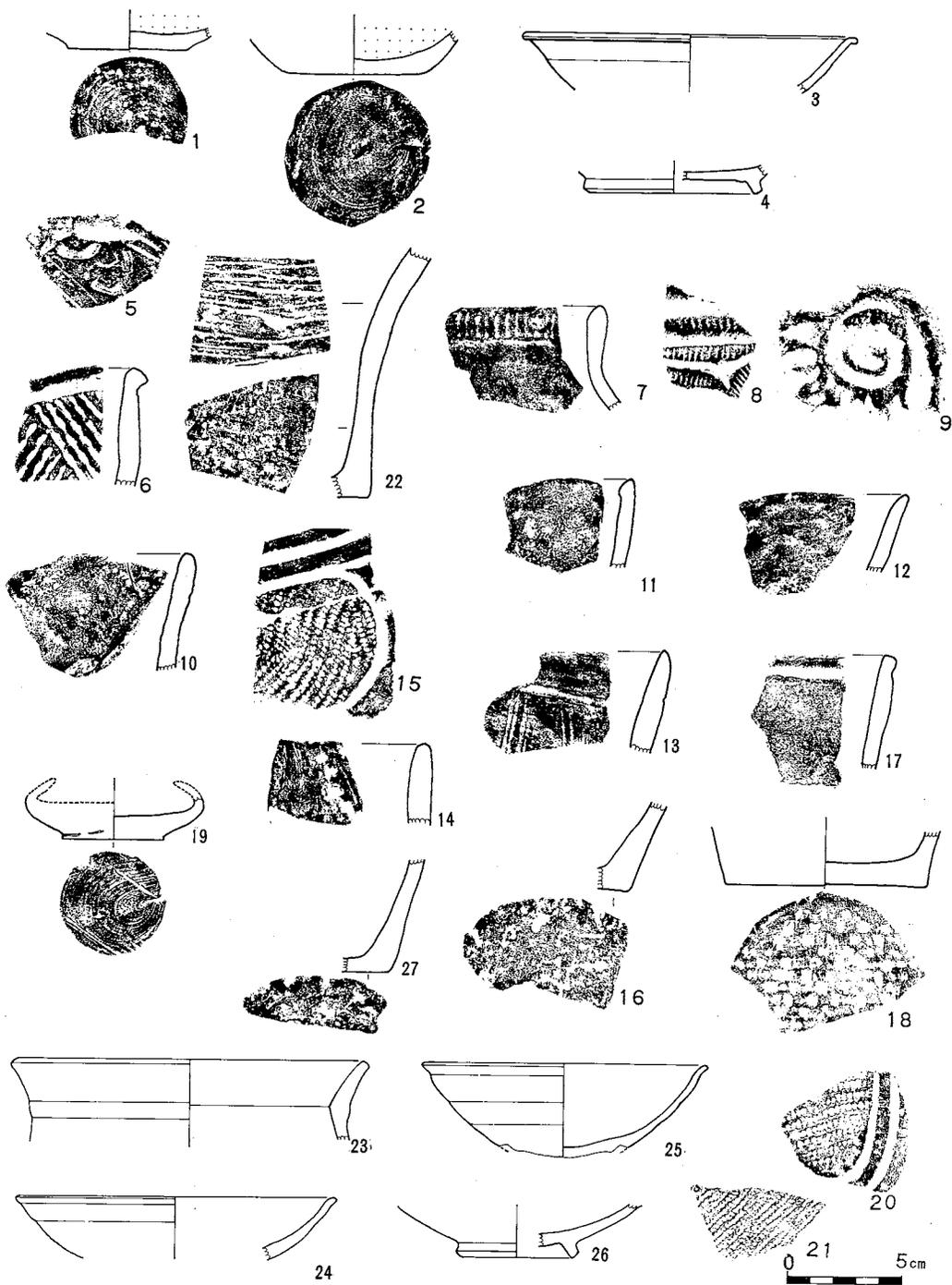
第 93 図 南丘A 遺跡出土土器 (1 : 3) (1~5 1号住居址, 6~11 2号住居址, 12~15 その他)



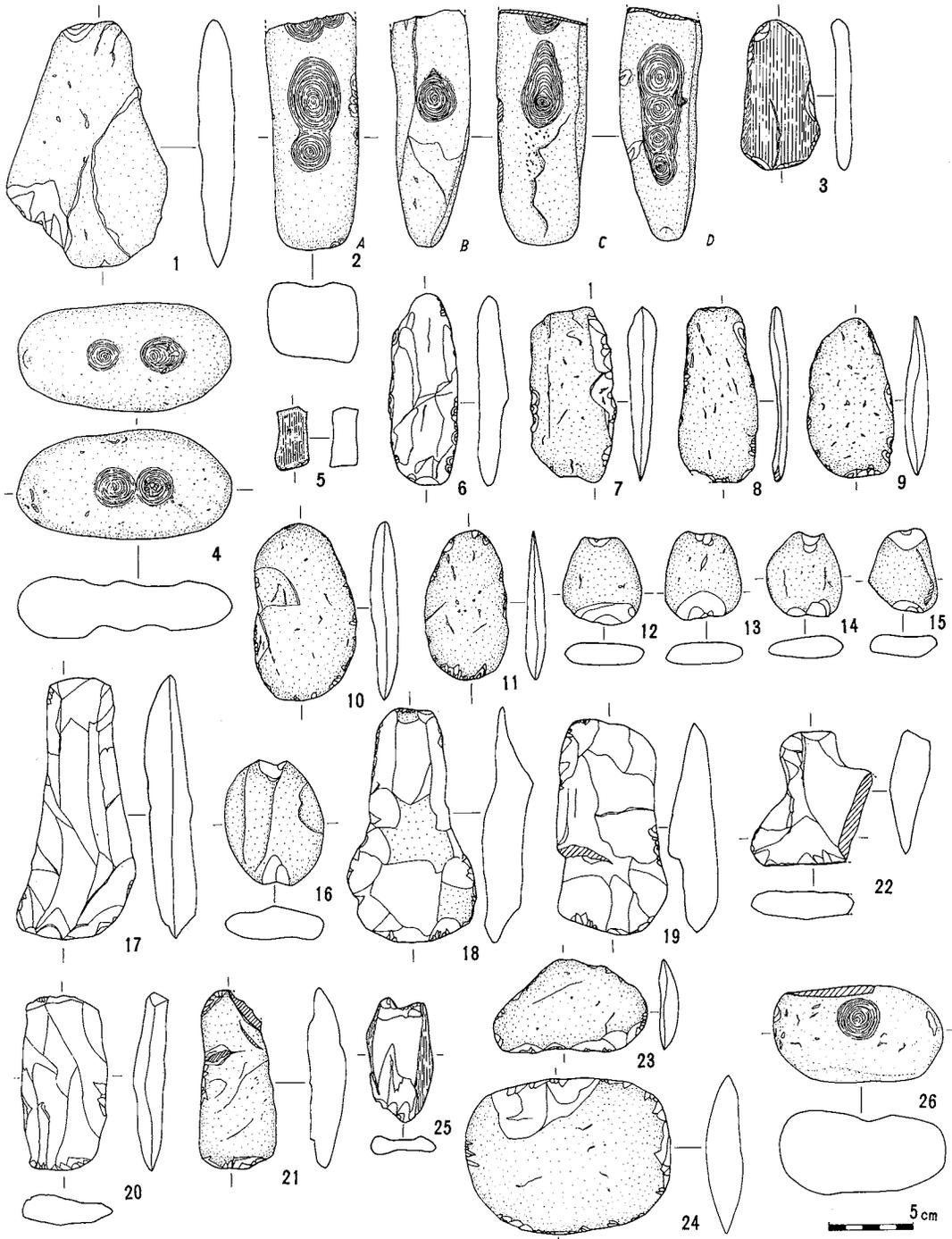
第94図 南丘A遺跡出土土器 (1:3), (1~12, 2号住居址, 13~16 その他)



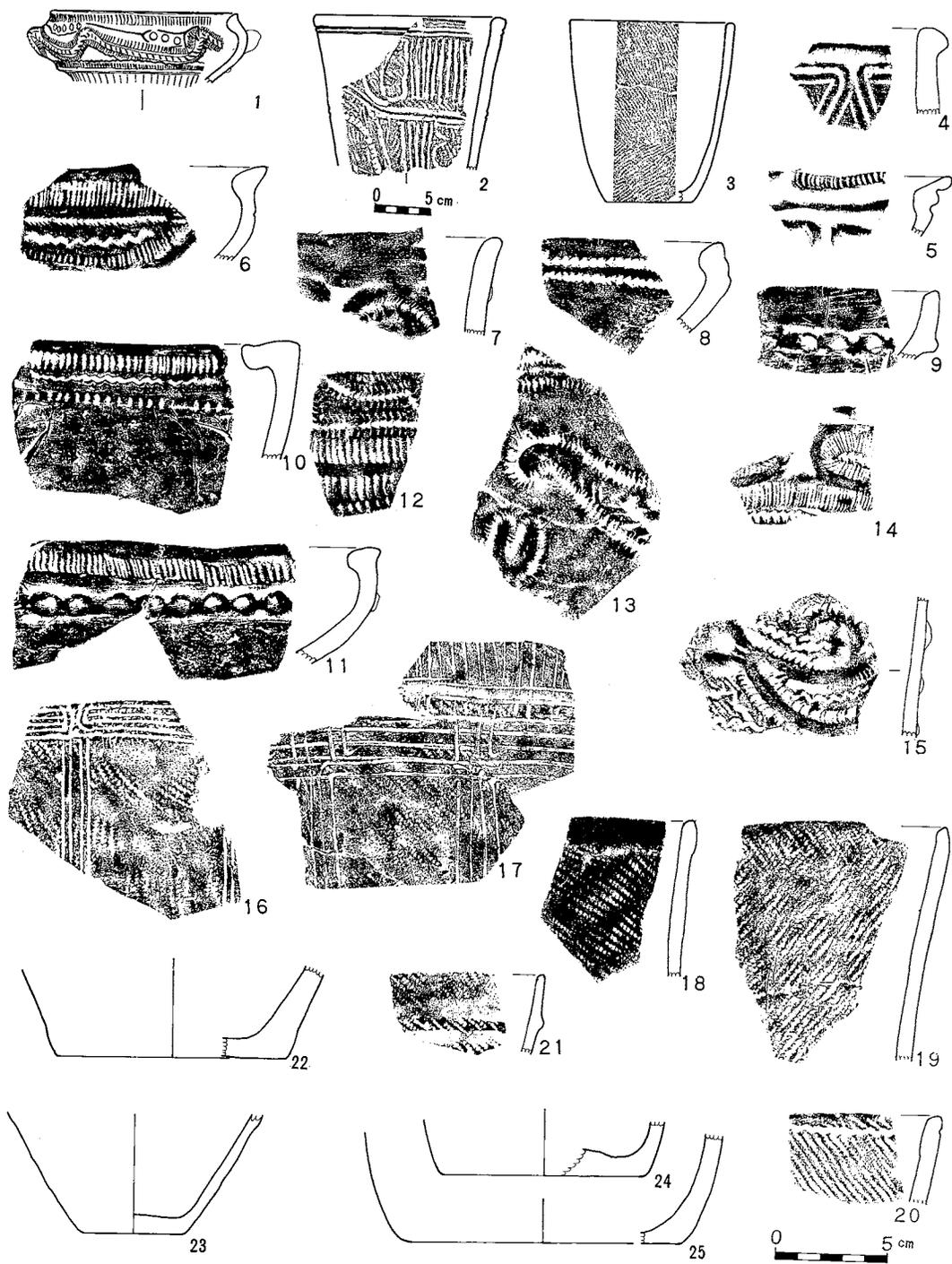
第95图 南丘A遺跡3号住居址出土土器 (1 1:6, 2 1:3)



第96図 南丘A遺跡 (1~19, 22~27) 南丘B遺跡 (20, 21) 出土土器 (1:3) (1~6 溝址, 7~27 その他)



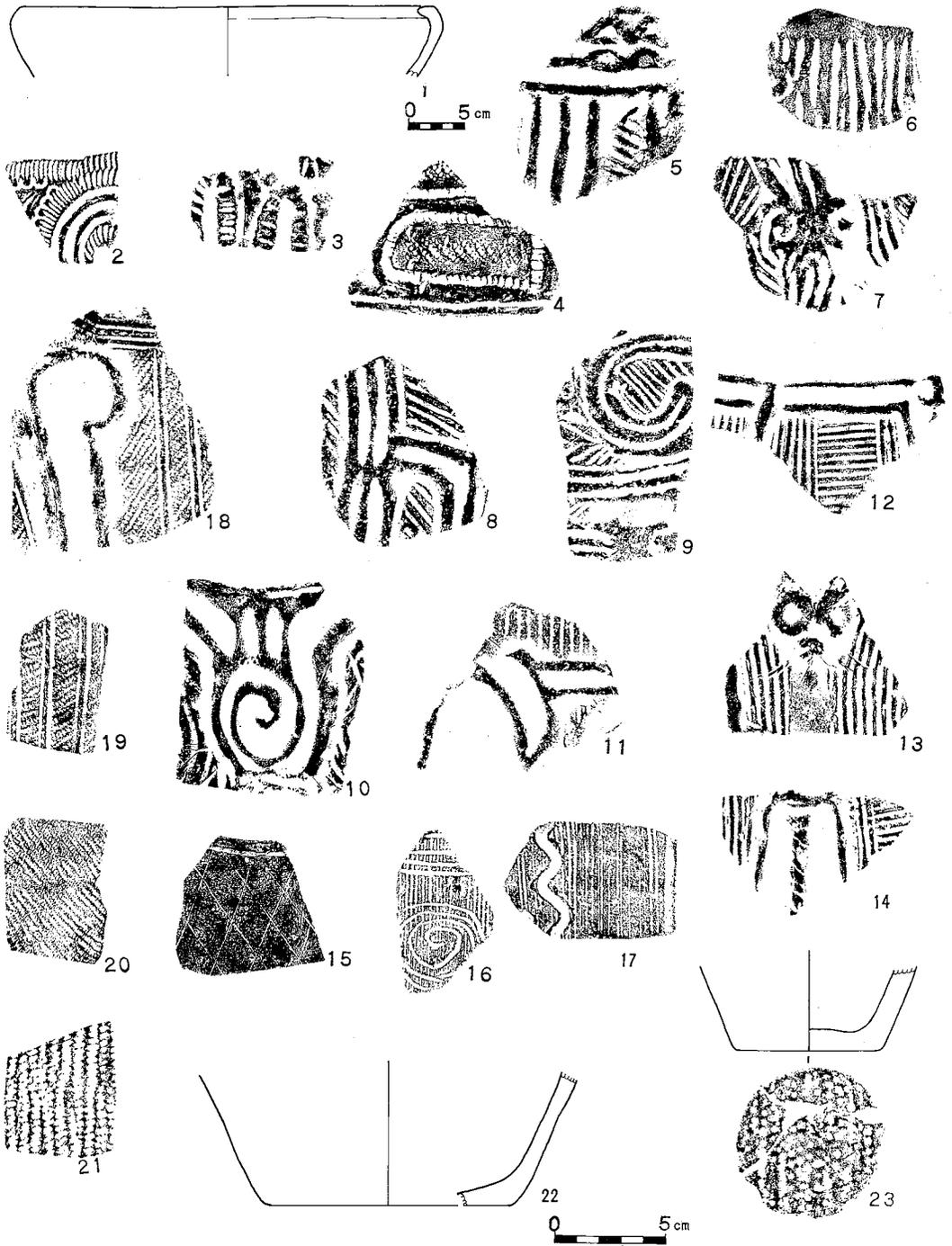
第97図 富士山下遺跡 (1~4)・南丘A遺跡 (5~25)・南丘B遺跡 (26) 出土石器 (1:4)
 (1・2、2号住居址 3・4、その他 5・2号住居址 6~16・3号住居址
 17、溝址 18~25、その他 26、その他)



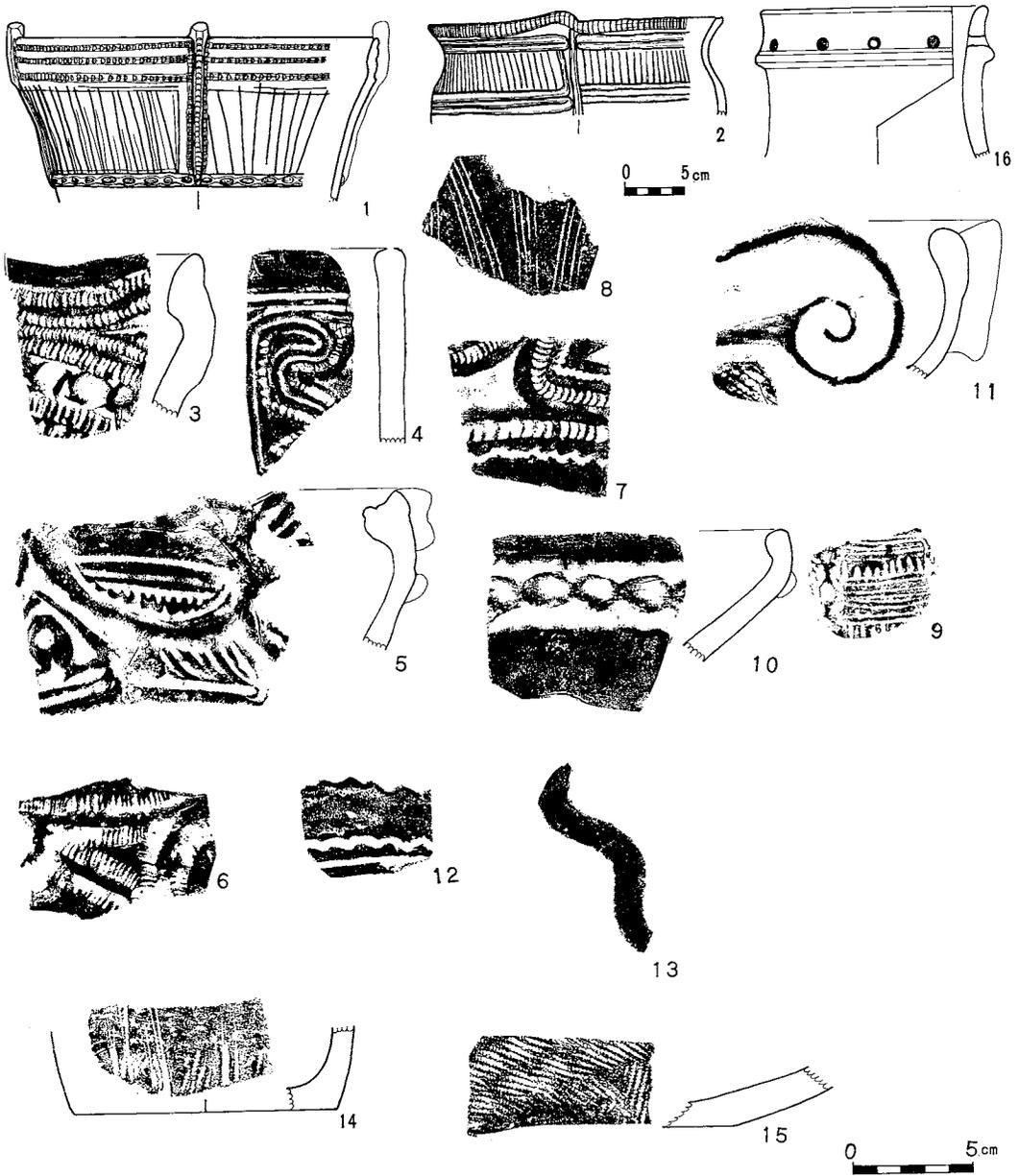
第98图 北丘B遺跡1号住居址出土土器 (1:3, 1~3 1:6)



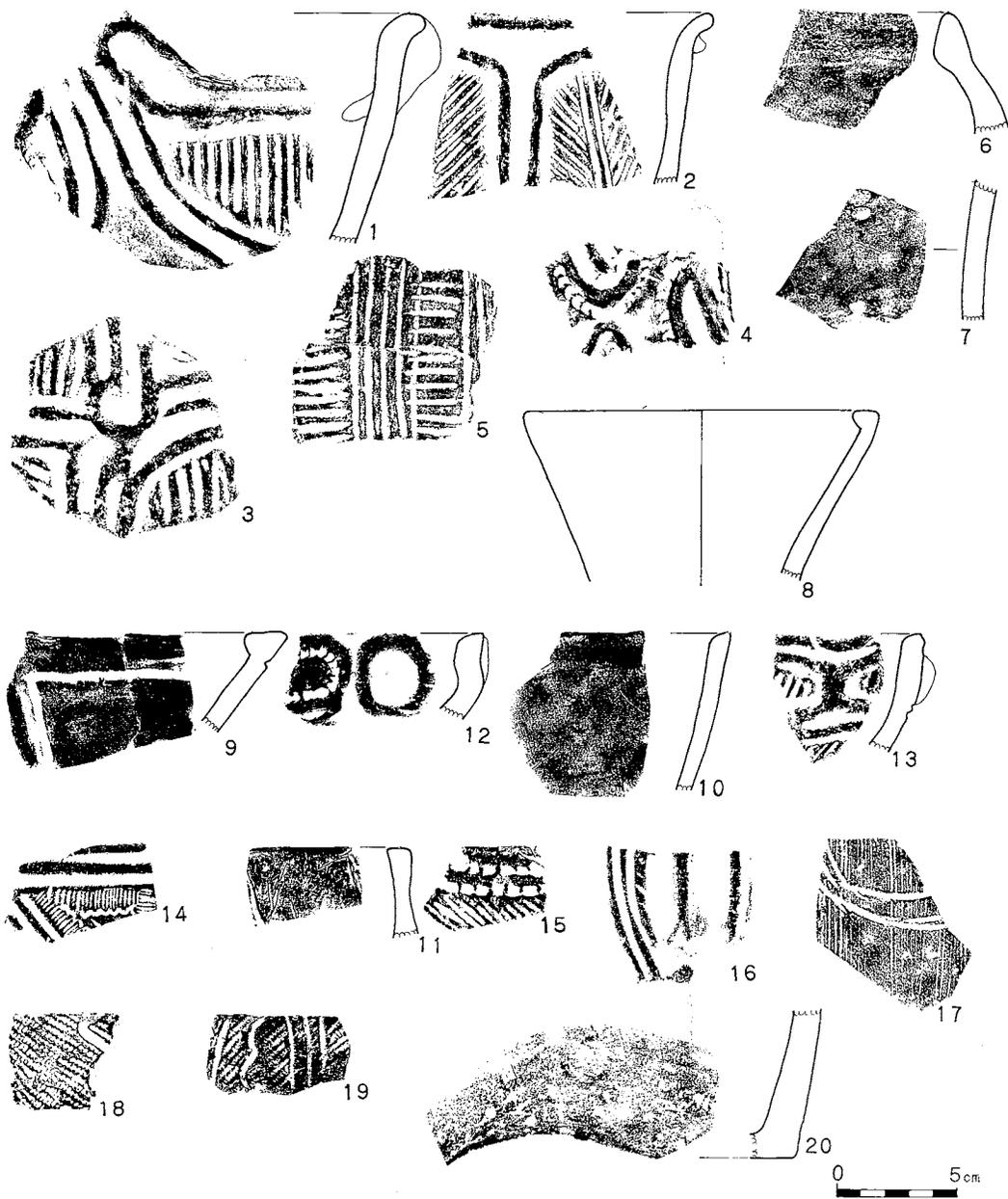
第99图 北丘B遺跡出土土器(1:3)(1~10 2号住居址, 11~17 3号住居址)



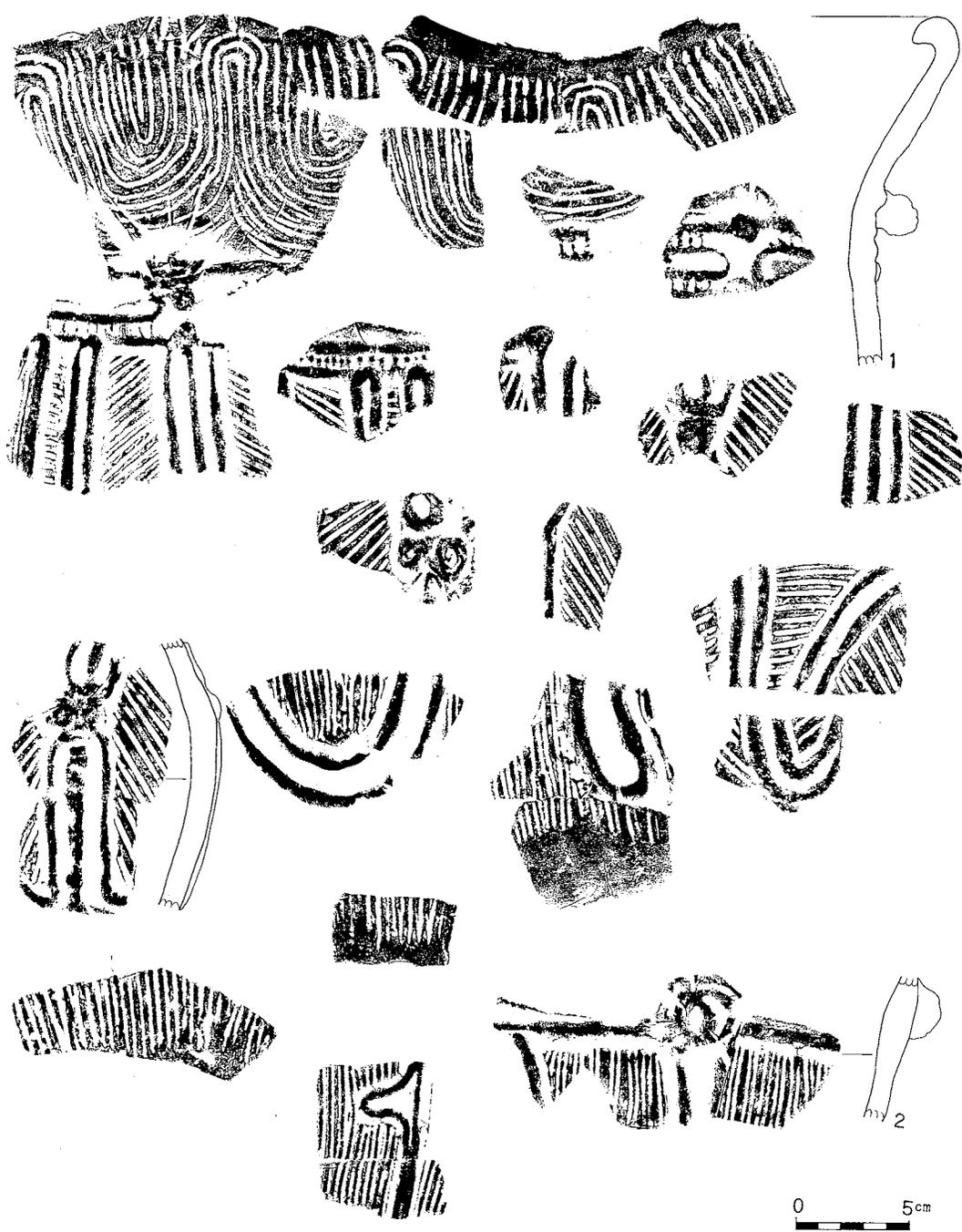
第100图 北丘B遺跡3号住居址出土土器 (1:3, 1 1:6)



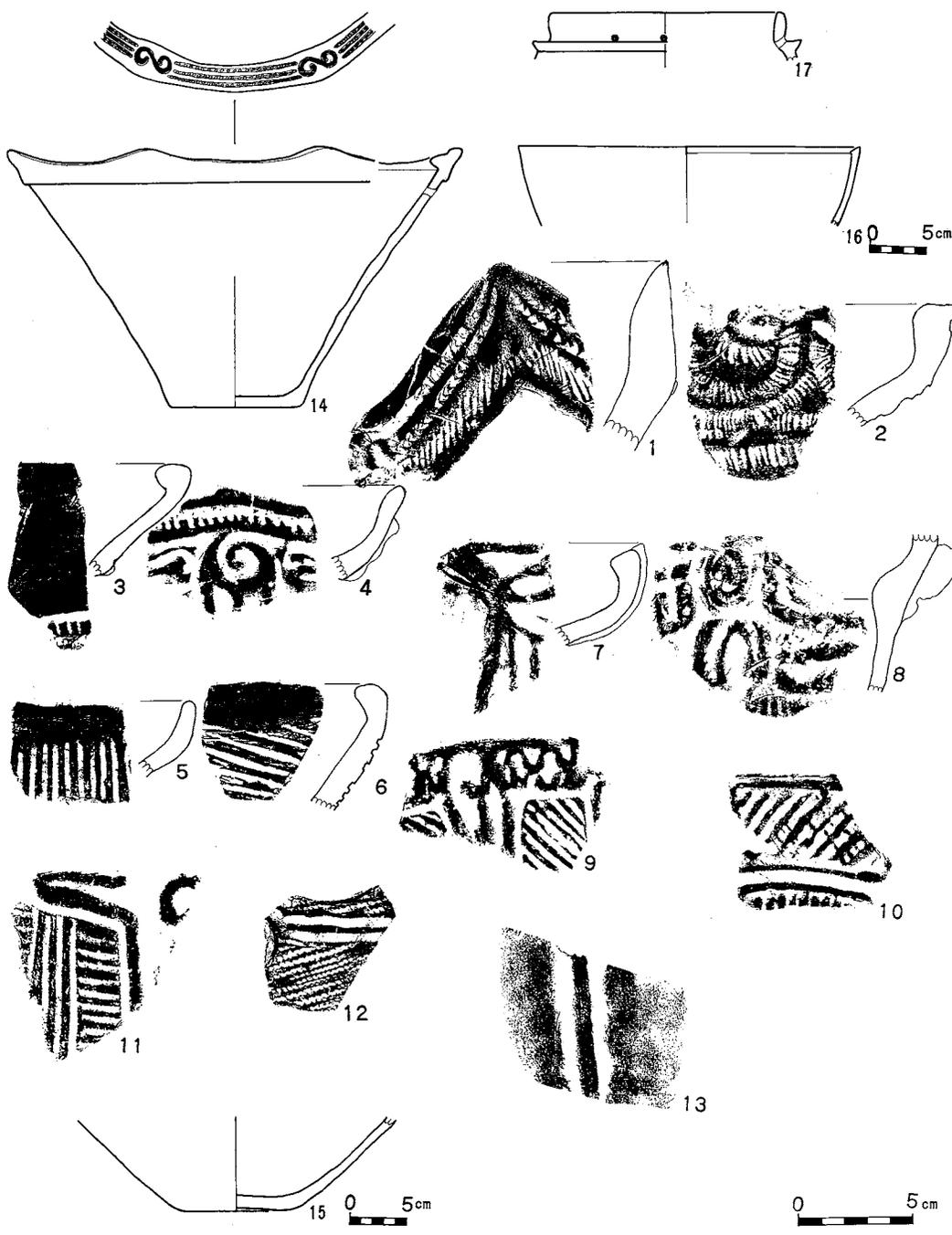
第101图 北丘B遺跡4号住居址出土土器 (1:3, 1·2 1:6)



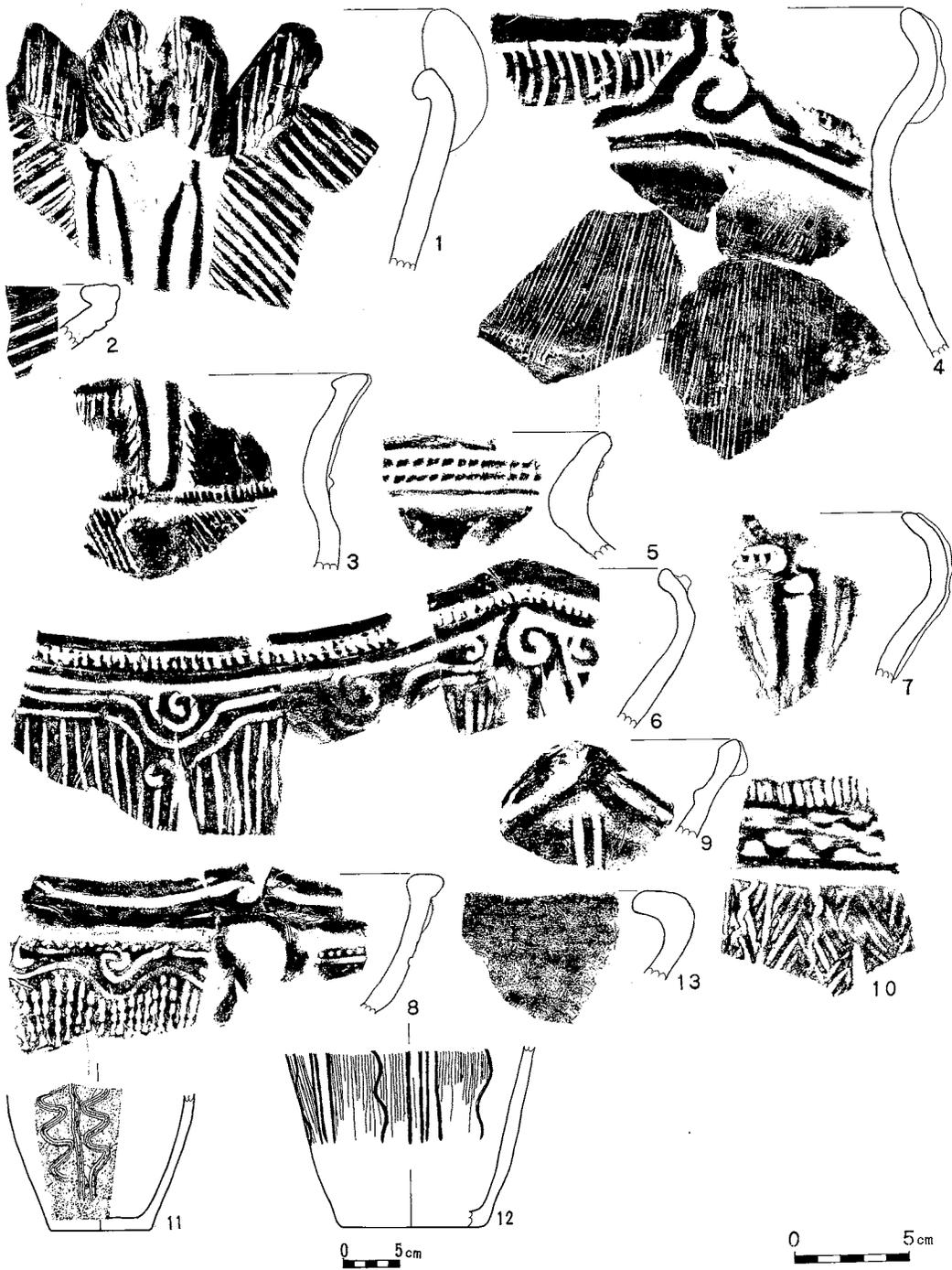
第102図 北丘B遺跡出土土器(1:3) (1~8 5号住居址, 9~20 6号住居址)



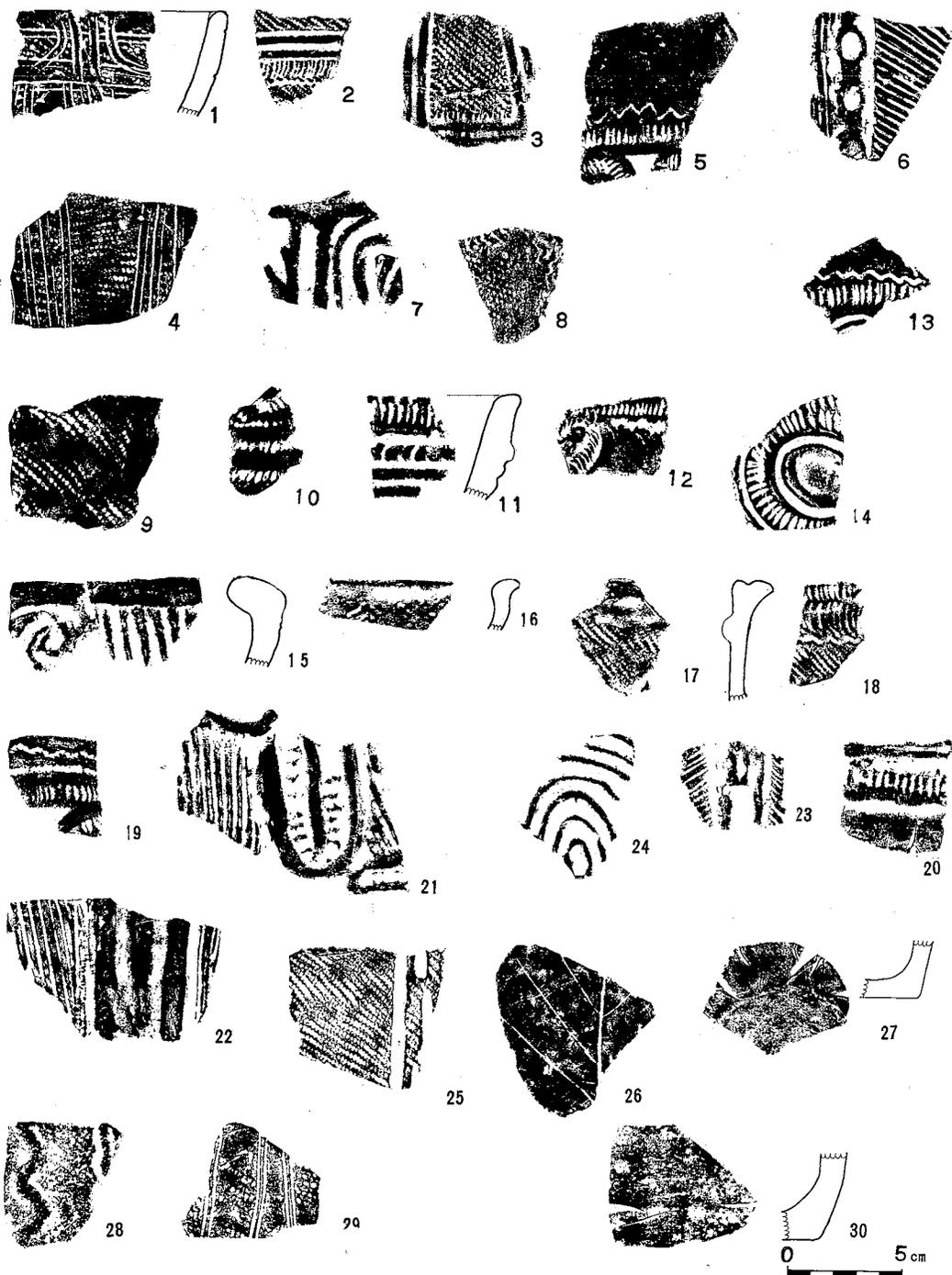
第103图 北丘B遺跡6号住居址出土土器 (1:3)



第104图 北丘B遺跡7号住居址出土土器 (1:3, 14~17 1:6)

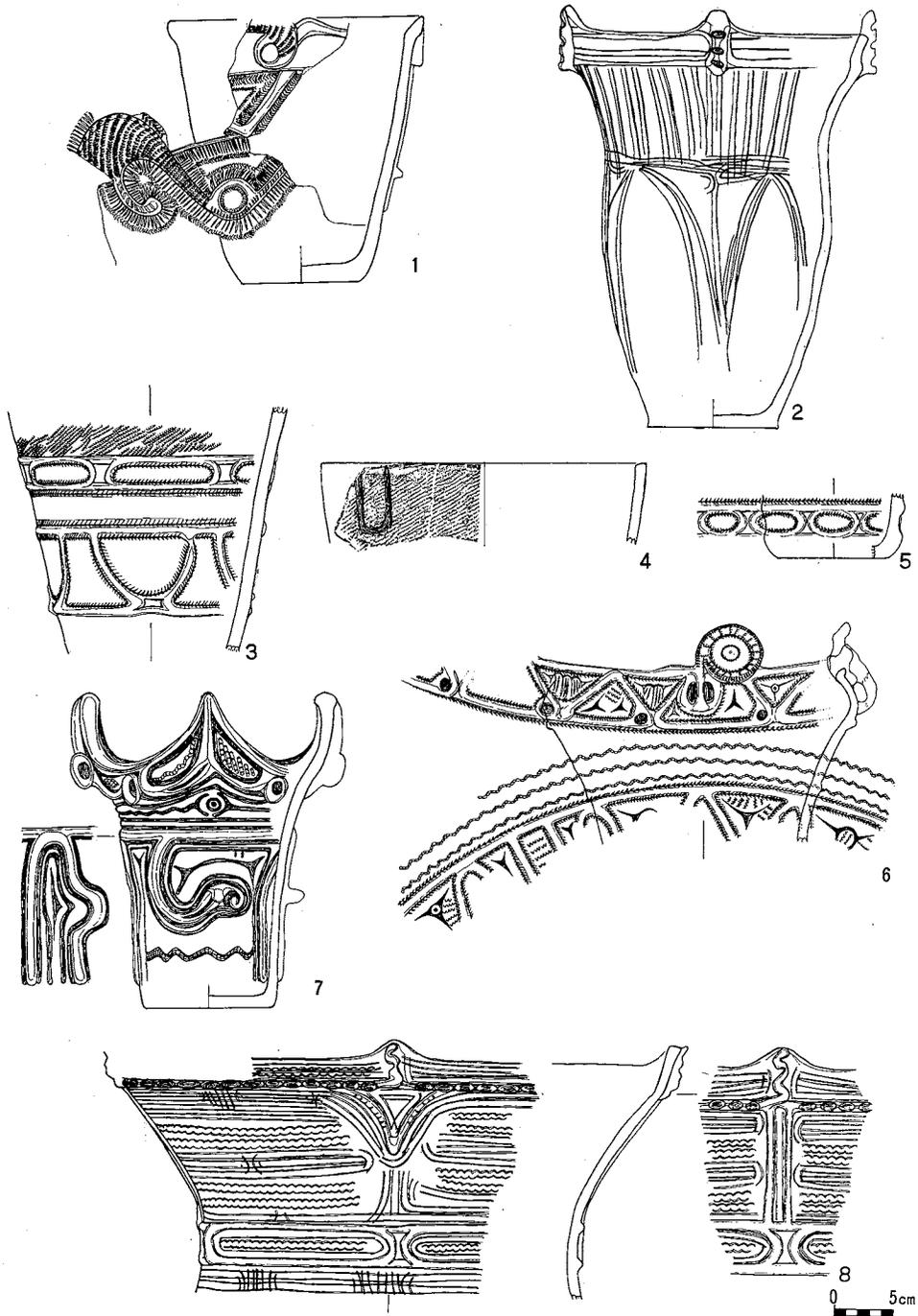


第105图 北丘B 遗迹8号住居址出土土器 (1:3, 11~12 1:6)

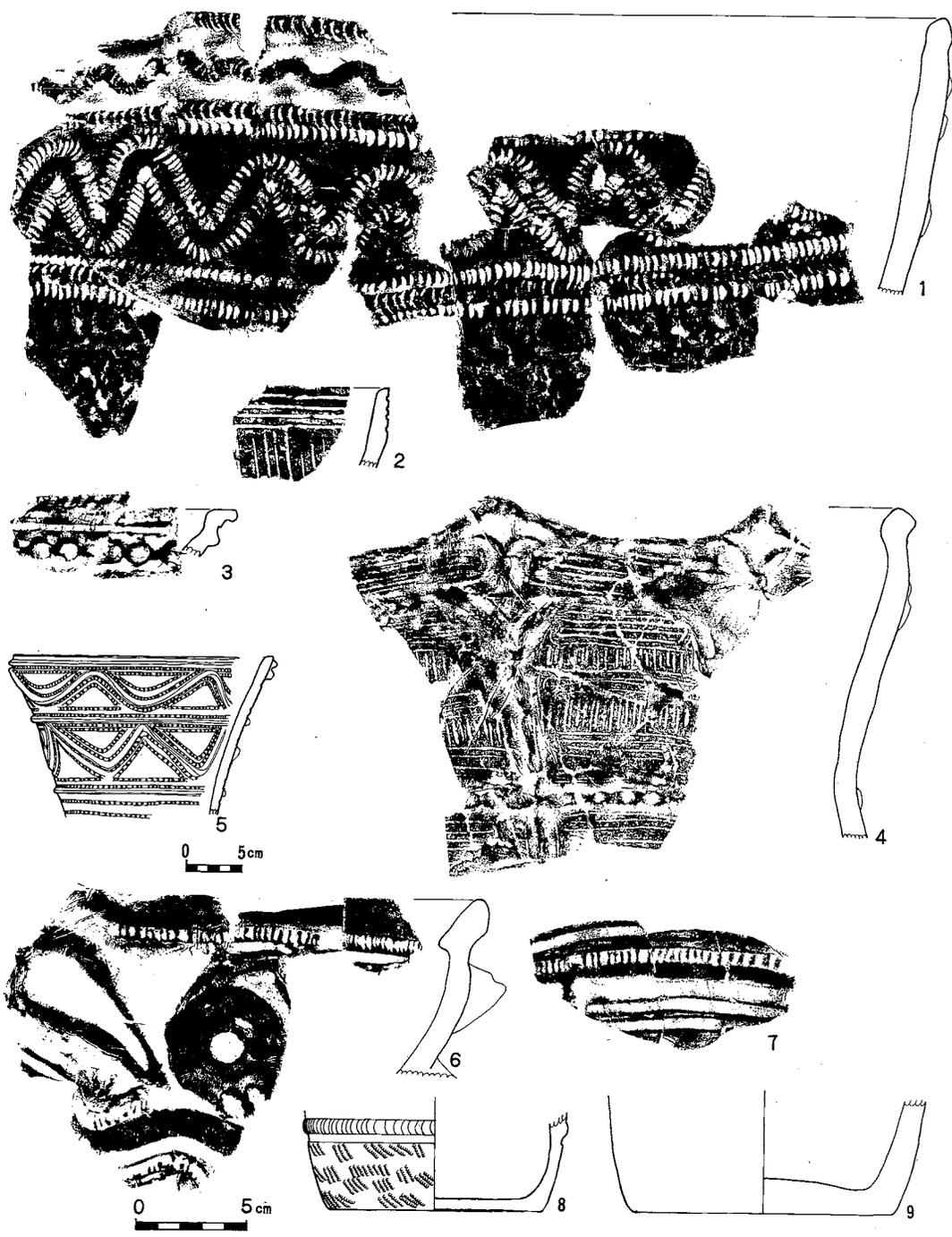


第106图 北丘B 遗迹出土土器 (1 : 3)

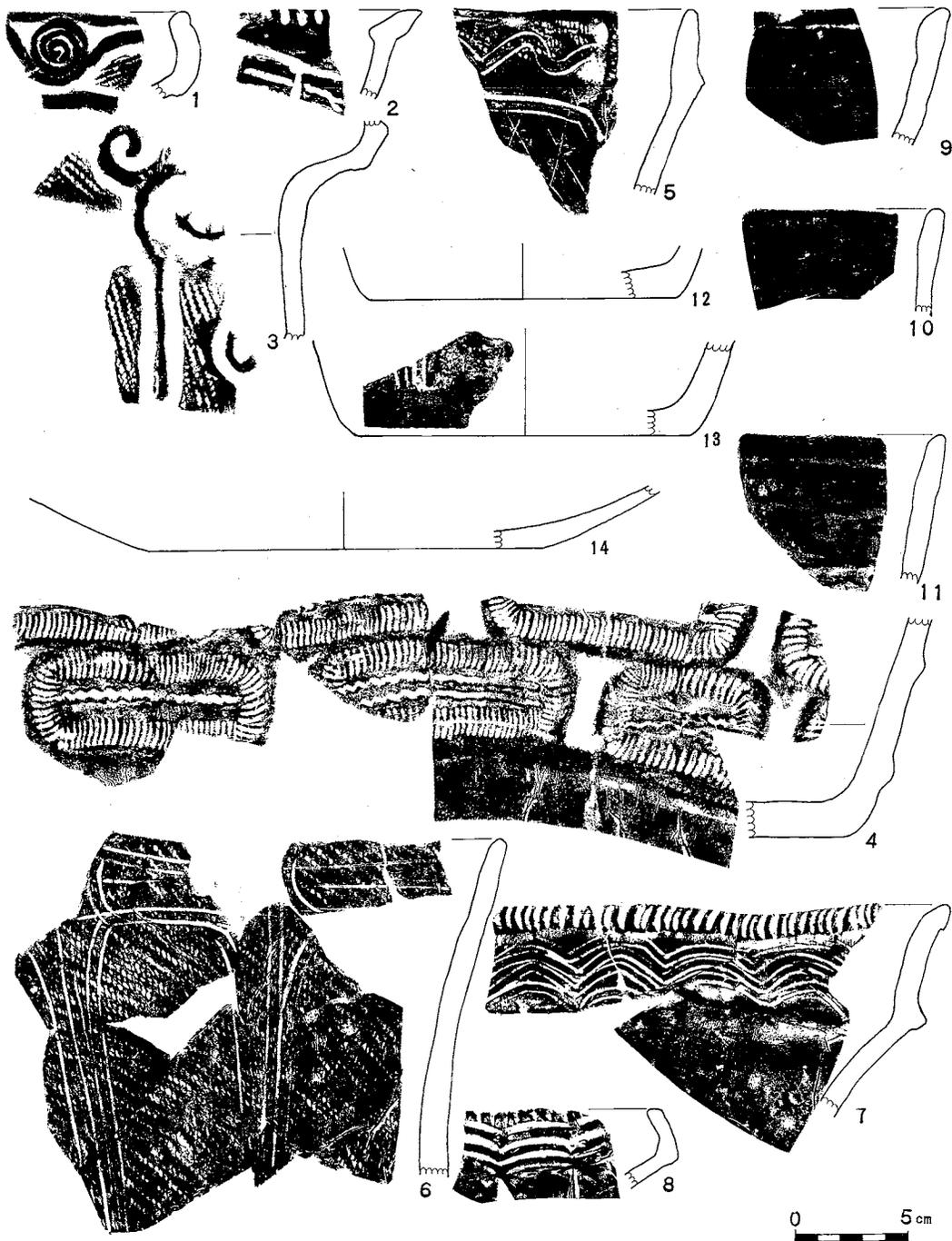
(1~7 9号住居址, 8 1号土城, 9·10 4号土城, 11~14 5号土城, 15~27 3号整穴, 28·29 4号整穴, 30 5号整穴)



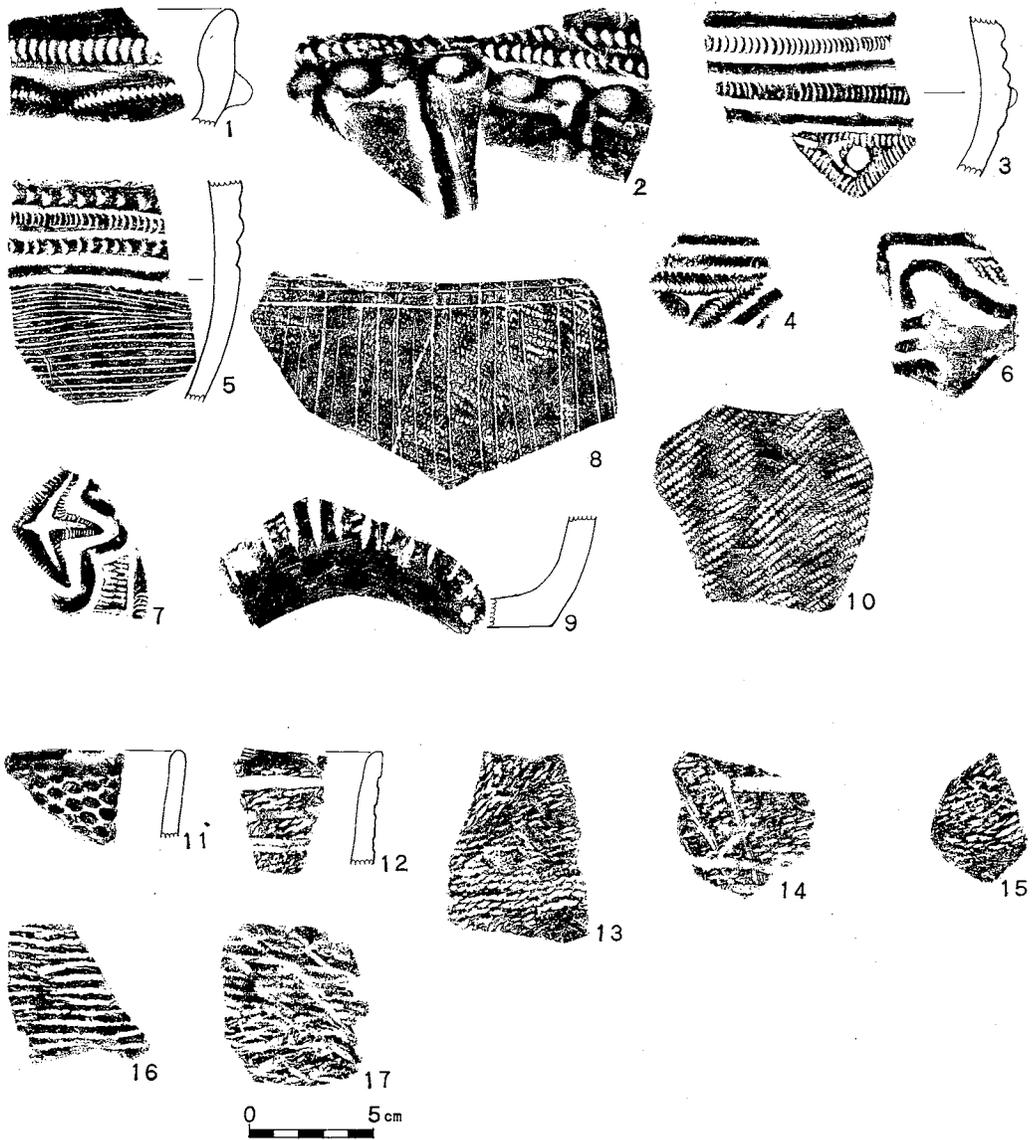
第107图 北丘B遺跡土壙群出土土器 (1:6) (1~6 第1土壙群, 7·8 第2土壙群)



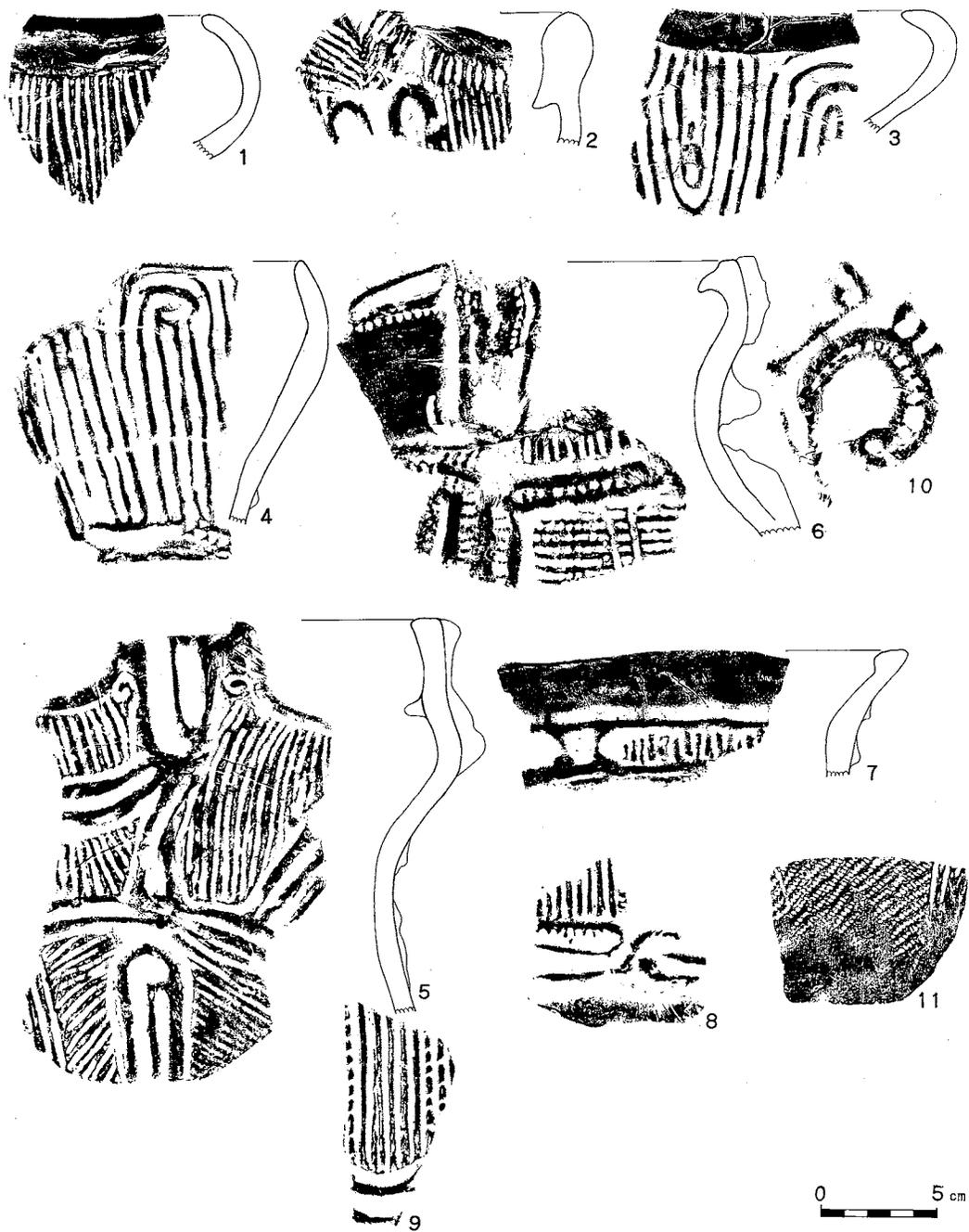
第108图 北丘B遺跡1号土城群出土土器 (1 : 3, 5 1 : 6)



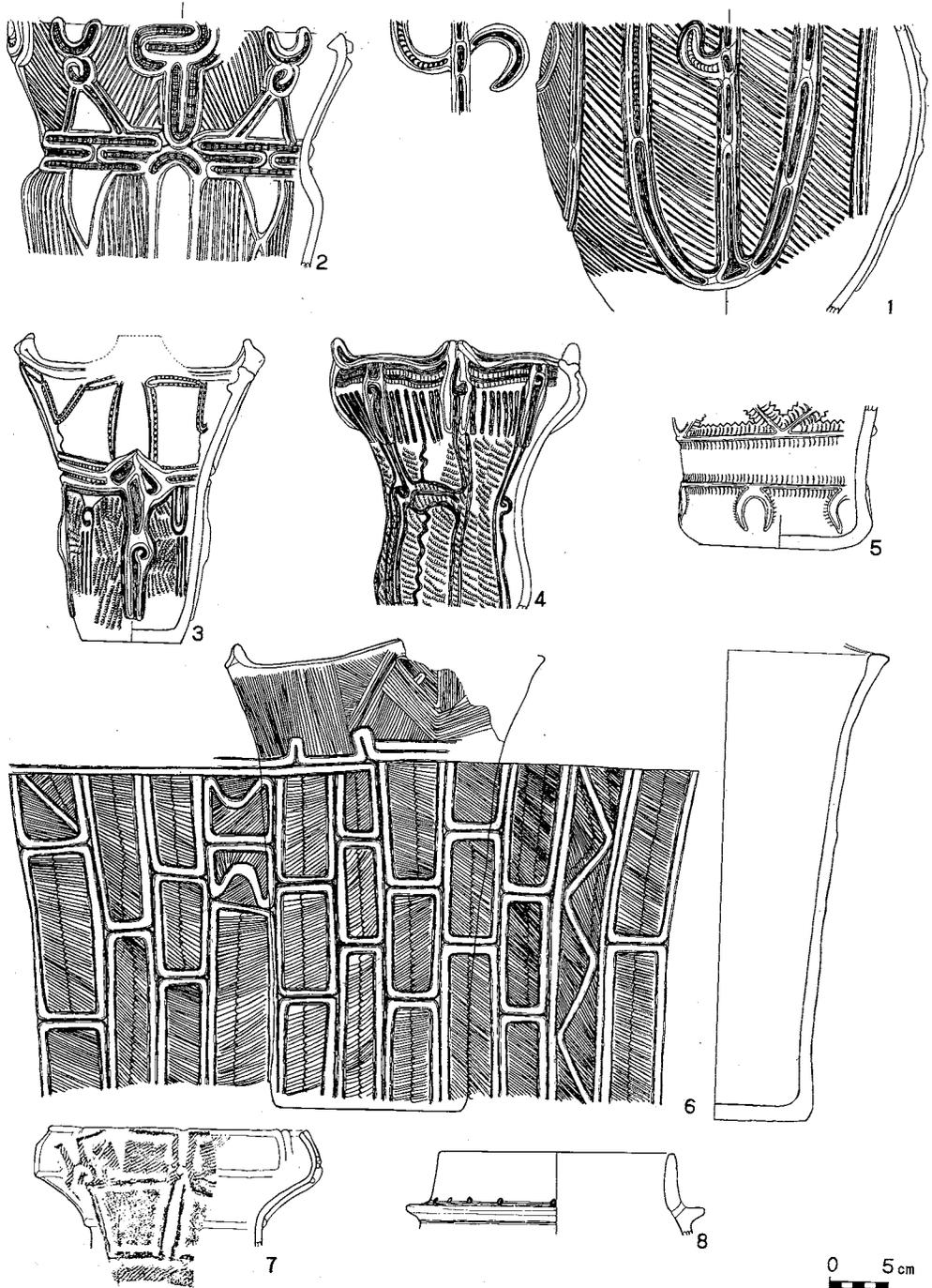
第109图 北丘B遺跡出土土器 (1:3) (1~11 第1土壌群, 12~14 第2土壌群)



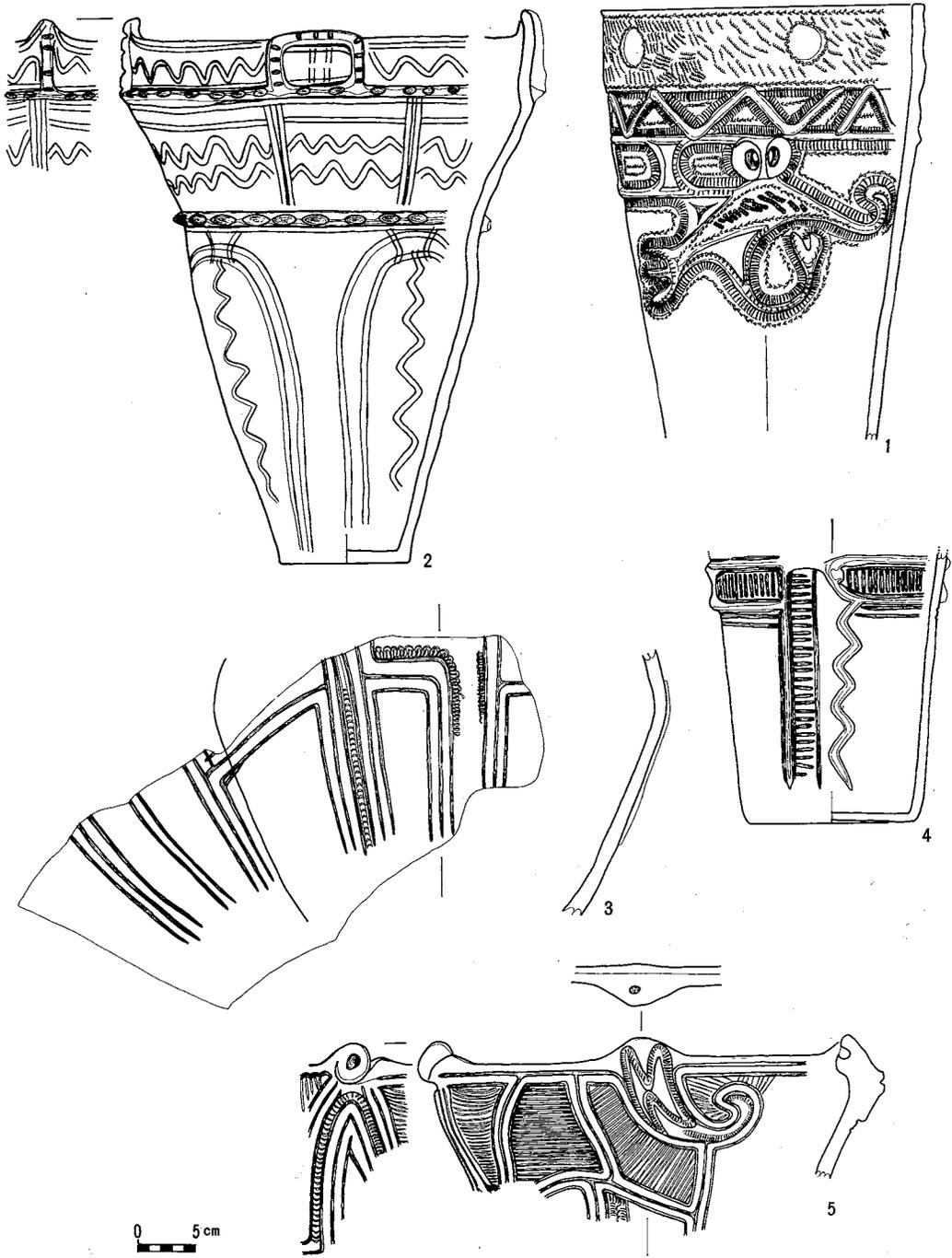
第110図 北丘B遺跡2号土坑群・その他出土土器



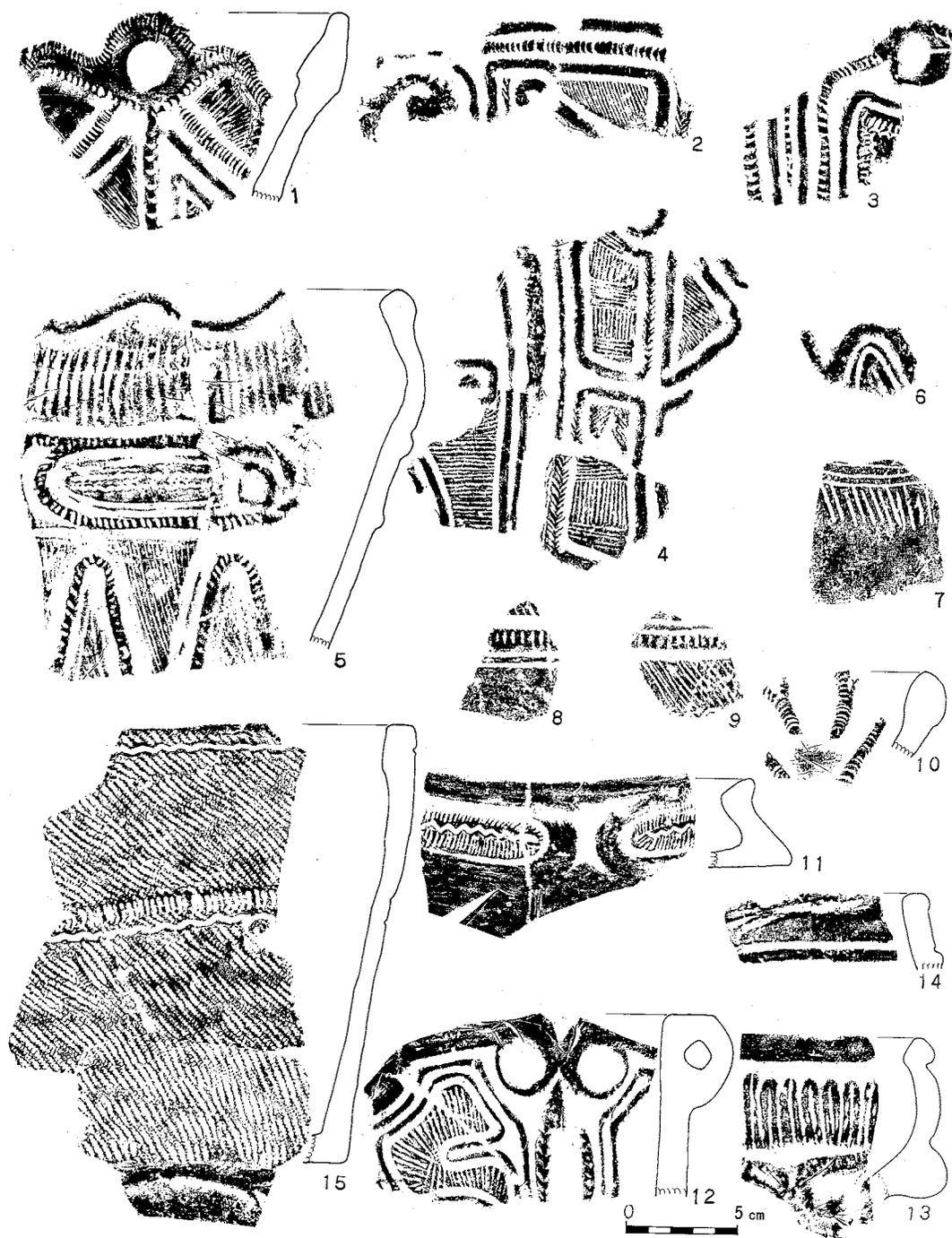
第111图 北丘B遺跡3号竖穴出土土器 (1:3)



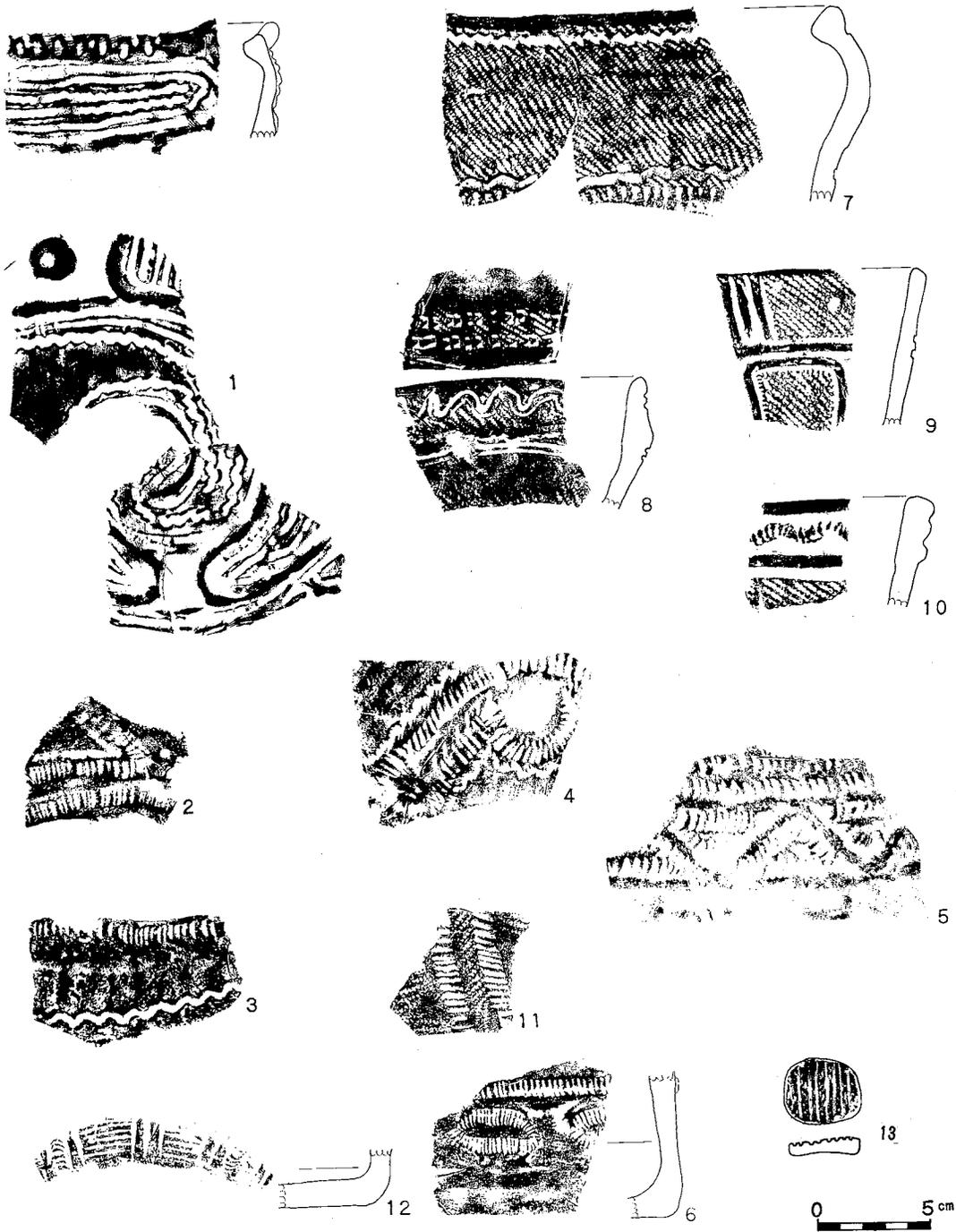
第112図 北丘B遺跡出土土器（1：6）（1～4 3号竪穴、5 4号竪穴、6 第2土城群、7・8 その他）



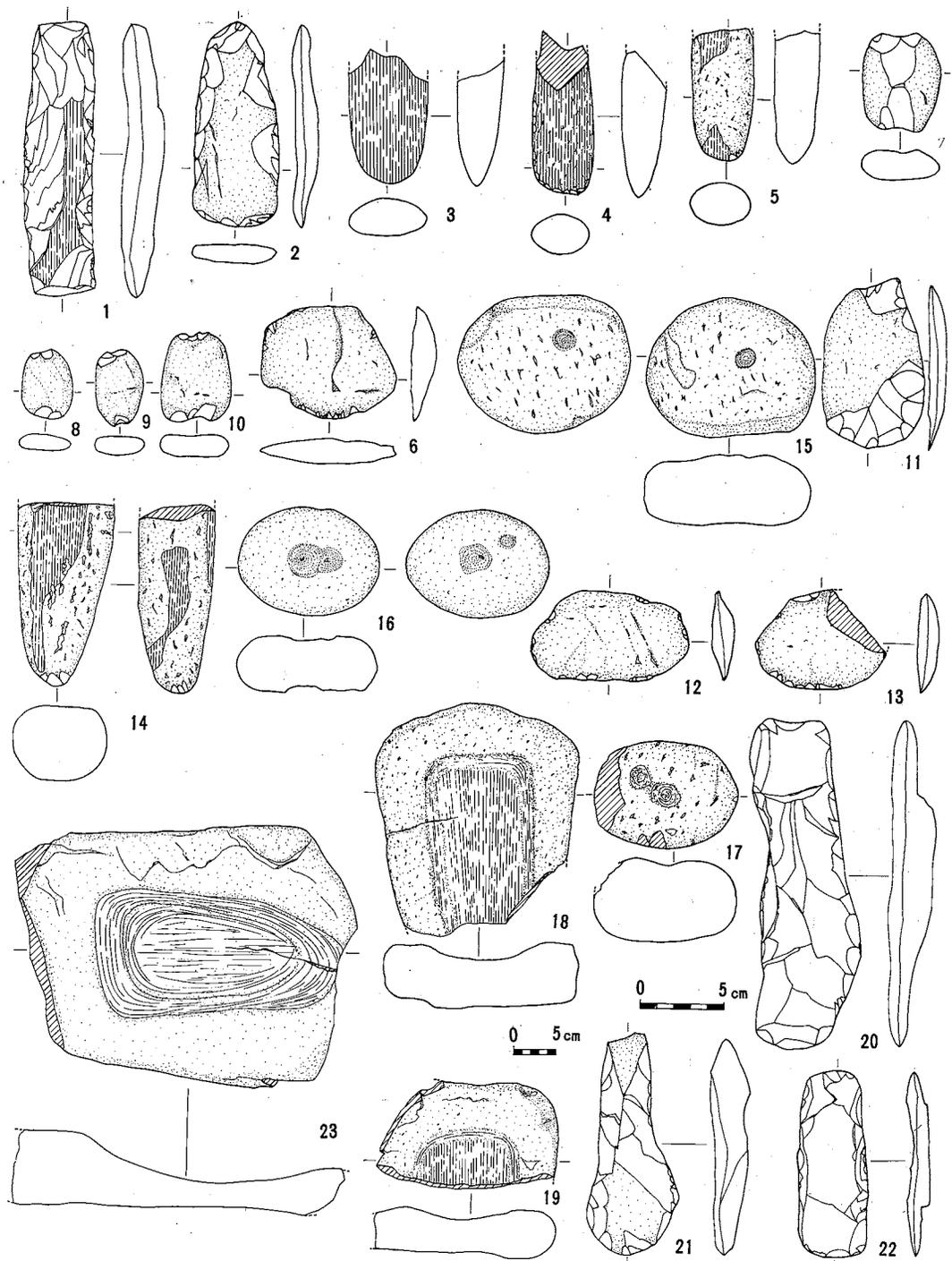
第113图 北丘B遺跡2号土壙群出土土器(1:6)



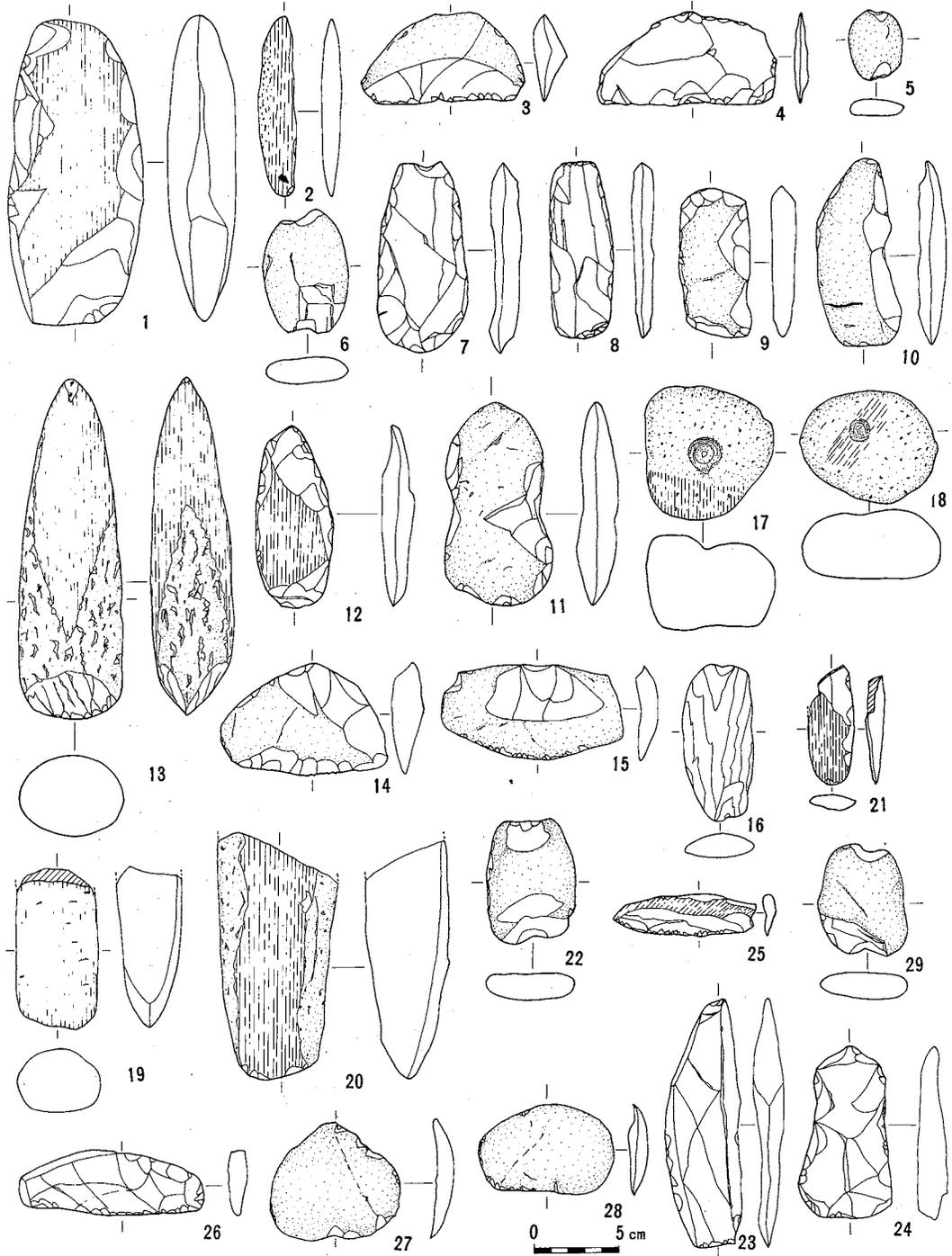
第114图 北丘B 遗迹2号土城群出土土器 (1:3)



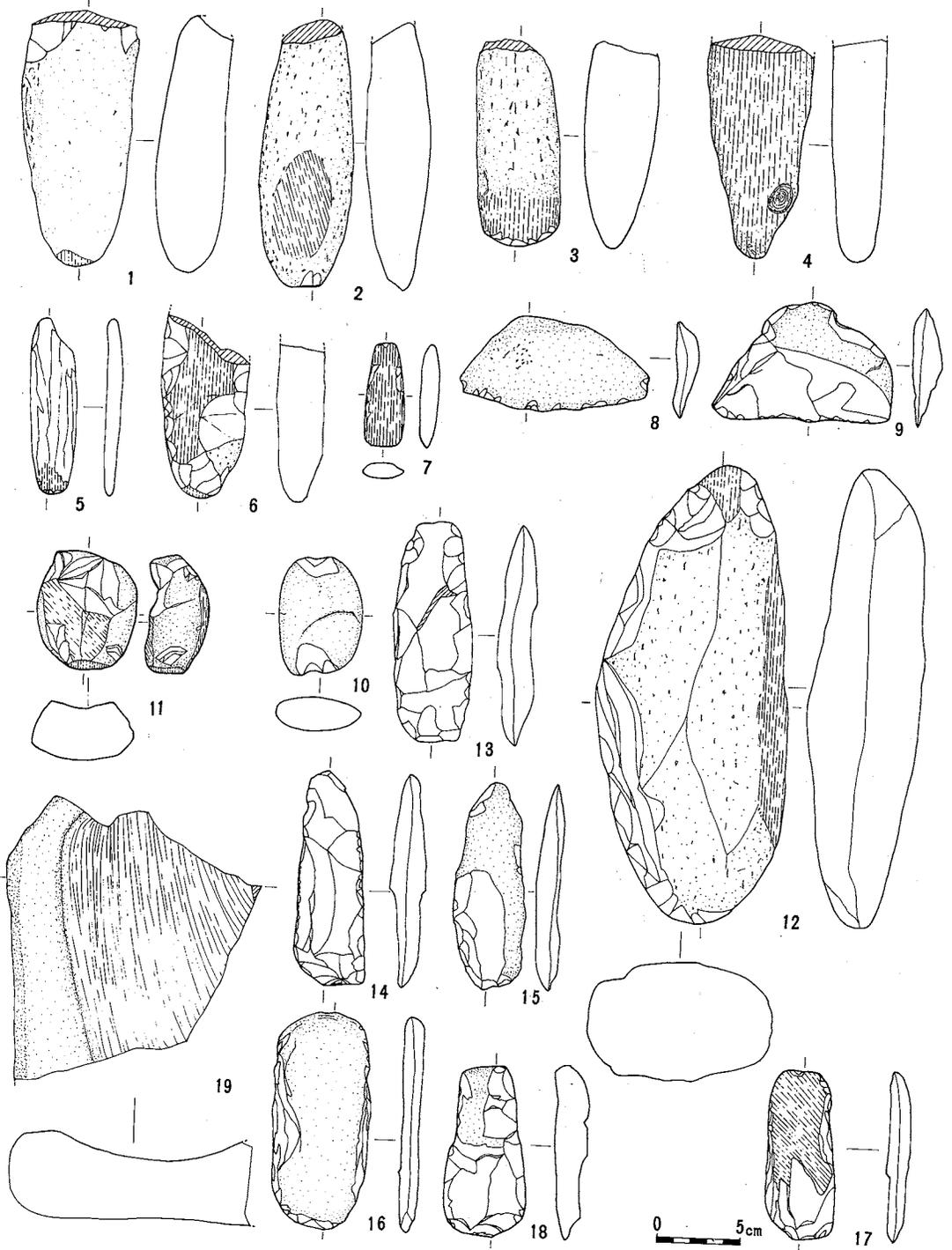
第115図 北丘B 遺跡その他出土土器 (1:3)



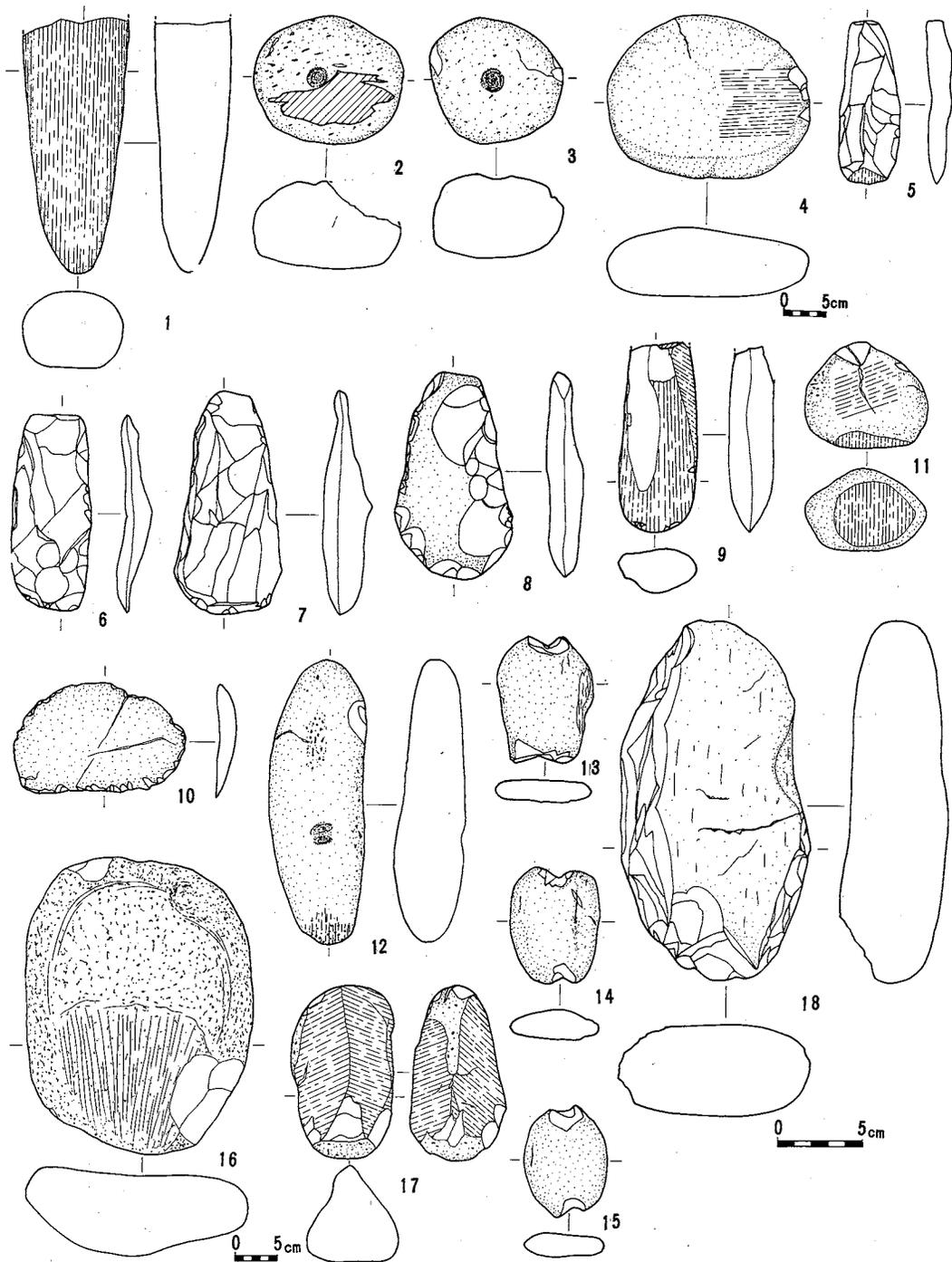
第116图 北丘B 遗迹1~3号住居址·2号土坑群出土石器(1:4 18·19·23 1:8)
 (1~10、1号住居址 11~19、2号住居址 20~22、3号住居址 23、2号土坑群)



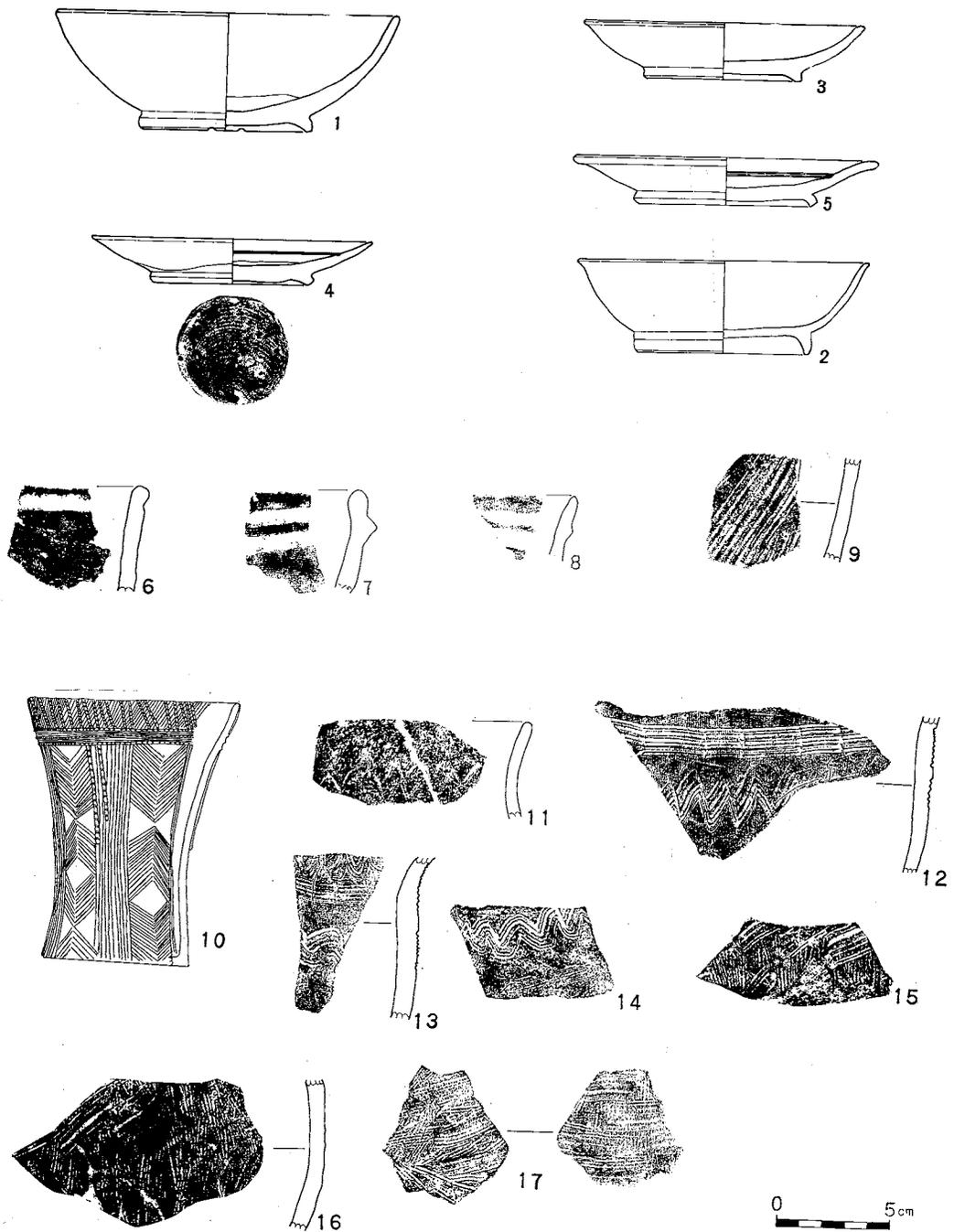
第117图 北丘B遺跡3~7号住居址出土石器(1:4)
 (1~6、3号住居址 7、4号住居址 8~18、5号住居址 19~22、6号住居址 23~29、7号住居址)



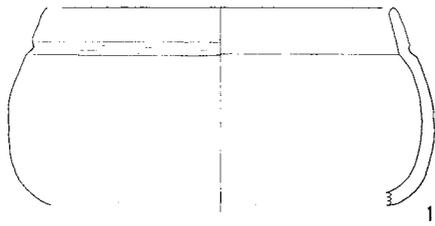
第118图 北丘B遺跡出土石器(1:4)
 (1~7、7号住居址 8·9、8号住居址 10~12、9号住居址 13~16·18·19、
 1号土城群 17、4号土城)



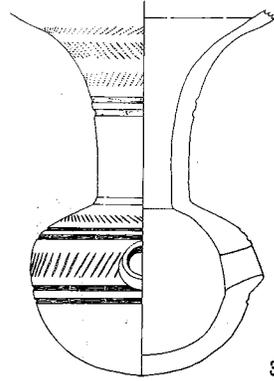
第119図 北丘B遺跡出土石器 (1:4 4・16 1:8)
 (1~3、4号土壙 4、12号土壙 5~18、その他)



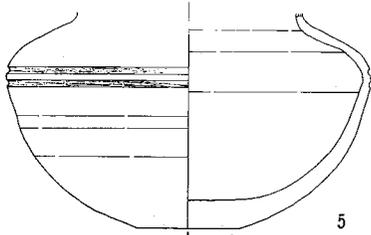
第120図 名廻南遺跡(1~10) 山の根遺跡(11~17) 出土土器(1:3, 10 1:6) (1~5 1号住居址、6~10) その他、11~17 その他)



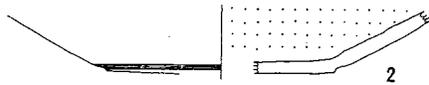
1



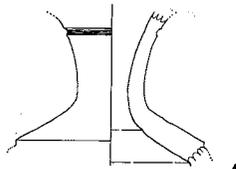
3



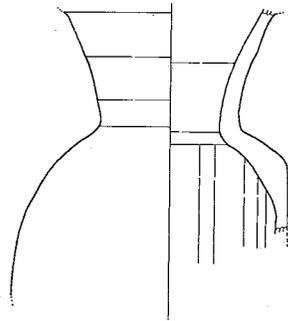
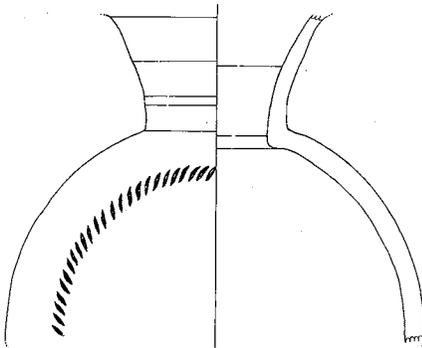
5



2



4

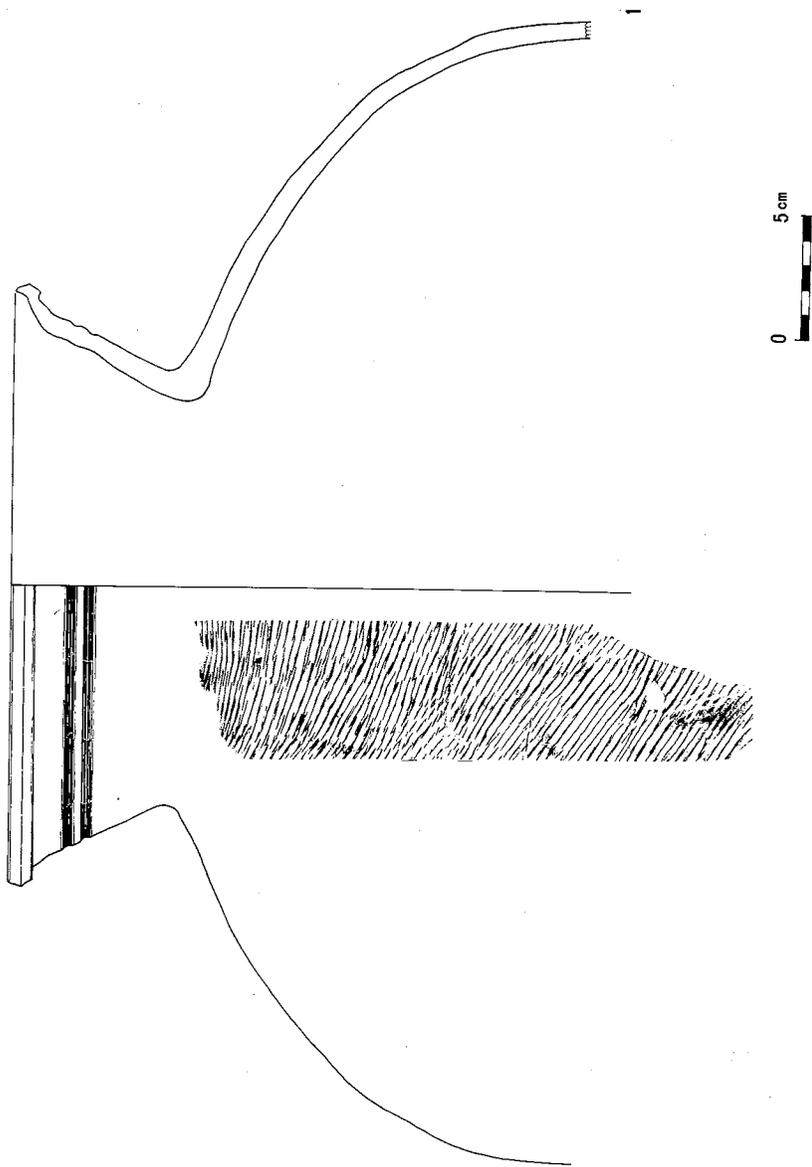


6

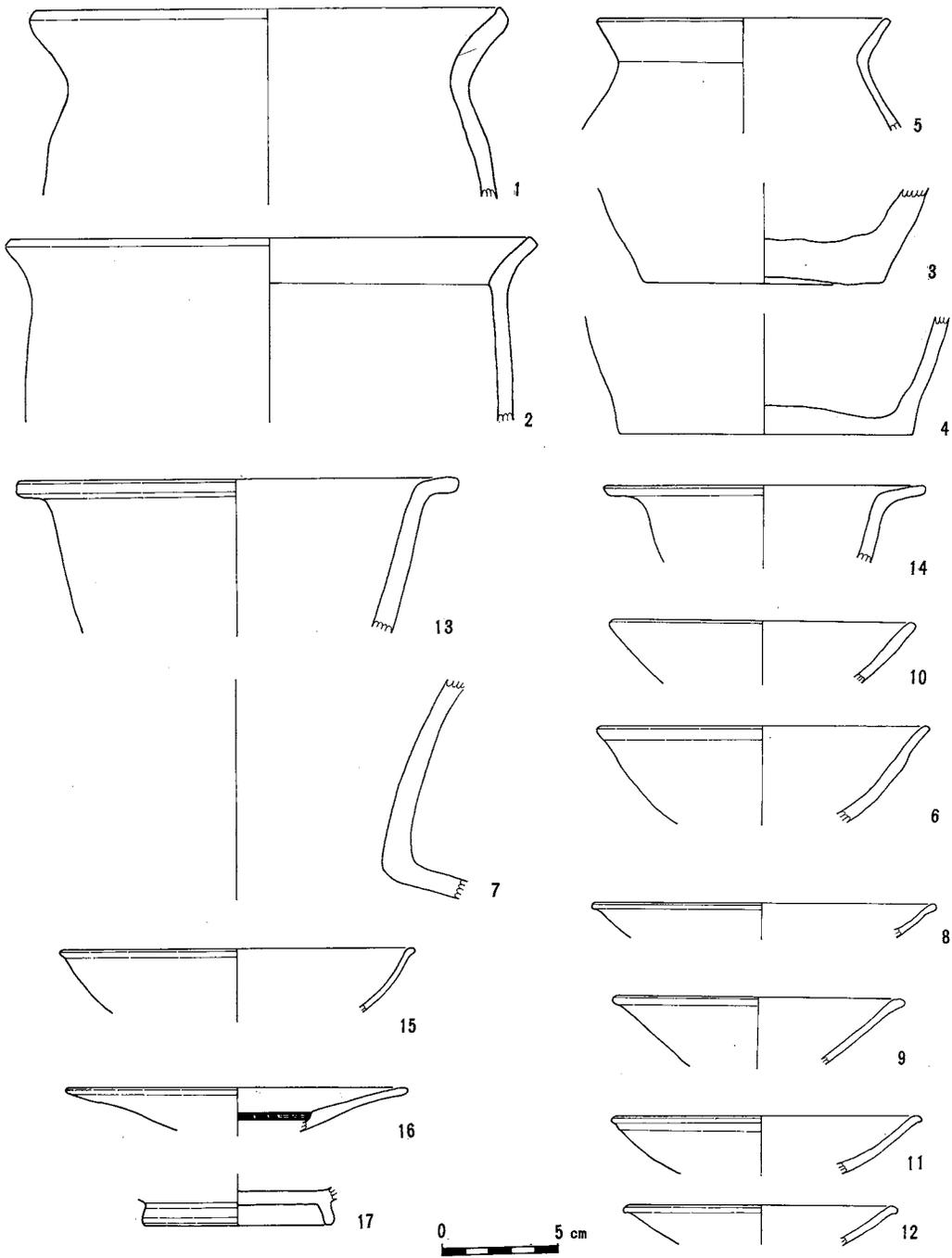


5

第121图 名廻東古墳出土土器 (1 : 3)



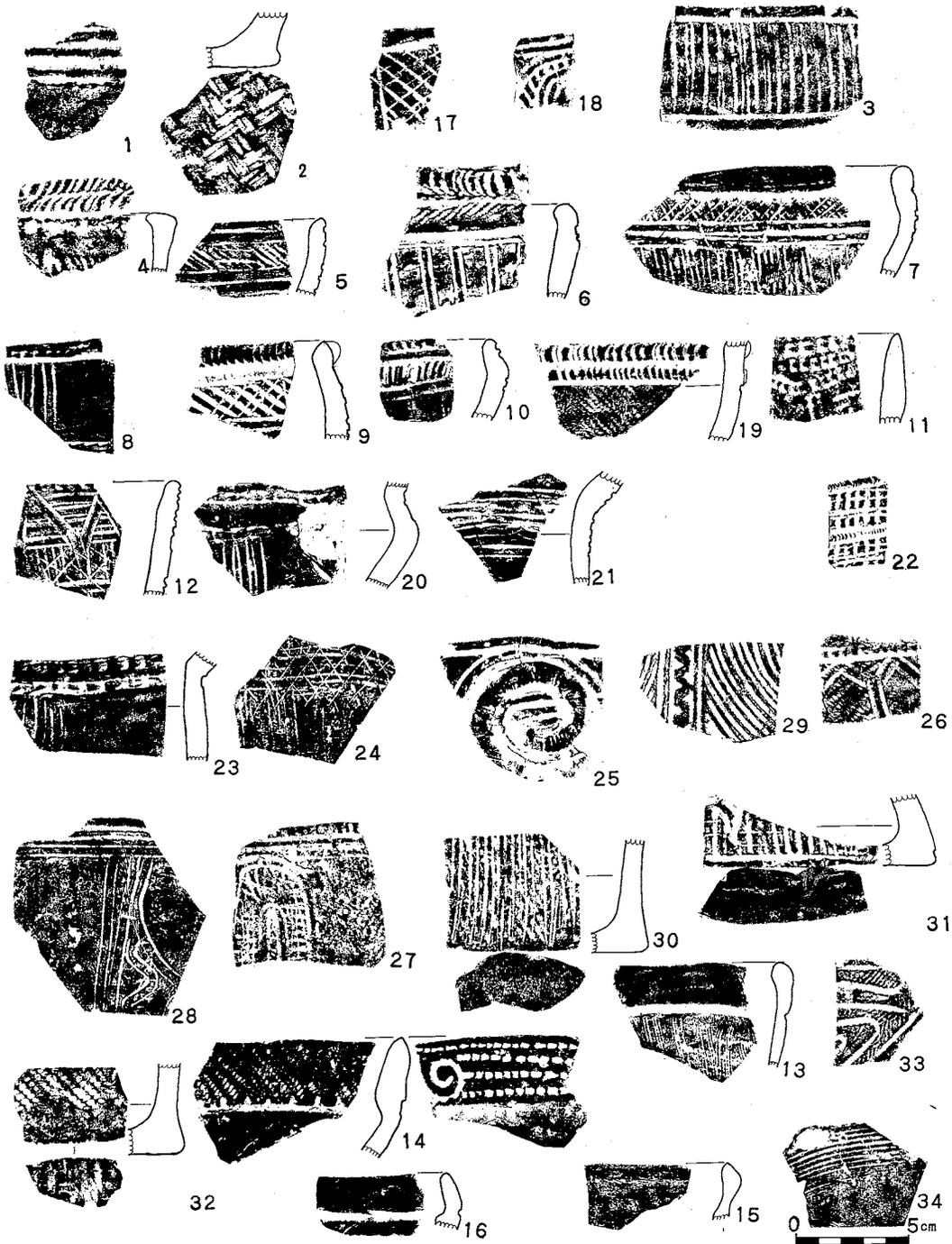
第122图 名廻東古墳出土土器 (1:6)



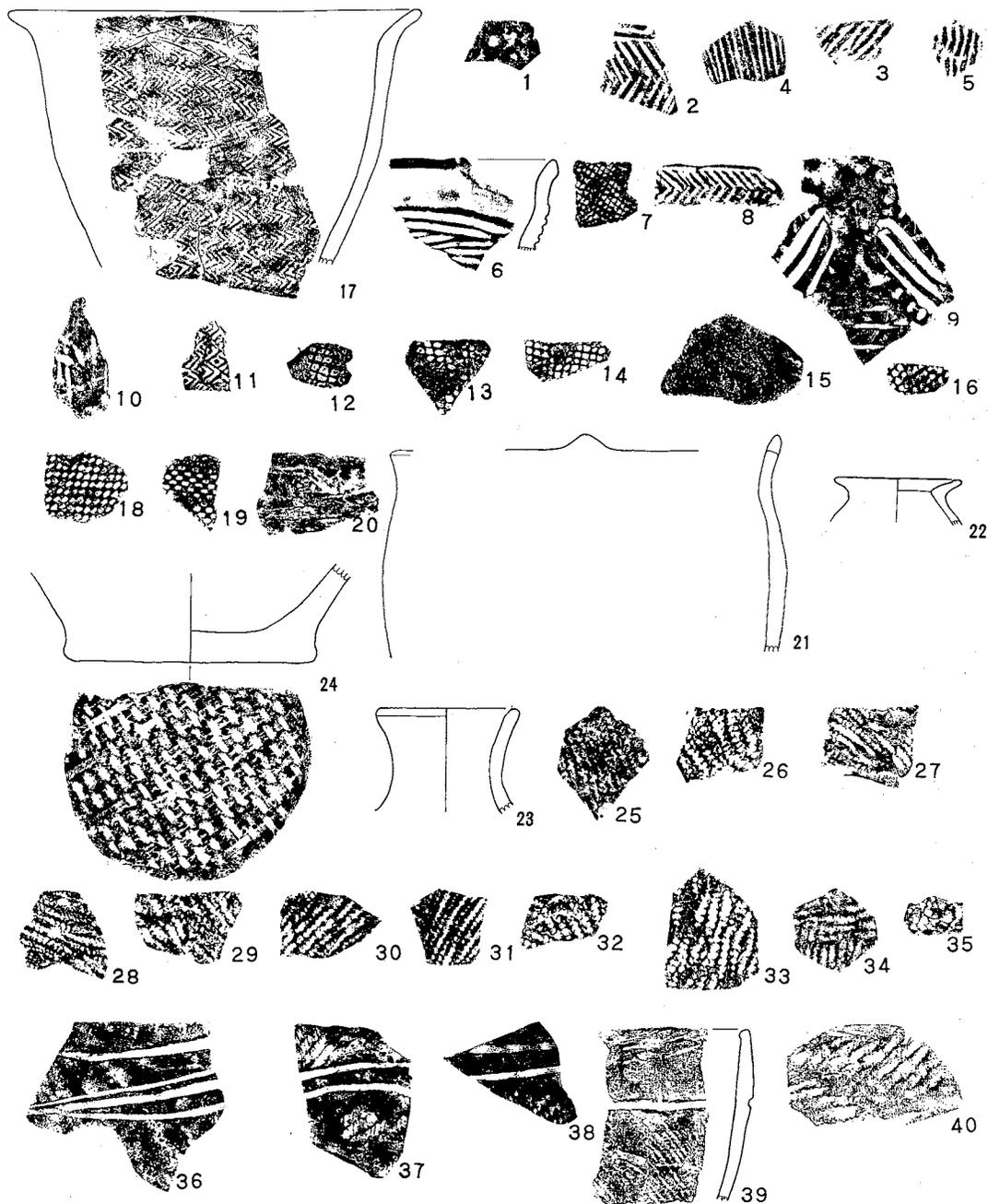
第123図 名廻遺跡出土土器 (1:3) (1~9 1号住居址, 10~12 溝状遺構, 13~17 その他)



第124図 白沢原遺跡その他 (11~11) 名廻遺跡その他 (12~20) 出土土器 (1 : 3)

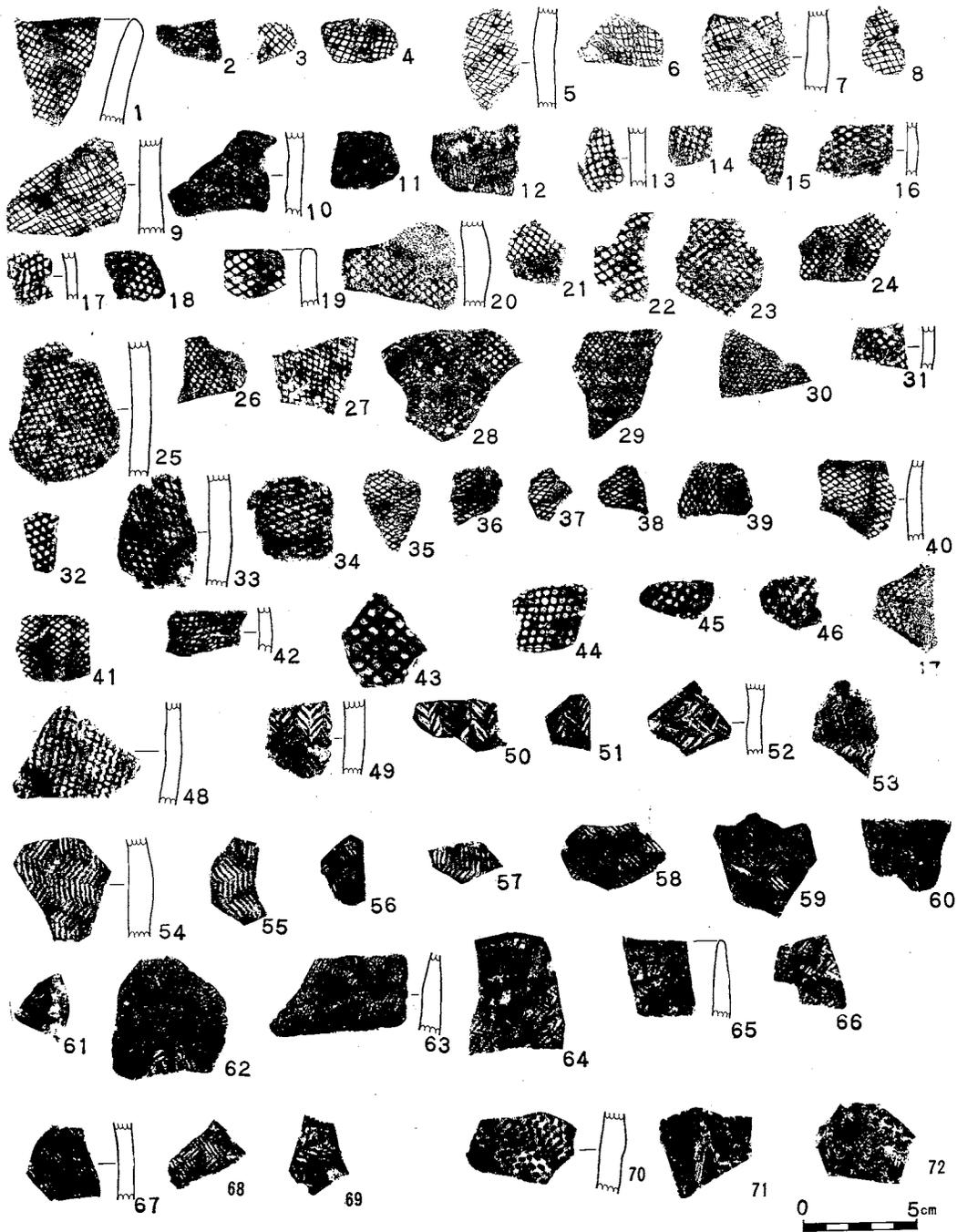


第125図 山寺垣外遺跡出土土器 (1:3) (2 溝址, 3 1号土塚, 1・4~34 その他)

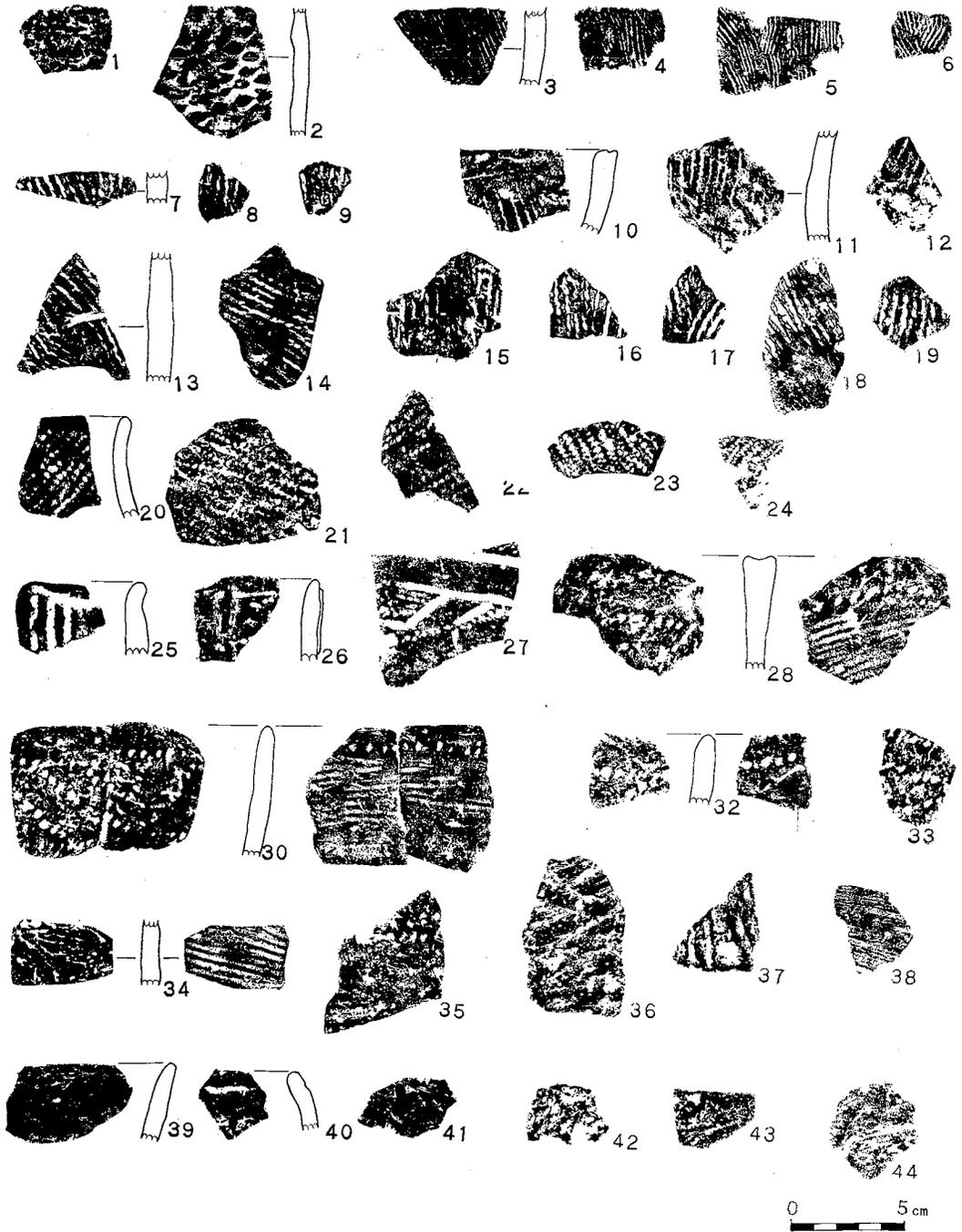


第126図 細ヶ谷B遺跡出土土器 (1:3)

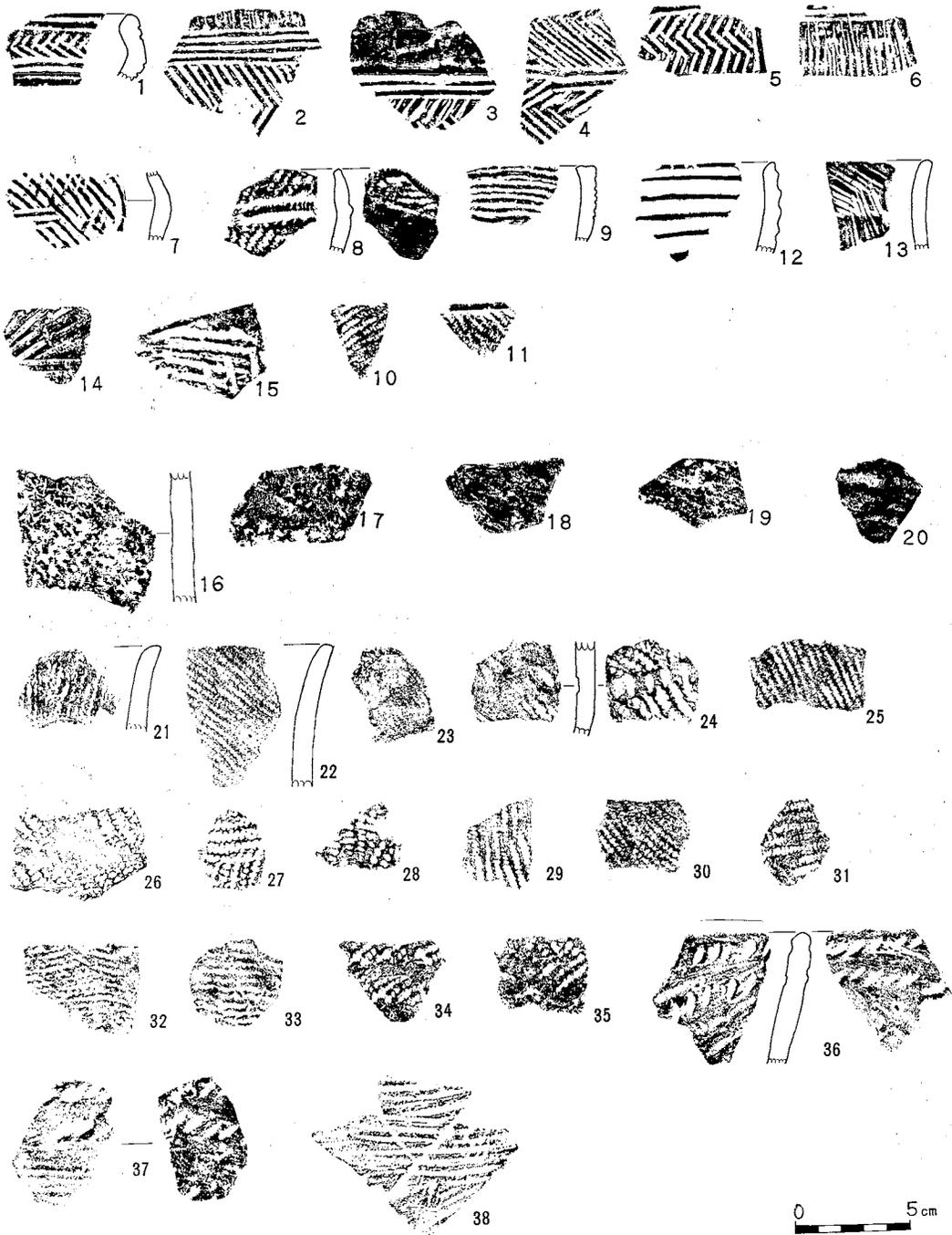
(1 2号土壙, 2~5 4号土壙, 6~9 6号土壙, 10~14 8号土壙, 15・16・18・19 9号土壙, 20 7号土壙, 17 15号土壙, 21~40 ビット



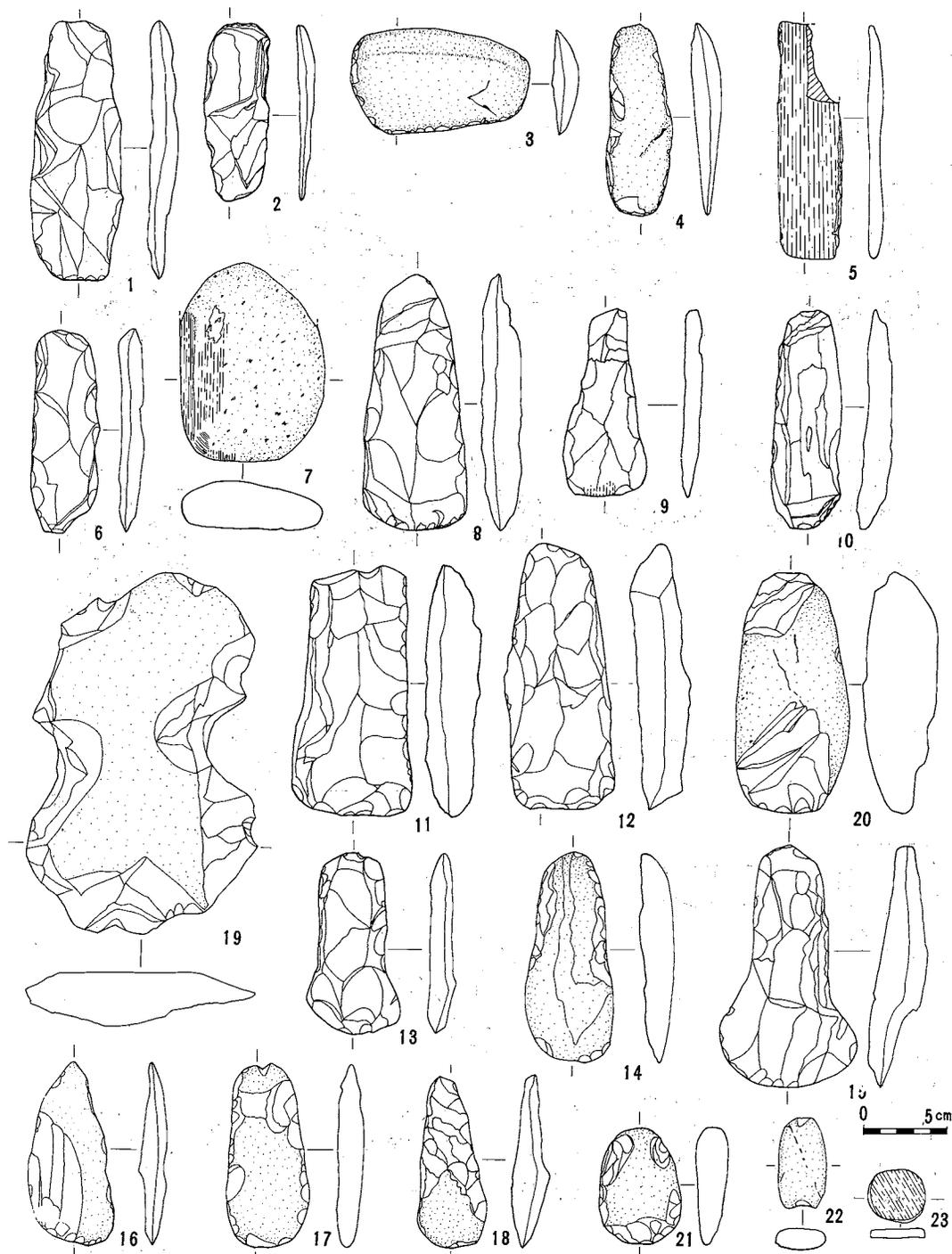
第127図 細ヶ谷B遺跡その他出土土器 (1:3)



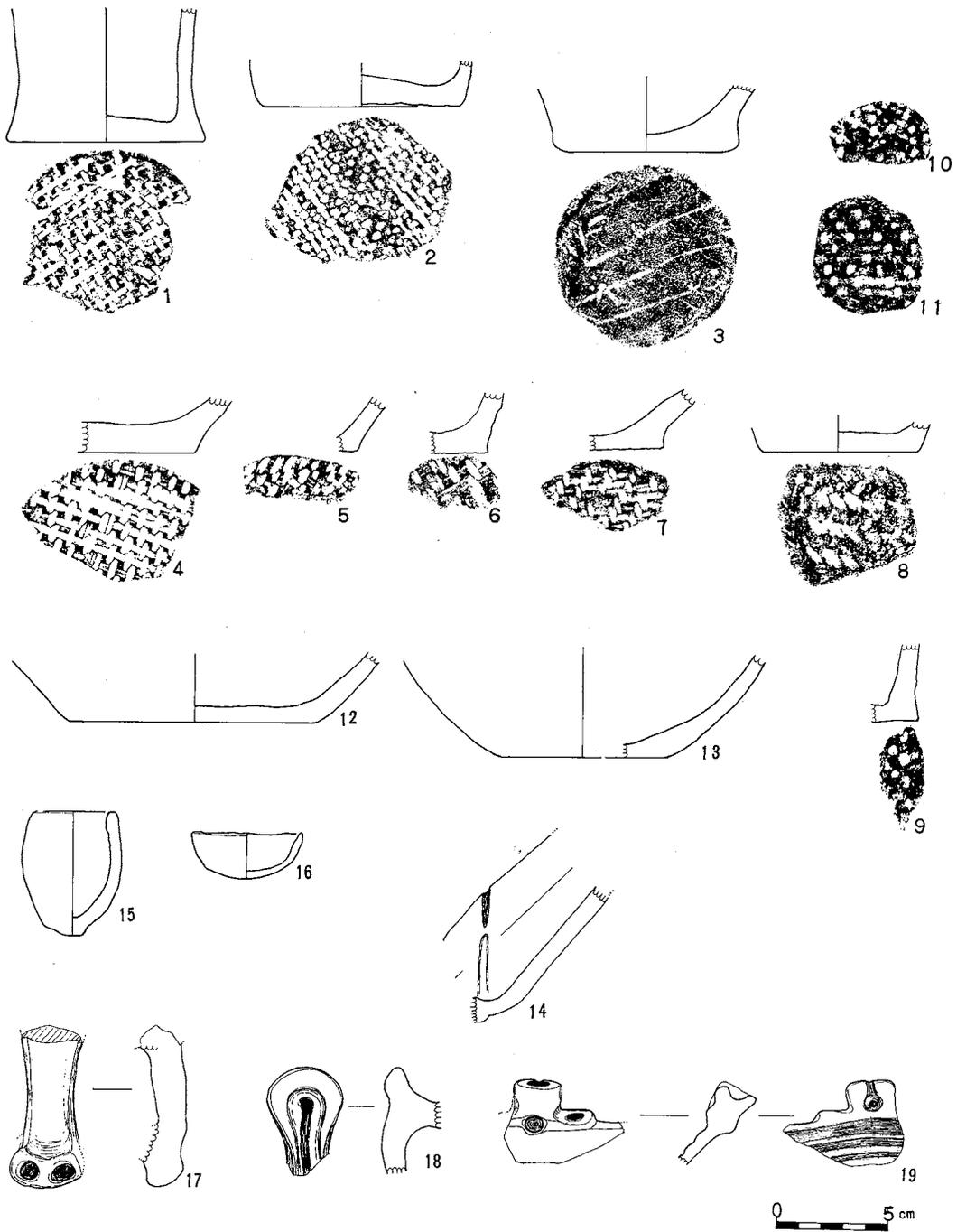
第128図 細ヶ谷B遺跡その他出土土器 (1:3)



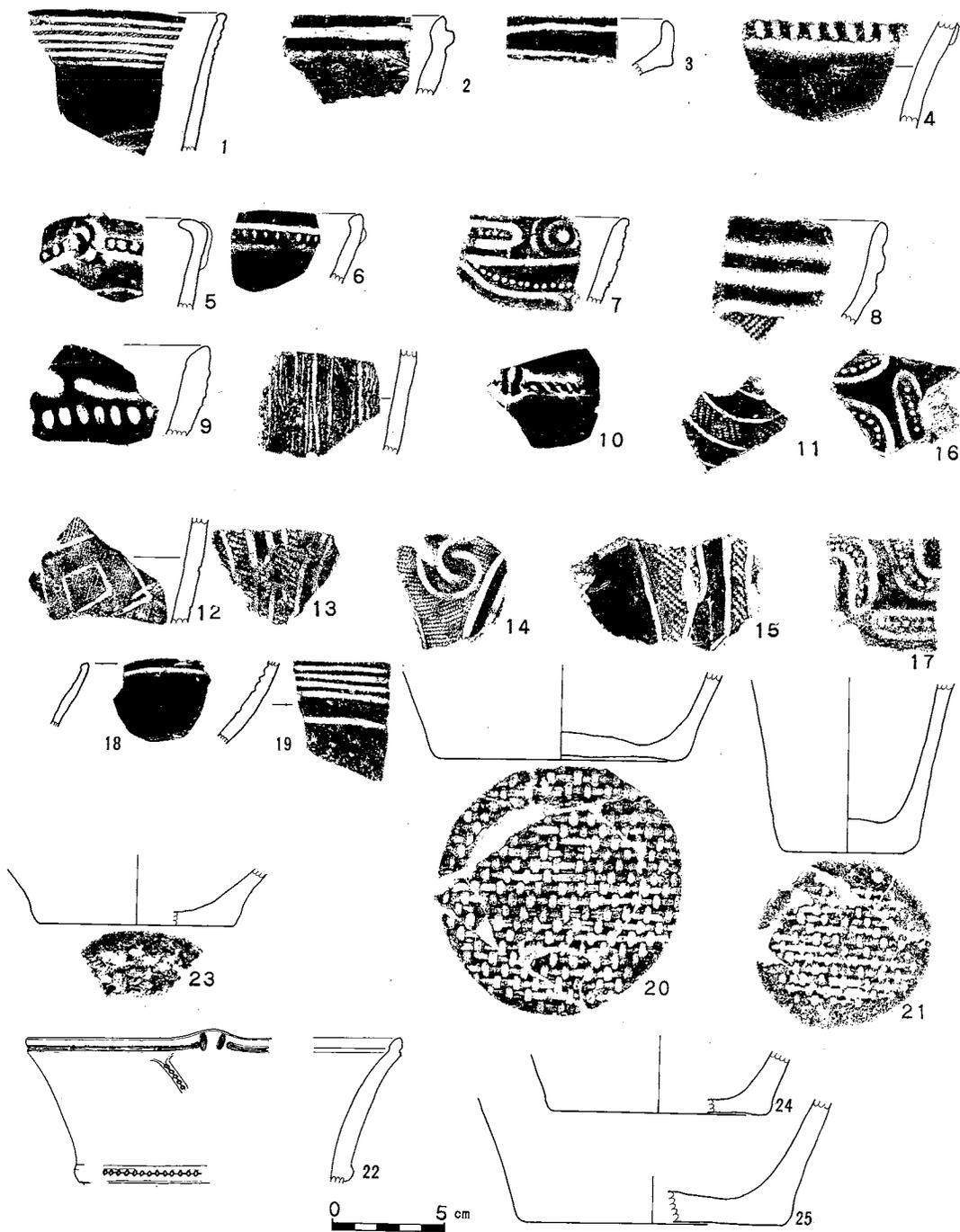
第129図 細ヶ谷B遺跡その他（1～20山の根遺跡その他）（21～38）出土土器（1：3）



第130図 名廻南遺跡(1~3)・名廻遺跡(4・5)・白沢原遺跡(6・7)・
山寺垣外遺跡(8・9)・細ヶ谷B遺跡(10~23)出土石器(1:4)



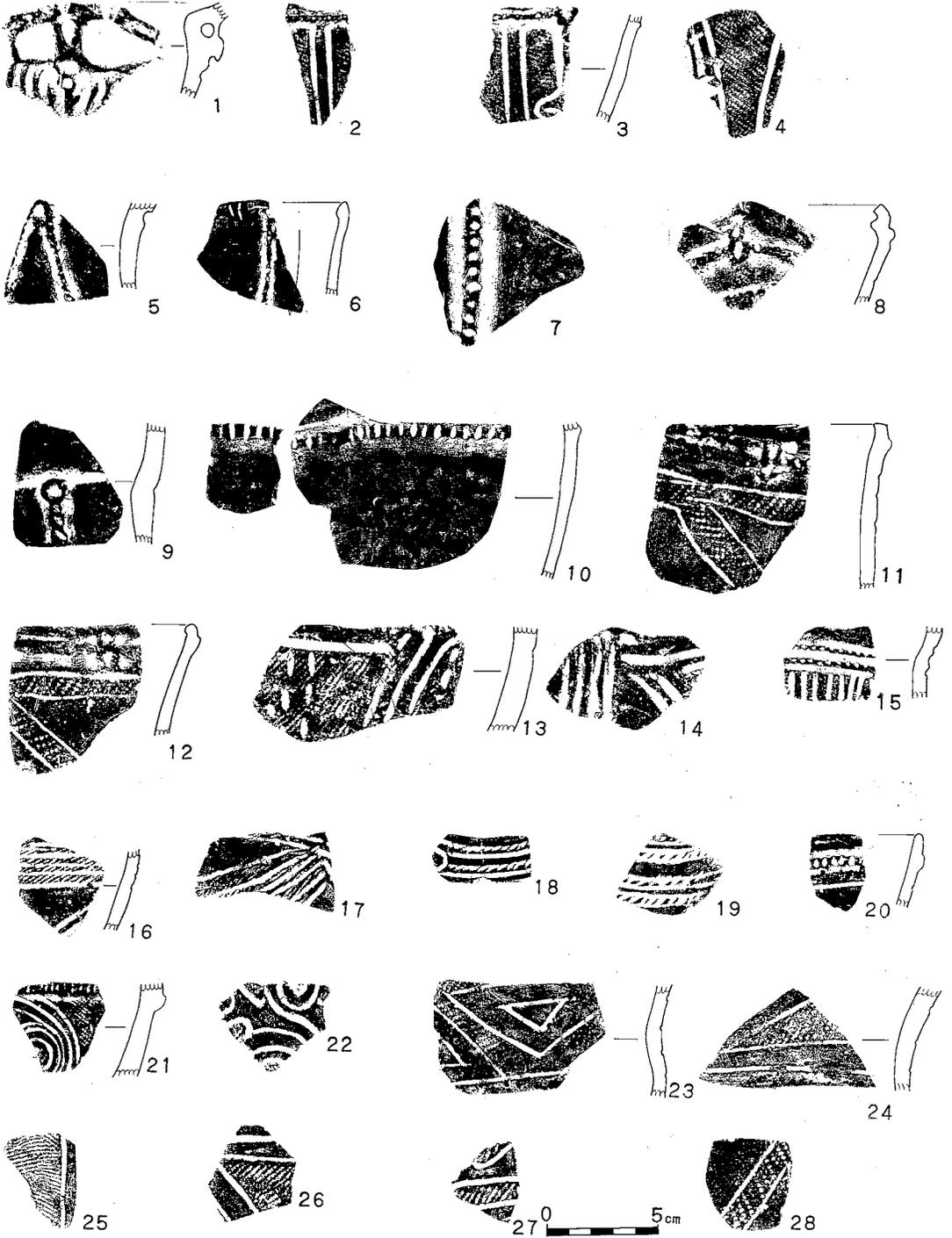
第131图 百脉刘遗址1号住居址出土土器(1:3)



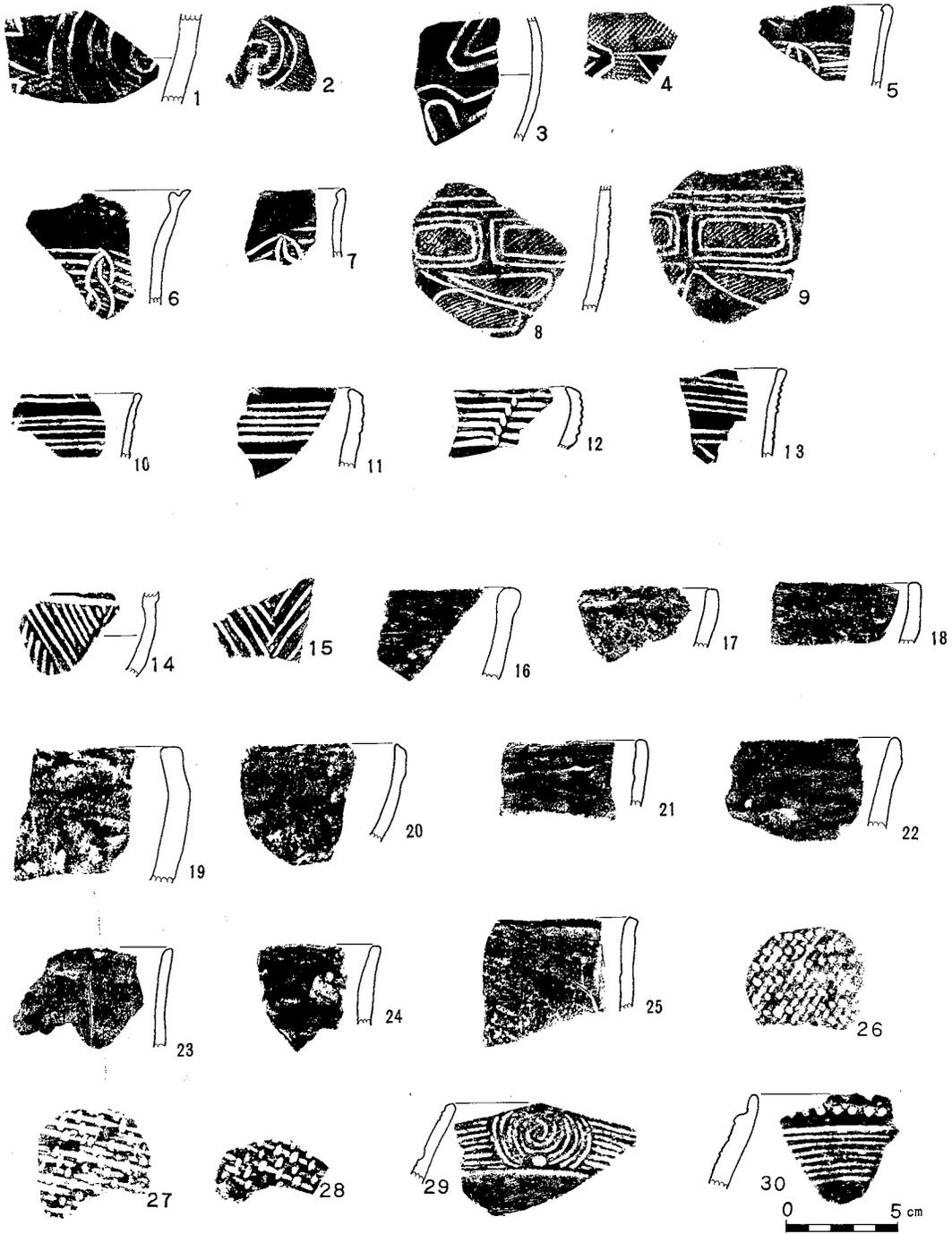
第132图 百馱刘遗址出土土器 (1:3) (1~21 1号住居址, 22~25 2号住居址)



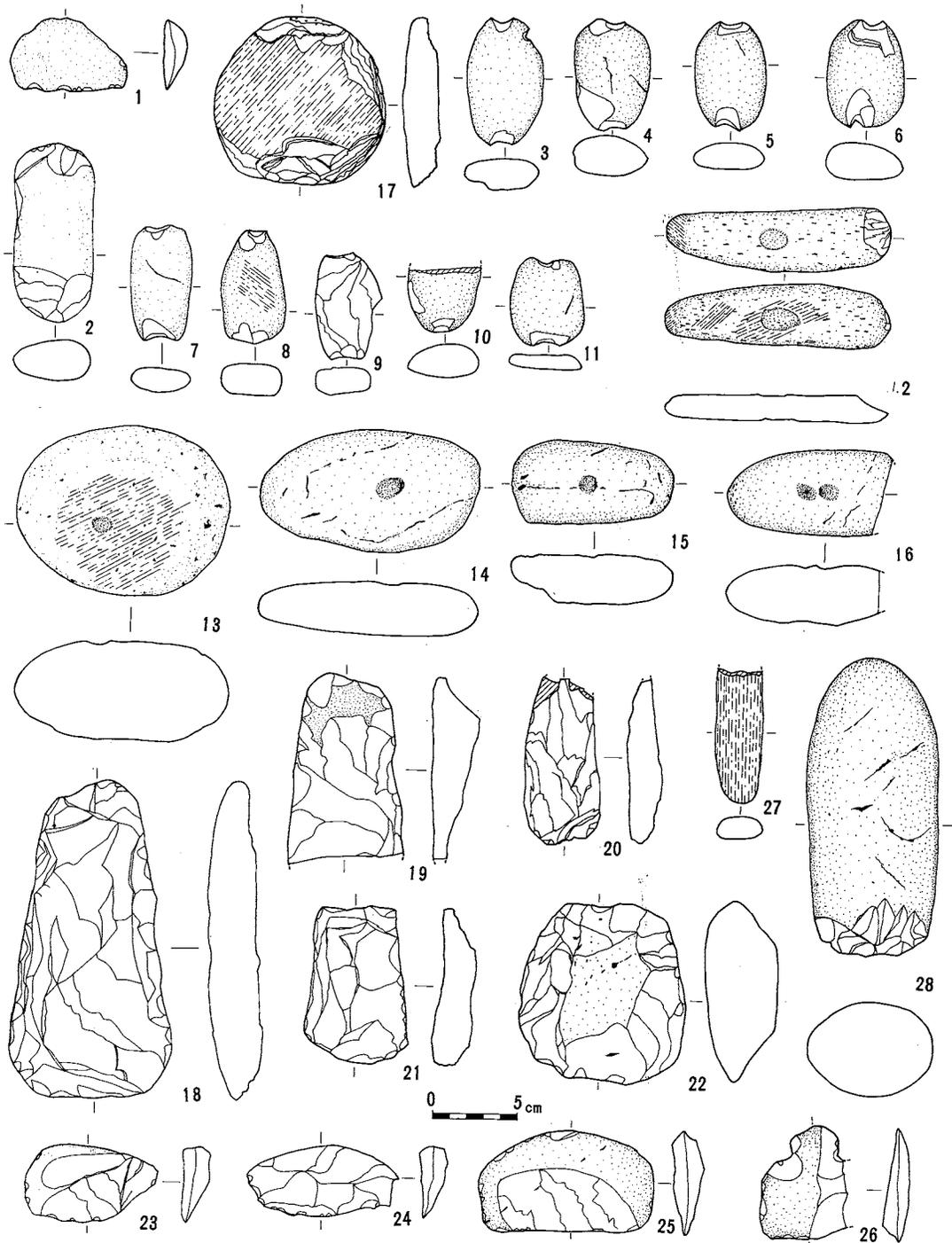
第133图 百馱刘遗址2号住居址出土土器 (1:3)



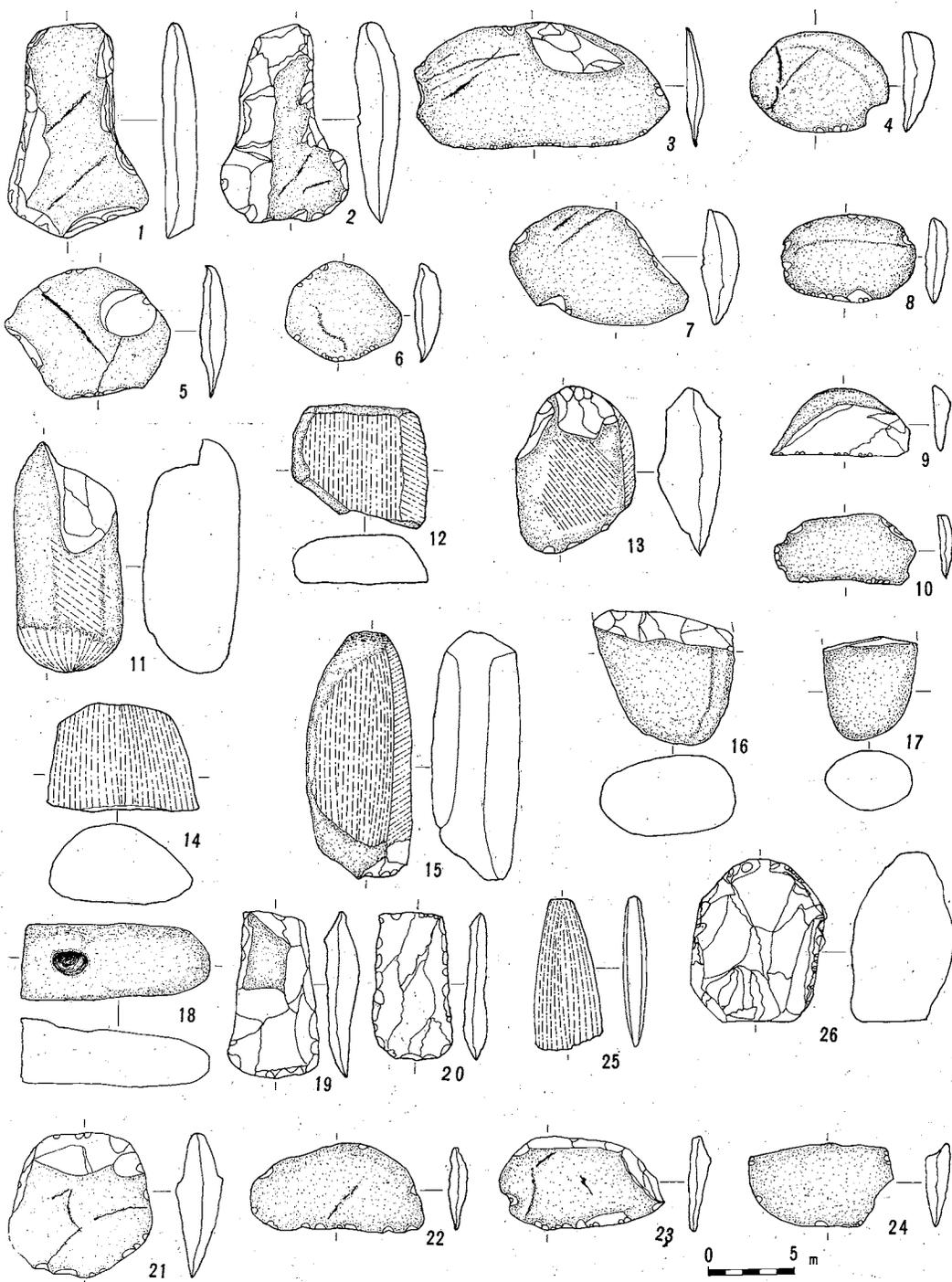
第134图 百馱刘遺跡2号住居址出土土器(1:3)



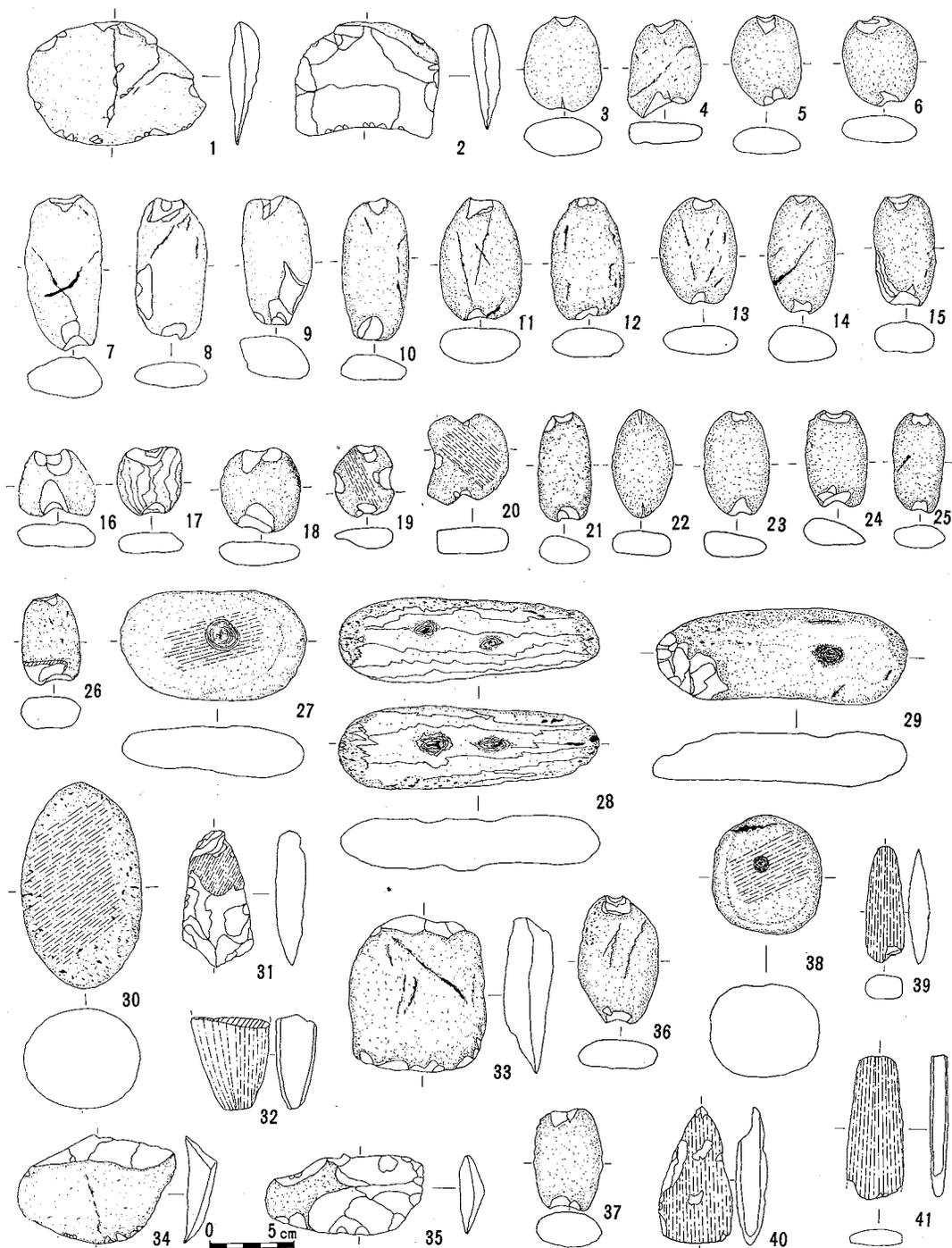
第135图 百脉刘遗址2号住居址出土土器(1:3)



第136图 百馱刈遺跡 出土石器 (1:4)
 (1~17、1号住居址 18~26、2号住居址)



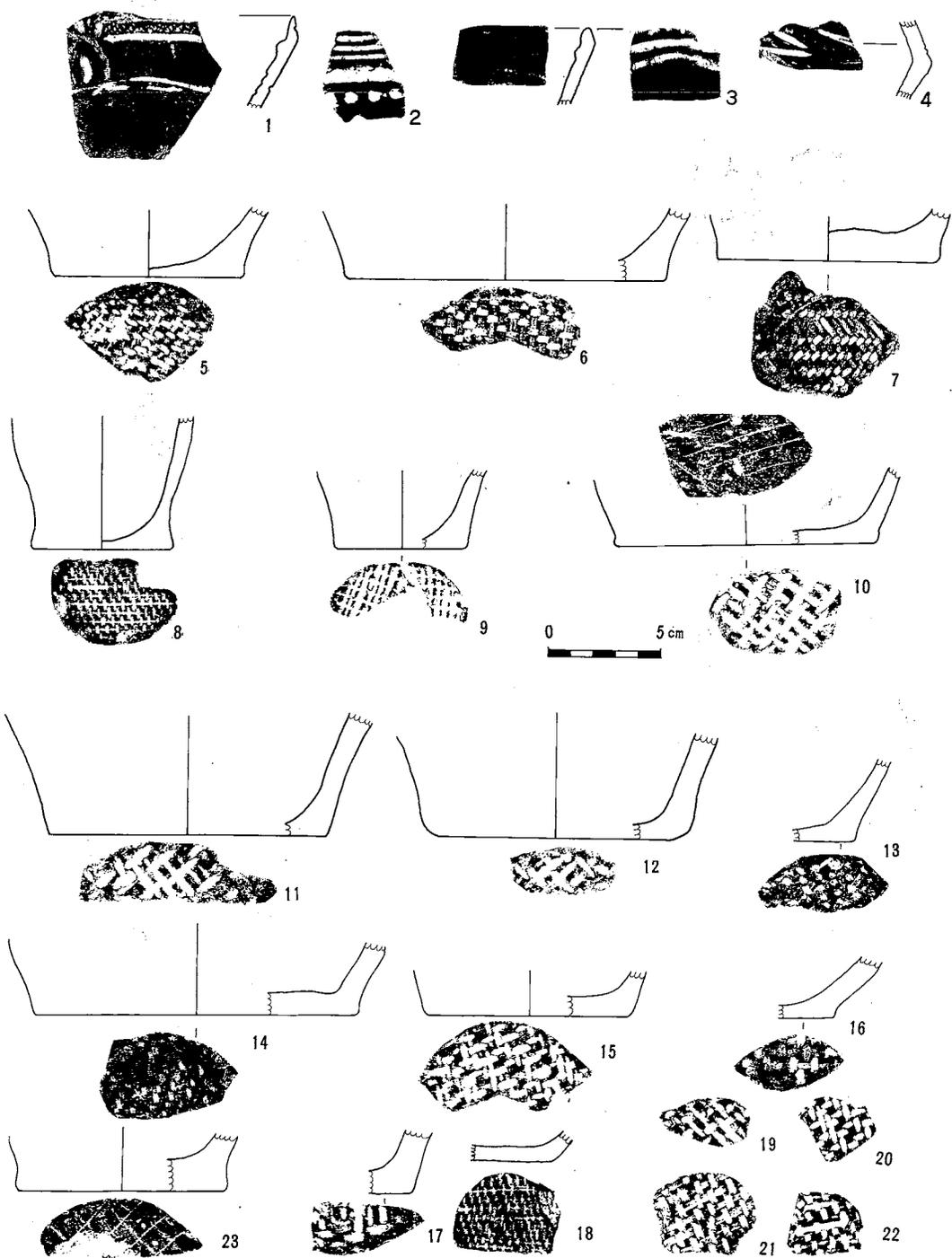
第137図 細ヶ谷B遺跡 (1~18)・百駄刈遺跡 (19~24) 出土石器 (1:4)
 (1~18、その他 19~24、1号住居址)



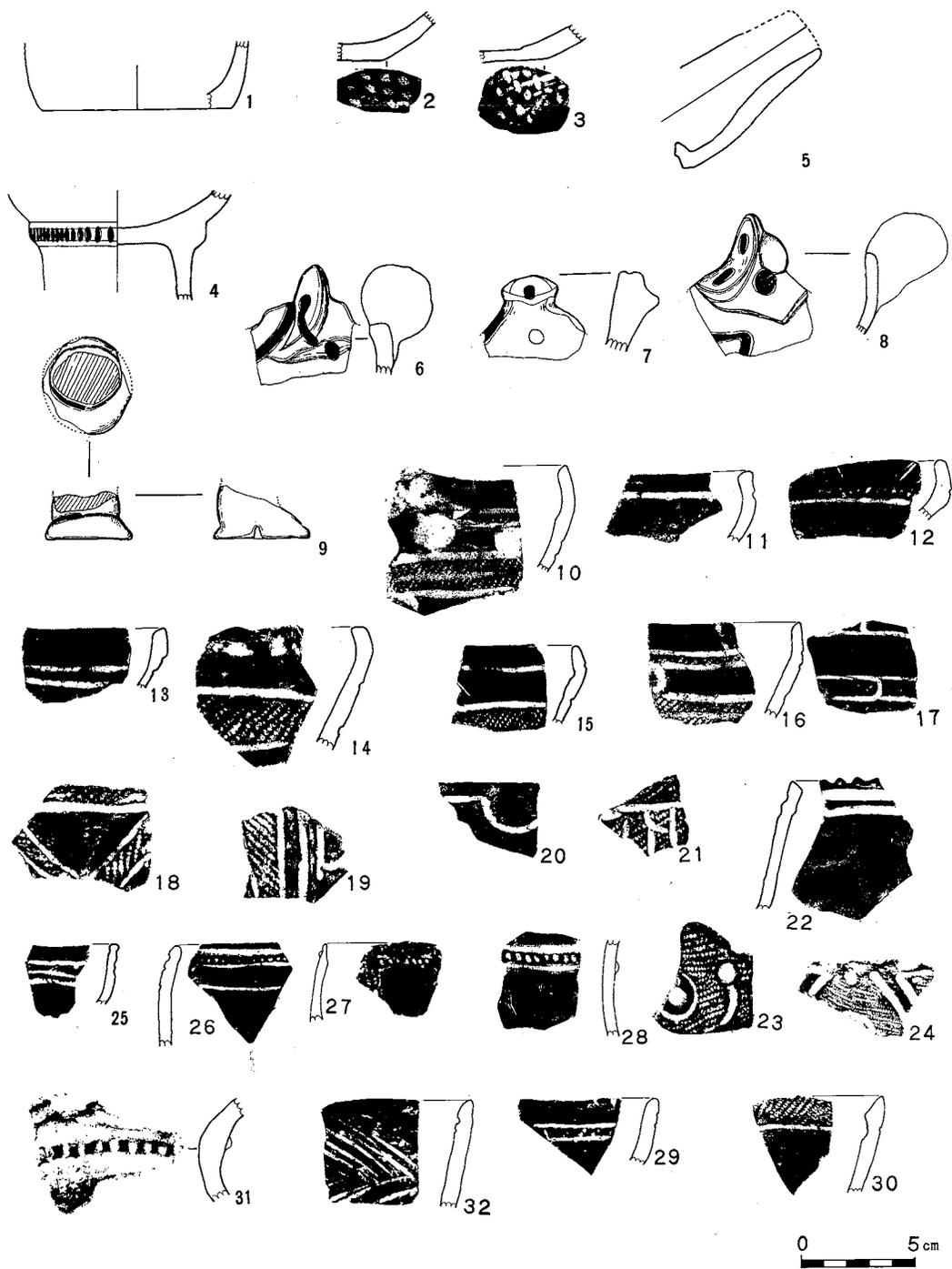
第138图 百馱刘遺跡出土石器 (1 : 4)
 (1~30、2号住居址 31~38、3号住居址 39~41、4号住居址)



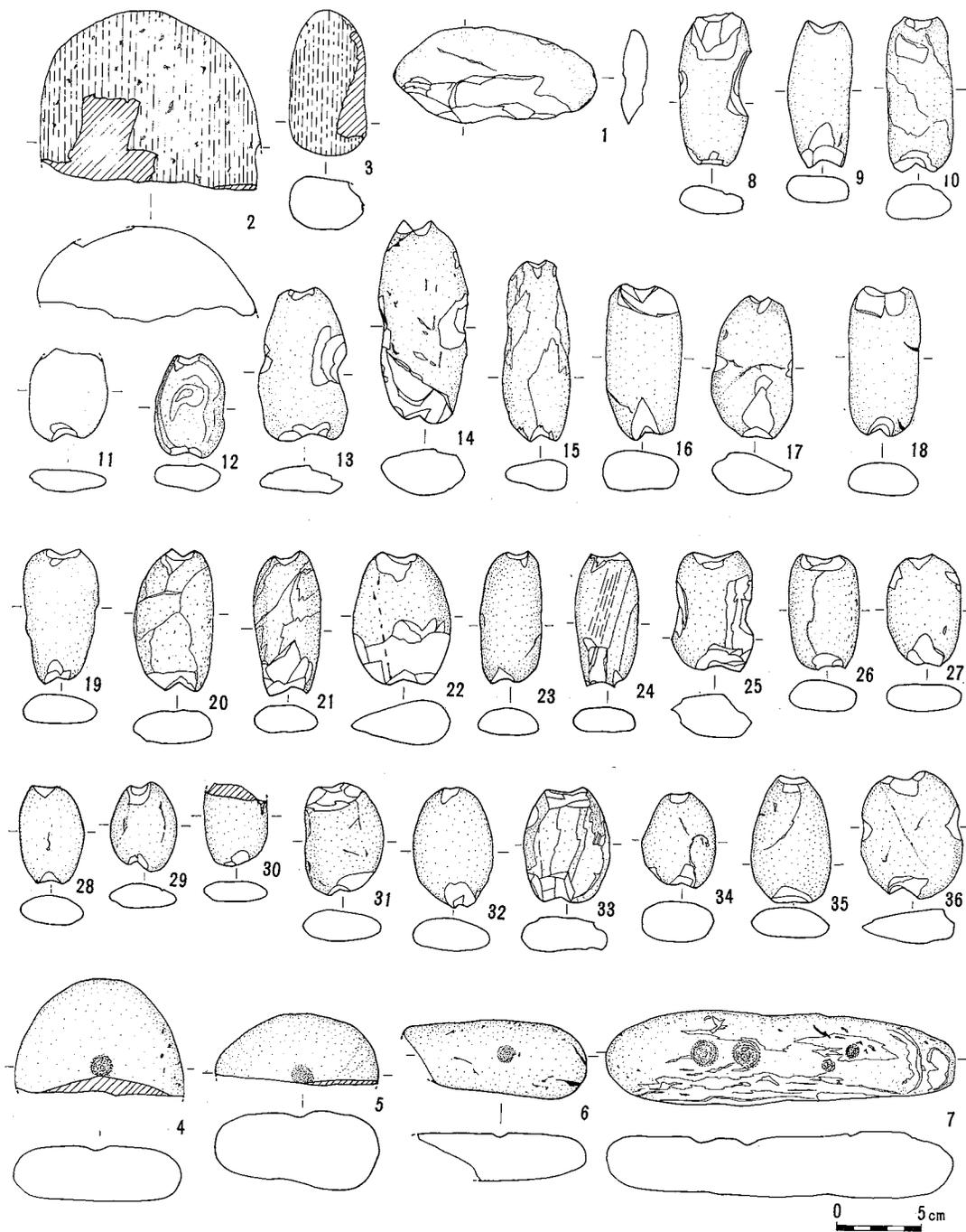
第139图 百駝刘遺跡3号住居址出土土器(1:3)



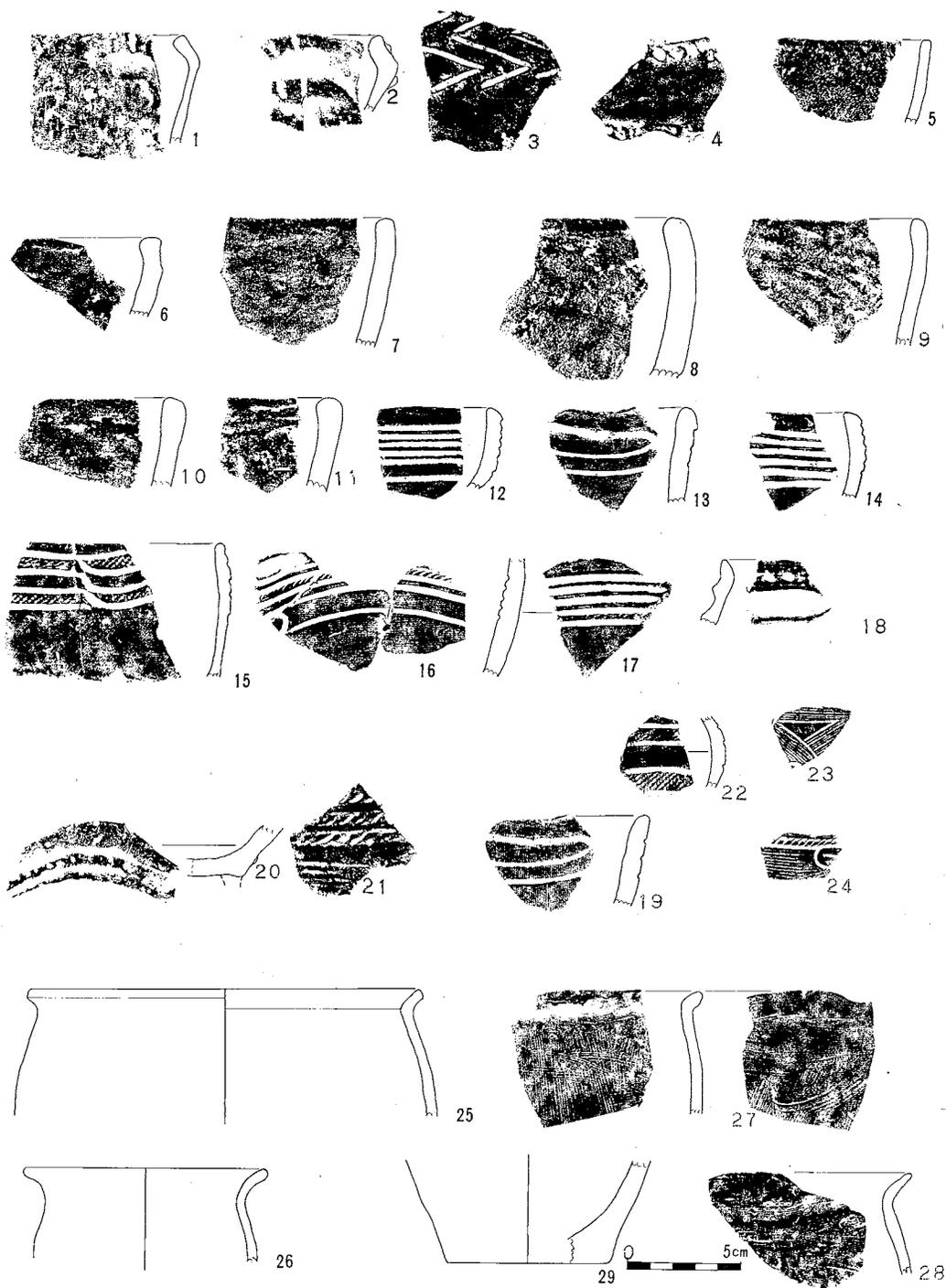
第140图 百脉刘遗址出土土器 (1:3) (1~5 3号住居址, 6~22 4号住居址)



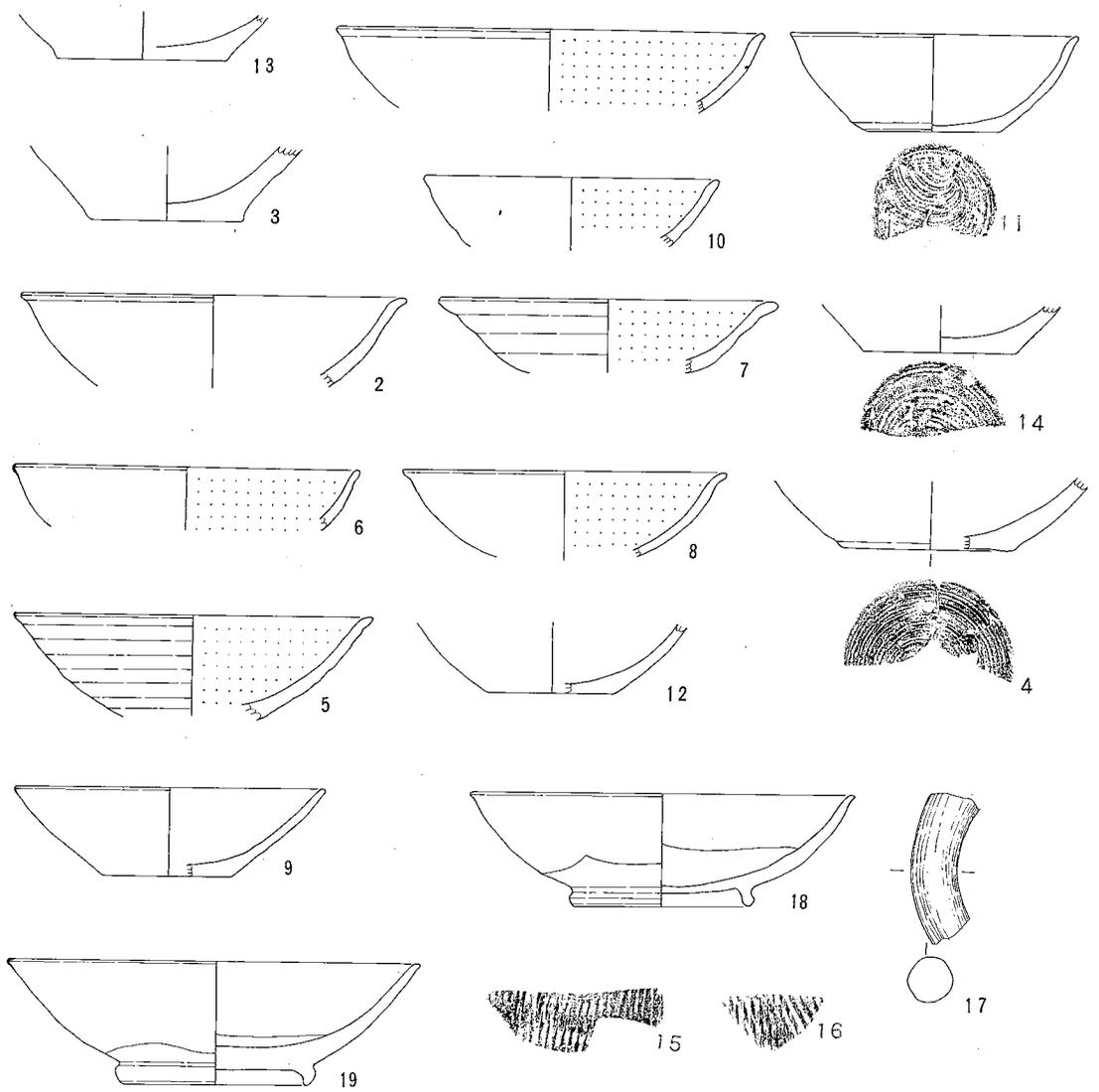
第141图 百駝刘遺跡4号住居址出土土器 (1:3)



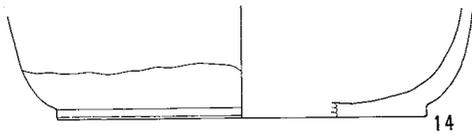
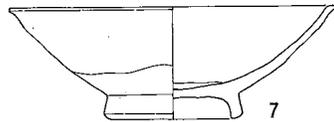
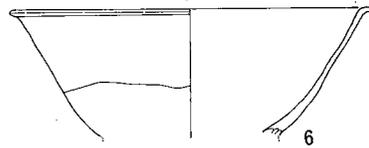
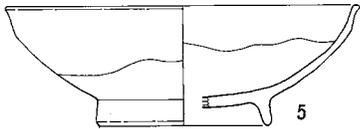
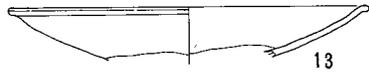
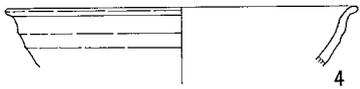
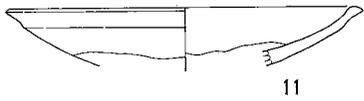
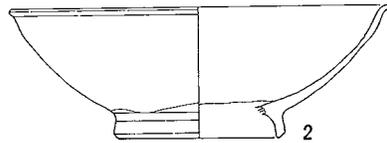
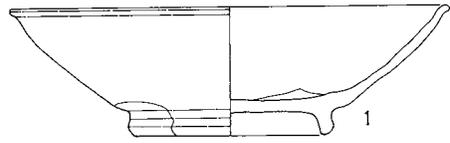
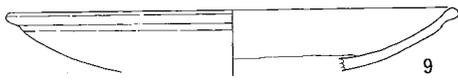
第142图 百馱刈遺跡4号住居址出土石器(1:4)



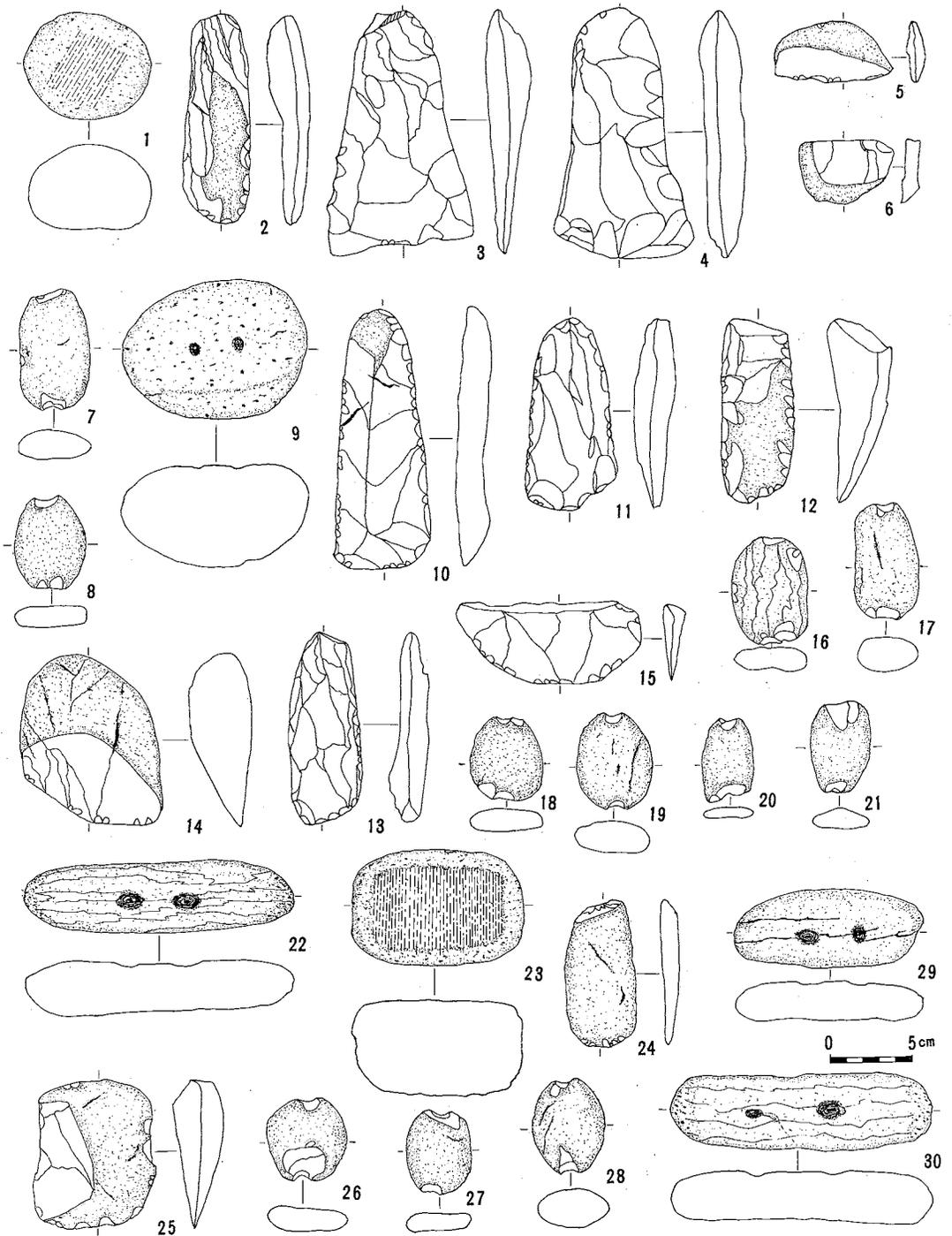
第143图 百駝刘遺跡出土土器 (1:3) (1~24 4号住居址, 25~29 5号住居址)



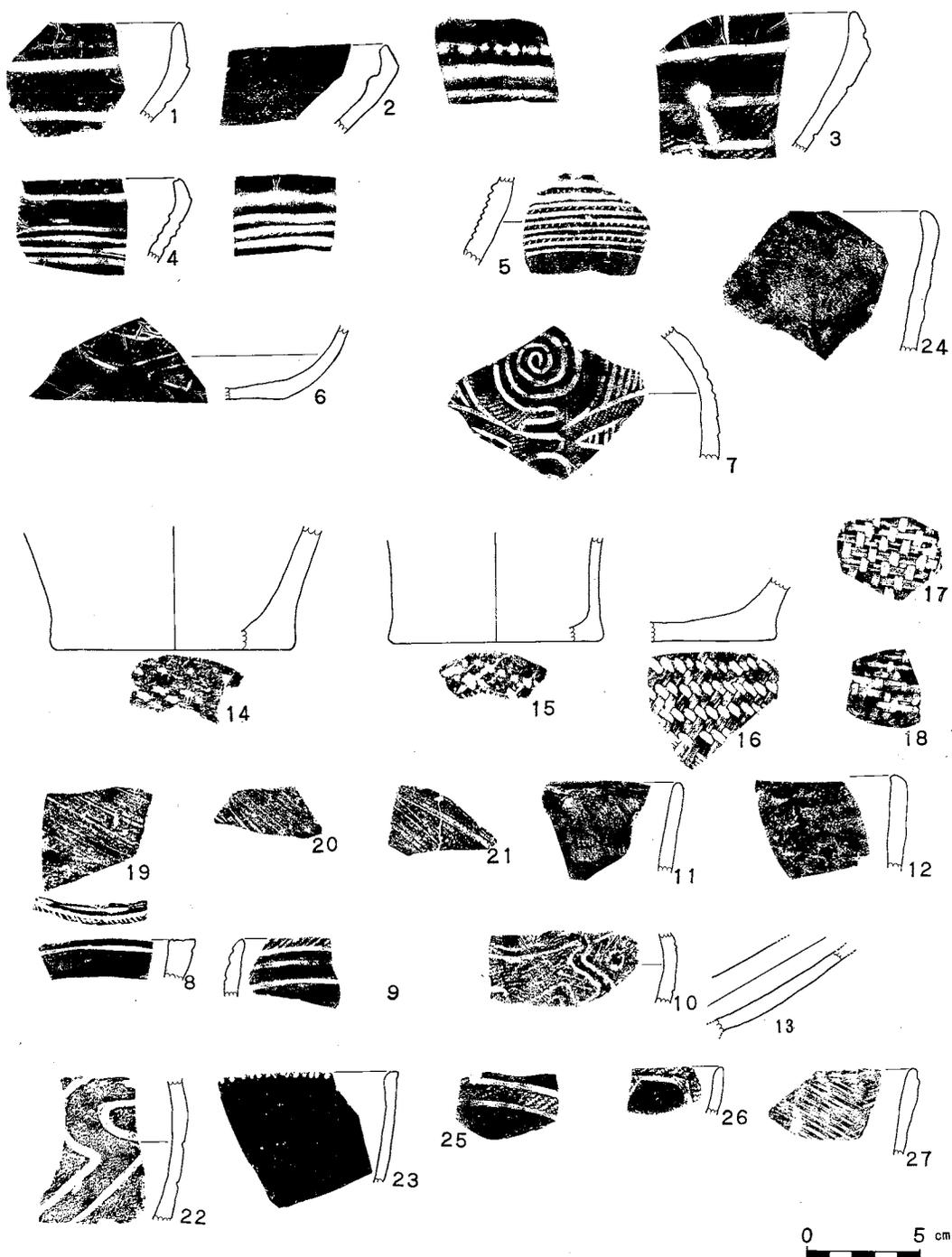
第144图 百馱刘遺跡5号住居址出土土器(1:3)



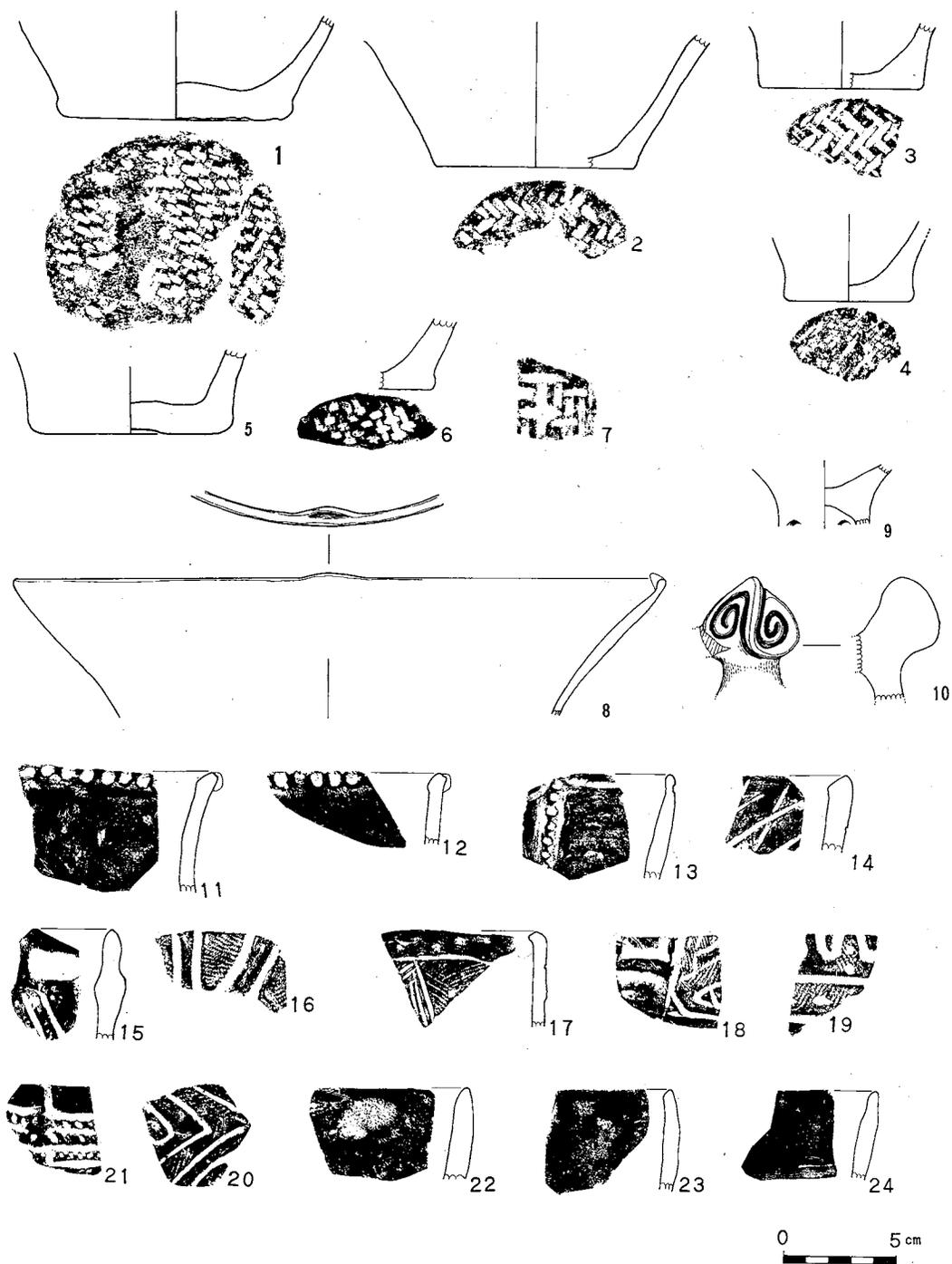
第145图 百駄刈遺跡5号住居址出土土器(1:3)



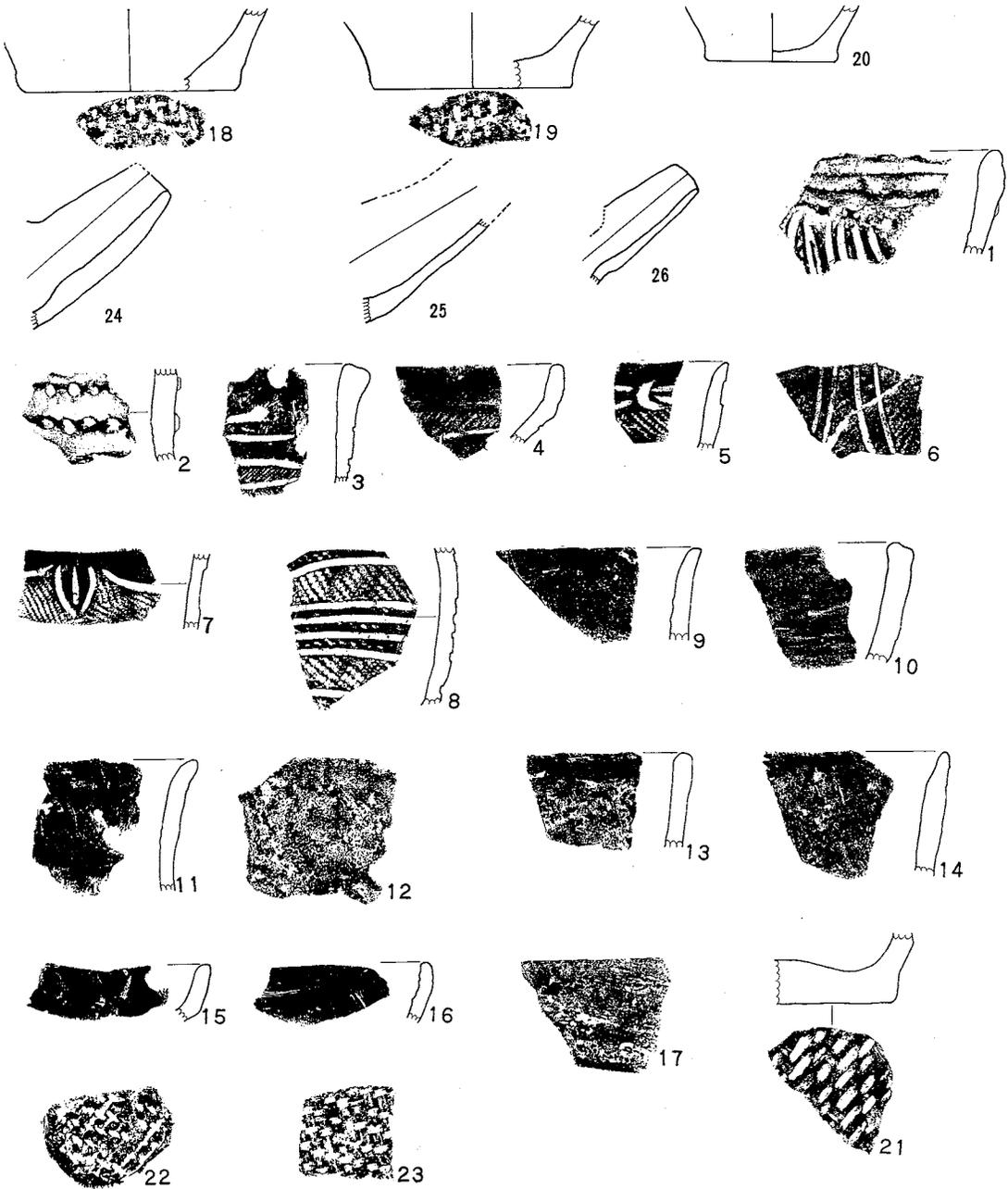
第146図 百駄刈遺跡4・5号住居址・2号配石址（石囲遺構）・ピット群出土土器（1・4）
 （1、4号住居址 2～9、その他 10～23、ピット群 24～30石囲遺構）



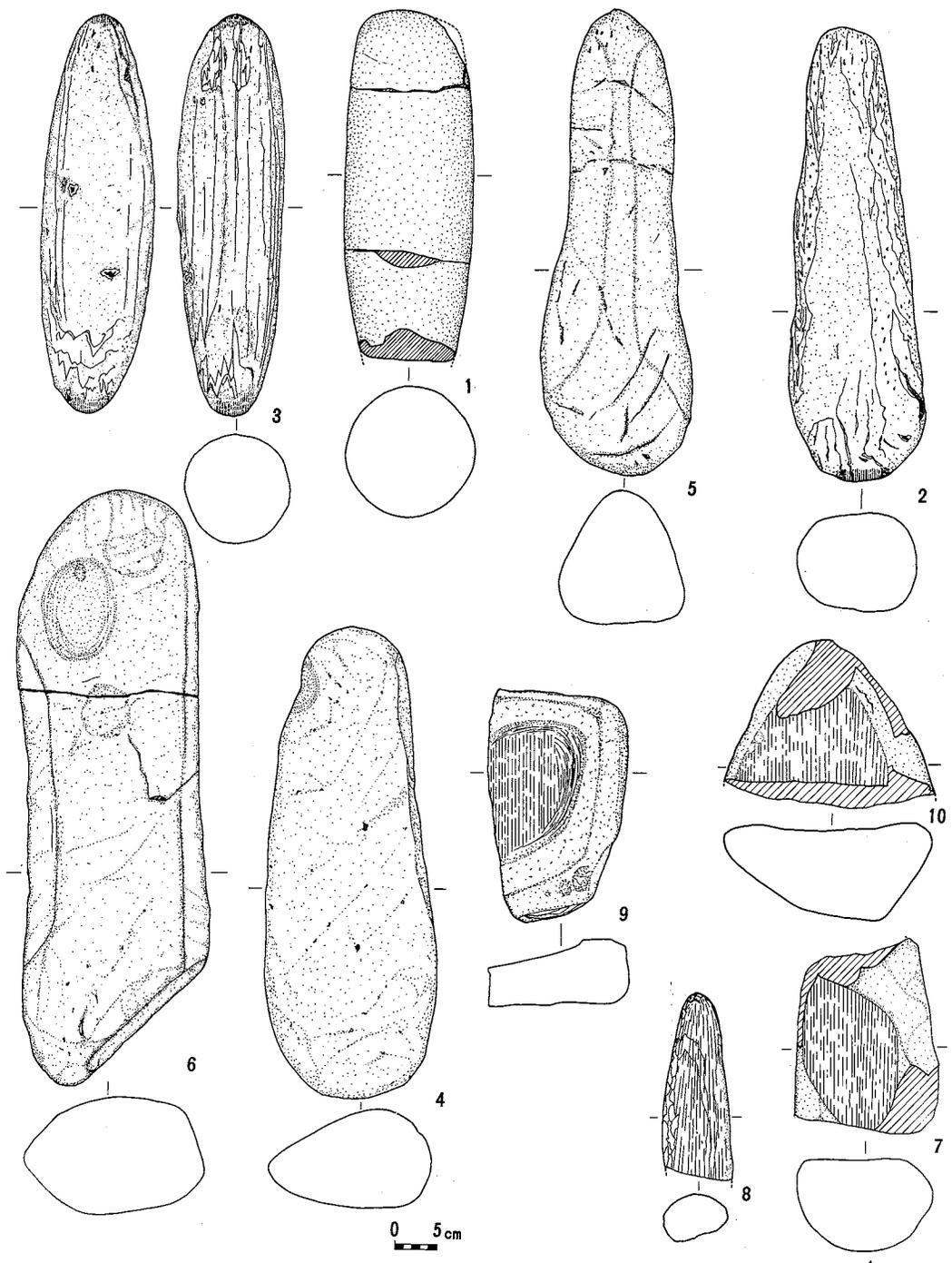
第147图 百駮刘遺跡出土土器 (1:3) (土城, 25·26 14号土城, 27 15号土城)



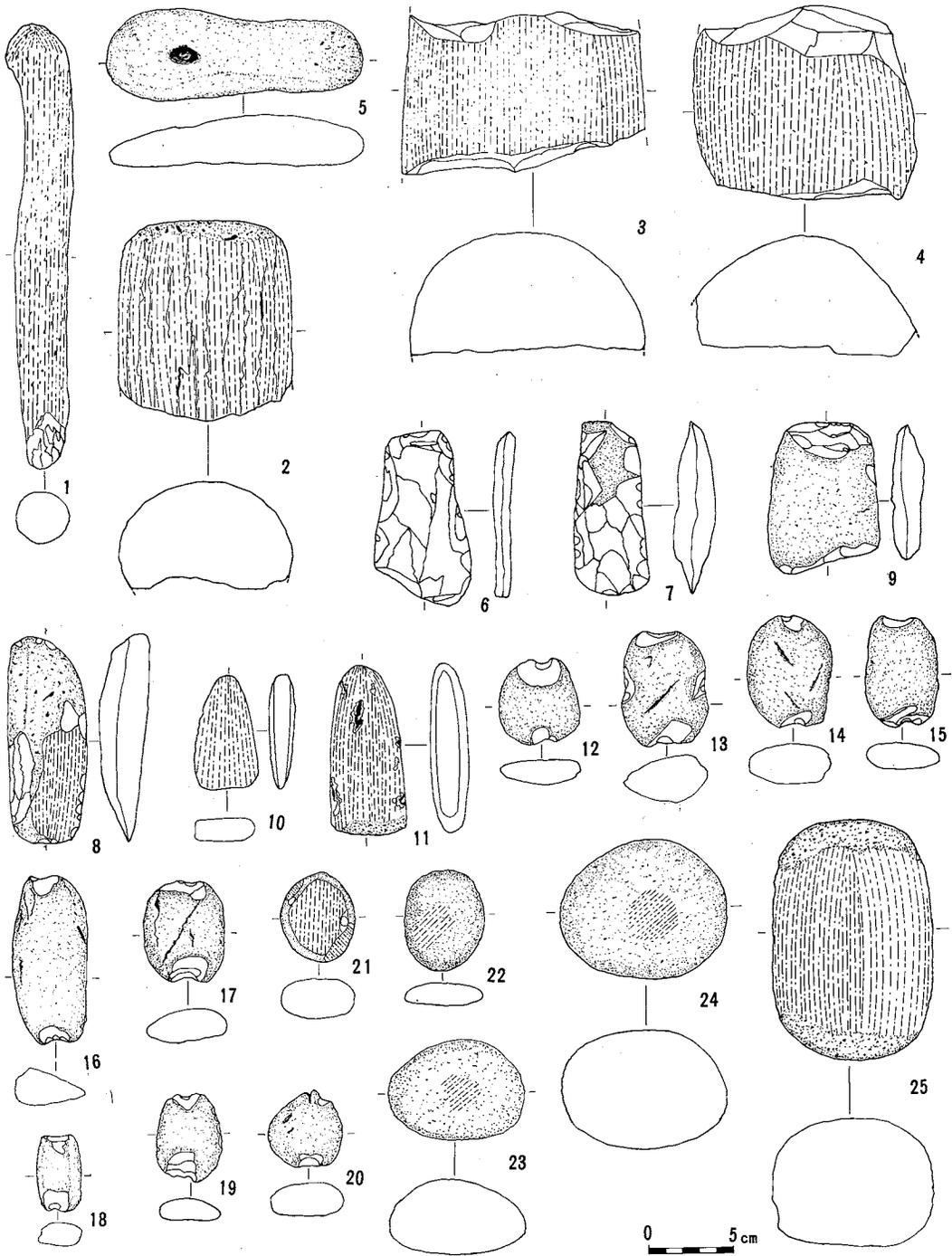
第148図 百駄刈遺跡ピット群出土土器 (1:3)



第 149 第149图 百歇刘遗址配石址出土土器 (1:3)

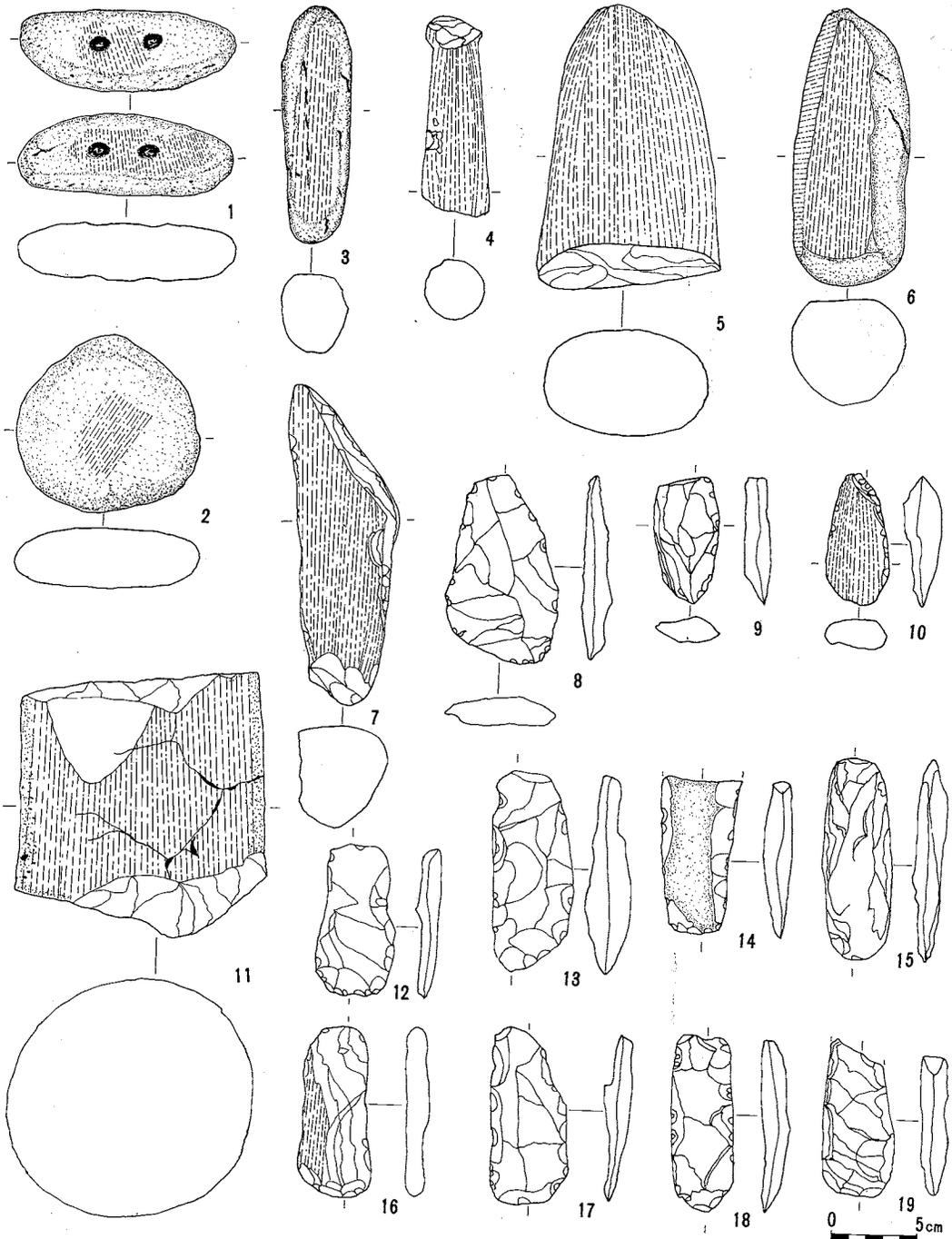


第150図 百駄刈遺跡1号配石址・その他出土土器 (1 : 8)
 (1~6、配石址 7~10、その他)

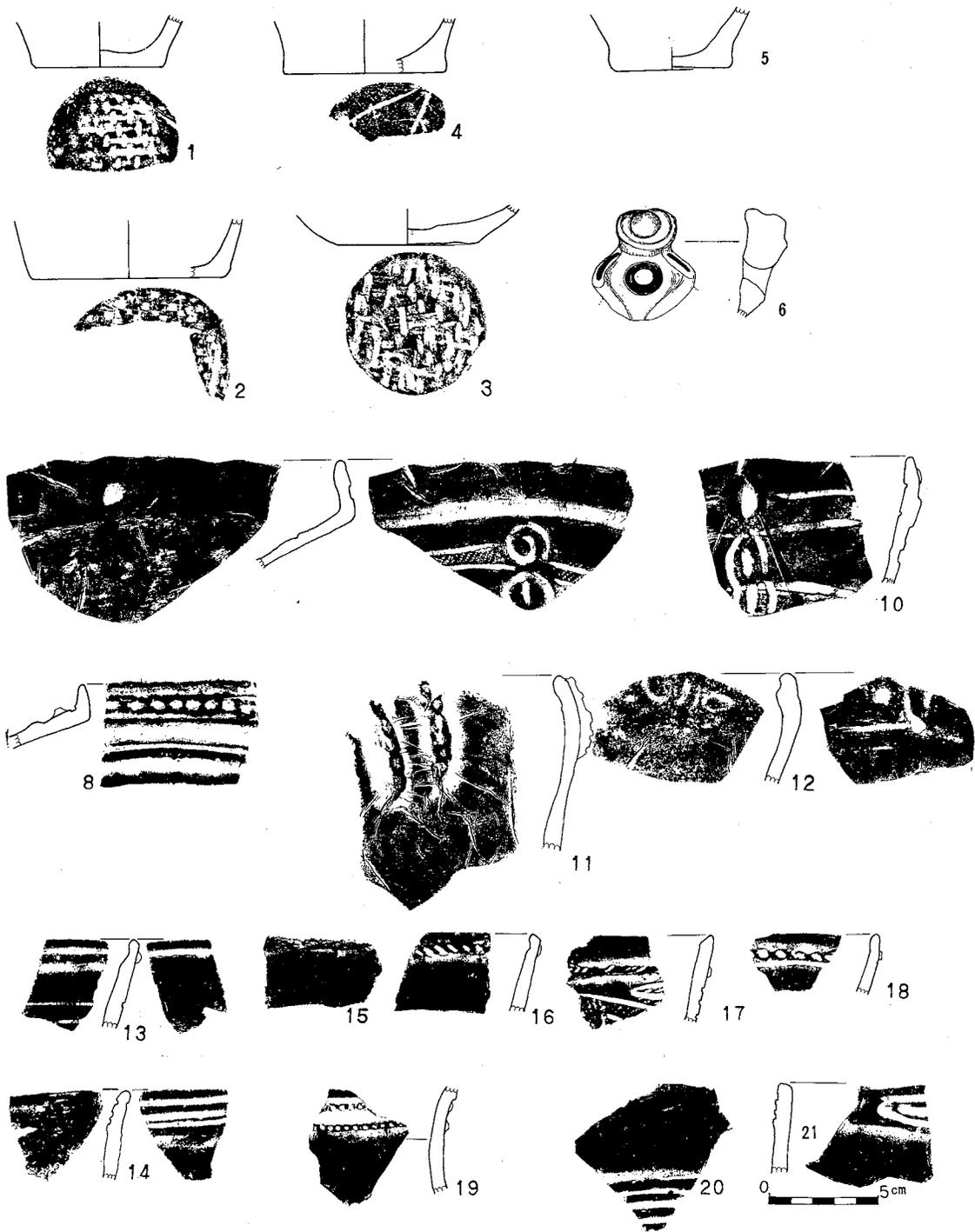


第151图 百馱刈遺跡1・2号配石址出土石器(1:4)

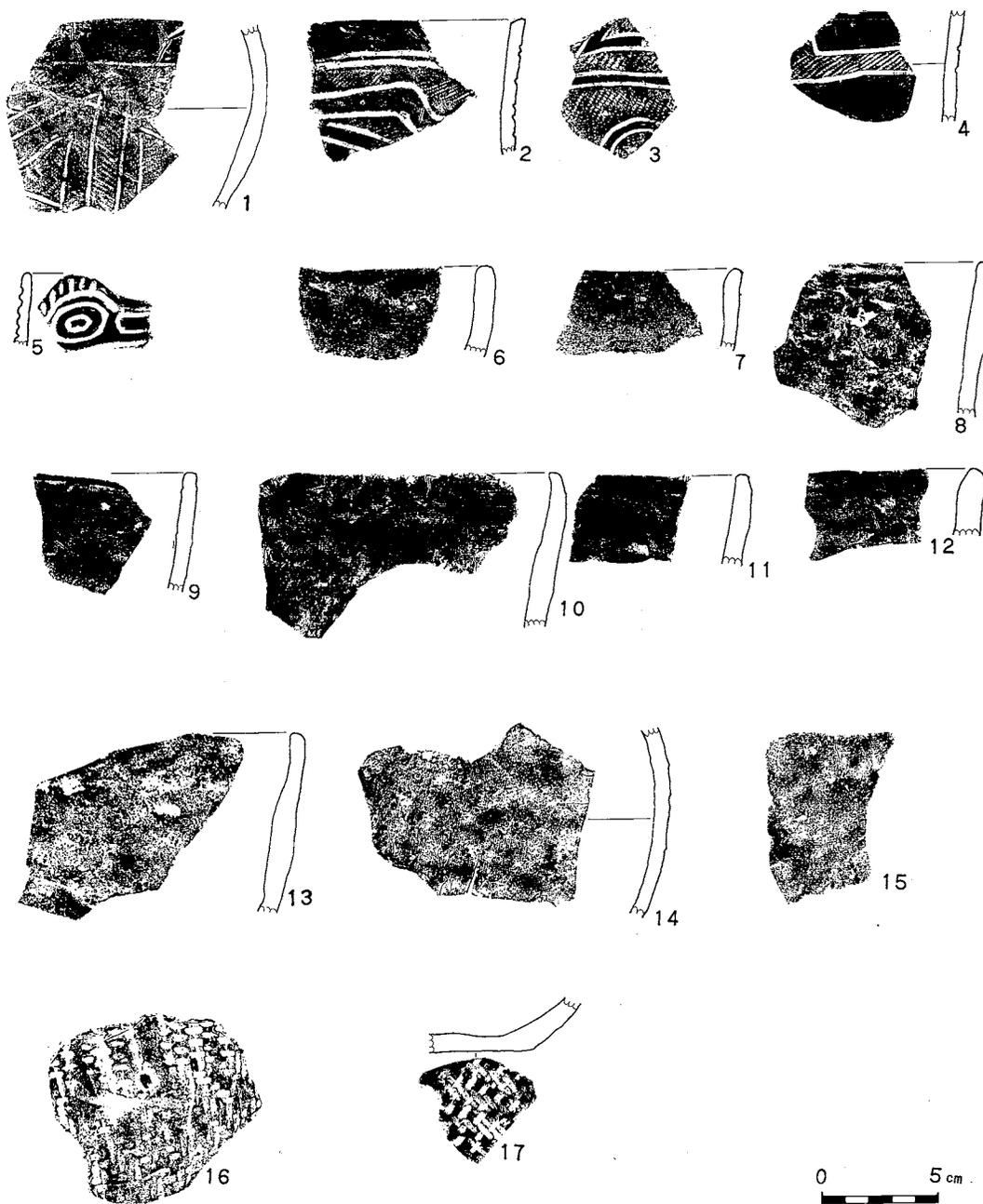
(1~5、石圍遺構 6~25、配石址)



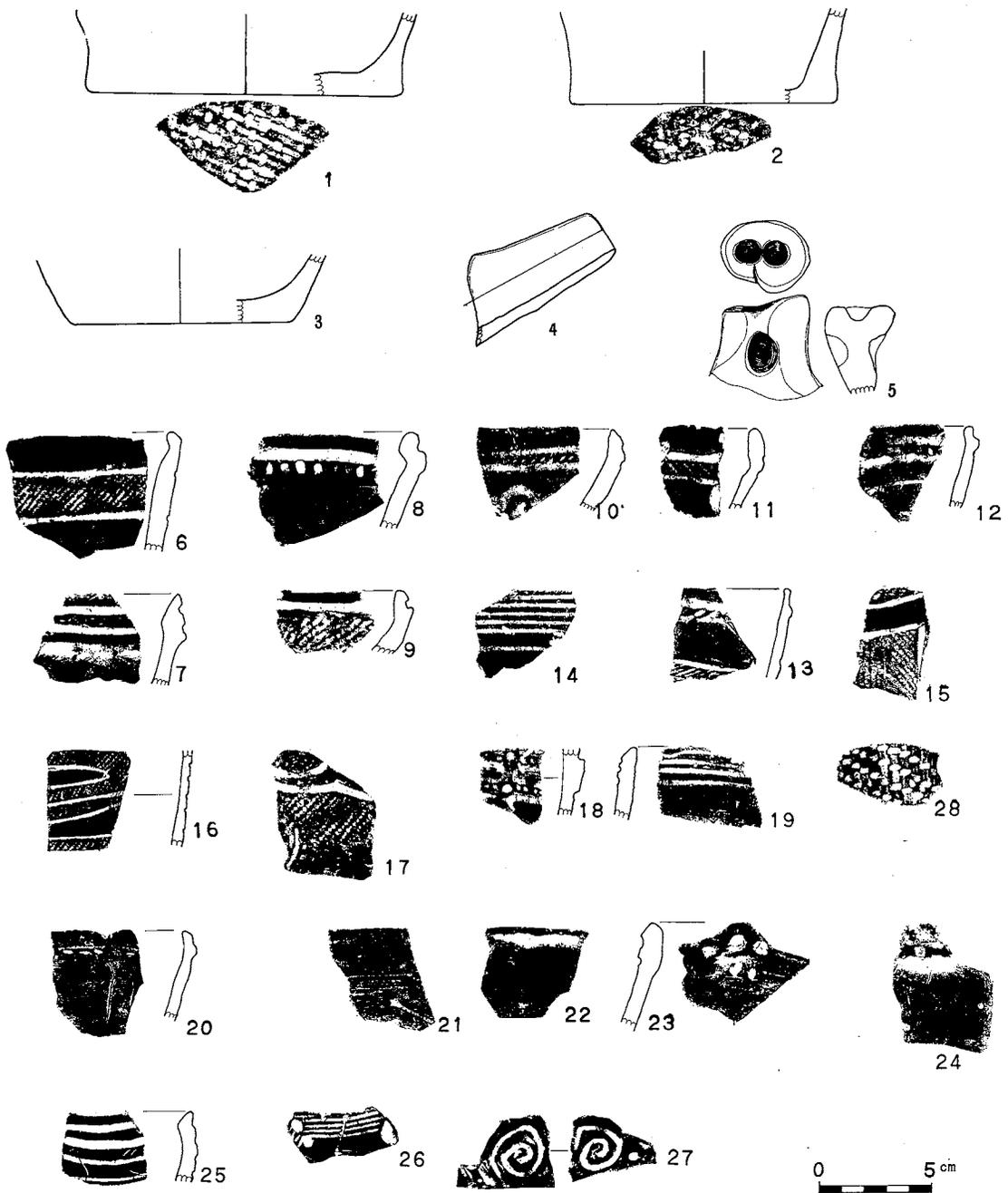
第152図 百駄刈遺跡1号配石址・5・14号土壙・その他出土石器(1:4)
 (1~7、配石址 8~10、5号土壙 11、14号土壙 12~19、その他)



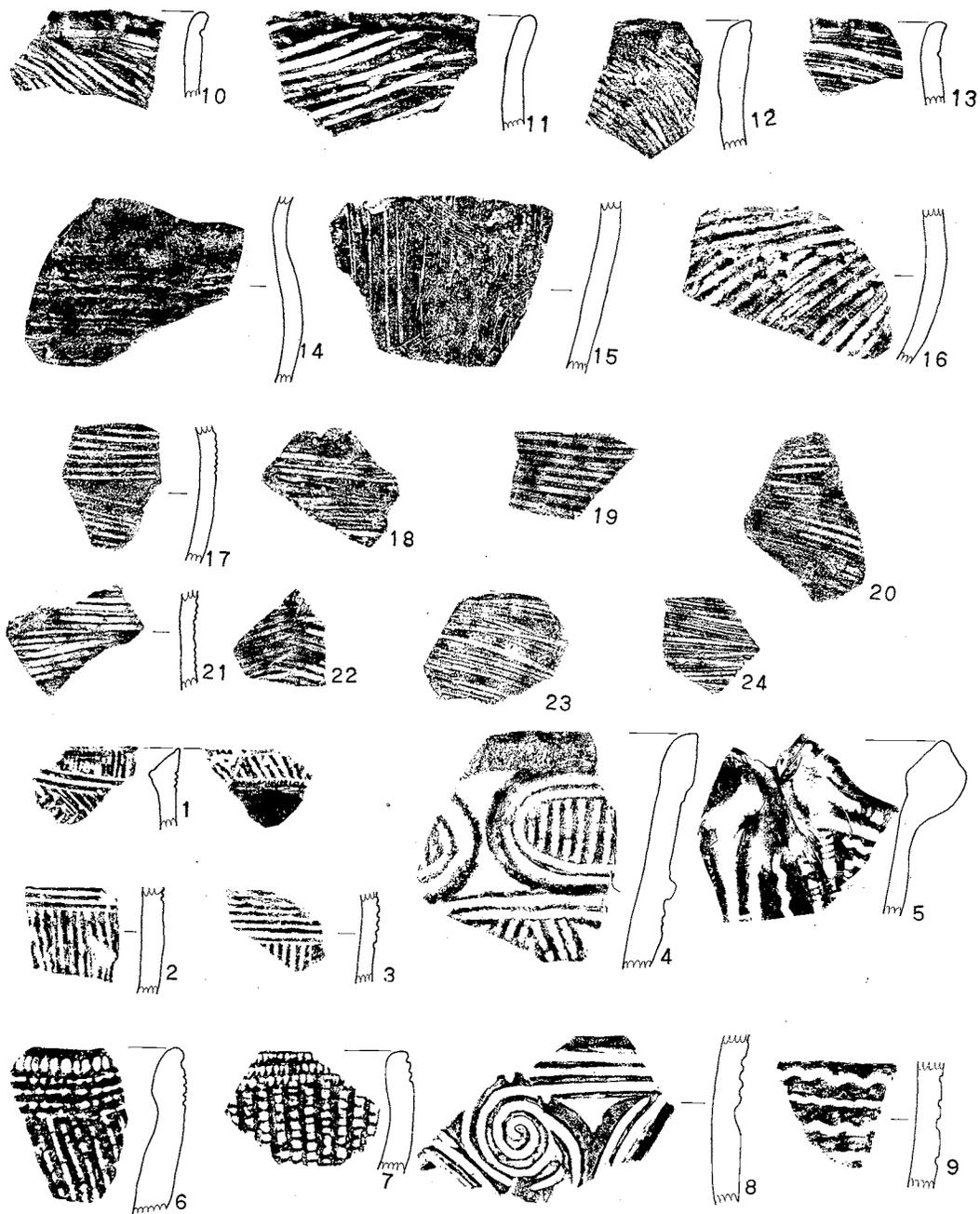
第153图 百脉刘遗址石网纹构出土器 (1:3)



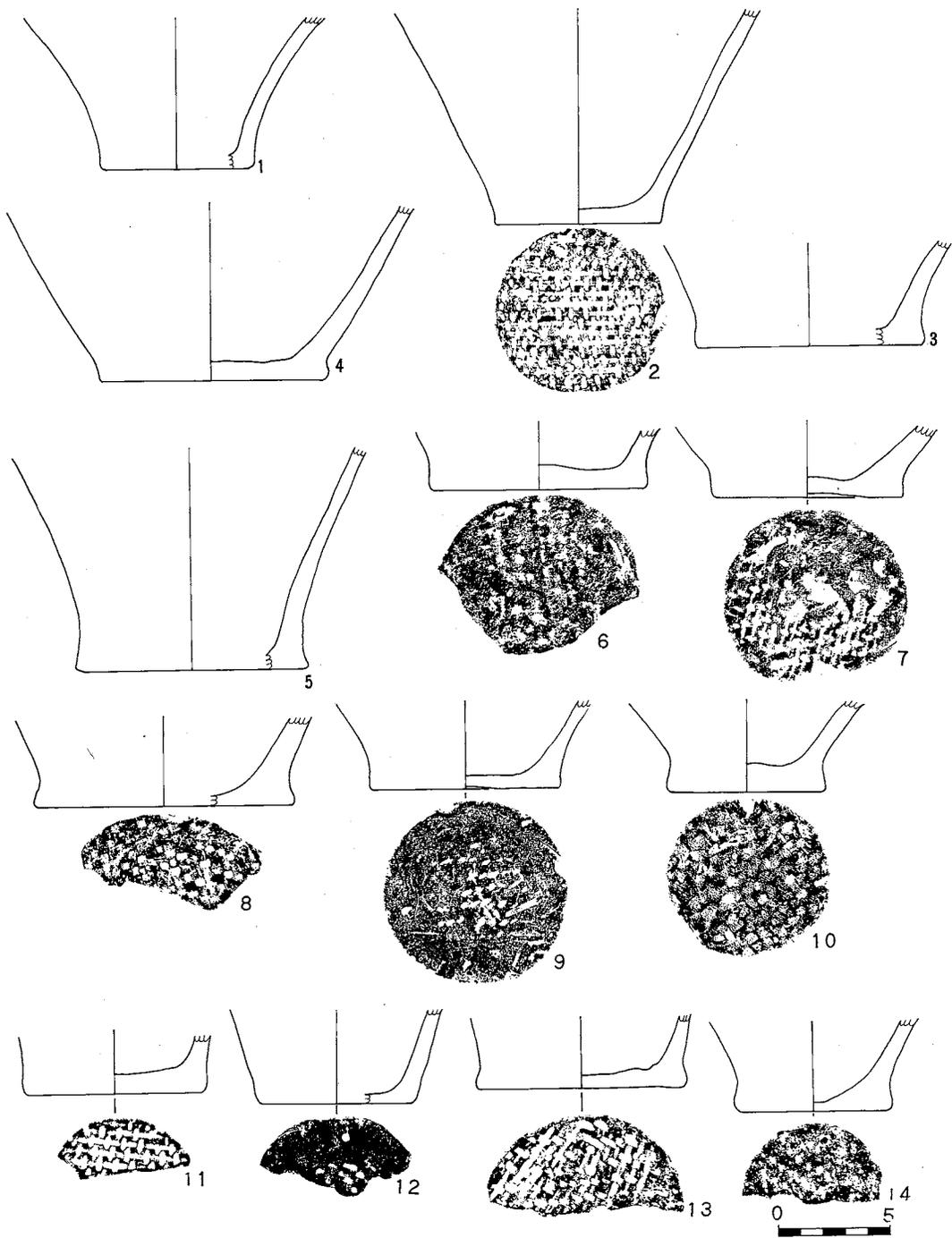
第154图 百馱刘遺跡石圀遺構出土土器 (1:3)



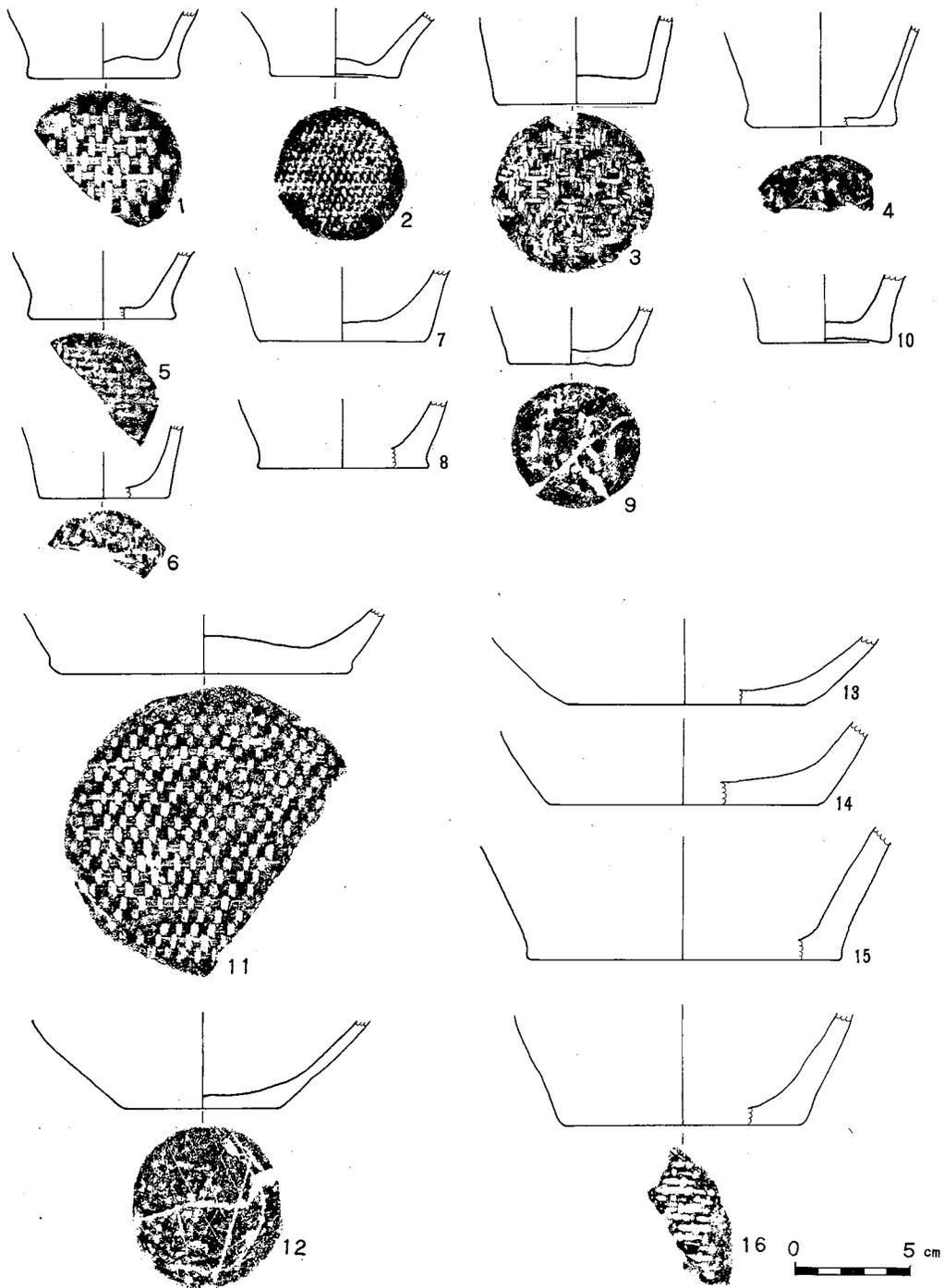
第155图 百駮刘遺跡特殊遺構出土土器 (1 : 3)



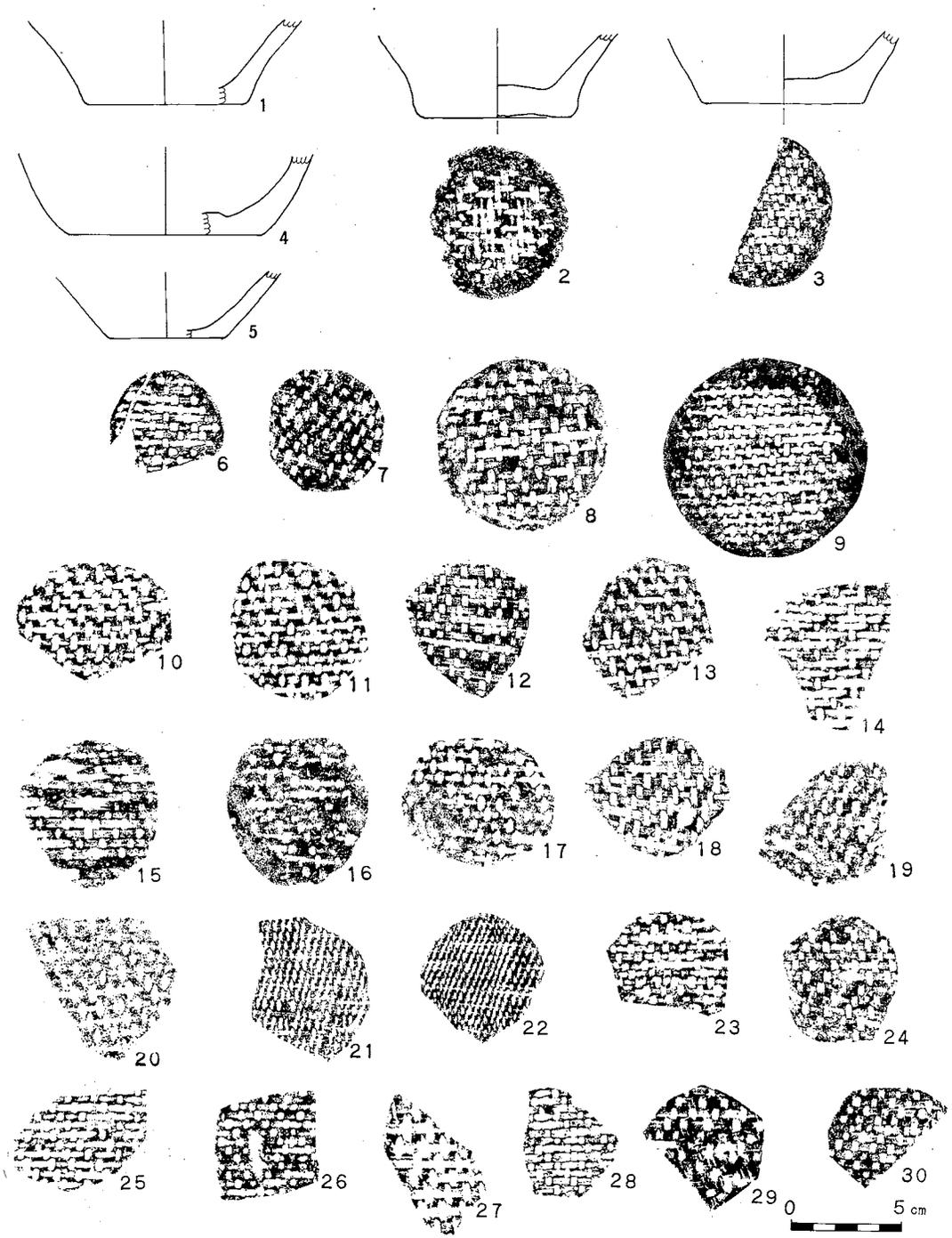
第156図 百駄刈遺跡出その他出土土器 (1:3) (1~9 縄文中期, 10~24 縄文晩期)



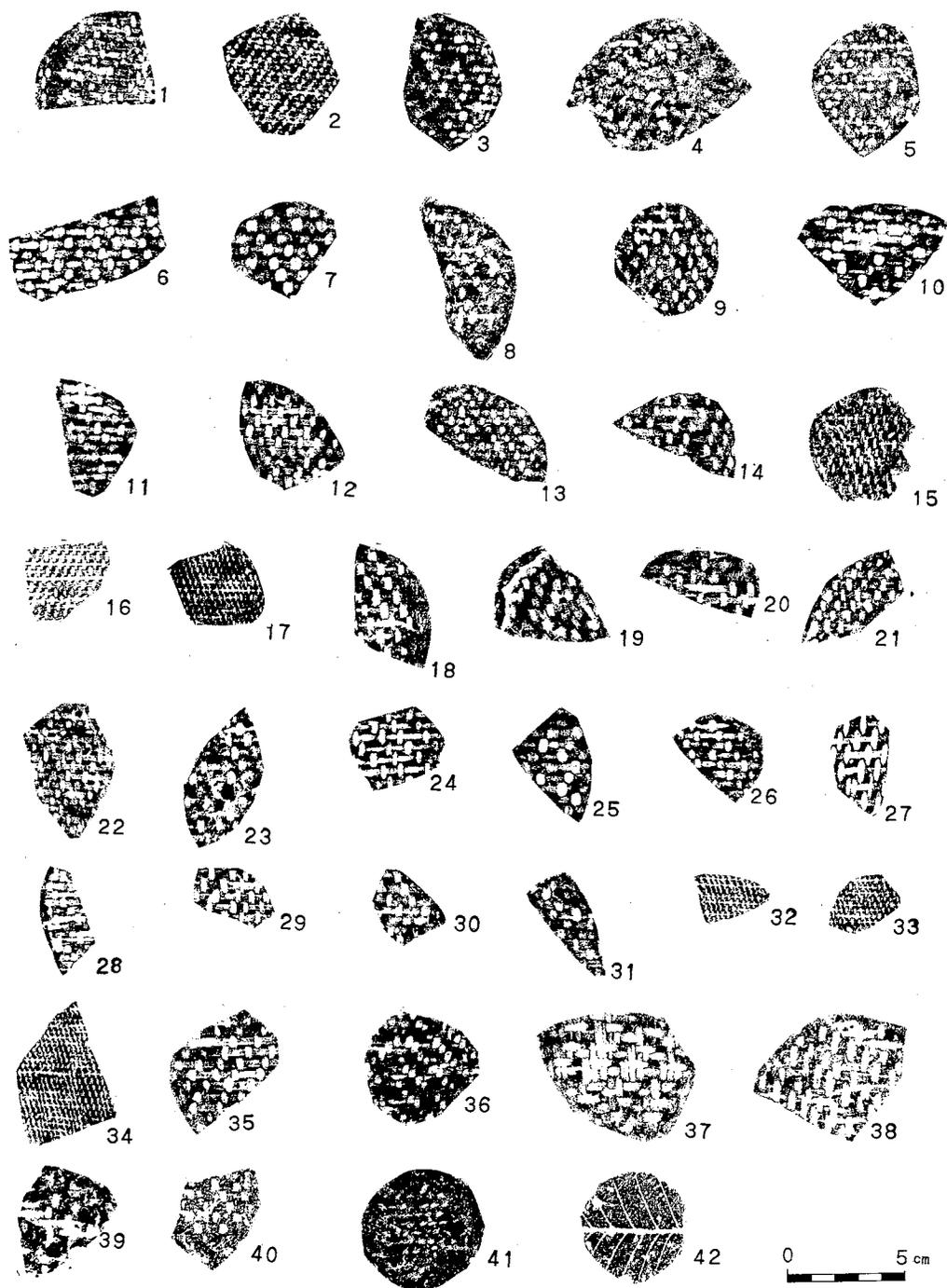
第157図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



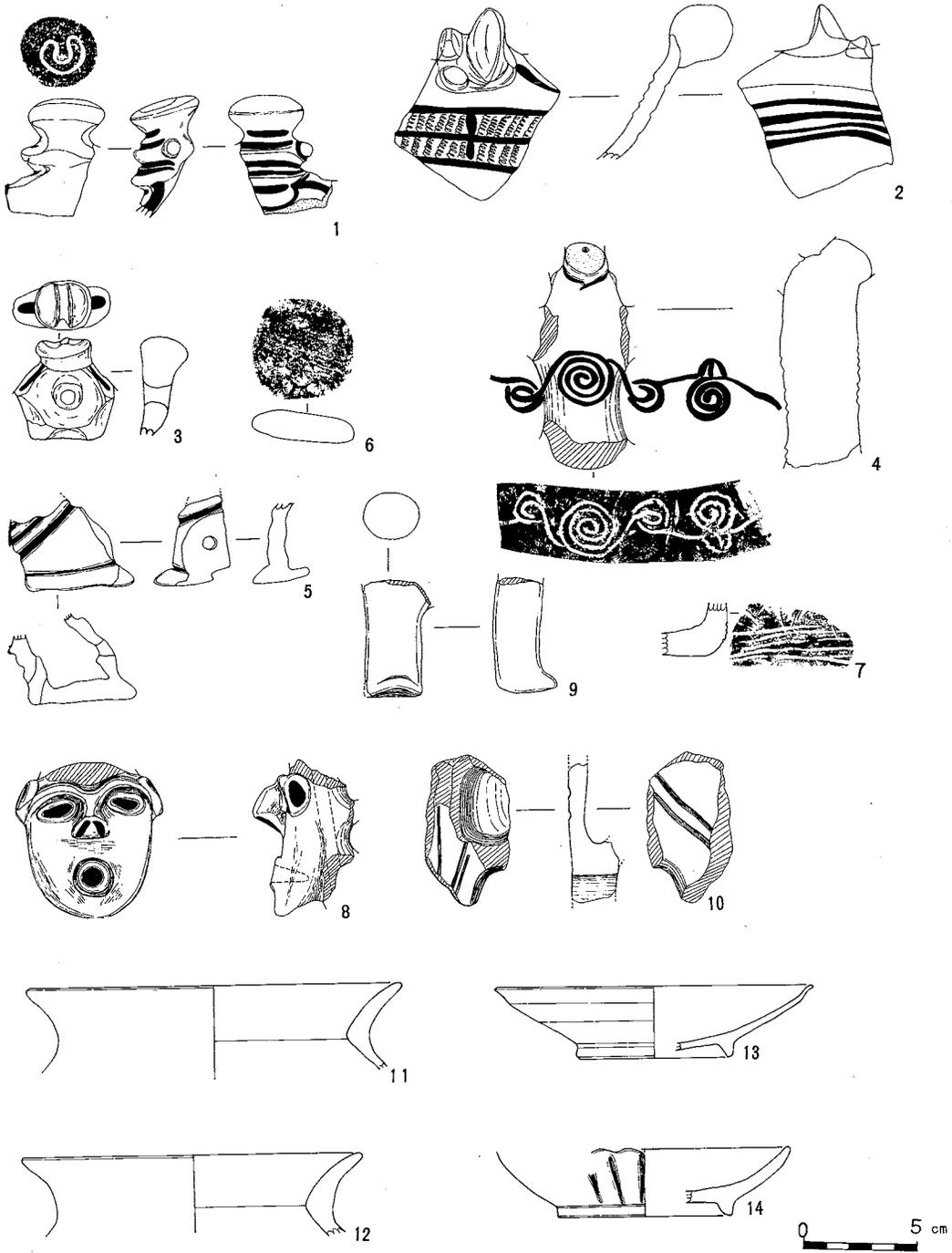
第158図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



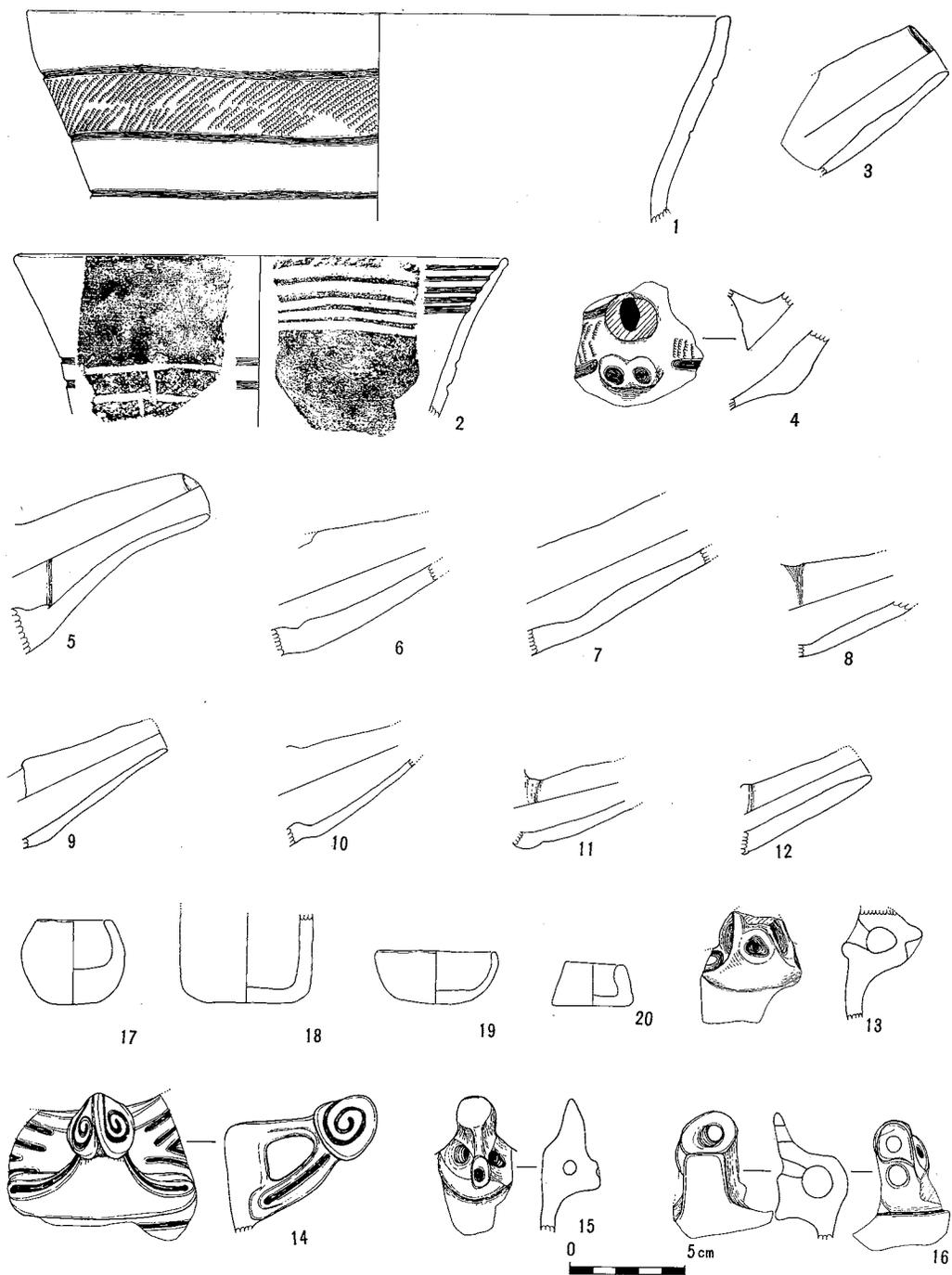
第159図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1 : 3)



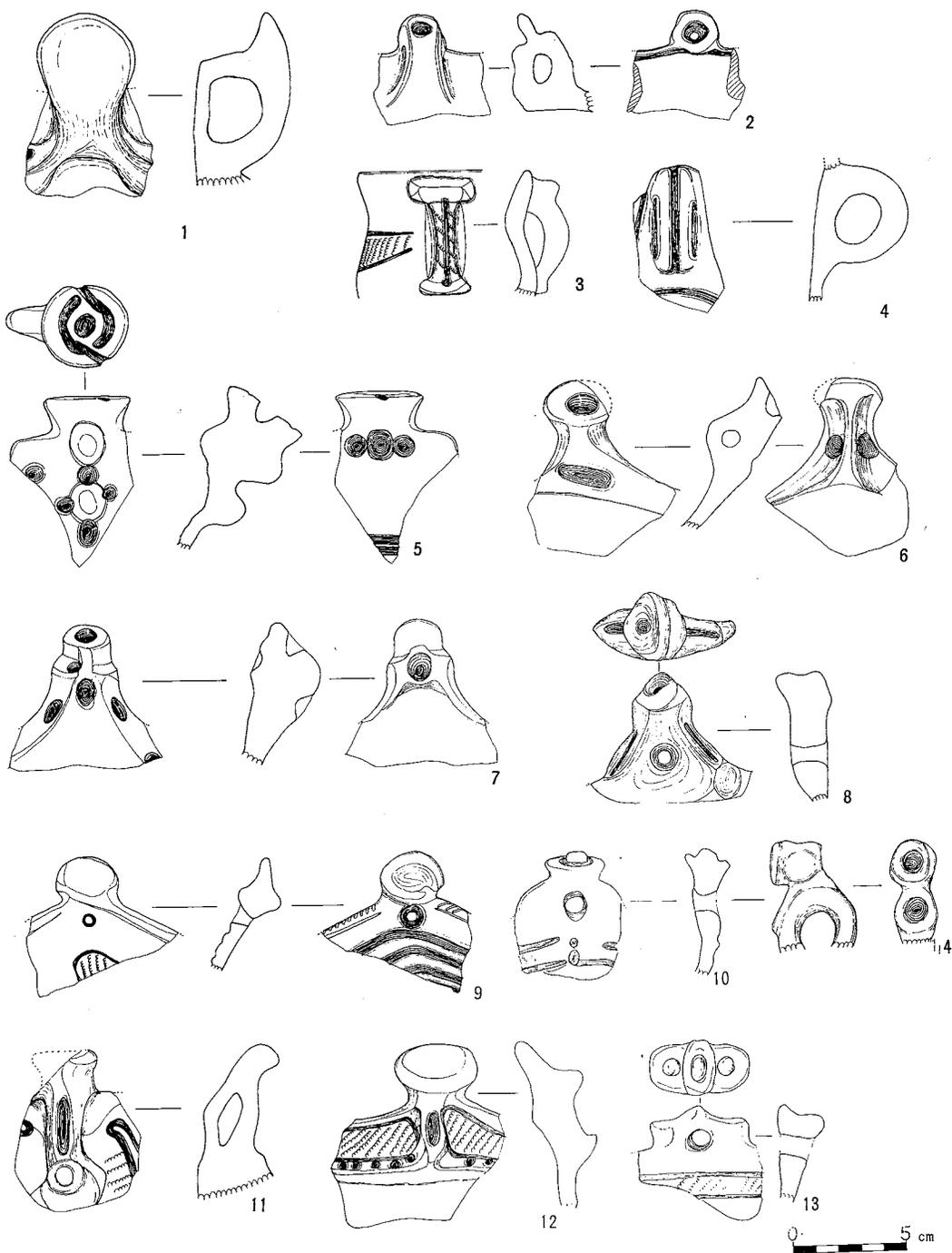
第160図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



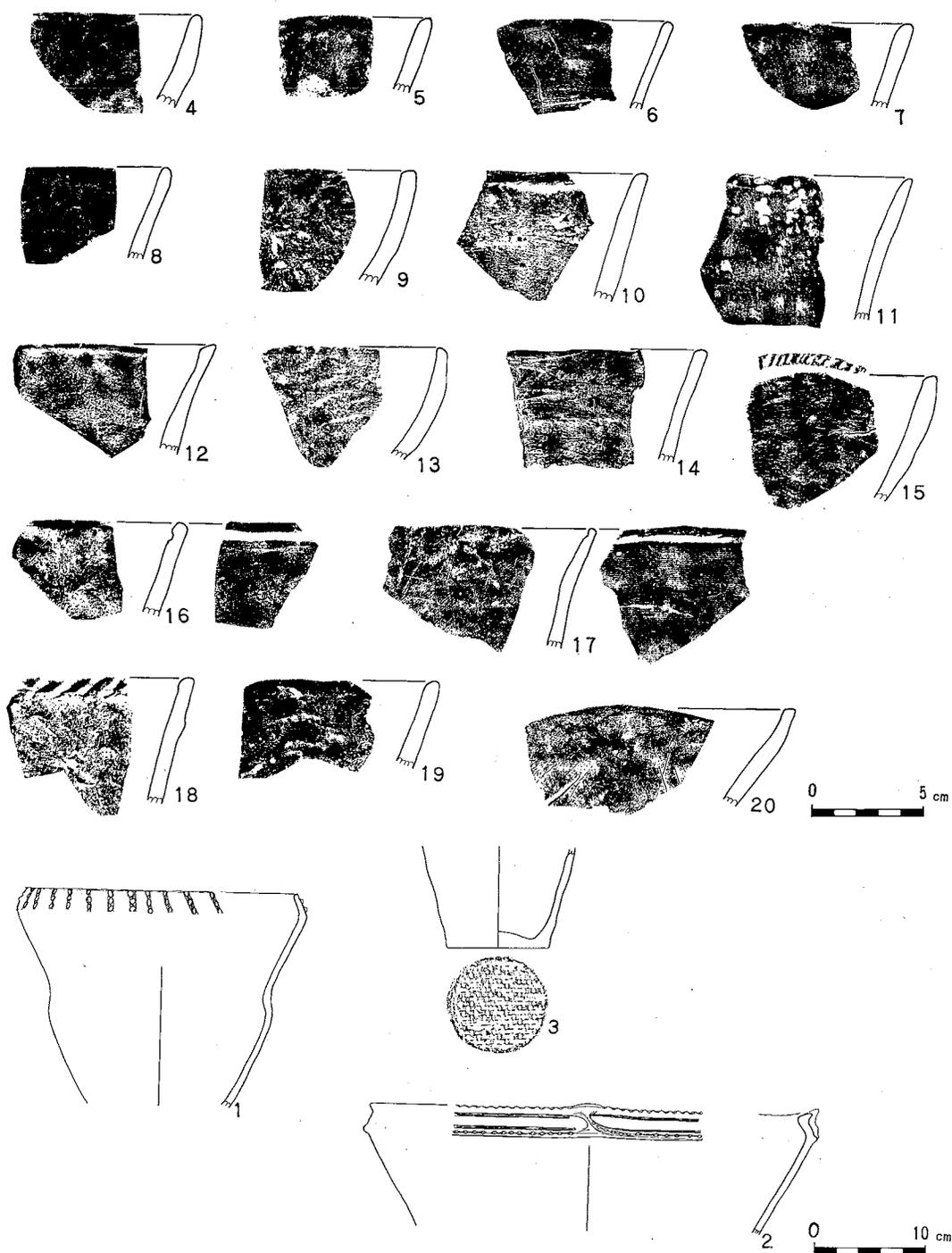
第161図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



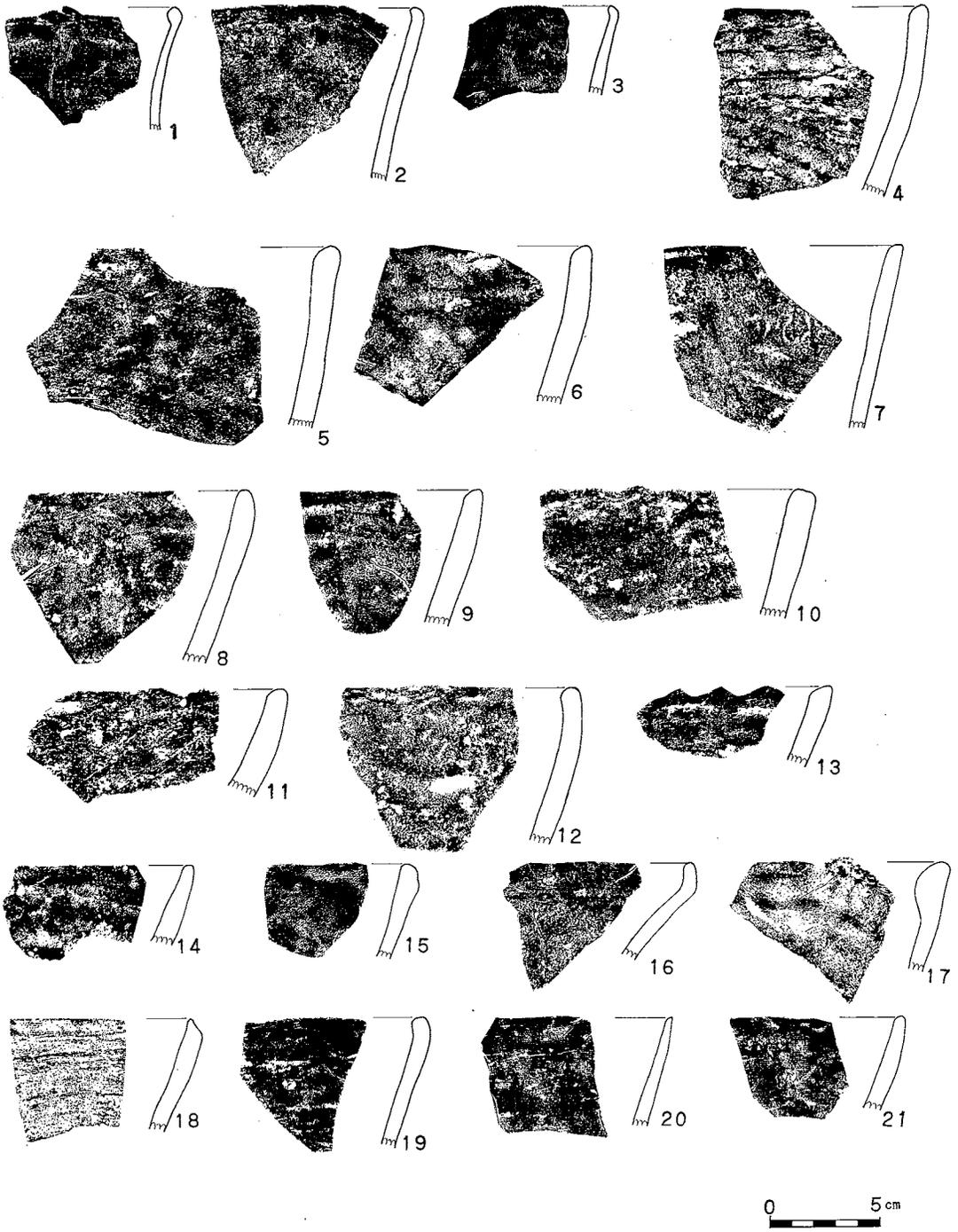
第162図 百駄刈遺跡その他出土土器（1：3）



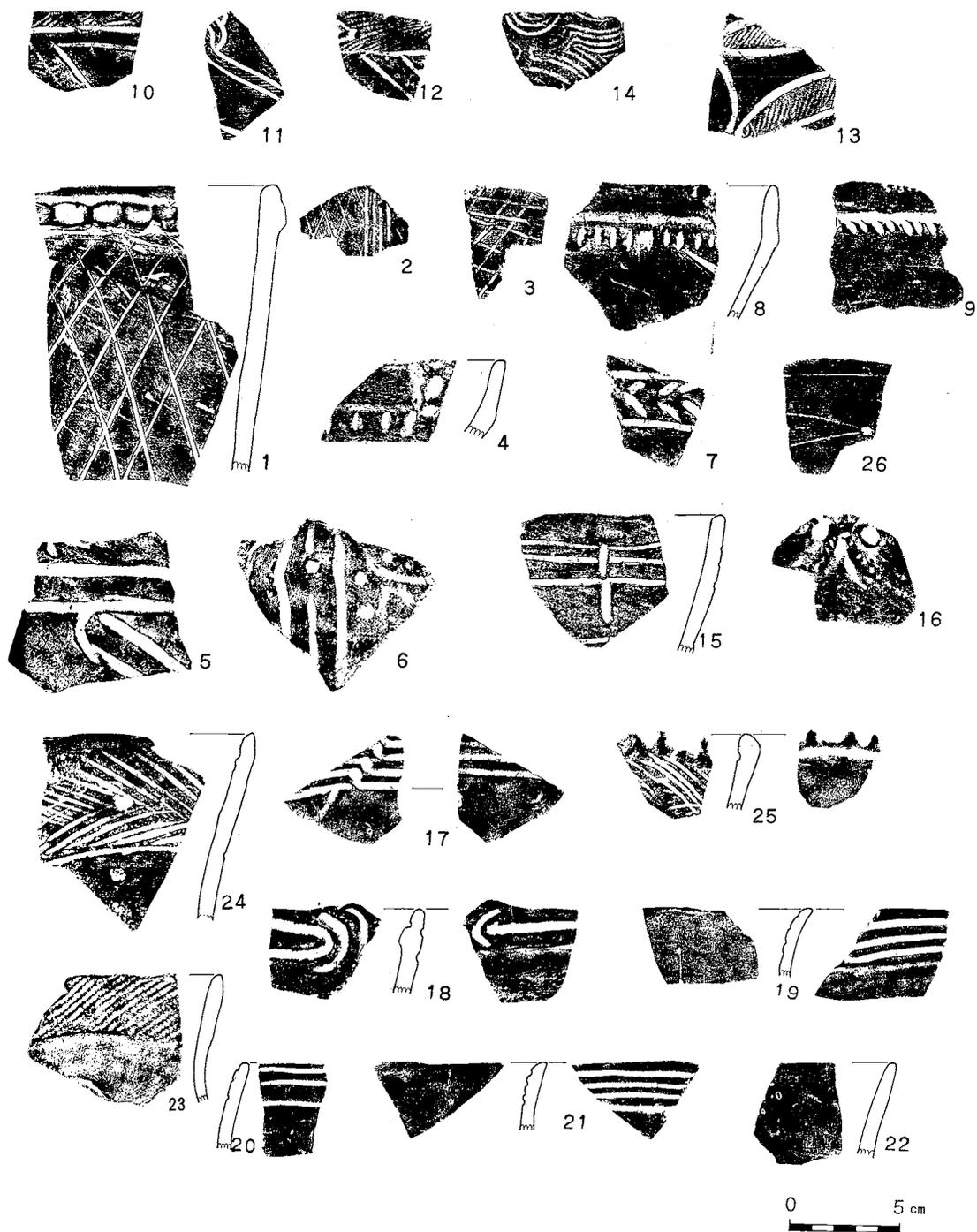
第163図 百駮刈遺跡その他出土土器 (1:3)



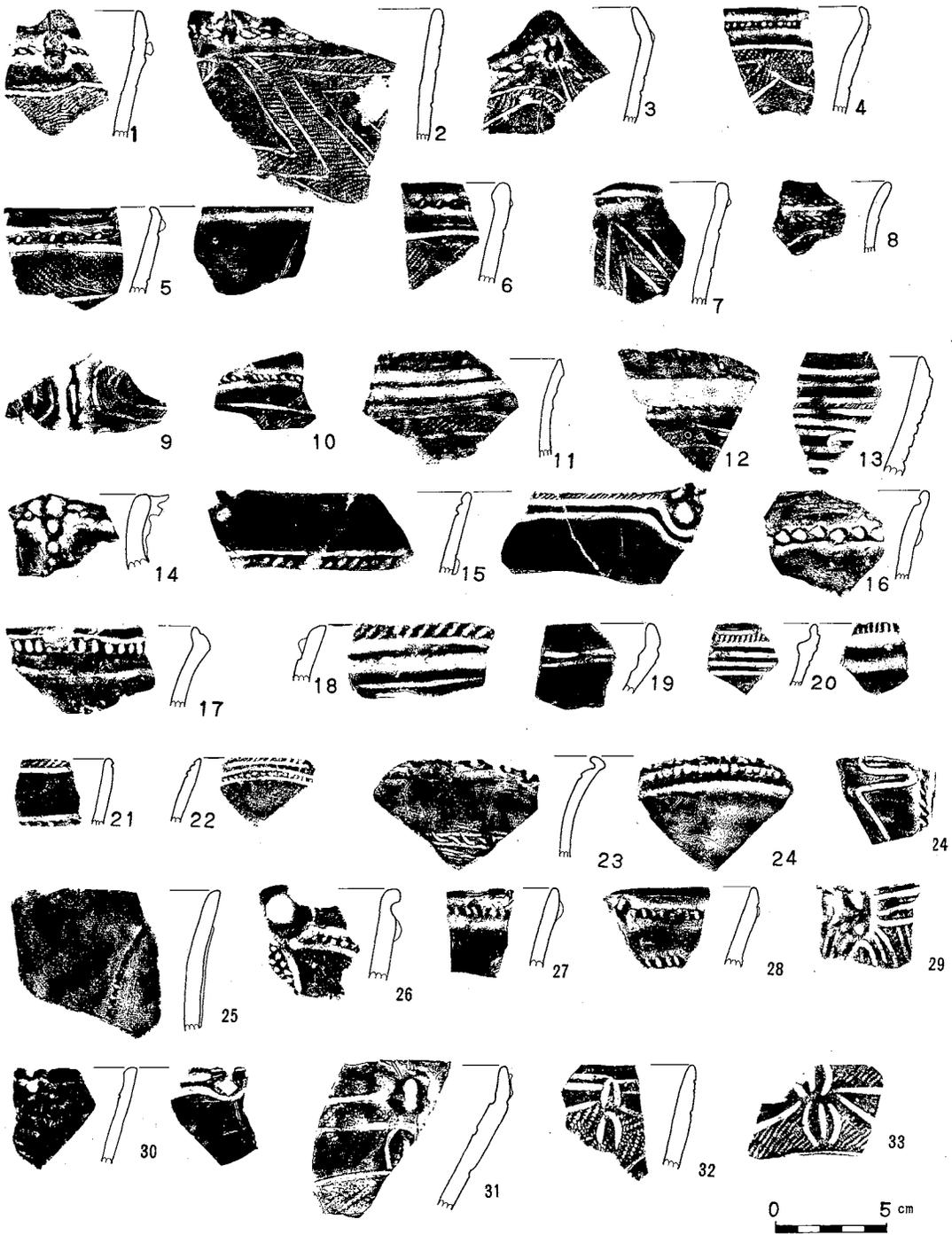
第164図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1 : 3, 1~3 1 : 6)



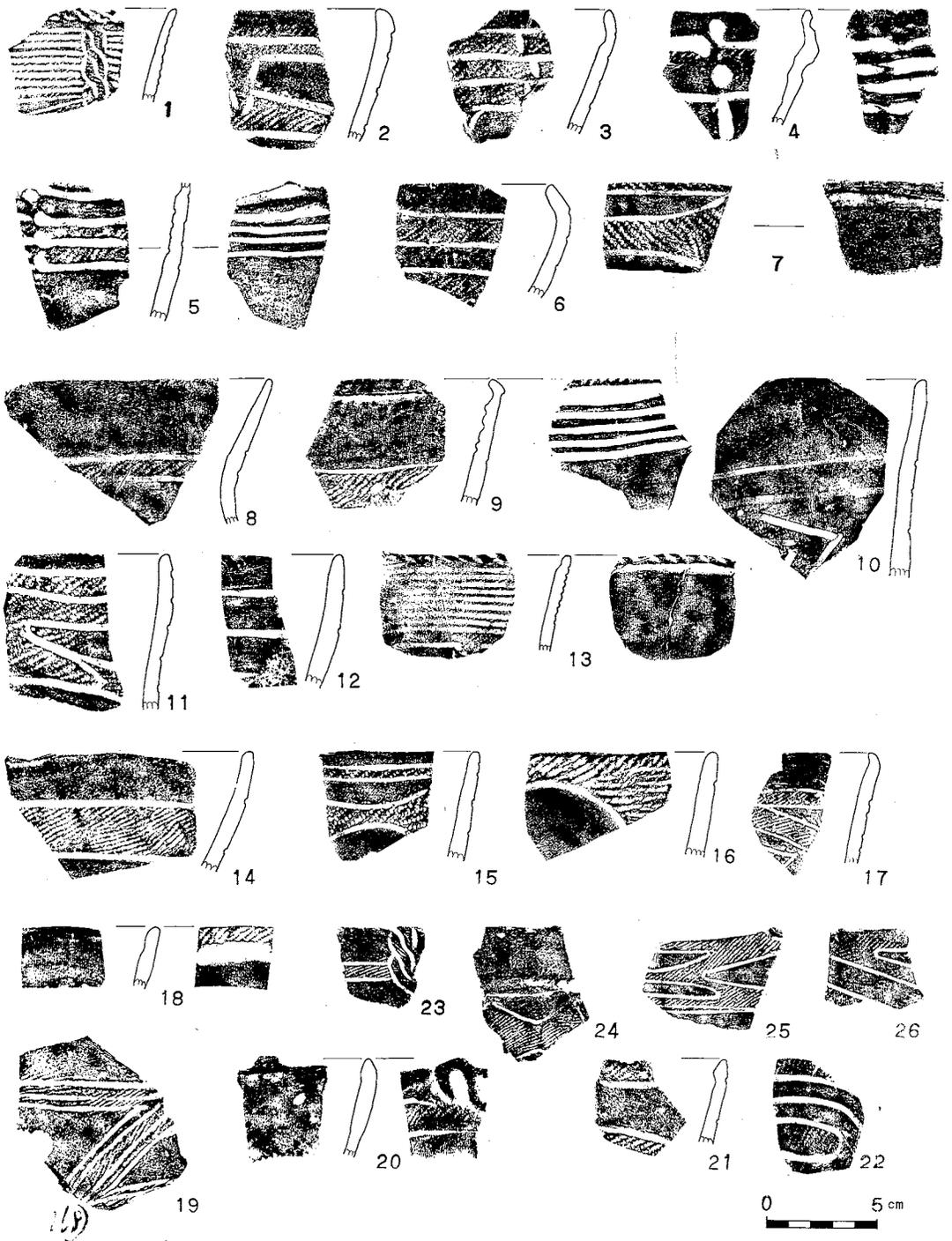
第165図 百駄刈遺跡その他出土土器（1：3）



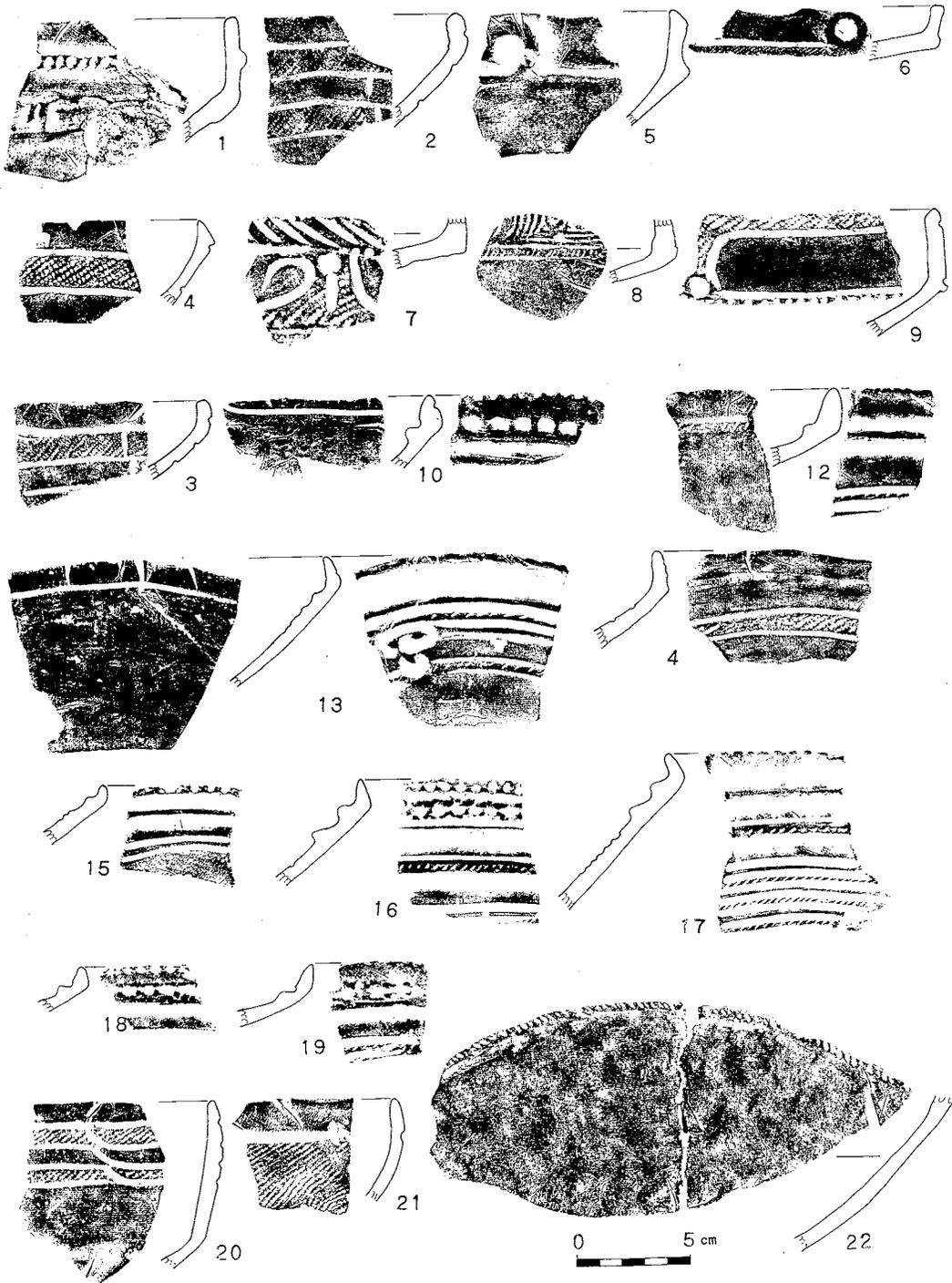
第166図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1 : 3)



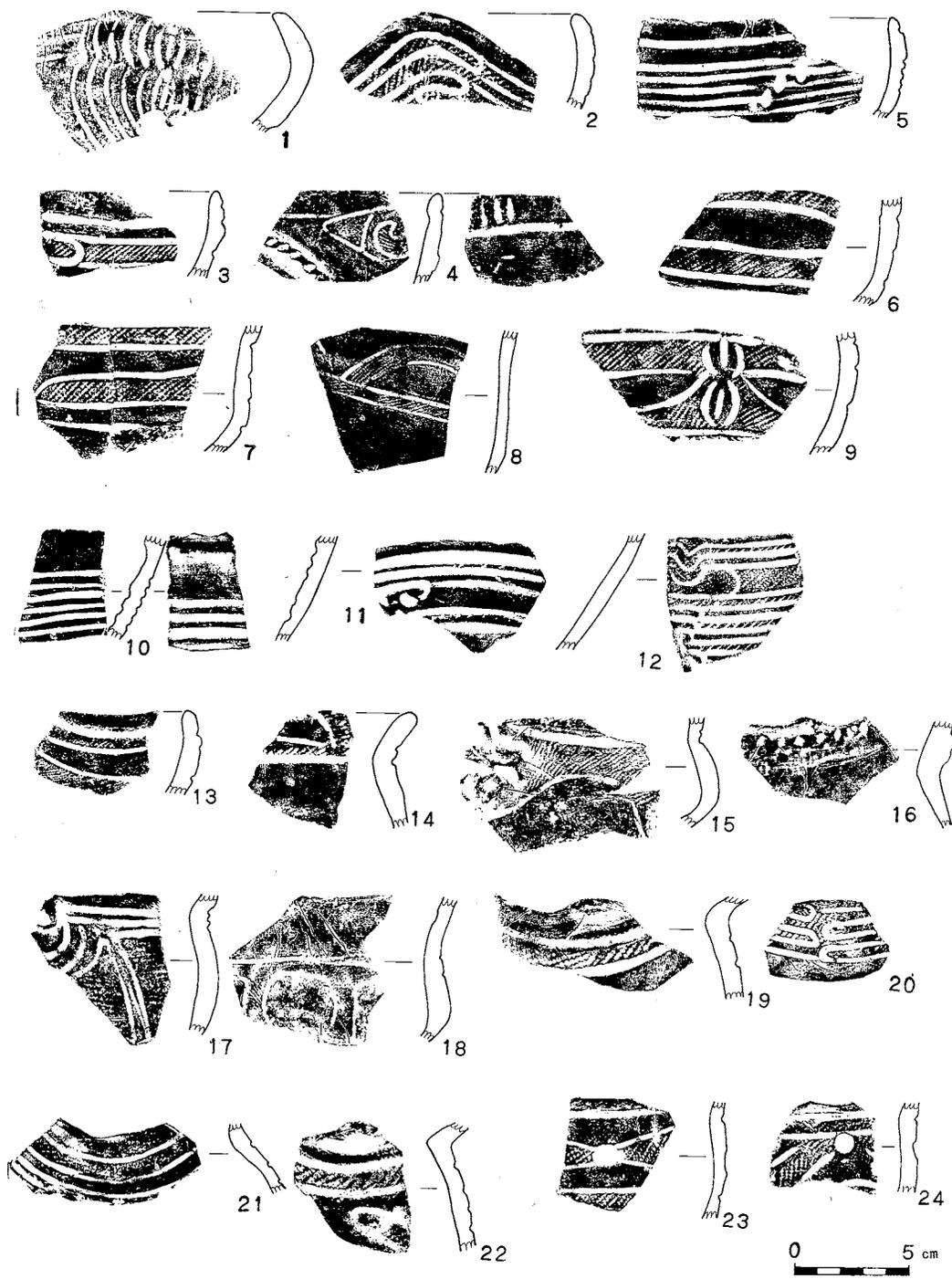
第167図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



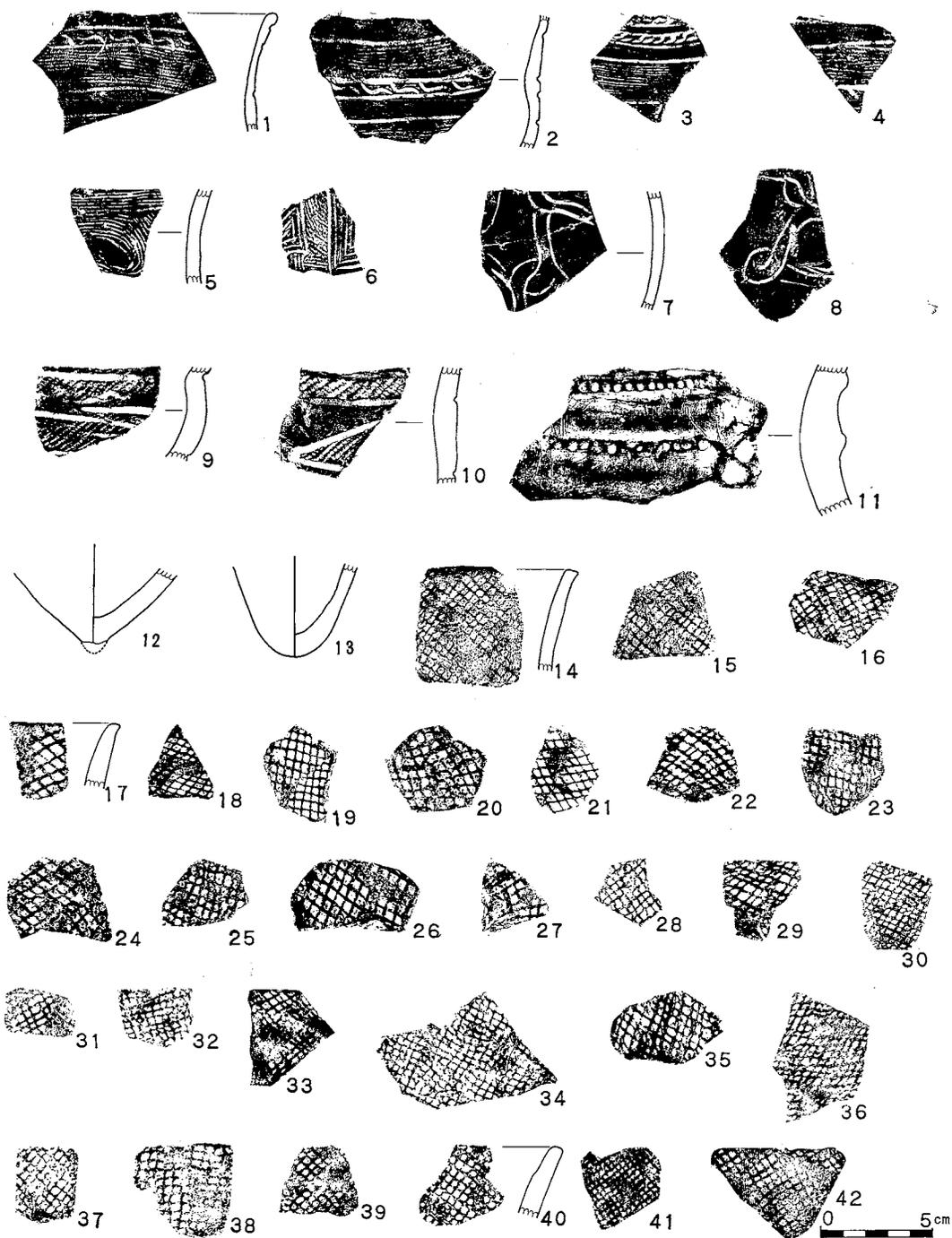
第168図 百駄刈遺跡その他出土土器（1：3）



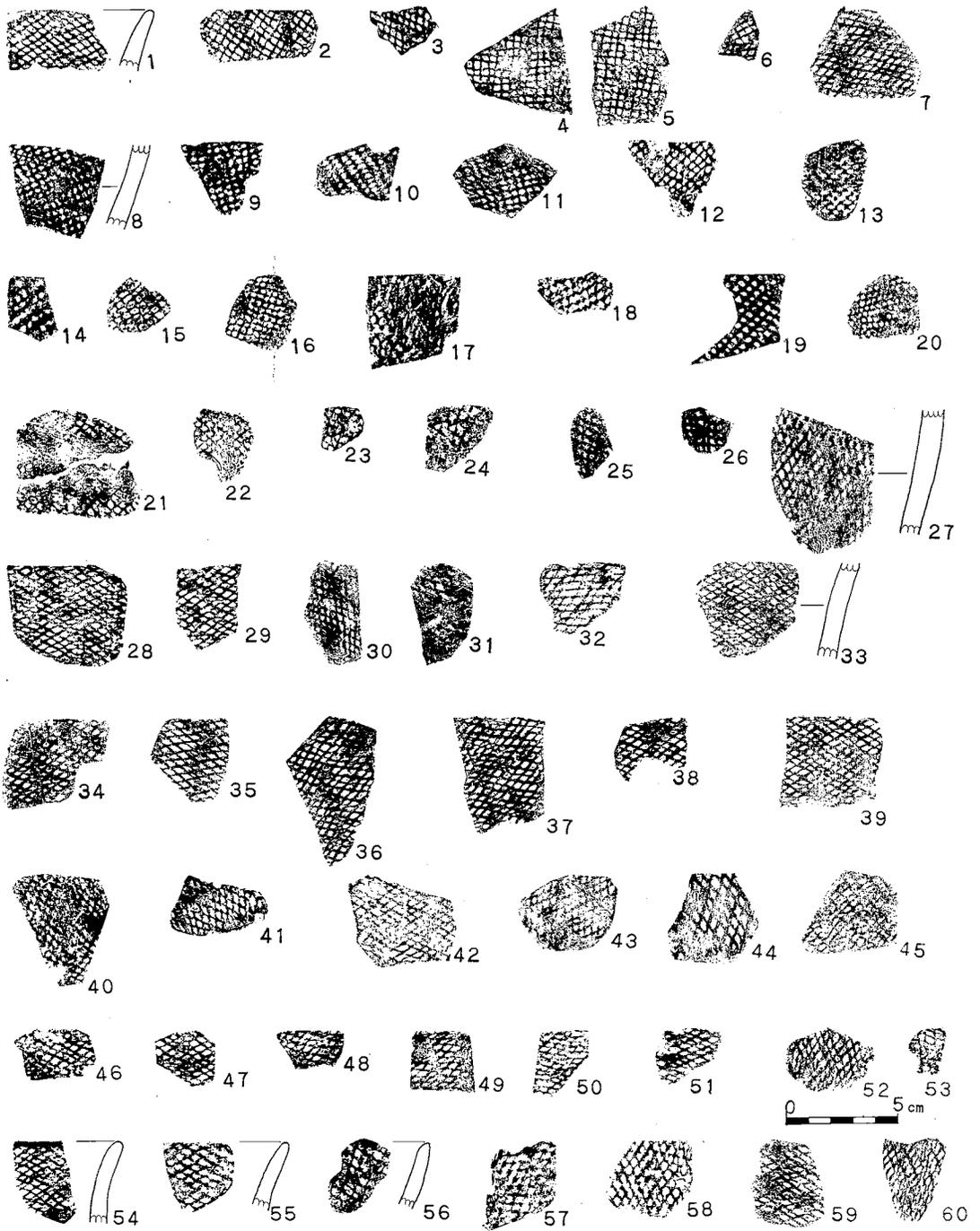
第169図 百駄刈遺跡その他出土土器（1：3）



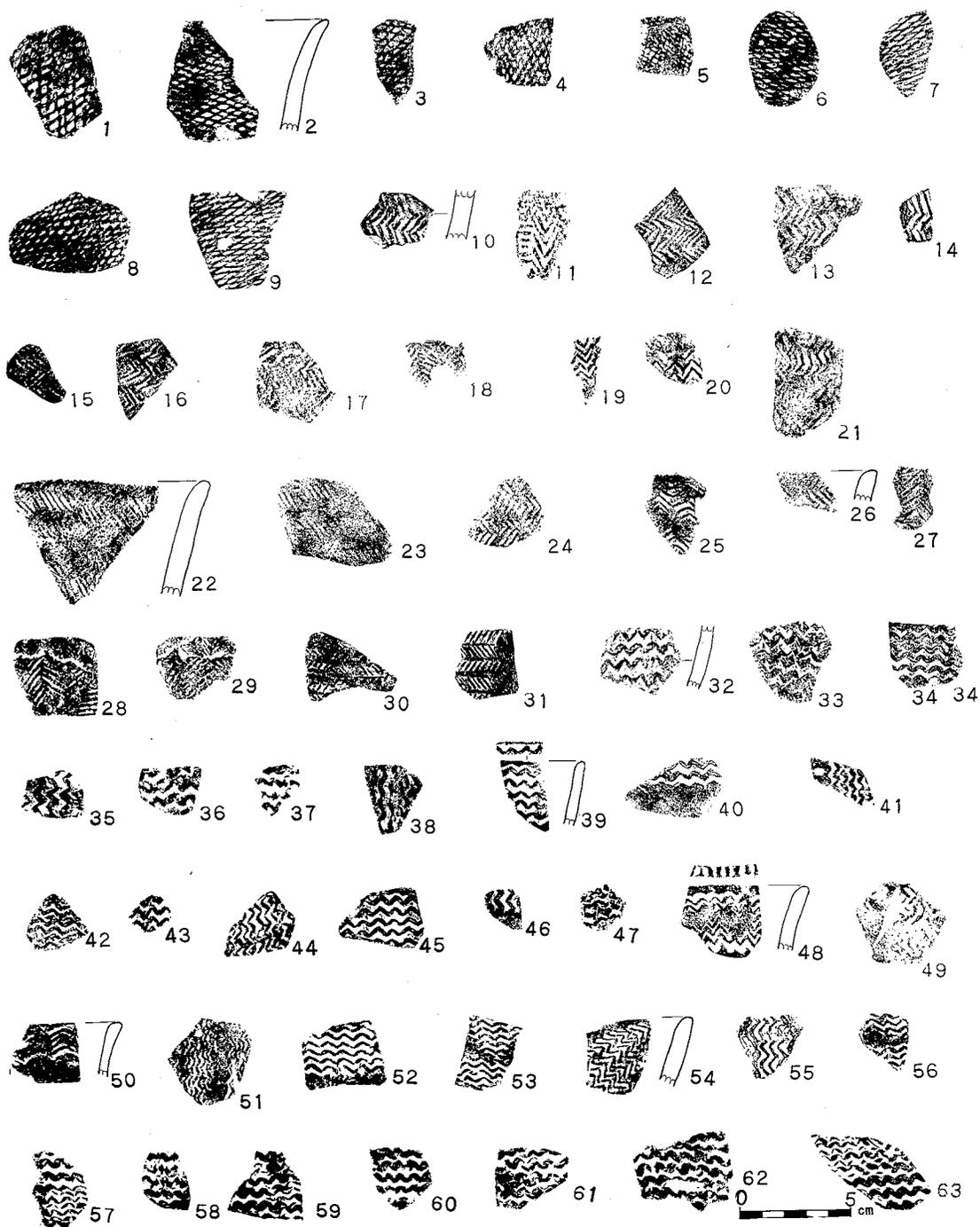
第170図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



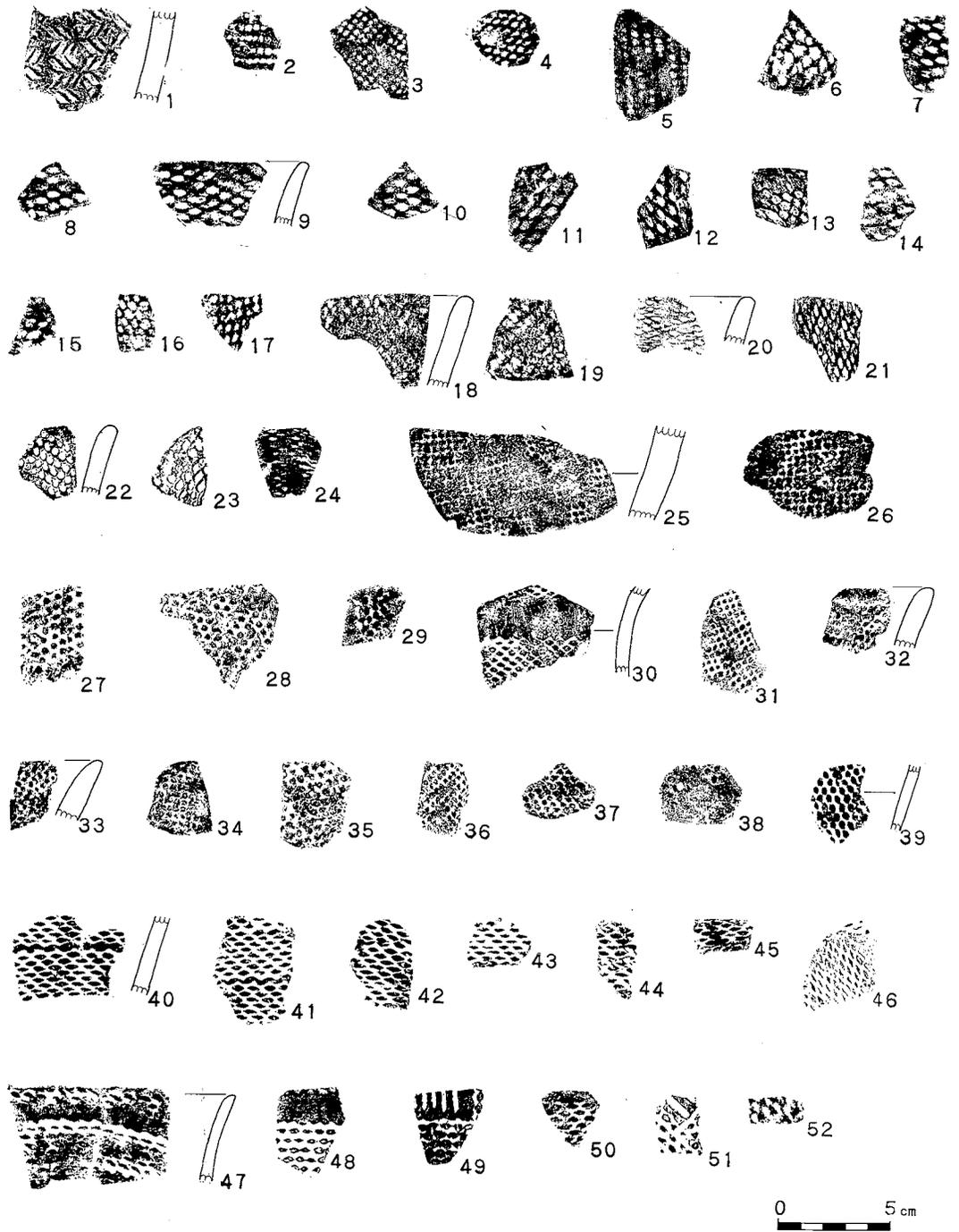
第171図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



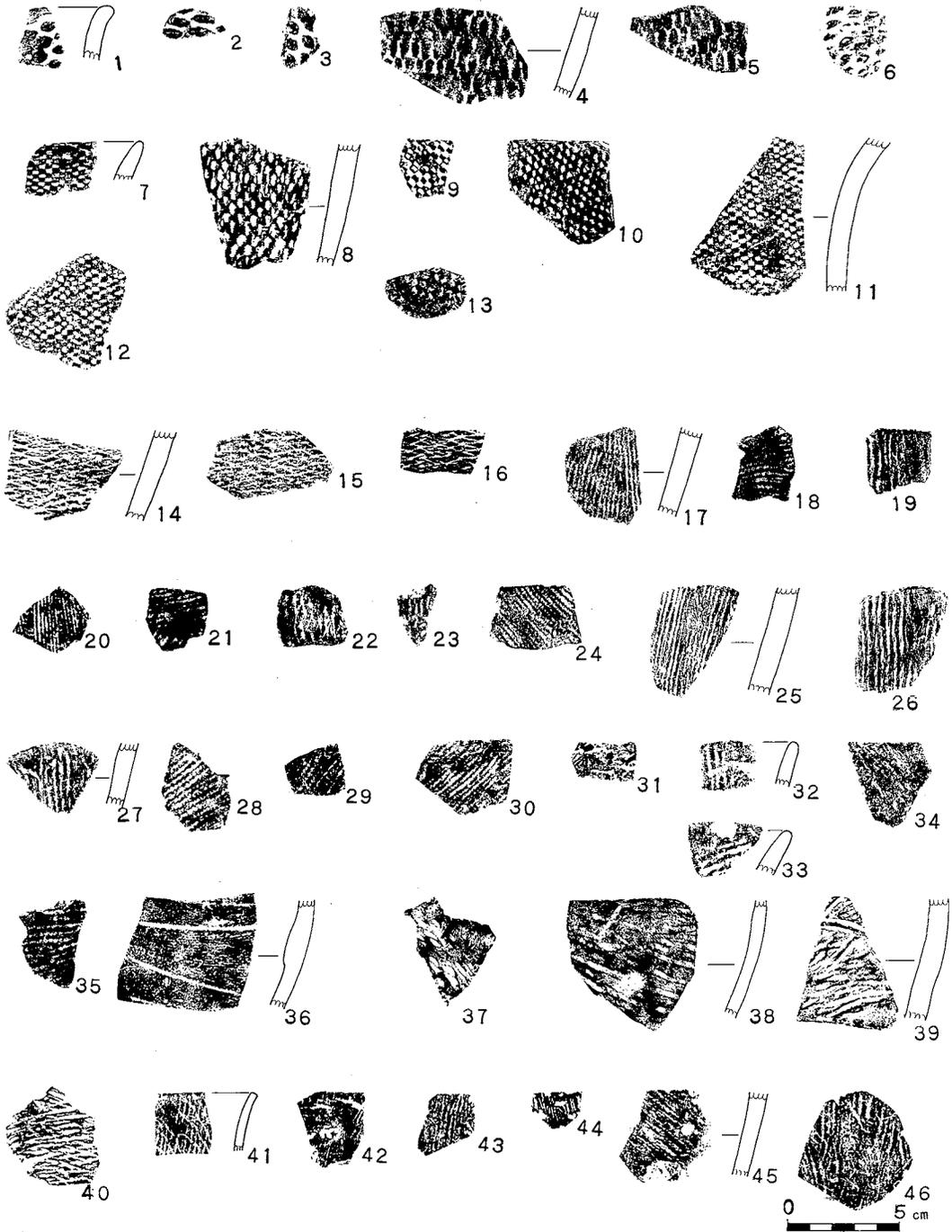
第172図 百駟刈遺跡その他出土土器 (1:3)



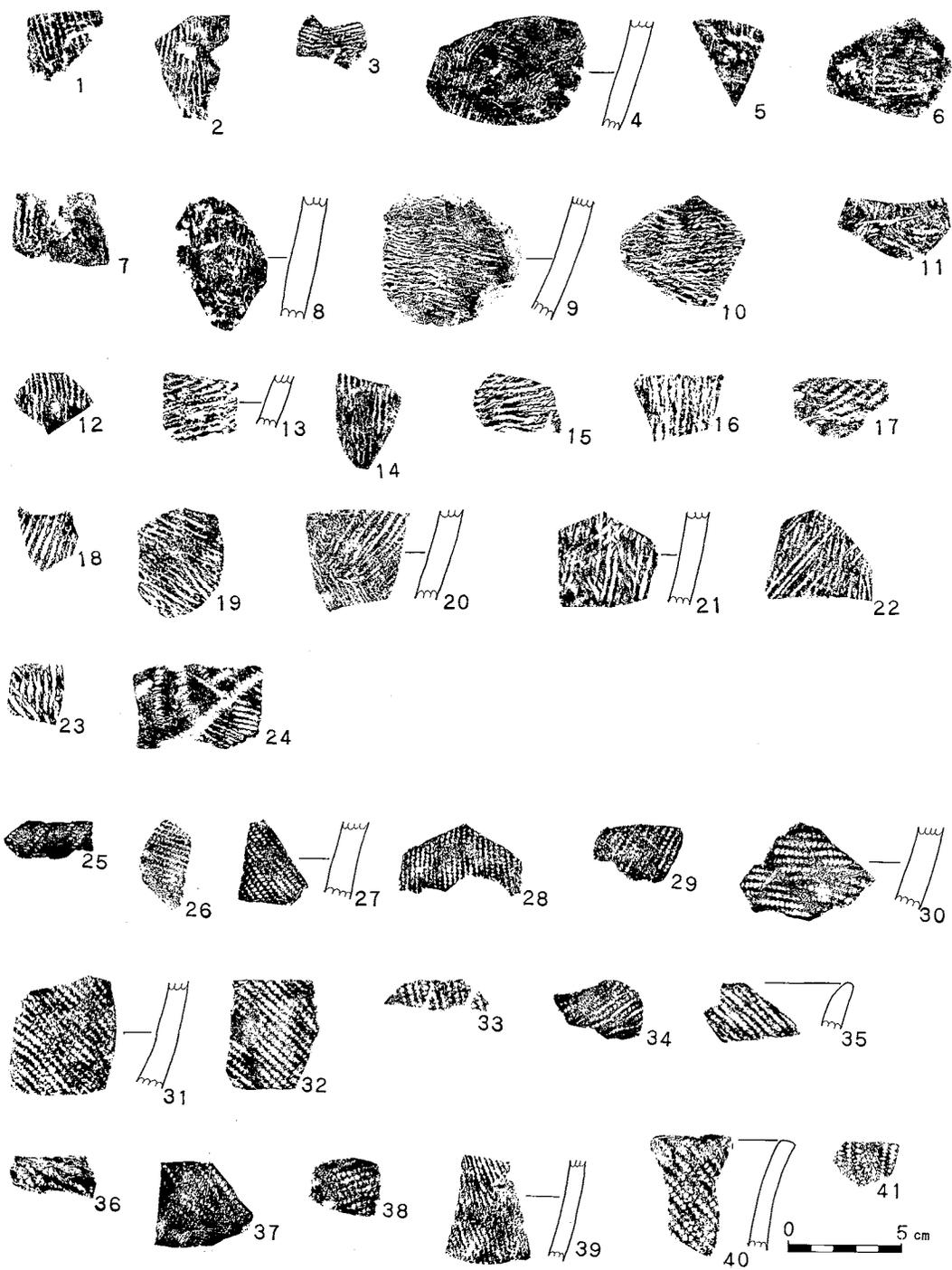
第173図 百敷刈遺跡その他出土土器 (1:3)



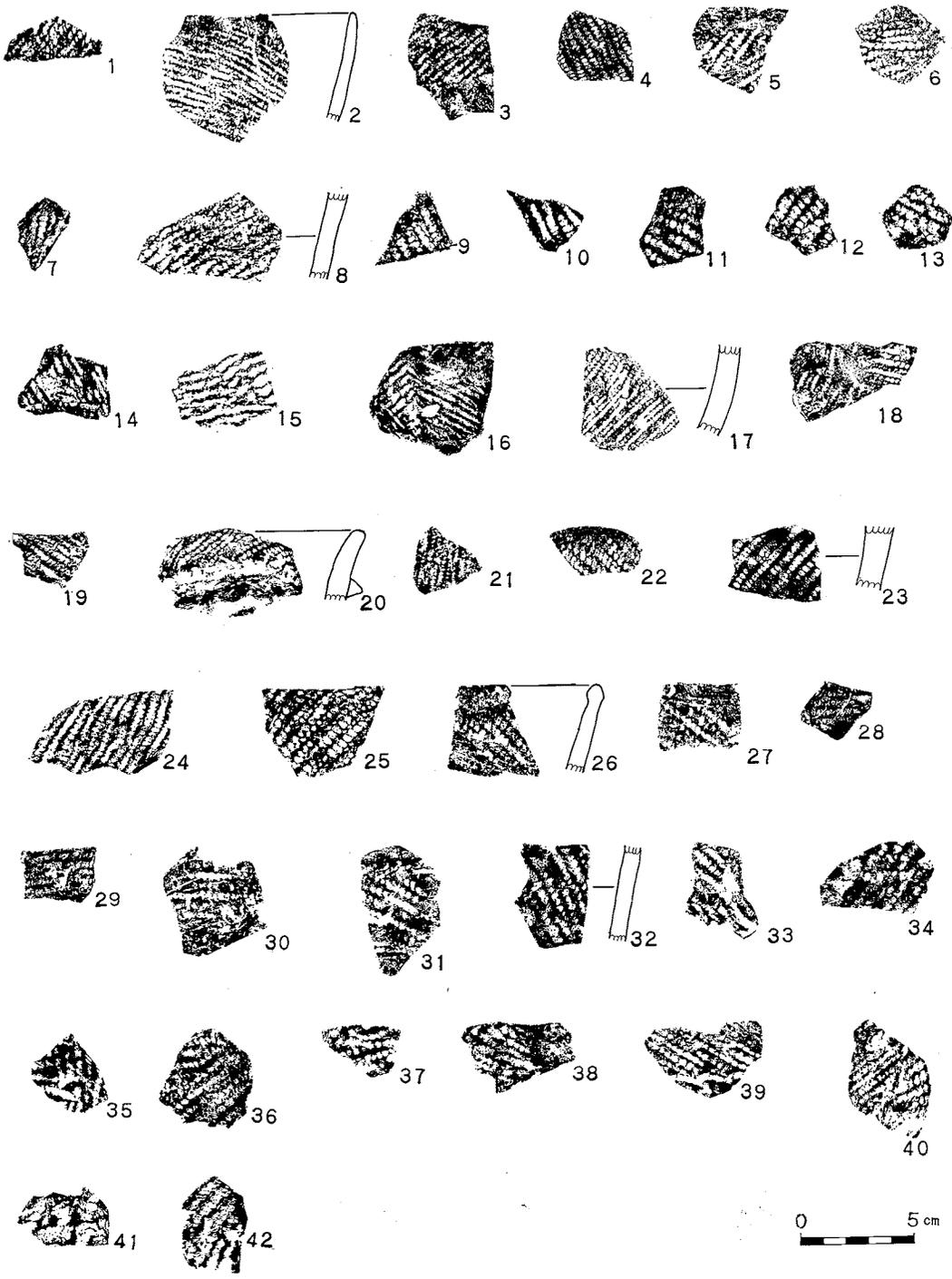
第174図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



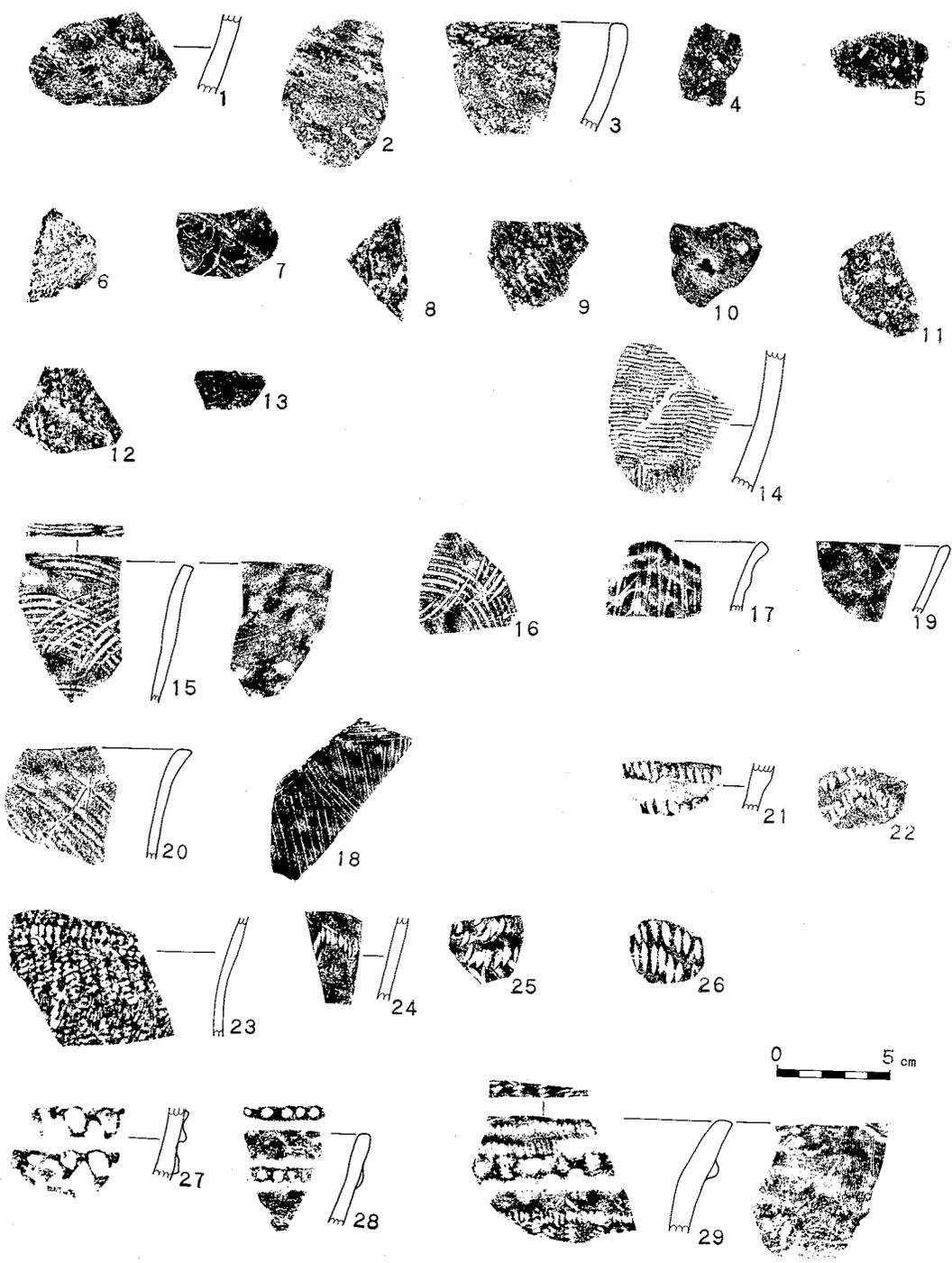
第175図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



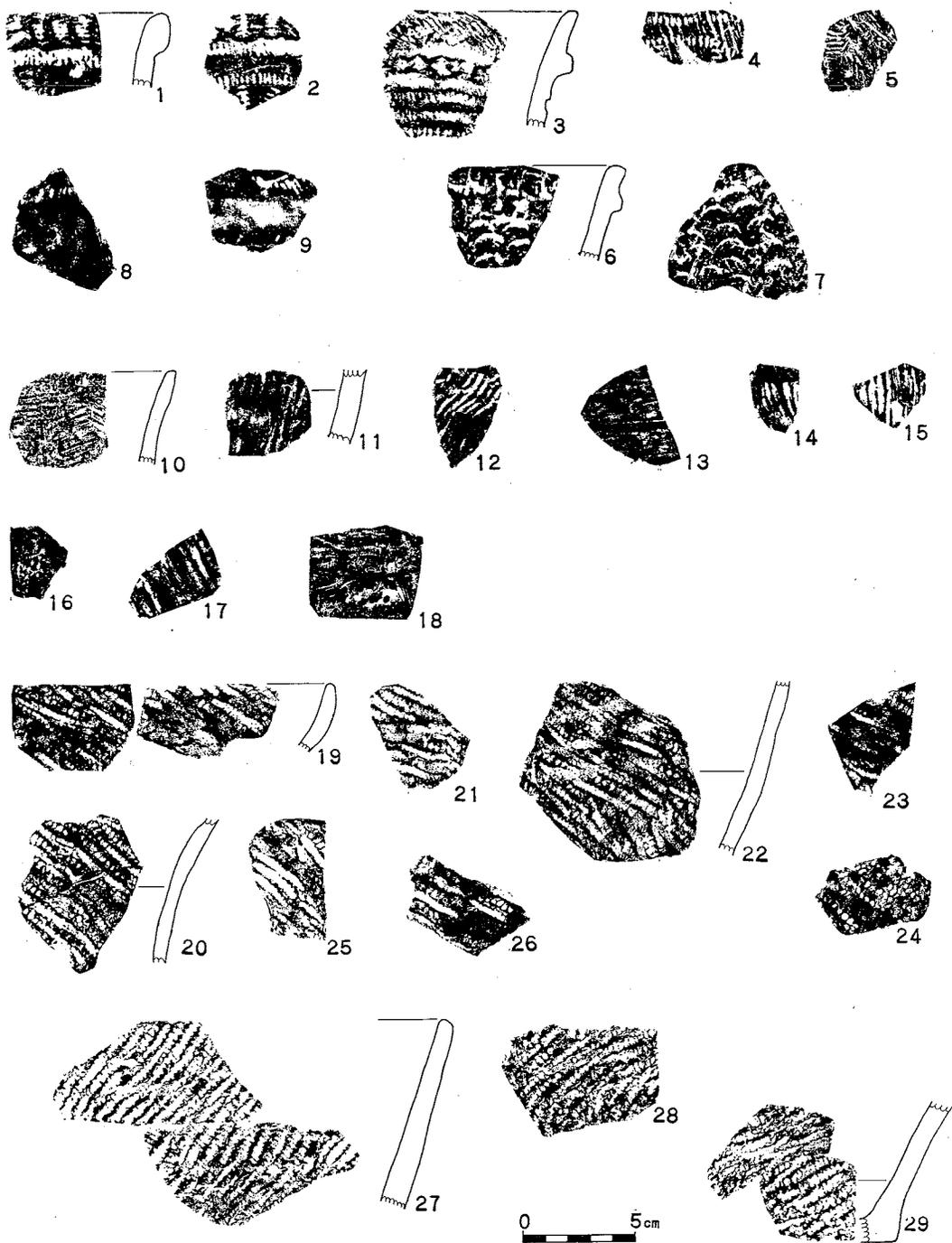
第176図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1 : 3)



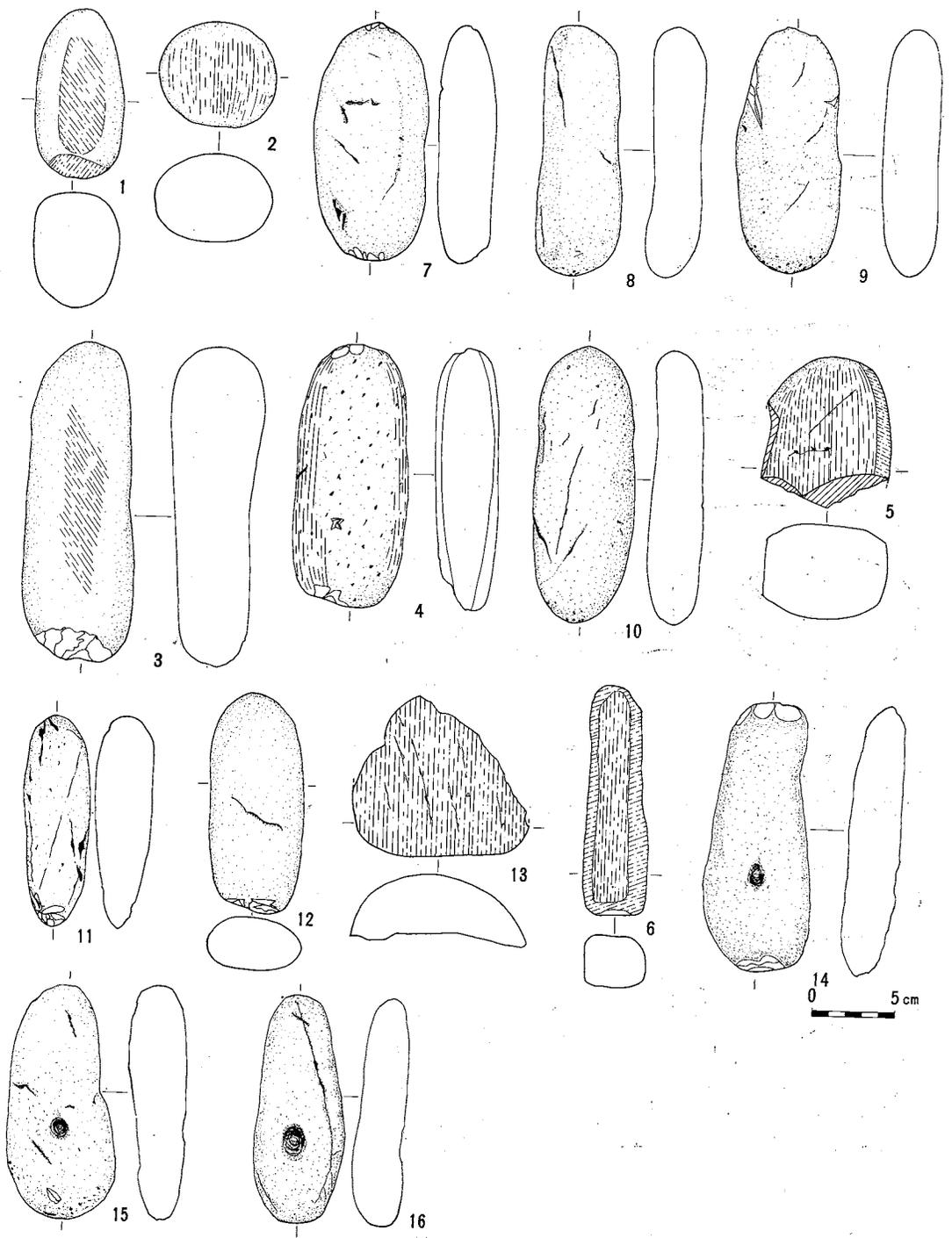
第177図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1:3)



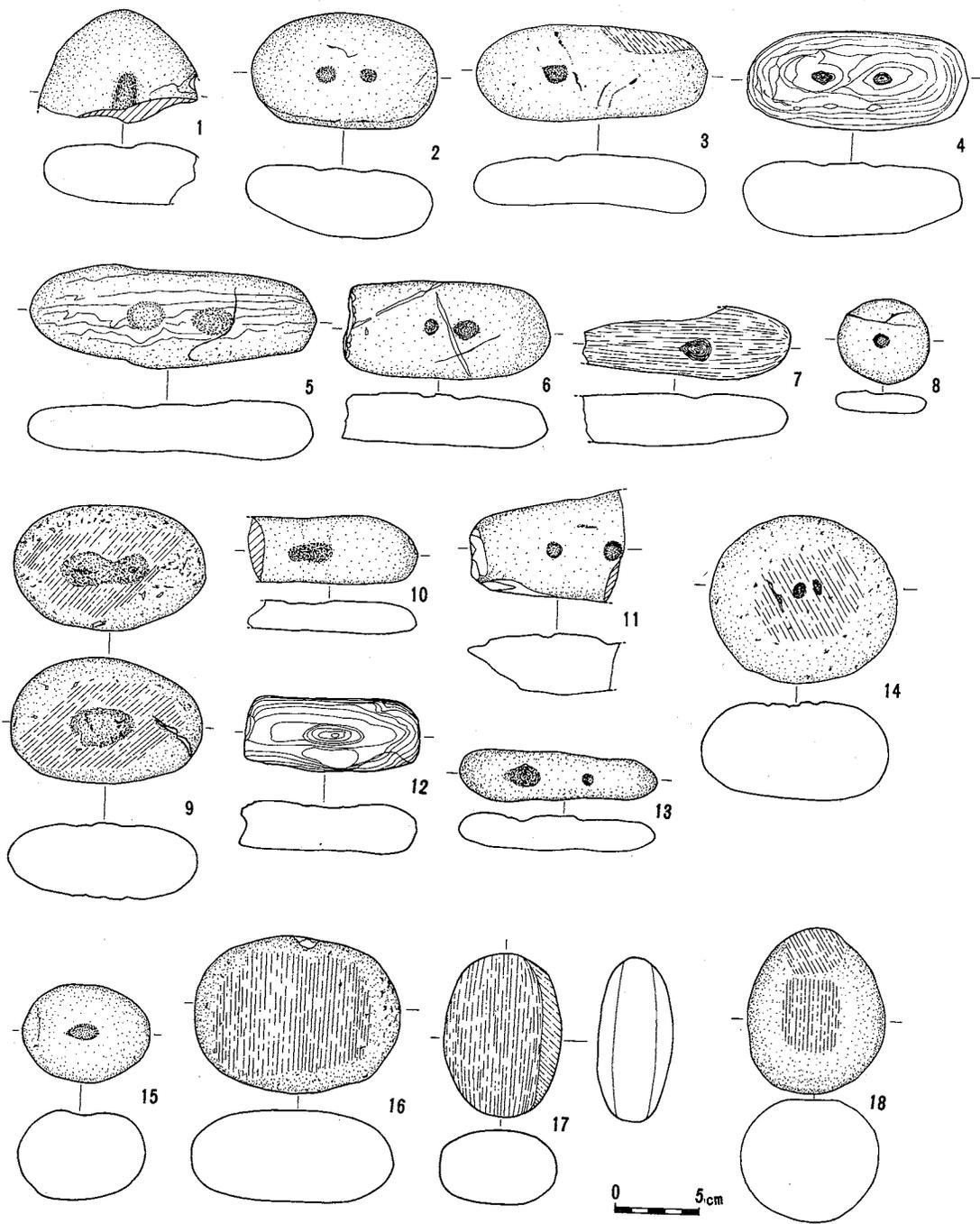
第178図 百駟刈遺跡その他出土土器 (1:3)



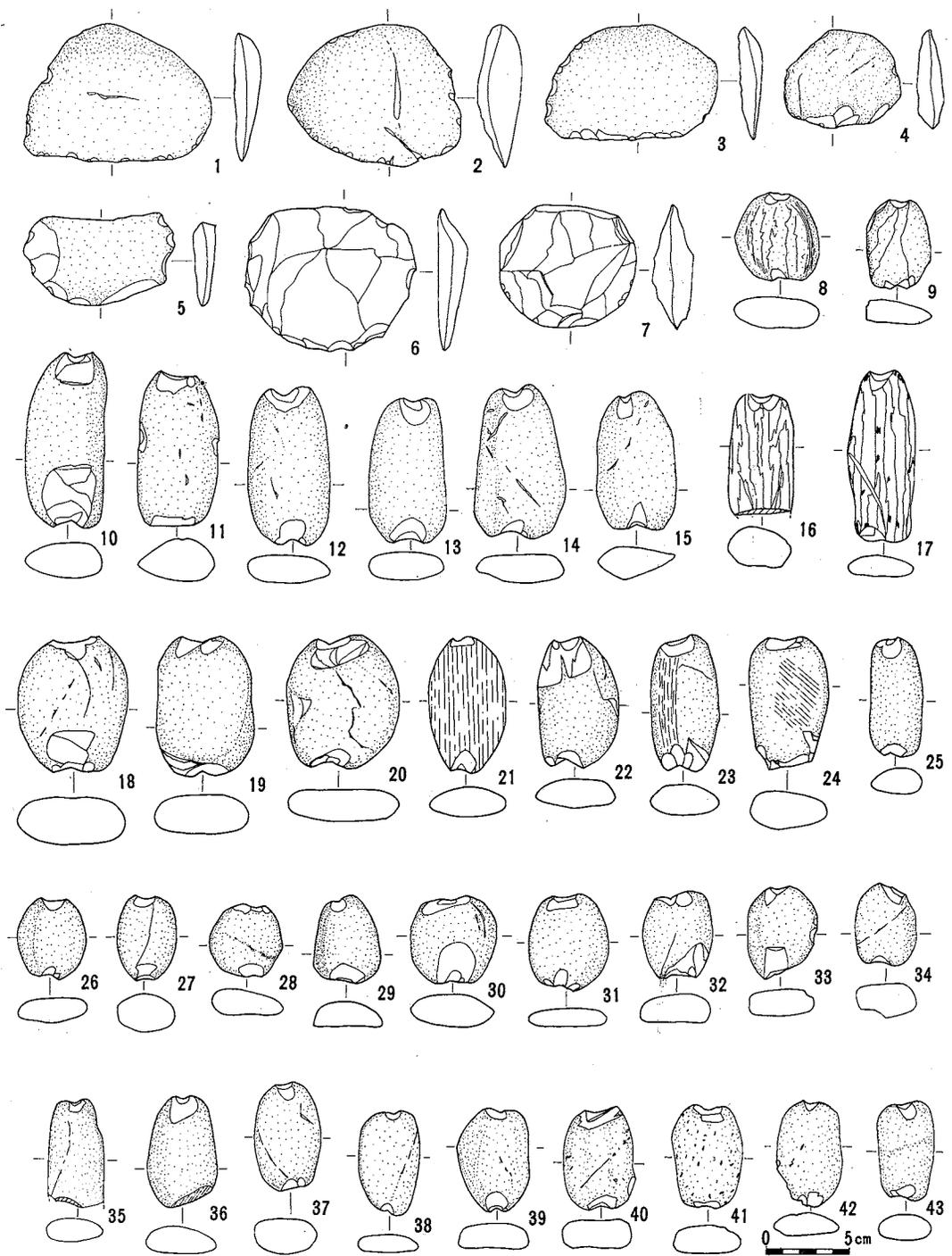
第179図 百駄刈遺跡その他出土土器 (1 : 3)



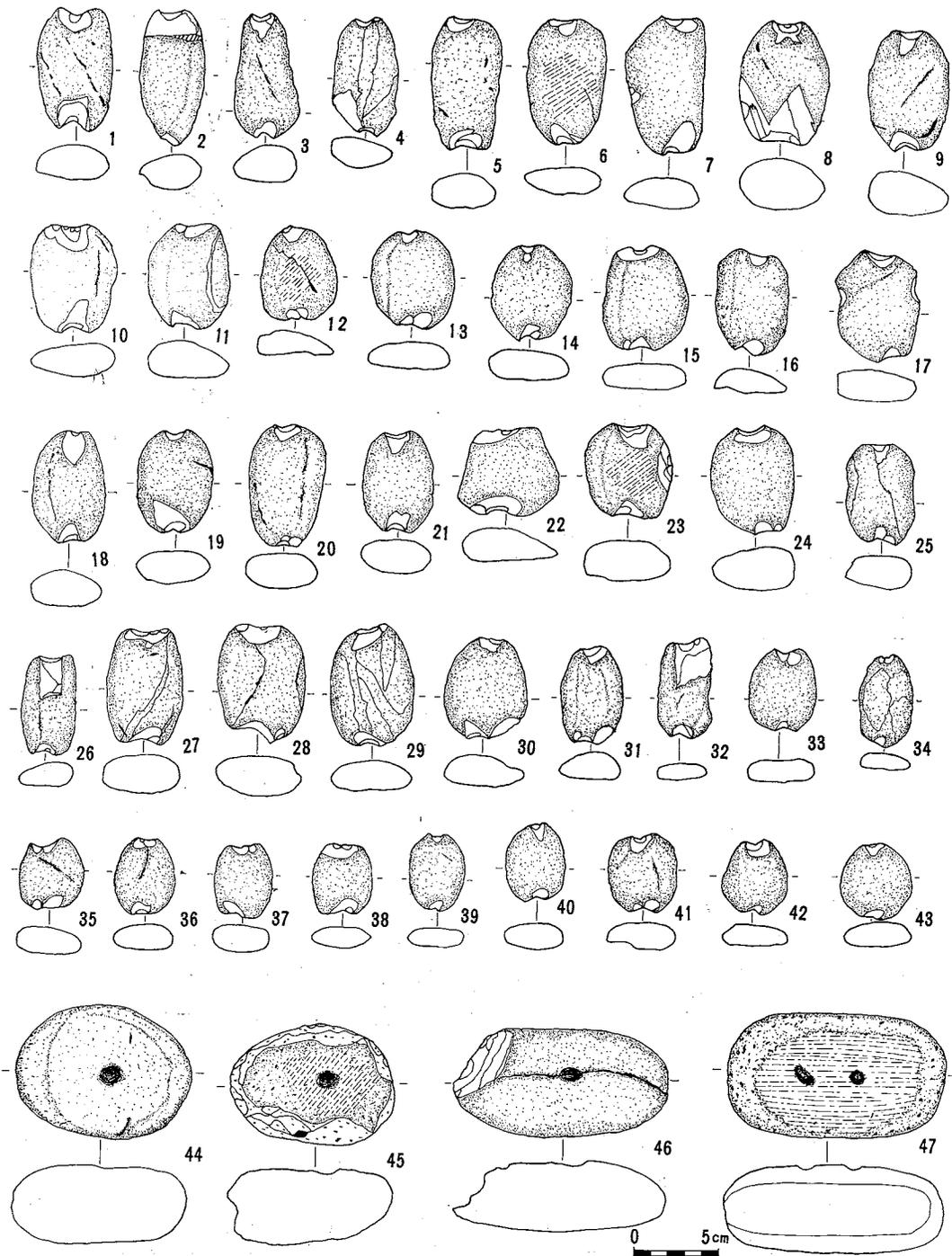
第180図 百駄刈遺跡その他出土石器 (1 : 4)



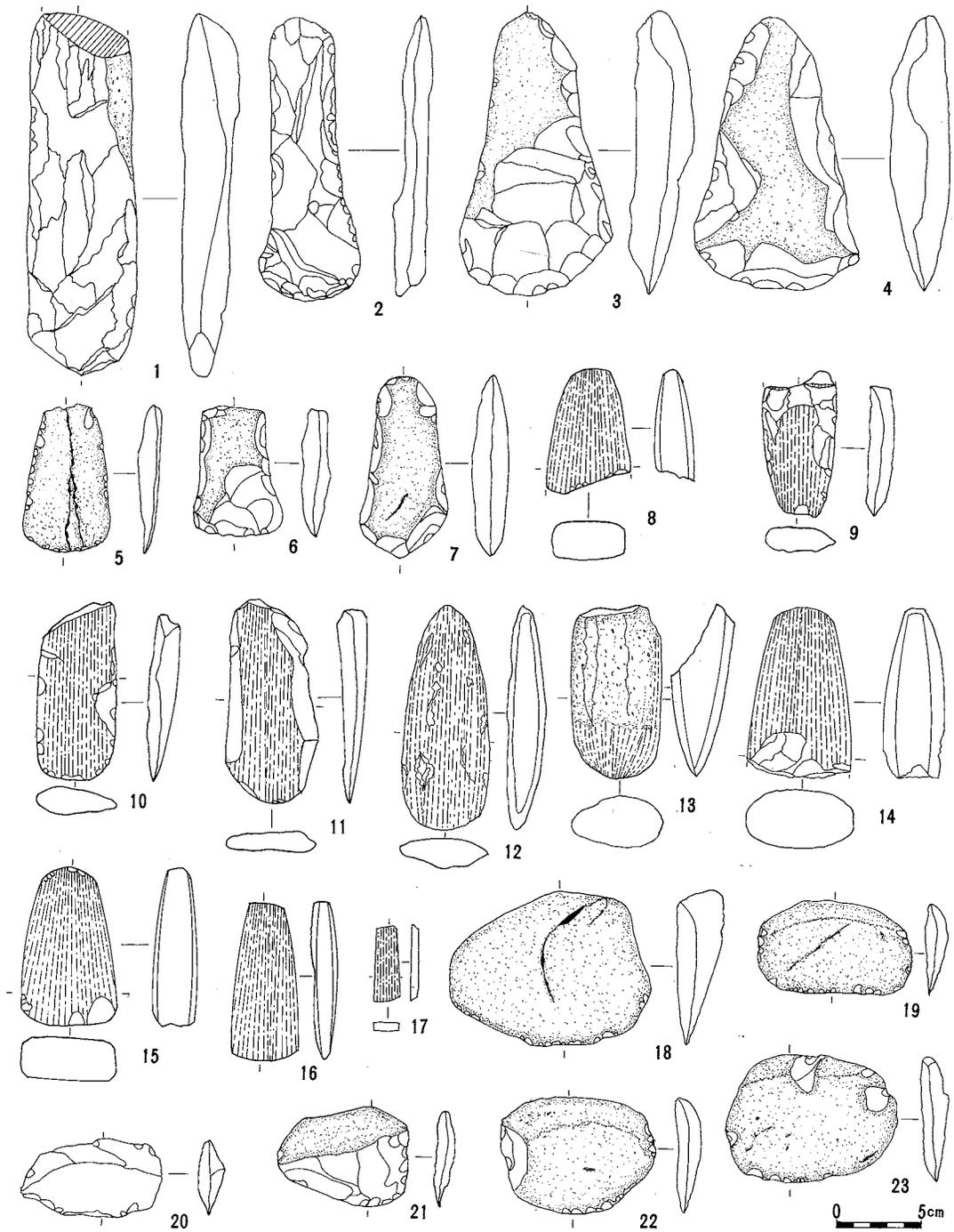
第181図 百駄刈遺跡その他出土石器 (1 : 4)



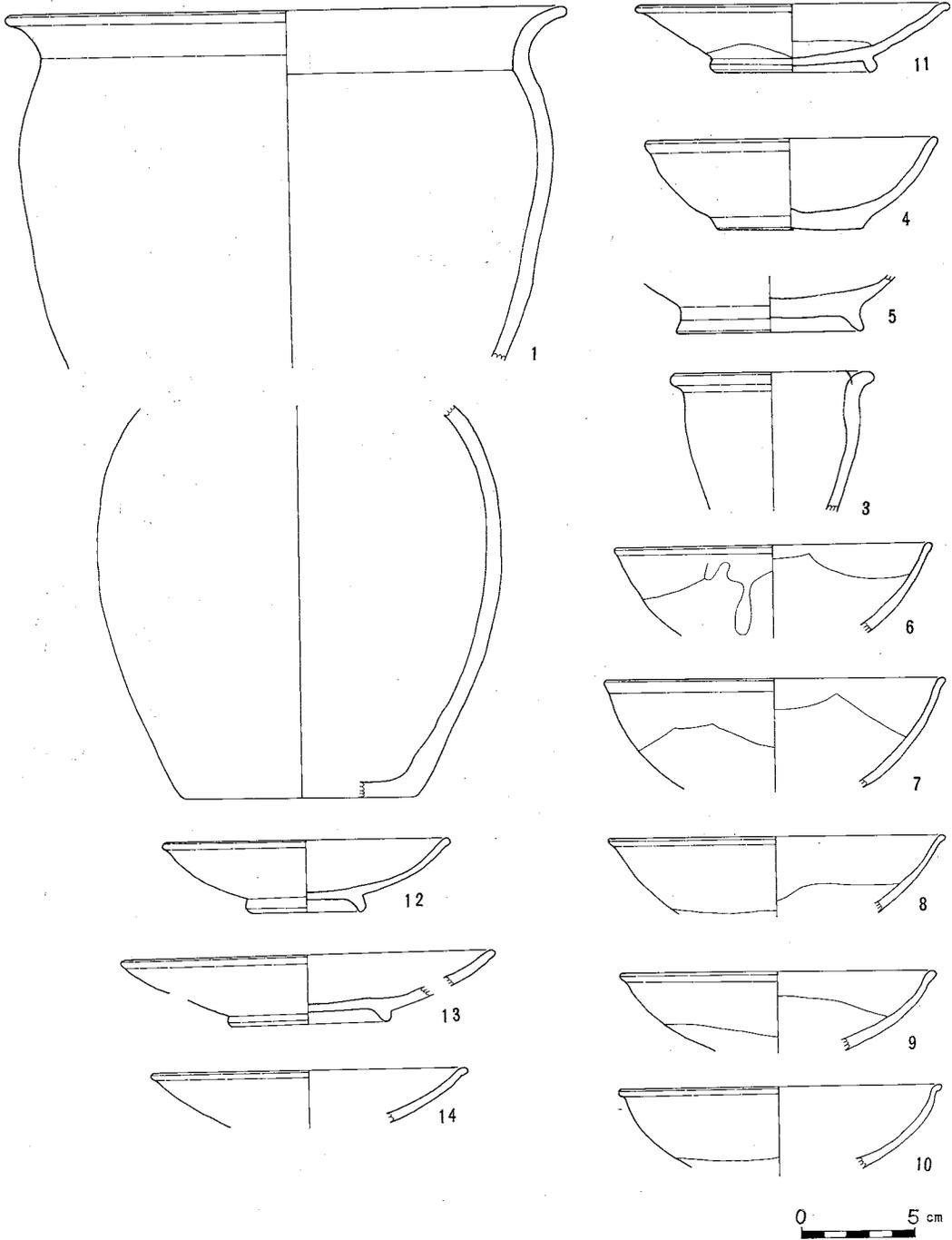
第182図 百駄刈遺跡その他出土石器 (1 : 4)



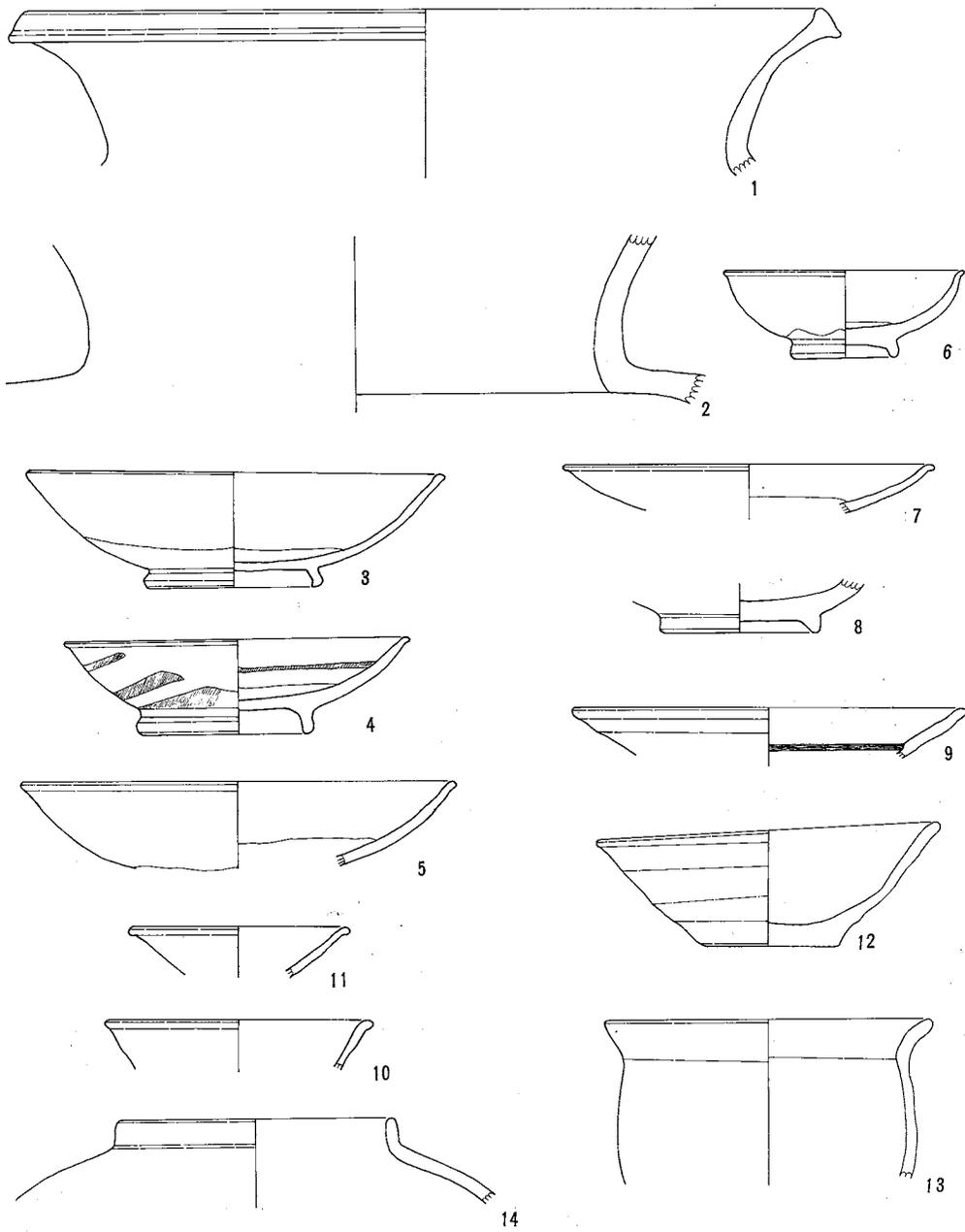
第183図 百駄刈遺跡その他出土石器（1：4）



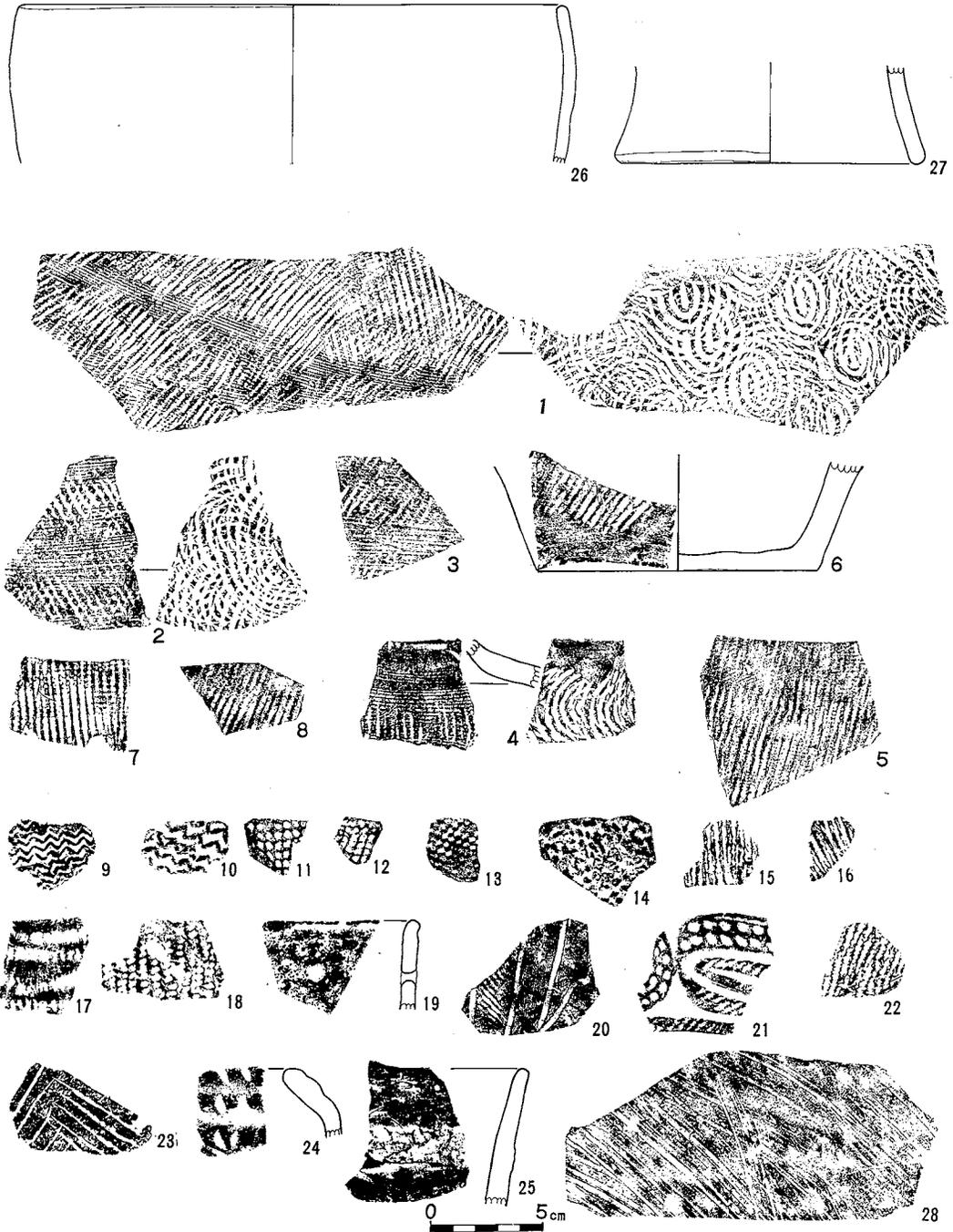
第184図 百駄刈遺跡その他出土石器 (1 : 4)



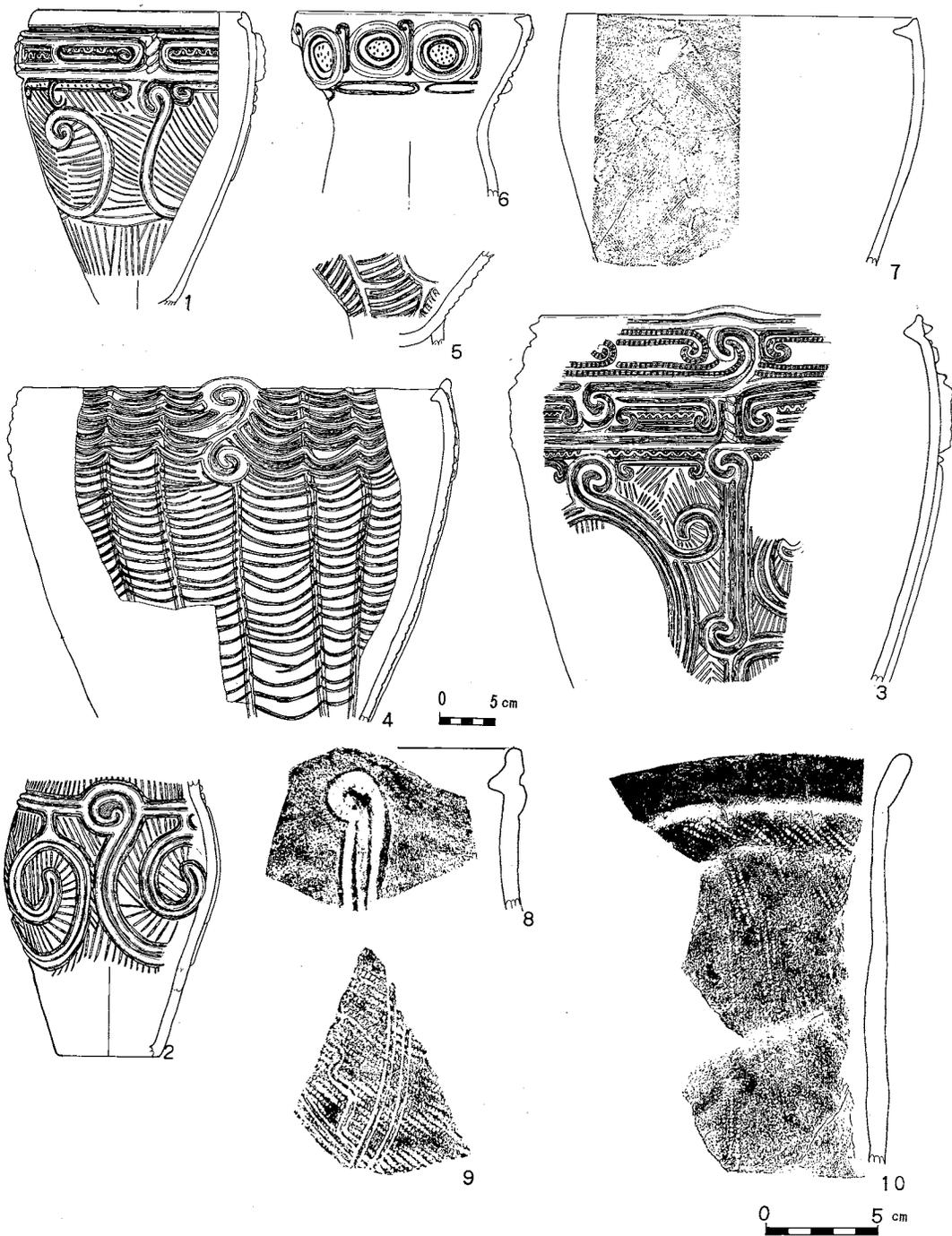
第185图 大境遺跡出土土器 (1:3) (1 1号住居址, 2~14 2号住居址)



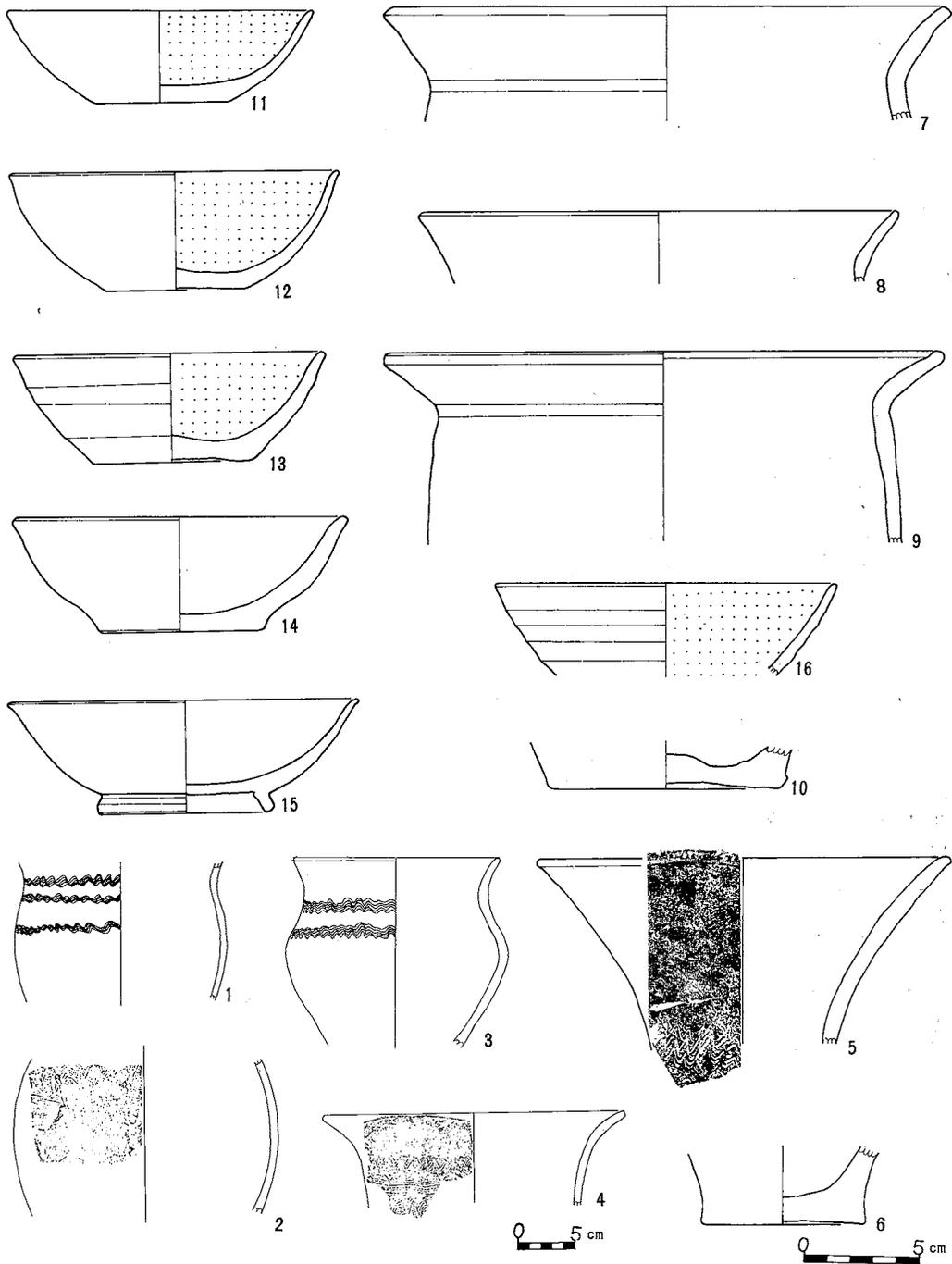
第186図 大境遺跡出土土器（1：3）（1～9 1号配石址，10・11 1号竪穴，12 1号土城，13・14 その他）



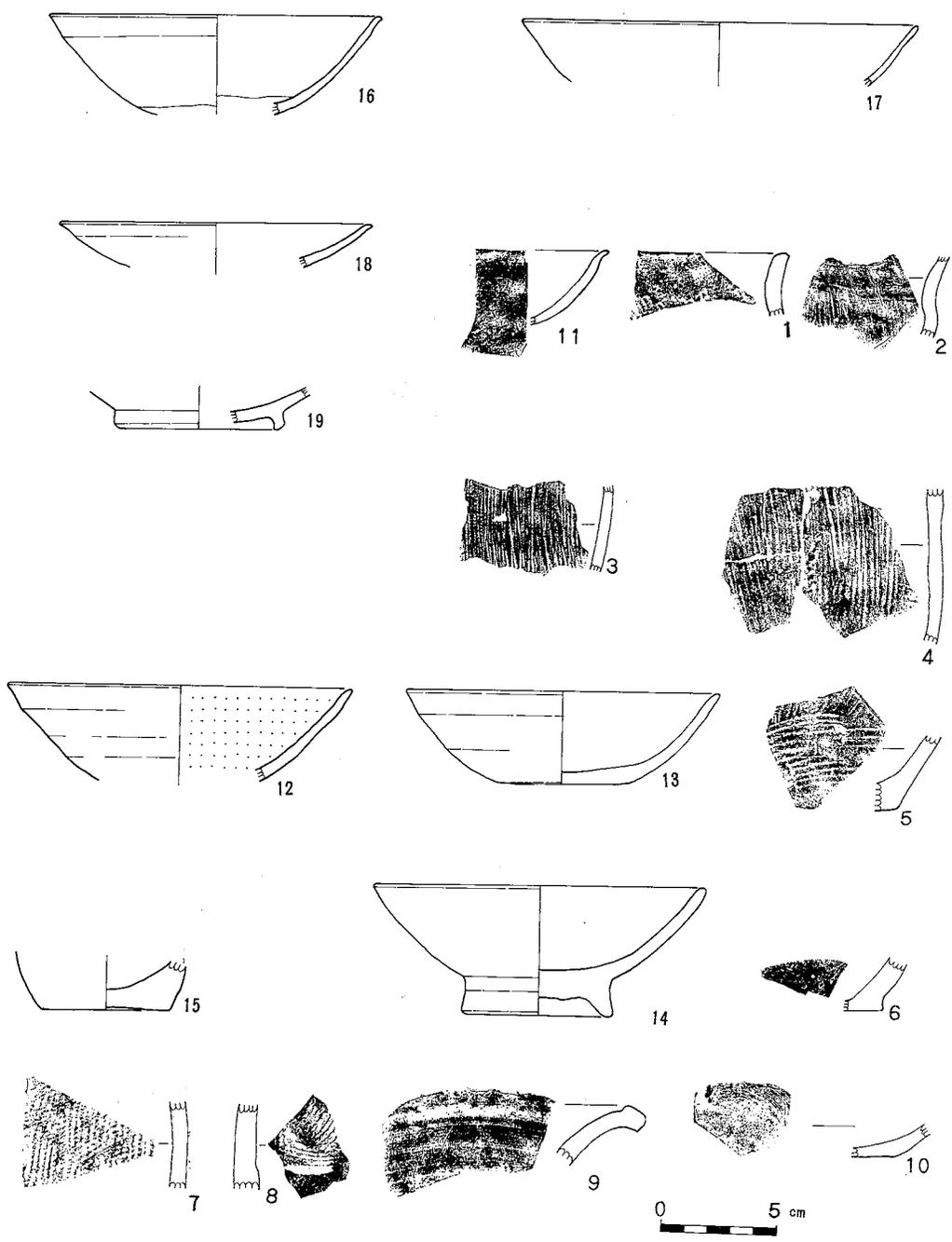
第187図 大境遺跡出土土器 (1 : 3) (1~6 1号配石址 7~8 1号土塚, 9~20 その他)



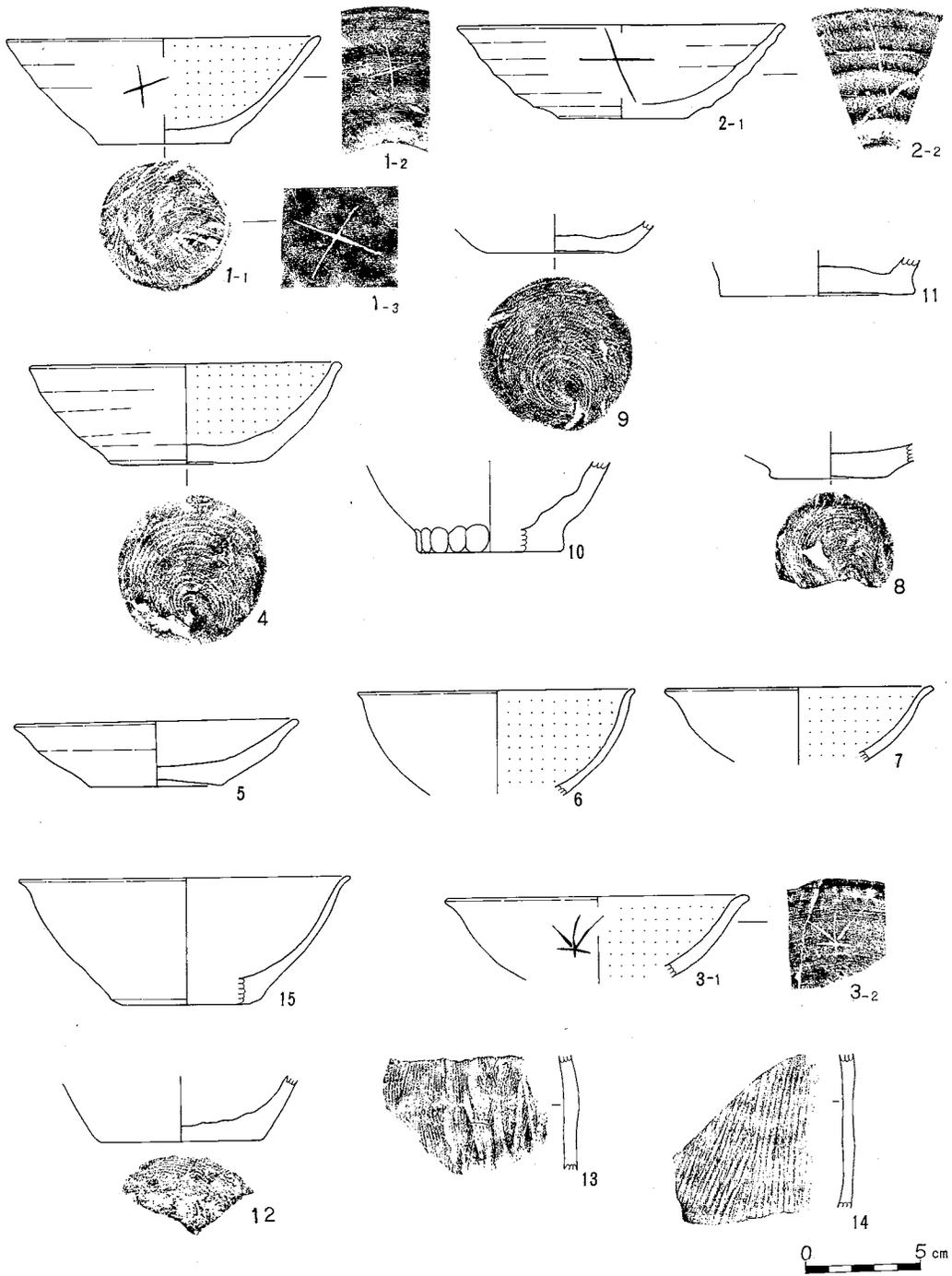
第188図 山の根遺跡出土土器（1：3，1～7 1：6）（1～7 1号住居址，8～10 6号住居址）



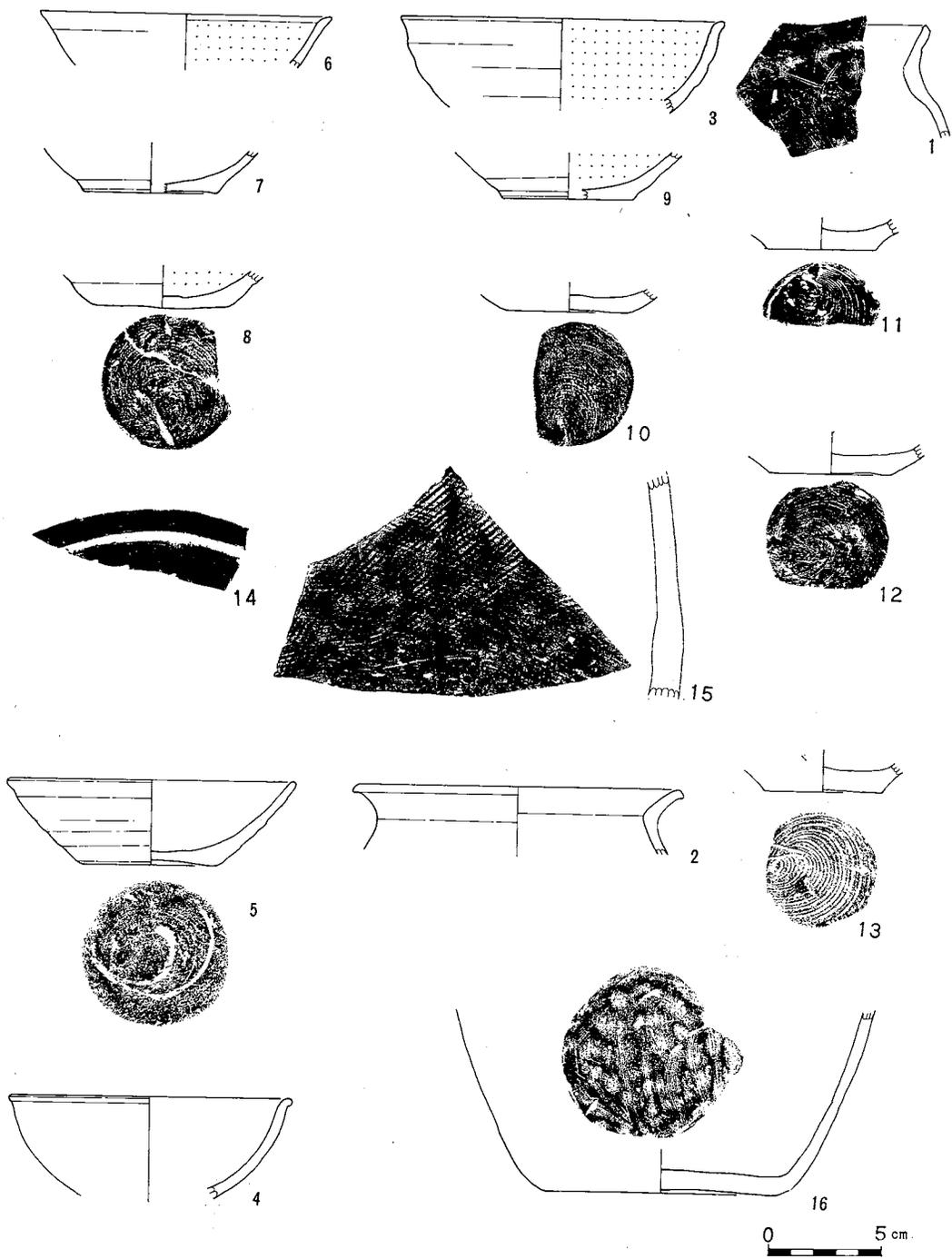
第189図 山の根遺跡出土土器（1：3）（1～6 2号住居址， 7～10・15 5号住居址， 11～14・16 4号住居址）



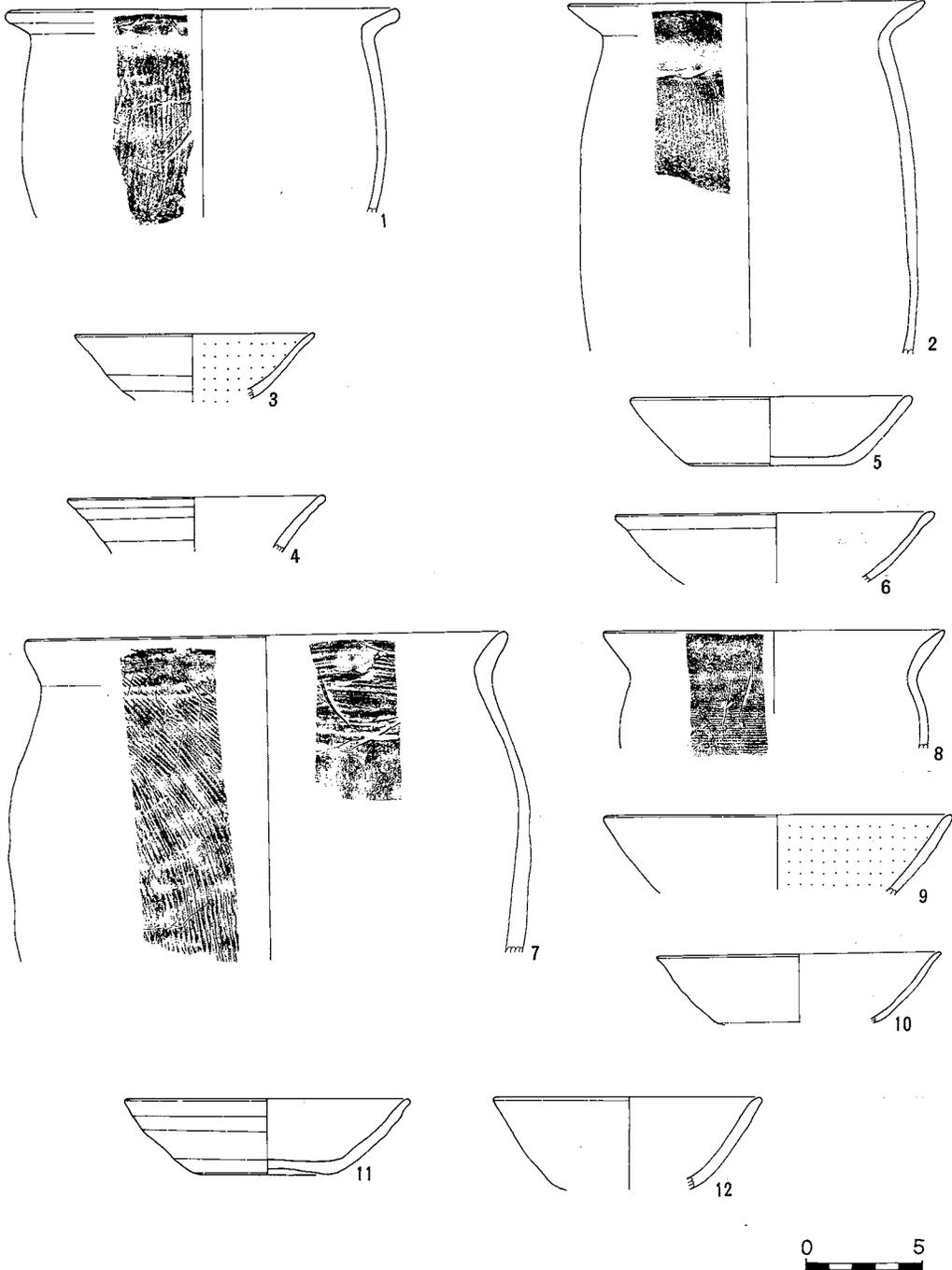
第190図 山の根遺跡3号住居址出土土器 (1 : 3)



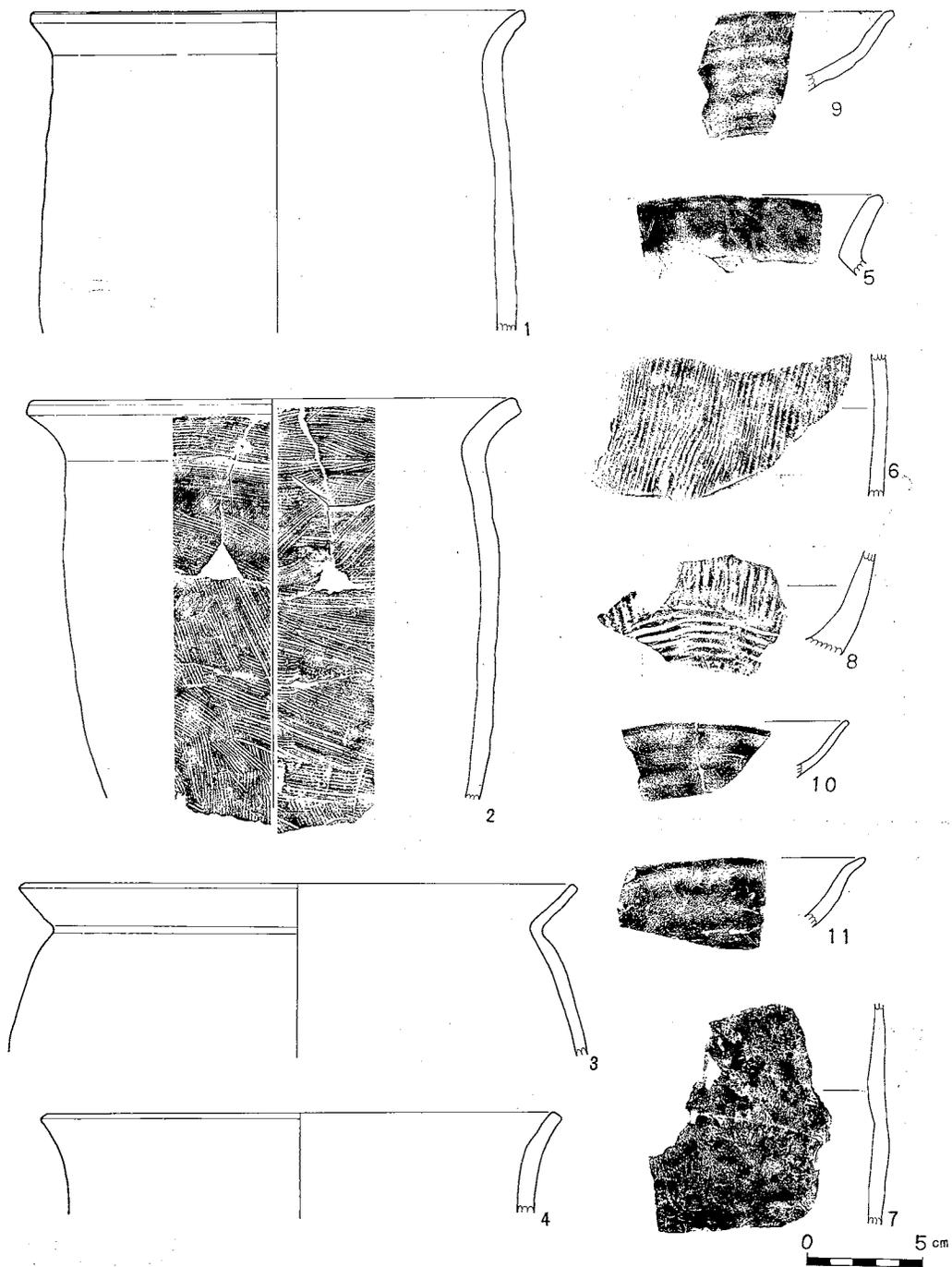
第191図 山の根遺跡4号住居址出土土器（1：3）



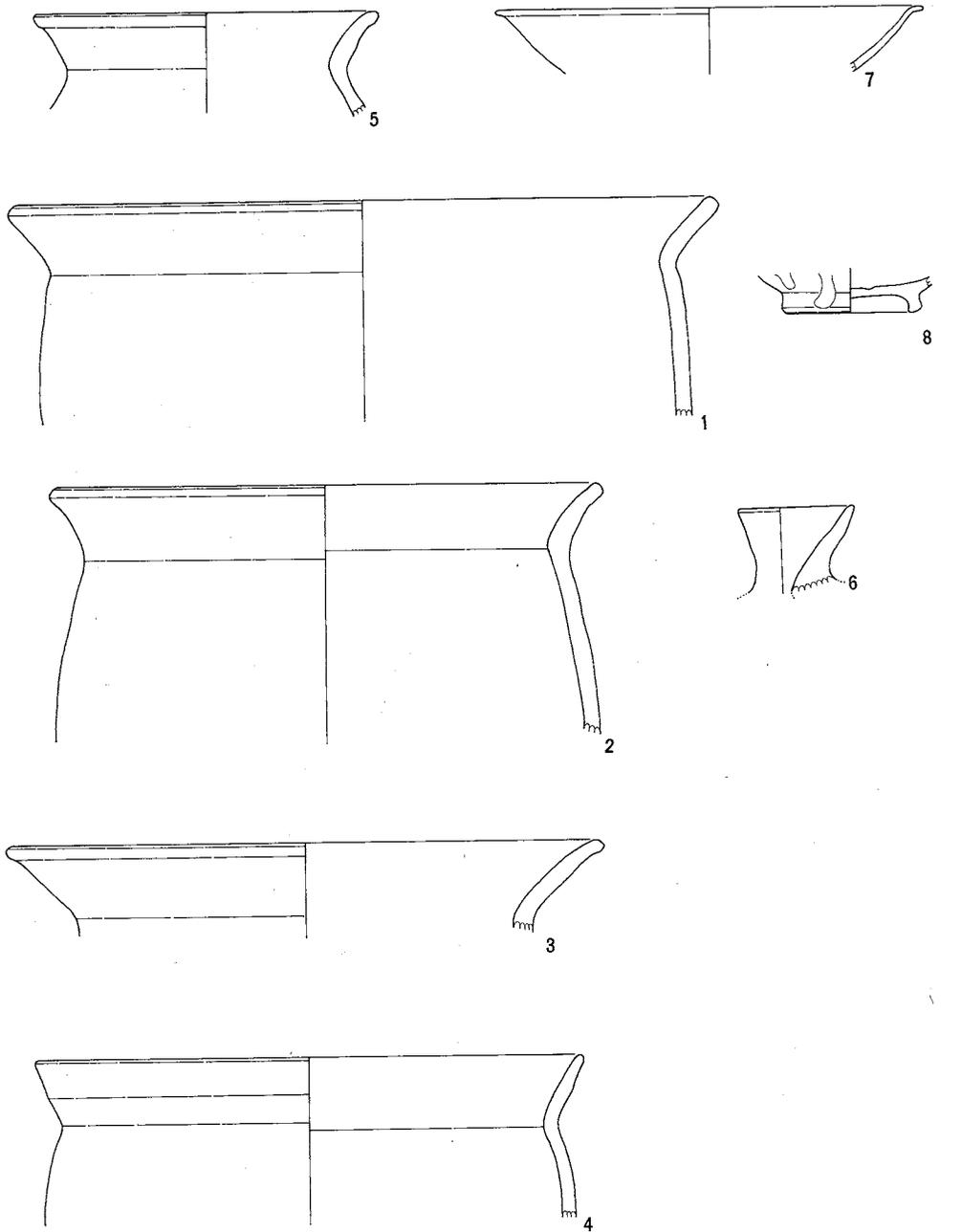
第192図 山の根遺跡4号住居址出土土器（1：3）



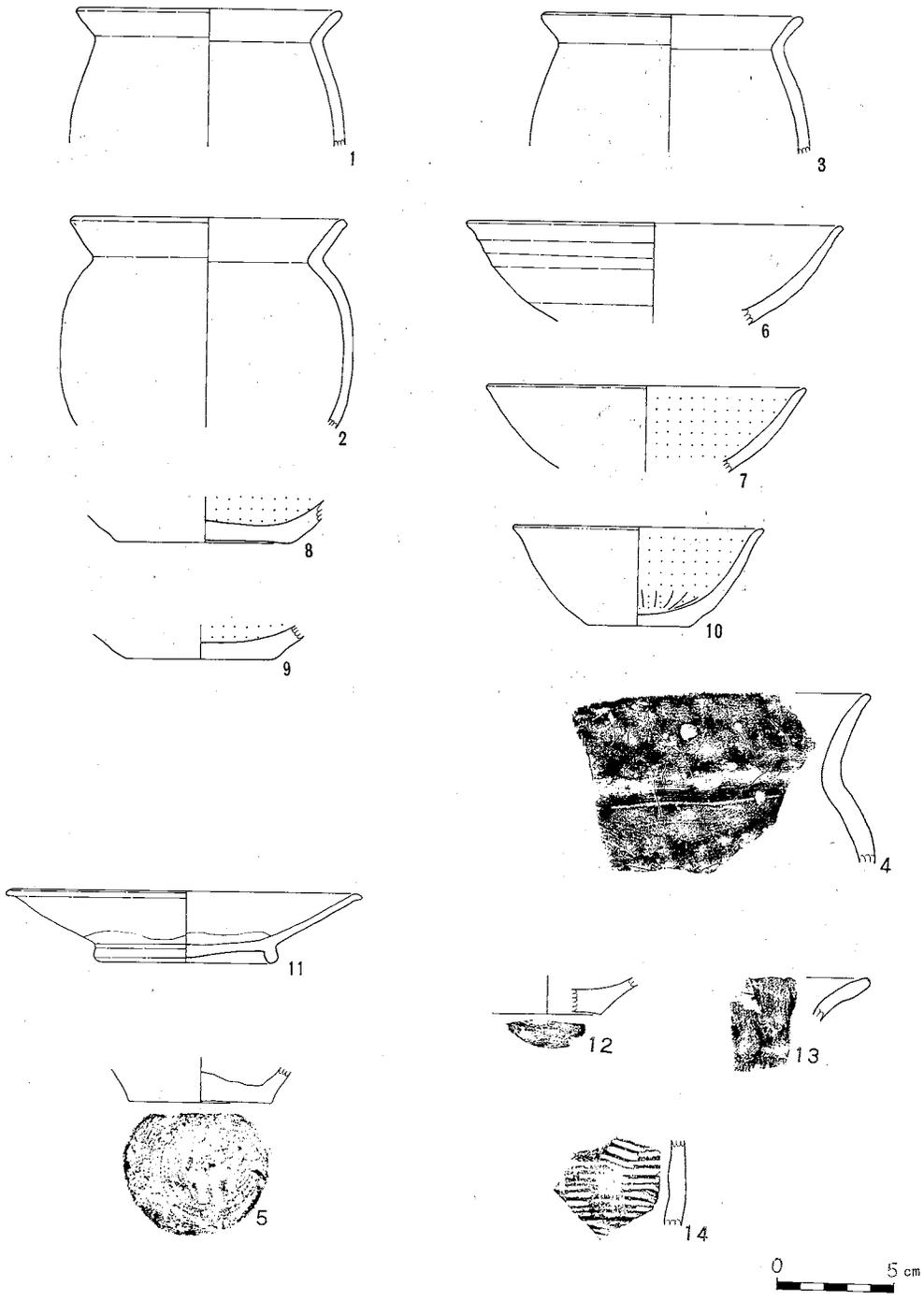
第193図 山の根遺跡出土土器（1：3）（1～6 4号住居址，7～12 5号住居址）



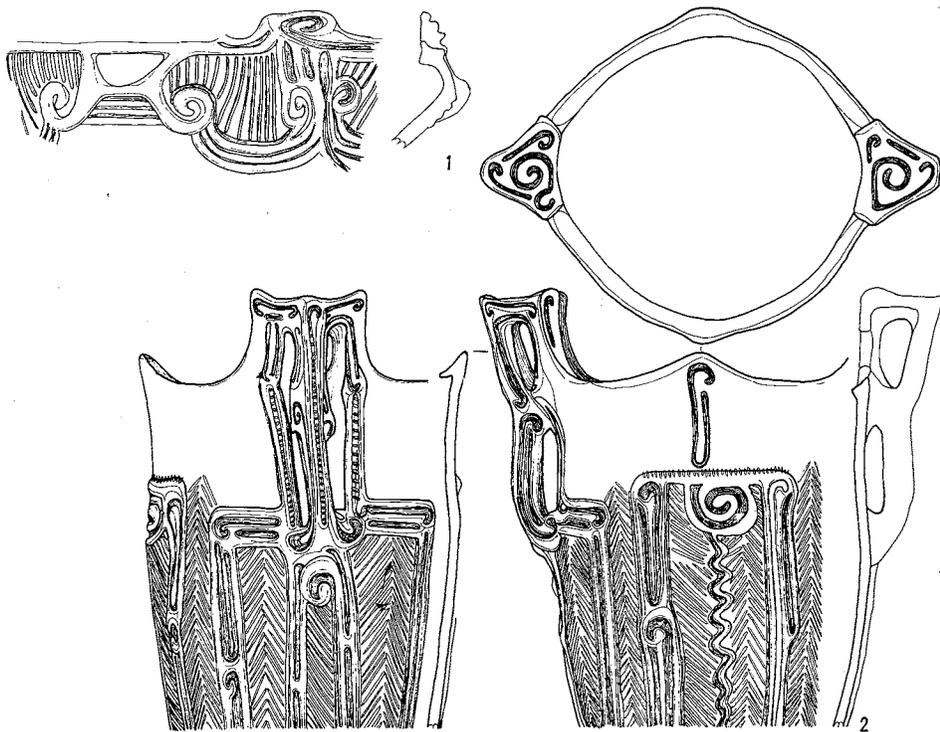
第194図 山の根遺跡出土土器（1：3）（1～4 4号住居址，5～11 5号住居址）



第195図 山の根遺跡5号住居址出土土器（1：3）

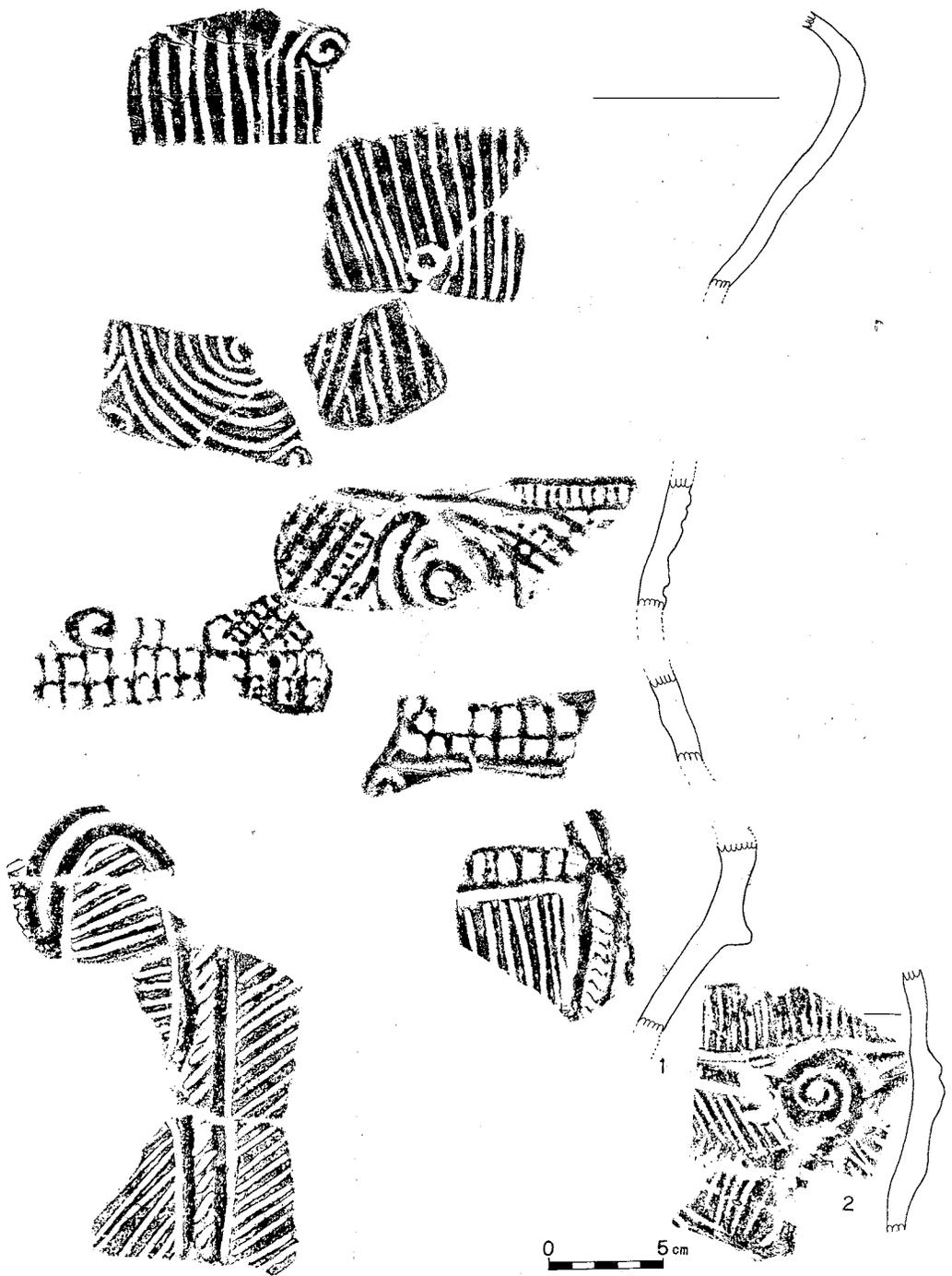


第196図 山の根遺跡出土土器 (1:3) (1~11 5号住居址, 12~14 2号 穴)



0 5 cm

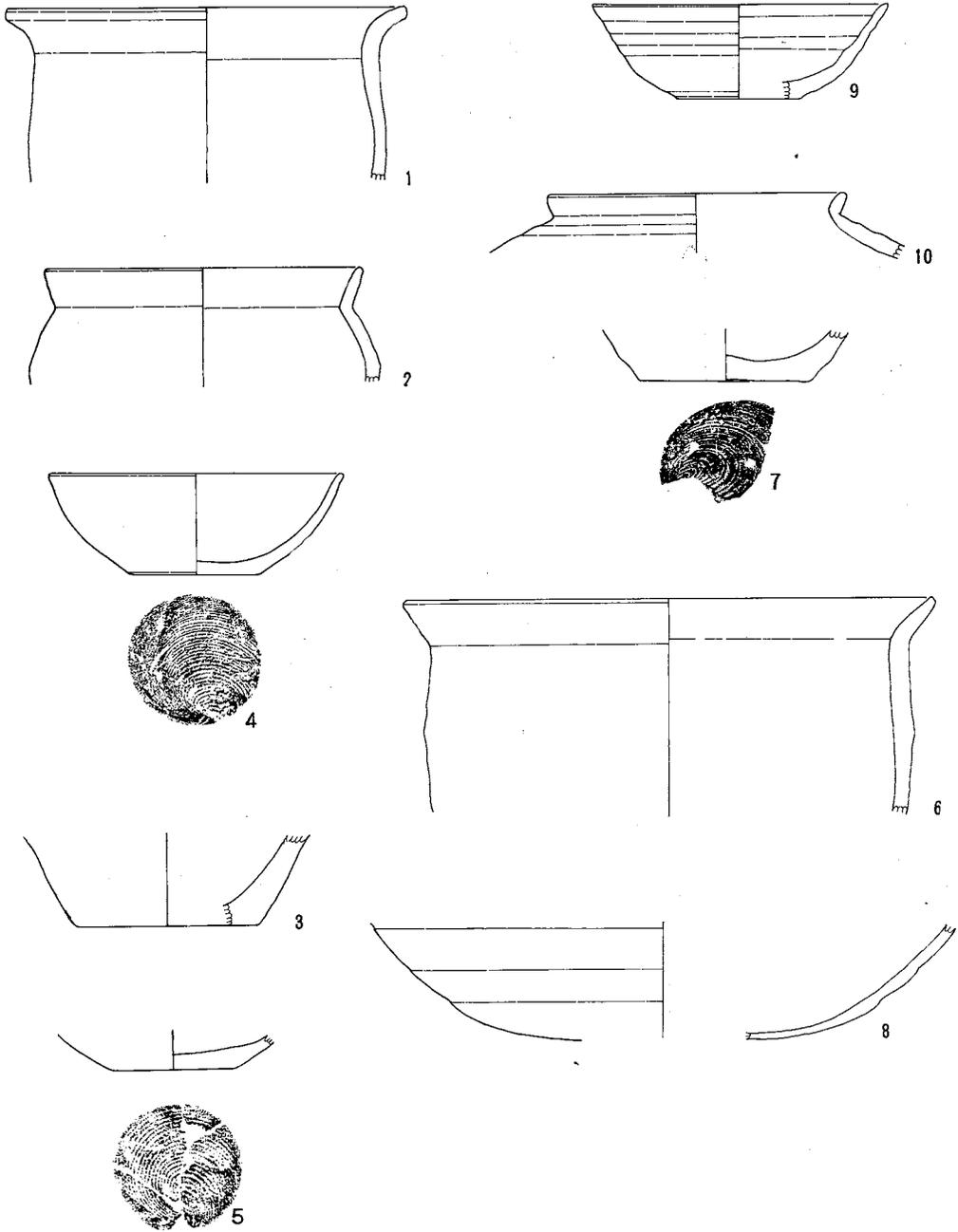
第197図 山の根遺跡6号住居址出土土器（1：6）



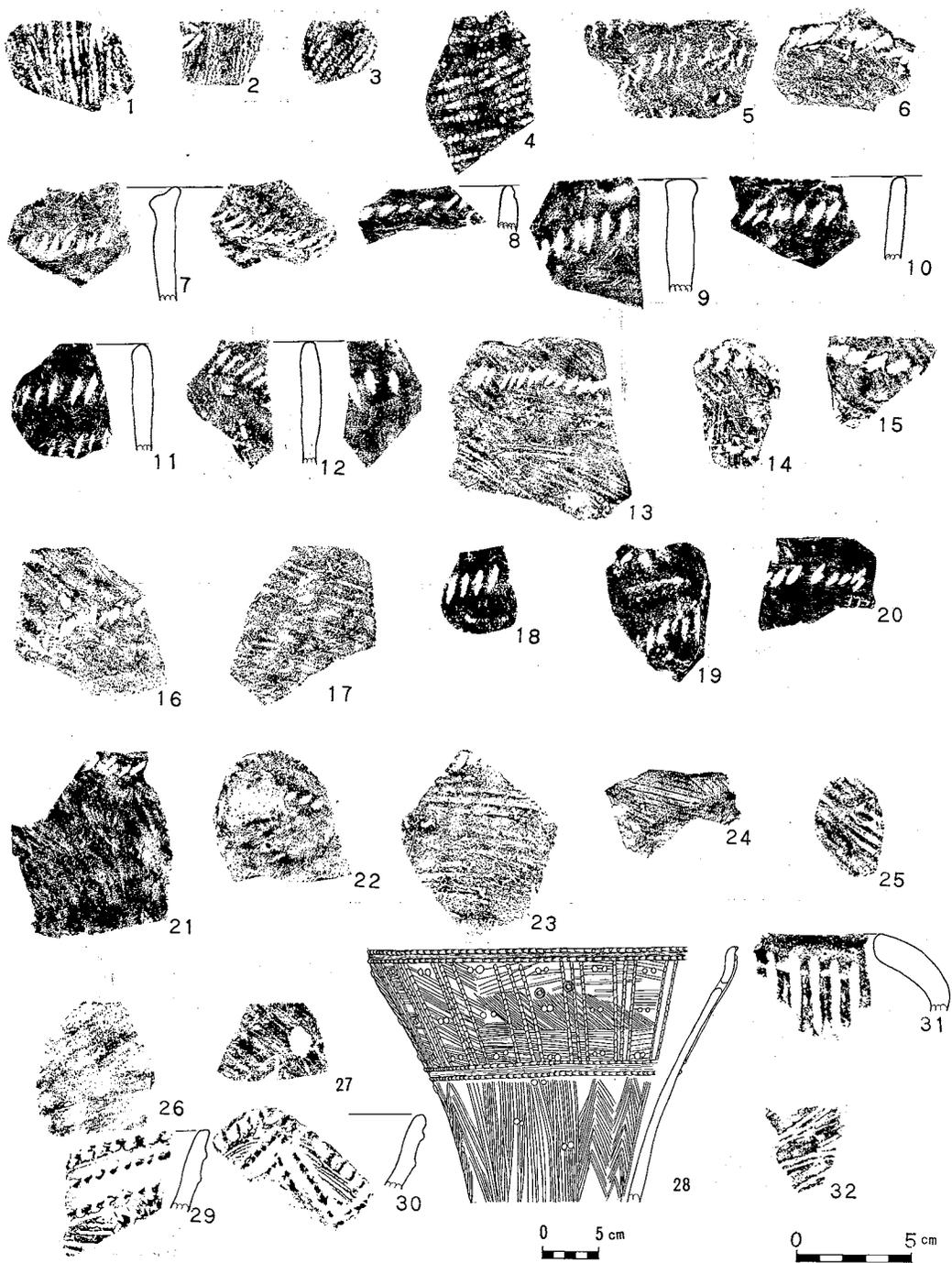
第198図 山の根遺跡6号住居址出土土器（1：3）



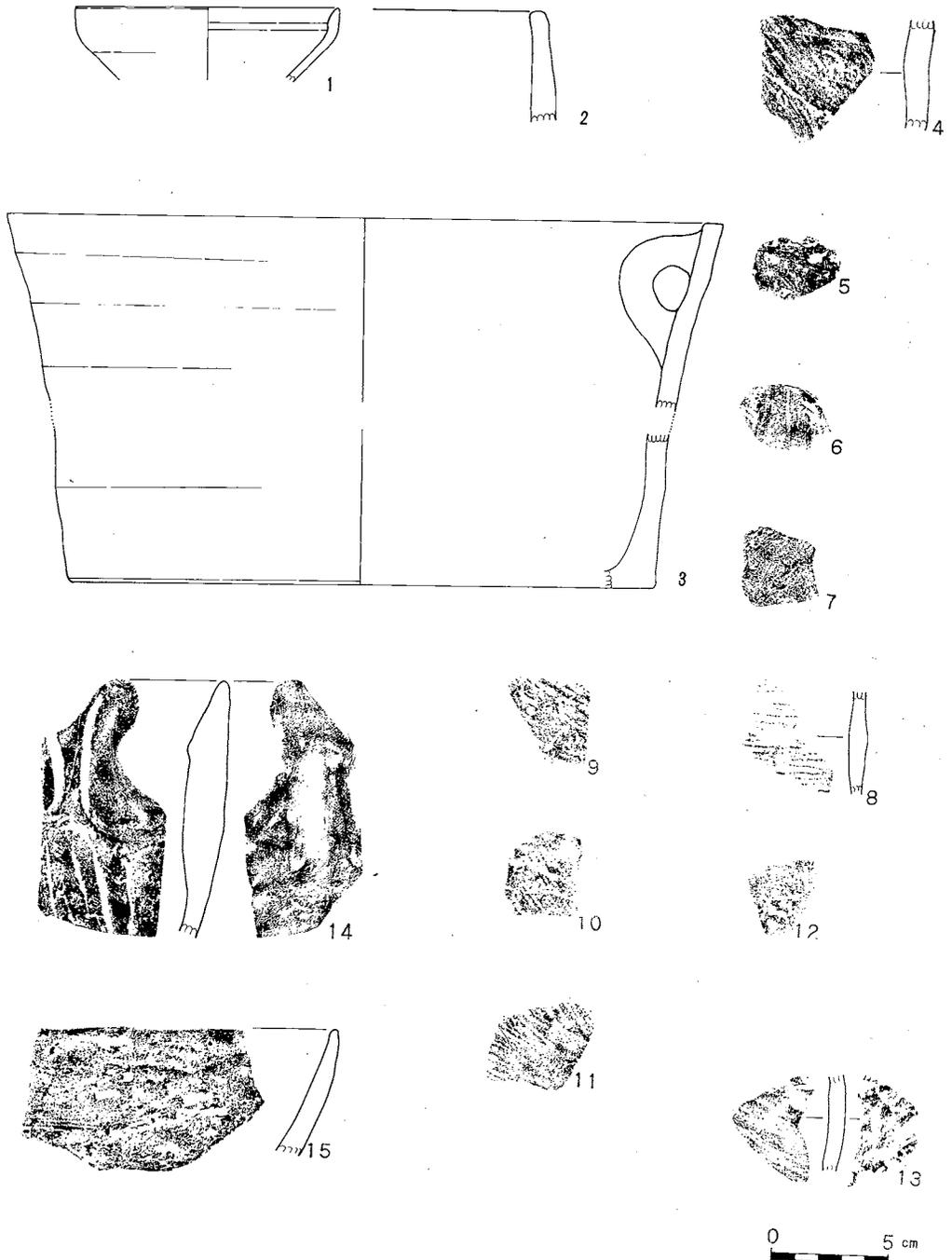
第199図 山の根遺跡6号住居址出土土器（1：3）



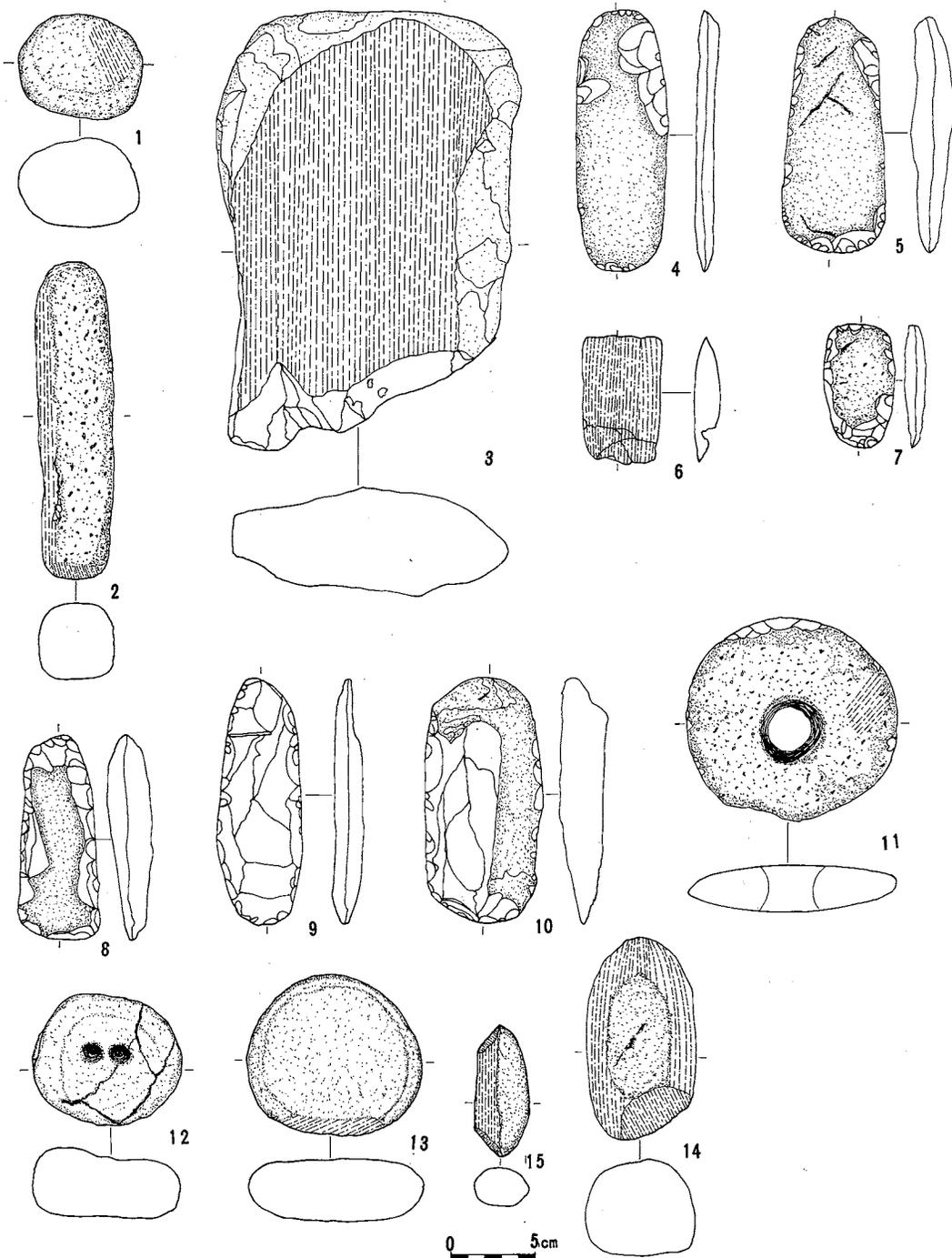
第200図 山の根遺跡出土土器（1：3）（1～5 7号住居址，8～10 その他）



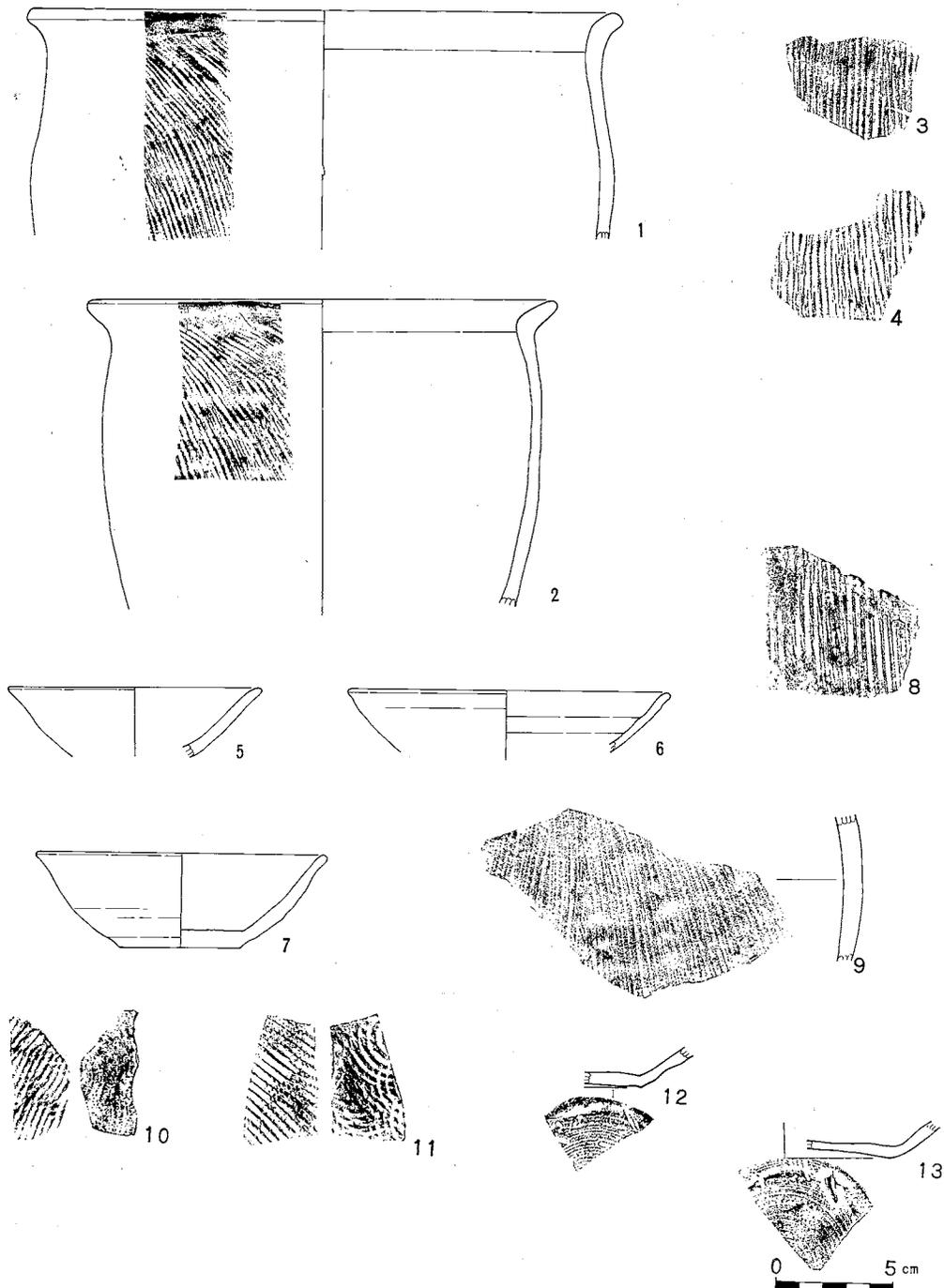
第201図 山の根遺跡出土土器 (1 : 3, 28 1 : 6) (31・32 1号住居址, 28 2号土城, 1~27・29・30 その他)



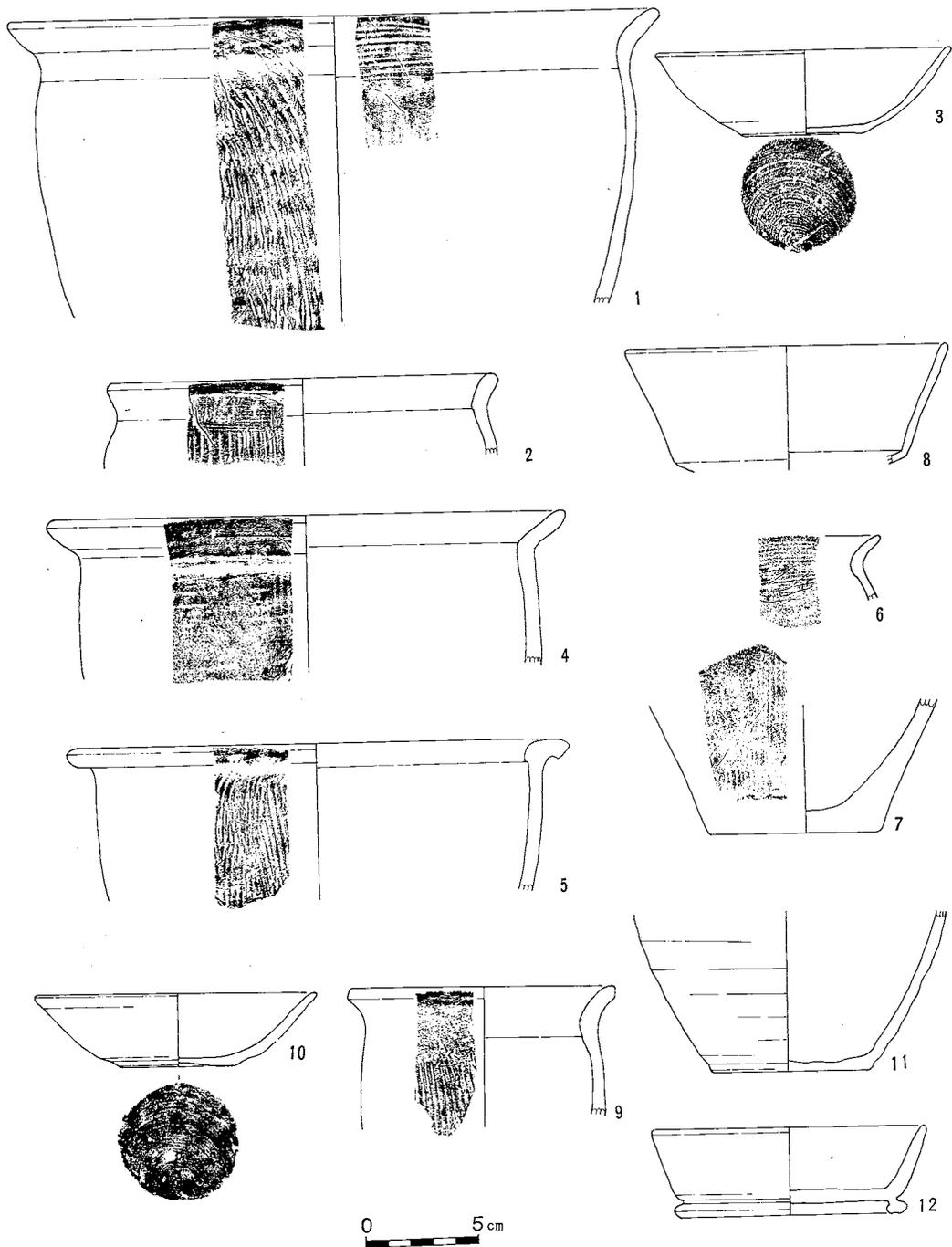
第202図 山の根遺跡出土土器 (1:3) (1・2 ヒット群, 3~15 その他)



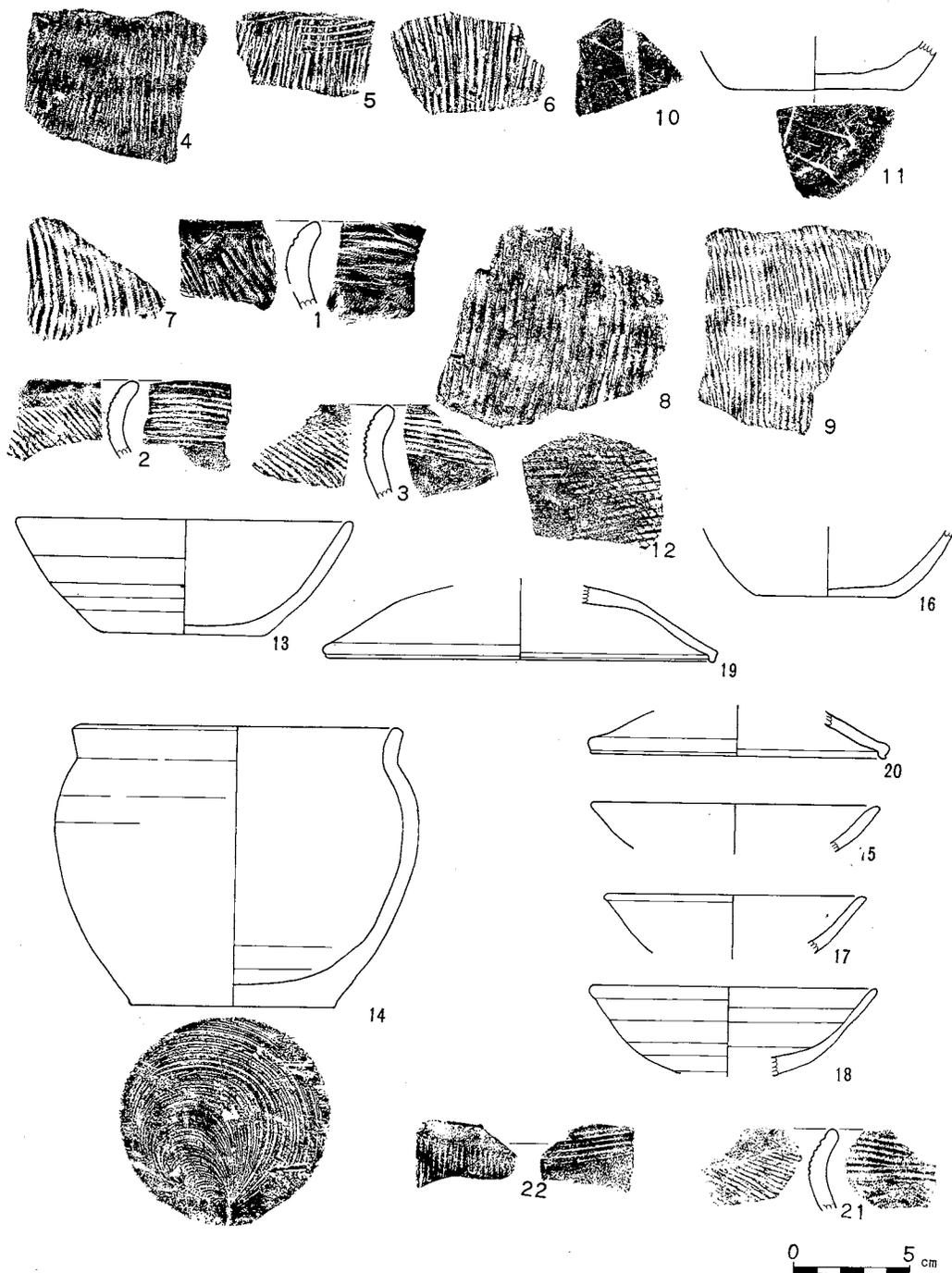
第203図 和手遺跡(1~3)・大境遺跡(4)・山の根遺跡(5~14)出土石器(1:4)
 1、1号住居址 2、3号住居址 3-7住居址、4、その他 5、2号住居址 6、ピット群 7~11、その他)



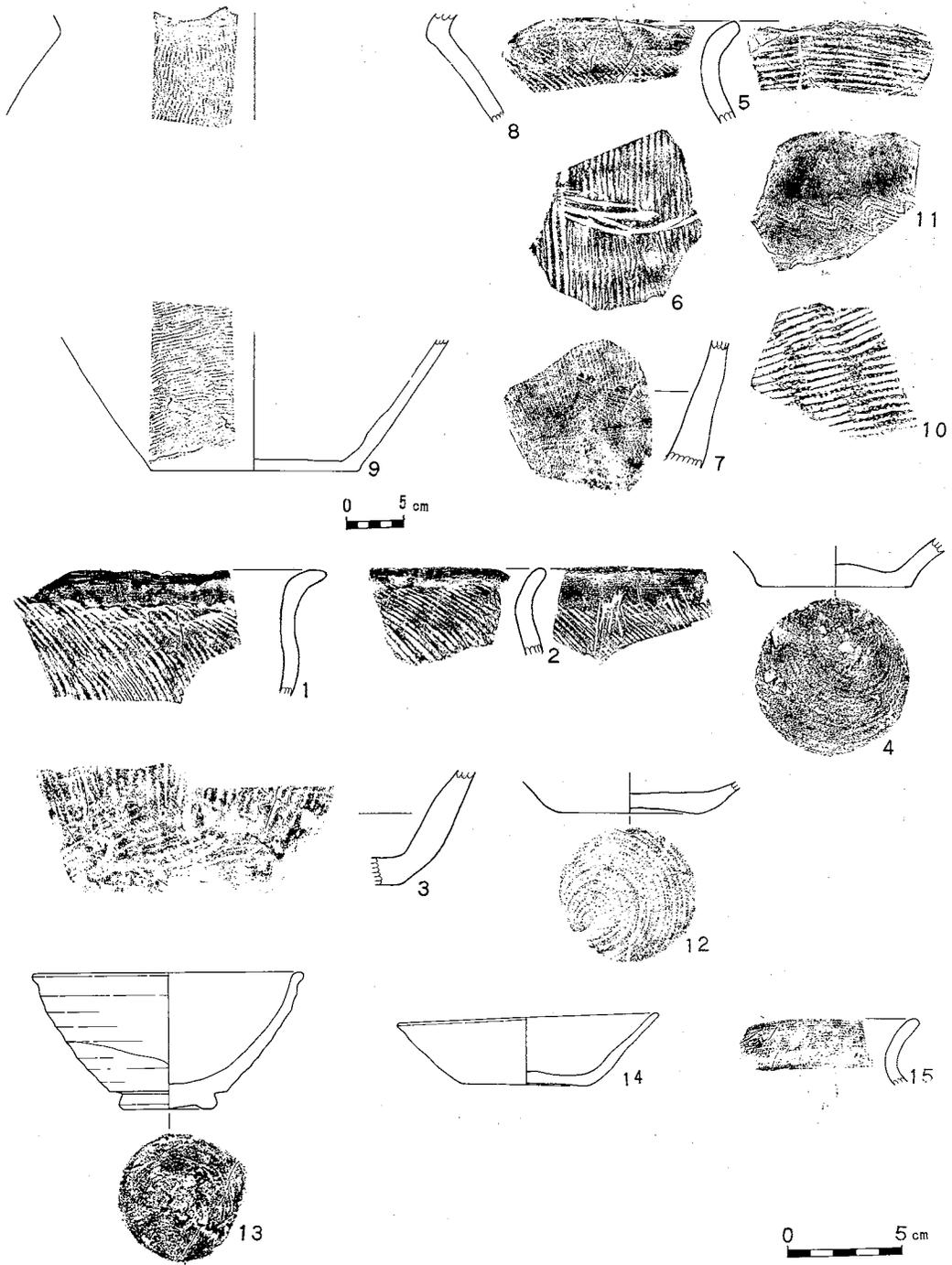
第204图 城平遺跡出土土器 (1 : 3) (1~6 1号住居址, 7 2号住居址, 8~13 3号住居址)



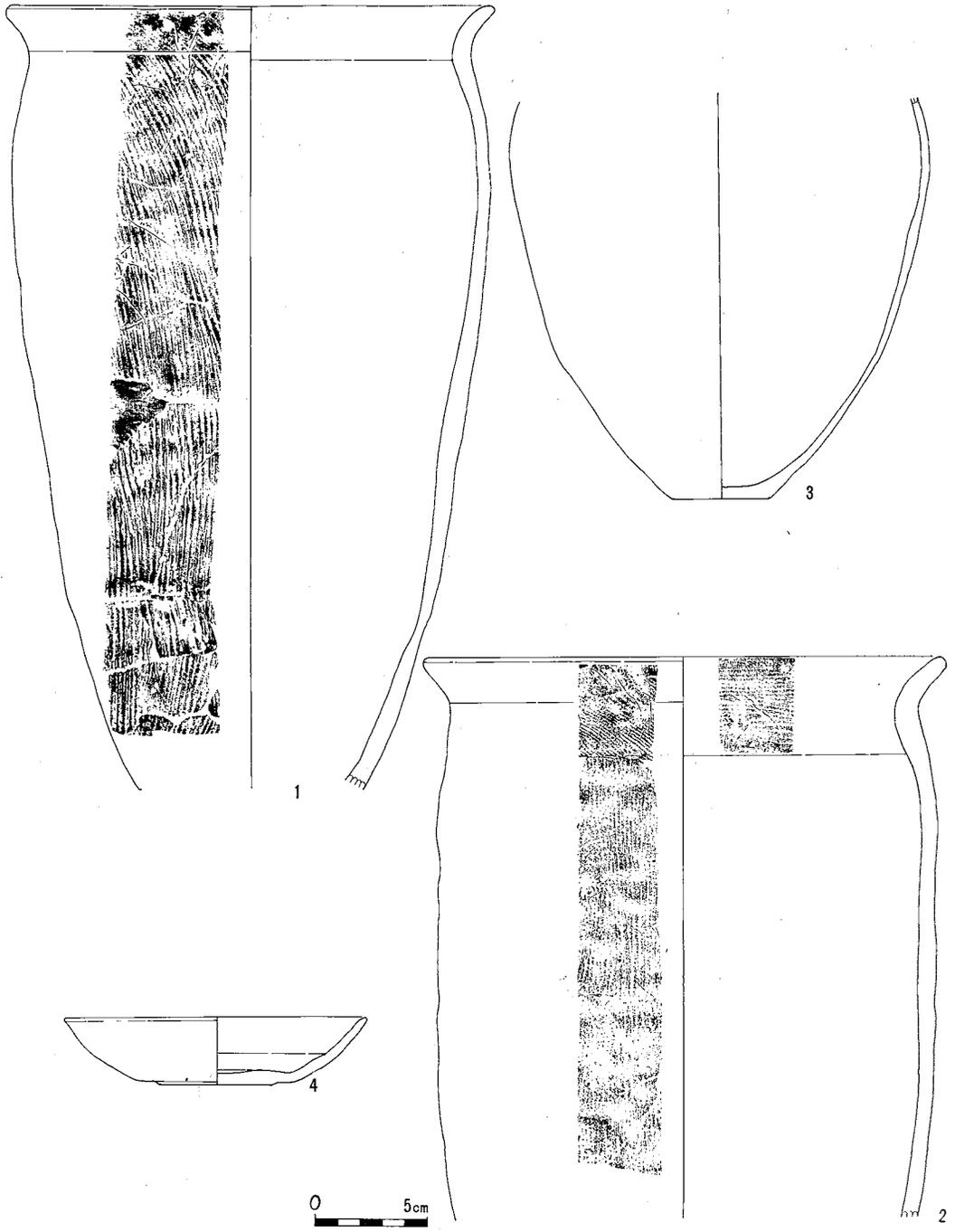
第205图 城平遗迹出土土器 (1:3) (1~3 2号住居址, 4~8 3号住居址, 9~12 5号住居址)



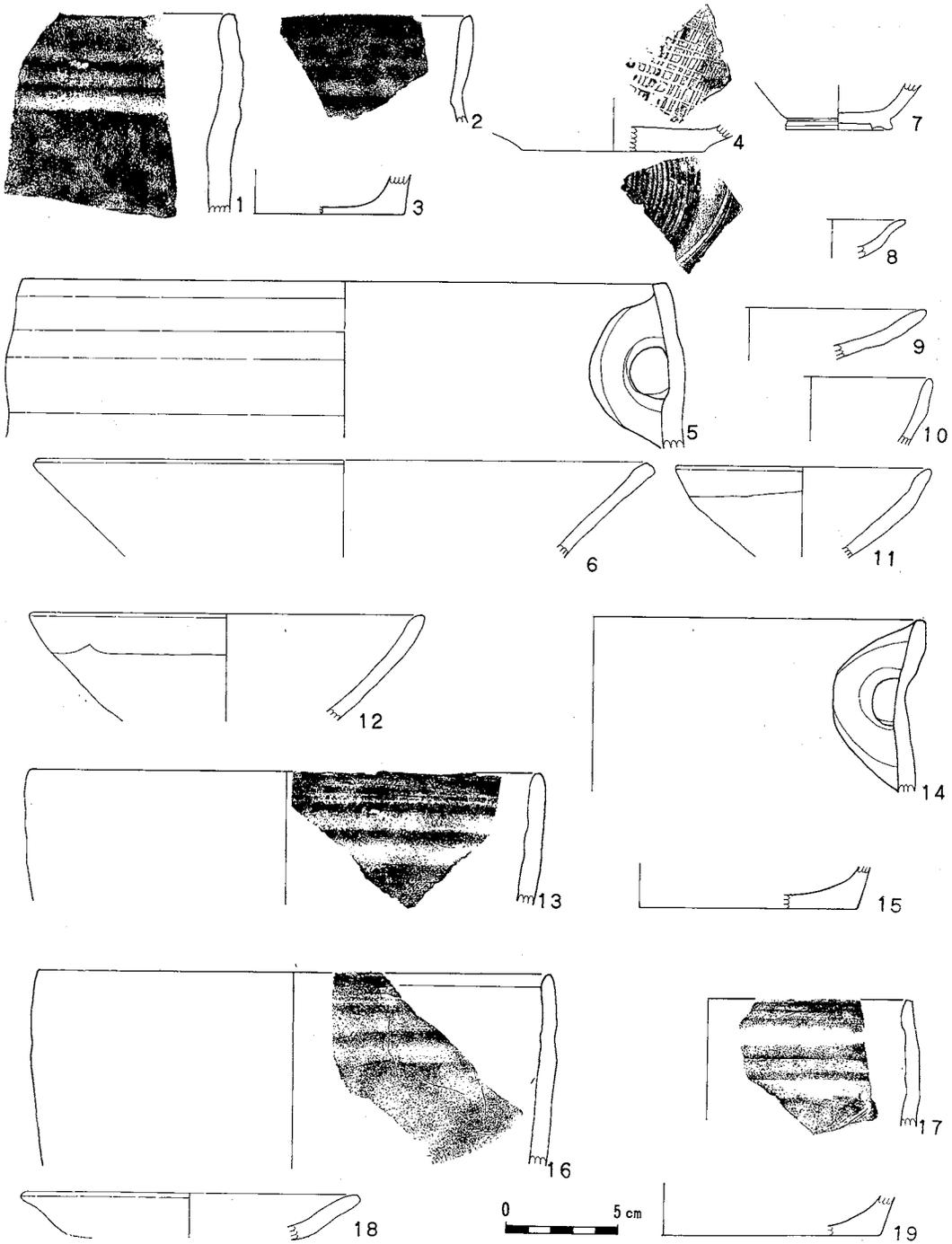
第206图 城平遗址出土土器 (1:3) (1~12 5号住居址, 13·16·19 6号住居址, 14~15·17·18·20~22 7号住居址)



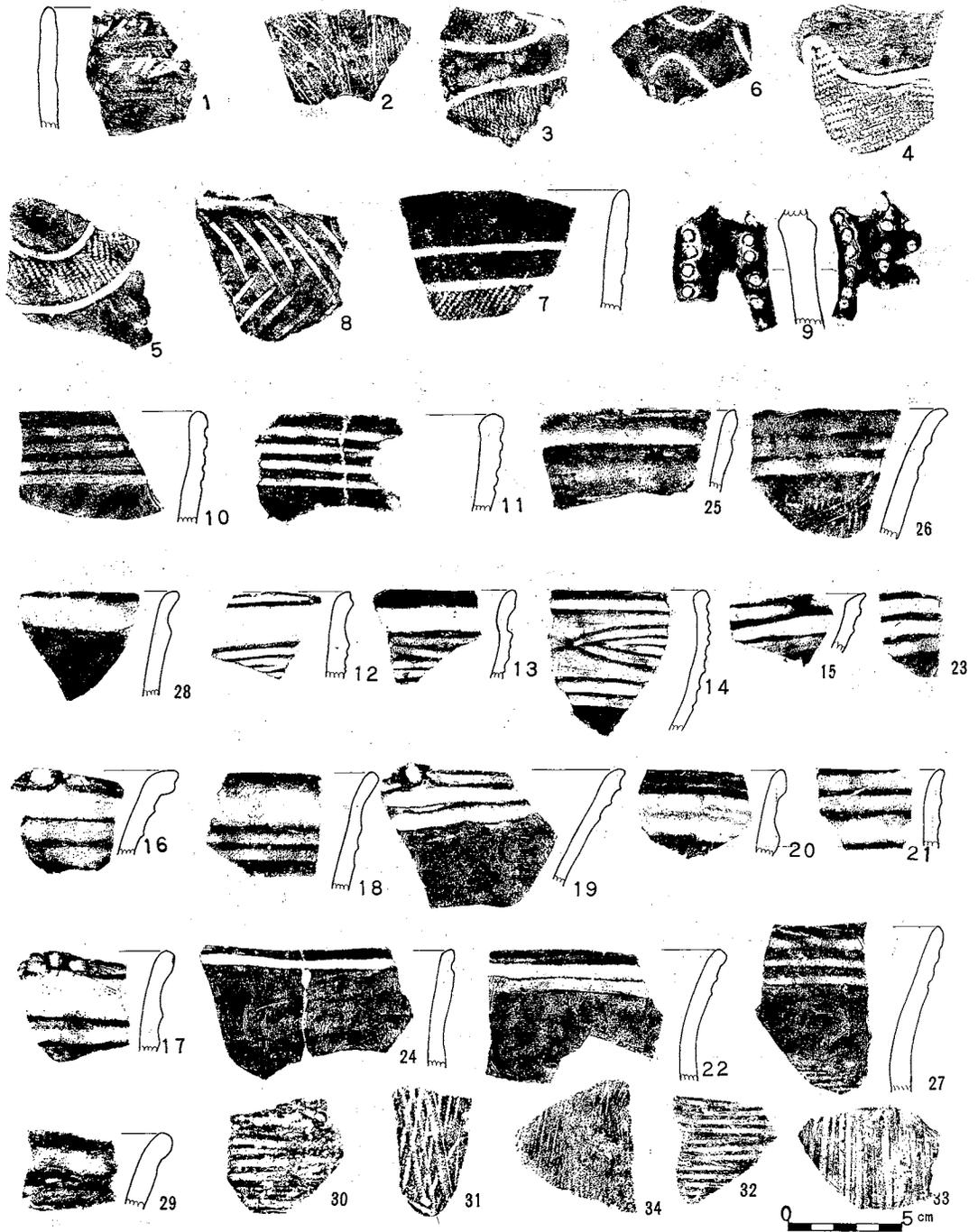
第207图 城平遗址出土土器 (1:3) (1~4 6号住居址, 5~11 7号住居址, 12 8号住居址, 13 2号墓址, 14 4号墓塘
15 7号土坑) (1:3, 8·9 1:6)



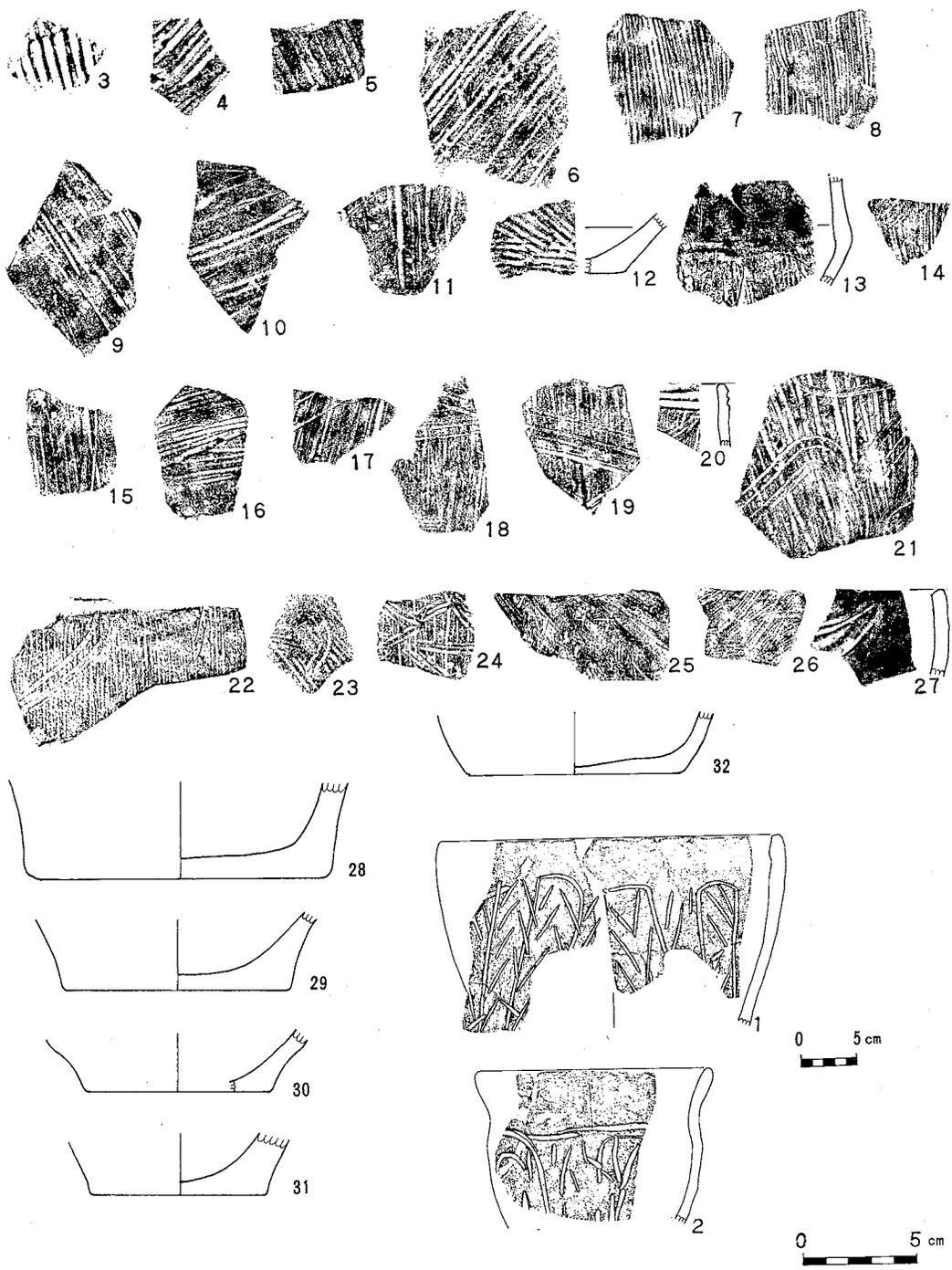
第208图 城平遺跡8号住居址出土土器(1:3)



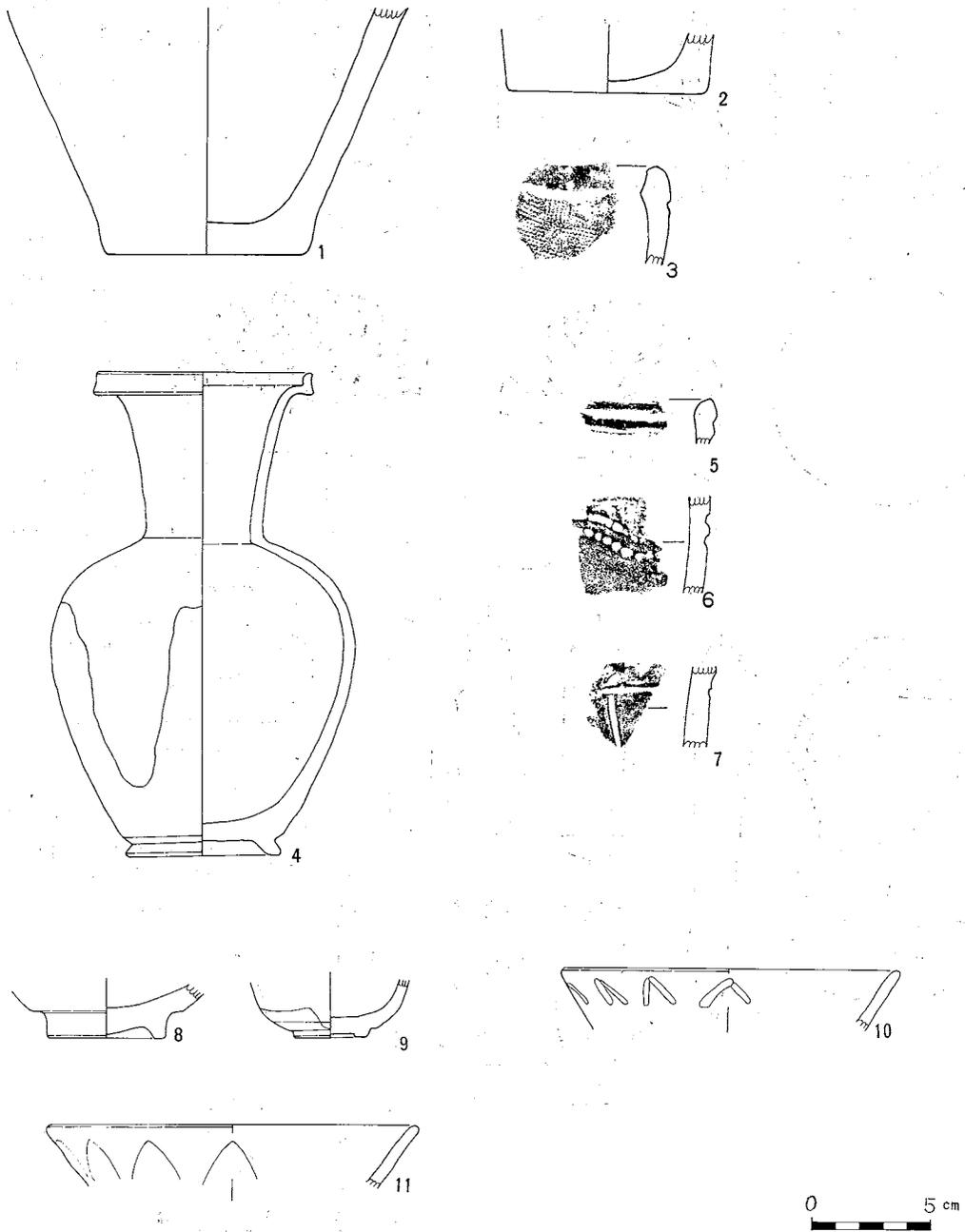
第209图 城平遗址出土土器 (1 : 3) (1~6 1号地下倉, 7~11 2号地下倉, 12 3号地下倉, 13~15 1号窖址, 16~19 2号窖址)



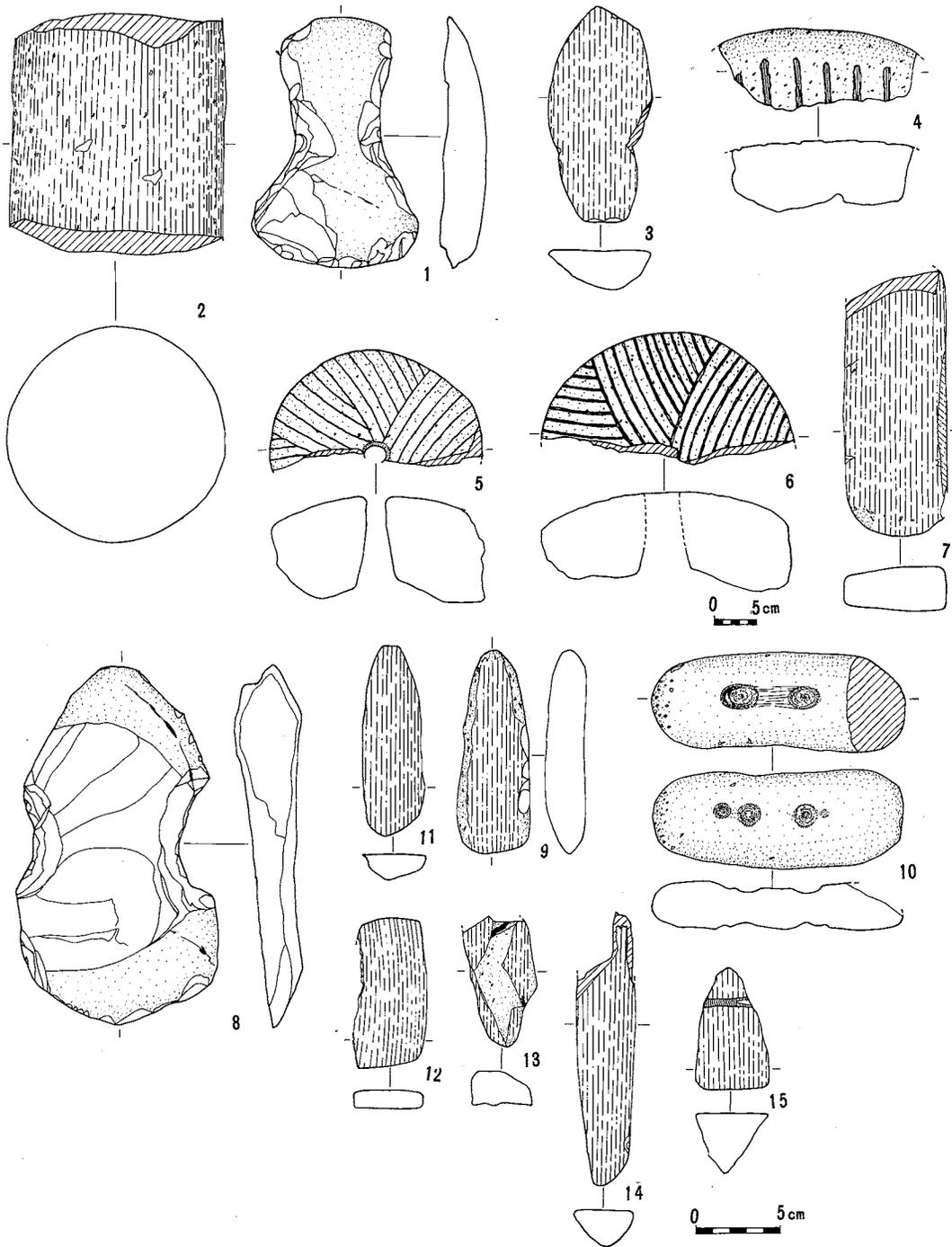
第210図 城平遺跡その他出土土器 (1:3)



第211図 城平遺跡その他出土土器 (1:3, 1・2 1:6)

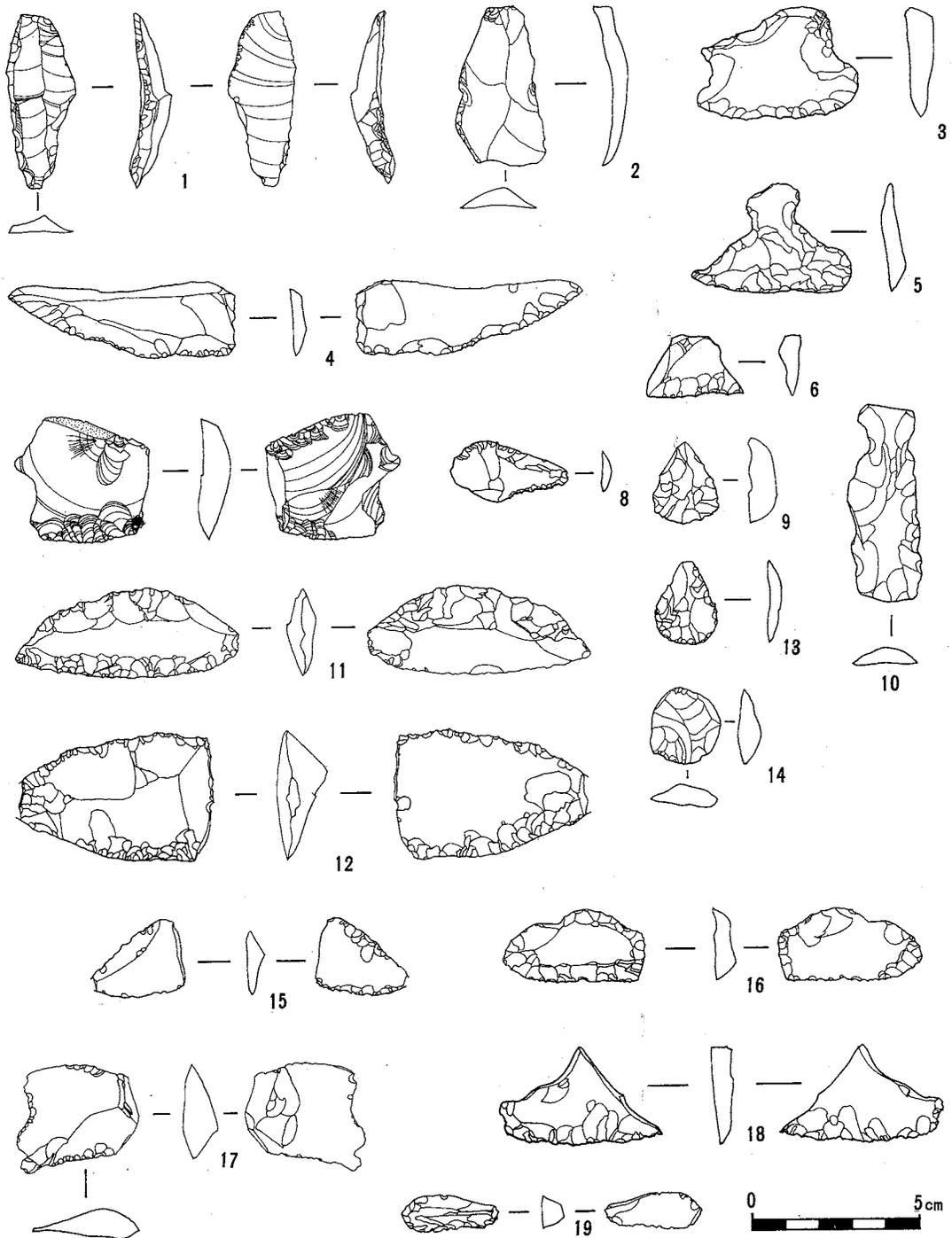


第212図 城平遺跡(1~4)・城平上遺跡(5~7)・山寺垣外遺跡(8~11)・出土土器(1:3)
 (1~3 9号住, 4~11 その他)



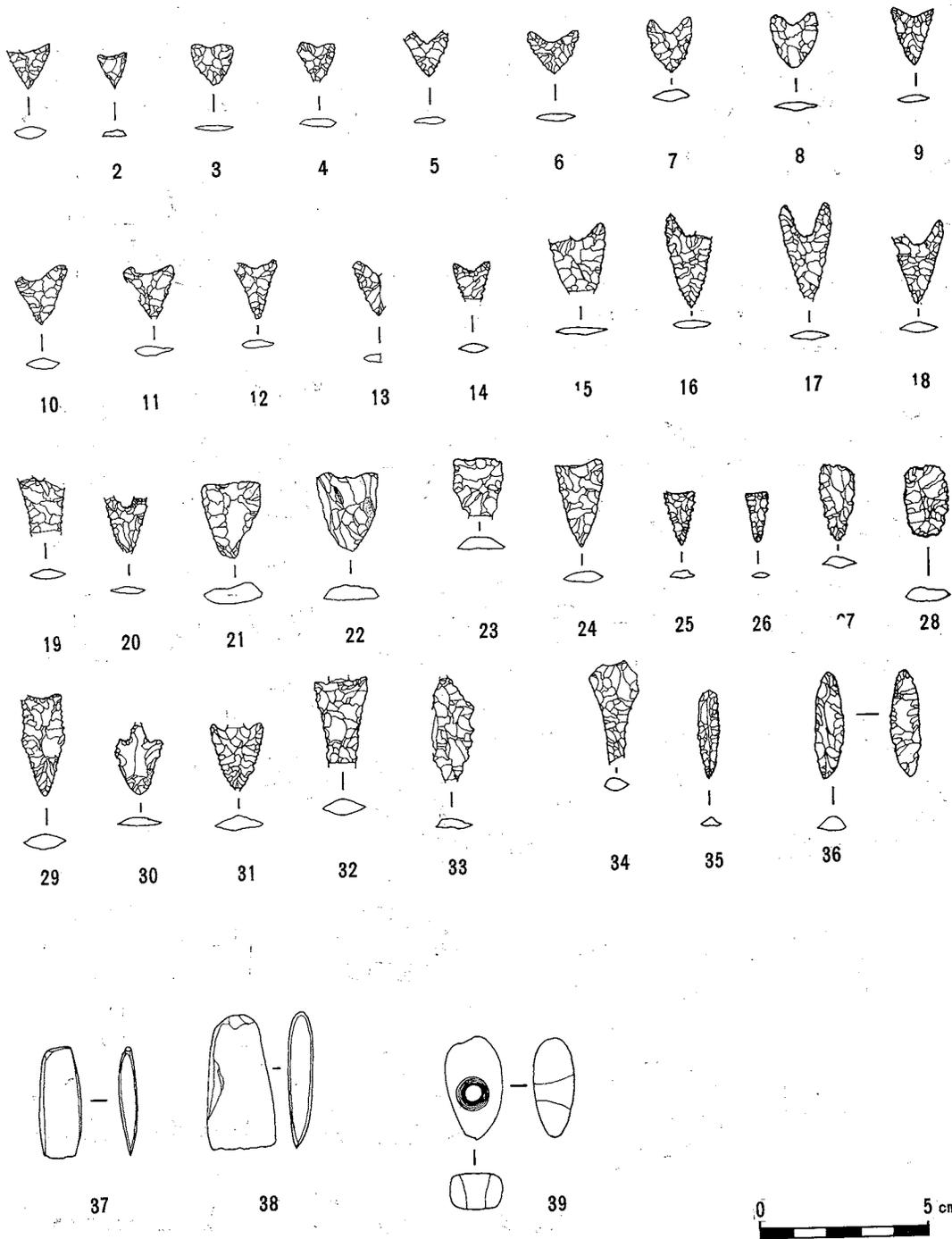
第213図 城平遺跡出土石器 (1:4, 5・6 1:8)

(1・2、9号住居址 3、1号地下倉址 4、2号地下倉址 5~7・14、2号窖址 8~13・15、その他)



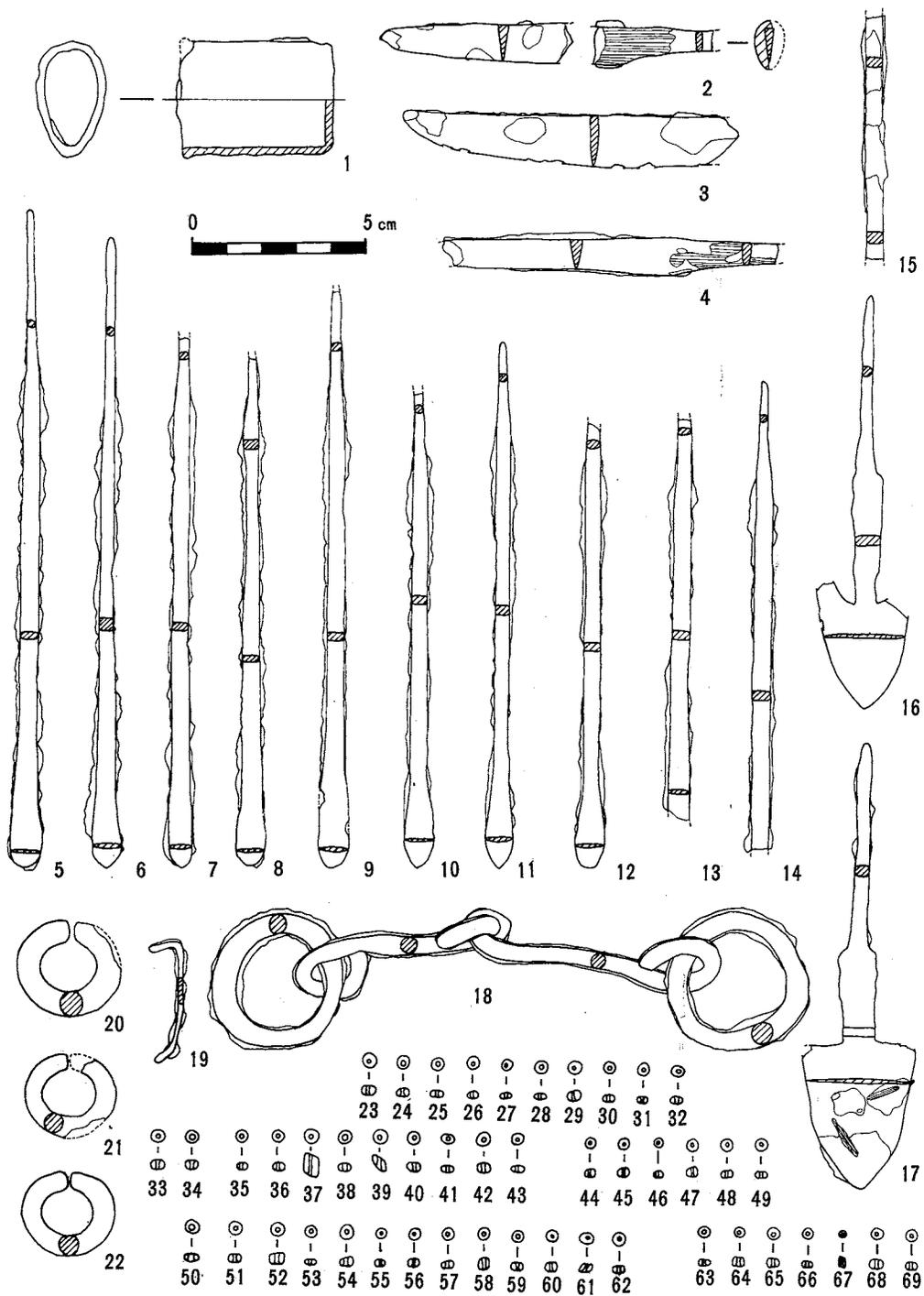
第 214 図 各遺跡出土石器 (1 : 2)

高蒲沢遺跡 (1・2・13 その他 5 1号土壙 10 3住覆 細ヶ谷B遺跡 (3・4・6~9 その他)
 百駄刈遺跡 (11・12・16 その他) 富士山下遺跡 (18 1住覆 14 その他) 城平遺跡 (15・19 その他)
 山寺垣外遺跡 (17 溝址)

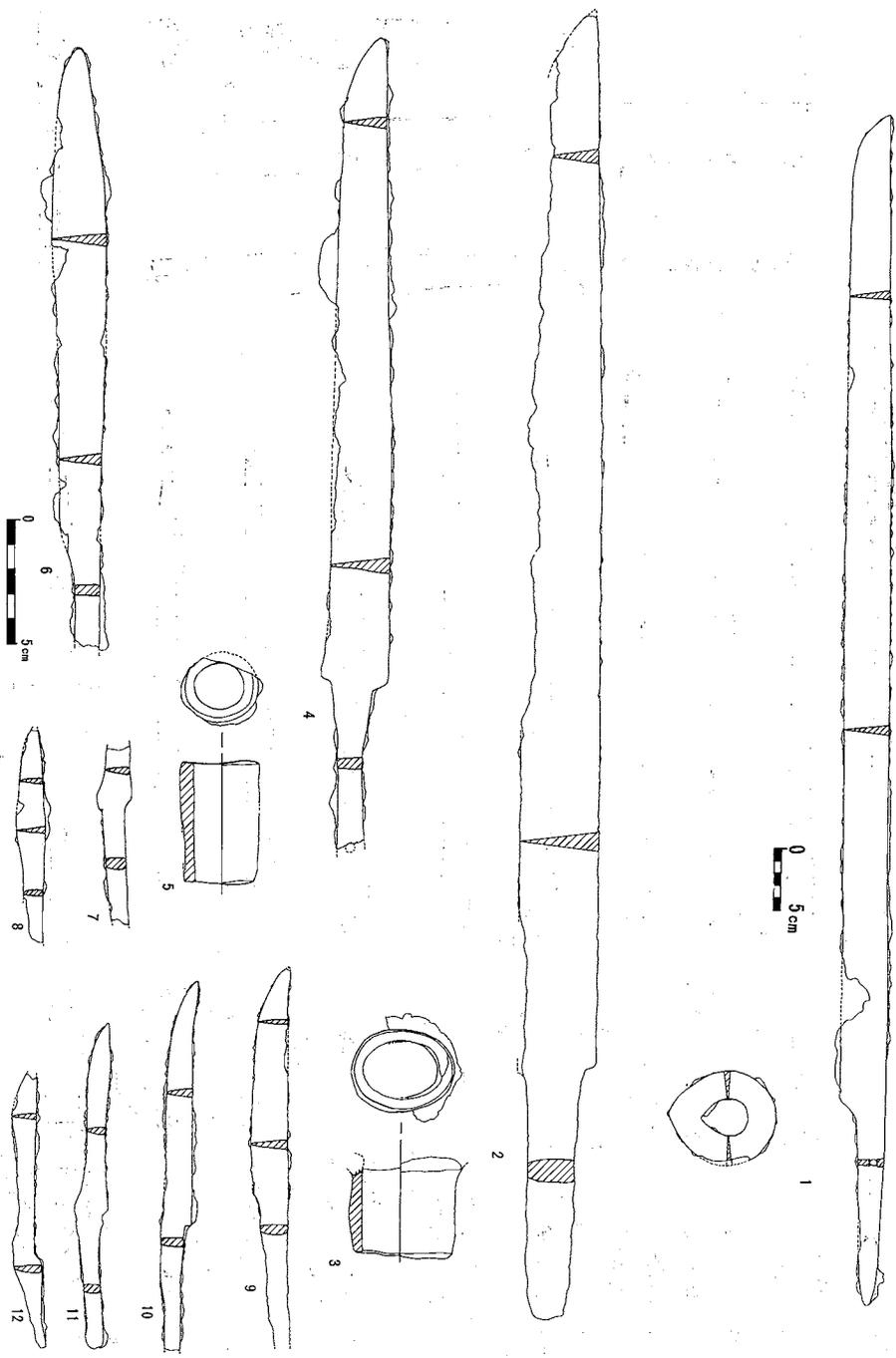


第215図 各遺跡出土石器 (1:2)

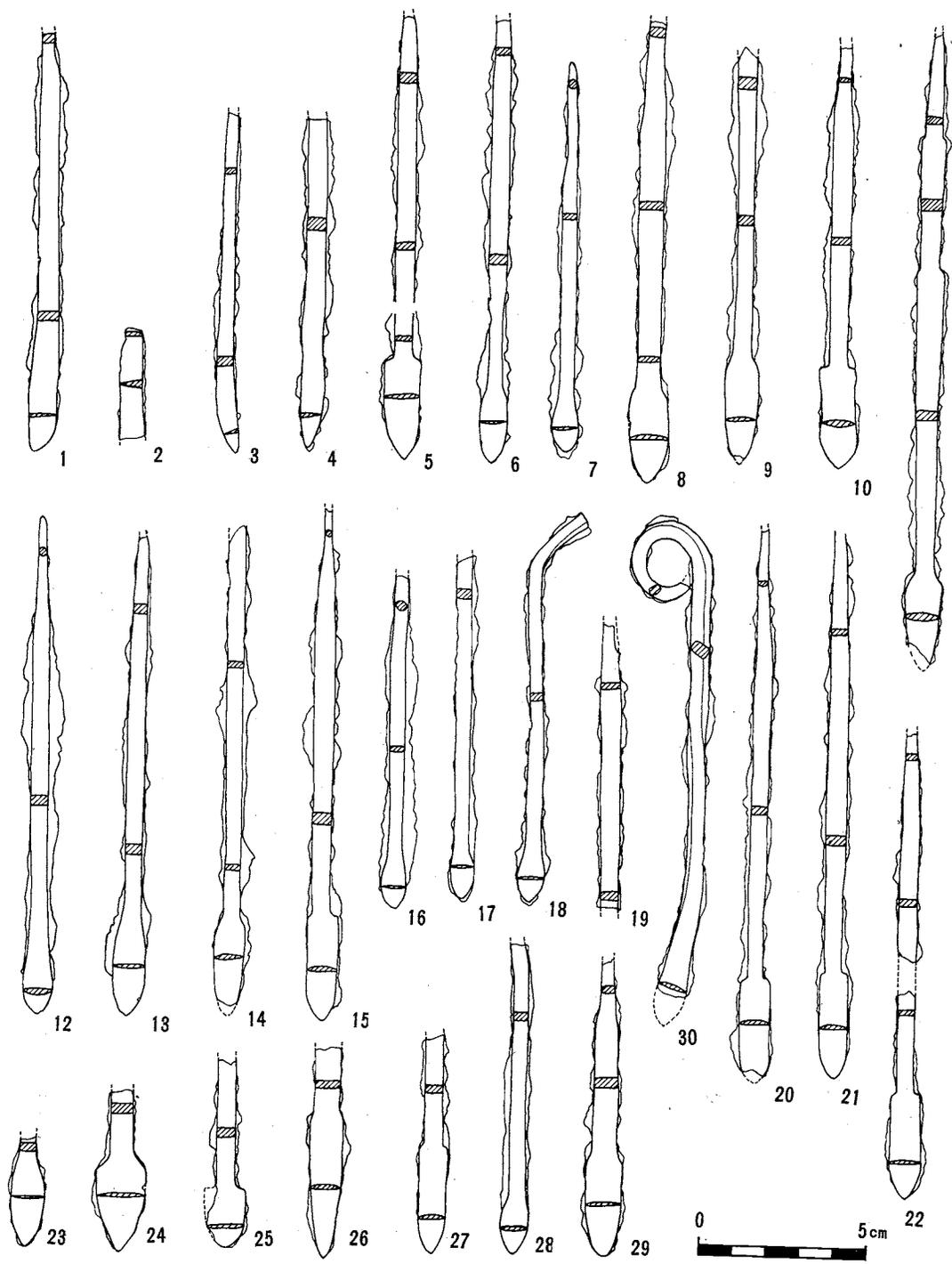
富士山下遺跡 (15・18・19・34 その他) 菖蒲沢遺跡 (1・16・23 その他) 細ヶ谷B遺跡 (7・10・21・24 その他)
 百駄刈遺跡 (2~6・8・9・11・13・14・20・22・25・26・28~31・33・37・39 その他 36 1住覆 27 2住覆
 12・35 石囲 トレンチ) 大境遺跡 (38 2住床) 山の根遺跡 (17 その他) 城平遺跡 (32 その他)



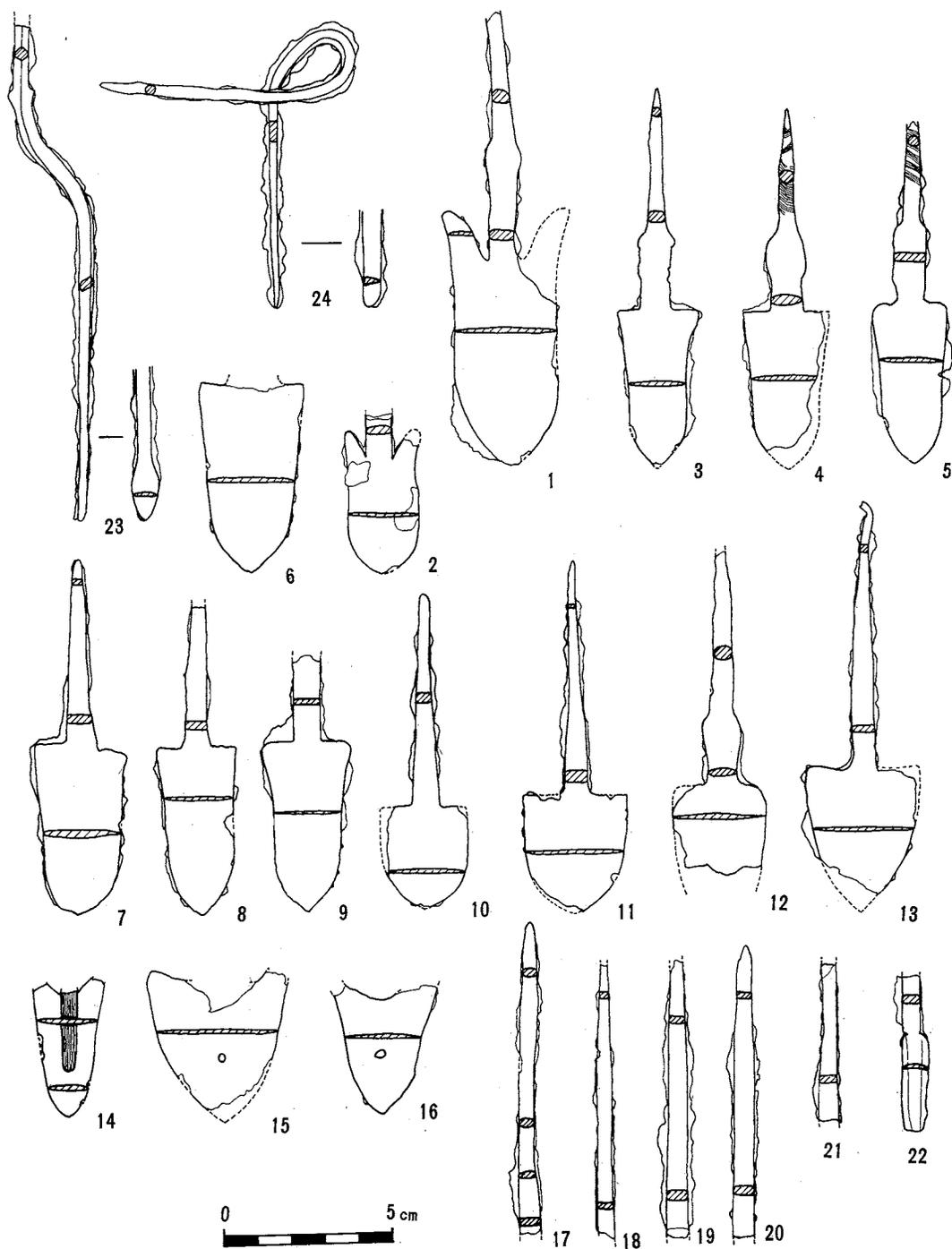
第216図 富士塚古墳出土金属器・ガラス小玉(1:2)



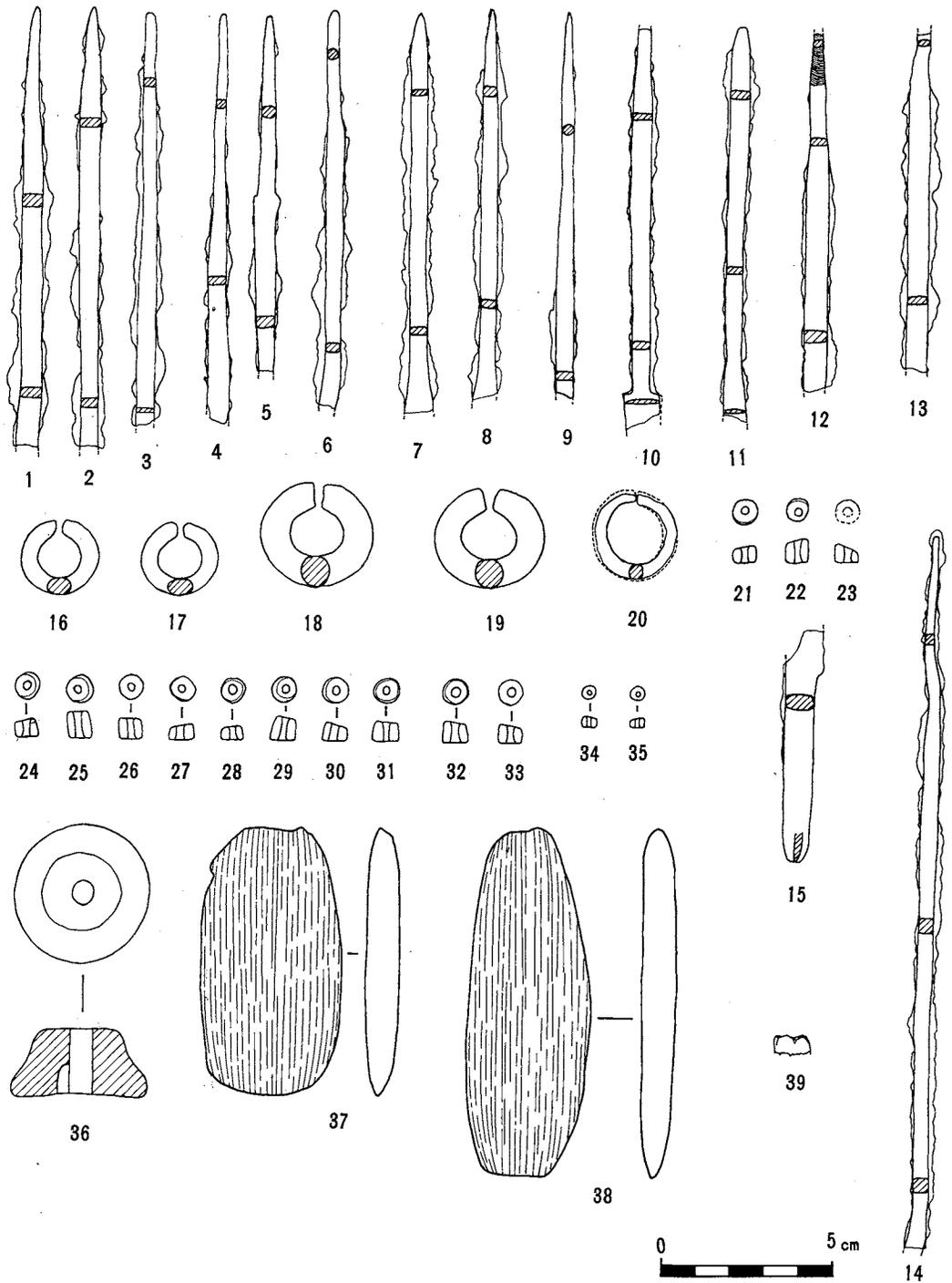
第 17 图 名瀬東古墳出土金属器 (1:3)



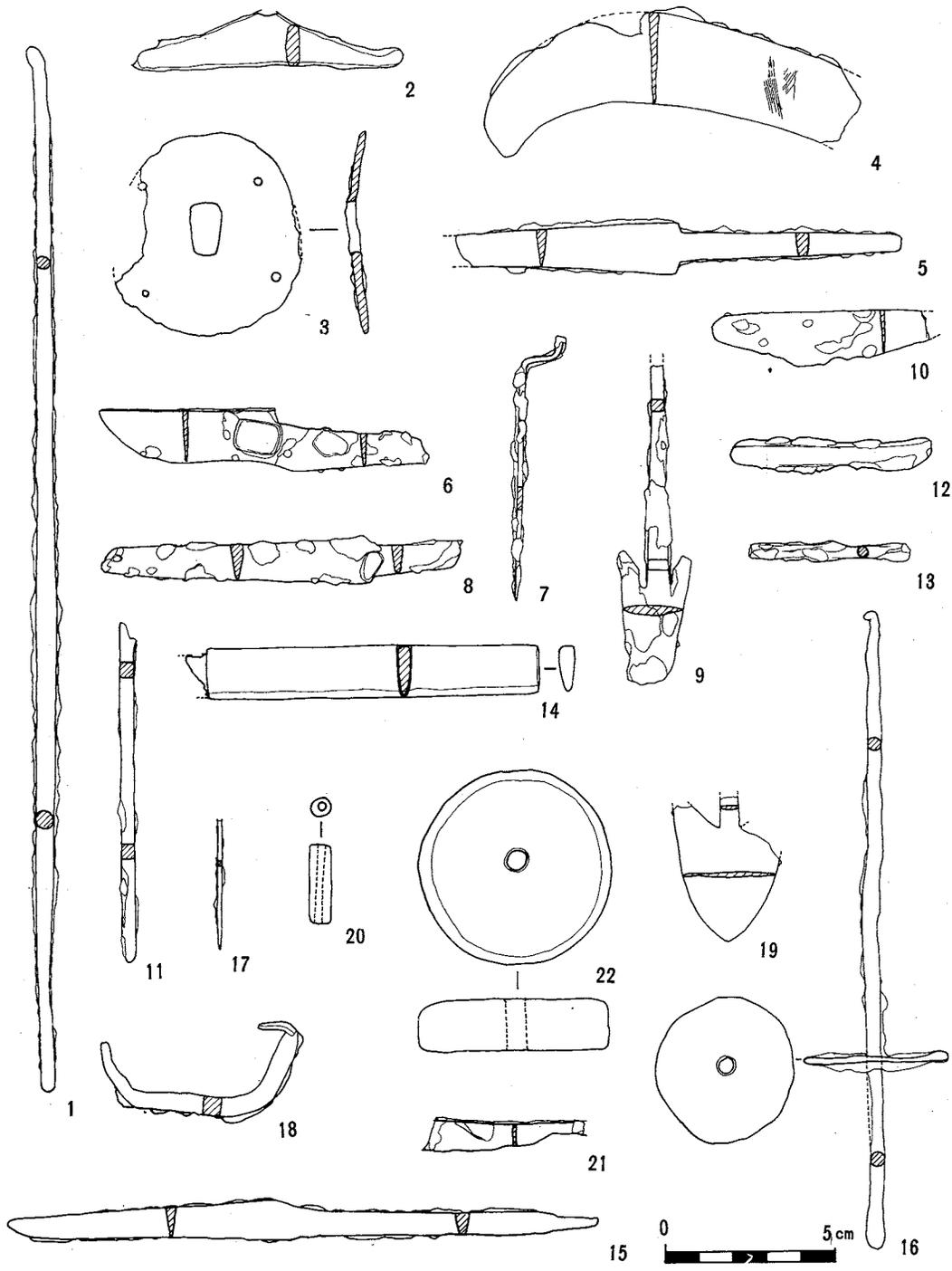
第218图 名廻東古墳出土金属器 (1:2)



第219图 名塚東古墳出土金属器 (1:2)

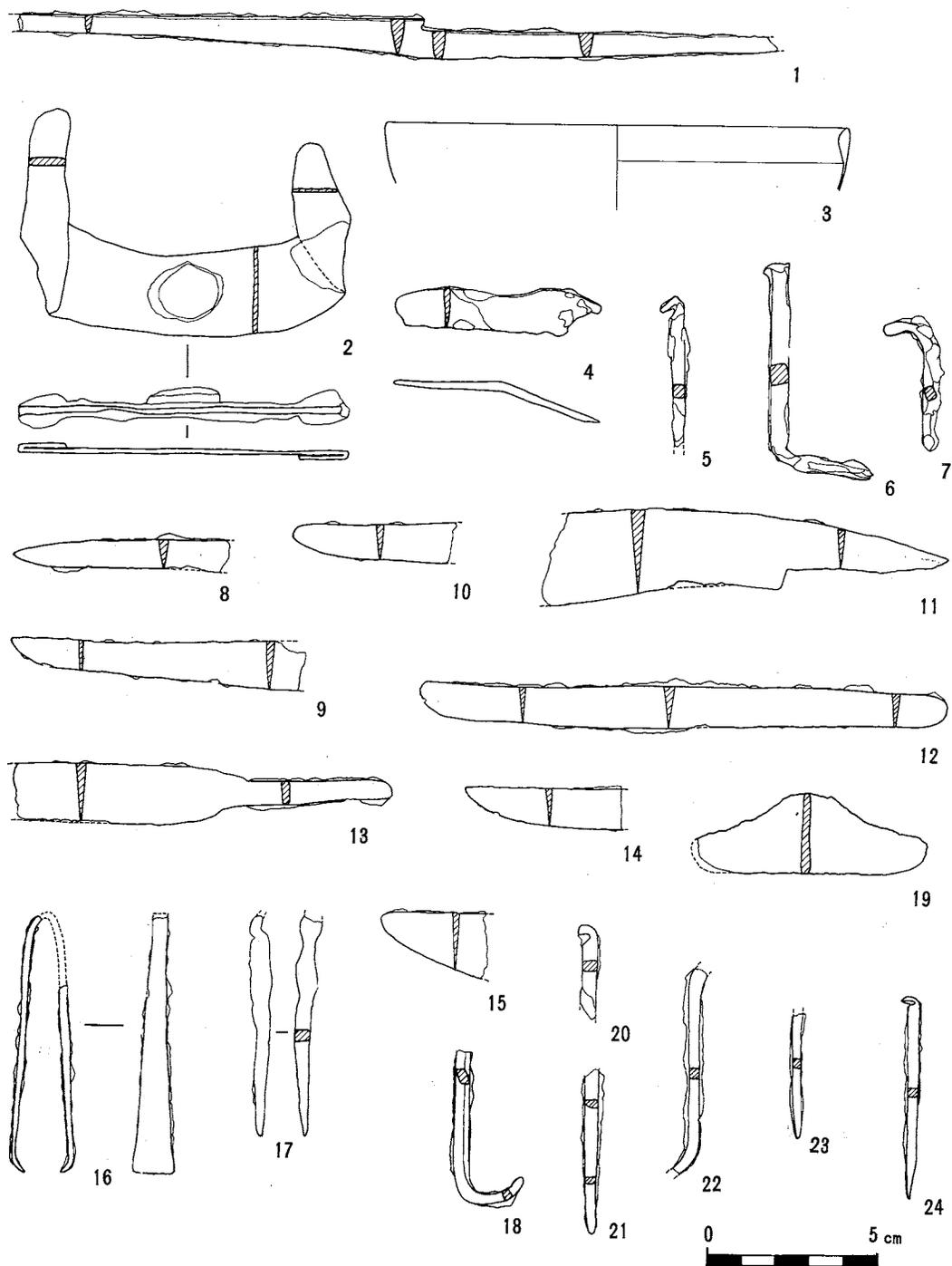


第220图 名迺東古墳出土金属器・石製品 (1:2)



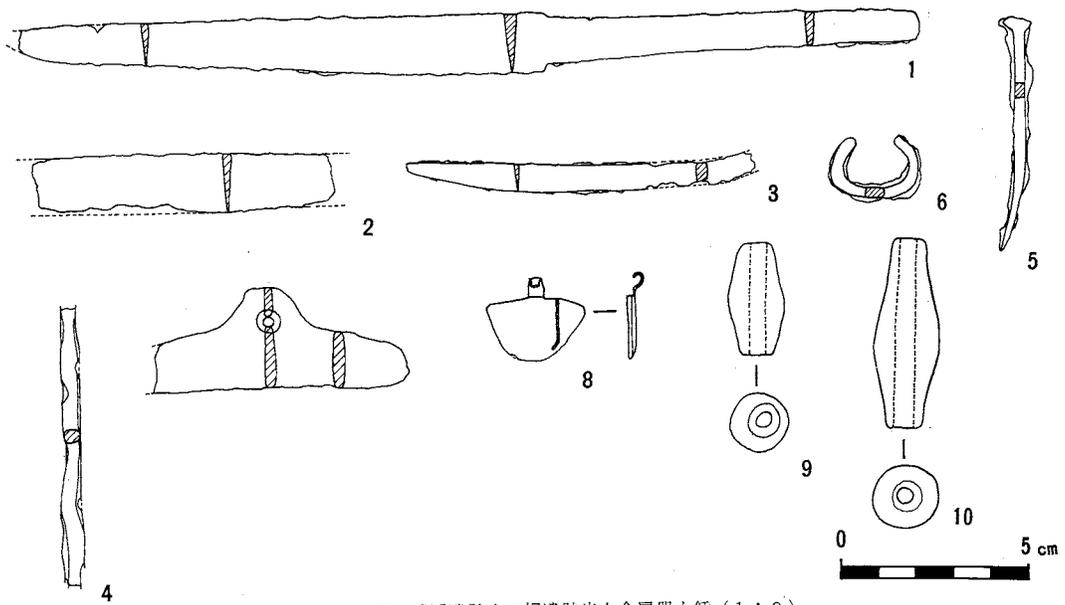
第221図 各遺跡出土金属器 (1:2)

(和手遺跡1 3住床 2 その他) (菖蒲沢遺跡3 7住覆 4 10住 5 11住) (南丘A遺跡6 1住覆 7 1住中央ビット 8 1住覆) (名廻南遺跡9 その他) (名廻遺跡10・11 その他) (山寺垣外遺跡12~14 その他) 百駄刈遺跡15 5住覆 16 5住床 17 5住カマド 18 5住床 19・20 その他 (大境遺跡21 2住覆 22 2住)



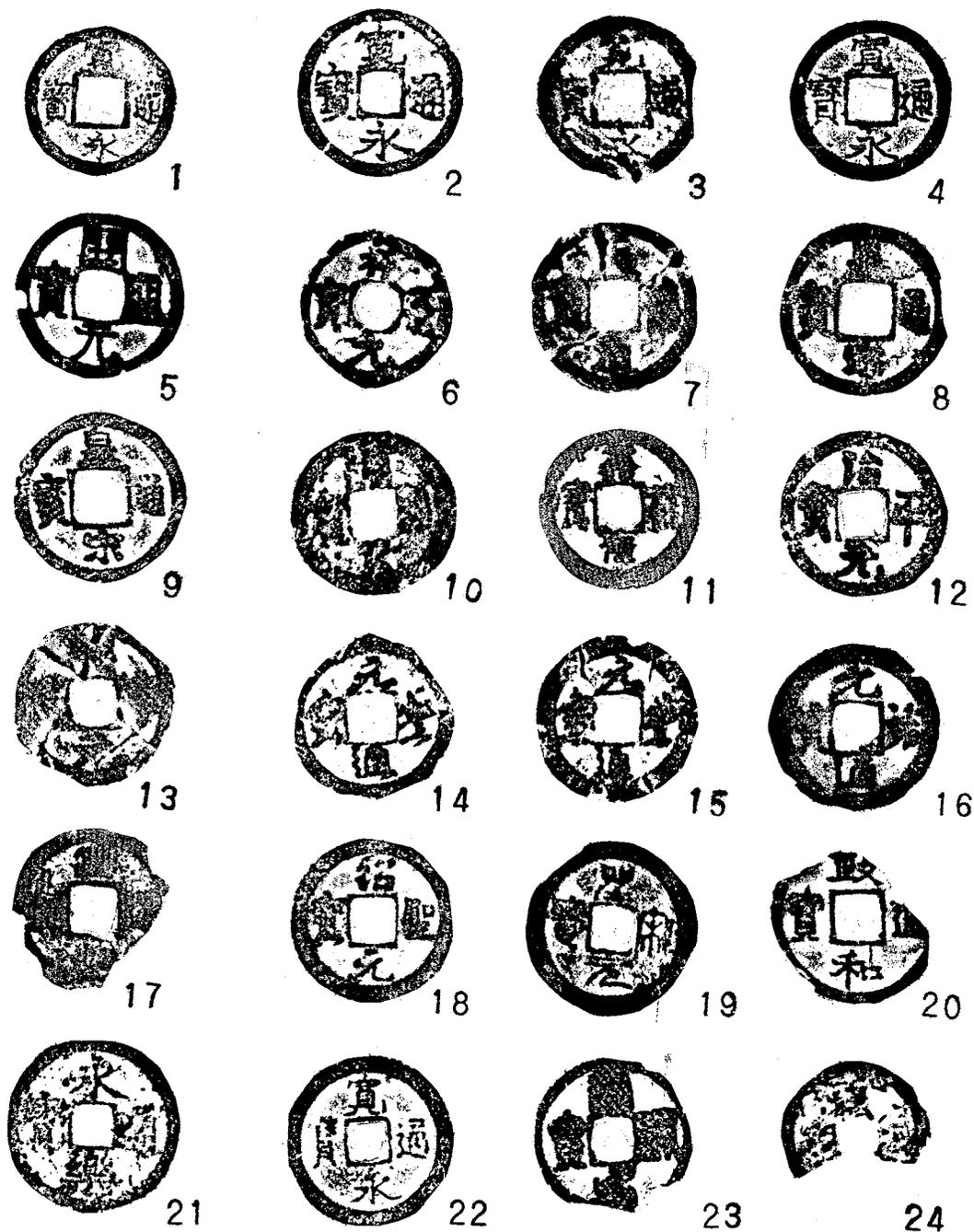
第222図 各遺跡出土金属器 (1:2)

(大境遺跡 1 2住床) (山の根遺跡 2 4住床 3 5住床 4~7 その他) 城平遺跡 8 4住床 9 6住
 10 6住床 11 7住 12 1号地下倉 13~19 3号地下倉 20 1号窖址 21·22 2号窖址 23·24 Pit85



第223図 城平遺跡山の根遺跡出土金属器土錘（1：2）

城平遺跡（1・2号墓塚）（5・5号墓塚）（2～4・6～9 その他）山の根遺跡（10 その他）

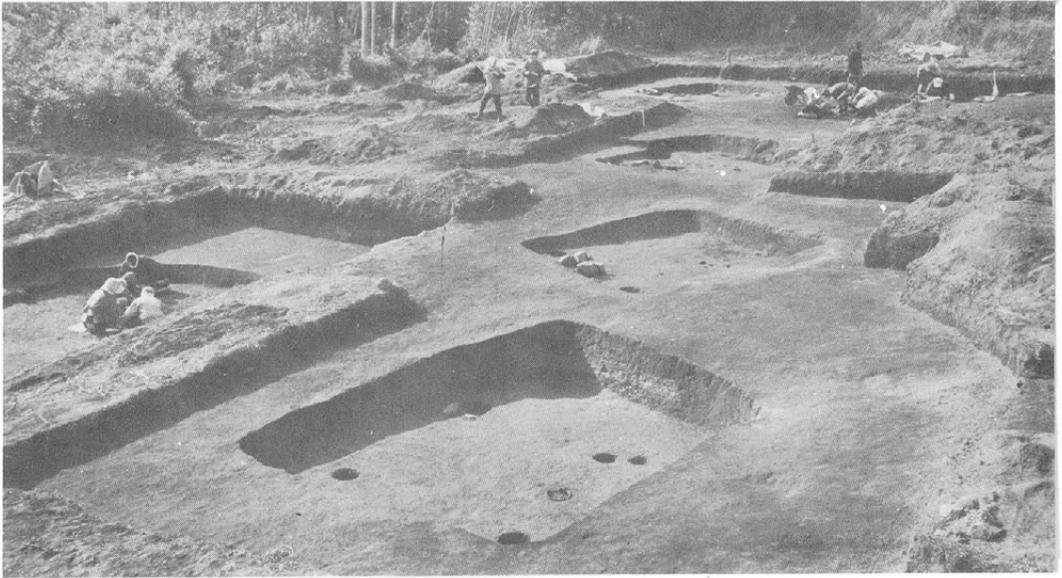


第224図 各遺跡出土古銭（1：1）

1. 和手 寛永通宝 2. 和手 寛永通宝 3. 名廻東 寛永通宝 4. 山の根 寛永通宝 5. 城平 開元通宝
 6. 城平 祥符元宝 7. 城平 天禧通宝 8. 城平 皇宋通宝 9. 城平 皇宋通宝 10. 城平 皇宋通宝 11. 城平
 嘉祐通宝 12. 城平 治平元宝 13. 城平 熙寧元宝 14. 城平 元豐通宝 15. 城平 通宝 16. 城平 元祐通宝
 17. 城平 元祐通宝 18. 城平 紹聖元宝 19. 城平 聖宋元宝 20. 城平 政和通宝 21. 城平 永樂通宝
 23. 城平 不詳 24. 城平 不詳



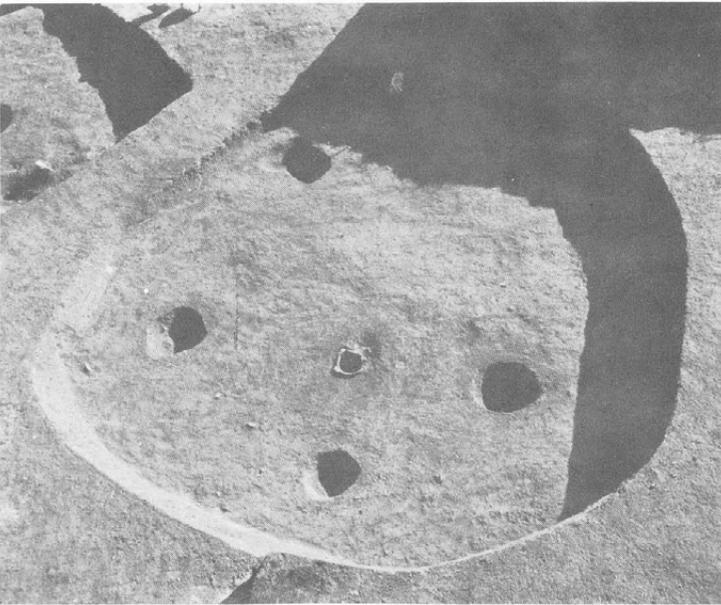
1. 遺跡全景



2. 住居址群手前から4・5・6・7号



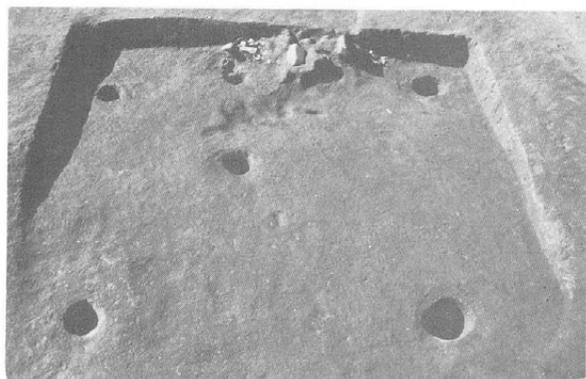
3. 弥生後期4号住居址



4. 弥生後期8号住居址



5. 8号住居ガメ



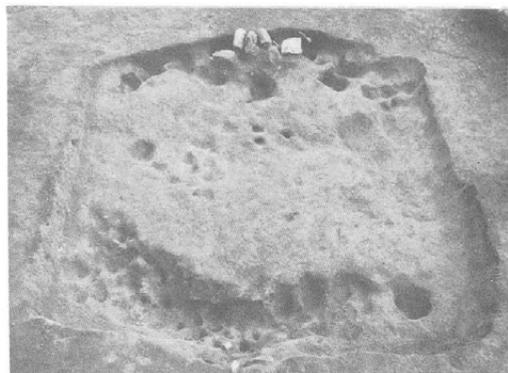
6. 2号住居址



7. 2号往カマド付近



8. 2・3・8号住居址



10. 6号住居址

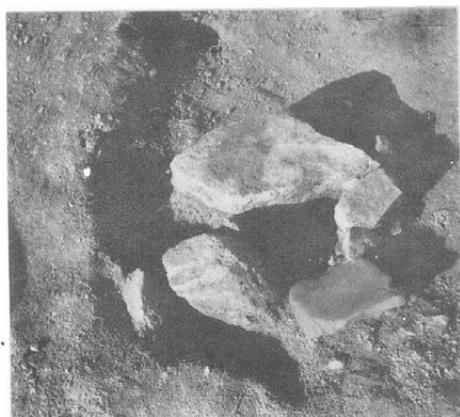


9. 5号住居址

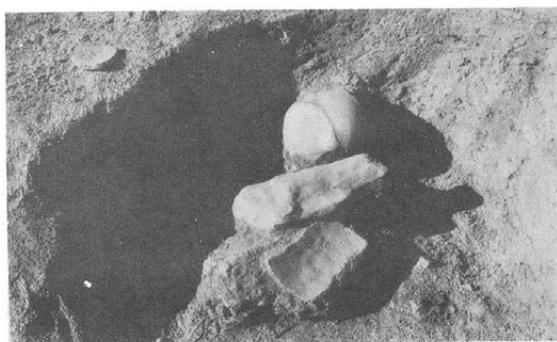


11. 7号住居址

第4図
和手遺跡
(4)



13. 7号住柱礎



14. 3号墨書土器ノ出土状況



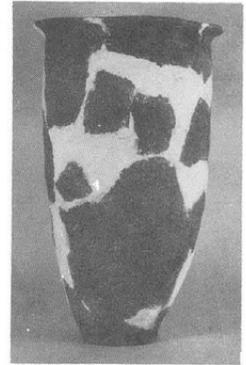
15. 雪中作業



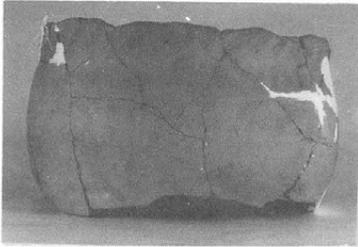
16. 4号住



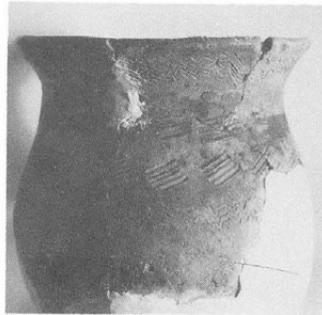
18. 8号住炉ガメ



20. 土師ガメ (2号)



17. 4号住炉ガメ



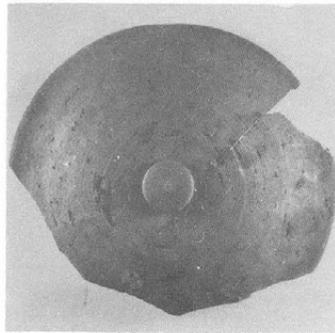
19. 8号住



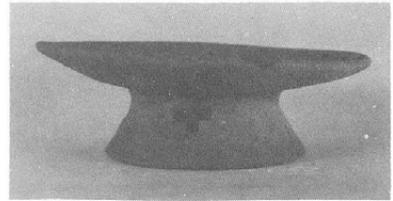
21. 須恵坏 (9号)



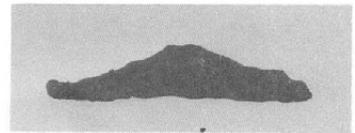
24. 墨書土師坏 (3号)



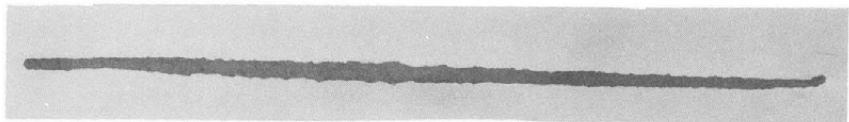
22. 須恵フタ (6号)



23. 須恵高坏 (6号)



25. 火打金具



26. 鉄製紡錘車軸 (3号)



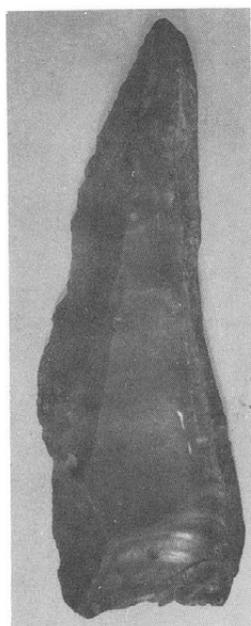
27. 4号炉ガメの施文



28. 4号ガメの施文



29. 8号住ガメの施文



31. 細ヶ谷B9剥片石器



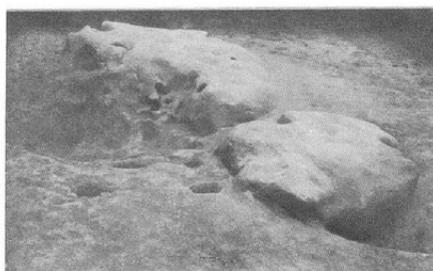
30. 8号住炉ガメの施文



32. 遺跡遠景 東より



33. 1号土壇



34. 1号マウンド



35. 2号土壇



36. 1号住居址

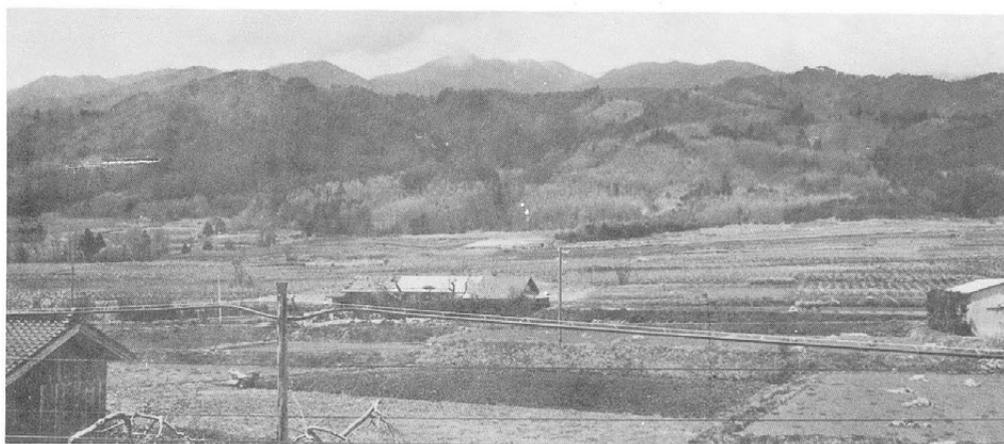
37. 2号住居址



38. 2号住居ガメ



39. 炉ガメの施文



40. 遠景 東より (中央山つけ)



41. 全景 東より



42. 全景 北より



43. 表土をはねたところ



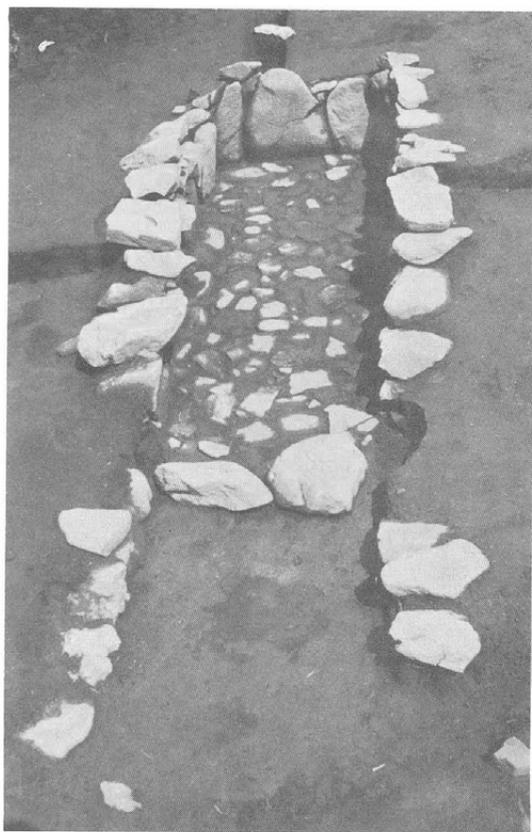
45. 羨道最奥の須恵器



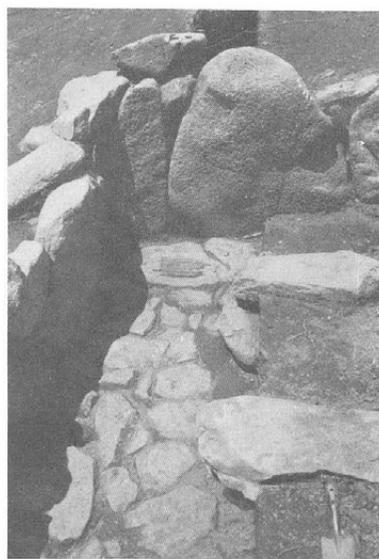
46 金環出土

44 石室



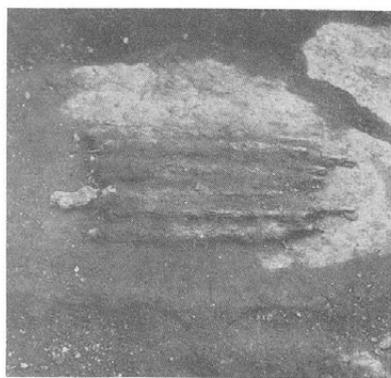


47. 石堂全景 室

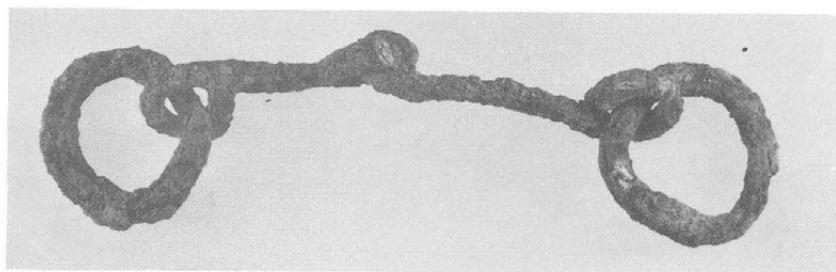


48
カガミ石と鐵束

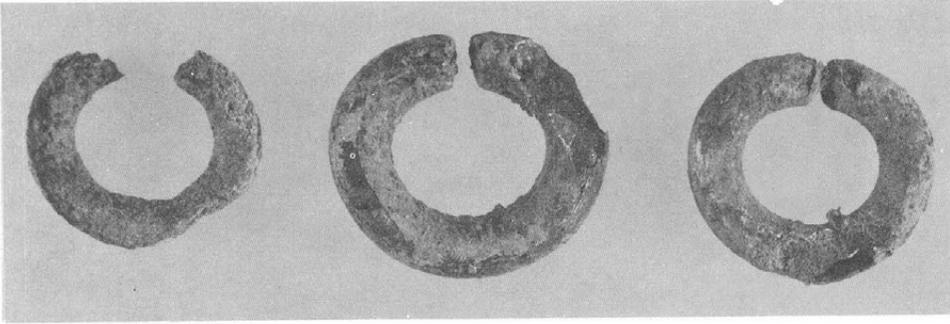
第11図 富士塚古墳(2)



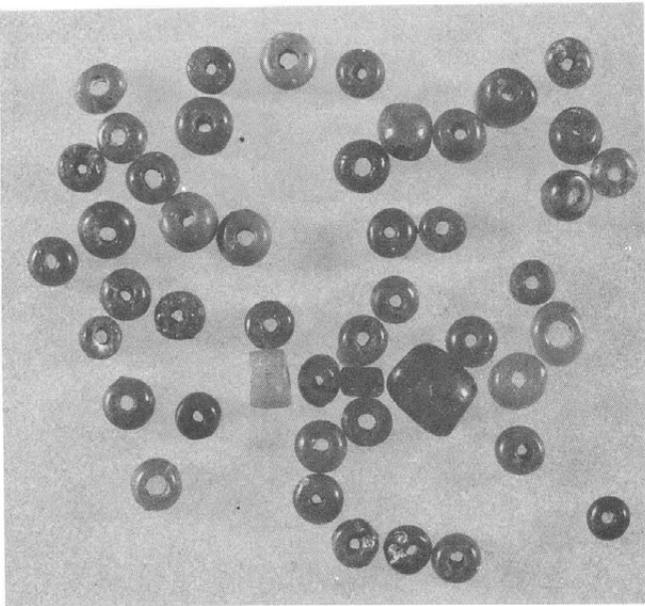
49. 10本の鐵束の状況



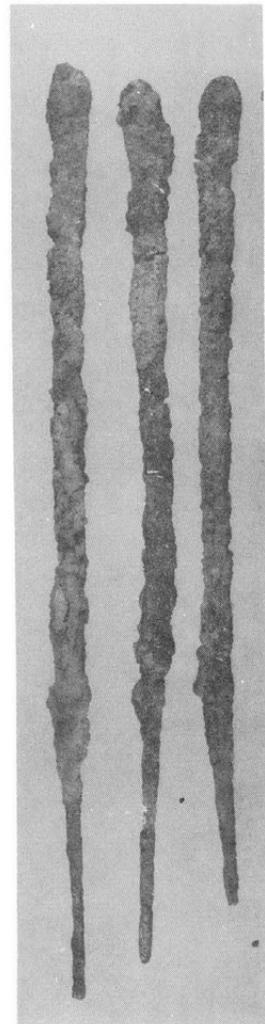
50
馬具



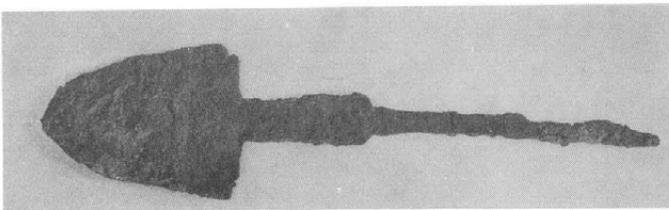
51. 金環



52. ガラス小玉

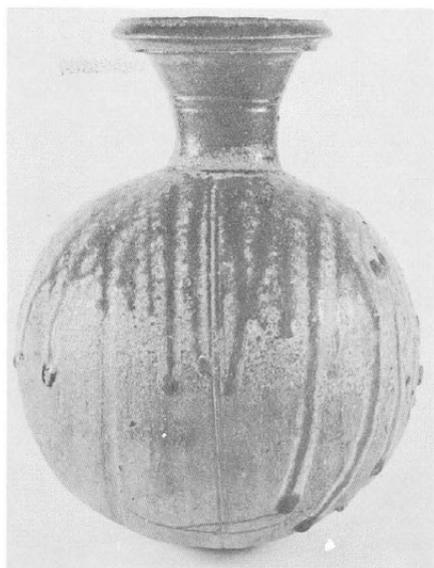


53 尖根鏃

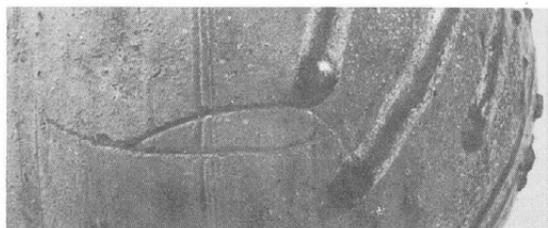
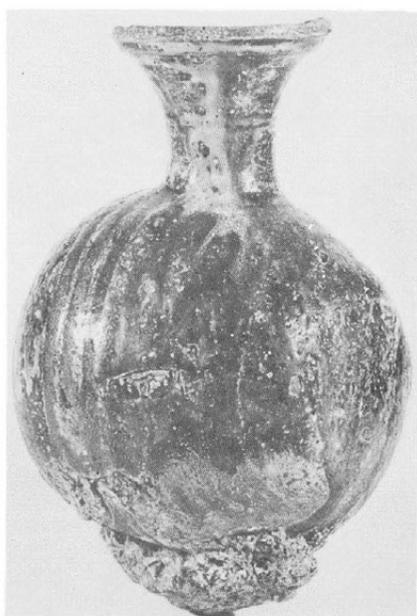


54. 平根鏃

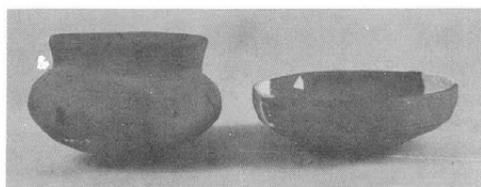
55 須恵瓶



57 須恵瓶



56. 55瓶の刻印



59. 須恵埴と埴



58. 須恵直口壺

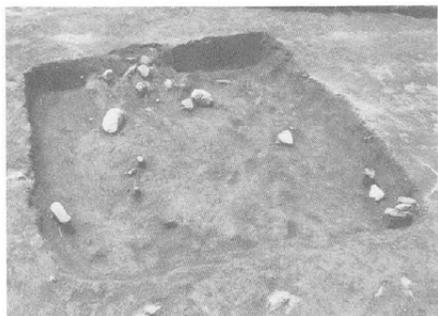


60. 土師高坏



61. 遠景

62
1号住居址



63. 2号住居址



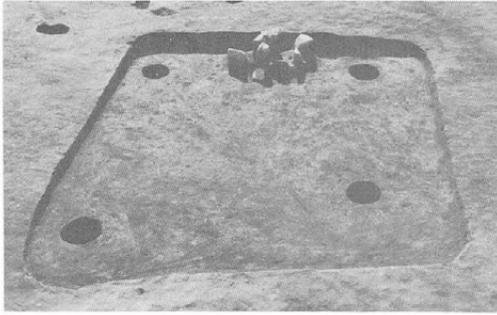
64. 3号住居址



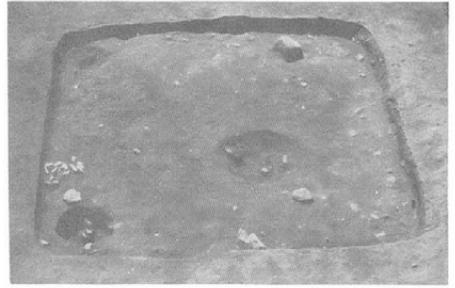
65. 4号住居址



66. 5号住居址



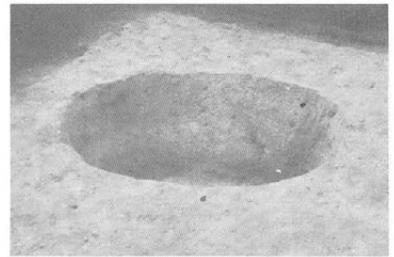
68. 8号住居址



69. 11号住居址



67. 7号住居址



70. 3号土坑

第16図 菖蒲沢遺跡の住居址群とカマド

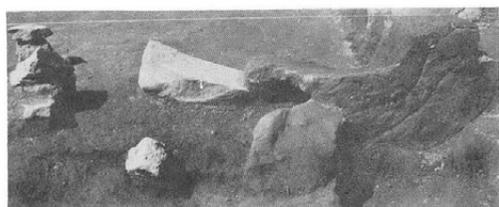
71 手前から9・10・7・8号住居址



72. 1号住カマド



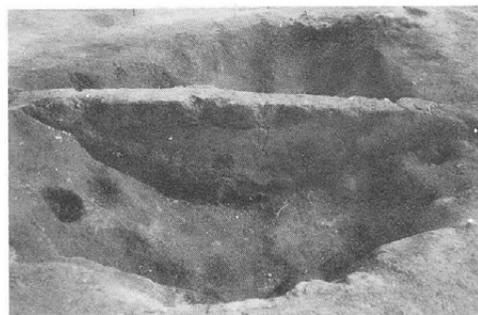
74. 9号住カマド



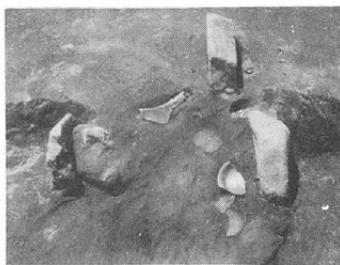
73. 1号住カマド断面



75. 7号住カマド



77. 10号住火床



76. 4号住カマド

第17図 菖蒲沢遺跡の遺物



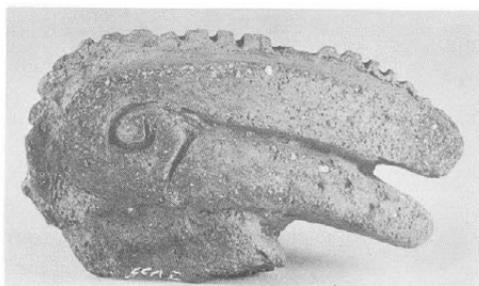
78 8号住土師壺



80 4号住須恵壺



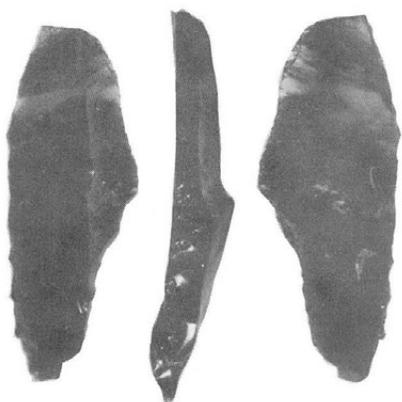
79 7号土師ガメ



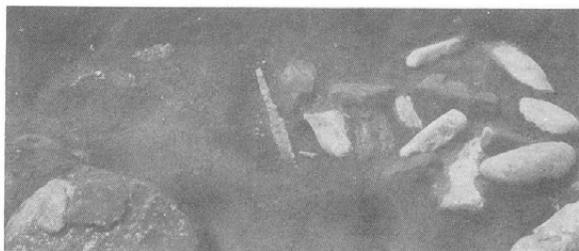
84. 土製品



81. 10号住鉄鎌



83. ナイフ型石器



82. 11号刀子出土状況

第18図 南丘A遺跡(1)

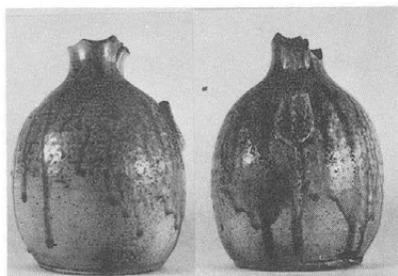
85 遠景



86. V字状溝址



87
1号墓墳



88. 墓墳出土灰釉水瓶

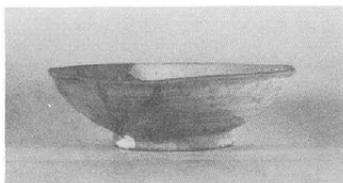
89
溝址と1号住居址



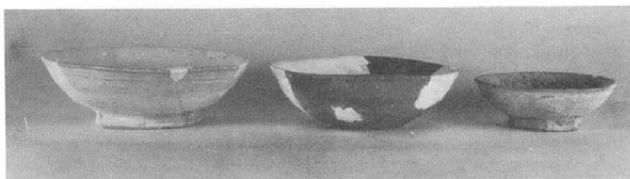
90
1号住居カマド



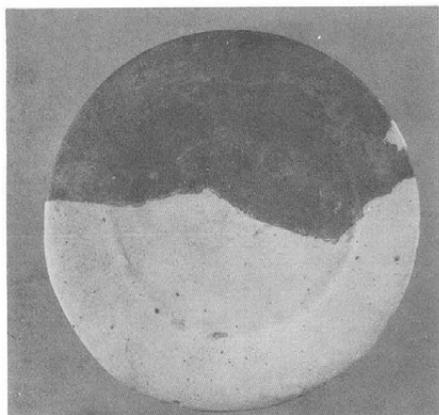
91. 3号住居址と埋ガメ



92. 1号住灰釉椀



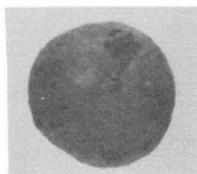
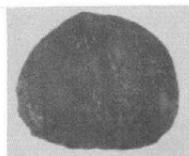
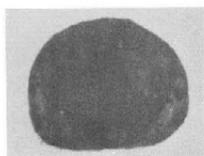
93. 1号住灰釉椀須恵坏



94. 1号住灰釉段皿

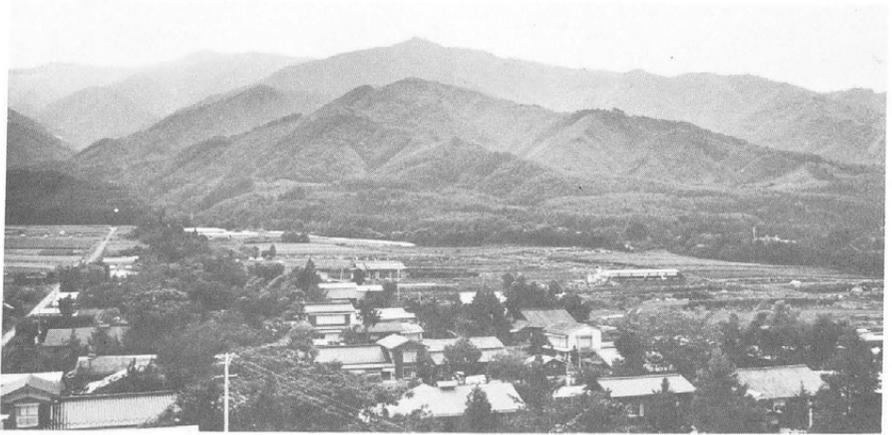


96. 3号住埋ガメ



95. 2号住炭化栗

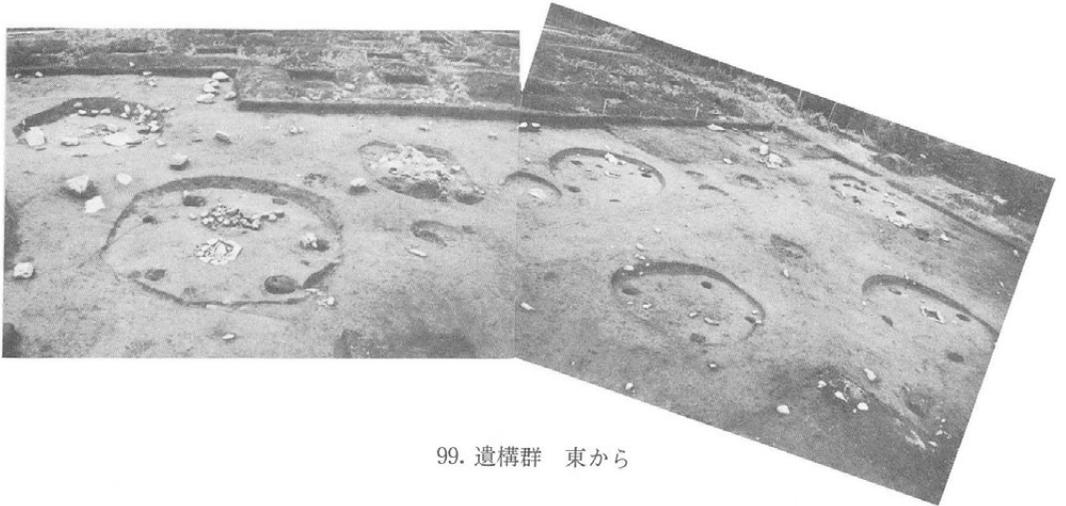
97
全景



第21図
北丘A遺跡と遺構群



98. 遺構群 北から



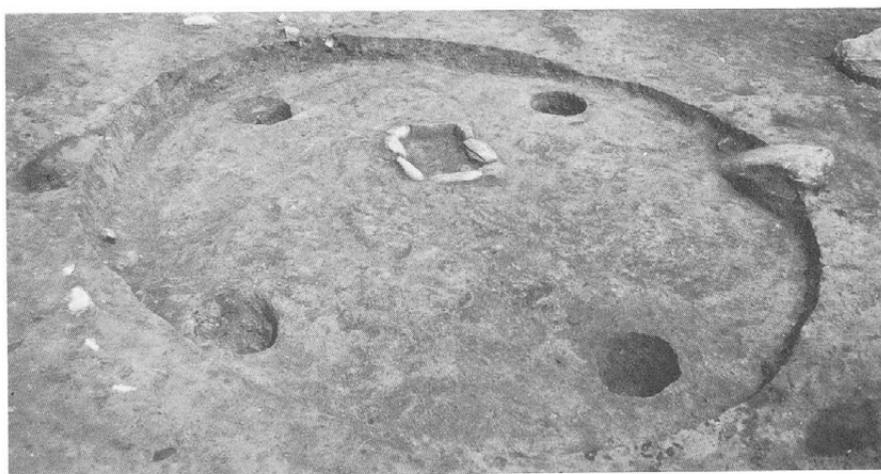
99. 遺構群 東から

第22図 北丘B遺跡の住居址



100
3号住居址

101
5号住居址



102
8号住居址





103. 1号竪穴



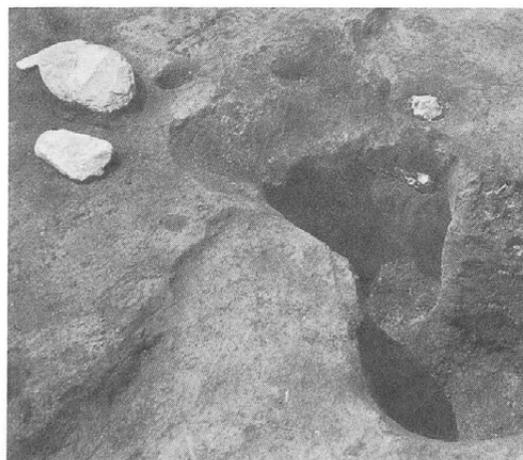
105. 3号竪穴



104. 2号竪穴



106. 4号竪穴



107. 4号の黒曜石壘のある坑と石器



108
4号の硬砂岩断片と土器

第24図 北丘B遺跡1号土壙群

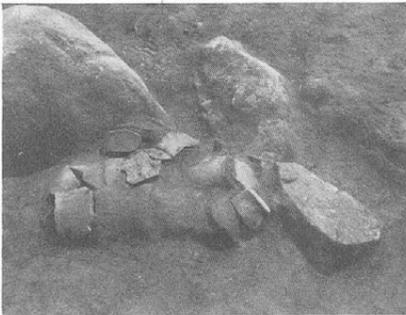
109
1号土壙群



110
土壙群中の土器



111. 土壙群中の土器



112. 土壙群中の土器





113 土城群中の土器



114 土城群中の土器



115. 土城群中の土器



117. 2号住居皿と磨石



116. 土城群中の土器

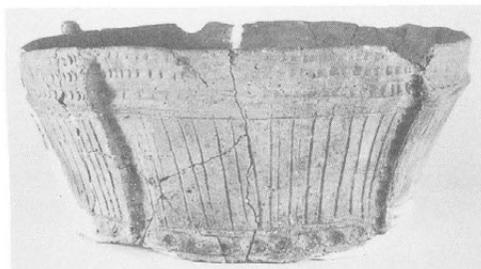


118. 3号住炉

第26図 北丘B遺跡の土器(1)



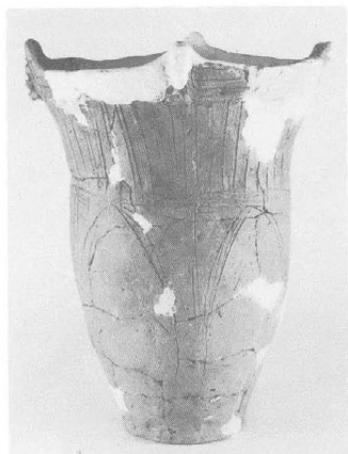
118 2号土壙群



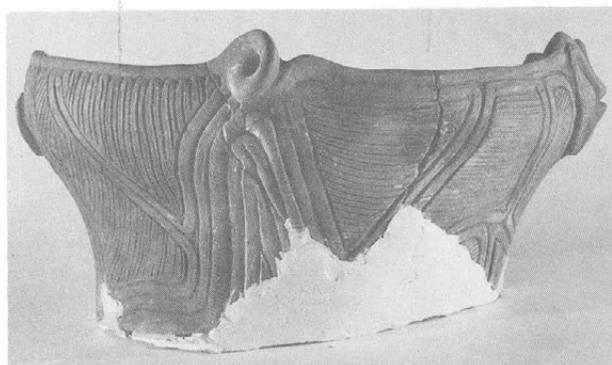
120 4号住



121 2号土壙群



119 1号土壙群



122. 2号土壙群



123. 1号土壙群

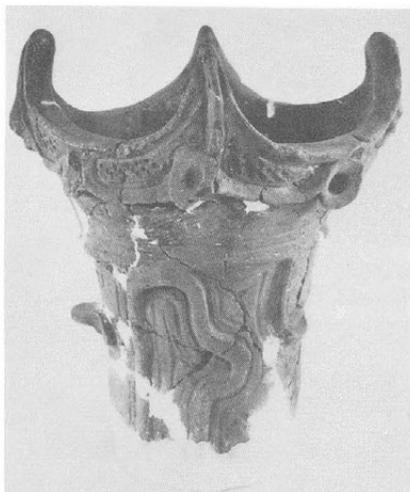
第27図 北丘B遺跡の土器(2)



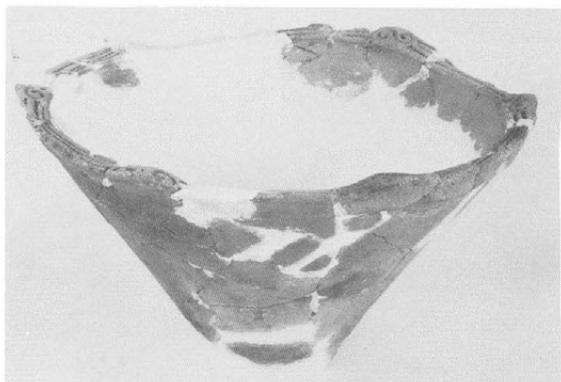
125
2号土城群



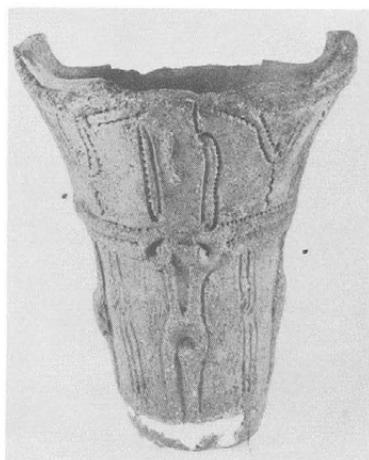
124
2号土城群



126
3号竖穴



129
7号住



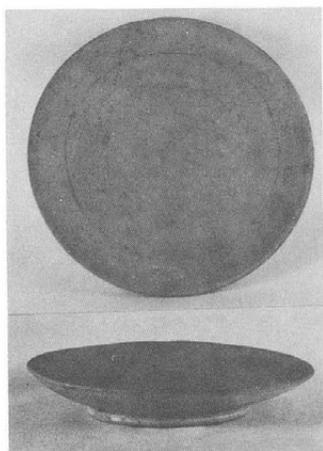
127
3号竖穴



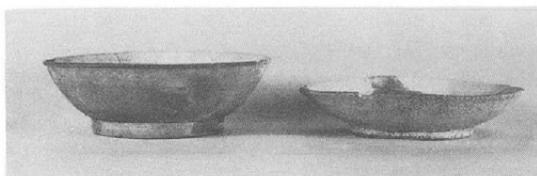
128
3号竖穴



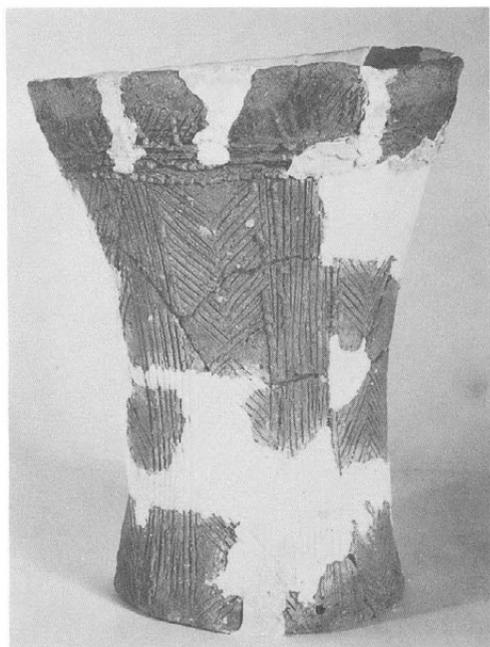
130. 1号住居址



131
1号住居灰釉皿



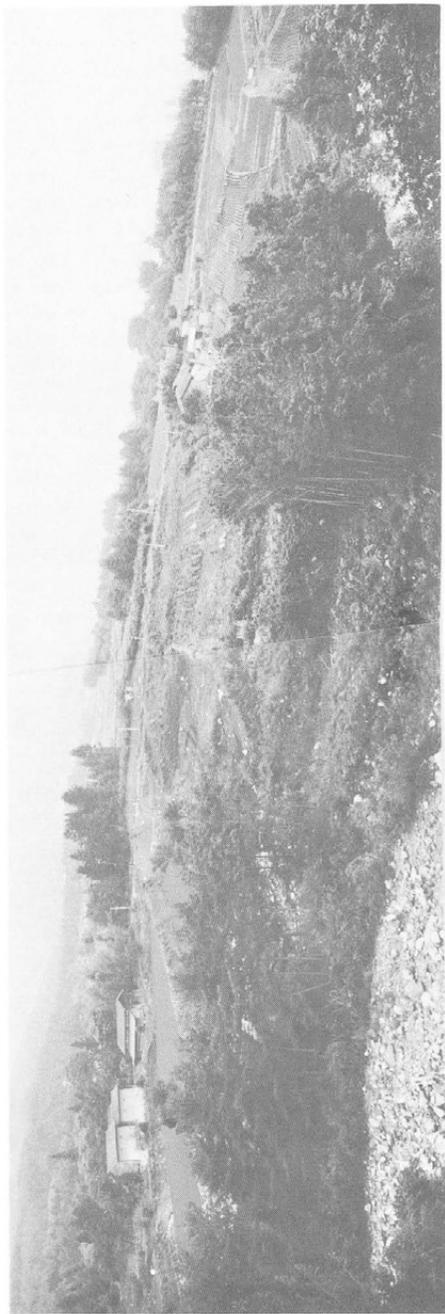
132. 1号住居灰釉碗・皿



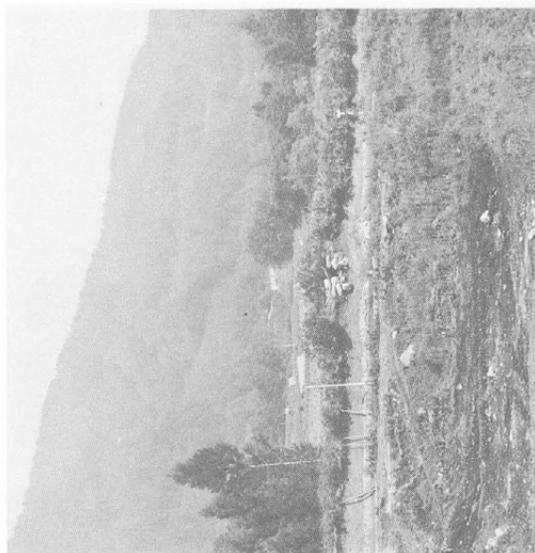
133. 縄文土器



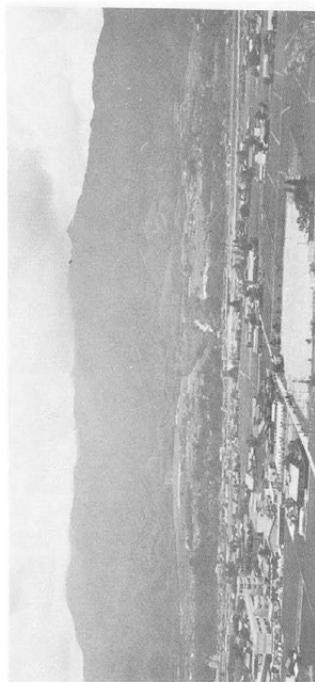
134 大田切川岸辺の遺跡 1.南丘A 2.南丘B 3.北丘B 4.名廻南 5.名廻東古墳 6.名廻 7.白沢原
8.山寺垣外



136. 全景 南より



137. 墳丘と石室



135. 遠景 天竜川東岸より (中央支流の右岸)

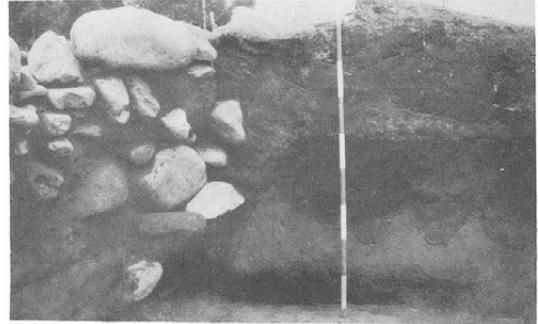
138 天井石と裏づめ



139 石室の石積



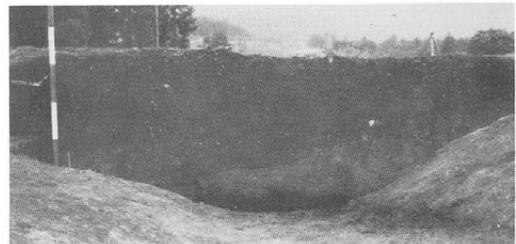
140. 奥壁裏づめと堀りこみ



141. 東壁裏づめと堀りこみ



142. 堀りこみと石積断面



143. 周涅断面 西側



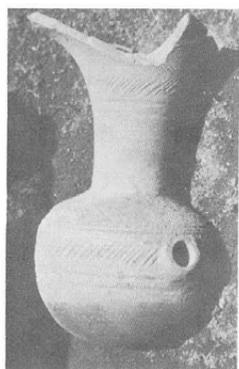
144. 石室の石積、羨道部よりみる



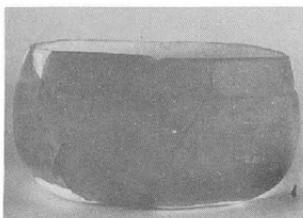
145. 天井石をはずした石室



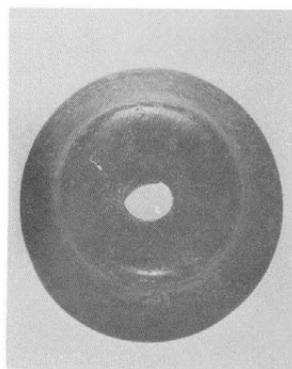
146. 鍔の出土状況



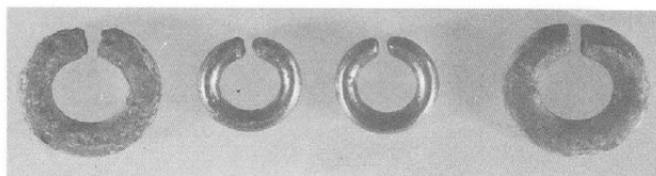
147
罎の出土状況



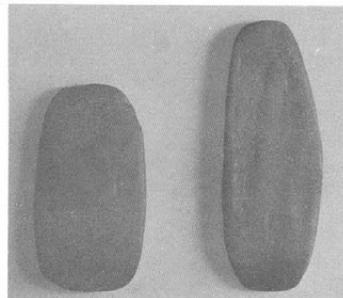
148. 土師鉢



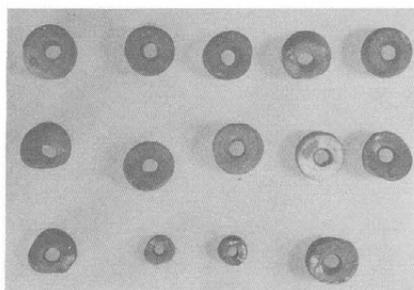
149
石製紡錘車



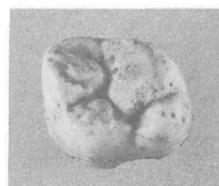
150. 金 環



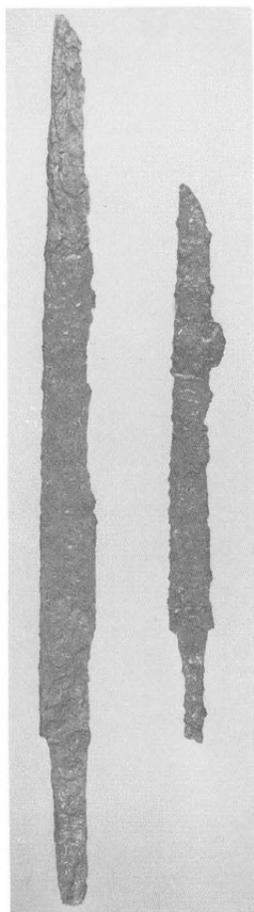
152. 石製品



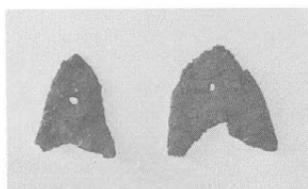
151. 玉



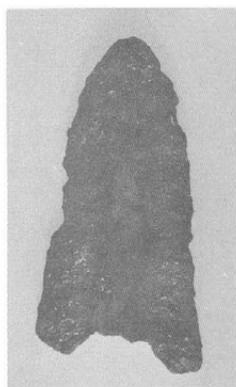
153. 白歯



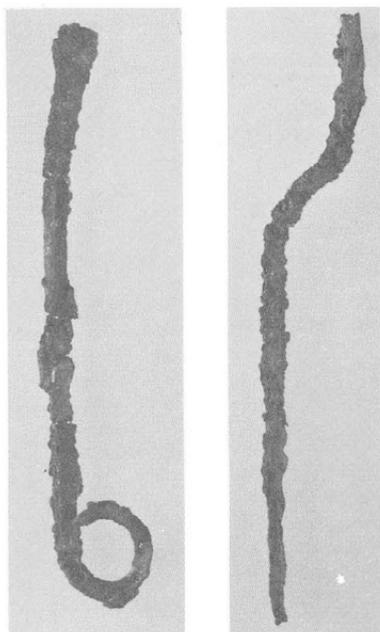
154 刀



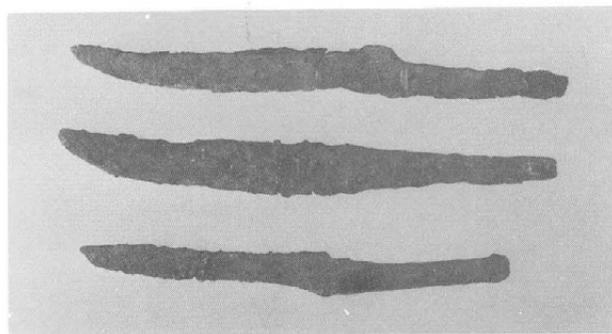
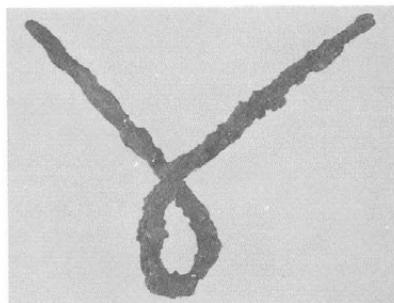
156. 無茎有孔の鏃



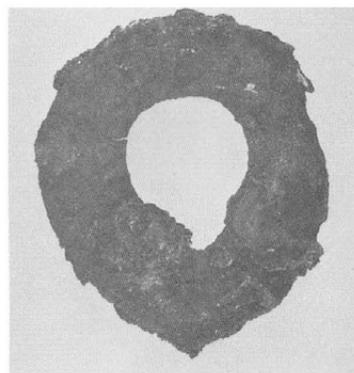
157
本質の殊る鏃



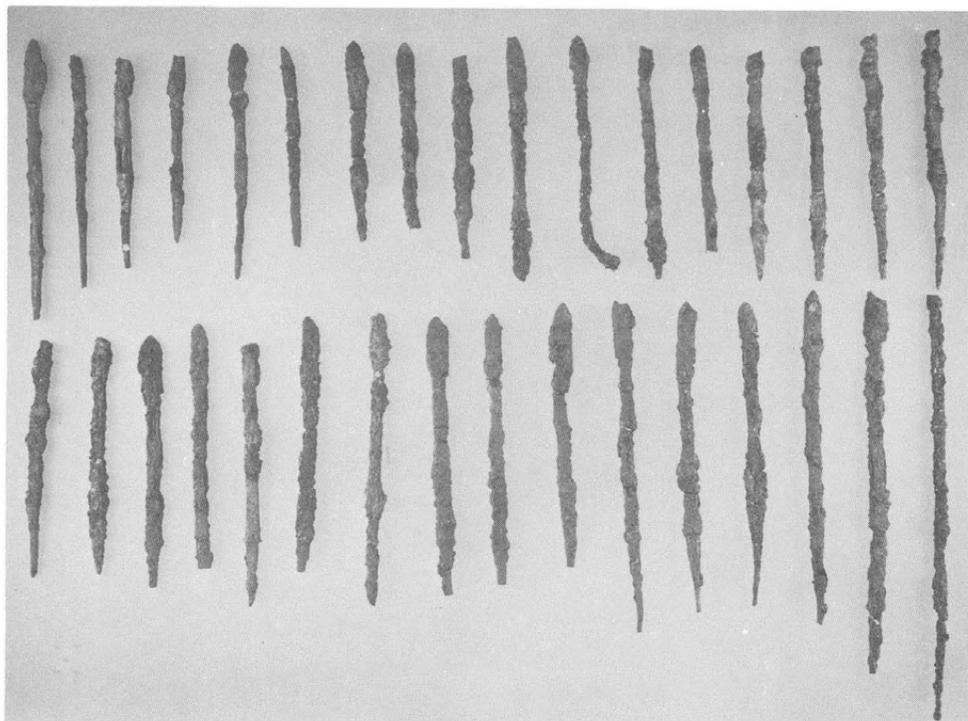
158~160. まげられた鏃



155. 刀子

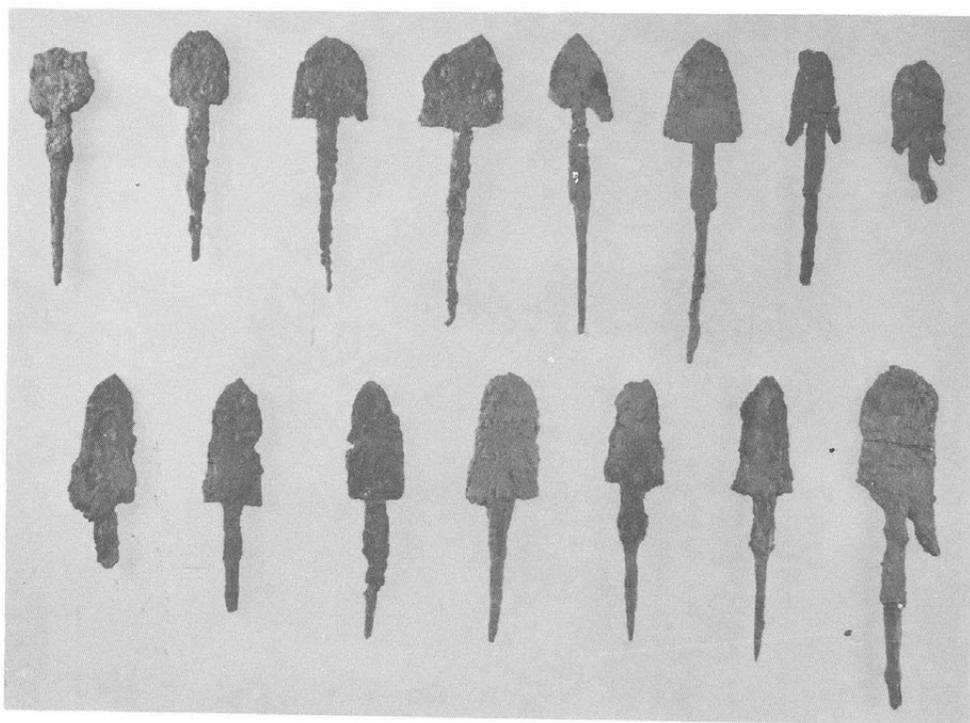


161. 大刀のツハリ



162 尖根式鏃

163 平根式鏃



164 名廻全景



165. 名廻1号住居址



166 名廻溝状遺構



167 白沢原トレンチ



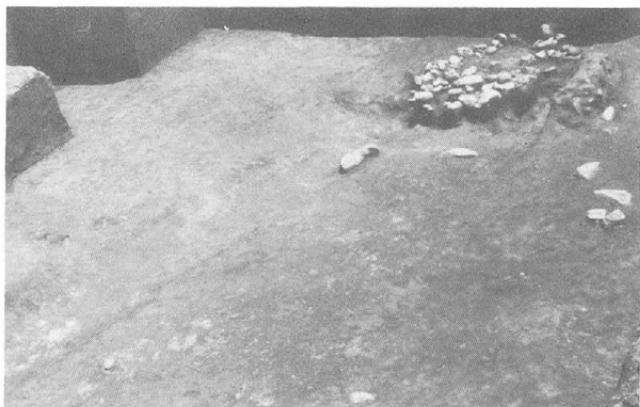
168. 全景



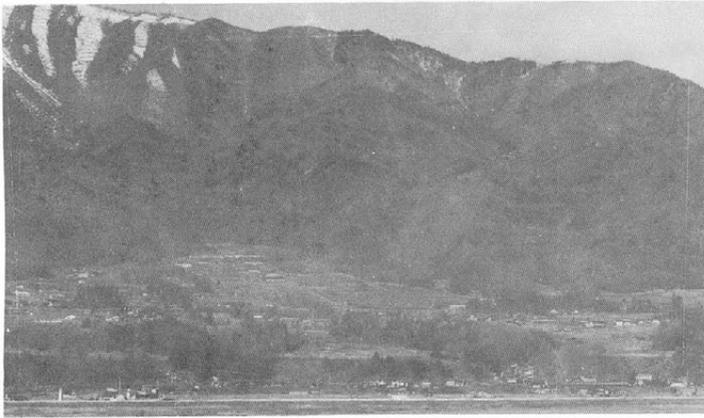
169. 1号土壇



171. 小柄の柄部



170. 溝址



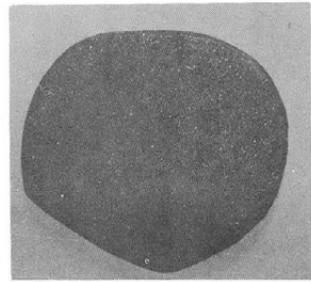
172. 遠景



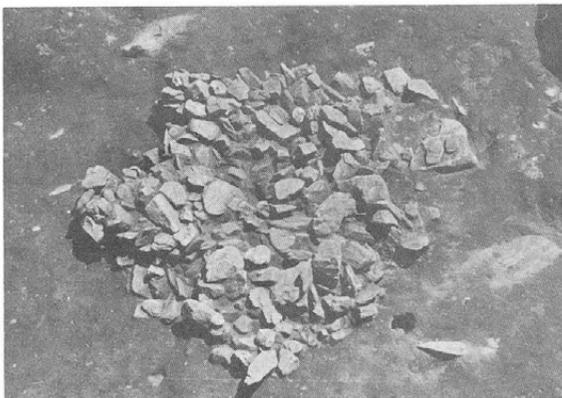
173. 10号土壙



174. 19号土壙



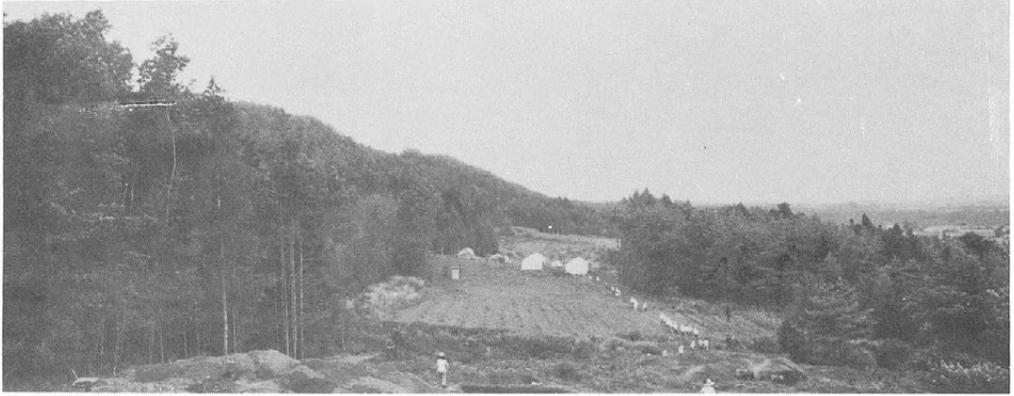
176. 1号土壙の石製円板



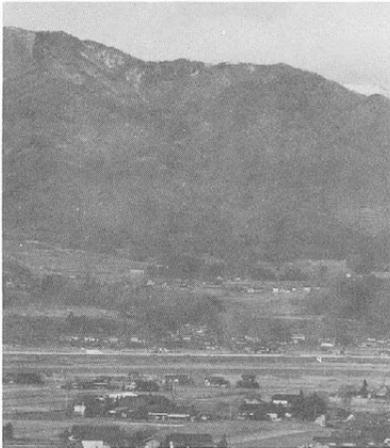
175. 1号集石址



177. 15号土壙の土器



178. 全景 入列の所



179
遠景
中央森の奥

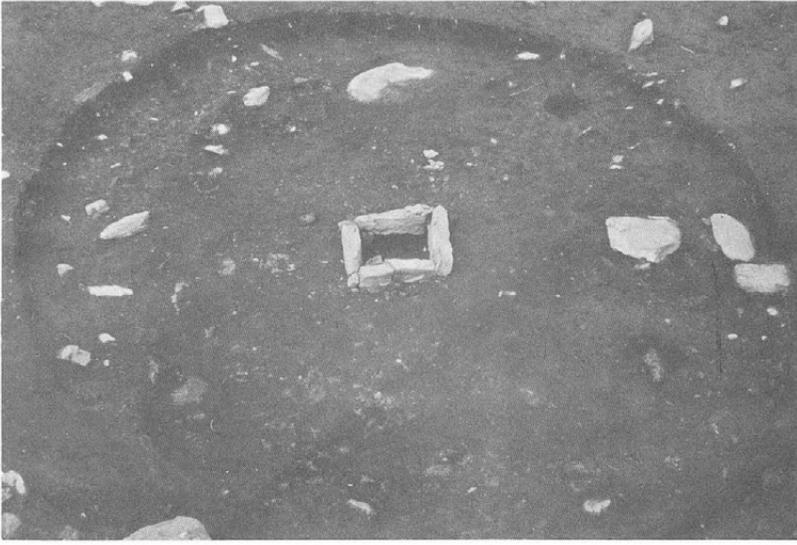


181. 1号住石囲炉

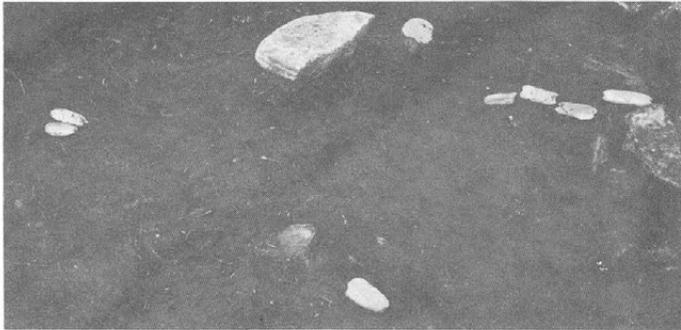


180. 手前より2・1号住居址

第40図
百駄刈遺跡(2)



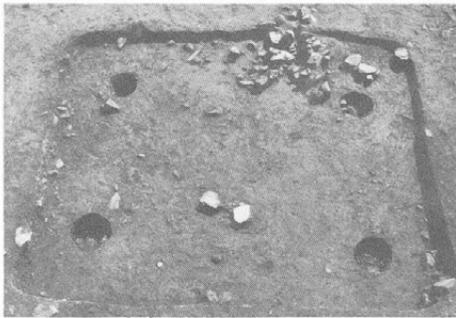
184
ミニチュア土器の出土状況



183
4号住付近の石皿と石錘

182. 1号住居址

185
ミニチュア土器の出土状況



187. 5号住居址



188
紡錘車の出土状況



186. 深鉢匠部の出土状況



189. 立石を伴う配石址 北より



190. 立石を伴う配石址 東より



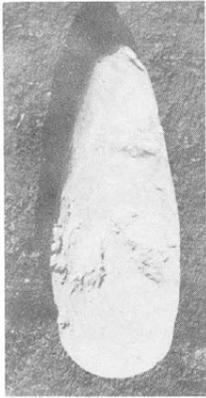
191. 石囲配石址



192. 石囲配石中の石棒

193
土壙群と立石配石址
(手前土壙群)





194. 蛤刀磨石斧



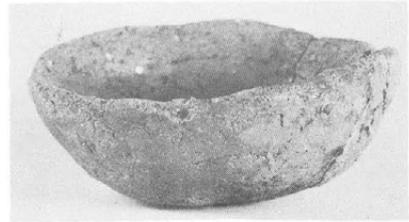
195. 定角磨石斧



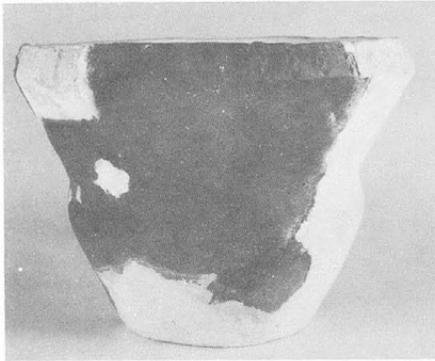
196. 1号住円板状石器



197 有孔飾玉



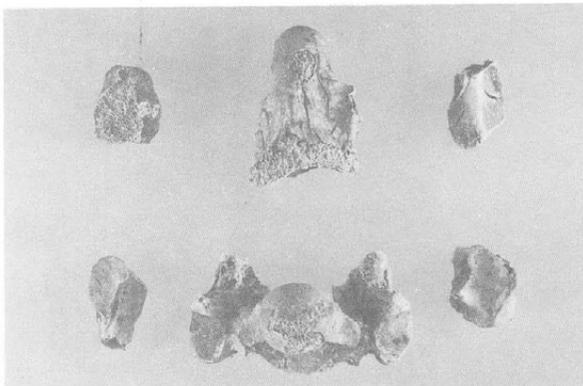
198. 1号住ミニ土器



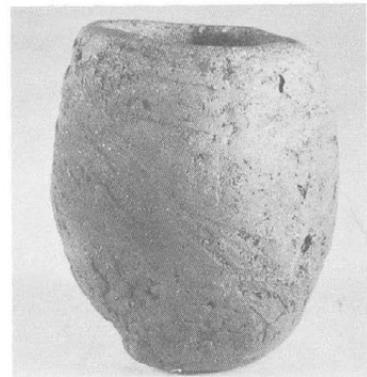
201 深鉢



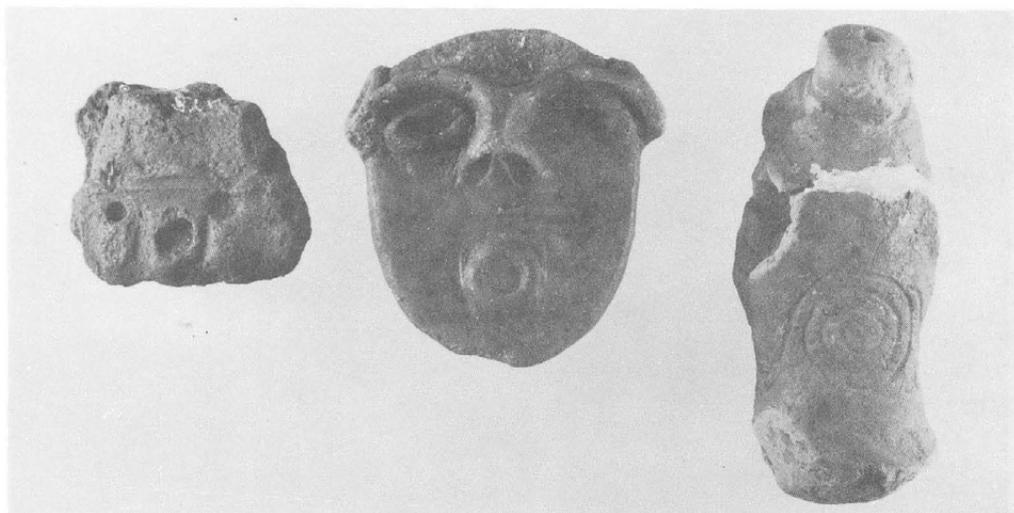
199. 1号住ミニ土器



202. 特殊遺構の骨付



200. ミニ土器



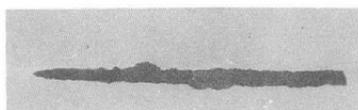
203. 土偶と土製品



204 2号住 土偶

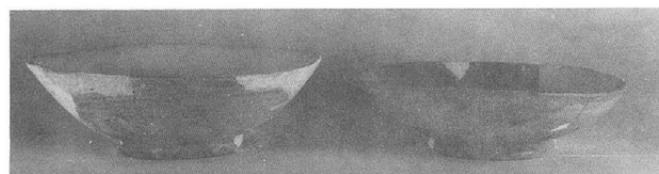
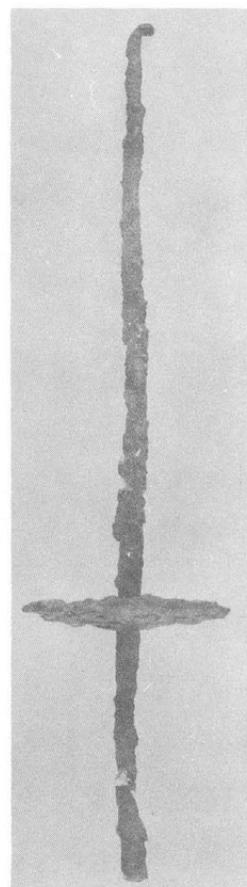


208. 管玉



206. 5号住の鉢針

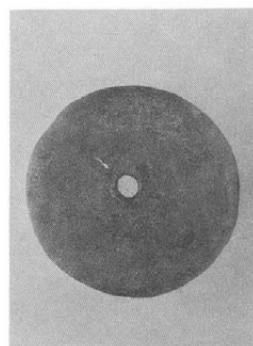
205
5号住の紡錘車



207. 5号住の灰釉碗



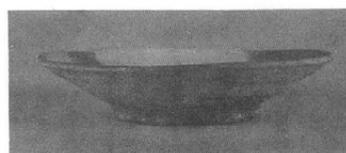
210. 2号住居址



211. 2号住須恵質紡錘車



213. 1号竖穴



212. 2号住灰釉皿



214. 1号土塚の土師坏出土状況



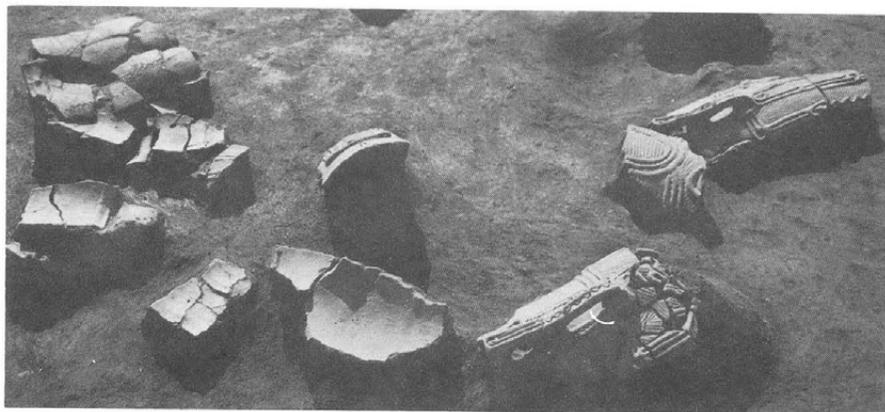
215. 遠景



216. 1号住土器貼りの炉



217. 6号住居址



218. 6号住土器出土状況



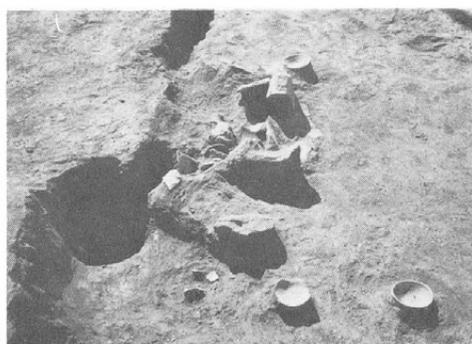
219 2号住居址



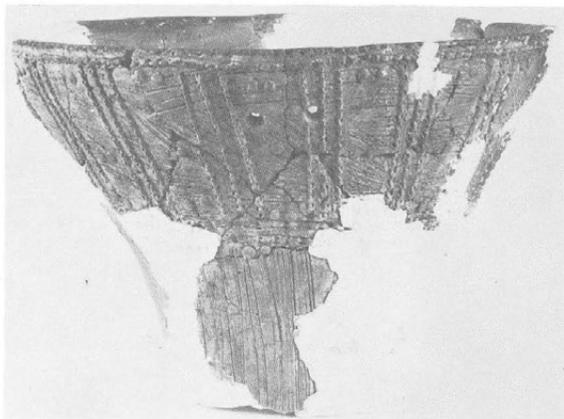
220 4号住居址



222 1号竪穴とピット群



221 4号住カマド付近



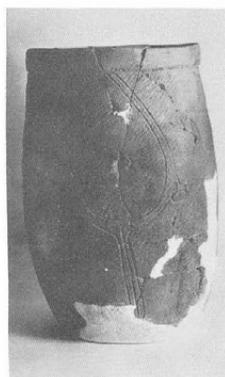
223 2号壺



224
1号住壺



227 6号住



228 6号住



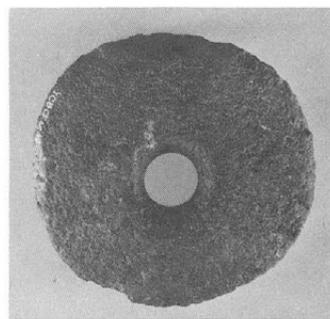
225
1号住



226 6号住



229 2号住壺カメ

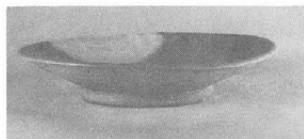


230 環状石斧

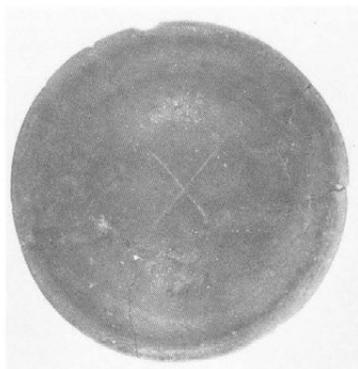
第48図 山の根遺跡の遺物 (2)



231 3号住土師坏

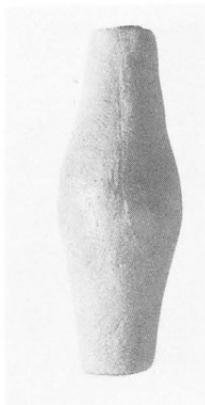


232 4号住刻印ある土師坏

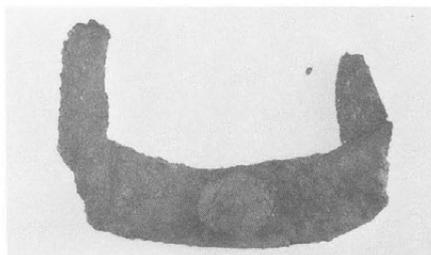
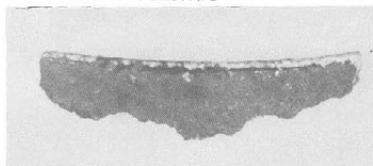


237. 5号住銅碗

233 左と同じ



238 土錘



235. 4号住鋤先



234. 4号住陰刻



239. 1号竖穴出土クルミ



240. 東よりみる遺跡（家並のむこう側）



241. 南よりみる遺跡全景と経岳

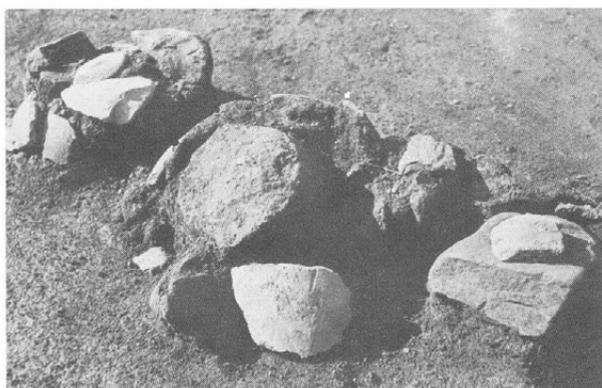


242
天竜川東よりみる
遠景 手前天竜川右小黒川

243 9号住居址

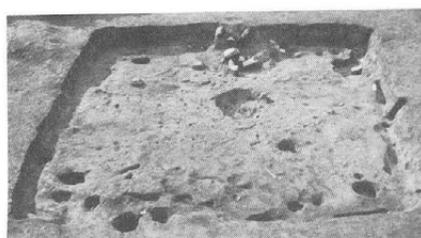


245 5号住居址



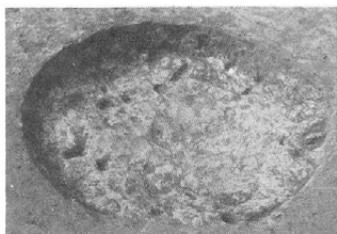
244. 9号住の土器と石棒

246. 6号住居址



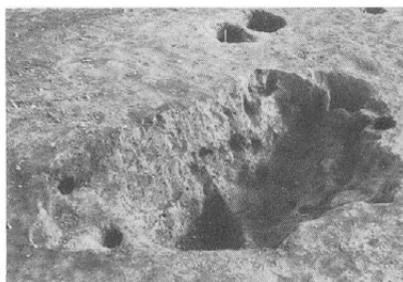
248. 8号住居址

247. 7号住居址



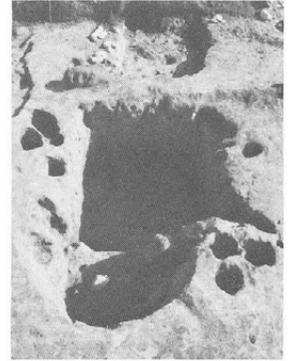
250. 4号土坑

249. 1号土坑





251. 2号住と1号地下倉の切り合い 1・2号墓塚



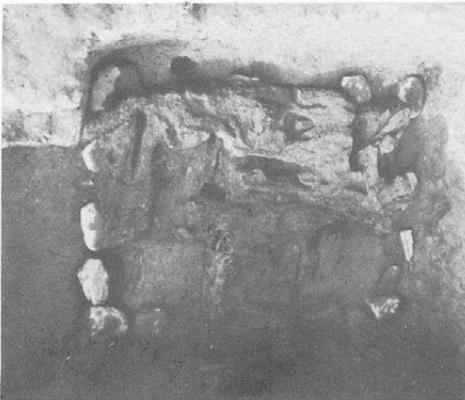
252. 2号窖・1号地下倉・2号墓塚



255. 2号地下倉の柱礎



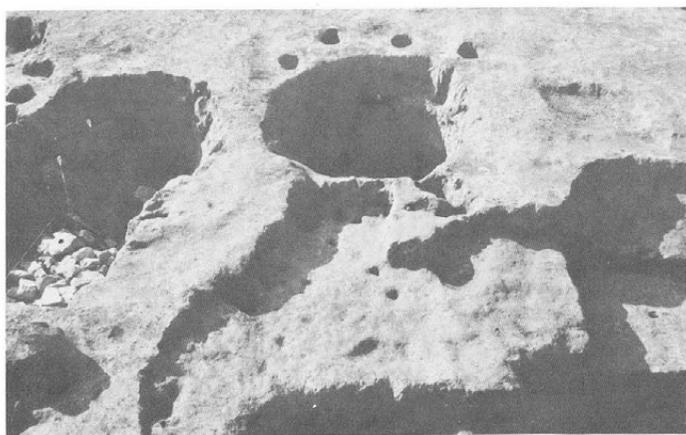
254. 1号地下倉上部の集石と内耳鍋片



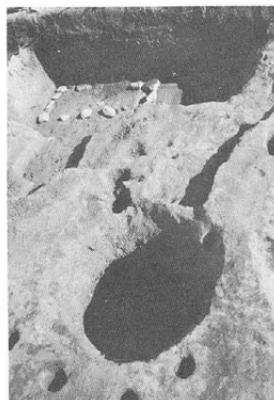
256. 2号地下倉の炭化材と柱礎



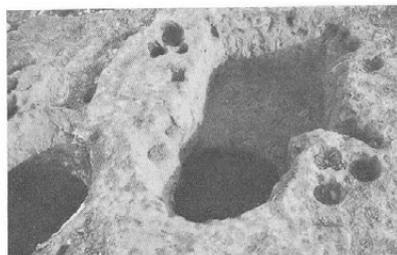
253. 2号窖・1号地下倉の上部



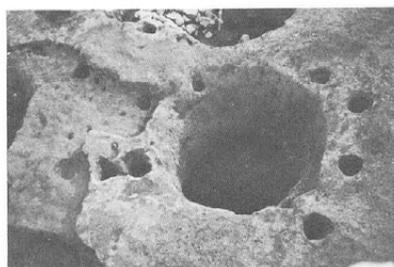
257. 中世遺構の広がり (左より1号地下倉・2号窖・1号窖・手前より3・2号地下倉)



258
1号窖と2・3号地下倉



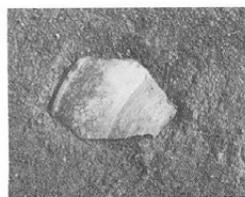
260. 1号地下倉と2号窖址の切り合い



259. 1号窖址



261. 2号窖の匠



264. 2号窖上部の天目出土状況



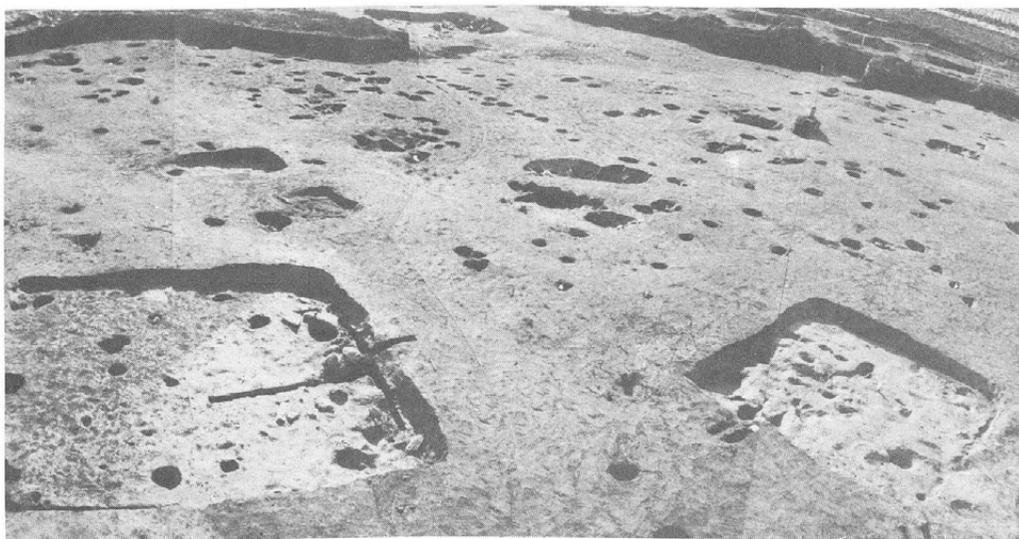
262. 2号窖底部のようす



263. 2号窖の石血・天目高台出土状況



265. 遺構の広がり 南より手前2号住・奥3・4号住・右中世遺構群



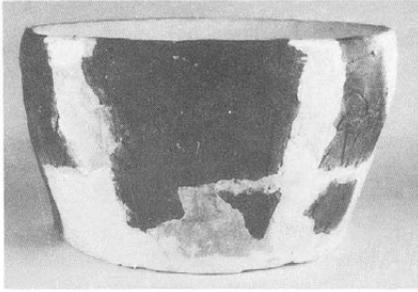
266. 3・4号住と3・5号墓塚・ピット群など北からみる



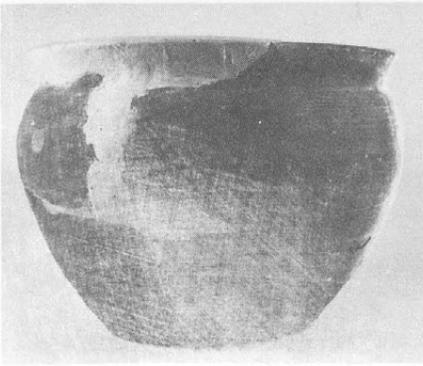
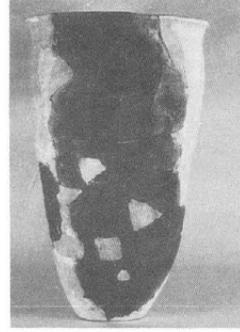
267. 2・3号地下倉とピット群 西からみる

第54図 城平遺跡の遺物(1)

268
縄文土器

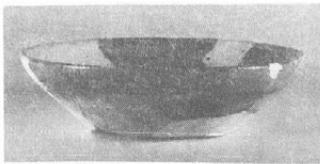
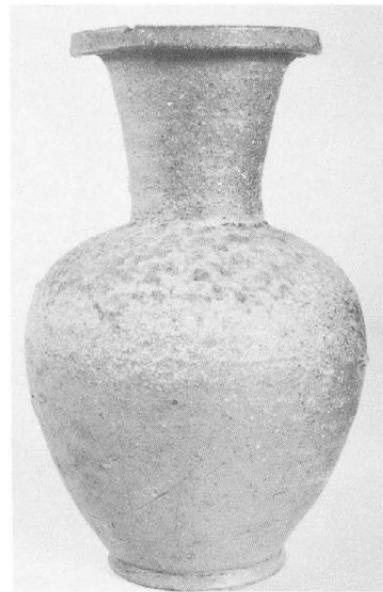


269
8号住土師ガメ



270. 7号住須恵壺

271
須恵瓶



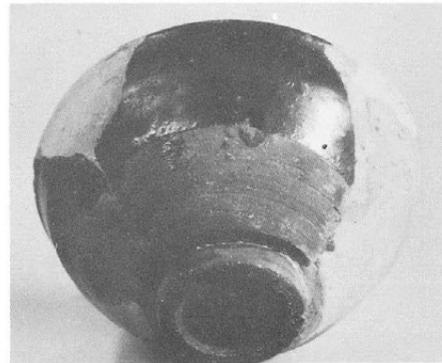
272. 3号地下倉黄瀬戸鉢



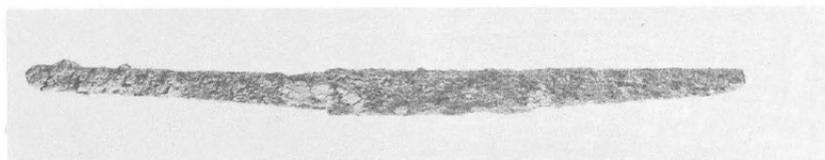
275. 土錘



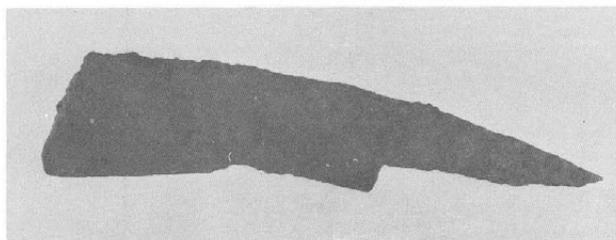
273. 2号窖天目椀



274. 天目椀の素地と肌

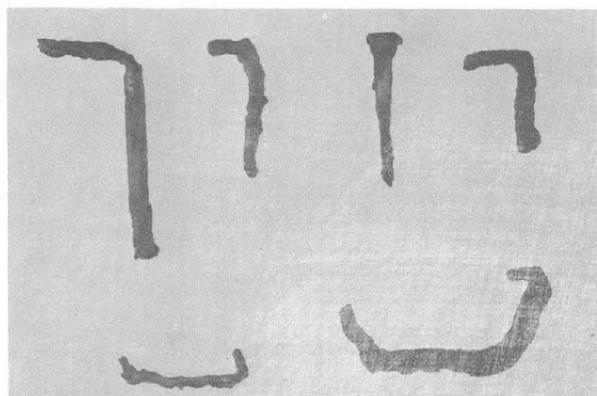
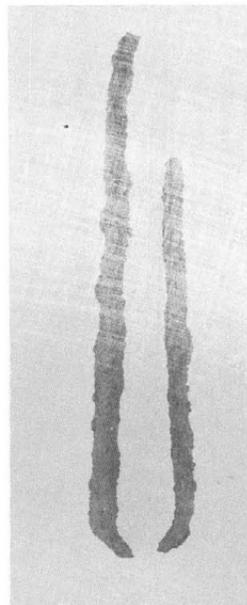


276. 2号募塙の刀子

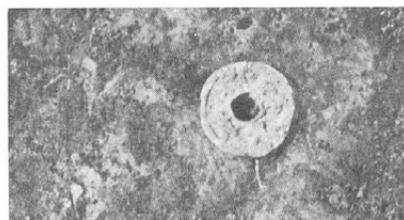


277. 7号住の鉞状鉄器

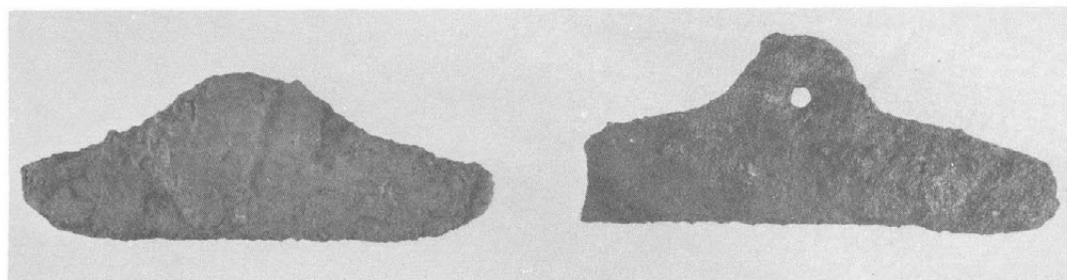
278
2号地下倉の毛抜状鉄器



279. 釘など



280. 2号住床面の祥符元宝



281. 火打金具



282. 富士塚古墳の調査



283. 現場のミーティング 富士塚にて



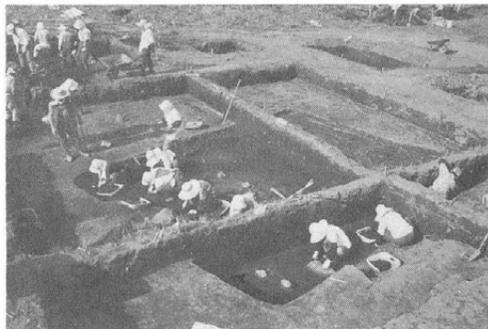
284. こんどは何ズラ! 名廻東古墳の掘り下げ



285. 大きな天井石はチェンブロックでつり上げた



286. NHKカメラリポート取材 城平にて



287. 住居址の掘り下げ 菖蒲沢にて



288. 調査団全員 城平6号住を前にバックは名山経岳



290. 伊那市西春近南小児童の見学会 菖蒲沢にて



289. 計測班の休み時間 雪の和手遺跡



291. 公民館主催の現地説明会 名廻東古墳にて



292. 有志参加の学習会 井戸尻復元住居の前にて

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

—伊那市西春近—

昭和48年3月15日印刷

昭和48年3月20日印刷

発行者 日本道路公団名古屋支社

長野県教育委員会

印刷所 松本市元町2-4-10

こまくさ写植印刷

〈非売品〉

